

市原市山田橋大山台遺跡

2004

市 原 市
財団法人 市原市文化財センター

や ま だ ば し お お や ま で
市原市山田橋大山台遺跡

2004

市 原 市
財団法人 市原市文化財センター



山倉ダム貯水池上空から、山田橋遺跡群、東京湾を望む(1997年11月25日撮影)



平成9年度調査区全景(1997年11月25日撮影)

序 文

市原市は、市内を南北に貫流する養老川がもたらした肥沃な平野と、山間部の緑豊かな自然環境のなかにあり、先史からの多数の遺跡は、今日にいたる成長の跡を伝えてくれます。先人達の残した文化遺産である遺跡は、本来豊かな自然とともに、後世に伝え残すことが最善の選択であります。しかし、21世紀をむかえ、活力ある市原市を創造していくためには、社会資本の整備もまた着々と整えていかなければなりません。

今回の発掘調査は、(仮称)市原市総合防災センター建設にともない実施されました。建設計画の策定にあたっては、関係諸機関が慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。

今回報告する山田橋大山台遺跡は、弥生時代の集落を中心とする遺跡です。弥生時代の市原市は、関東地方でも屈指の遺跡密集地帯であり、東日本最古の古墳である神門古墳群や、姉崎古墳群、上総国府、国分寺、さらには今日につながる発展の基礎をつくった時代であります。本遺跡は、広範囲にわたる発掘調査によって、弥生時代の村のようすを伝えるさまざまな情報をもたらしました。

発掘調査事業は、本書の刊行をもって終了しますが、発掘調査によって得られた貴重な成果は、記録として将来に伝えると同時に、現在においても積極的に活用されなければなりません。市民の生涯学習意欲が年々高まりをみせる中、本書の刊行を新たなステップとして、文化財の積極的な活用に、より一層心を砕いてまいりたいと考えております。

最後に、発掘調査の実施から報告書の刊行にいたるまで、ご指導、ご尽力いただきました、千葉県教育庁文化財課、市原市消防局、市原市教育委員会、並びに地元関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

財団法人市原市文化財センター
理事長 藤 本 康 男

例 言

- 1 本報告書は、千葉縣市原市山田橋字大山台340番地1他に所在する、山田橋遺跡群、山田橋大山台遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、(仮称)市原市総合防災センター建設にともない、市原市(消防局)の委託を受け、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の指導のもと、財団法人市原市文化財センターが実施した。
- 3 調査対象面積は、33,200m²であり、上層3,320m²、下層720m²について確認調査を行い、上層28,650m²、下層496m²について本調査を実施した。
- 4 発掘調査、整理作業は、以下のとおりに行った。

発掘調査	平成6年4月1日～平成6年8月15日	担当	大村直、小川浩一
	確認調査3,320m ² (上層)、285m ² (下層)		
	平成7年4月1日～平成8年3月29日	担当	近藤敏
	本調査6,170m ² (上層)		
	平成8年4月1日～平成9年3月31日	担当	近藤敏、北見一弘
	本調査11,480m ² (上層)、確認調査435m ² (下層)		
	平成9年4月1日～平成10年3月31日	担当	近藤敏、鶴岡英一、牧野光隆、 小橋健司
	本調査11,000m ² (上層)、496m ² (下層)		
整理作業	平成11年4月1日～平成12年3月31日	担当	近藤敏
	平成13年4月2日～平成14年3月29日	担当	大村直
	平成15年4月1日～平成15年9月30日	担当	大村直
- 5 本書の執筆作成は大村直が行ったが、一部について、西野雅人(第2章第2節)、鶴岡英一(第3章第1節)、上奈穂美(第3章第2節)が執筆を分担した。また、加納哲哉氏(國學院大學大学院特別研究員)より玉稿を賜った(第3章第1節)。その他、委託分析については第3章にまとめた。
- 6 石質肉眼同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社、遺構図のトレース、全体図作成の一部について、株式会社パスコに委託した。礫群の観察について辻本崇夫氏(パリノ・サーヴェイ株式会社)、剥片石器について島立桂氏(財団法人千葉県文化財センター)、廣田吉三郎氏(創和システム株式会社)、テフラについては、上杉陽氏(都留文科大学)、上本進二氏(神奈川県災害史研究所)のご教示、ご協力を得ている。とくに、上本進二氏には、対比試料の提供をうけた。中近世遺物の実測、観察表の作成は櫻井敦史による。また、縄文土器の選別等について、山田貴久、牧野光隆の協力を得た。
- 7 土器観察表等、一部表については、添付のCD-ROMのみの収録とした。CD-ROMのフォーマットは、Windows、Macに対応する。ファイル形式は、XLS、CSV、TXT(タブ区切り)形式であり、ファイル形式ごとにフォルダに格納している。本文掲載の表についても、情報を追加し、CD-ROMに収録したものがあつた。表目次(CD収録)を参照。また、本編についても、PDF形式(中解像度、標準圧縮版)で収録した。閲覧のためには、Adobe Acrobat Reader(無償版)、ないしはAdobe Acrobat(製品版)が必要である。
- 8 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。

第1図	国土地理院発行1:50,000地形図「五井」、「姉崎」
第2図	市原市基本図(1:2,500)昭和55年市原市作成
- 9 本書に収録した出土遺物および調査記録は、市原市教育委員会市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵、保管している。
- 10 遺構番号は、本書作成の段階で変更している。遺物注記等については調査段階の遺構番号を使用しており、その対照は遺構一覧表(CD版)に明示した。
- 11 本遺跡の、市原市文化財センター調査コードは、「セ182」である。

本文目次

序 文

例 言

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 遺跡の立地と環境	1
第3節 山田橋遺跡群の調査	1
第4節 調査の方法	6
第5節 基本層序	15

第2章 遺構と遺物

第1節 旧石器時代	17
第2節 縄文時代	27
(1) 竪穴	27
(2) 炉穴	36
(3) 陥穴	52
(4) 土坑	54
(5) 遺構外出土土器	57
(6) 縄文土製品	63
(7) 縄文石器	64
第3節 弥生時代	65
(1) 竪穴	65
(2) 方形周溝墓	186
(3) 木棺土坑墓	197
(4) 土坑	199
第4節 古墳時代前中期	202
(1) 竪穴	202
(2) 古墳	206
第5節 古墳時代終末期以降	210
(1) 竪穴	210
(2) 土坑	214
(3) 溝（道路跡）	219
第6節 弥生時代以降遺構外出土の遺物	239

第3章 自然遺物および自然科学的分析

第1節 山田橋大山台遺跡出土の貝類遺体について	247
第2節 山田橋大山台遺跡7号土坑出土のウマ (<i>Equus ferus</i>)	254
第3節 山田橋大山台遺跡における土層とテフラ	256
第4節 山田橋大山台遺跡における植物珪酸体分析	265
第5節 山田橋大山台遺跡1号木棺土坑墓の赤色顔料X線回折分析	270
第6節 山田橋大山台遺跡出土軽石の産地分析	272
第7節 山田橋大山台遺跡出土の種実遺体同定	279

第4章 弥生時代後期の山田橋遺跡群

第1節 山田橋遺跡群および市原台地周辺地域の後期弥生土器	281
第2節 山田橋遺跡群と周辺集落の動態	310

插图目次

第1图	山田橋遺跡群山田橋大山台遺跡位置図……3	第37图	遺構外出土縄文土器(1)……59
第2图	山田橋遺跡群・東千草山遺跡 周辺地形図 ……………4	第38图	遺構外出土縄文土器(2)……60
第3图	山田橋大山台遺跡主要遺構全体図……5	第39图	遺構外出土縄文土器(3)……61
第4图	山田橋大山台遺跡全体図……7・8	第40图	遺構外出土縄文土器(4)……62
第5图	山田橋大山台遺跡詳細全体図(1)……9・10	第41图	遺構外出土縄文土器(5)・土製品……63
第6图	山田橋大山台遺跡詳細全体図(2)……11・12	第42图	遺構外出土縄文時代石器……64
第7图	山田橋大山台遺跡詳細全体図(3)……13・14	第43图	10号竪穴 遺構遺物……66
第8图	谷部堆積土層図……15	第44图	11号竪穴 遺構遺物……67
第9图	下層調査区・遺物集中地点分布……18	第45图	12号竪穴 遺構遺物……68
第10图	第1・2・3地点 出土状況……19	第46图	13号竪穴 遺構遺物……69
第11图	第4・5地点 出土状況……20	第47图	14号竪穴 遺構遺物……71
第12图	第6・7・9地点 出土状況……21	第48图	15号竪穴 遺構遺物……72
第13图	第8・10・11・13地点 出土状況……22	第49图	16・17号竪穴 遺構遺物……73
第14图	第12地点 出土状況……23	第50图	18号竪穴 遺構遺物……74
第15图	第2・4・5地点 遺物……24	第51图	19号竪穴 遺構遺物……75
第16图	第6・8地点 遺物……25	第52图	20号竪穴 遺構遺物……77
第17图	礫群 重量別分布・石材比率……26	第53图	21・22号竪穴 遺構遺物……79
第18图	縄文時代遺構分布図……28	第54图	23・24号竪穴 遺構……81
第19图	1・2号竪穴 遺構遺物……29	第55图	25号竪穴 遺構……82
第20图	3・4・5・6号竪穴 遺構遺物……31	第56图	23・24・25号竪穴 遺物……83
第21图	7号竪穴 遺構遺物……32	第57图	26号竪穴 遺構遺物……85
第22图	7号竪穴 遺物……33	第58图	27号竪穴 遺構遺物……86
第23图	8・9号竪穴 遺構遺物……35	第59图	28・29号竪穴 遺構遺物……87
第24图	1・2・3・4・5・6・7・8号炉穴 遺構……37	第60图	30号竪穴 遺構遺物……89
第25图	9・10・11・12・13・14・15・16号炉穴 遺構……39	第61图	30・32号竪穴 遺構遺物……90
第26图	17・18・19・20・21・22・23・24号炉穴 遺構……43	第62图	31号竪穴 遺構遺物……91
第27图	25・26・27・28・29・30・31・32号炉穴 遺構……45	第63图	33号竪穴 遺構遺物……93
第28图	1・2・3・5・7・8・9・10号炉穴 遺物 ……………46	第64图	33・34・35号竪穴 遺構遺物……94
第29图	11・16・17・19・20号炉穴 遺物……47	第65图	36号竪穴 遺構遺物……95
第30图	13・15号炉穴 遺物……48	第66图	37号竪穴 遺構遺物……97
第31图	21・22・24号炉穴 遺物……49	第67图	37号竪穴 遺物……98
第32图	28・29・30号炉穴 遺物……50	第68图	37・39号竪穴 遺構遺物……99
第33图	31・32号炉穴 遺物……51	第69图	38号竪穴 遺構遺物……101
第34图	1・2・3・4号陥穴、2・3号土坑 遺構遺物 ……………53	第70图	40・41号竪穴 遺構……102
第35图	1号土坑 遺構遺物……55	第71图	40・41号竪穴 遺物……103
第36图	1号土坑 剥片碎片平面立面頻度分布・重 量別頻度分布……56	第72图	42・43号竪穴 遺構遺物……105
		第73图	44号竪穴 遺構遺物……106
		第74图	44・45・46号竪穴 遺構遺物……107
		第75图	46号竪穴 遺物……109
		第76图	47・48号竪穴 遺構……111
		第77图	47・48号竪穴 遺物……112
		第78图	49号竪穴 遺構遺物……113
		第79图	49・50号竪穴 遺構遺物……114

第 80 図	51号竪穴 遺構遺物	115	第127図	112・113号竪穴 遺構	179
第 81 図	52号竪穴 遺構遺物	117	第128図	112・113号竪穴 遺物	180
第 82 図	52号竪穴 遺物 (1)	118	第129図	114号竪穴 遺構遺物	181
第 83 図	52号竪穴 遺物 (2)	119	第130図	115号竪穴 遺構遺物	183
第 84 図	53号竪穴 遺構遺物	120	第131図	115号竪穴 遺物	184
第 85 図	53号竪穴 遺物	121	第132図	116号竪穴 遺構遺物	185
第 86 図	54号竪穴 遺構遺物	122	第133図	116号竪穴 遺物	186
第 87 図	54・55号竪穴 遺構遺物	123	第134図	1号方形周溝墓 遺構遺物 (1)	187
第 88 図	56・57号竪穴 遺構	125	第135図	1号方形周溝墓 遺構遺物 (2)	189
第 89 図	55・56・57号竪穴 遺物	126	第136図	2号方形周溝墓 遺構遺物 (1)	190
第 90 図	58号竪穴 遺構遺物	127	第137図	2号方形周溝墓 遺構遺物 (2)	191
第 91 図	59号竪穴 遺構遺物	129	第138図	3号方形周溝墓 遺構	193
第 92 図	60号竪穴 遺構遺物	130	第139図	3号方形周溝墓 遺構遺物	194
第 93 図	60・61号竪穴 遺構遺物	131	第140図	3号方形周溝墓 遺物	195
第 94 図	62号竪穴 遺構	133	第141図	1・2・3号木棺土坑墓 遺構遺物	198
第 95 図	63号竪穴 遺構遺物	134	第142図	2・3号木棺土坑墓 遺物	199
第 96 図	63・64号竪穴 遺物	135	第143図	4号土坑 遺構遺物	200
第 97 図	64号竪穴 遺構遺物	136	第144図	5・6号土坑 遺構	201
第 98 図	65・67号竪穴 遺構遺物	137	第145図	117号竪穴 遺構遺物	203
第 99 図	66・68号竪穴 遺構遺物	139	第146図	117号竪穴 遺物	204
第100図	69・70号竪穴 遺構遺物	141	第147図	118・119号竪穴 遺構遺物	205
第101図	71・73号竪穴 遺構遺物	143	第148図	119・120号竪穴 遺構遺物	207
第102図	72・74号竪穴 遺構遺物	144	第149図	山田橋大塚台2号墳 遺構遺物	208
第103図	74・75・76号竪穴 遺構遺物	145	第150図	山田橋大塚台2号墳 遺構	209
第104図	77・79号竪穴 遺構遺物	147	第151図	121号竪穴 遺構遺物	211
第105図	78・81号竪穴 遺構遺物	149	第152図	121・122号竪穴 遺構遺物	212
第106図	80号竪穴 遺構遺物	150	第153図	122・123号竪穴 遺構遺物	213
第107図	82・83号竪穴 遺構遺物	151	第154図	124・125号竪穴 遺構遺物	215
第108図	83・84・85号竪穴 遺構遺物	153	第155図	7号土坑 遺構遺物	216
第109図	86号竪穴 遺構遺物	154	第156図	10・11号土坑 遺構遺物	217
第110図	87号竪穴 遺構遺物	155	第157図	1号溝 遺構 (1)	220
第111図	88・89号竪穴 遺構遺物	157	第158図	1号溝 遺構 (2)	221
第112図	90・91・92号竪穴 遺構遺物	159	第159図	1号溝 遺構 (3)	222
第113図	92・93・94号竪穴 遺構遺物	160	第160図	1号溝 遺構 (4)	223
第114図	93・94号竪穴 遺物	161	第161図	1号溝 遺構 (5)	225
第115図	94・95号竪穴 遺構遺物	163	第162図	2号溝、8号土坑 遺構遺物	226
第116図	96・97号竪穴 遺構遺物	164	第163図	2・3号溝 遺構	227
第117図	97・98号竪穴 遺構遺物	165	第164図	2・3号溝 硬化面変遷図	228
第118図	98・99号竪穴 遺構遺物	167	第165図	4号溝 遺構	230
第119図	100・101号竪穴 遺構遺物	169	第166図	4号溝、9号土坑 遺構	231
第120図	102・103号竪穴 遺構遺物	170	第167図	4号溝、6・7号溝 遺構	232
第121図	104号竪穴 遺構	171	第168図	4号溝 変遷図	233
第122図	105号竪穴 遺構遺物	172	第169図	4・5号溝、9号土坑 遺構遺物	234
第123図	106・107号竪穴 遺構遺物	173	第170図	中・近世陶磁器 遺物・組成比	235
第124図	108・109号竪穴 遺構遺物	175	第171図	1・2・4B・4C号溝 遺物	236
第125図	110号竪穴 遺構遺物	177	第172図	弥生時代以降遺構外出土遺物	239
第126図	111号竪穴 遺構遺物	178	第173図	貝種組成	250

第174図	殻高分布図	250
第175図	土層柱状図、O7区テフラ組成ダイアグラム	257
第176図	植物珪酸体分析結果 (1)	266
第177図	植物珪酸体分析結果 (2)	267
第178図	1号木棺土坑墓推定頭部位置棺底土壌	270
第179図	軽石試料および各地酸性岩類の岩石区分	277
第180図	形態分類、分類関連図	283
第181図	形態素組成比率	291
第182図	甕形土器頻度分布図	293
第183図	土器略編年図 (市原台地周辺) (1)	294
第184図	土器略編年図 (市原台地周辺) (2)	295
第185図	土器略編年図 (市原台地周辺) (3)	296
第186図	土器略編年図 (装飾壺)	297
第187図	市原市姉崎東原遺跡、菊間遺跡出土土器	299

第188図	市原市椎津茶ノ木遺跡出土土器	300
第189図	市原市 (山田橋遺跡群) 東千草山遺跡出土土器 (1)	301
第190図	市原市 (山田橋遺跡群) 東千草山遺跡出土土器 (2)	302
第191図	市原市草刈遺跡、山田橋遺跡群山田橋表通遺跡、唐崎台遺跡出土土器	304
第192図	袖ヶ浦市文協遺跡出土土器	305
第193図	市原台地周辺の遺跡群 (1)	312
第194図	市原台地周辺の遺跡群 (2)	313
第195図	山田橋遺跡群遺構分布図 (1)	315
第196図	山田橋遺跡群遺構分布図 (2)	316
第197図	山田橋遺跡群遺構分布図 (3)	317
第198図	山田橋大山台遺跡弥生時代後期竪穴規模頻度分布図	318
第199図	管玉法量分布図	322

表 目 次

第1表	山田橋遺跡群の調査	2
第2表	旧石器時代地点別組成表	17
第3表	1~4号溝出土中・近世陶磁器類組成表、実測遺物観察表	237
第4表	山田橋大山台遺跡遺構一覽竪穴 (1)	240
第5表	山田橋大山台遺跡遺構一覽竪穴 (2)	241
第6表	山田橋大山台遺跡遺構一覽土坑等 (縄文時代) (1)	241
第7表	山田橋大山台遺跡遺構一覽土坑等 (縄文時代) (2)	242
第8表	山田橋大山台遺跡遺構一覽方形周溝墓・古墳等	242
第9表	山田橋大山台遺跡遺構一覽埋葬遺構	242
第10表	山田橋大山台遺跡遺構一覽土坑 (弥生時代以降)	242
第11表	縄文時代以降石器観察表 (1)	242
第12表	縄文時代以降石器観察表 (2)	243
第13表	弥生・古墳時代土製品観察表	243
第14表	弥生時代石製・ガラス製玉類、石製品観察表 (1)	244
第15表	弥生時代石製・ガラス製玉類、石製品観察表 (2)	245
第16表	弥生時代石製・ガラス製玉類、石製品観察表 (3)	246
第17表	鉄器・青銅器観察表	246

第18表	古銭観察表	246
第19表	貝類種名一覽	247
第20表	貝層サンプル内容物一覽	249
第21表	貝類検出数一覽	249
第22表	稚貝検出数一覽	251
第23表	微小貝検出数一覽	251
第24表	微小貝類種名一覽	251
第25表	出土獣骨一覽	255
第26表	下顎臼歯計測値	255
第27表	テフラ検出分析結果	258
第28表	屈折率測定結果	258
第29表	O7区下層調査地点火山ガラス比、重鉍物組成分析結果	258
第30表	山田橋大山台遺跡における植物珪酸体分析結果	268
第31表	標準試料の軽石の化学組成 (ガラスビーダーFP法)	273
第32表	標準試料の軽石の化学組成 (ガラスビーダーFP法、主成分による100%換算)	273
第33表	軽石試料の化学組成 (オーダー分析法)	273
第34表	軽石試料および各地の軽石の化学組成	274
第35表	軽石試料および各地の軽石の鉍物組成	275
第36表	種実遺体同定結果	279
第37表	形態素組成比	292
第38表	方形周溝墓等副葬品構成	320

表 目 次 (CD収録)

第39表	旧石器時代石器・礫等一覧
第40表	弥生土器・土師器等観察表
第2-2表	旧石器時代地点別組成表
第3-2表	1~4号溝出土中・近世陶磁器類等
第4・5-2表	山田橋大山台遺跡遺構一覧竪穴
第6・7-2表	山田橋大山台遺跡遺構一覧土坑等（縄文時代）
第8-2表	山田橋大山台遺跡遺構一覧方形周溝墓・古墳等
第9-2表	山田橋大山台遺跡遺構一覧埋葬遺構
第10-2表	山田橋大山台遺跡遺構一覧土坑（弥生時代以降）
第11・12-2表	縄文時代以降石器観察表
第13-2表	弥生・古墳時代土製品観察表
第14・15・16-2表	弥生時代石製・ガラス製玉類、石製品観察表
第17-2表	鉄器・青銅器観察表
第18-2表	古銭観察表
第20-2表	貝層サンプル内容物一覧
第21-2表	貝類検出数一覧
第22-2表	稚貝検出数一覧
第23-2表	微小貝検出数一覧

写真図版目次

図版 1	山田橋遺跡群周辺空中垂直写真（1961年撮影）
図版 2	山田橋大山台遺跡遠景（南方から） 山田橋大山台遺跡遠景（北方から）
図版 3	山田橋大山台遺跡遠景（東方から） 山田橋大山台遺跡空中垂直写真（各年度合成）
図版 4	山田橋遺跡群全景（山田橋表通遺跡調査時、1985年度撮影） 山田橋表通遺跡全景（1985年撮影）
図版 5	山田橋大山台遺跡平成7年度調査区 山田橋大山台遺跡平成9年度調査区
図版 6	山田橋大山台遺跡平成7年度調査区（東方から） 山田橋大山台遺跡平成7年度調査区（北方から）
図版 7	調査前状況（東方から谷部方面） 調査前状況（西方から） 確認調査状況 1号竪穴 2号竪穴 3号竪穴 4号竪穴
図版 8	5号竪穴 6号竪穴 7号竪穴 7号竪穴貝層検出状況 8号竪穴 9号竪穴
図版 9	10号竪穴 11・121号竪穴 12号竪穴 12号竪穴炉周辺遺物出土状況 13号竪穴 14号竪穴 15号竪穴
図版10	16・17号竪穴 18号竪穴 19号竪穴 20号竪穴 21号竪穴 22号竪穴 23・24号竪穴 25号竪穴周辺全景
図版11	24・25号竪穴周辺垂直写真 25号竪穴 26号竪穴 27号竪穴
図版12	28号竪穴 29号竪穴、2号方形周溝墓主体部調査状況 30号竪穴 31号竪穴 32号竪穴 33号竪穴 34号竪穴
図版13	35号竪穴 36号竪穴、2号木棺土坑墓 37号竪穴 38号竪穴 39号竪穴
図版14	39号竪穴 40号竪穴 41号竪穴 42号竪穴 43号竪穴 44号竪穴 45号竪穴
図版15	45・46号竪穴 47号竪穴 47号竪穴炉 48号竪穴 49号竪穴 50号竪穴
図版16	51号竪穴 52号竪穴 53号竪穴 54号竪穴
図版17	55号竪穴 56号竪穴 57号竪穴 58号竪穴 59号竪穴 60号竪穴

図版18	60号竪穴	61号竪穴	62号竪穴	63号竪穴																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																															</
------	-------	-------	-------	-------	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----

図版61	弥生土器 (14)		中近世陶磁器 (2)
図版62	弥生土器 (15)	図版76	弥生土器詳細 (1)
図版63	弥生土器 (16)	図版77	弥生土器詳細 (2)
図版64	弥生土器 (17)・土師器 (1)	図版78	弥生土器詳細 (3)
図版65	弥生土器 (18)	図版79	弥生土器詳細 (4)
図版66	弥生土器 (19)・土師器 (2)・中近世陶磁器 (1)	図版80	弥生土器詳細 (5)
図版67	縄文土器 (2)	図版81	弥生土器詳細 (6)
図版68	縄文土器 (3)	図版82	弥生土器詳細 (7)
図版69	縄文土器 (4)・土製品 (1)	図版83	旧石器・縄文時代石器
図版70	弥生土器 (20)	図版84	玉類・銅鉄製品・土製品 (2)・古銭
図版71	弥生土器 (21)	図版85	土製支脚・弥生時代以降石器
図版72	弥生土器 (22)	図版86	貝類
図版73	弥生土器 (23)	図版87	獣骨・種実遺体
図版74	弥生土器 (24)	図版88	植物珪酸体顕微鏡写真 (1)
図版75	弥生土器 (25)・土師器 (3)・須恵器	図版89	植物珪酸体顕微鏡写真 (2)

遺構別目次

遺構No.	時代・時期	Grid	本文頁	挿図	写真図版	遺構No.	時代・時期	Grid	本文頁	挿図	写真図版
1号竪穴	縄文早期	Q6	27	19	7	32号竪穴	弥生後期	R7	88	61	12
2号竪穴	縄文早期?	Q9	27	19	7	33号竪穴	弥生後期	R7	92	63・64	12・49・70・78・84・85
3号竪穴	縄文早期?	P7	27	20	7						
4号竪穴	縄文?	P9	30	20	7						
5号竪穴	縄文?	N14	30	20	8	34号竪穴	弥生後期	R7	92	64	12・49
6号竪穴	縄文?	N15	30	20	8	35号竪穴	弥生後期	R8	96	64	13・70
7号竪穴	縄文中期	S5	30	21・22	8・83・86	36号竪穴	弥生後期	R8	96	65	13・32・50・51・70・76・77・78・85
8号竪穴	縄文中期	Q6	34	23	8・83・86						
9号竪穴	縄文中期	Q12	34	23	8・83						
10号竪穴	弥生後期	S5	65	43	9・70	37号竪穴	弥生後期	R8	96	66・67・68	13・50・51・70・75・76・77・78
11号竪穴	弥生後期	S5	65	44	9・70・77						
12号竪穴	弥生後期	S5	65	45	9・48・70・80・82						
13号竪穴	弥生後期	S5	69	46	9・48・70・85	38号竪穴	弥生後期	R8	100	69	13・52・70・79
14号竪穴	弥生後期	S5	70	47	9・70・76	39号竪穴	弥生後期	R9	100	68	13・14・79
15号竪穴	弥生後期	S6	70	48	9・70・78	40号竪穴	弥生後期	R9	100	70・71	14・70・71・85
16号竪穴	弥生後期	S6	70	49	10・70	41号竪穴	弥生後期	Q4	101	70・71	14・71
17号竪穴	弥生後期	S6	76	49	10	42号竪穴	弥生後期	P4	104	72	14・52・71・82
18号竪穴	弥生後期	S6	76	50	10・49・80・84	43号竪穴	弥生後期	P4	104	72	14
19A号竪穴	弥生後期	S7	76	51	10・70・80	44号竪穴	弥生後期	P4	104	73・74	14・52・71・76・80・81・82
19B号竪穴	弥生後期	S7	76	51	10・70・80						
20号竪穴	弥生後期	S8	78	52	10・49・70・76						
21号竪穴	弥生後期	S8	78	53	10・70・80	45号竪穴	弥生後期	Q5	108	74	14・15・52・71・79・82
22号竪穴	弥生後期	R5	78	53	10・49・70						
23号竪穴	弥生後期	R5	80	54・56	10						
24号竪穴	弥生後期	R6	80	54・56	10・11・49・70・84	46号竪穴	弥生後期	Q5	108	74・75	15・52・53・71・78・79・85
25A号竪穴	弥生後期	R6	80	55・56	10・11・70・84	47号竪穴	弥生後期	P5	108	76・77	15・71・82
25B号竪穴	弥生後期	R6	80	55・56	10・11・70・84	48号竪穴	弥生後期	P5	110	76・77	15・53・71・76・79・85
26号竪穴	弥生後期	R6	84	57	11・70						
27号竪穴	弥生後期	R7	84	58	11・70・84・85						
28号竪穴	弥生後期	Q7	85	59	12・31	49号竪穴	弥生後期	P6	110	78・79	15・53・54・71・77・78・80・85
29号竪穴	弥生後期	Q7	86	59	12・70						
30号竪穴	弥生後期	R8	88	60・61	12・50・70・78						
31号竪穴	弥生後期	Q8	88	62	12・49・50・70・77・79・82・85	50号竪穴	弥生後期	P6	110	79	15
						51号竪穴	弥生後期	Q6	114	80	16・54・79・82
						52号竪穴	弥生後期	07	116	81・82・83	16・54・55・71・77・78・80・81

遺構No.	時代・時期	Grid	本文頁	挿図	写真図版
53号竪穴	弥生後期	07	116	84・85	16・56・72・78・82・84
54号竪穴	弥生後期	P8	119	86・87	16・56・57・72・77・81・84・85
55号竪穴	弥生後期	P8	124	87・89	17・57・72
56号竪穴	弥生後期	P9	124	88・89	17・57・72・76・81
57号竪穴	弥生後期	P9	124	88・89	17・72
58号竪穴	弥生後期	P9	128	90	17・72・81・85
59号竪穴	弥生後期	P9	128	91	17・57・72・85
60号竪穴	弥生後期	Q9	128	92・93	17・18・57・58・72・78・79・80
61号竪穴	弥生後期	Q9	132	93	18・72・82
62号竪穴	弥生後期	P10	132	94	18
63号竪穴	弥生後期	Q10	132	95・96	18・58・59・72・76・78・79・80・82・84
64号竪穴	弥生後期	P11	133	96・97	19・72・84
65号竪穴	弥生後期	P11	138	98	19・59・72・77
66号竪穴	弥生後期	Q12	138	99	19・72
67号竪穴	弥生後期	Q12	138	98	19
68号竪穴	弥生後期	Q13	138	99	19・72
69号竪穴	弥生後期	Q13	140	100	19
70号竪穴	弥生後期	Q14	140	100	19・72・78・85
71号竪穴	弥生後期	Q14	140	101	19・20・33・60・72
72号竪穴	弥生後期	P12	142	102	20・72
73号竪穴	弥生後期	P12	142	101	20
74号竪穴	弥生後期	P14	142	102・103	20・72・73・81
75号竪穴	弥生後期	P14	146	103	20・85
76号竪穴	弥生後期	P14	146	103	20
77号竪穴	弥生後期	P15	146	104	20・21・60・73
78号竪穴	弥生後期	P15	148	105	21・73・78
79号竪穴	弥生後期	P16	148	104	21・73・78・87
80号竪穴	弥生後期	P16	148	106	21・60・73・76
81号竪穴	弥生後期	P17	148	105	21
82号竪穴	弥生後期	012	150	107	21・73
83号竪穴	弥生後期	012	152	107・108	21・60・73・82・85
84号竪穴	弥生後期	011	152	108	21・60・73
85号竪穴	弥生後期	N11	152	108	
86号竪穴	弥生後期	N12	152	109	22・60
87号竪穴	弥生後期	013	154	110	22・61・73・79・81・82・84
88号竪穴	弥生後期	013	156	111	22・73
89号竪穴	弥生後期	015	156	111	23・61・73・76・77
90号竪穴	弥生後期	015	156	112	23・73・79
91号竪穴	弥生後期	015	158	112	23・73・78・82
92号竪穴	弥生後期	016	158	112・113	23・73・81
93号竪穴	弥生後期	016	158	113・114	23・61・73・76・77・81
94号竪穴	弥生後期	016	162	113・114・115	24・73・78・82・85・87
95号竪穴	弥生後期	016	162	115	24
96号竪穴	弥生後期	017	162	116	24・73
97号竪穴	弥生後期	N15	162	116・117	24・61・62・84
98号竪穴	弥生後期	N16	166	117・118	24・73・74

遺構No.	時代・時期	Grid	本文頁	挿図	写真図版
99号竪穴	弥生後期	N17	166	118	24・74・84
100号竪穴	弥生後期	M11	168	119	25・74
101号竪穴	弥生後期	N12	168	119	
102号竪穴	弥生後期	M12	168	120	25・74
103号竪穴	弥生後期	L12	168	120	25・84・85
104号竪穴	弥生後期	M13	171	121	25
105号竪穴	弥生後期	M14	171	122	25・62・74・81・82・85
106号竪穴	弥生後期	L14	174	123	25・74・76
107号竪穴	弥生後期	M15	174	123	26・74・78・79
108号竪穴	弥生後期	M17	174	124	26・74
109号竪穴	弥生後期	L11	174	124	26・74
110号竪穴	弥生後期	L11	176	125	26・74・85
111号竪穴	弥生後期	L11	176	126	26・27・62・74・82
112号竪穴	弥生後期	L14	176	127・128	27・63・74
113号竪穴	弥生後期	K11	180	127・128	27・74・76
114号竪穴	弥生後期	K11	182	129	27・63・74・77・78・79・81
115号竪穴	弥生後期	K12	182	130・131	28・63・74・75・77・80・82・84・85
116号竪穴	弥生後期	K12	186	132・133	28・63・64・75・76・77
117号竪穴	古墳前期	Q13	202	145・146	28・29・64・75・77
118号竪穴	古墳前期	P15	202	147	29・75
119号竪穴	古墳前期	P16	203	147・148	29
120号竪穴	古墳前期	N16	206	148	29・64
121号竪穴	古墳終末期	S5	210	151・152	9・29・66・84・85
122号竪穴	古墳終末期	R6	210	152・153	29・66・84・85
123号竪穴	古墳終末期	R6	210	153	29・66・85
124号竪穴	奈良	S6	214	154	30
125号竪穴	古墳終末期以降	R8	214	154	30・66・85
第1遺物集中地点	旧石器	Q4	17	10	34
第2遺物集中地点	旧石器	P5	17	10・15	34・83
第3遺物集中地点	旧石器	P5	17	10	34
第4遺物集中地点	旧石器	07	17	11・15	34・83
第5遺物集中地点	旧石器	09	20	11・15	34・83
第6遺物集中地点	旧石器	N12	20	12・16	34・83
第7遺物集中地点	旧石器	012	23	12	
第8遺物集中地点	旧石器	012	23	13・16	83
第9遺物集中地点	旧石器	012	23	12	
第10遺物集中地点	旧石器	N12	23	13	34
第11遺物集中地点	旧石器	M13	23	13	
第12遺物集中地点	旧石器	N12	23	14	35
第13遺物集中地点	旧石器	015	25	13	35
1号炉穴	縄文早期	P3	36	24・28	35
2号炉穴	縄文早期	P3	36	24・28	35
3号炉穴	縄文早期	Q3	36	24・28	35
4号炉穴	縄文早期	P4	38	24	36
5号炉穴	縄文早期	Q4	38	24・28	36
6号炉穴	縄文早期	P4	38	24	36
7号炉穴	縄文早期	P5	38	24・28	36
8号炉穴	縄文早期	Q5	38	24・28	36
9号炉穴	縄文早期	Q5	38	25・28	36
10号炉穴	縄文早期	P5	40	25・28	36
11号炉穴	縄文早期	P5	40	25・29	36・83
12号炉穴	縄文早期	Q5	40	25	37
13号炉穴	縄文早期	Q5	40	25・30	37
14号炉穴	縄文早期	Q5	41	25	37
15号炉穴	縄文早期	Q5	41	25・30	37
16号炉穴	縄文早期	Q5	41	25・29	37
17号炉穴	縄文早期	Q6	41	26・29	37
18号炉穴	縄文早期	R5	41	26	37
19号炉穴	縄文早期	R4	41	26・29	37
20号炉穴	縄文早期	R5	42	26・29	38

遺構No.	時代・時期	Grid	本文頁	挿図	写真図版
21号炉穴	縄文早期	R5	42	26・31	38
22号炉穴	縄文早期	S4	42	26・31	38
23号炉穴	縄文早期	S5	42	26	
24号炉穴	縄文早期	S5	44	26・31	38
25号炉穴	縄文早期	S5	44	27	38
26号炉穴	縄文早期	S5	44	27	38
27号炉穴	縄文早期	Q6	44	27	38
28号炉穴	縄文早期	R6	44	27・32	38
29号炉穴	縄文早期	N6	44	27・32	39
30号炉穴	縄文早期	07	51	27・32	39
31号炉穴	縄文早期	07	51	27・33	39
32号炉穴	縄文早期	R8	52	27・33	39
1号陥穴	縄文	011	52	34	39
2号陥穴	縄文	011	52	34	39
3号陥穴	縄文	014	52	34	40
4号陥穴	縄文	016	52	34	40
1号土坑	縄文中期	Q11	54	35・36	35
2号土坑	縄文中期	R9	54	34	40・86
3号土坑	縄文	M15	54	34	40
4号土坑	弥生後期	Q7	199	143	40・65・66
5号土坑	弥生後期	L12	200	144	41
6号土坑	弥生後期	017	201	144	41
7号土坑(井戸状遺構)	古墳終末	R8	214	155	41・75・87
8号土坑	平安後期	M15	218	162	41・66
9号土坑	中世	011	218	166・169	75
10号土坑	奈良・平安	010	218	156	42
11号土坑	近世	018	218	156	42・66
1号方形周溝墓	弥生後期	Q7	186	134・135	30・84
2号方形周溝墓	弥生後期	Q7	192	136・137	12・30・31・75・76・84

遺構No.	時代・時期	Grid	本文頁	挿図	写真図版
3号方形周溝墓	弥生後期	N12	192	138・139・140	31・32・65・75・80・81・84
1号木棺土坑墓	弥生後期	R7	197	141	32・84
2号木棺土坑墓	弥生後期	R8	197	141・142	13・32・75・81
3号木棺土坑墓	弥生後期	Q14	199	141・142	19・20・33・75
山田橋大塚台2号墳	古墳中期	R4	206	149・150	33・66
1号溝	奈良・平安・中世	L14～P15	219	157・158・159・160・161・171	42・43・44
2号溝	奈良・平安・中世	M15～P18	224	162・163・164・171	43・44・45
3号溝	近世	018	224	163・164	43・44・45
4号溝	近世	K9～Q12	229	165・166・167・168・169・171	45・46・47
5号溝	奈良・平安	J10	238	169	
6号溝	奈良・平安	011～P12	238	167	
7号溝	中世?	Q12	238	167	
8号溝	奈良・平安時代	L14～N15	224	157・158・160	
9号溝	近世	015～P15	224	158・160	
10号溝	近世	P5～Q6	238	5	
11号溝	近世	P6	238	5	
12号溝	近世	011～Q11	238	167	
13号溝	近世	013～Q13	238	6	
14号溝	近世	011～015	238	6・7	
15号溝	近世	M13	238	6・7	

第1章 調査の経緯と概要

第1節 調査にいたる経緯

市原市山田橋における、(仮称)市原市総合防災センター建設計画にともない、平成4年10月7日付けで、市原市消防局長山越秀佑より、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛に提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課で現地踏査を行い、平成4年11月13日付けで、千葉県教育委員会教育長より、全域に遺跡が所在する旨の回答がなされた。この結果にもとづき、市原市消防局、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課で埋蔵文化財の取り扱いについての協議を行い、地区内に所在する埋蔵文化財については、発掘調査による記録保存の措置がとられることとなった。発掘調査は、財団法人市原市文化財センターの受託事業として実施された。

第2節 遺跡の立地と環境

本遺跡は、千葉縣市原市山田橋字大山台340番地1他に所在する。

市原市は、房総半島のほぼ中央部から東京湾岸にいたる南北約35kmの細長い市域をもち、その中央を養老川が貫流する。東京湾岸低地に接する台地は、養老川流域を境界とし、養老川右岸(東岸)から千葉市域境の村田川までが「市原台地」、養老川左岸(西岸)から袖ヶ浦市小櫃川までが「袖ヶ浦台地」と呼称される。市原台地は、東京湾岸の低地をのぞむ北東―南西方向の海食崖でおわるが、台地内部は、直接東京湾に流入する小河川によって樹枝状に開析されている。

遺跡は、養老川右岸、市原台地の谷奥に位置する。現状で、遺跡南側には山倉ダム貯水池が所在する。山倉ダムは1964年に完成、供用を開始した工業用水用のダムであり、以前は幅200m程度の谷地形が広がっていた(図版1)。本書では、この谷を「山倉水系」、「山倉谷」と仮称しておく。山倉水系は、遺跡位置から国分寺台地区東側を北西方向に貫流し、直線距離約2kmで東京湾岸平野にいたるが、土地区画整理事業にともない、現状地形図から旧地形を判断することは困難となっている(第1図)。遺跡の北側は、市原台地のほぼ中央部を開析する、新田川・能満川水系の支谷最奥部に面している。遺跡の標高は、谷部をのぞくと32~34m前後であり、山倉谷谷底が17m前後で比高差は約16mを測る。なお、山倉谷対岸は、尾根状の台地をはさみ、養老川流域平野に達する。

遺跡西側は、国分寺台土地区画整理地区に隣接する。通称「国分寺台」には、上総国分僧寺・尼寺跡をはじめとして、西広貝塚、祇園原貝塚、神門古墳群(墳丘墓群)、稲荷台古墳群などが所在するが、いずれも本遺跡から2km圏内にある。

弥生時代についての周辺遺跡の状況は、第4章第2節に詳述してある。

第3節 山田橋遺跡群の調査

調査対象地は、分布地図上「山田橋遺跡群」として登録されている範囲に含まれる(市原市教育委員会1988、千葉県教育委員会1999)。今回の発掘調査に際し、中心となる小字名から「山田橋大山台遺跡」の名称が与えられたが、遺跡名については若干混乱した状態にある。

周辺地域は、昭和60年以降断続的に発掘調査が行われているが、本遺跡同様、調査対象地ごとに中心小字名による新たな遺跡名が使用されたため、結果として明らかに連続する遺跡にもかかわらず、遺跡名が乱立することとなってしまった（第1表）。

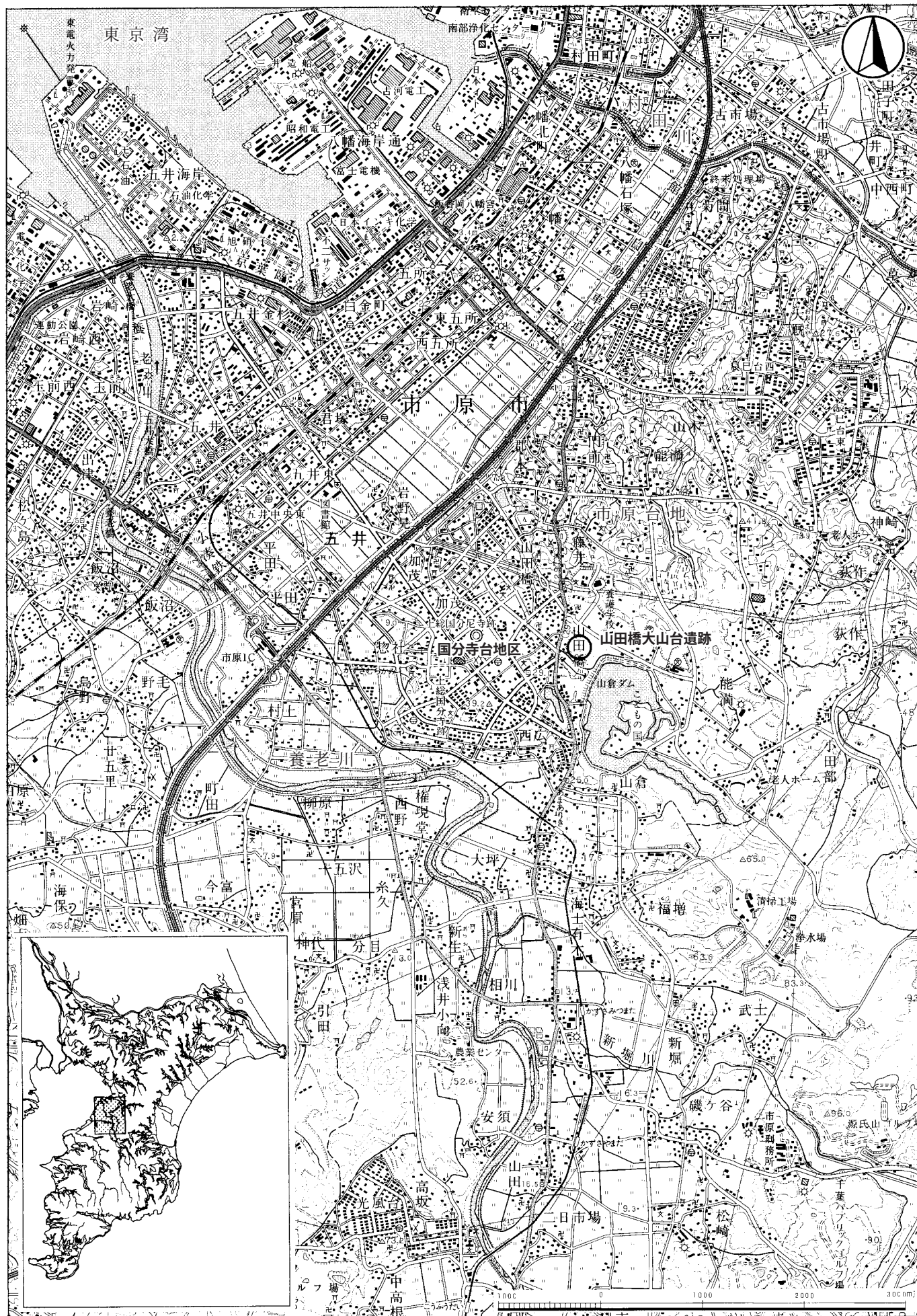
亥の海道貝塚については、山田橋遺跡群とは別に「貝塚」としての登録があるが、山田橋大山台遺跡、山田橋表通遺跡、山田橋大塚台遺跡については、すでに同一遺構が異なる遺跡に分割される不具合を生じている。登録遺跡についても、隣接台地北半部は「東千草山遺跡」として登録されているが、昭和62年度の東千草山遺跡調査範囲は、登録上の山田橋遺跡群、東千草山遺跡にまたがっている。ここまでの調査成果によるならば、少なくとも主体となる弥生時代の集落跡は、一連の遺跡として把握される。すでに山田橋亥の海道貝塚、山田橋表通遺跡については報告書も刊行されており、ここでの組み替えは、さらに混乱を招く可能性もあるため、「山田橋大山台遺跡」はそのまま使用することとして、本書では、これら各遺跡（調査区）を地点名として理解し、東千草山遺跡を含む遺跡の全体呼称として、「山田橋遺跡群」を便宜的に使用しておく。第2図遺跡範囲は、分布地図によるものであるが、この場合、山田橋遺跡群の総面積はおよそ160,000㎡を測る。このうち、59,175㎡について調査を終了したことになる。

山田橋大山台遺跡で検出された遺構は、旧石器時代遺物集中13地点、縄文時代の竪穴住居跡9軒、炉穴32基（群）、陥穴4基、土坑3基、弥生時代後期の竪穴住居跡107軒（建て替えを含めた総数で110軒）、方形周溝墓3基、木棺土坑墓3基、土坑3基、古墳時代前期の竪穴住居跡4軒、古墳時代中期の円墳1基、古墳時代終末期の竪穴住居跡3軒、古墳終末期以降の竪穴住居跡2軒、道跡を含む溝多数、井戸状遺構1基を含む土坑3基などである。

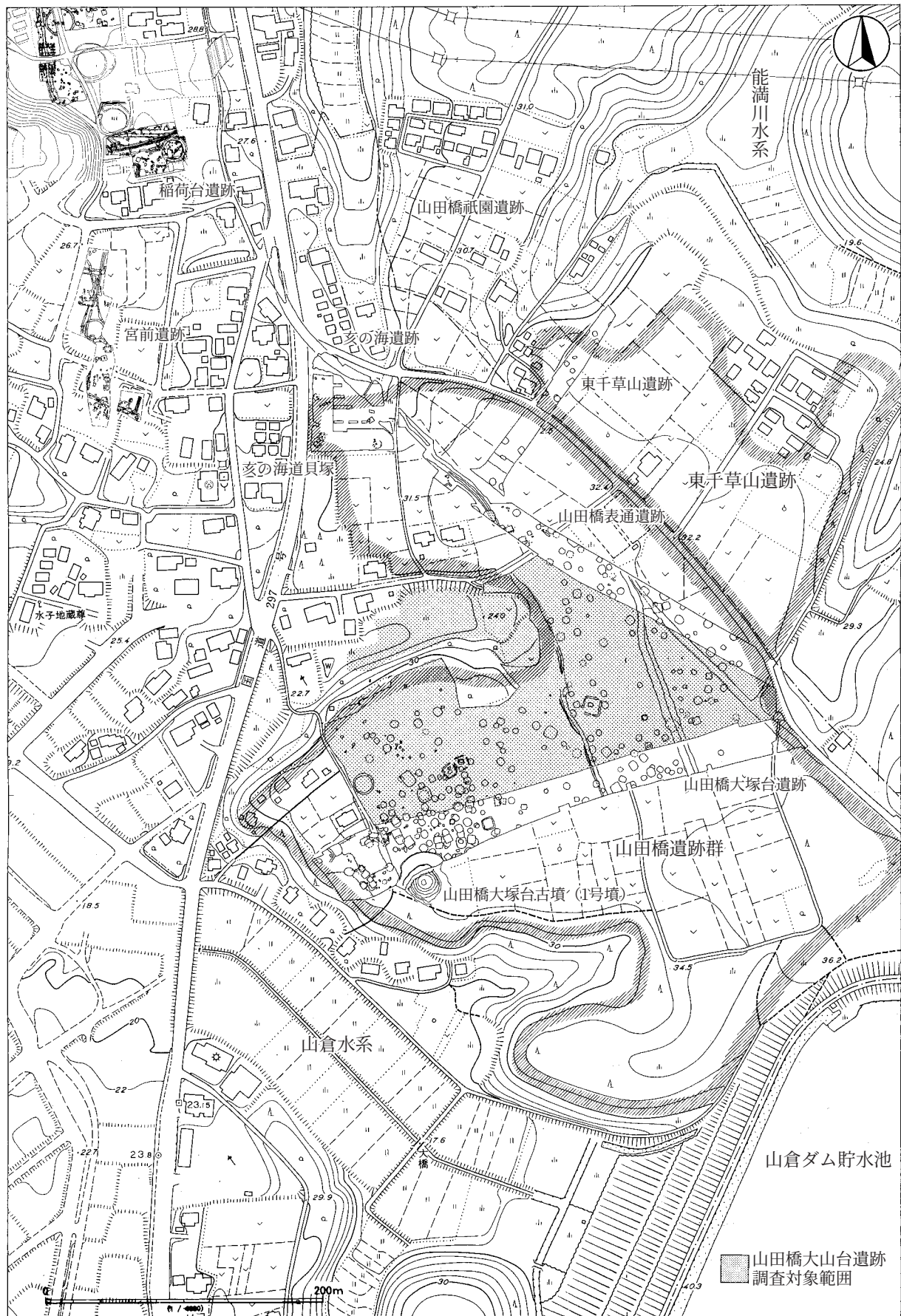
山田橋遺跡群全体での主要遺構数は、炉穴95基（群）、竪穴住居跡280軒、うち縄文時代の竪穴住居跡15軒、弥生時代後期の竪穴住居跡220軒、古墳時代前期の竪穴住居跡12軒、古墳時代後期～終末期の竪穴住居跡が21軒、奈良平安時代の竪穴住居跡が10軒、弥生時代後期の方形周溝墓5基などである。各時代の状況は、炉穴を中心とする縄文時代早期の集落が、山田橋大山台遺跡西半部からとくに山田橋大塚台遺跡台地縁辺部側に展開する。縄文時代中期加曾利E式期は、山田橋大山台遺跡南西部、後期堀之内式期は、亥の海道貝塚周辺に限られる。弥生時代後期の集落は、各調査区ほぼ全域に展開するが、山田橋表通遺跡北西部から亥の海道貝塚周辺では確認されていない。古墳時代前期について

調査年度	遺跡名	対象(㎡)	本調査(㎡)	遺構の概要	文献等
昭和60年度	山田橋表通遺跡	6,000	5,000	竪穴住居跡44(縄文後期1、弥生後期35、古墳前期6、古墳終末期1、平安1)、土坑14、溝(道跡他)18等	報告刊行済(蜂屋・小橋1999)。
昭和62年度	東千草山遺跡	4,500	4,360	竪穴住居跡14(弥生後期13、古墳前期1)、土坑2、溝4等	報告刊行済(田中1989)。
平成2・3年度	山田橋亥の海道貝塚	1,862	1,862	地点貝層、竪穴住居跡6(縄文後期5、平安1)、土坑11(縄文後期)、埋葬人骨1(縄文後期)、溝4等	報告刊行済(忍澤1992)。確認調査段階では「山田橋表通遺跡」として報告。確認調査文献(忍澤1991)。
平成4・5年度	山田橋大塚台遺跡(1次)	10,000	8,000	炉穴30(縄文早期)、竪穴住居跡76(弥生後期56、古墳前期1、古墳後終末期16、奈良平安3)、掘立柱建物2(奈良平安)、土坑墓(弥生後期)、方形周溝1、古墳周溝1、溝(道跡)、近世土坑等	未報告、概要(半田1997)。
平成6～9年度	山田橋大山台遺跡	33,200	28,650	旧石器遺物集中地点13、炉穴32(縄文早期)、陥穴4(縄文)、竪穴住居跡125(縄文9、弥生後期107、古墳前期4、古墳終末期以降5)、方形周溝墓3(弥生後期)、木棺土坑墓3(弥生後期)、円墳1(古墳中期)、土坑11、溝(道跡)等	本報告。
平成8年度	山田橋亥の海道遺跡	1,613	1,550	道跡2(奈良平安)、溝16等	未報告、概要(田所2000)。
平成10年度	山田橋大塚台遺跡(2次)	2,000	2,000	炉穴33(縄文早期)、竪穴住居跡15(弥生後期9、古墳後終末期1、奈良平安5)、方形周溝墓1(弥生後期)等	未報告、概要(牧野2001)。

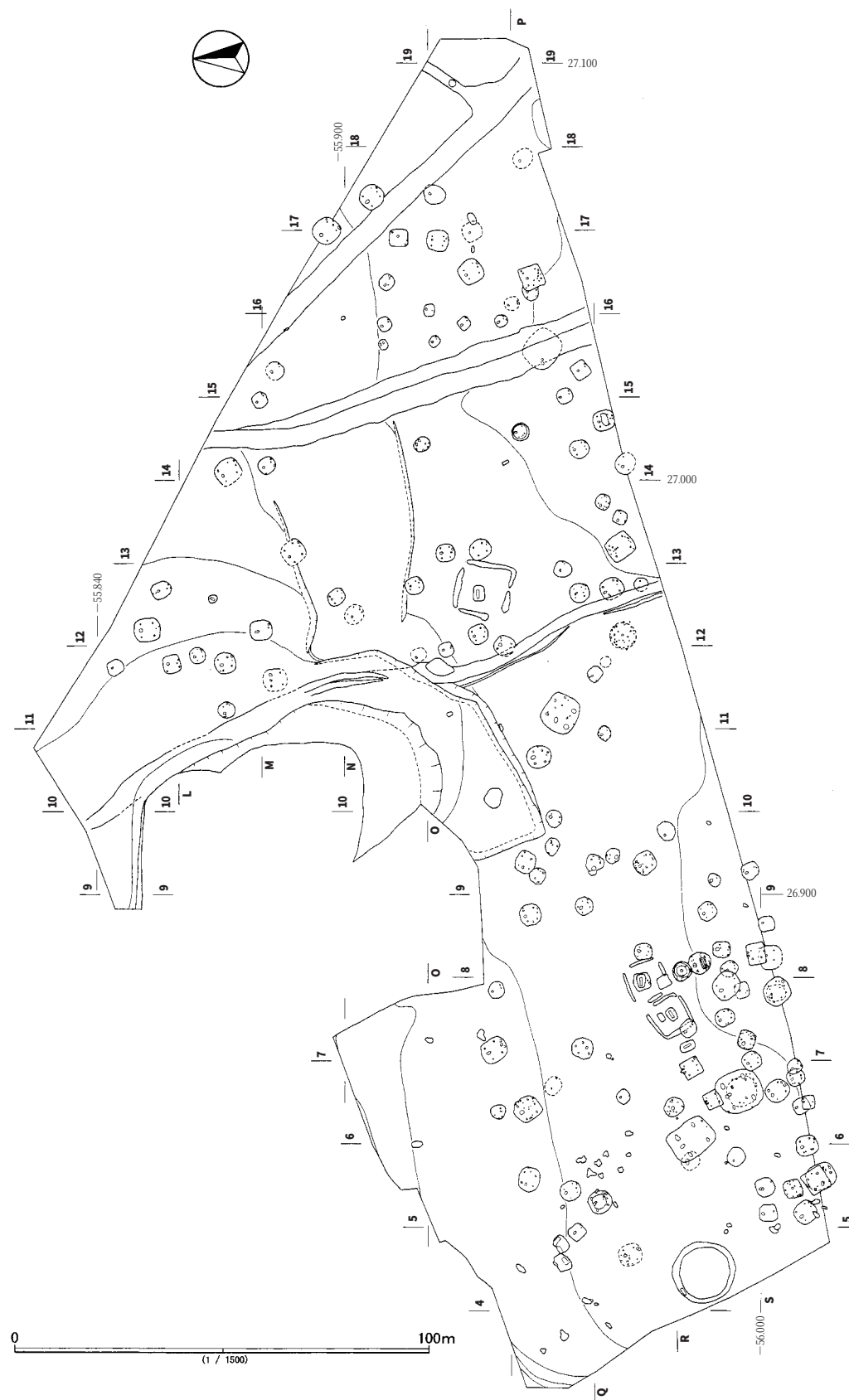
第1表 山田橋遺跡群の調査



第1図 山田橋遺跡群山田橋大山台遺跡位置図



第2図 山田橋遺跡群・東千草山遺跡 周辺地形図



第3図 山田橋大山台遺跡主要遺構全体図

は、山田橋表通遺跡、山田橋大山台遺跡東側および山田橋表通遺跡から東千草山遺跡にかけての2地点に竪穴住居跡の分布が認められる。山田橋大塚台古墳（1号墳）については、弥生時代終末期から、古墳時代前期に比定される可能性がある。古墳時代終末期以降は、山田橋大山台遺跡西半部から山田橋大塚台遺跡にかけて竪穴住居跡群が展開するが、稲荷台遺跡（浅利2003）、宮前遺跡（対馬・谷島・浅利1977）に隣接する北西部でも平安時代の竪穴住居跡が検出されている。

各遺跡を縦断する道路跡は、隣接調査区の状態から、開削が奈良平安時代に遡る可能性がある。官衙関連遺跡である稲荷台遺跡や、上総国府推定地である郡本地区に連続することも確認されているが、遺構の性格もあり、今回の調査においては、開削時期を限定する明確な根拠は検出できていない。

遺跡の中心時期となる弥生時代後期については、山田橋表通遺跡北東側の畑でも、過去、弥生土器の散布とともに、雨天後には竪穴住居跡の分布が明瞭に認められた。山田橋大塚台遺跡南側についても、台地南端部までは確認できなかったものの、南側隣接地では土器の散布が確認できる。当該期の集落は、少なくとも100,000m²以上におよぶものと推定され、その規模は、神奈川県横浜市折本西原遺跡や西日本の環濠集落にも匹敵する。しかし、散漫な遺構分布にみられるように、この遺跡範囲が一時期において形成されたものとは考えられない。また、竪穴住居跡の累積過程に明確な中心点も認められない。隣接する山田橋祇園遺跡でも弥生土器の散布が認められ、宮前遺跡（登録遺跡名は「山田橋宮ノ前遺跡」）、稲荷台遺跡では竪穴住居跡が検出されているが、いずれも遺構分布は散漫で、台地上広範囲に点在する。市原台地では、弥生時代中期宮ノ台式期に環濠集落が形成されるが、後期には環濠の機能を停止している。環濠集落にみられる集村化と、後期における散村的景観は、きわめて明確に対比される。

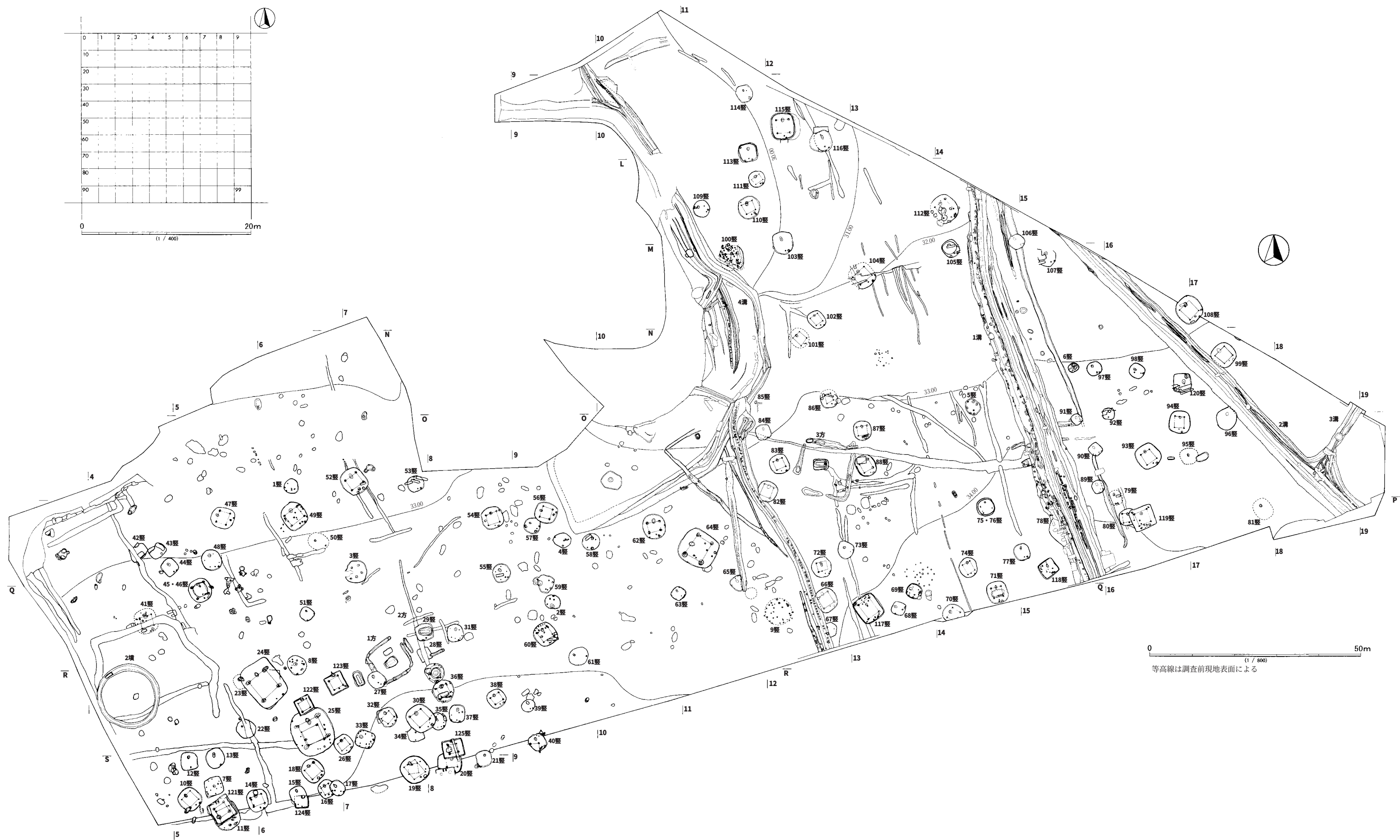
第4節 調査の方法

調査区は、公共座標を使用し、20m×20mの方眼網を設定、これを基本グリッドとした。基本グリッド内はさらに2m×2mに分割している（第4図）。各遺構図のグリッド表示は、グリッドの北西隅を基点としている。

表土の除去は、基本的にバックホウによるが、1号溝についても使用している。下層確認調査の掘削は、台地縁辺部については人力で行ったが、台地中央部はクラムシェルを使用した。下層確認調査は、谷部をのぞく28,500m²を対象とし、その1%、285m²について平成6年度実施したが、県教育委員会の指導により、平成8年度に、範囲確認のための追加調査を行っている。

なお、山田橋大塚台遺跡との境界について、山田橋大塚台遺跡調査当時、山田橋大山台遺跡側は民間私有地であったため、境界部分について若干の掘り残しを生じていた。今回の調査にあたり、市担当課の了承を得て、この部分の遺構について一部調査範囲を山田橋大塚台遺跡側に拡張している。ただし、報告にあたっては、完全に山田橋大塚台遺跡の範囲となる遺構については省略している。その関係で、年報等で奈良時代の畿内産暗文土器の出土が報告されているが（近藤1998）、これについては山田橋大塚台遺跡で報告することとなる。

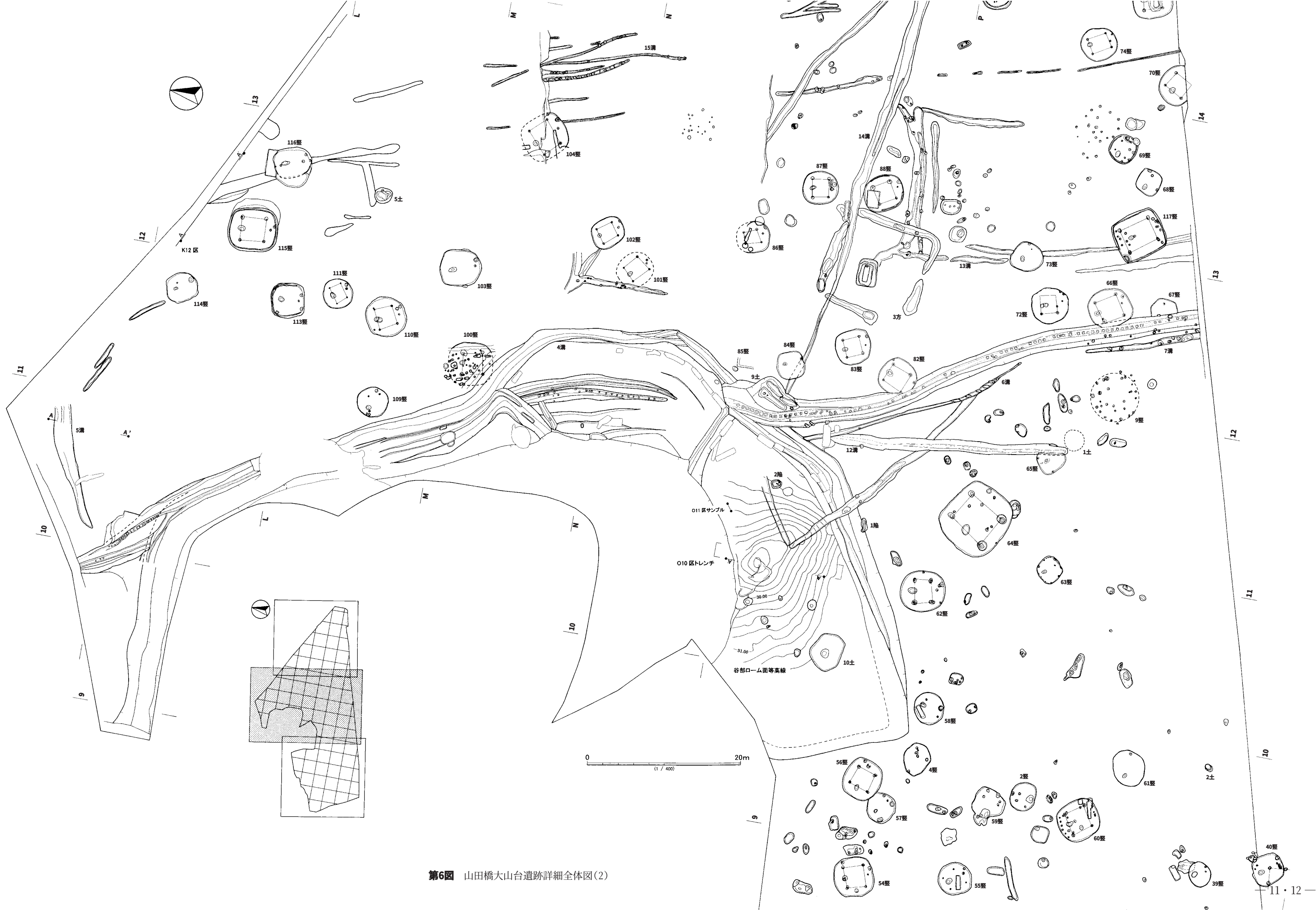
今回の調査区は、全体として表土の層厚が薄く、ゴボウ耕作溝による攪乱も激しかったため、遺構の遺存状態はかならずしも良好ではない。とくに、ゴボウ耕作溝は、確実に竪穴床面を掘りぬき、Pit等の検出は困難をきわめた。攪乱範囲については、煩雑になるため一部をのぞき図示していない



第4図 山田橋大山台遺跡全体図

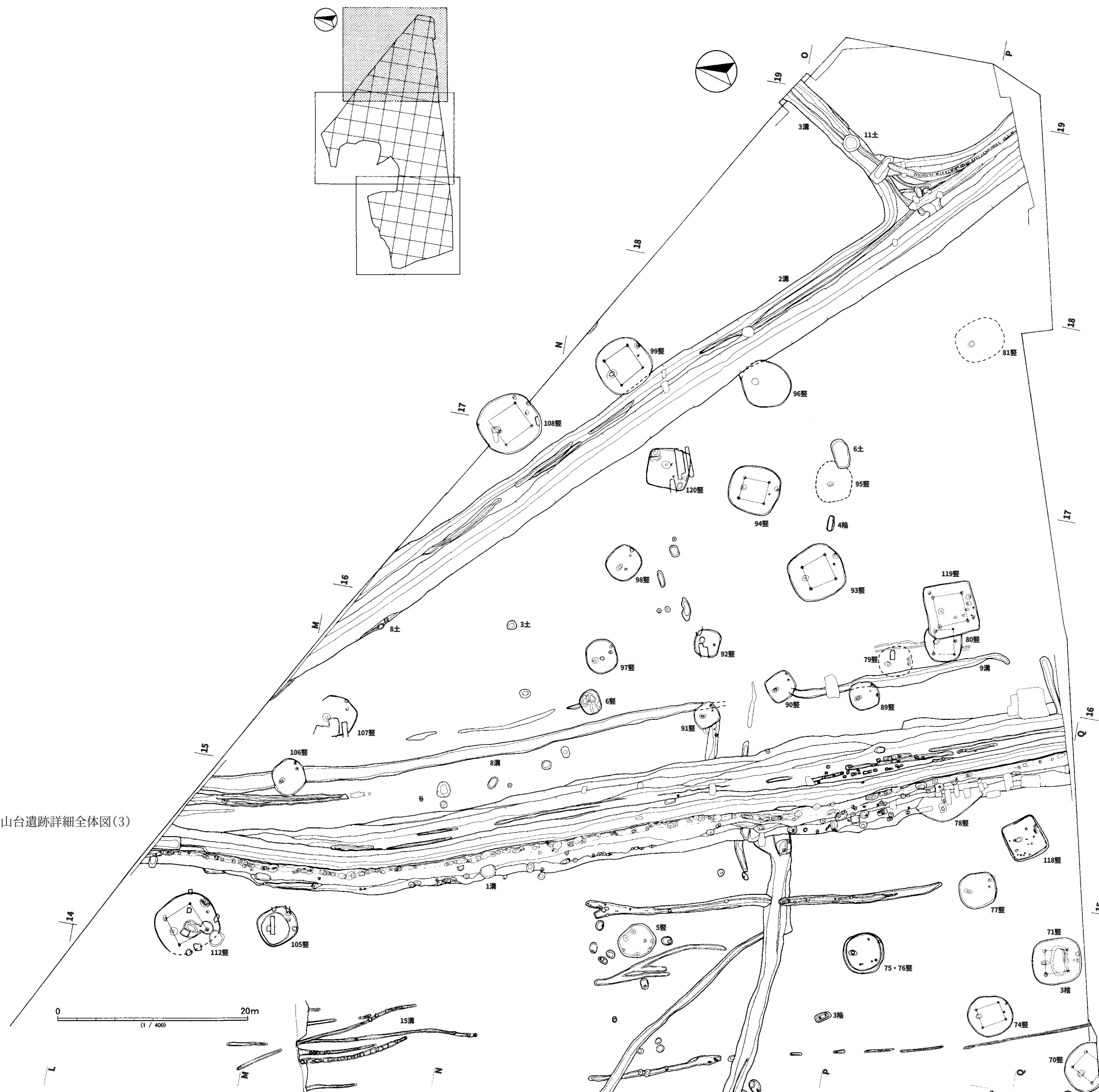


第5図 山田橋大山台遺跡詳細全体図(1)



第6図 山田橋大山台遺跡詳細全体図(2)

第7図 山田橋大山台遺跡詳細全体図(3)



A geological cross-section diagram showing stratigraphic layers and structural features. The diagram is oriented horizontally with a vertical scale on the right side. The layers are numbered 1 through 16. A fault line, labeled '断層' (Danceur), is shown as a vertical line with a break, separating the upper layers from the lower layers. A sample point, labeled 'サンプル' (Sample), is indicated by a small circle in layer 1. The layers are labeled with numbers: 8, 7, 6, 4, 6, 5, 1, 2, 3, 9, 10, 12, 11, 12, 14, 15, 16. The vertical scale on the right side has markers at 32.00, 30.00, and 29.00. The diagram shows a complex geological structure with various layers and a fault line.

Figure A is a geological cross-section diagram. It shows a series of stratigraphic layers numbered 1 through 17. A vertical line labeled 'サンプル' (Sample) is positioned on layer 6. A fault line, labeled '断層' (Fault), is shown on the right side of the diagram. The diagram includes elevation markers at 30.00, 29.00, and 28.00. A scale bar at the bottom right indicates a distance of 0 to 3 meters, with a scale of 1/80. A legend at the bottom right shows a stippled pattern representing '8層 黄白色ガラス層 (AG)' (Layer 8: Yellowish-white glass layer (AG)).

が、状況については写真図版を参照願いたい。また、N12～14区付近は、畑地造成による削平が進み、すべての遺構が捉えきれたかどうかは明らかではない。

本遺跡では、畑による裸地化の進行によるものか、表土層から確認面であるソフトローム層までの層厚は薄く、基本的に、表土層とソフトローム層間の自然堆積土は認められなかった。ただし、遺跡中央部の西に開口する支谷にむかい、ゆるやかな傾斜地が形成され、ソフトローム層上の堆積も厚くなる。とくに、O10区谷頭部では、ロームまで約3mの堆積土があった。

K12区調査区北壁土層（第8図）では、房総Ⅱb層以降の厚い堆積が認められた。層序は、1層が表土

(耕作土)層。2・3・5～8層は灰褐色土層、4層は黒褐色土層であり、5～7層は硬化する。9層は黒褐色土層、10層はロームに似る褐色土層、11層は黒褐色土層、12層は褐色土層、13層は硬化した黒色土層であり、スコリアの集積が観察できた。14層は黒褐色土層であり、弥生土器多数が検出されている。15層は、赤色スコリアを多量に含む褐色土層であり、房総Ⅱb層（新期テフラ）に、16層は暗褐色土層であり、房総Ⅱc層に対応する。弥生時代の遺構については、15層上面での確認が可能であった。

谷部については、現状地形で緩傾斜地が続くが、本調査範囲以西については、確認調査の結果、急崖となることが判明した。現状地形は埋め立てによるものであり、地元の聞き取りによれば、埋め立て時期は昭和40年代とのことであった。

ローム層の基本層序については、Ⅲ層が黄褐色のソフトローム層、Ⅳ・Ⅴ層が褐色のハードローム層であり、Ⅴ層は第1黒色帯に相当するが、明確に識別できない場合が多い。Ⅵ層は黄褐色のハードローム層であり、A Tが混在する。Ⅶ層は褐色土層であり、第2黒色帯上部、Ⅸ層は第2黒色下部に相当する。Ⅹ層は黄褐色のハードローム層である。

なお、各断面で検出されたテフラについては、分析委託を行っている（第3章第3節）。

文 献

- 対馬郁夫・谷島一馬・浅利幸一 1977『千葉県市原市宮前遺跡第1次・第2次調査報告書』市原市教育委員会
市原市教育委員会 1988『千葉県市原市埋蔵文化財分布地図北部編』
忍澤成視 1992『市原市山田橋亥の海道貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書第48集
半田堅三 1997「山田橋大塚台遺跡」『市原市文化財センター年報平成5年度』
近藤敏 1998「山田橋大山台遺跡」『市原市文化財センター年報平成7年度』
千葉県教育委員会 1999『千葉県埋蔵文化財分布地図（3） 千葉市・市原市・長生地区（改訂版）』
蜂屋孝之・小橋健司 1999『市原市山田橋表通遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第28集
近藤敏 2000a「山田橋大山台遺跡」『市原市文化財センター年報 平成8年度』
近藤敏 2000b「山田橋大山台遺跡」『市原市文化財センター年報 平成9年度』
田所真 2000「山田橋亥の海道遺跡」『市原市文化財センター年報 平成8年度』
牧野光隆 2001「山田橋大塚台遺跡（2次）」『市原市文化財センター年報 平成10年度』
浅利幸一 2003『市原市稲荷台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告書Ⅸ 財団法人市原市文化財センター



山田橋大山台遺跡現況（2003年9月12日撮影）

第2章 遺構と遺物

第1節 旧石器時代

調査の結果、谷頭部周辺の台地平坦部を中心に13地点の遺物集中が検出された。遺物集中は、そのほとんどが礫群としてとらえられるものであり、焼礫に、若干の剥片、碎片が混在する。出土層序は、Ⅲ層ソフトローム（第1文化層）、Ⅳ層下部からⅥ層、Ⅵ層の3面に分けることができる。礫以外の内容が乏しく、各層の内容を明示することはできないが、上層から第1～3文化層と呼称しておく。

第1地点（第10図、図版34）Q4－75区他

Ⅳ・Ⅴ層下部からⅥ層にかけて出土した。平面分布は3.4m×2.3m程度を測る。遺物総数は27点であり、剥片15点、碎片2点、礫10点であった。剥片と礫は、平面的に混在する。剥片は珪質頁岩を主とし、いずれも5cm程度の縦長剥片である。礫は、すべてが破損し、10g以下の小形の細礫を主体とする。観察による被熱率は80%であった。石材は他の礫群と異なり石英斑岩が目立つ。

第2地点（第10・15図、図版34・83）P5－00区他

おもにⅥ層を中心として出土した。平面分布の中心は2.8m×1.7m程度を測る。遺物総数は35点であり、剥片7点、碎片7点、礫21点であった。礫群は、剥片類の北東側に集中する。剥片は黒曜石を中心とする。礫は、10g以下の小礫から150gをこえる大形の礫まで認められるが、すべてが破損する。観察による被熱率は91%であった。石材は、輝石安山岩、石英斑岩を中心とする。

第3地点（第10図、図版34）P5－29区他

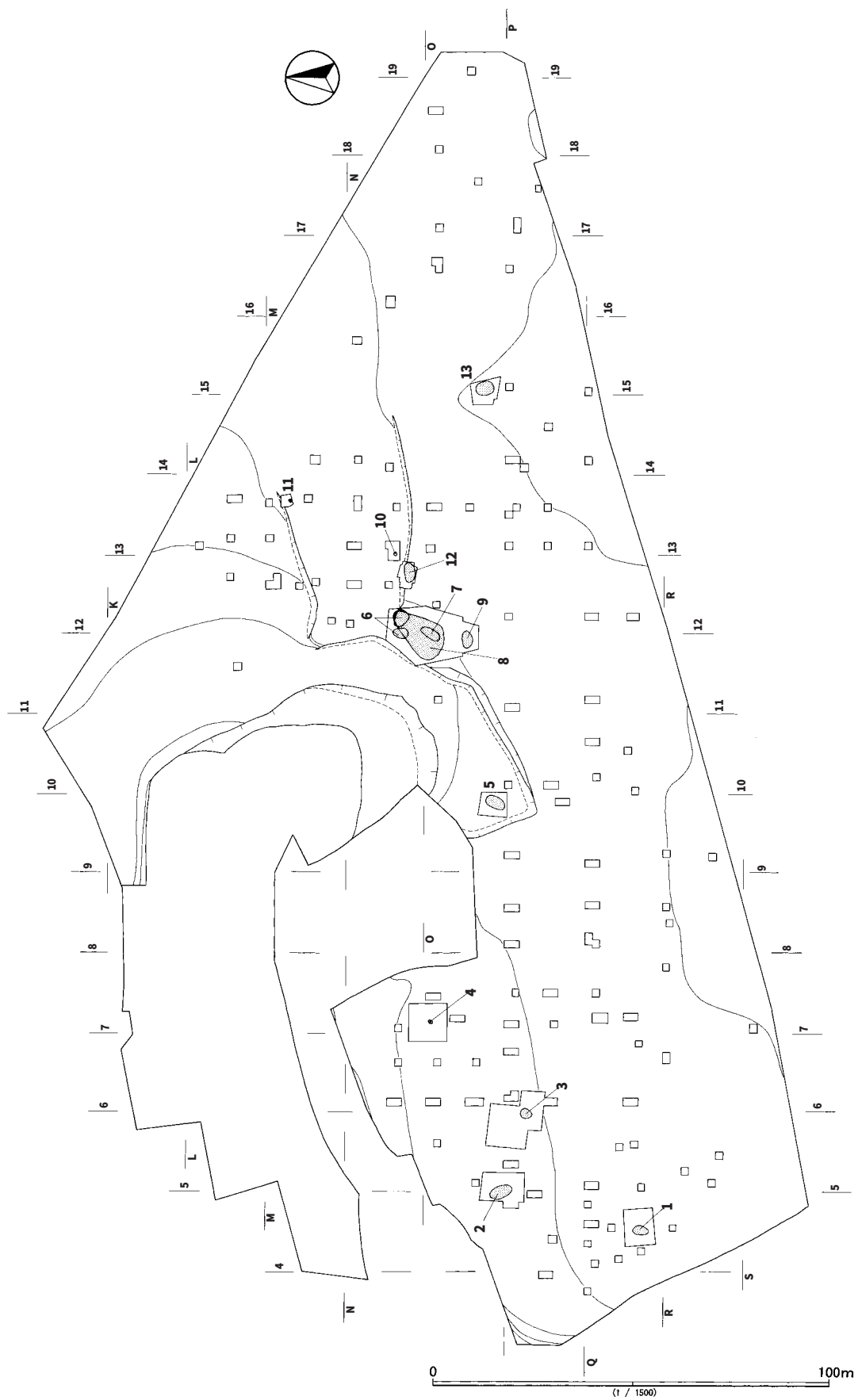
Ⅲ層を中心として出土した。平面分布の中心は1.9m×1.8mの規模を測る。遺物総数は31点であり、剥片3点、礫28点であった。礫群を中心とし、剥片が周囲に散在する。礫は、50g以下の小礫からなり、28点のうち26点に破損が認められた。被熱率は86%、石材は、チャートを中心とする。

第4地点（第11・15図、図版34・83）O7－01区他

Ⅳ・Ⅴ層下部からⅥ層にかけて出土した。遺物総数は4点のみであり、調整痕のある剥片1点、剥片2点、礫1点のみであった。いずれも確認調査段階で出土したものであり、本調査では、周囲への分布広がりには確認できなかった。

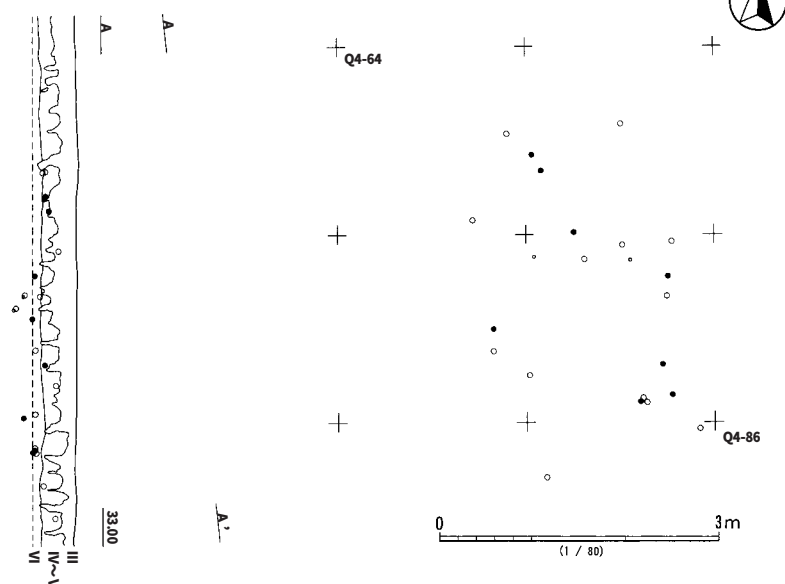
集中地点	文化層	層序	Grid	総数	剥片等 総数	石核	調整剥片	剥片	碎片	礫 総数	破損率	被熱率	接合
3	1	Ⅲ	P5～P6	31	3			3		28	92.9%	85.7%	
5	1	Ⅲ	O9～O10	157	5	2	1	2		152	79.6%	82.2%	
9	1	Ⅲ	O11～O12	52	0					52	84.6%	88.5%	
10	1	Ⅲ	O13～N13	10	0					10	100.0%	100.0%	2
11	1	Ⅲ	M13	11	0					11	63.6%	81.8%	
12	1	Ⅲ	O15	202	8			5	3	194	92.8%	82.0%	4
13	1	Ⅲ	N12	55	3	1		2		52	90.4%	71.2%	1
総数				518	19	3	1	12	3	499			7
1	2	Ⅳ下～Ⅵ	Q4	27	17			15	2	10	100.0%	80.0%	1
2	2	Ⅳ下～Ⅵ	O4～P5	35	14			7	7	21	100.0%	90.5%	
4	2	Ⅳ下～Ⅵ	O7	4	3		1	2		1	0.0%	100.0%	
6	2	Ⅳ下～Ⅵ	N11～N12	137	4		1	1	2	133	80.5%	85.0%	8
7	2	Ⅳ下	N11～O12	24	1	1				23	82.6%	82.6%	1
総数				227	39	1	2	25	11	188			10
8	3	Ⅵ	N11～O12	16	11			7	4	5	80.0%	40.0%	

第2表 旧石器時代地点別組成表



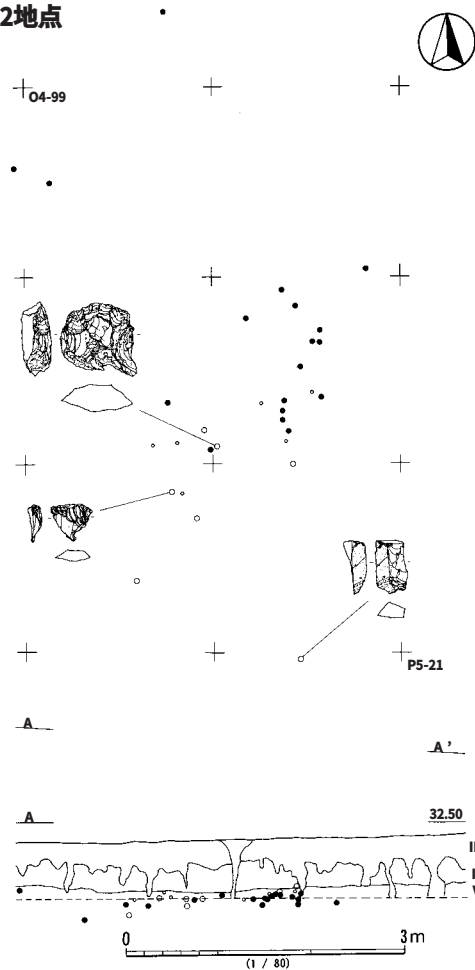
第9図 下層調査区・遺物集中地点分布

第1地点

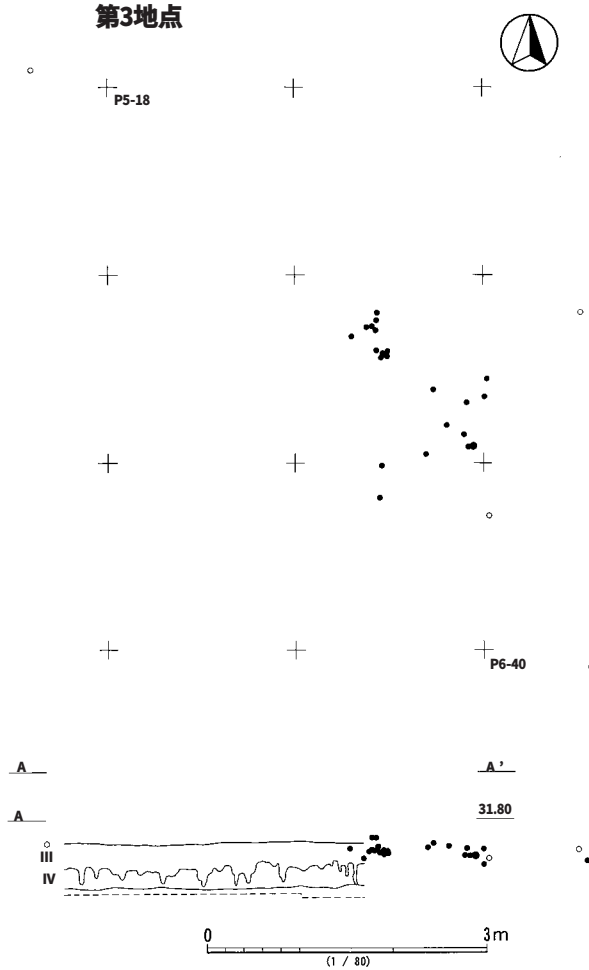


- 石核
- 剥片・調整剥片
- 碎片
- 礫（割れなし）
- 礫（割れ）

第2地点

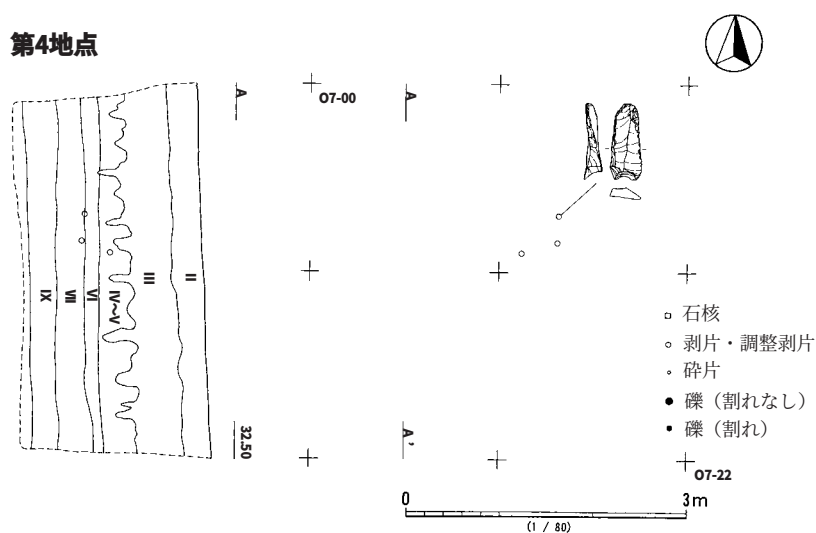


第3地点

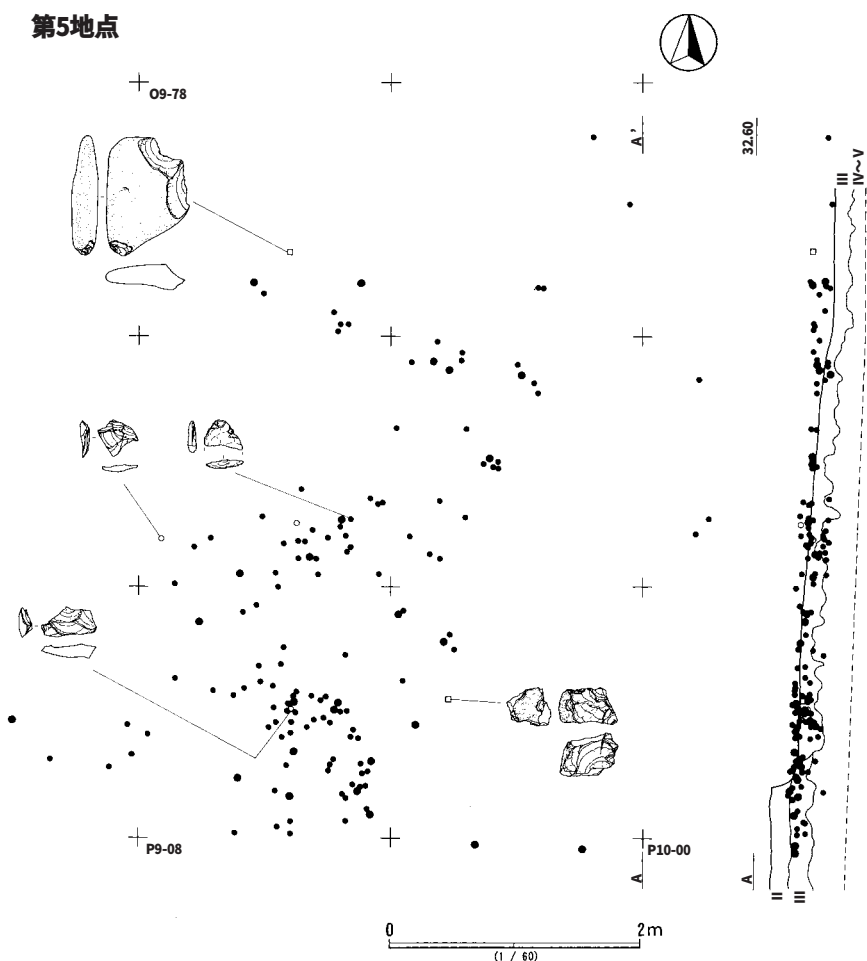


第10図 第1・2・3地点 出土状況

第4地点



第5地点



第11図 第4・5地点 出土状況

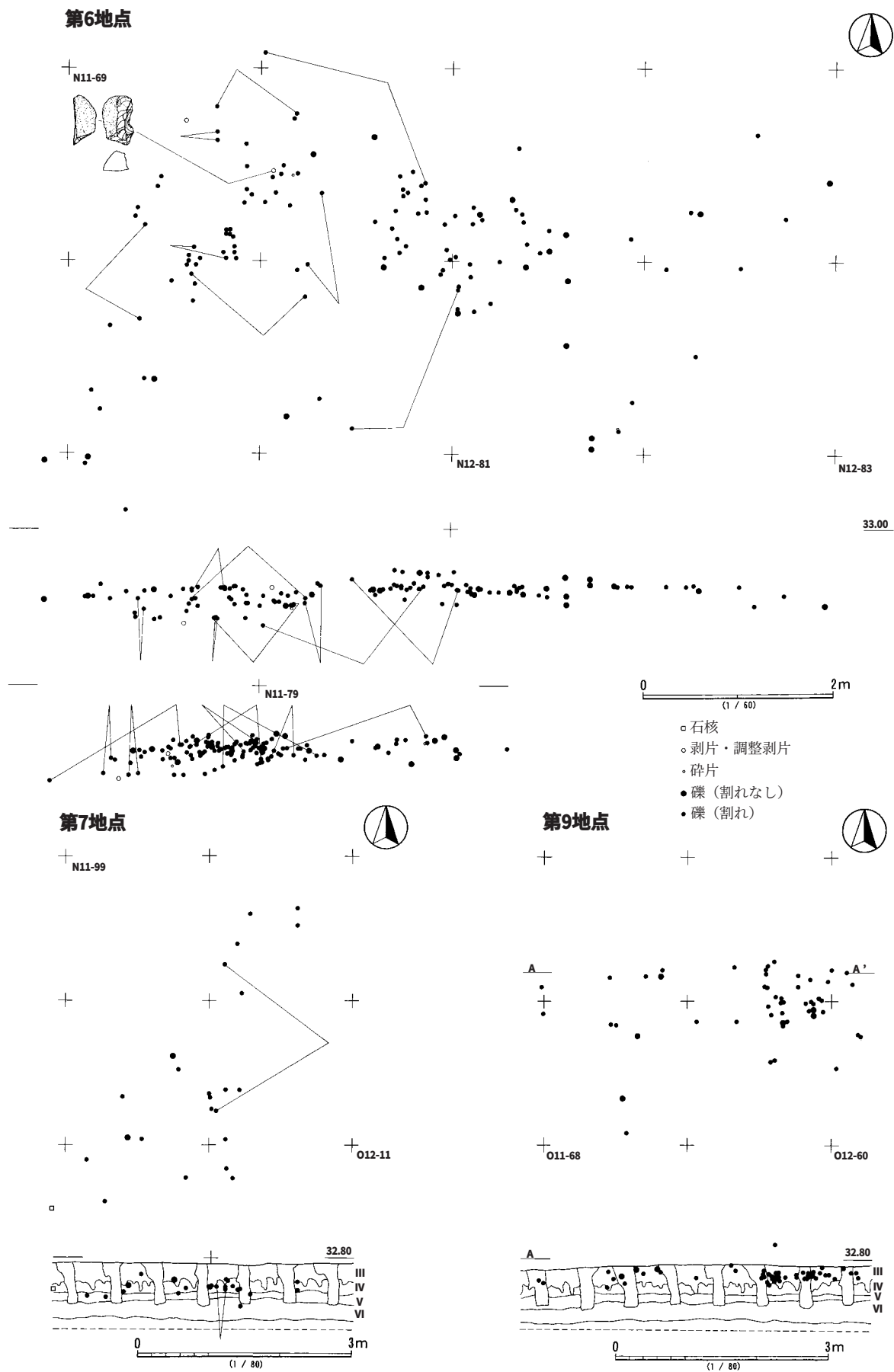
第5地点 (第11・15図、図版34・83) O9-88区他

III層を中心として出土した。平面分布の中心は4.5m×2.6mであり、その内部にも濃淡が認められる。遺物総数は157点であり、石核2点、調整痕のある剥片1点、剥片2点、礫152点であった。礫群を中心とし、剥片が周囲に散在する。5は、尖頭器様であるが、折面が赤化しているのに対し、縁辺剥離面の赤化が認められないため、可能性は低い。8は、互剥離4面をもち礫器状であるが、使用痕跡は認められない。礫は、約半数が10g以下、約80%が30g以下であり、小礫を基本とする。破損率は約80%、被熱率は82%であった。22%に煤ないしはタールの付着例が認められた。チャート、砂岩が主体となる。

第6地点 (第12・16図、図版34・83) N12-60区他

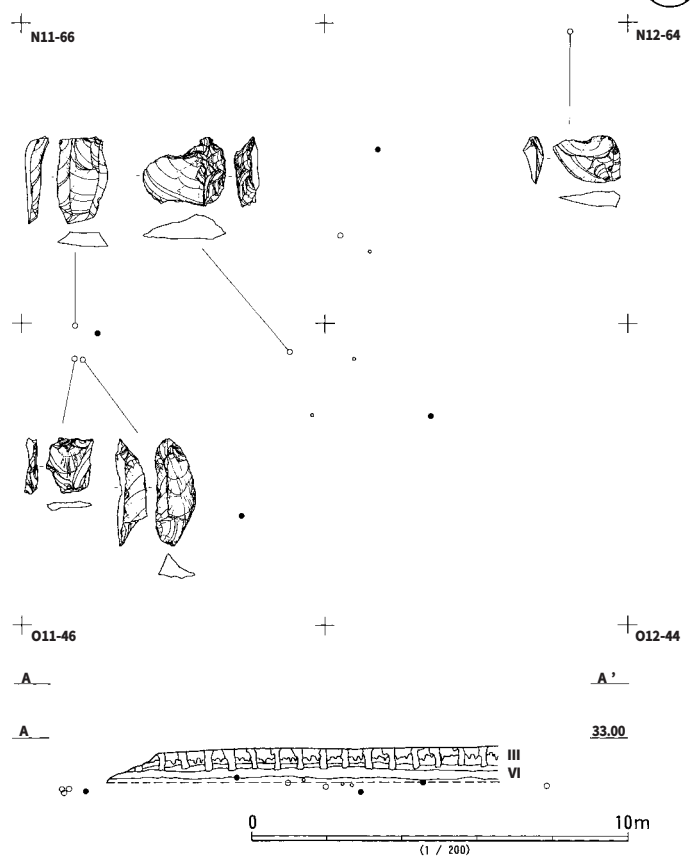
IV・V層下部からVI層にかけて出土した。遺物総数は137点であり、調整痕のある剥片1点、剥片1点、碎片2点、礫133点であった。礫群を中心とし、剥片類が若干混在する。平面分布の中心

は4.8m×1.8m程度であり、その周囲にも散在する。分布上2ブロックに分けることも可能であるが、礫の接合は2ブロックにまたがるものも認められた。礫の破損率は81%程度であるが、破損例も比較的原型をとどめるものが多い。ただし、50%程度は20g以下の小礫である。被熱率は85%であり、煤ないしはタールの付着も多数認められた。石材は、砂岩、チャートが主体となる。

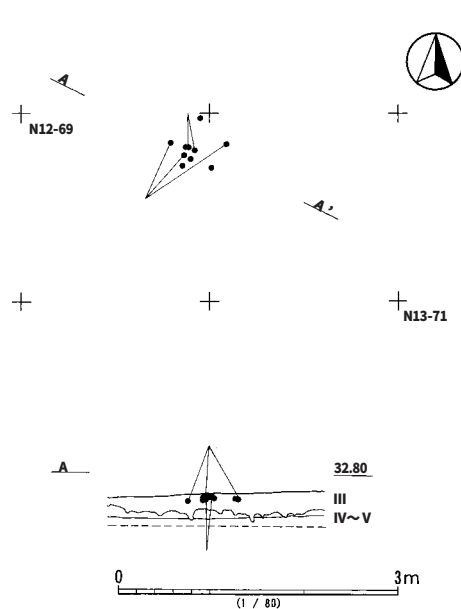


第12図 第6・7・9地点 出土状況

第8地点

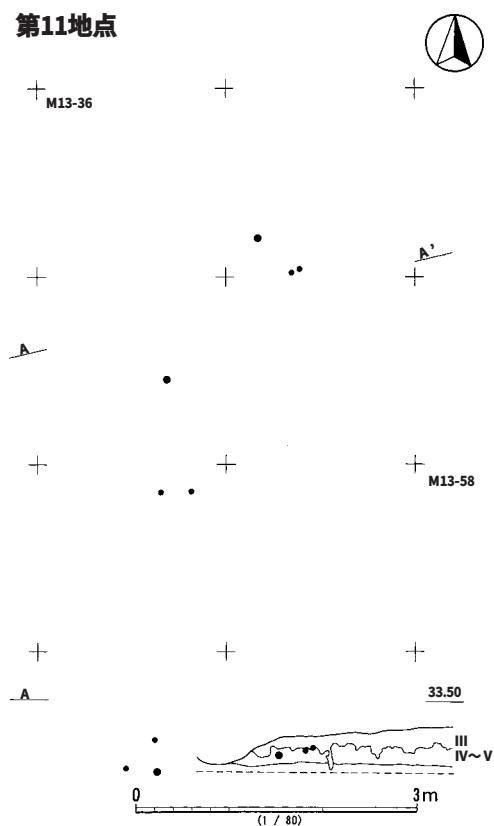


第10地点

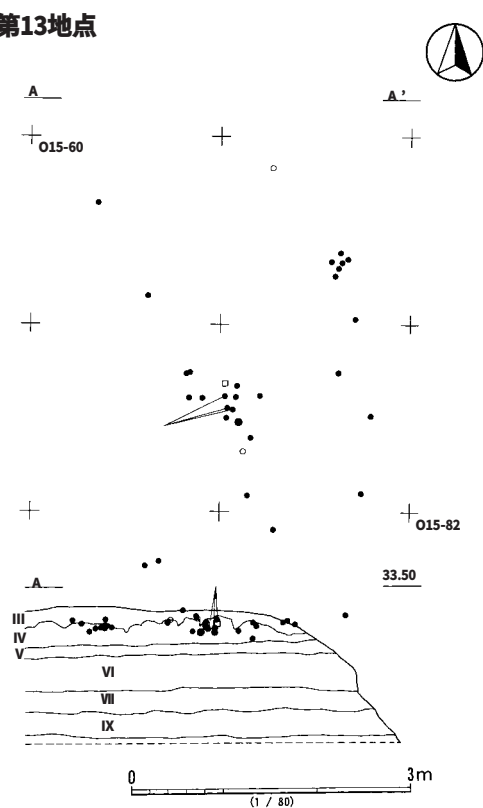


- 石核
- 剥片・調整剥片
- ・ 破片
- 礫（割れなし）
- 礫（割れ）

第11地点



第13地点



第13図 第8・10・11・13地点 出土状況

第7地点（第12図）O12-00区他

IV層下部を中心に出土した。遺物総数は24点であり、石核1点、礫23点であった。平面分布は5.0m×2.0m程度の範囲に散在する。礫は、破損率が83%であるが、重量は10g以下の小礫から150gをこえるものまで多様である。被熱率は約83%である。石材は、砂岩、チャートが主体となる。

第8地点（第13・16図、図版83）O12-00区他

第6・7地点下部VI層からVII層にかけて出土した。平面分布に中心は認められず約20mの範囲に散在する。遺物総数は16点であり、剥片7点、碎片4点、礫5点であった。本来一体のものであるか、また、第6・7地点との関係も確実とはいえない。

第9地点（第12図）O12-59区他

III層を中心として出土した。平面分布は3.7m×2.4m程度であり、東側径1mに分布の中心がみられる。遺物総数は52点であり、剥片等は存在しない。礫は、約60%が10g以下の小礫であり、破損率は85%、被熱率は89%である。石材は、チャート、砂岩が主体となる。

第10地点（第13図、図版34）N12-69区他

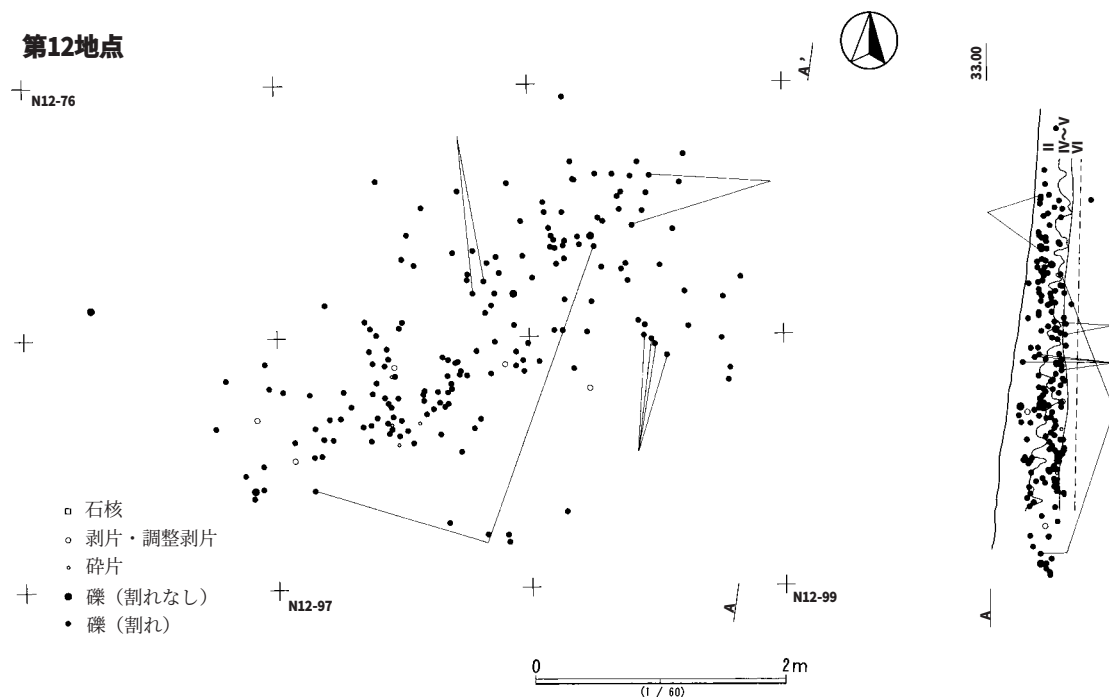
III層を中心として出土した。径0.65m程度の範囲に礫10点が分布する。遺物はすべて焼礫であった。破損率も100%であったが、大きさには大小がある。砂岩、凝灰岩、石英斑岩から構成される。

第11地点（第13図）M13-46区他

III層を中心として出土した。遺物はすべて焼礫であり、3.0m×1.0m程度の範囲に11点が散漫な分布をしめす。被熱率は82%であった。破損率は64%であり、礫の大きさも不揃いであった。石材は、砂岩、チャートから構成される。

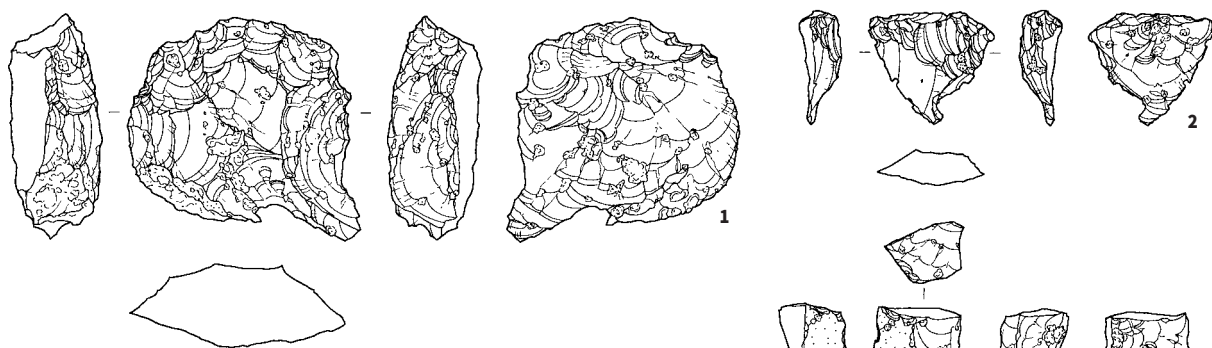
第12地点（第14図、図版35）N12-77区他

III層を中心として出土した。図上出土レベルに幅がみられるが、緩斜面地にあたるため、一体のものと推定される。遺物総数は202点であり、調整痕のある剥片5点、碎片3点、礫194点であった。礫

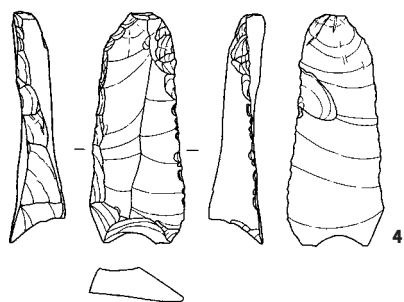


第14図 第12地点 出土状況

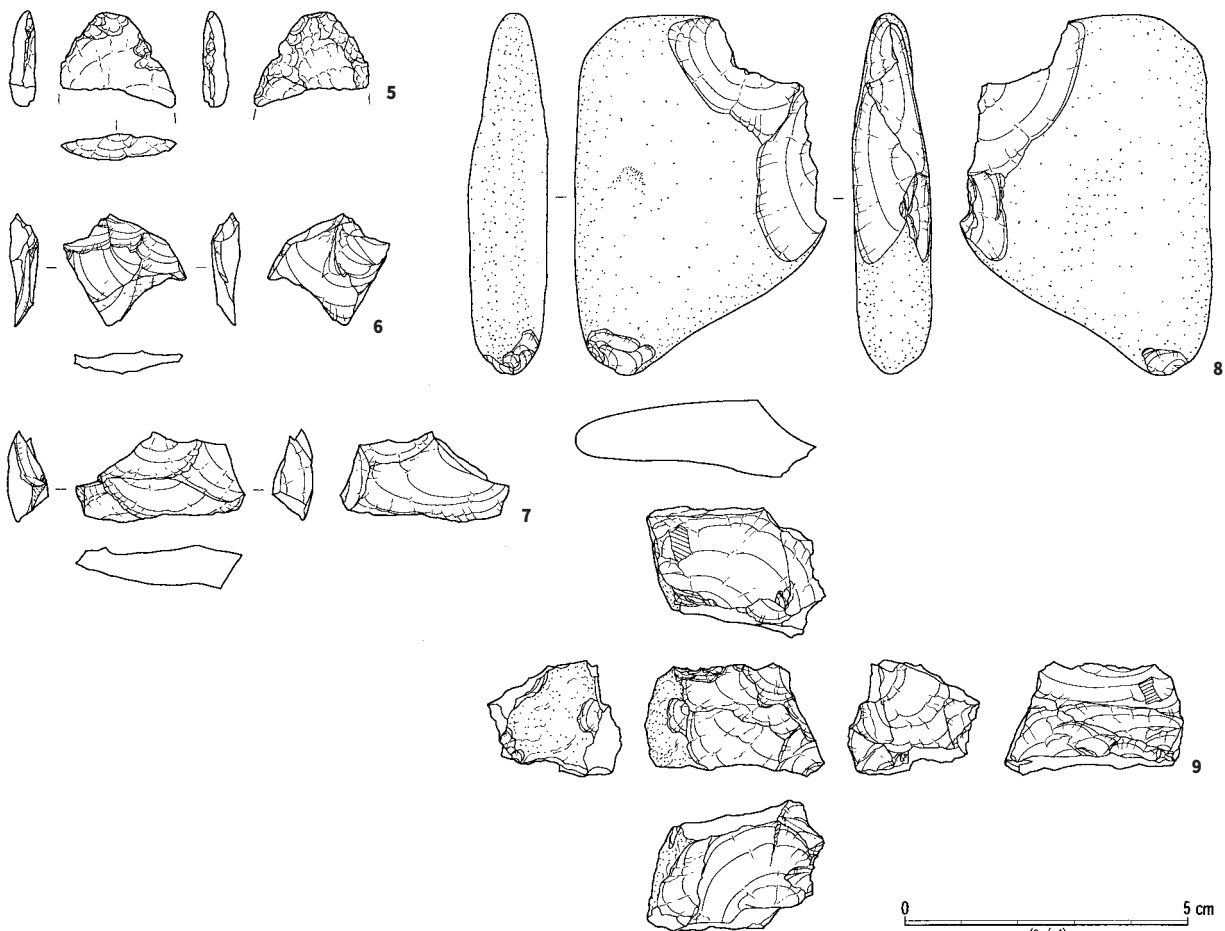
第2地点



第4地点



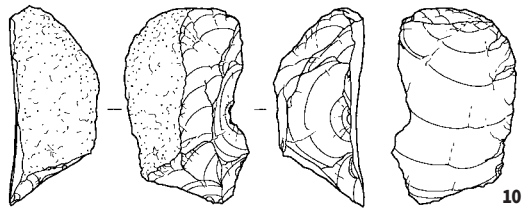
第5地点



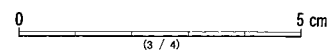
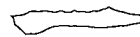
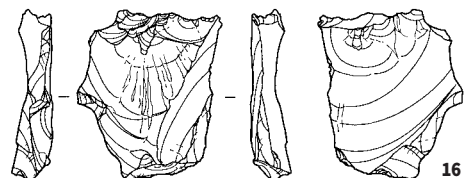
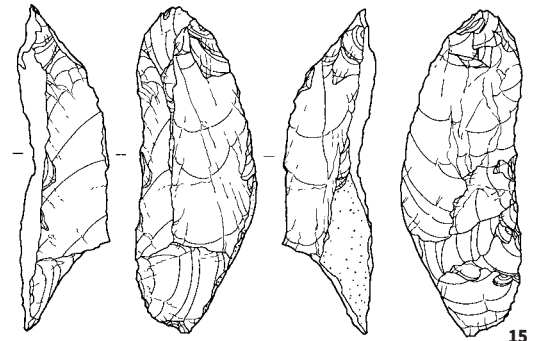
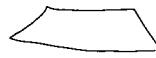
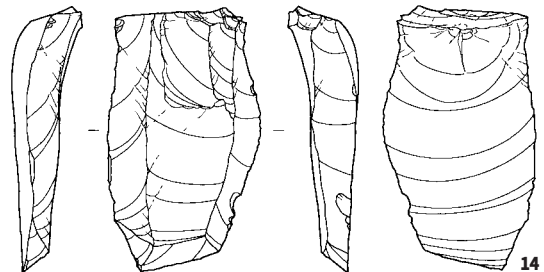
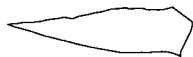
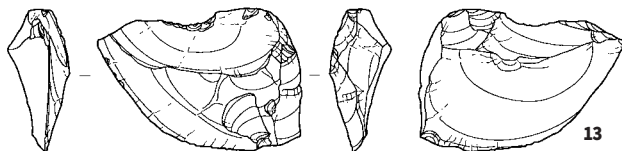
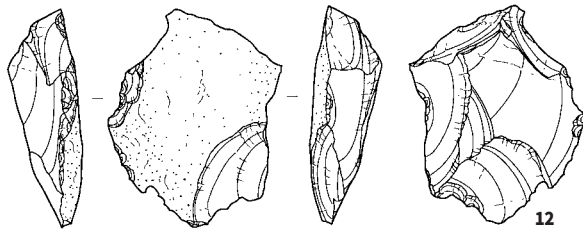
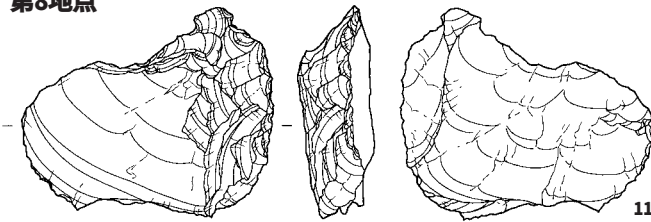
0 5 cm
(3 / 4)

第15图 第2·4·5地点 遺物

第6地点



第8地点

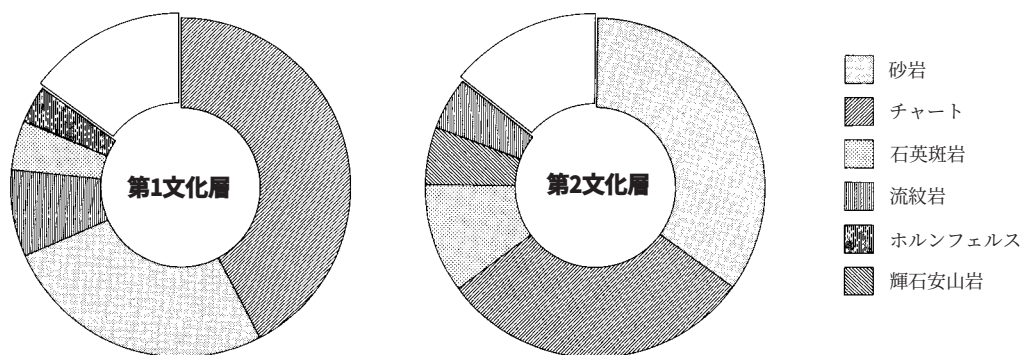
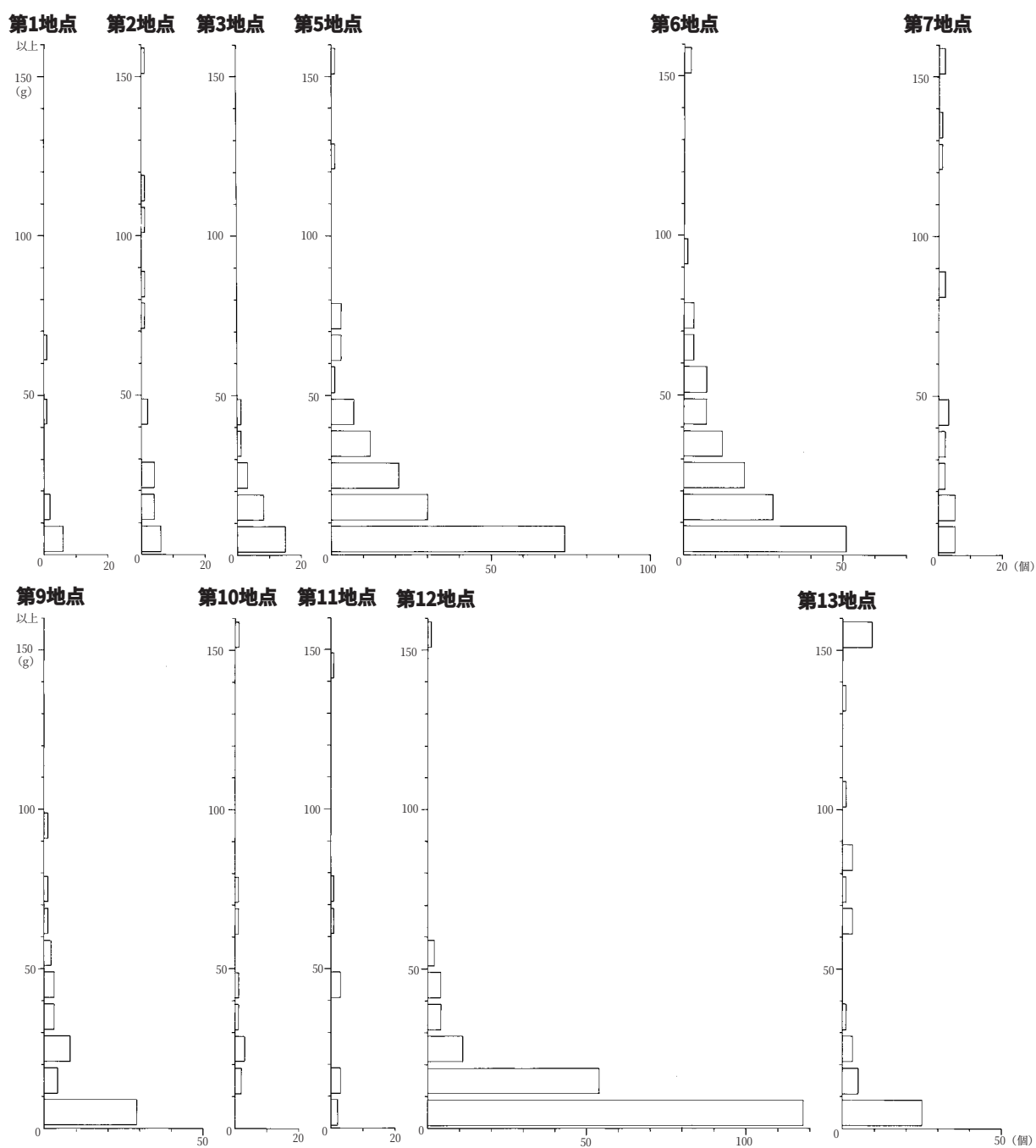


第16図 第6・8地点 遺物

群を中心とし、剥片類が若干混在する。平面分布の中心は4.5m×3.0m程度である。礫の破損率は約93%であり、150gをこえるものを1点含むものの、他は60g以下から構成される。被熱率は85%であり、煤ないしはタールの付着も比較的多数認められた。チャートを主体とする。

第13地点 (第13図、図版35) O15-71区他

Ⅲ層を中心として出土した。遺物総数は55点であり、石核1点、剥片2点、礫52点であった。平面分布は4.0m四方の範囲に散在するが、2地点に礫の集中が認められる。礫の破損率は90%である。重量は、10g以下の小礫を主体とするが、60gをこえるものも散見される。被熱率は約71%である。石材は、砂岩、流紋岩が主体となる。



第17図 礫群 重量別分布・石材比率

第2節 縄文時代

縄文時代の遺構として竪穴遺構9軒、炉穴32群51基、陥穴4基、土坑3基を掲載する。ただし、竪穴遺構のうちで住居跡と判断できるのは中期後葉の3軒のみである。遺構配置図（第18図）にみえる調査区南西部の一番高いコンタを取り巻くように7号・8号・9号竪穴、そして同時期の2号土坑が分布している。7号竪穴、8号竪穴、2号土坑の3基には貝層も伴っていた。遺構外から出土した加曽利EⅢ式土器もこれらの遺構付近に集中していた。中期後葉、おそらく加曽利EⅢ式期に小規模な集落を形成していたものであろう。なお、黒曜石の剥片・碎片が12,000点以上出土した1号土坑も同時期の可能性があるが、決め手を欠いている。炉穴群は早期後葉・子母口式から野島式期のものである。調査区南西端に集中しており、分布は環状を呈するようにみえる。遺構外から出土したこの時期の土器も炉穴群付近に集中しており、早期後葉に小規模な集落を形成していたものであろう。なお、早期と中期の集落は山田橋大塚台や調査区外に続いており、今後実施する予定の大塚台遺跡の整理を経てから、集落の範囲や構造を検討する必要がある。また、遺構外から比較的多く出土している後期前葉の土器は、北側に存在する亥の海道貝塚の集落と関連するものと考えられる。

(1) 竪 穴

1号竪穴（第19図、図版7）

1号竪穴は、O6－83区他に所在する。竪穴は、3.52×3.48mの略円形であり、確認面からの深さは0.16mを測る。比較的平坦な底面のPitのうち、P4は140cmと深く、30cm程度のP1・P2がこれに次ぐ。覆土は4層に分層され、1層は暗褐色土層、2層は暗黄褐色土層、3層は黒褐色土層、4層はロームを多量に含む暗黄褐色土層である。

出土遺物はなく、時期を知る手がかりはない。時期・性格とも不明といわざるを得ないが、縄文早期の土器分布範囲に近接することから、この時期の住居跡の可能性のあるものとして掲載した。

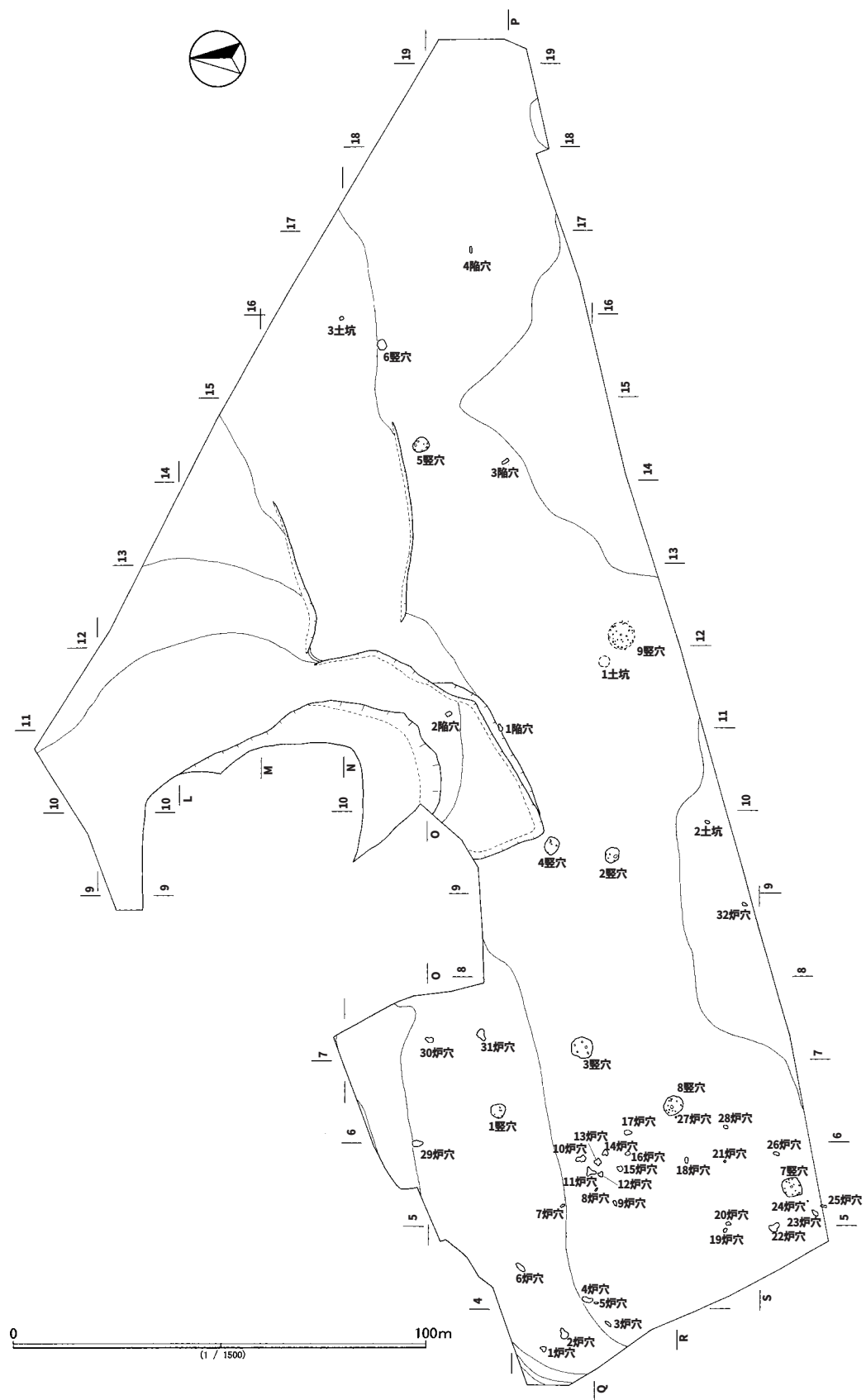
2号竪穴（第19図、図版7）

2号竪穴は、Q9－24区他に所在する。竪穴平面形態は略円形を呈し、規模は3.85×3.35m、底面積は8.93㎡を測る。確認面からの深さは0.23mである。平坦な底面上には径0.5m、深さ0.2mのP1のほか、小さく浅い穴を検出した。いずれも柱穴とみるのは難しい。覆土は、P1を含め6層に分層され、1層は暗褐色土層、2層は褐色土層、3層は黒褐色土層、4層は淡褐色土層、5層はロームブロック粒を含む暗褐色土層、6層はロームまじりの黒褐色土層である。P1は本遺構に伴うものであるか判然としなが、土層断面図をみると、1層が堆積し、土器片が入り込んだ時にはすでに埋まっていたことになる。

出土遺物は、早期後葉と中期後葉の土器片がある。いずれも覆土中～上層で出土した小片である。1・2は内外面ナデ調整の条痕文土器である。2は丸みをもつ尖底に近い部分である。3・4は加曽利E式後半期の破片である。破片の残りは早期後葉のほうが若干良いが、この点をもって時期を決定するのは難しい。この両時期は、定型的な柱穴構造をもたない竪穴住居が普通にみられるので、住居跡の可能性は充分考えられる。

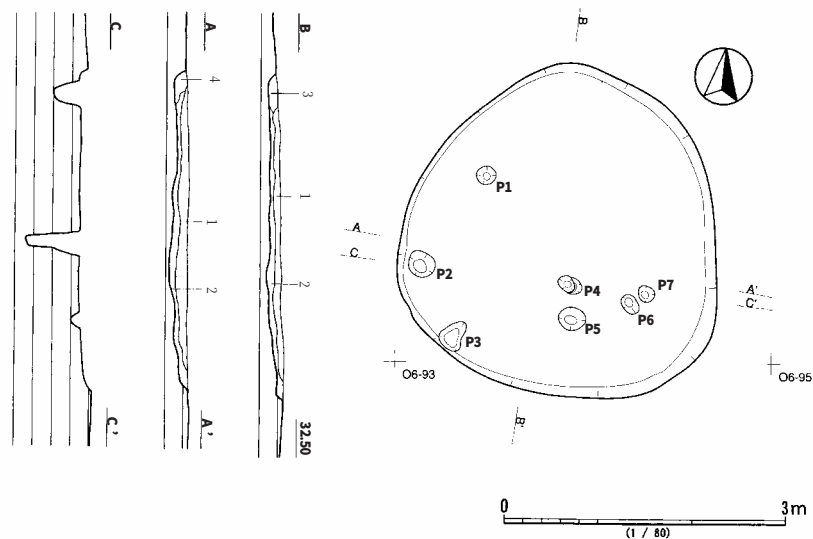
3号竪穴（第20図、図版7）

3号竪穴は、P7－81区他に所在する。竪穴平面形態はやや四辺が直線的な円形を呈する。規模は

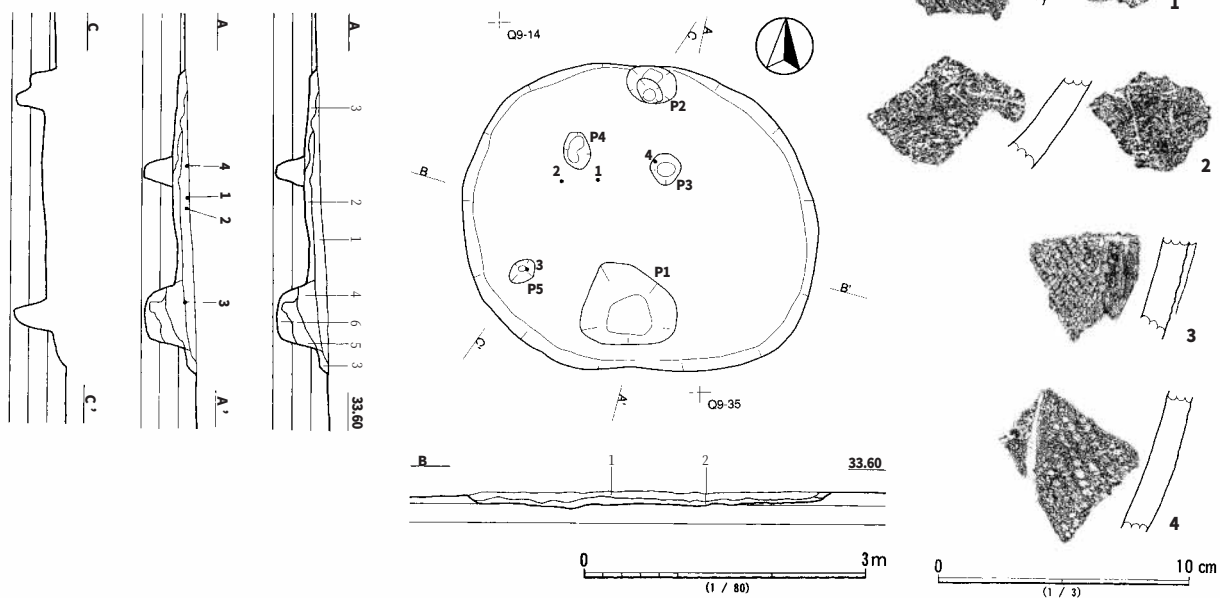


第18図 縄文時代遺構分布図

1号竖穴



2号竖穴



第19図 1・2号竖穴 遺構遺物

5.25×5.25m、床面積は20.39㎡を測る。確認面からの深さは0.24m、南北方向に主軸を設定した場合の方位は、N-7°-Eである。竖穴西側は風倒木痕によって破壊されている。底面のP1～P5は規則的に配置されたように見えるが、深さは不揃いである（P1=145、P2=48、P3=47、P4=21、P5=16cm）。1層は黒褐色土層、2層は暗黄褐色土層である。

出土遺物は、早期後葉と中期後葉の小片各1点である。1は内外面丁寧なナデ調整の条痕文土器である。2は加曽利E式後半期の破片である。住居跡の可能性があると、時期はいずれとも判断できない。

4号竪穴（第20図、図版7）

4号竪穴は、P9-45区他に所在する。竪穴平面形態は楕円形を呈し、規模は4.34×3.56m、床面積は10.38㎡を測る。確認面からの深さは0.15m、長軸方位は、N-81°-Wである。平坦な底面と炉の存在から竪穴住居跡の可能性が高い。炉は平面規模0.43×0.32mを測る。柱穴と判断できる掘り込みはない。覆土は7層に分層され、1層は焼土粒を含む黒褐色土層、2層は焼土を微量に含む暗褐色土層、3層は若干のロームブロックを含む暗褐色土層、4層はロームを含む暗褐色土層、5層は焼土、6層はロームブロックを含む褐色土層である。

出土遺物はなく、縄文土器の分布範囲からも外れているので遺構の時期は不明である。

5号竪穴（第20図、図版8）

5号竪穴は、N14-94区他に所在する。竪穴平面形態は不整な楕円形を呈し、全体規模は3.88×3.48m、確認面からの深さは0.21mを測る。底は平坦であるが、記録されたPitはすべて浅く、柱穴とは考えにくい。

縄文時代の竪穴住居跡の可能性のあるものとして調査したが、縄文土器の分布範囲から遠く離れていることもあり、肯定的な情報は得られなかった。

6号竪穴（第20図、図版8）

6号竪穴は、N15-46区他に所在する。竪穴は2.57×2.15mのやや不整な円形を呈する。底面積は3.78㎡を測る。確認面からの深さは0.2mである。近世以降と推定される溝跡と重複する。底面は凹凸が激しく人為的な掘り込みであるか疑問が残る。出土遺物はなく、縄文土器の分布域から遠く離れている。

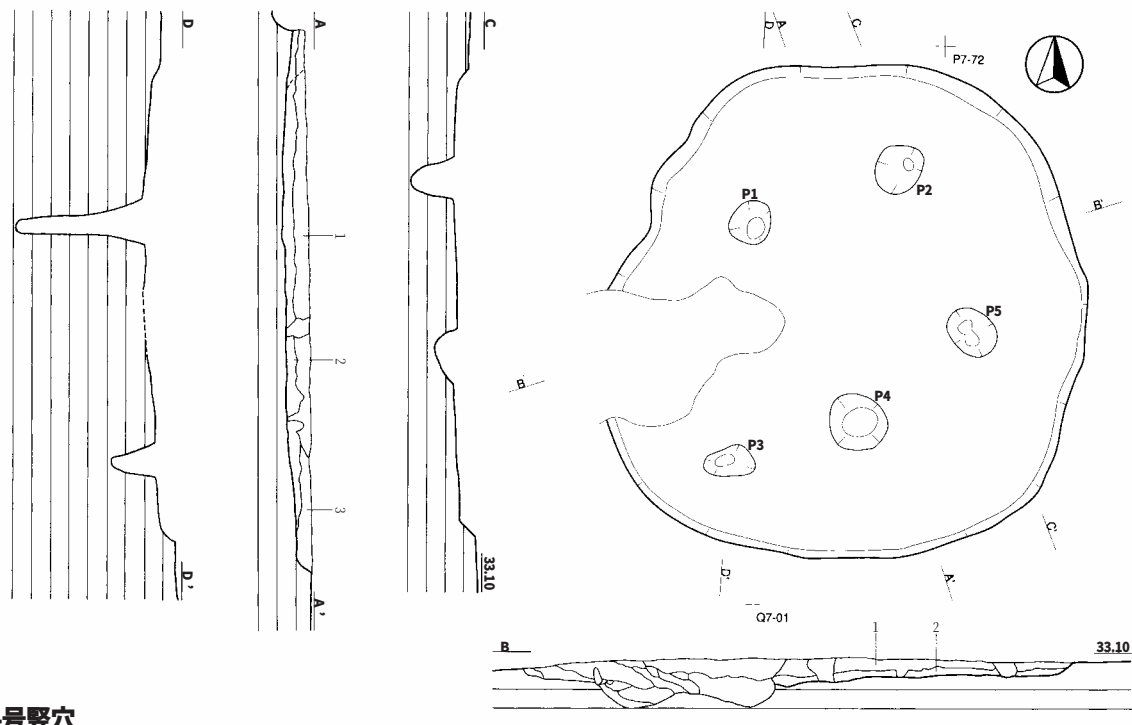
7号竪穴（第21・22図、図版8・83・86）

7号竪穴（住居跡）は、S5-34区他に所在する。竪穴平面形態は隅丸方形を呈し、規模は4.3×4.3m、床面積は15.65㎡を測る。確認面からの深さは0.36m、東西方向に主軸を設定した場合の方位は、N-19°-Eである。全体が、床面にいたるゴボウ耕作溝により攪乱を受けている。床面は平坦で、多くのPitをもつが、比較的深いP5・7・8・9の位置是不規則的で、柱構造を想定するのは難しい。炉はほぼ中央に位置し、平面規模は0.65×0.46mを測る。明らかな窪みをもち、下部に燃焼面を形成している。床面に近い部分は焼けておらず、囲い施設に使われた土器の一部が遺存していた（7・18）。形状が楕円形なので土器炉体をもつものではなかったことがわかる。覆土は、炉を含め6層に分層される。1層は黒褐色土層、2層は大小ロームブロック粒を若干含む暗褐色土層、3層はロームを多量に含む褐色土層、4層は混貝土層、5層は灰褐色灰層、6層は焼土である。貝層は炉を覆うように、床面上に直接形成されている。貝層は全量サンプリングし、分析の結果を第3章第1節に掲載した。

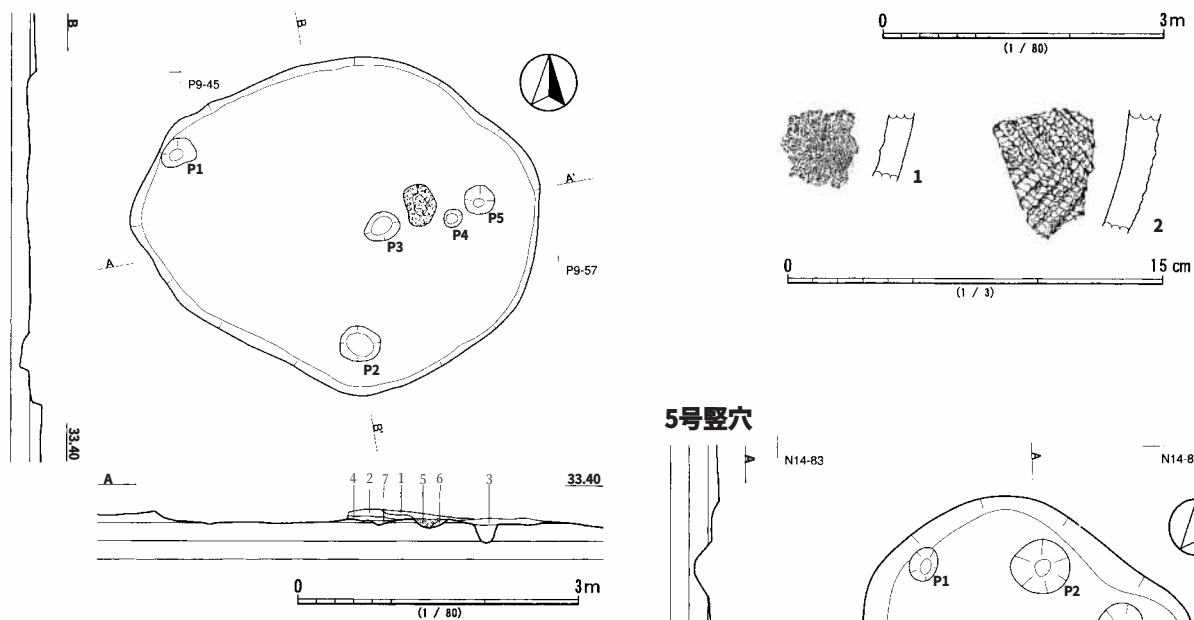
出土遺物は多く、中期後葉加曽利EⅢ式土器の良好な資料である点、また黒曜石と礫が集中的に廃棄されている点で注目される。土器は床面上から覆土中位の竪穴全体から出土している。7・18は炉囲いとして使われていた。1・2の大破片を含む床面付近で出土した破片の一部は、抜かれた炉囲いの一部であった可能性がある。

1・2は4単位の波状口縁の土器である。1は複隆起線とその間の無文帯によって、2は沈線によって渦巻文と弧線文を描く。11は太い隆帯による意匠充填系土器である。9・10・13・15・16・19

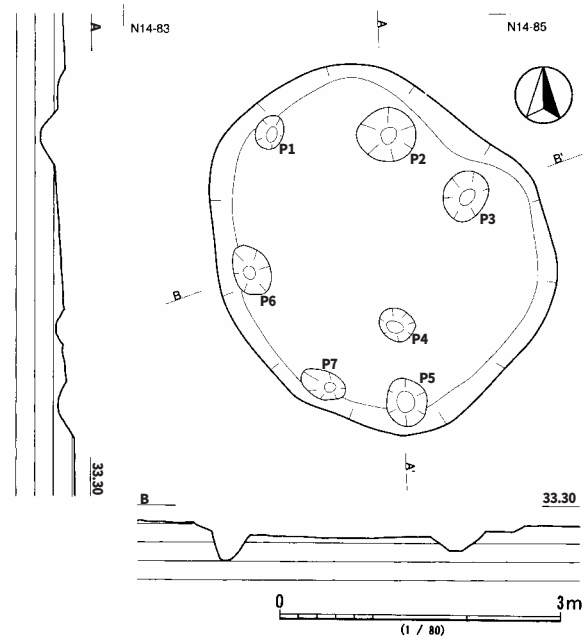
3号竖穴



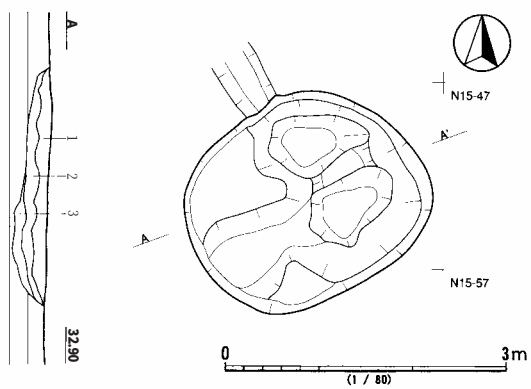
4号竖穴



5号竖穴

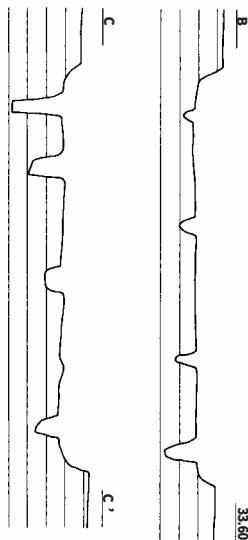


6号竖穴

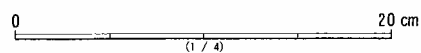
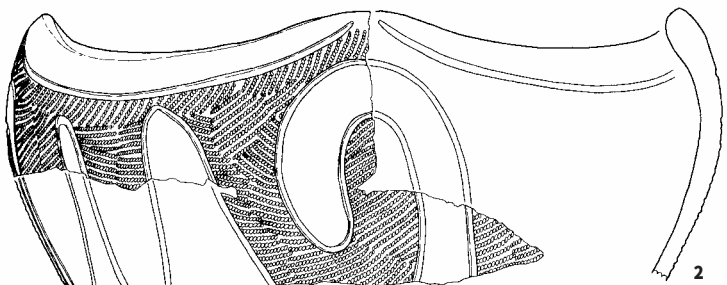
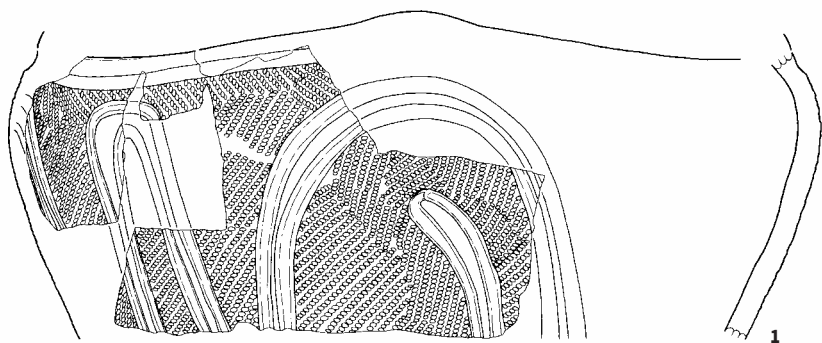
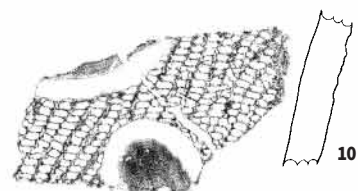
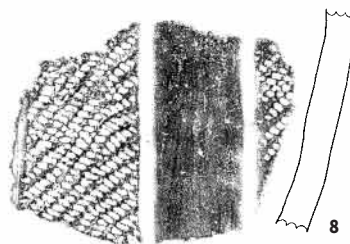
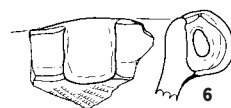
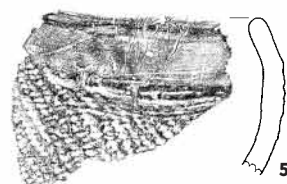
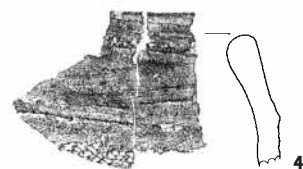
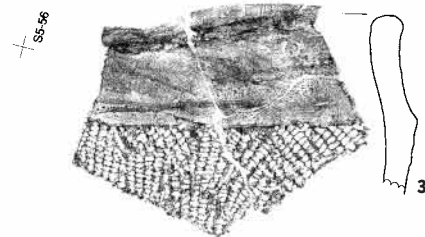
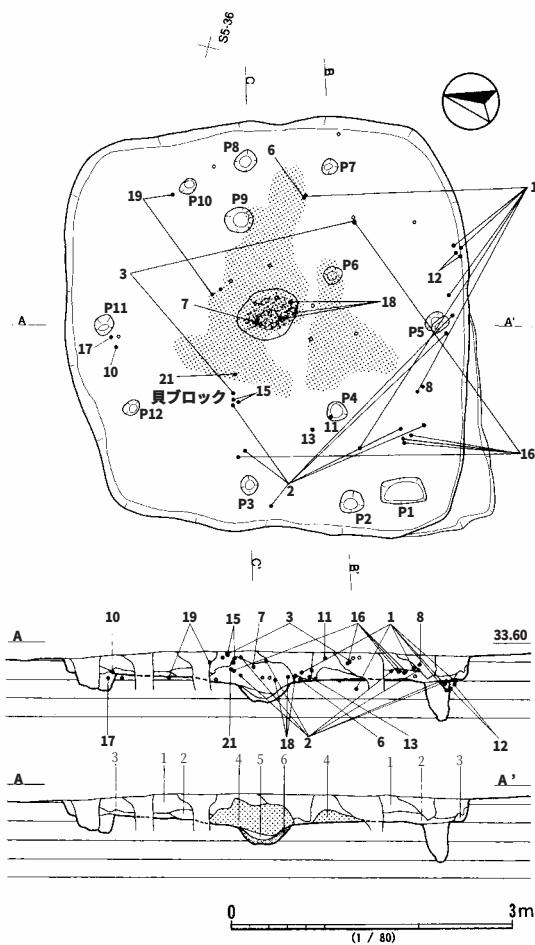


第20图 3・4・5・6号竖穴 遺構遺物

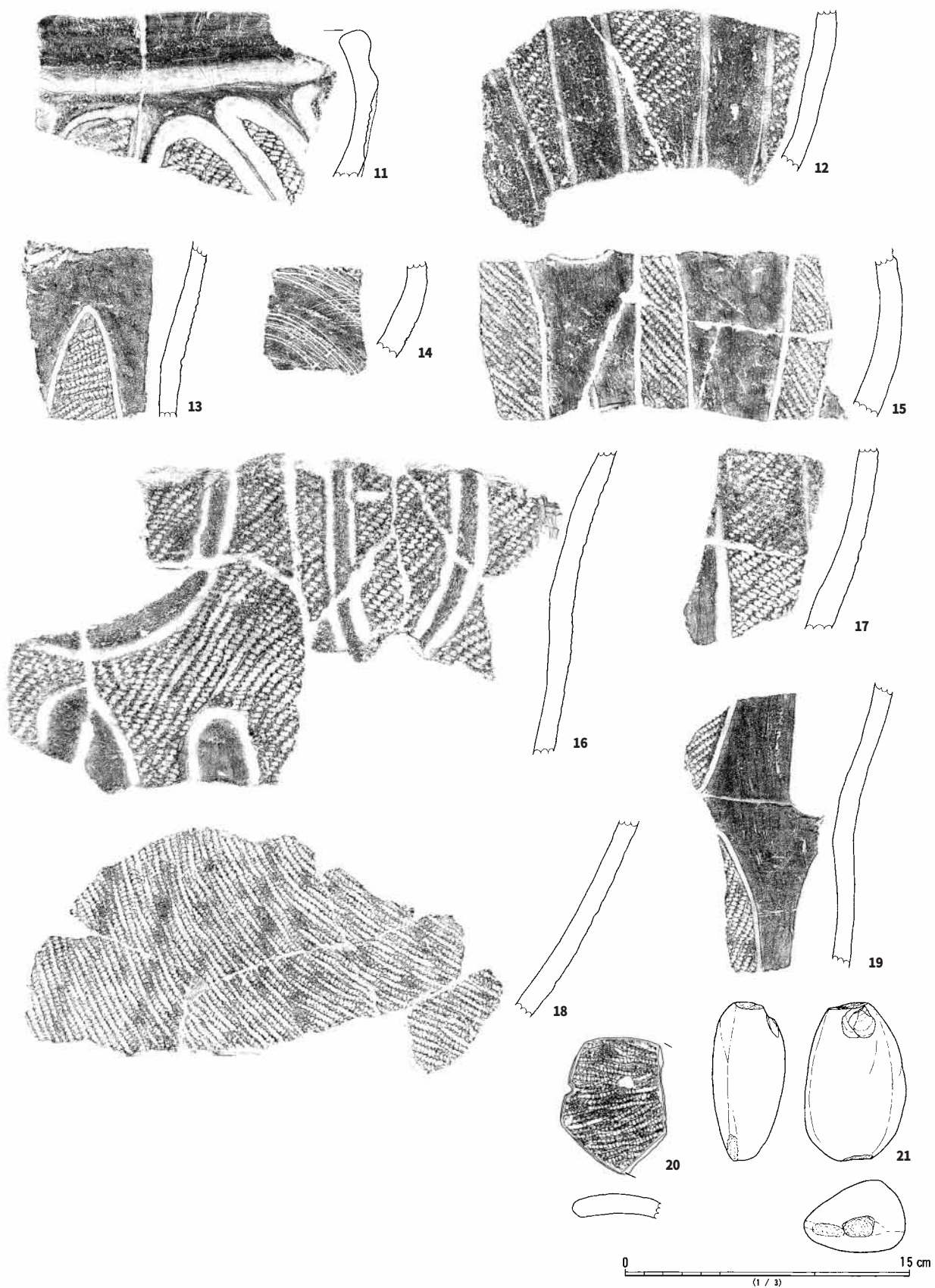
7号竖穴



○ 剥片



第21図 7号竖穴 遺構遺物



第22図 7号竖穴 遺物

は沈線系の意匠充填系土器である。7・8・12・15・17もこれらの土器群の口縁・胴部であろう。以上は深鉢で、意匠の単位文化が進んだ加曽利EⅢ式新段階の土器群であろう。3～6は微隆起線で区画された口縁部無文帯をもつ口縁部破片である。6には橋状把手が付く。14は1本引きの櫛描風沈線の、18は縄文のみの鉢と思われる。18の上部2/3には被熱による黒色化と灰の付着が認められるが、これは炉囲いとしての利用によるものであろう。縄文原体は単節RL10点、LR6点、無節L1点(6)である。20は土器片錘の半欠品で、縄文は反撚りと思われる。周囲の研磨は入念である。21は両端に敲打痕をもつ砂岩製の磨石類である。

このほかに、剥片類と礫がかなり多く出土している。剥片類は黒曜石が32点、チャート1点である。黒曜石は長さ2～3cmが多く、最大のもので33×19×11mmである。礫は大小55点である。また、非掲載となったが板状の軽石製品が1点ある。

8号竪穴(第23図、図版8・83・86)

8号竪穴(住居跡)は、Q6-94区他に所在する。竪穴平面形態は楕円形を呈し、規模は4.88×4.33m、床面積は15.37㎡を測る。確認面からの深さは0.28m、長軸方位はN-45°-Wである。全体に、床面にいたるゴボウ耕作溝による攪乱を受けている。柱穴の可能性のあるのはP2・3・11・12であり、他はごく浅い。P3とP11は長軸上に位置する。炉は中央から長軸上にやや偏った位置にあり、P11は出入口施設の可能性がある。炉は0.94×0.70mの若干の掘り込みをもつ。焼土の堆積または燃焼面はほぼ円形で、掘り込みの上端には及んでいないようである。なんらかの炉体をもっていた可能性がある。覆土は、炉を含め7層に分層される。1・2層は暗褐色土層、3層はイボキサゴを主体とする混土貝層、4層はロームを含む暗褐色土層、5層は焼土粒を含む黒褐色土層、6層は灰、焼土を多量に含む黒褐色土層、7層は灰層である。貝層は、ブロック状に竪穴中央部に点在し床面や炉の窪みに接している。貝層は全量サンプリングし、分析の結果を第3章第1節に掲載した。

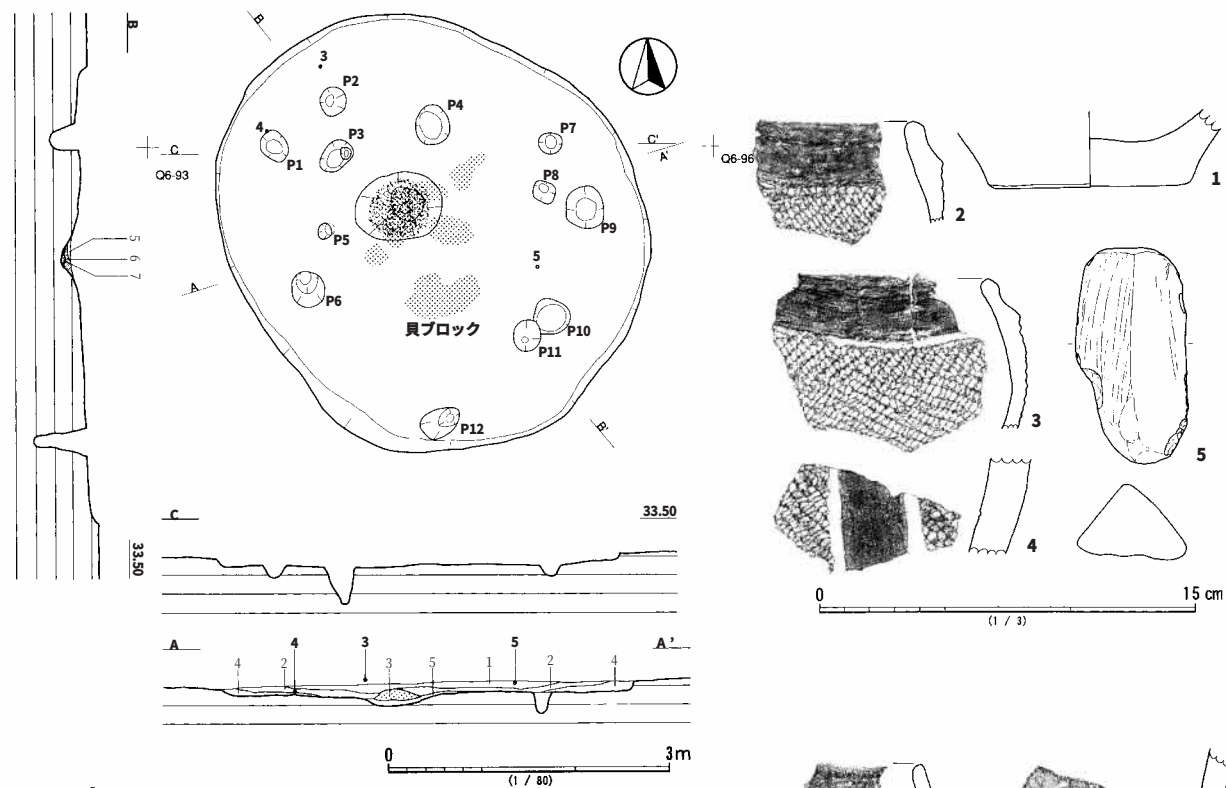
出土遺物は、少量の土器と石器である。2・3は微隆起線により区画された口縁部無文帯をもつ土器である。4は胴部片、1は底部片である。縄文原体は2・3・4とも単節LRである。掲載資料は小片4点のみであるが比較的残りはよく、遺構の時期を示す可能性が高い。土器は特徴が乏しいため、加曽利E式後半期としておきたい。5は輝石安山岩製の砥石である。三角柱状で、図で稜の左側は縦方向のやや粗い線状痕がみられる。稜の右面は図示していないが細かい横方向の線状痕が無数に付いている。図の下側の面は、稜の左面から連続した線状痕が認められ、2つの面の間は曲面となっている。この曲面以外は、いずれも平坦な砥面を形成している。他の2面も平滑であるが、線状痕は認められない。類例を検討していないが、流れ込みの疑いもある。

9号竪穴(第23図、図版8・83)

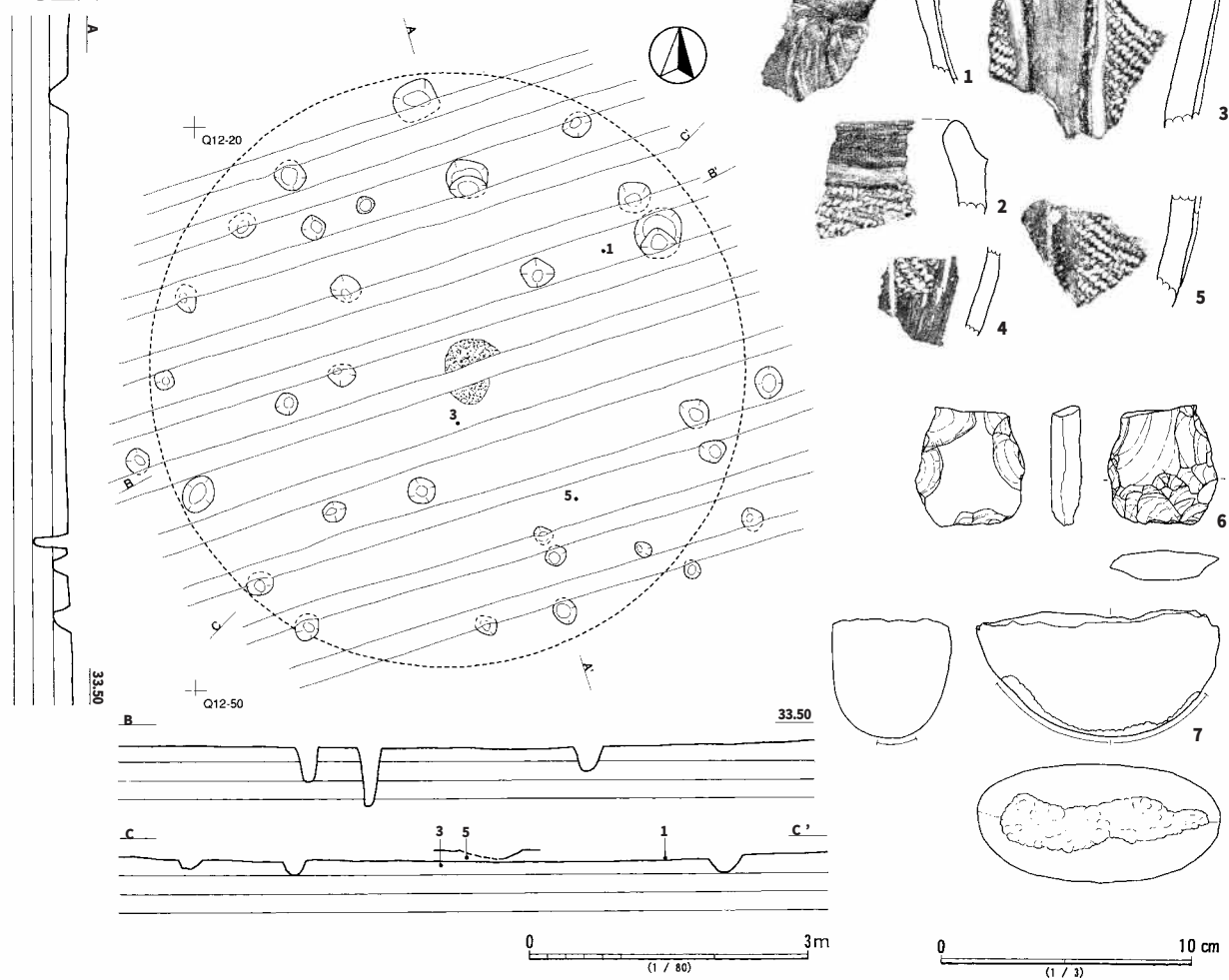
9号竪穴(住居跡)は、Q12-31区他に所在する。炉跡とみられる窪みと焼土ブロックの周囲を精査したところ、多数のPitを検出し、また、土器の分布も認められたことから竪穴住居跡と推定した。ゴボウ耕作溝により攪乱が著しい。竪穴の規模は不明であるが、Pitの分布から仮に図のように推定すると、径6.3m、面積は31.2㎡程度となる。

出土遺物は、土器と石器の破片少量である。1は薄手の土器で、微隆起線による区画と意匠をもつ。2・3・5は微隆起線、4は沈線による区画または意匠をもつ土器で、縄文原体はすべてLRである。小片のみであるが、時期的には揃っているものと思われる。6は分銅形打製石斧の半欠品である。表

8号竖穴



9号竖穴



第23図 8・9号竖穴 遺構遺物

面には素材の面が残っている。礫または磨製石斧の素材面を活かしている。7は磨石類の半欠品である。両側の平面はきわめて平滑だが人為的な磨面とする確証は認められなかった。側面は敲打の痕跡がある。竪穴は住居跡としてよいかどうか判断材料に乏しいが、遺構であるとすれば時期は中期後葉加曽利E後半期と推定される。

(2) 炉 穴

炉穴は、32群51基を検出した。ただし、このなかには炉穴としてよいかわからないものも含んでいる。分布は、調査区東側に限定され、南側に隣接する山田橋大塚台遺跡調査区に向かい密度を増す。炉穴の時期は、遺構外出土資料も含めた土器の内容から概ね子母口式～野島式期と考えられる。遺構自体がある程度時期を示すので、資料の乏しい遺構については時期の判断を省略する。

1号炉穴（第24・28図、図版35）

1号炉穴は、P3-35区他に所在する。全体規模は1.36×1.29m、確認面からの深さは0.3mを測る。火床は1か所であるが、掘り込みから2基重複している可能性が高い。覆土は1～4層に分層され、1層は暗褐色土層、2層は黒褐色土層、3層はロームを含む褐色土層、4層は焼土層である。Pitは炉穴の施設とは考えにくい。

出土遺物は底面に近い1層下面、1層中から出土している。早期後葉の条痕文系土器を9点掲載した。他に土器片若干と小礫3点がある。1・2は外面の口縁上端にC字状の爪形刺突文をもつ土器である。口唇は尖り、口縁部下端に段をもつ。それ以下の外面は強い擦痕を伴う調整、内面はごく弱くナデ調整される。ただし、内面の口縁近くは横方向にやや丁寧にナデ調整されている。4は口縁部に縦の微隆起線を貼り付けた土器と思われる。内外面とも条痕調整である。3・5・7は内面粗いナデないし粗い擦痕調整、外面擦痕調整の土器片で、1と同一個体の可能性がある。内面の調整は弱く、凹凸や粘土紐の接合痕が明瞭な部分もある。6・8・9は内外面擦痕調整である。これらは、子母口式土器で、遺構の時期を示すものとみられる。

2号炉穴（第24・28図、図版35）

2号炉穴は、P3-66区他に所在する。全体規模は、攪乱部分を図のように復元すると2.50（長軸）×2.13mとなり、確認面からの深さは最大で0.57mを測る。火床は、皿状の窪みをもつ2基が検出されている。覆土は1～10層に分層され、1～3・6・9層はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土層、4層はロームを含む褐色土層、5層は暗褐色土層、7層は焼土層、8層は焼土粒を含む褐色土層、10層は焼土粒を含む灰褐色土層である。

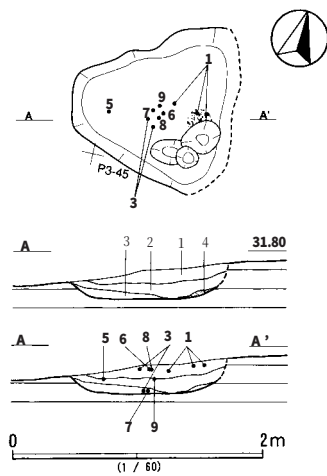
出土遺物は少ない。1は外面条痕調整、内面条痕後ナデ調整の土器小片である。内面には炭化物が付着している。他に土器片1点と被熱した破碎礫7点がある。

3号炉穴（第24・28図、図版35）

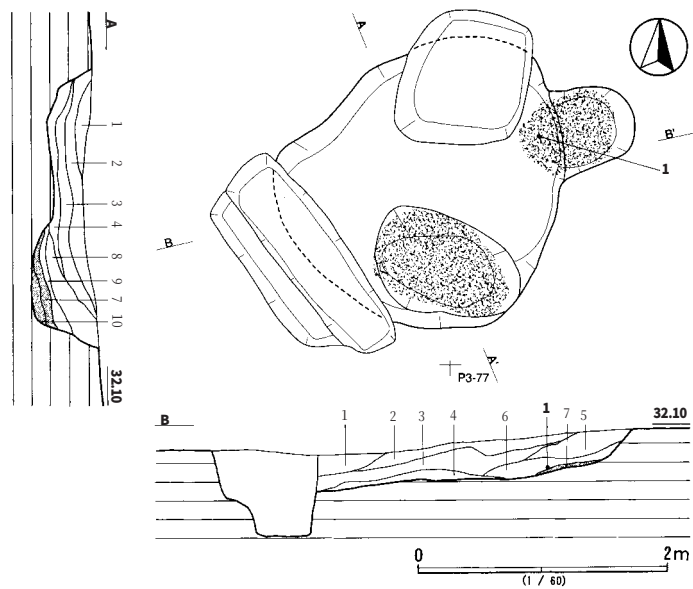
3号炉穴は、Q3-18区他に所在する。平面規模は2.01×0.88m、確認面からの深さは0.5mを測る。火床は、細長い掘り込みの両端に2基検出されている。覆土は1～4層に分層され、1～3層はローム粒・焼土粒を多少含む暗褐色土層、4層は焼土層である。

出土遺物は条痕文系土器大破片1点と、ごく小片数点である。1は焼土中で検出した。口縁部をわずかな段によって区画し、絡状体の押引によるとみられる短い沈線を施す土器である。口唇上・内面

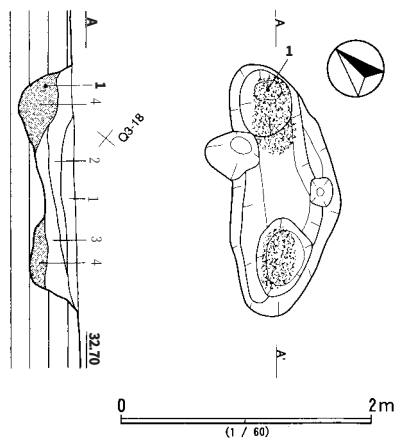
1号炉穴



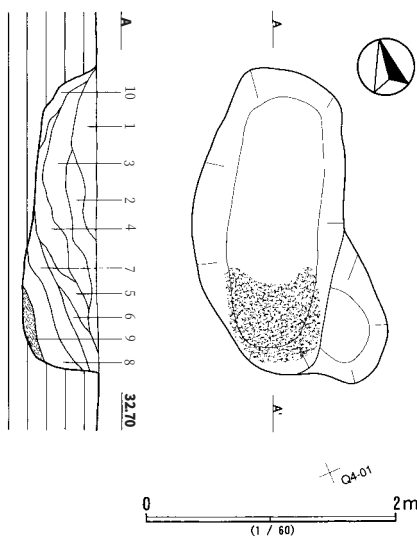
2号炉穴



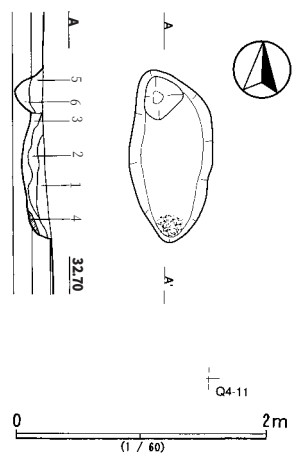
3号炉穴



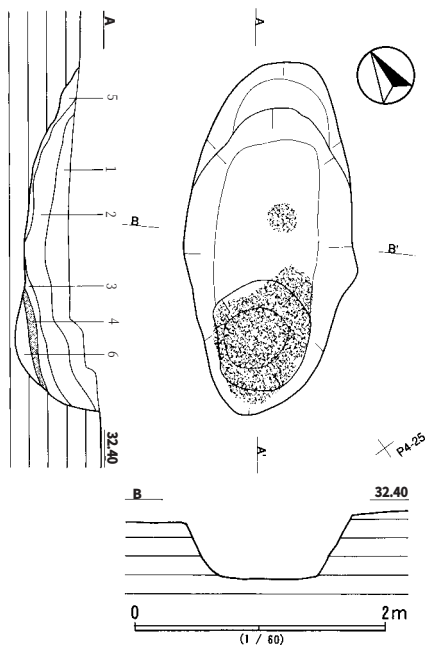
4号炉穴



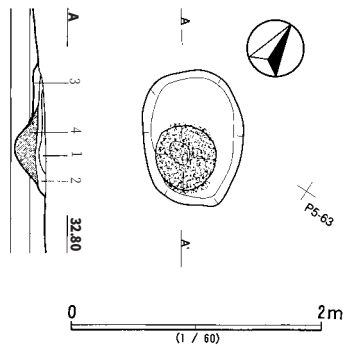
5号炉穴



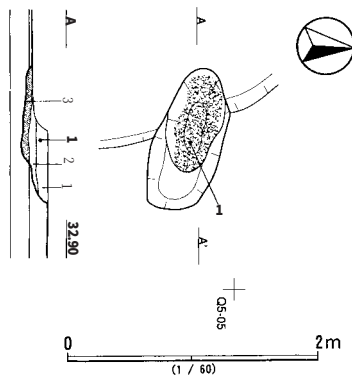
6号炉穴



7号炉穴



8号炉穴



第24图 1·2·3·4·5·6·7·8号炉穴 遺構

上端と外面は条痕調整後丁寧なナデ調整が施されている。口縁部の段もナデによって形成する。内面はやや粗いナデ調整である。子母口式土器であり、遺構の時期を示すものであろう。

4号炉穴（第24図、図版36）

4号炉穴は、P4-91区他に所在する。平面規模は2.44×1.21m、確認面からの深さは0.62mを測る。南東部側に突出部があるが、単独の炉穴と判断した。主軸方位はN-153°-Wである。覆土は1~9層に分層され、1・2・5層は大小ロームブロックを多量に含む褐色土層、3・4・6・7層は暗褐色土層、8層は焼土粒を含む暗褐色土層、9層は焼土層である。出土遺物はない。

5号炉穴（第24・28図、図版36）

5号炉穴は、Q4-00区他に所在する。平面規模は1.38×0.66m、確認面からの深さは0.18mを測る。単独の炉穴の底面近くのみが遺存したものとみられる。主軸方位はN-171°-Eである。覆土は1~6層に分層され、1~3層は焼土粒・ローム粒を含む暗褐色土層、4層は焼土層、5層は黒褐色土層、6層は褐色土層である。北側のPitは本遺構に伴うものではないだろう。

出土遺物は条痕文系土器2点と時期不明の縄文土器1点で、すべて小片である。1は全体に被熱による劣化が著しい。内面はナデ調整である。

6号炉穴（第24図、図版36）

6号炉穴は、P4-15区他に所在する。平面規模は2.83×1.38m、確認面からの深さは0.68mを測る。南端の明確な火床のほかに、中央部に小さな火床部が検出されている。北側に張り出す部分に伴う古い炉穴の痕跡の可能性があり、2基としておく。主軸方位はN-139°-Wである。覆土は1~6層に分層され、1層は若干の焼土粒を含む黒褐色土層、2層はロームブロックを部分的に含む黒褐色土層、3層は焼土粒を含む黒褐色土層、4層は焼土層、5層は褐色土層である。6層は被熱ローム層であろうか。出土遺物はない。

7号炉穴（第24・28図、図版36）

7号炉穴は、P5-62区他に所在する。平面規模は1.07×0.80m、確認面からの深さは0.25mを測る。炉穴の底近くが辛うじて遺存したものとみられる。主軸方位はN-145°-Eである。覆土は1~4層に分層され、1層は暗褐色土層、2・3層は焼土粒・ローム粒を含む褐色土層、4層は焼土層である。

出土遺物は摩滅の著しい土器片数点と小礫2点でいずれも混入品とみられる。1は加曽利B式土器の口縁部であろう。

8号炉穴（第24・28図、図版36）

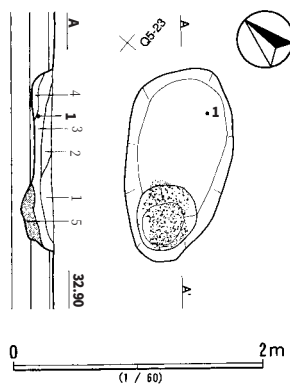
8号炉穴は、Q5-04区他に所在する。平面規模は1.16×0.56m、確認面からの深さは0.19mを測る。46号竪穴（弥生時代後期）に切られる。底面近くのみが遺存したものであろう。主軸方位はN-73°-Wである。覆土は1~3層に分層され、1層は暗褐色土層、2層は焼土粒を含む暗褐色土層、3層は焼土層である。

出土遺物は、条痕文系土器片1点のほか、弥生土器片数点の混入がある。1は内面上端から外面をナデ調整し、残りの内面は無調整に近い土器である。

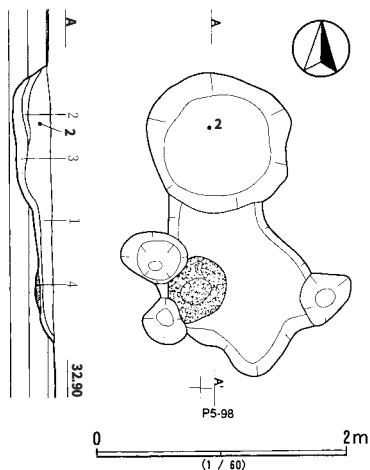
9号炉穴（第25・28図、図版36）

9号炉穴は、Q5-22区他に所在する。平面規模1.58×0.83m、確認面からの深さ0.35mを測る単独の炉穴である。主軸方位はN-121°-Wである。覆土は1~5層に分層され、1層は焼土粒を含む暗褐色

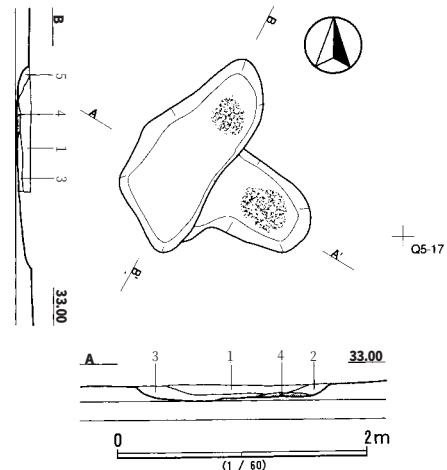
9号炉穴



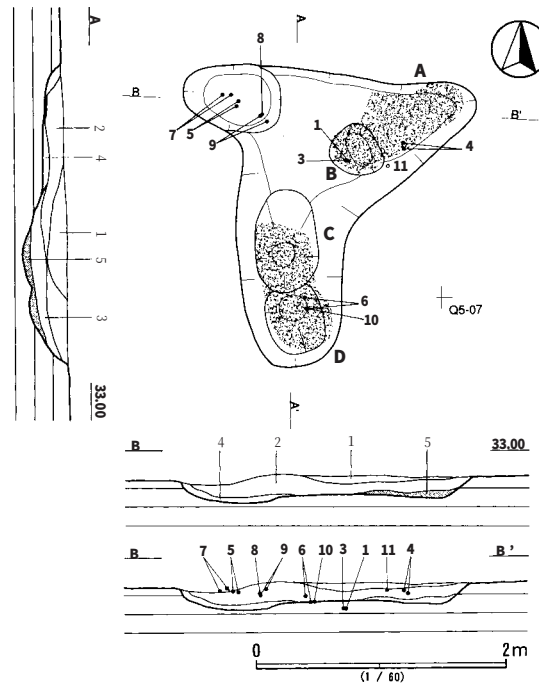
10号炉穴



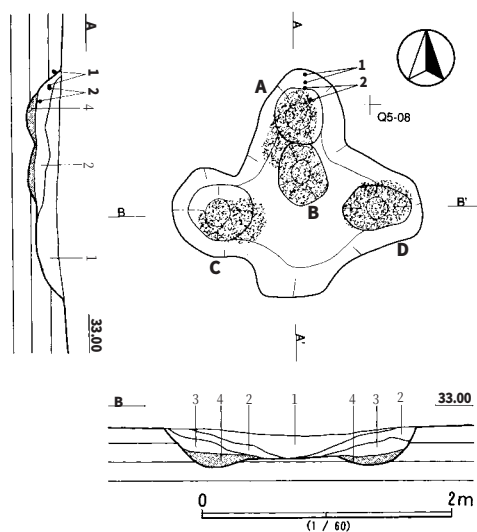
12号炉穴



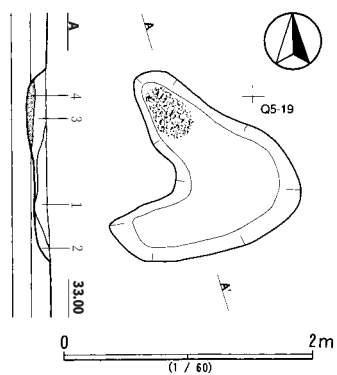
11号炉穴



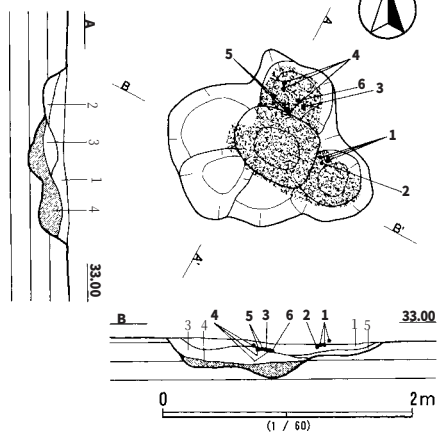
13号炉穴



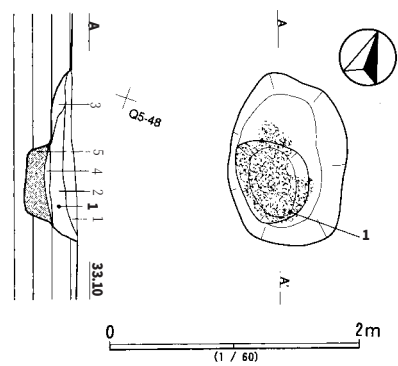
14号炉穴



15号炉穴



16号炉穴



第25图 9·10·11·12·13·14·15·16号炉穴 遺構

土層、2・3層はローム粒・大小ロームブロックを多量に含む暗褐色土層、4層はロームを多量に含む褐色土層、5層は焼土層である。

出土遺物は、図示したものがすべてである。1は内外面粗い擦痕調整の土器である。外面は縦方向に調整し、調整の単位が明瞭である。内面は横方向に調整する。2は内外面弱い擦痕調整ないしナデ調整で、内面に粘土紐の接合痕が残る。

10号炉穴（第25・28図、図版36）

10号炉穴は、P5－88区他に所在する。全体規模は2.45×0.81m、北側土坑状部分をのぞく確認面からの深さは0.21mを測る。火床は1か所である。覆土は1～5層に分層され、1層は黒褐色土層、2～4層はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土層、5層は焼土層である。覆土堆積状況からは、北側土坑状部分も本遺構に伴うようにみえる。あるいは、炉穴が大きく壊されている可能性も棄てきれない。

出土遺物は図示した2点の条痕文系土器片と、時期不明の土器ごく小片2点である。1・2は内外面弱い擦痕調整ないしナデ調整の土器である。

11号炉穴（第25・29図、図版36・83）

11炉穴は、P5－96区他に所在する。全体規模は2.37×2.33m、土坑中央部で確認面からの深さ0.11m、最深部で0.33mを測る。火床はA～Dの4か所認められる。西側への張り出しは火床Bの足場であろう。覆土は1～5層に分層され、1層は暗褐色土層、2層は焼土粒を含む暗褐色土層、3層は焼土粒を多量に含む暗褐色土層、4層は暗褐色土層、5層は焼土層である。掘り込みの新旧は確認できない。

出土遺物は豊富で、条痕文系土器10点と石皿片1点を図示した。1・2は同一個体である。内外面擦痕調整され、口縁は小波状を呈する。3・4は内外面擦痕調整の土器である。3の内面は強く器表面を抉るような強い調整が行われている。4の内面は弱い調整である。5・7は外面が条痕調整と擦痕調整、内面は無調整に近い土器であり、8・9も含めて同一個体の可能性がある。10は内外面ナデ調整で、外面は丁寧である。11は両面に磨面をもつ輝石安山岩製の石皿片である。図で左側の破面には磨面から連続する摩滅が認められる。破損後にも使用された可能性がある。土器は意匠文をもつものがないが、概ね子母口式土器に伴うものであると考えられる。遺構の時期を示すものであろう。

12号炉穴（第25図、図版37）

12号炉穴は、Q5－06区他に所在する。全体規模は1.68×1.54m、確認面からの深さは0.14mを測る。方向を90度振って火床部を付け足したのと考えられる。覆土は1～5層に分層され、1層は黒褐色土層、2・5層は暗褐色土層、3層はローム粒を多量に含む暗褐色土層、4層は焼土層である。重複関係は確認できない。

出土遺物は、約60点の土器小片がすべて条痕文系土器である。図示できるものはないが、胎土に繊維が少なく、条痕調整の発達しないものである。

13号炉穴（第25・30図、図版37）

13号炉穴は、Q5－07区他に所在する。全体規模は1.81×1.99m、確認面からの深さは0.33mを測る。火床は4か所検出されている。覆土は1～4層に分層され、1層は暗褐色土層、2層は焼土粒を含む暗褐色土層、3層は焼土粒を多量に含む暗褐色土層、4層は焼土層である。重複関係は確認できない。

出土遺物は、北側に張り出した火床Aの上面付近にまとまっていた。条痕文系土器の大破片数点あり、図示した以外は8点の摩滅土器小片のみである。1・2は内外面擦痕調整の後、外面のみナデ調

整している。口縁は小波状を呈する。

14号炉穴（第25図、図版37）

14号炉穴は、Q5－18区他に所在する。全体規模は1.63×1.55m、確認面からの深さは0.25mを測る。掘り込みの形状から2基の重複と推定したが、火床は1か所のみである。覆土は1～4層に分層され、1層は暗褐色土層、2層はロームを含む褐色土層、3層は焼土粒を含む暗褐色土層、4層は焼土層である。重複関係は確認できない。出土遺物はない。

15号炉穴（第25・30図、図版37）

15号炉穴は、Q5－36区他に所在する。全体規模は1.71×1.42m、確認面からの深さは0.35mを測る。炉は3つの火床が重複しているとみて3基としておいた。覆土は1～5層に分層され、1・2層は焼土粒を含む暗灰褐色土層、3層は焼土粒を多量に含む暗褐色土層、4層は焼土層、5層は若干の焼土粒を含む灰褐色土層である。

出土遺物は、覆土3層の上面にまとまっていた。図示した以外は条痕文系土器10点程度と縄文を施文した前期の繊維土器1点である。1～6は内外面条痕調整の土器である。口縁は小波状を呈し、口唇は摘んだように尖る。6内面の底近くは擦痕調整である。3は内外面ナデ調整だが、内面は粗く先に行われた条痕調整の痕跡が残る。

16号炉穴（第25・29図、図版37）

16号炉穴は、Q5－48区他に所在する。平面規模は1.37×0.93m、確認面からの深さは0.44mを測る。小さめの掘り込み底面からさらに窪んだ火床を1か所検出した。覆土は1～5層に分層され、1層は暗褐色土層、2層は焼土粒を含む暗褐色土層、3層は褐色土層、4層は焼土粒を多量に含む暗褐色土層、5層は焼土層である。

出土遺物は内外面ナデ調整の条痕文系土器2点である。うち1点を図示した。

17号炉穴（第26・29図、図版37）

17号炉穴は、Q6－41区他に所在する。平面規模2.03×1.21m、確認面からの深さ0.32mを測る単独の炉穴である。覆土は1～5層に分層され、1層は暗褐色土層、2・3層はロームを多量に含む暗褐色土層、4層はローム粒・焼土粒を多量に含む暗褐色土層、5層は焼土層である。

出土遺物は、図示した2点も併せて条痕文系土器の小片13点と、破碎礫1点である。1・2は内外面に条痕調整を明瞭に残す土器である。1の口唇は図の印象よりも尖頭に近い。

18号炉穴（第26図、図版37）

18号炉穴は、R5－17区他に所在する。平面規模は1.57×0.83m、確認面からの深さは0.21mを測る。ただし、23・24号竪穴（弥生時代後期）と重複しているため、これが本来の規模を示すものではない。火床は1か所確認できた。覆土は1～4層に分層され、1層はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土層、2層は焼土粒を含む暗褐色土層、3層は焼土層、4層は褐色土層である。

出土遺物は摩滅の著しい繊維土器小片2点のみであり、図示しなかった。

19号炉穴（第26・29図、図版37）

19号炉穴は、R4－59区他に所在する。平面規模は1.22×1.03m、確認面からの深さは0.17mを測る。火床は1か所確認できた。土層は1～4層に分層され、1層は焼土層、2層は黒褐色土層、3層は焼土粒を含む暗褐色土層、4層はロームを含む褐色土層である。炉穴群の分布域にあることから炉穴として

抽出したが、判断材料に乏しい。

出土遺物は撚糸文系土器1点、条痕文系土器1点、弥生土器2点でいずれも小片であり、その点でも炉穴であるとは断定できない。1は間隔のあいた撚糸文が施される。2は内外面条痕調整である。

20号炉穴（第26・29図、図版38）

20号炉穴は、R5-60区他に所在する。平面規模は1.45×1.04m、確認面からの深さは0.12mを測る。火床は1か所検出されている。覆土は1～5層に分層され、1層は黒褐色土層、2・5層は焼土層、3層は暗褐色土層、4層は褐色土層である。土層断面によると火床面は2面あり、反復利用の可能性がある。

出土遺物には1の条痕文系土器小片のほか、弥生土器小片と軽石小片各1点がある。炉穴としてよいか疑問が残る。

21号炉穴（第26・31図、図版38）

21号炉穴は、R5-57区他に所在する。平面規模は0.61×0.54m、確認面からの深さは0.24mを測る。覆土は1～2層に分層され、1層はローム粒・焼土粒を含む暗褐色土層、2層は焼土層である。形状からは炉穴と断定するのは無理がある。しかし、火床付近から出土した条痕文系土器の大破片の存在から、火床付近のみが遺存した炉穴の可能性が高いものとしておく。

1は微隆起線による縦位区画と斜位の梯子状文によって意匠を構成する。下端は明確な区画をもたず、幅広の文様構成となっている。調整は内外面とも条痕調整が明瞭である。2は内外面ナデ調整の口縁部破片である。口唇上には3ないし4か所の浅い刻みがある。この部分を波頂部とする緩やかな波状口縁を呈するものであろうか。

22号炉穴（第26・31図、図版38）

22号炉穴は、S4-19区他に所在する。全体規模は2.88×1.72m、確認面からの深さは最深部で0.45mを測る。火床はA～Dの4か所検出されている。全体の新旧関係は明らかではないが、A・Bの掘り込みはCの覆土を切っている。覆土は1～9層に分層され、1層は局部的に焼土粒・若干のローム粒を含む黒褐色土層、2・9層は暗褐色土層、3・5層はロームを含む褐色土層、4層は黒褐色土層、6層は焼土粒を含む暗褐色土層、7層は焼土層、8層は焼土粒を多量に含む褐色土層である。

出土遺物は豊富である。1は内外面条痕調整の土器で、口唇上端は平坦である。2・4～8・10は内外面ナデの土器である。9は条痕調整後、外面はナデ調整している。11は内面擦痕ないしナデ調整、外面は擦痕調整である。以上は条痕文土器である。3は時期不明の繊維土器である。

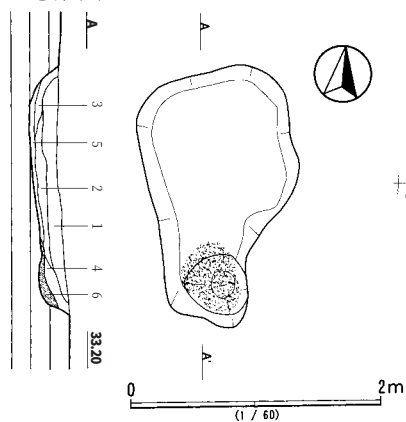
なお、これ以外に条痕文系土器破片約60点と、磨石類1点、砥石1点がある。磨石類は2面の中央に敲打痕をもち、その横に平坦に平滑化した磨面を合計4か所形成している。砥石は扁平で、平坦な2面が砥面として使われているようである。

23号炉穴（第26図）

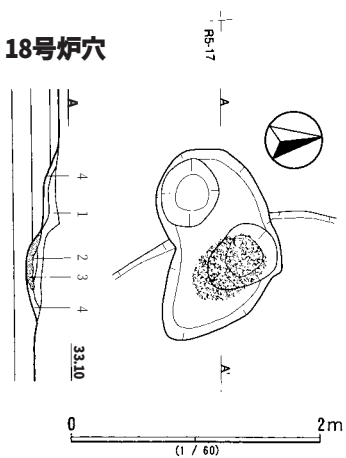
23号炉穴は、S5-61区他に所在する。10号竪穴（弥生時代後期）壁面から検出された。平面規模は2.08×0.87m、確認面からの深さは0.76mを測る。火床は1か所検出されている。北端のPitは10号竪穴に付属する。覆土は1～4層に分層され、1層は暗褐色土層、2層は焼土粒を含む暗褐色土層、3層はロームを多量に含む褐色土層、4層は焼土層である。

出土遺物は、図示しなかった89×60mm程度の礫1点のみである。

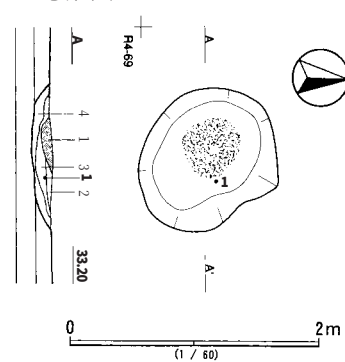
17号炉穴



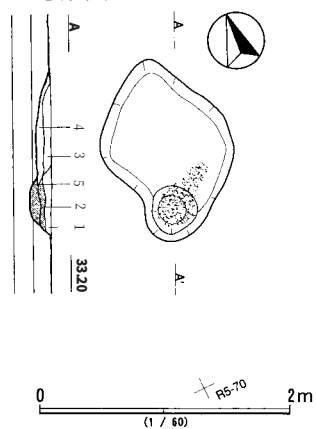
18号炉穴



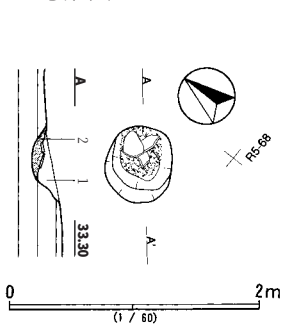
19号炉穴



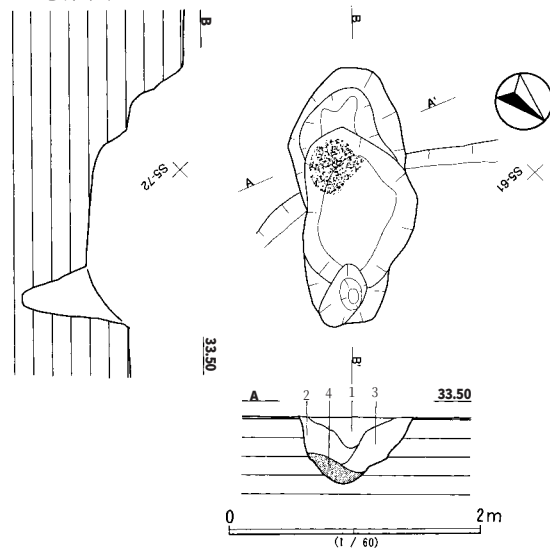
20号炉穴



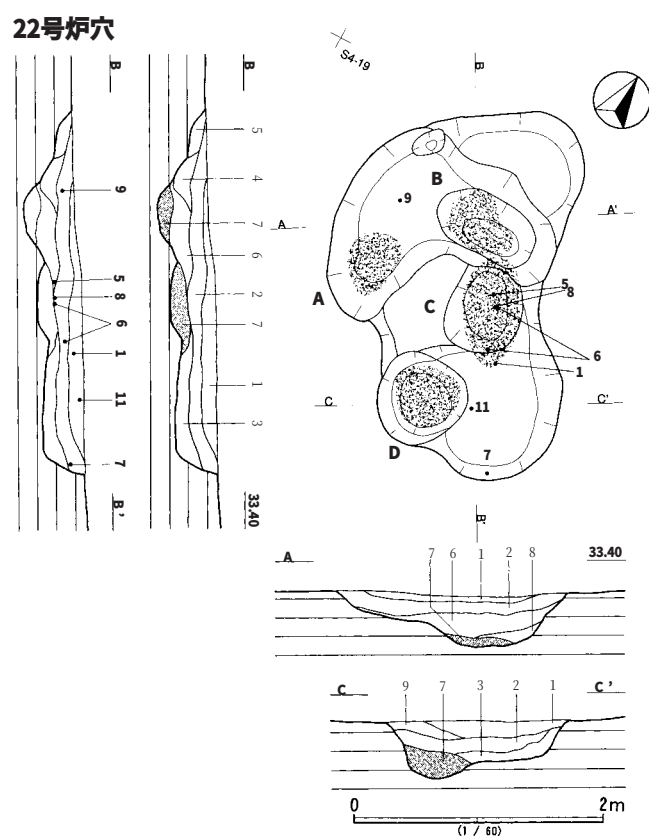
21号炉穴



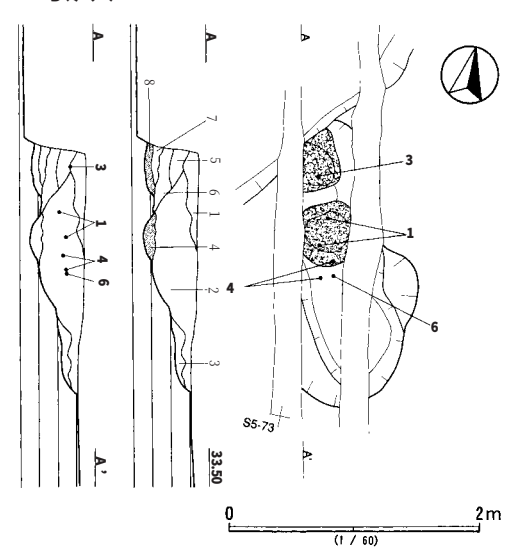
23号炉穴



22号炉穴



24号炉穴



第26图 17·18·19·20·21·22·23·24号炉穴 遺構

24号炉穴（第26・31図、図版38）

24号炉穴は、S5－63区他に所在する。10号竪穴（弥生時代後期）壁面から検出された。ゴボウ耕作溝で両端が破壊されている。平面規模は遺存部で2.10×0.93m、確認面からの深さは0.45mを測る。火床は2か所あり、土層断面によるならば、南側が新しい。覆土は1～8層に分層され、1層は灰褐色土層（攪乱）、2・5層は暗褐色土層、3層は褐色土層、4層は焼土層、6層は焼土粒・小ブロックを含む暗褐色土層、7層は焼土粒を多量に含む暗褐色土層、8層は焼土層である。

出土遺物は、南側の覆土上層に多い。1は口唇上にハイガイの腹縁圧痕による刻みを施文した波状口縁の土器である。条痕調整の後、外面はナデ調整している。3・5も条痕調整され、3の内面はナデ調整される。4・6は内外面ナデ調整される。2は全面摩滅している。7・8は撚糸文系土器で、遺構には関連しない。ほかに条痕文系土器小片20点、破碎礫小片2点に、撚糸文土器・加曽利E式土器の小片が混じっていた。

25号炉穴（第27図、図版38）

25号炉穴は、S5－72区他に所在する。平面規模は1.59×0.80mを測る。確認面からの深さは0.28mである。覆土は1～5層に分層され、1層は黒褐色土層、2層は若干の焼土粒を含む暗褐色土層、3層はローム粒・焼土粒・炭化粒を多量に含む褐色土層、4層は焼土層、5層は被熱ロームである。炉穴としてよいか疑わしい。

出土遺物は撚糸文系土器(?)と加曽利E式土器の小片と礫1点のみである。

26号炉穴（第27図、図版38）

26号炉穴は、S5－18区他に所在する。平面規模は1.51×0.73m、確認面からの深さは0.15mを測る。覆土は1～3層に分層され、1層は焼土粒を含む暗褐色土層、2層は焼土層、3層はロームを多量に含む褐色土層である。炉穴としてよいか疑わしい。

数10点の土器が取り上げられているが、耕作によるとみられる傷や著しく摩滅した縄文土器、弥生土器、土師器等であり、この点からも炉穴とするには躊躇せざるを得ない。

27号炉穴（第27図、図版38）

27号炉穴は、Q6－93区他に所在する。平面形態は、円形を呈し、平面規模は0.68×0.66m、確認面からの深さは0.14mを測る。覆土は1～4層に分層され、1層は黒褐色土層、2層は暗褐色土層、3層は焼土粒を含む黒褐色土層、4層は焼土層である。炉穴としてよいか疑わしい。

出土遺物は摩滅した条痕文系土器1点のみである。

28号炉穴（第27・32図、図版38）

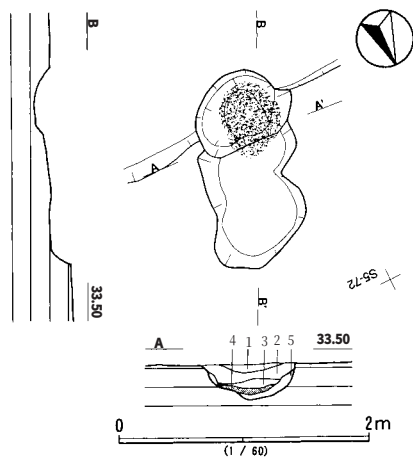
28号炉穴は、R6－51区他に所在する。平面規模は0.99×0.95m、確認面からの深さは0.23mを測る。中央部分はゴボウ耕作溝により破壊されている。覆土は1～4層に分層され、1層はロームを含む褐色土層、2層は焼土層、3層はローム粒を含む暗褐色土層、4層はロームブロックを含む褐色土層である。炉穴としてよいか疑わしい。

出土遺物は図示した1と摩滅の著しい土器小片数点のみである。1は内外面条痕調整される。外面に炭化物が付着しており、比較的残りは良い。

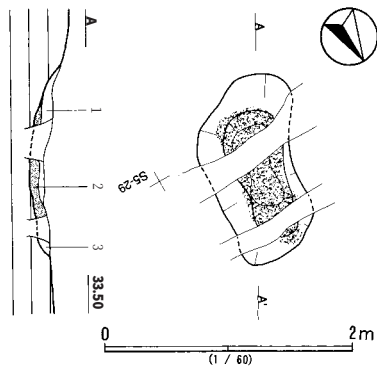
29号炉穴（第27・32図、図版39）

29号炉穴は、N6－80区他に所在する。平面規模は2.58×1.52m、確認面からの深さは0.70mと今回

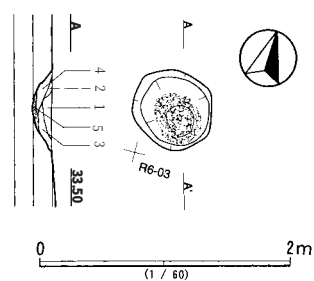
25号炉穴



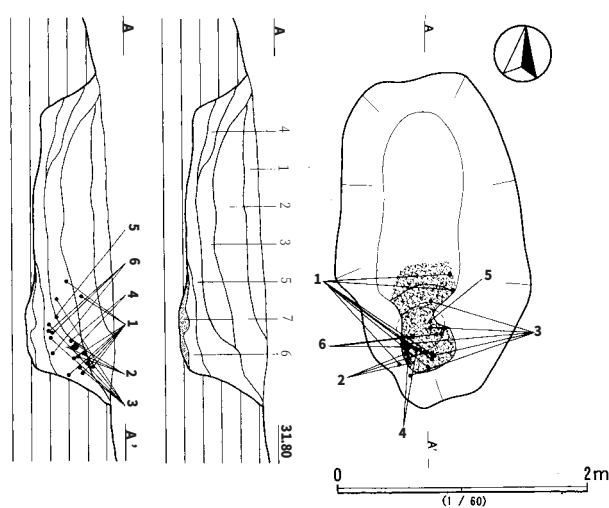
26号炉穴



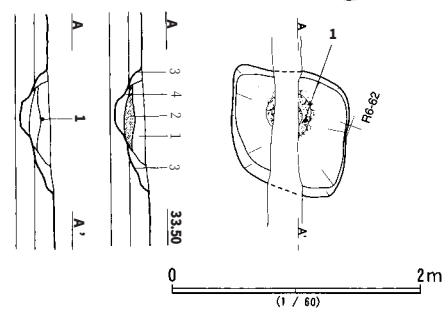
27号炉穴



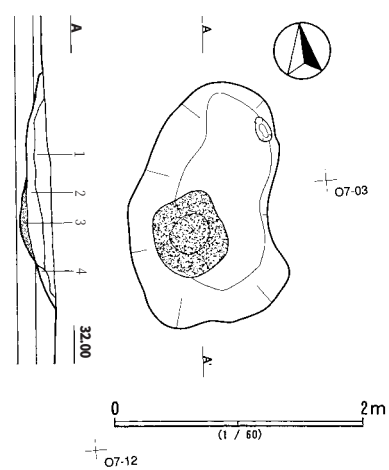
29号炉穴



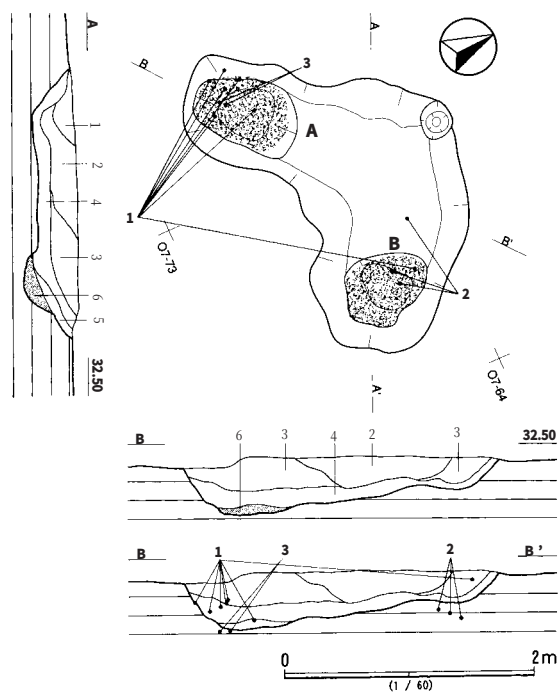
28号炉穴



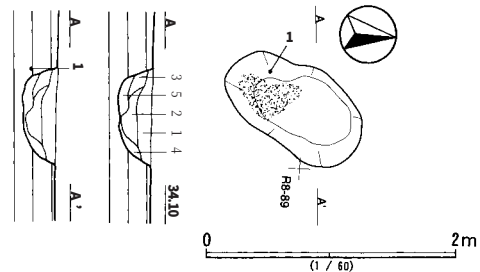
30号炉穴



31号炉穴

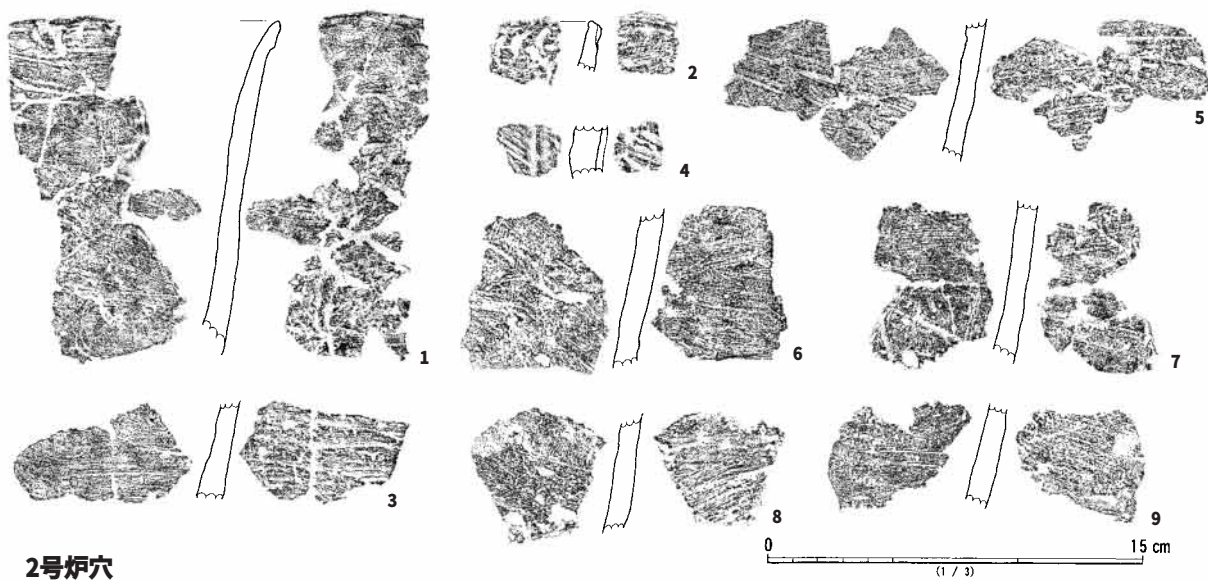


32号炉穴

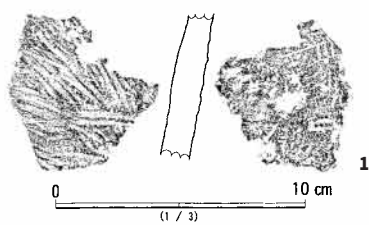


第27图 25·26·27·28·29·30·31·32号炉穴 遺構

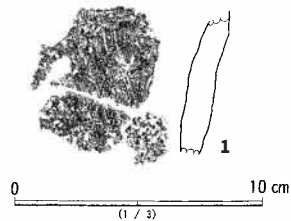
1号炉穴



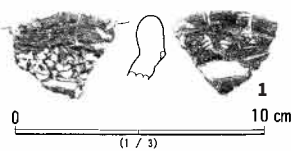
2号炉穴



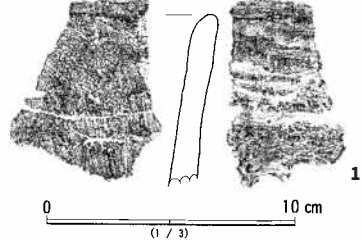
5号炉穴



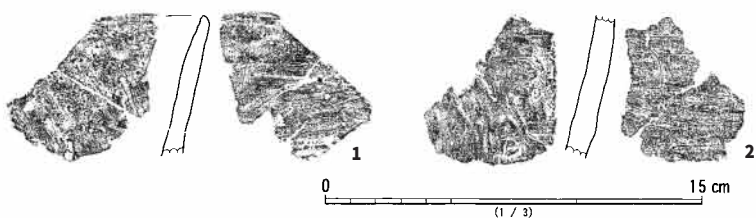
7号炉穴



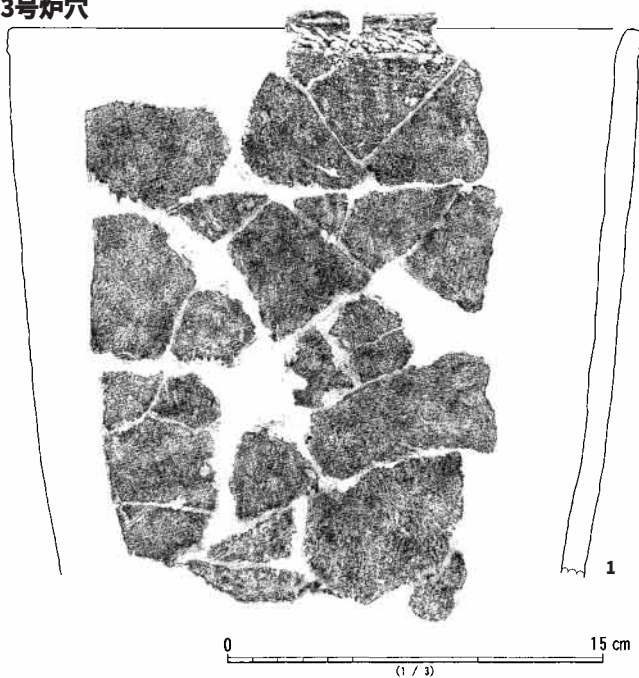
8号炉穴



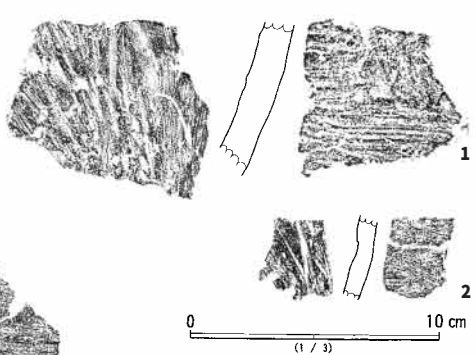
10号炉穴



3号炉穴



9号炉穴

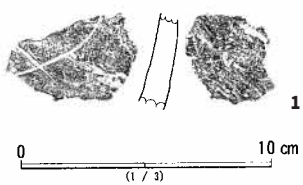


第28图 1·2·3·5·7·8·9·10号炉穴 遗物

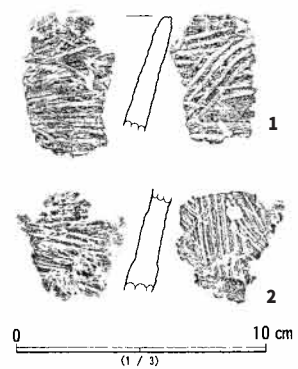
11号炉穴



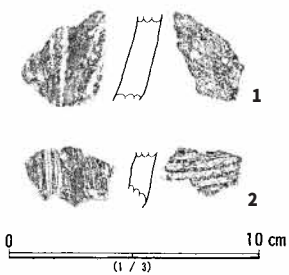
16号炉穴



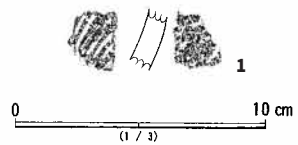
17号炉穴



19号炉穴

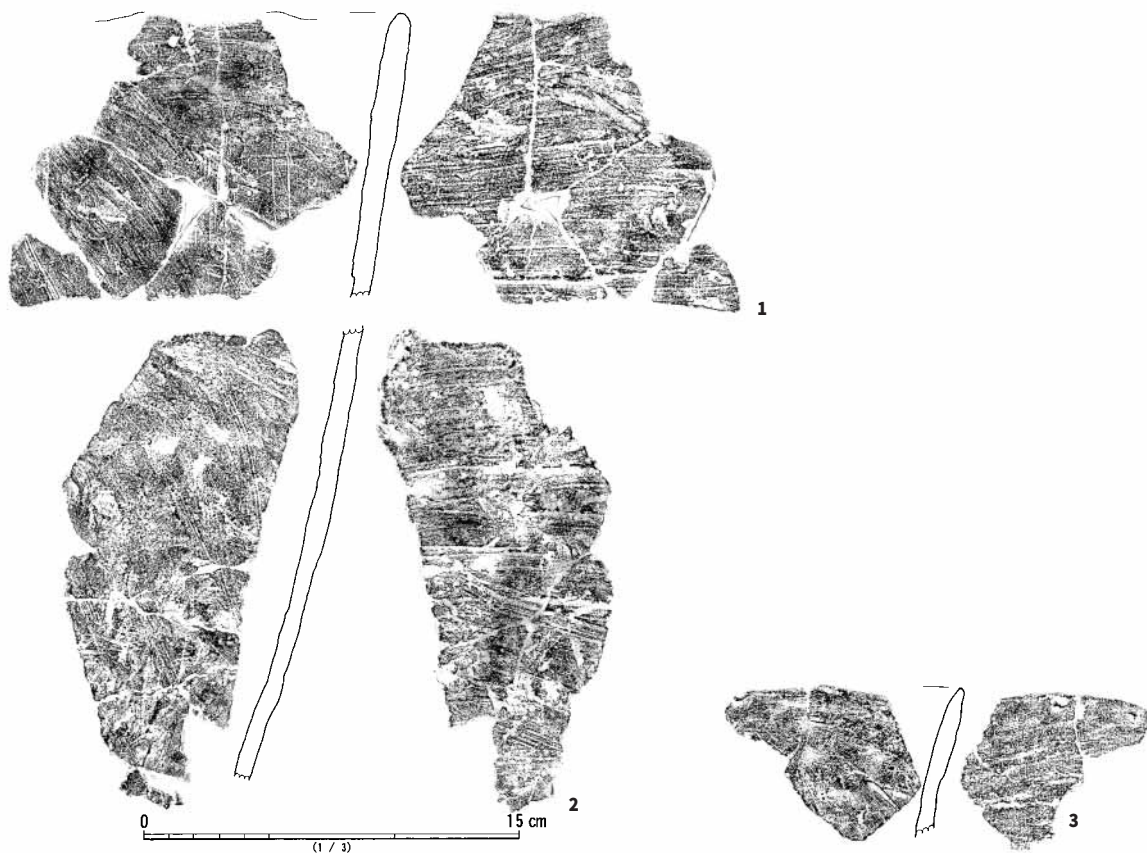


20号炉穴

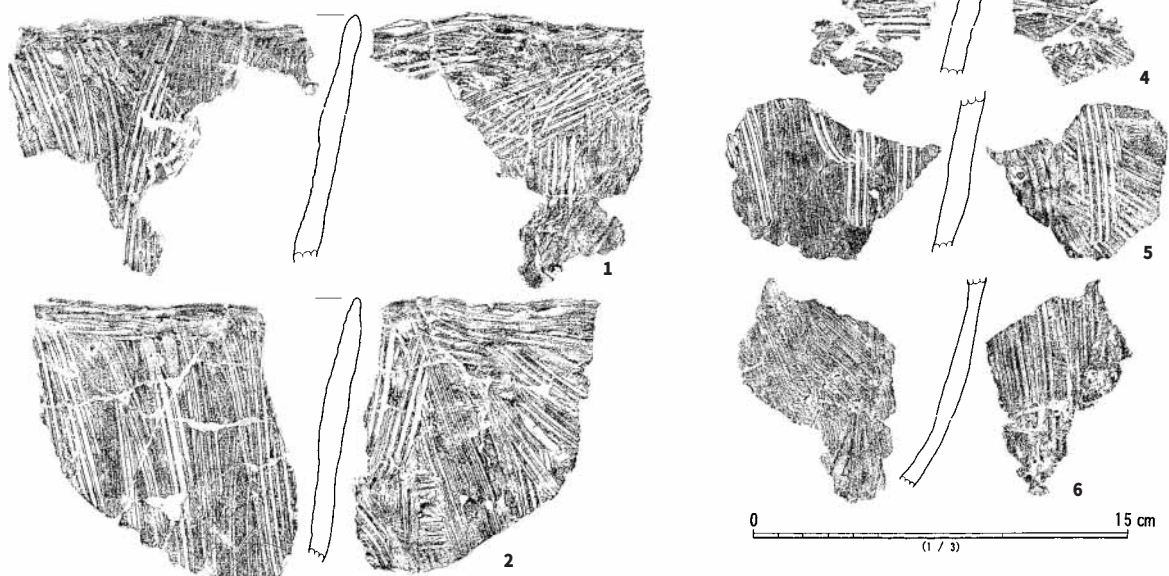


第29图 11·16·17·19·20号炉穴 遺物

13号炉穴



15号炉穴

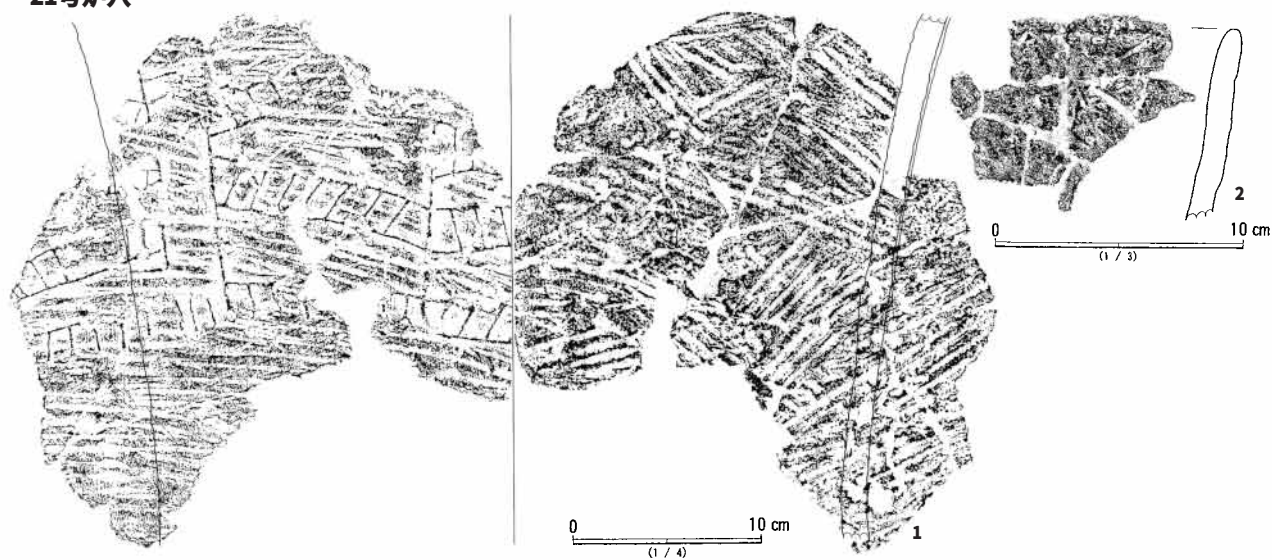


第30図 13・15号炉穴 遺物

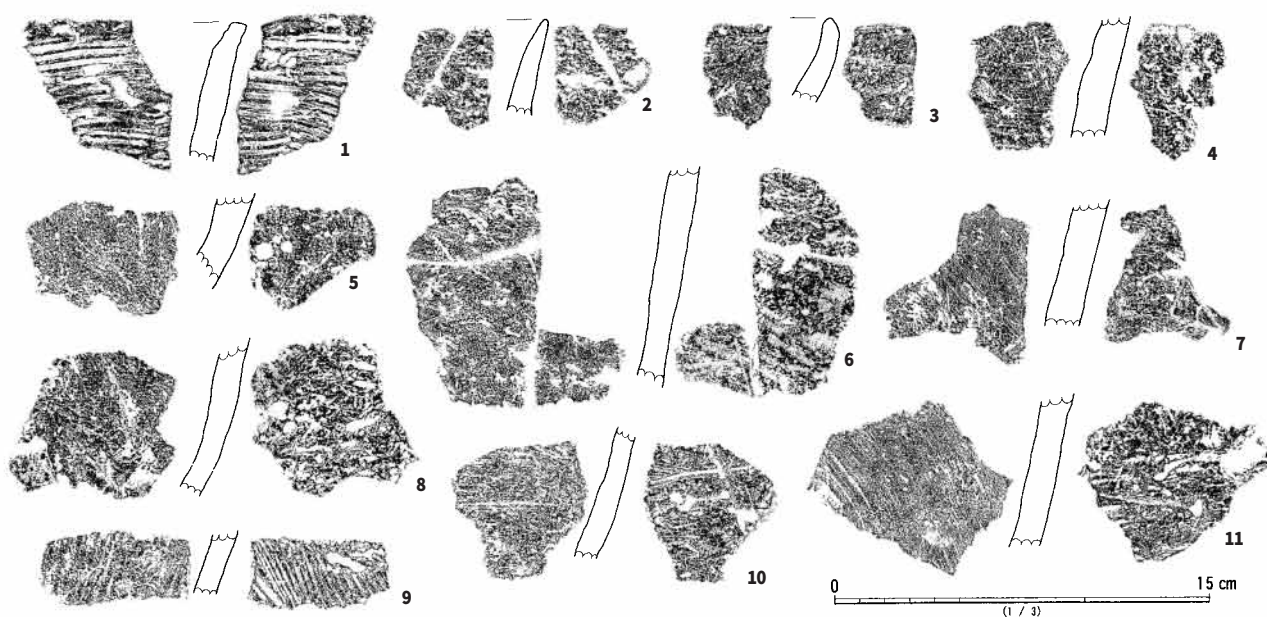
検出したなかでは依存状態が良いものとみられる。火床の上部は一部天井状の掘り残しが認められる。覆土は1～7層に分層され、1層は黒褐色土層、2層はローム粒を多量に含む黒褐色土層、3層はロームを多量に含む暗褐色土層、4層は大小ロームブロックを多量に含む黒褐色土層、5層はローム粒・若干の焼土粒を含む黒褐色土層、6層は焼土粒を含む暗黒褐色土層、7層は焼土を主体とする暗褐色土層である。

出土遺物は、火床上部の5層付近に集中していた。1～6は内外面に隙間なく条痕調整を施した尖

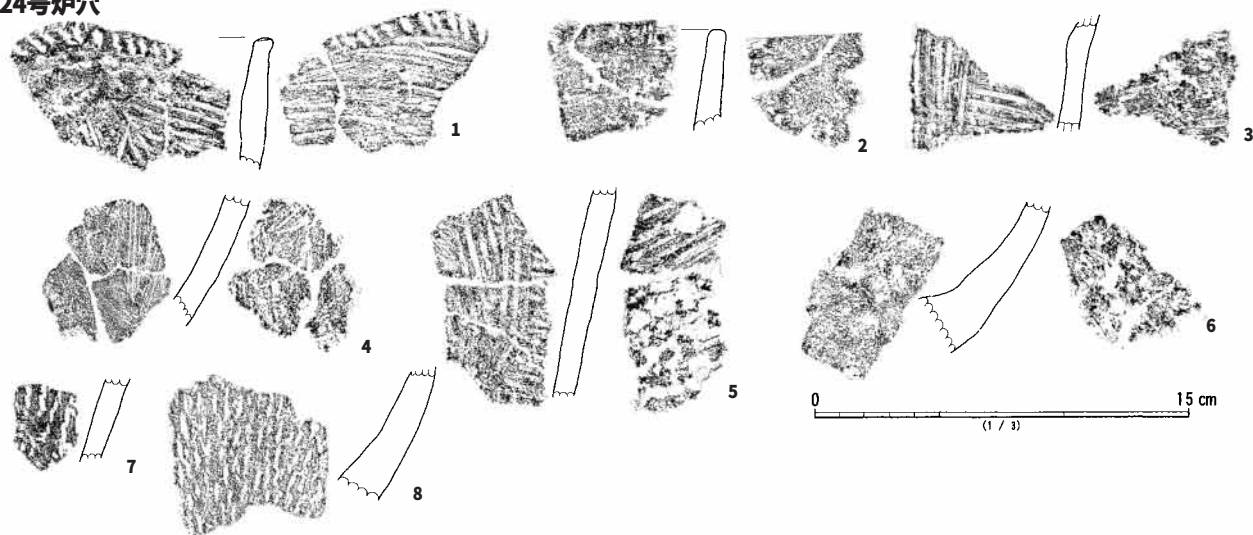
21号炉穴



22号炉穴



24号炉穴

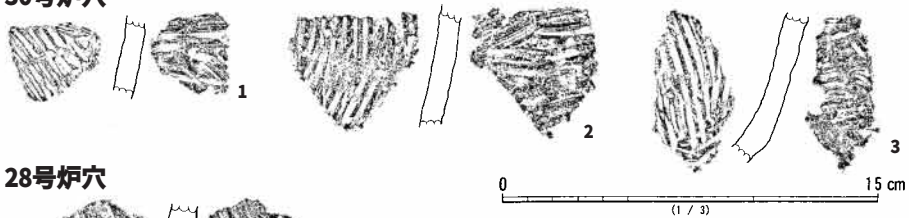


第31图 21·22·24号炉穴 遺物

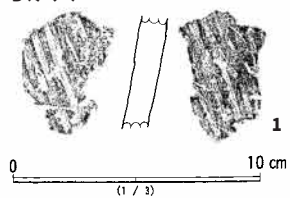
29号炉穴



30号炉穴

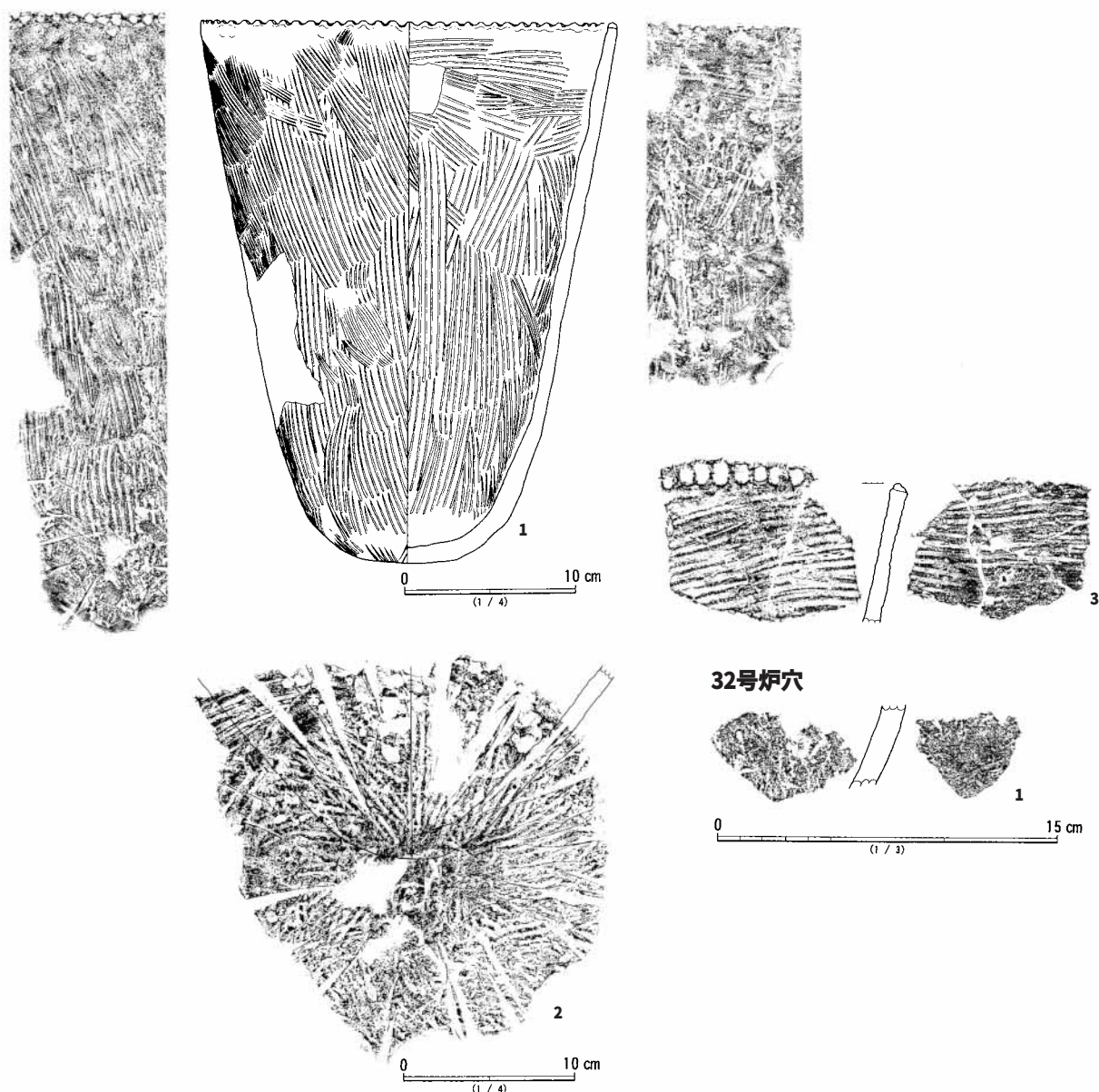


28号炉穴



第32图 28·29·30号炉穴 遺物

31号炉穴



第33図 31・32号炉穴 遺物

底土器である。すべてよく似ているが、1・2・5と、やや径の大きい3の2個体があるようである。2・5は外面口縁部付近をナデ調整し、口唇上に刻みを施している。このほかに接合しなかった土器小片が数10点ある。

30号炉穴（第27・32図、図版39）

30号炉穴は、O7-02区他に所在する。平面規模は2.01×1.30m、確認面からの深さは0.31mを測る。覆土は1～4層に分層され、1層は黒褐色土層、2層はロームを含む黒褐色土層、3層はロームを多量に含む褐色土層、4層は焼土層である。

出土遺物は内外面条痕調整の土器小片数点である。

31号炉穴（第27・33図、図版39）

31号炉穴は、O7-45区他に所在する。全体規模は2.09×2.46m、確認面からの深さは0.43mを測る。

掘り込みは1連であるが、火床は2か所ある。方向を90度振って火床部を付け足したものと考えられる。覆土は1～6層に分層され、1層はローム粒を含む黒褐色土層、2層は焼土粒を含む黒褐色土層、3・4層はローム粒・焼土粒を多量に含む黒褐色土層、5層は暗黄褐色土層、6層は焼土層である。

出土遺物は、2か所の火床付近から出土している。2はBの、3はAの火床面から出土し、1はAとBのやや上層から出土した破片が接合して、完形に近く復元できた。高さ32cm、口縁径24cmの丸底深鉢である。1は内外面に比較的雑な条痕調整を施している。内面の底近くはナデ調整される。口唇上は深く刻まれる。3も同様に深い刻みが施されている。2は1と同様の底部であるが、尖底に近く上部に向かって大きく開いている。外面には灰と炭化物が付着し、内面の底近くは被熱による剥離が著しい。

32号炉穴（第27・33図、図版39）

32号炉穴は、R8－88区他に所在する。平面規模は1.18×0.67m、確認面からの深さは0.30mを測る。覆土は1～5層に分層され、1層は黒褐色土層、2層はロームを含む黒褐色土層、3層は暗褐色土層、4層はロームを含む暗褐色土層、5層は焼土粒を若干含む黒褐色土層である。

出土遺物は図示した内外面ナデ調整の条痕文系土器小片1点のみである。

(3) 陥 穴

1号陥穴（第34図、図版39）

1号陥穴は、O11－80区他に所在する。平面規模は2.09×0.78mを測る。確認面からの深さは0.95m、主軸方位はN－83°－Eである。覆土は1～3層に分層され、1層は黒褐色土層、2層は褐色土層、3層は暗黄褐色土層である。やや形状が不整であるが、小形の溝型陥穴であろう。153×83mmの大きな礫が一括で取り上げられているが、遺構に伴うかどうかは不明である。

2号陥穴（第34図、図版39）

2号陥穴は、O11－21区他に所在する。平面規模は1.36×1.10mを測る。確認面からの深さは0.80m、主軸方位はN－21°－Wである。底面にPitをもつ楕円型陥穴であろう。P1は21cm、P2は9cm、P3は20cmを測る。覆土は1～8層に分層され、1・2層は黒褐色土層、3層はロームを多量に含む暗褐色土層、4層は褐色土層、5層は暗黒褐色土層、6層は黒褐色土層、7・8層は大小ロームブロックを多量に含む暗褐色土層である。

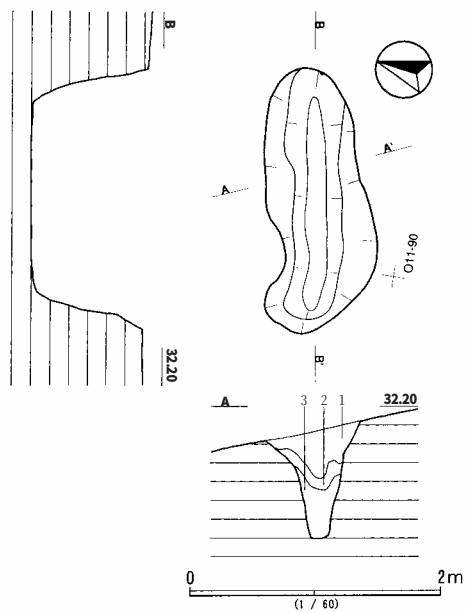
3号陥穴（第34図、図版40）

3号陥穴は、O14－92区他に所在する。平面規模は1.56×0.81mを測る。確認面からの深さは1.2m、主軸方位はN－34°－Wである。長軸状に2穴を穿つ楕円型陥穴であろう。P1は15cm、P2は8cmを測る。弥生土器を含む摩滅した土器小片が数点取り上げられているが、遺構に伴うとは考えにくい。

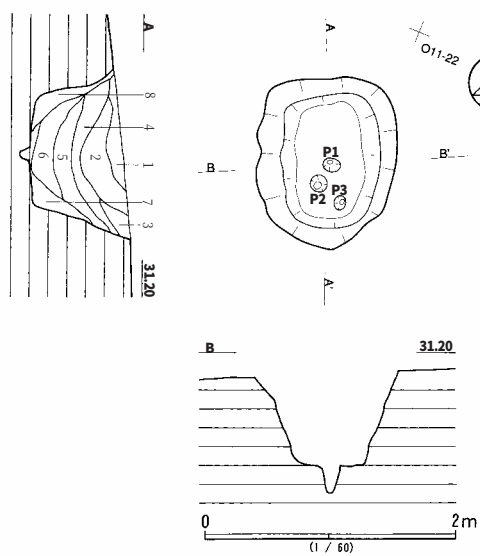
4号陥穴（第34図、図版40）

4号陥穴は、O16－57区他に所在する。平面規模は1.63×0.71mを測る。確認面からの深さは1.21m、主軸方位はN－90°－Eである。覆土は1～6層に分層され、1層は黒褐色土層、2層はロームを含む黒褐色土層、3・5層は大小ロームブロック・ローム粒を多量に含む褐色土層、4層はローム粒を多量に含む黒褐色土層、6層はロームブロックを主体とする層である。楕円型陥穴であろうか。出土遺物はない。

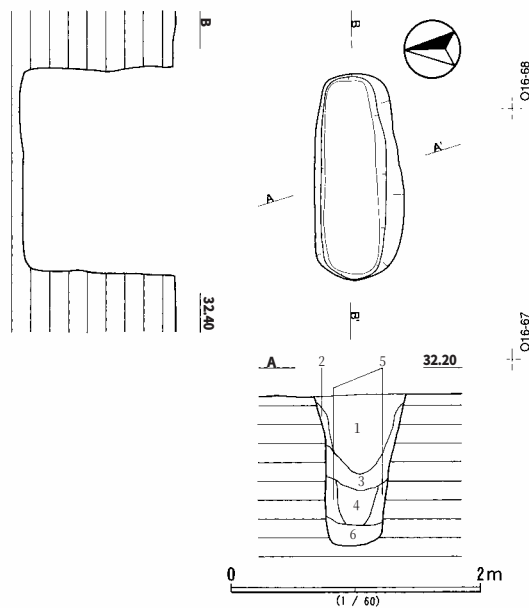
1号陷穴



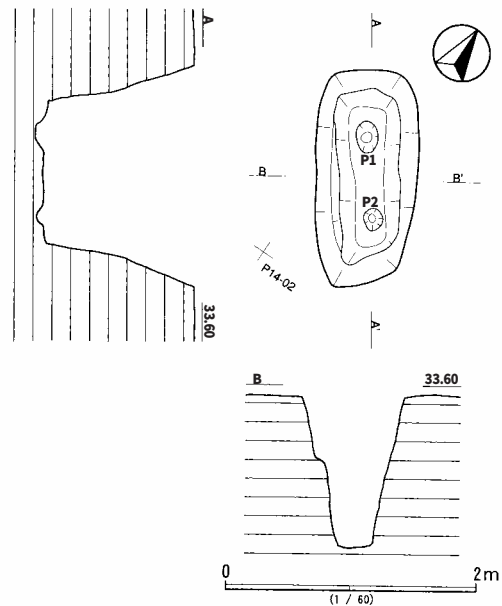
2号陷穴



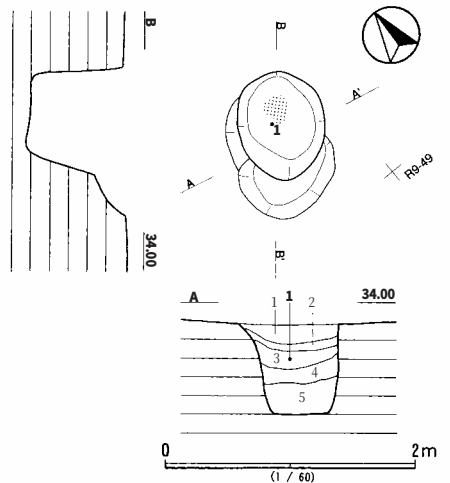
4号陷穴



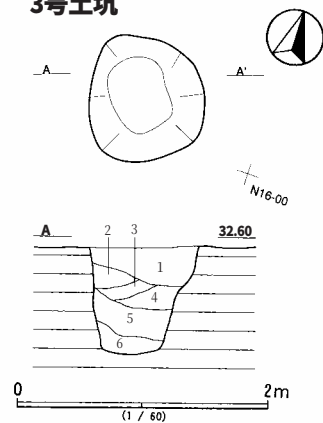
3号陷穴



2号土坑



3号土坑



第34图 1·2·3·4号陷穴、2·3号土坑 遺構遺物

(4) 土 坑

1号土坑 (第35・36図、図版35)

1号土坑は、Q11-18区他に所在する。石器製作に関わる黒曜石の剥片・碎片が多量にまとまって出土した。掘り込みは明確ではなく、中央部が暗色に凹むものの、遺物の集中範囲はその下のソフトローム内に及んでいて、底面の分層は困難であった。したがって、現地では旧石器時代の所産である可能性も想定していた。剥片・碎片の集中は、3.4×3.0mのほぼ円形範囲で、確認面からの深さは0.65mを測る。遺物分布から復原される断面形状は皿状を呈す。石器群は中央付近の上層にまとまる傾向がある。

出土遺物は、石鏃1点以外はすべて黒曜石の剥片・碎片類であり、総点数は約12,200点に及ぶ。そのうち一括取り上げ分をのぞく2,478点について計量・計測を行った。総重量は310.7gである。2,478点のうち、2,324点(94%)は0.1g以下の碎片であり、5gをこえるものは2点、3gをこえるものは13点、1gをこえるものは45点にすぎない。一括取り上げ分も、ほぼすべてが0.1g以下の碎片である。最大の剥片は最大長3.67cmで、3cmをこえるものは6点、2~3cm以下が38点であった。これらやや大きめの剥片は、厚みも0.5cm以上あるものが多く、剥片剥離が困難なものが放棄されたようである。剥離の方法は不規則で、その点旧石器時代のものとは考えにくい。また、黒曜石の剥離面の状態も、旧石器時代のものとしては風化の度合いが低すぎるように思われる。今回は、小さな剥片や碎片の観察を充分行うことができなかったが、小さめの剥片のなかには、2面に押圧剥離をもつものが存在する。これは、石鏃等の両面加工の石器の側縁を一方の面から剥離をしたときに生じた可能性が高い。いわゆる「ポイントフレイク」状である。以上の点からみて、剥片・碎片類は石鏃製作に関わる資料とみるのが妥当であろう。なお、唯一の製品である石鏃はチャート製である。土器片は若干出土しているが、時期が推定できるものは縄文中・後期土器、弥生土器、陶器片のみであった。12点すべてが小片であり、混入による可能性が高い。

当遺構は、以上のように石鏃製作跡またはその廃棄の場である可能性が高いと思われる。時期は不明といわざるを得ないが、以下の諸点から加曽利E式後半が候補となる。一つは、すぐ近くに9号竪穴が存在することである。9号竪穴からは剥片類が出土していないが、同時期の7号竪穴からは黒曜石の剥片類が32点出土している。もう一つは遺構外出土土器をみると、当遺構周辺は加曽利E式後半の土器の分布域で、他の時期の縄文土器は分布していないことである。県内の報告例をみると、集落に石鏃製作跡が伴うのは、この時期の特徴といえそうである。

2号土坑 (第34図、図版40・86)

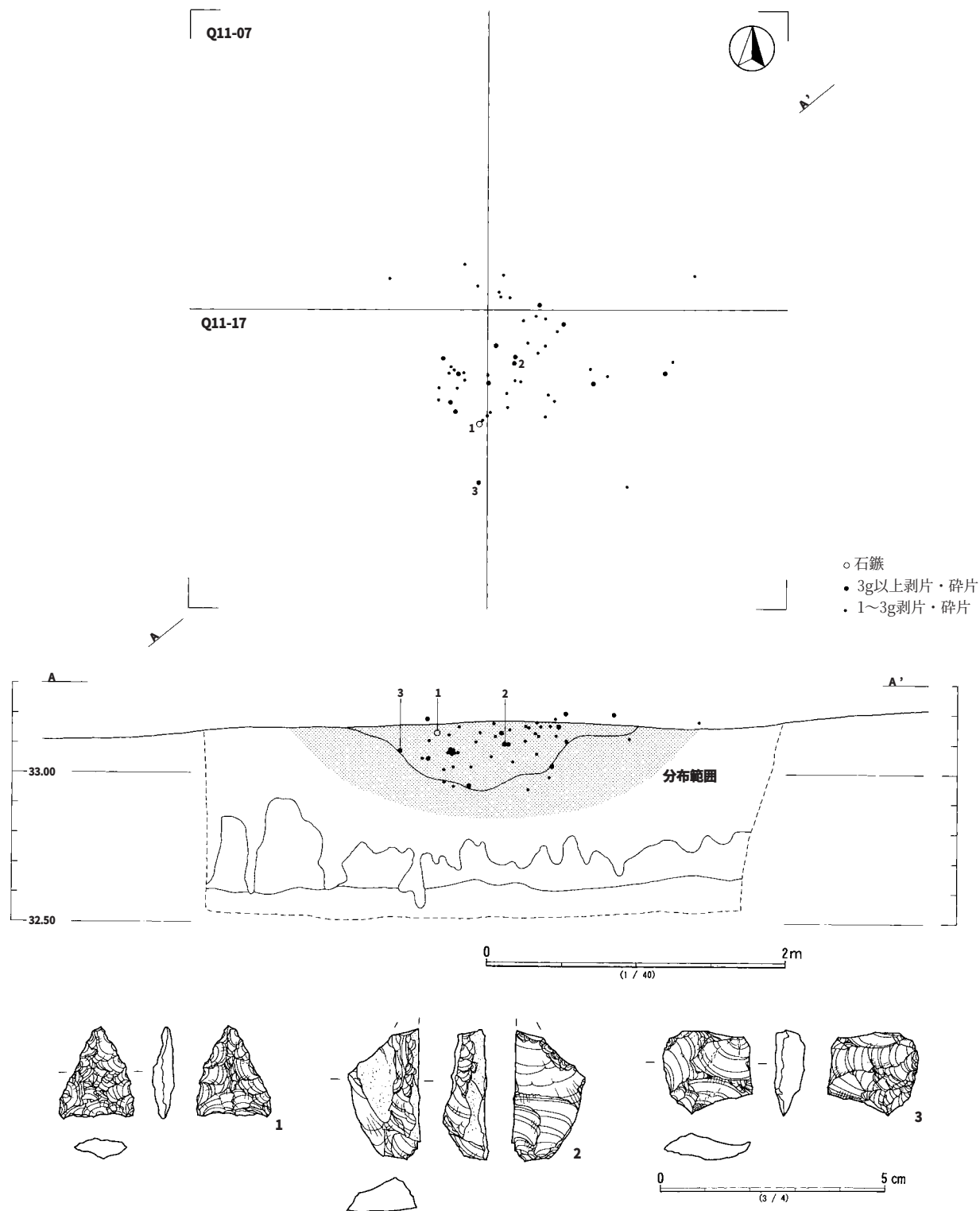
2号土坑は、R9-38区他に所在する。平面形態は、円形を呈し、平面規模は0.86×0.71m、確認面からの深さは0.76mを測る。覆土は1~5層に分層され、1~3層は黒褐色土層であり、3層はロームを多量に含む。4層は暗褐色土層、5層は黒褐色土層である。3・4層からは貝ブロックが検出されている。貝サンプルを採取しており、分析結果は第3章第1節に掲載した。

出土遺物は図示した土器1点である。加曽利E式後半期の土器と思われる。時期・性格ともに判断材料に乏しいが、深い円筒形の土坑はこの時期にみられる小竪穴に似る。

3号土坑 (第34図、図版40)

3号陥穴は、M15-99区他に所在する。平面形態は、円形を呈し、平面規模は1.02×0.95m、確認面

1号土坑

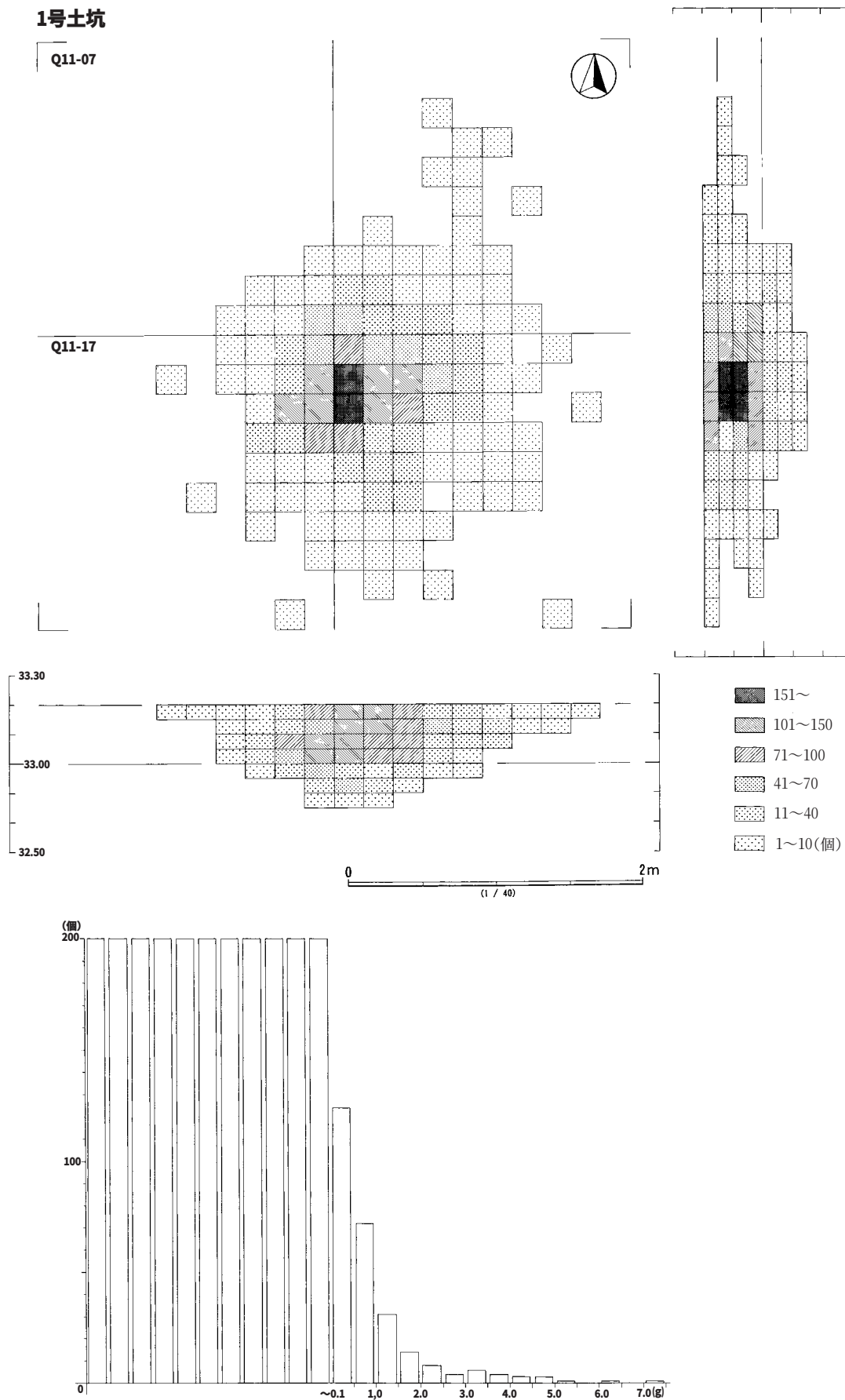


第35図 1号土坑 遺構遺物

からの深さは0.84mを測る。覆土は1～6層に分層され、1・2・4～6層は灰褐色土層、3層は暗褐色土層であり、5層はローム粒を多量に含む。

出土遺物はなく、時期・性格とも不明といわざるを得ない。2号土坑に似ているが、加曽利E式土器の分布範囲からは遠く離れている。

1号土坑



第36図 1号土坑 剥片碎片平面立面頻度分布・重量別頻度分布

(5) 遺構外出土土器

出土した縄文土器は、早期から後期に及んでおり、以下の8群に大別した。

第1群 早期前葉 撚糸文土器

第2群 早期中葉 沈線文土器

第3群 早期後葉 条痕文土器

第4群 前期

第5群 中期 加曽利E式土器

第6群 後期初頭 称名寺式土器

第7群 後期前葉 堀之内式土器

第8群 後期中葉 加曽利B式土器

遺構出土土器も含めると、今回掲載した土器は全部で261点ある。遺構を検出した第3群（早期後葉）と第5群（中期）の土器が多く、第3群は全体の44%、第5群は26%を占める。次いで第7群（12%）、第1群（10%）が多い。

第1群（第37図1～22、図版69）

早期前葉・撚糸文土器である。1・2は肥厚した口唇上に施文し、施文後に口縁下を横になでている。1は撚糸文、2は単節縄文を施文する。2の施文は、口唇上は2段、胴部は帯状である。いずれも井草式であろう。3・5は単節縄文、4は無節を比較的密に施文する。6～13は撚糸文土器の主体を占めるもので、口縁部付近に無文部をもち、比較的間隔のあいた撚糸文を施文する。口縁部は若干肥厚するか外反するものが多い。稲荷台式が中心であろう。屈曲が明瞭で器厚の厚い9～13はより新しい段階のものであろうか。17～21は胴部破片である。14は金堀式土器（篠原2000）の頸部から胴部の文様帯部分である。無文の外反する口縁下でくびれ、胴部の上端に帯状の文様帯をもつ。文様は竹管の角状の工具によるものであろう。内面は丁寧になでられている。金堀式土器は北総地区のかなり限定された範囲に分布するが、市内では西広貝塚に類例がある（米田1977）。15・16は稲荷台式かそれ以降の無文土器である。

第2群（第37図23、図版69）

早期中葉・沈線文土器である。23は口縁が緩やかに開く平縁の土器である。沈線によって区画された口縁部と胴部の文様帯に沈線による意匠文が施されている。口唇上と口縁部文様帯に刻みをもつ。外面はナデ、内面はミガキ調整である。田戸上層式であろう。

第3群（第37図24～第38図63、図版69）

早期後葉・条痕文土器である。子母口式から野島式にかけての資料が主体となるため、子母口式も条痕文土器に含めた。全体に内外面にくっきりと貝殻条痕を施したものは少なく、貝殻で成形ないし調整後、さらに調整によって条痕が消されたものが多いようである。胎土の繊維含有量も少ないものが目立っている。なお、調整は以下のように呼称する。条痕調整（フネガイ科の貝殻腹縁を使った調整痕跡）、擦痕調整（比較的粗い線状痕を伴う調整痕跡）、ナデ調整（顕著な線状痕等を残さない調整痕跡）。なお、この時期の資料は市内の新井花和田遺跡（牧野2001）でまとまって出土している。

24～34には有文の土器を集めた。24・25は絡状体圧痕文を有する波状口縁の土器である。1は外削ぎ状の口唇上に絡状体圧痕を施し、波頂部に2本の隆起線が貼り付ける。2は絡状体圧痕をやや引

きずっているようであり、下端のナデによって段を形成している。これは3号炉穴の1と共通する。24の外面と25の内外面はナデ調整、24の内面は顕著な擦痕調整である。27～29は細隆起線による意匠文をもつ土器であり、野島式の成立期ないし古段階の資料と思われる。21号炉穴-1は全体がわかる好例である。27は口唇上と口縁上端に絡状体圧痕文が施文されている。細隆起線は一部剥がれている。内面は条痕調整が残る。28はナデ調整、29は擦痕調整である。30は微隆起線と押引文による意匠をもち、結合部に円形刺突文を施す。32・33は沈線による区画文をもつ。34・35は押引文による区画ないし意匠文をもつものである。以上は鶴ヶ島台式であろう。条痕調整であるが、弱く、まばらな傾向がある。33・35の内面は棒状工具等による1本引きの条痕とみられる。34は内外面擦痕調整である。

36～48は無文系の口縁部である。49～63は条痕文土器の胴部、底部片である。擦痕調整やナデ調整のものも多い。41は貝殻条痕の带状施文によって意匠効果をもつ。内面には2本一組の浅い沈線による縦区画が見られる。施文原体は不明である。44～51は無文の口縁部片で、45・48と50の内面はナデ調整、他は擦痕調整である。51は丸底を呈すと思われる底部近くの破片で、内面には棒状工具の痕跡がある。52～59は条痕調整を主体とした胴部破片、60～64は擦痕調整や粗いナデ調整を主体とした胴部・底部破片である。60・63は尖底である。64は丸底であろう。

第4群（第39図65～67、図版69）

前期の土器はごく少ないため一括した。65・66は繊維土器を多量に含む縄文施文の土器であり、黒浜式であろう。67は沈線区画内に鋸歯状の沈線を充填する土器である。浮島式であろうか。

第5群（第39図68～第40図100、図版69）

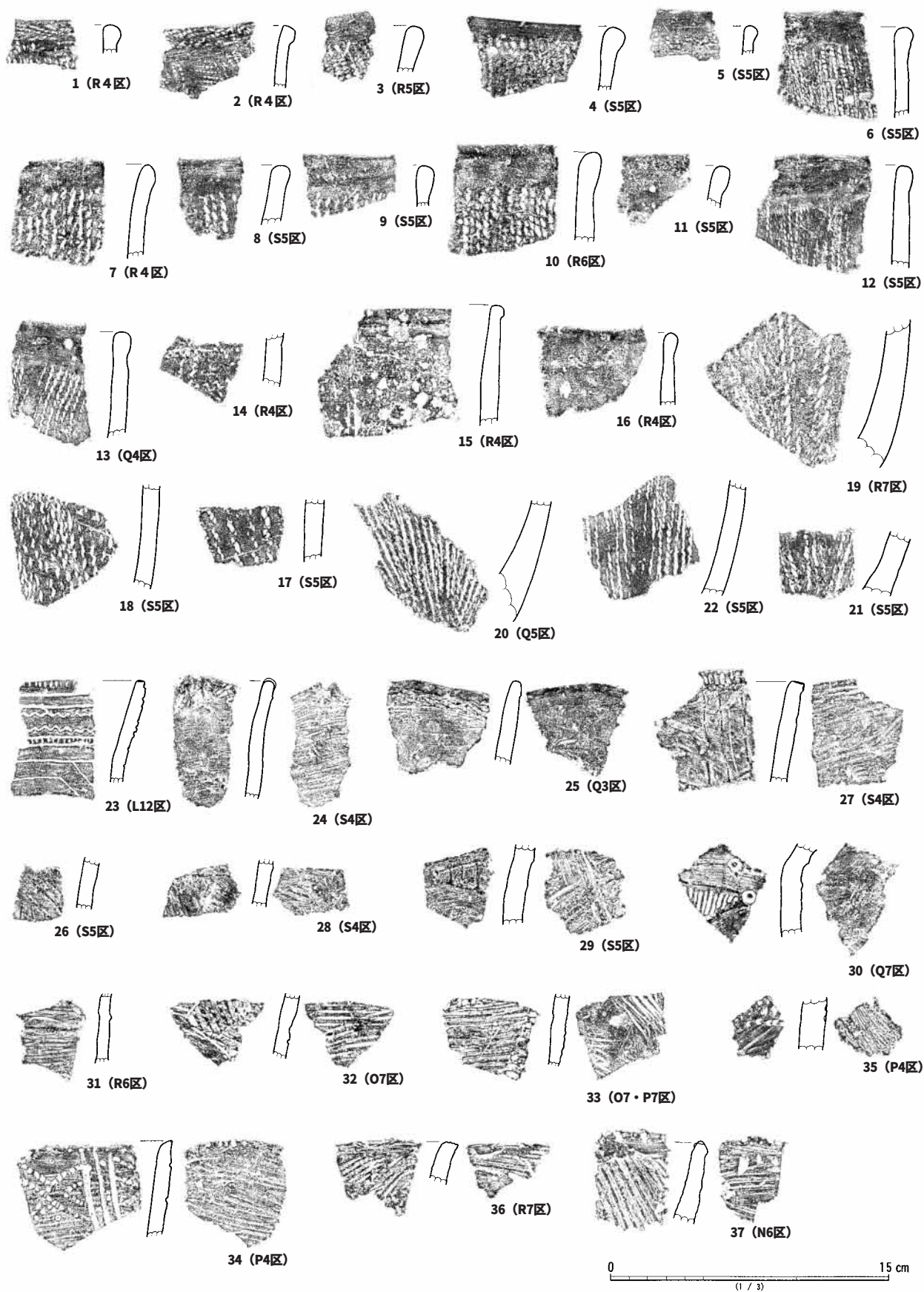
中期・加曽利E式土器であり、その後半期の加曽利EⅢ式が主体である。68・70・71は加曽利E式前半の土器であろう。68は高い隆帯による口縁部文様帯をもち、胴部の蛇行沈線間は遺存部分で見限り磨消していない。72も前半の土器であろうか。そのほかは加曽利E式後半の土器である。69・73～88は口縁部を集めた。69は太い隆帯の両脇をなぞった意匠充填系土器である。94は同様の技法による胴部片である。76・83～85は隆帯と無文部が懸垂文を形成する土器群である。97・98はその胴部片であろう。73・74は沈線系の意匠充填系土器である。92・93はキャリパー型の系統であろう。以上は概ね加曽利EⅢ式土器とみられる。口縁部無文帯を形成する素文系の土器は時期細分が難しいが、多くは同時期であろう。89・90は堀之内式であろうか。89の地文は無節と思われ、半截竹管による平行沈線が引かれている。

第6群（第40図101～102、図版69）

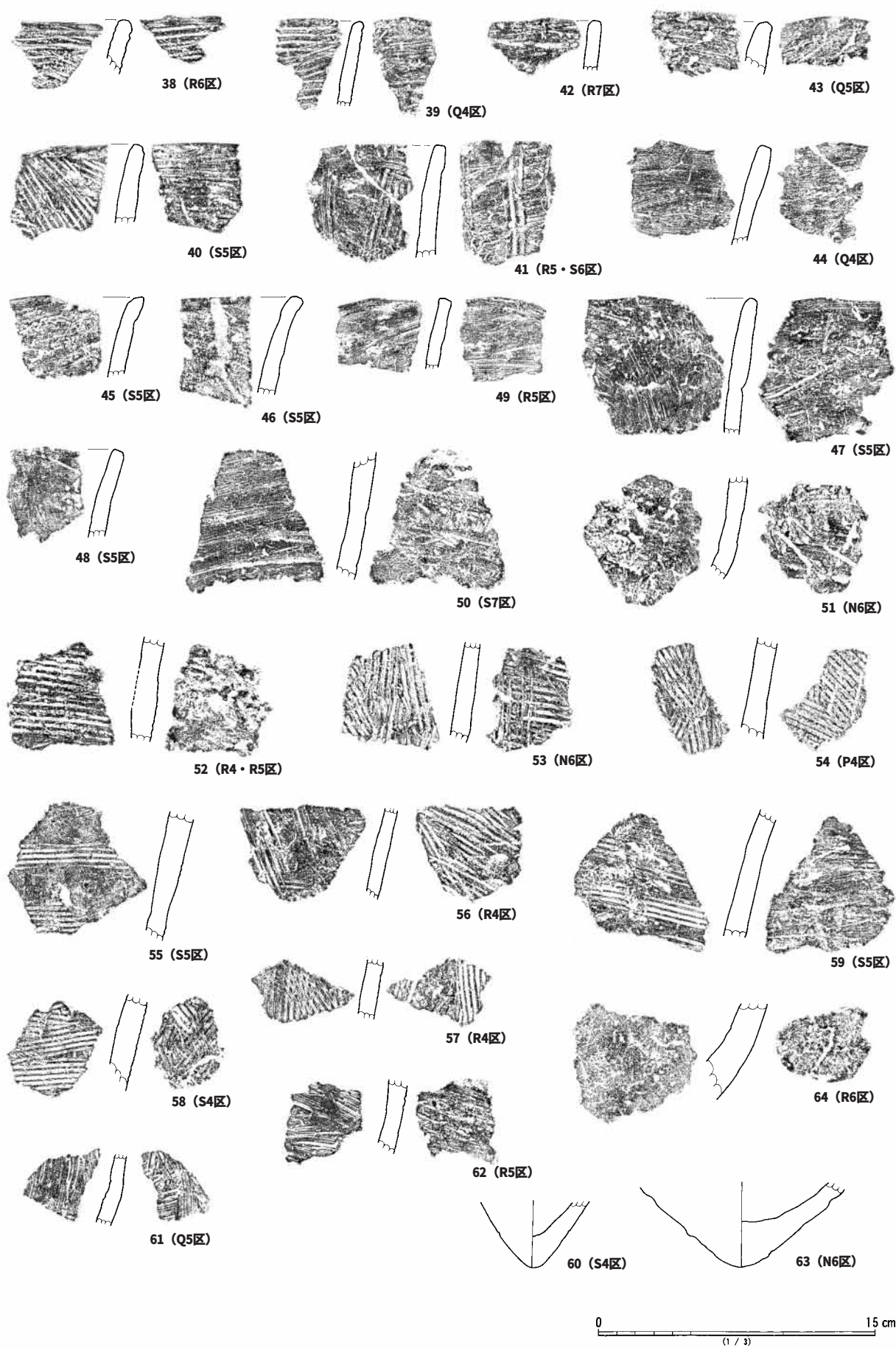
後期初頭・称名寺Ⅱ式土器である。101と102は沈線意匠文間に列点文を施す。円形の竹管先端を101はやや斜めに、102は垂直に押している。

第7群（第40図103～第41図134、図版69）

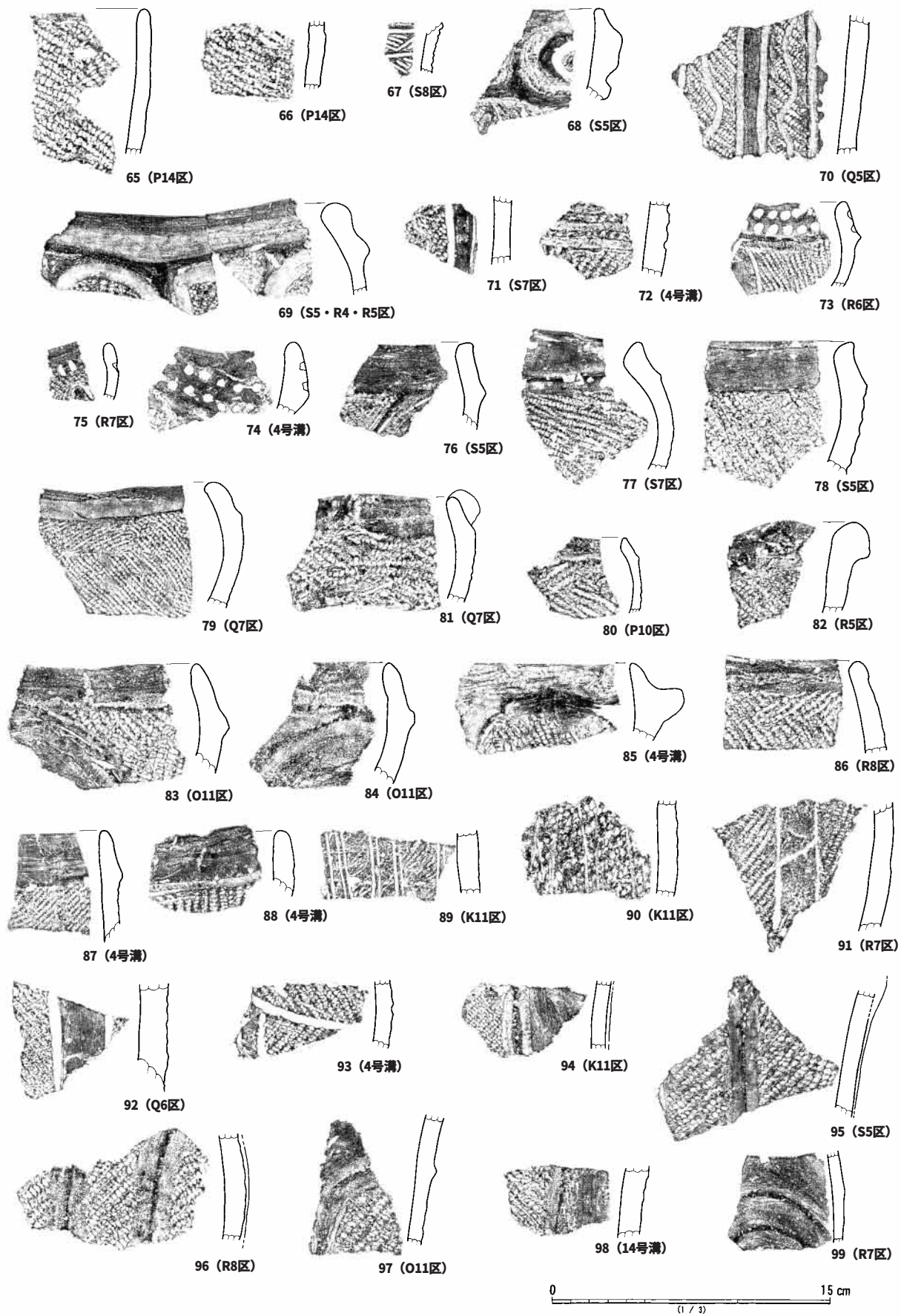
後期前葉・堀之内式土器である。遺構を検出していない時期では最も多い。103～134まであり、堀之内2式が主体である。103～110は刻み隆帯を貼り付けた土器であり、精製土器と素文系の土器がある。103・106～109は内面に沈線をもつ。104・105は口唇が内側に屈曲する。111・112は横方向の沈線で区画した中に沈線による意匠文を描く土器である。111は半截竹管状工具を使った平行沈線によって集合沈線としている。112は平坦な工具を使って沈線を引いている。113は無節縄文上に太目



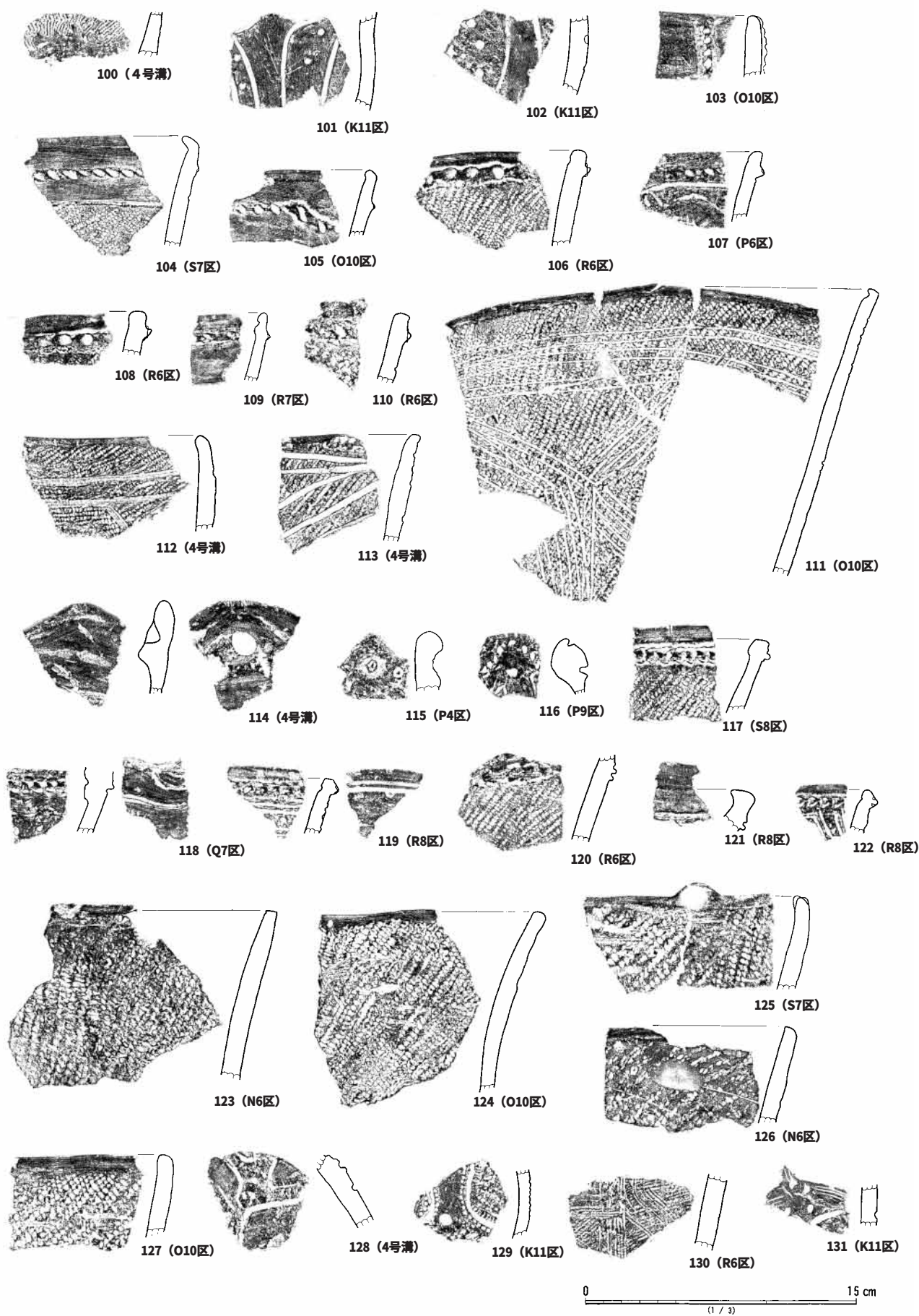
第37圖 遺構外出土繩文土器 (1)



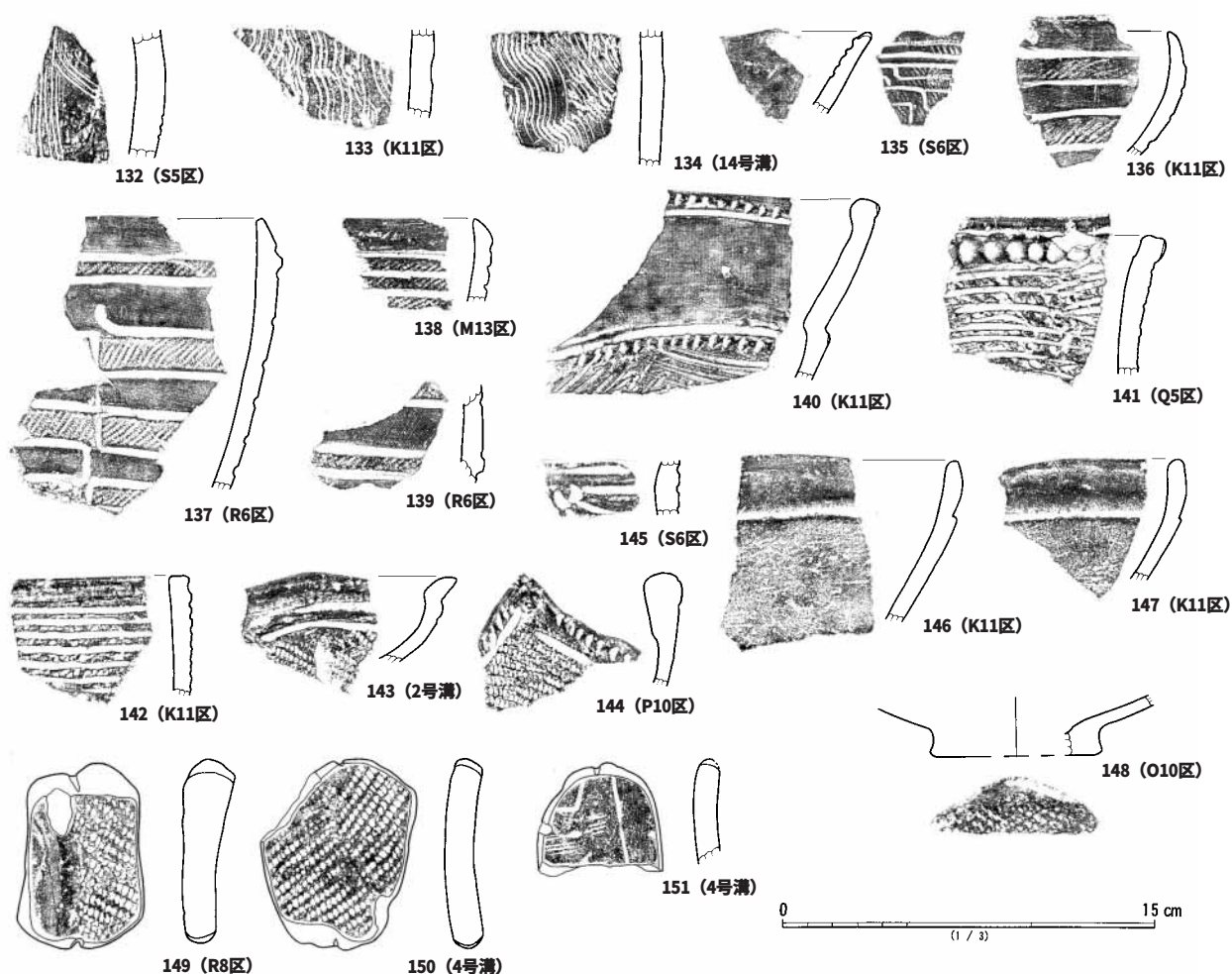
第38図 遺構外出土縄文土器 (2)



第39図 遺構外出土縄文土器 (3)



第40図 遺構外出土縄文土器 (4)



第41図 遺構外出土縄文土器 (5)・土製品

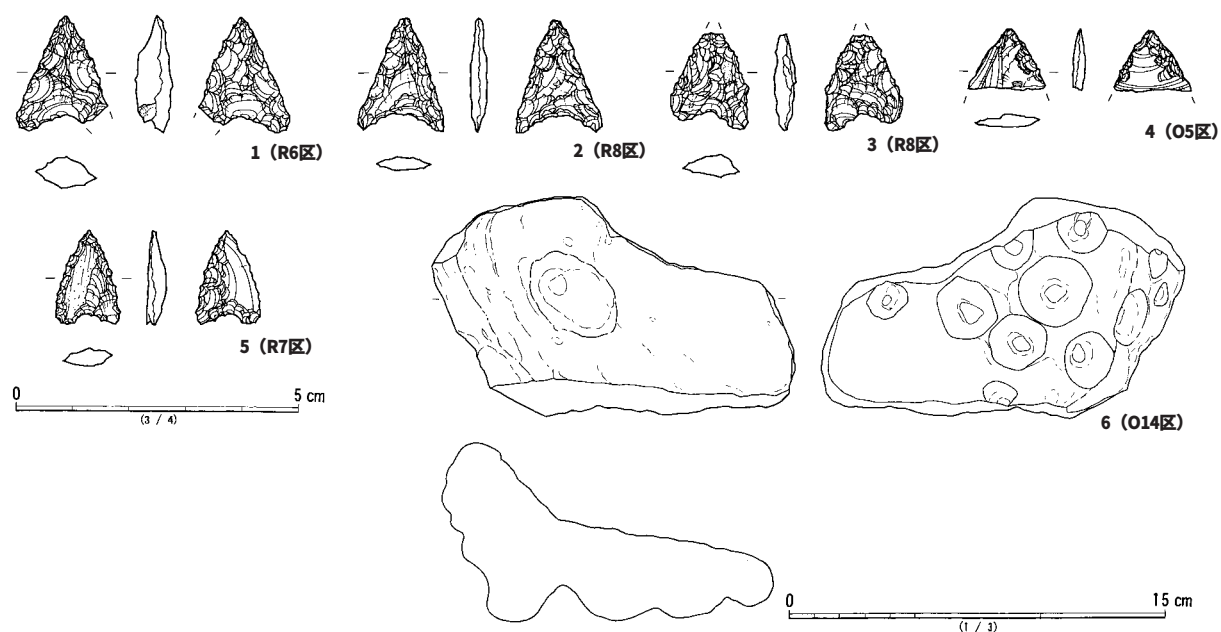
の沈線を引く。時期は判然としない。114～116は波状口縁の波頂部であり、後期前葉か。117～122は隆帯上に押引文を施した特徴的な土器である。半截竹管状の工具を深く施文して、管内痕を浮き出させている。122は連続刺突に近い。沈線も同様の工具で引かれた平行沈線であり、内面に沈線文様をもつ。123～127は縄文のみを施文した素文系の土器である。130～134は条線系の土器である。128・129は注口土器の破片と思われる。

第8群 (第41図135～148、図版69)

後期中葉・加曽利B式土器である。時期幅があるが、加曽利B1式からB2式にかけての資料が多いようである。135・136は精製の鉢である。137～139は深鉢である。以上は沈線間に縄文を充填して帯状、クランク状の意匠としている。135は内面施文である。140・144・145は精製の深鉢143・146・147・148は浅鉢である。

(6) 縄文土製品 (第41図149～151、図版69)

149～151は土器片錘である。150は一部、151は半分欠損する。149・150は加曽利E式後半、151は称名寺2式の土器を素材としている。周囲は研磨したか、または摩滅している。ほかに7号竪穴で1点出土している。



第42図 遺構外出土縄文時代石器

(7) 縄文石器 (第42図、図版83)

石鏃5点、石皿1点を掲載した。1～3・5は凹基型の石鏃である。1・3は厚めの素材に多数の剥離を加えているのに対して、2・4・5は薄い素材に縁辺加工をしている。2以外は黒曜石製である。6は大型の石皿片である。多数の窪みがついている。

文 献

- 篠原正 2000 「金堀遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文時代)』千葉県
 牧野光隆他 2001 『市原市新井花和田遺跡』(財)市原市文化財センター
 米田耕之助 1977 「早期の土器」『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査団

第3節 弥生時代

(1) 竪穴

竪穴107軒、建て替えを含めた総数で110軒が検出された。ただし、建て替えについては、床硬化面下の調査が充分であったとはいえない状況がある。

竪穴は、基本的に住居跡と考えられるが、数軒については、住居あるいは建物かどうかを含め疑問を残すものもある。

時期的には、弥生時代後期に限定される。全体に遺存遺物が少ないため、詳細時期の決定については、覆土資料、遺構の重複関係なども考慮し、可能な限り判断した。時期区分は、第4章第2節（p.310）による。竪穴のPit深度、掘形（確認）面面積、座標位置、床面標高および出土遺物等の詳細情報については、第4・5表、第4・5-2表（CD）および、関連する遺物観察表に記載した。なお、軽石などで一部実測図を提示していないものもあるが、これについても基本情報は遺物観察表に記載した。

なお、記述上、「出入口施設」Pit、「貯蔵穴」を使用しているが、これについては本来の機能として証明されているわけではない。

10号竪穴（第43図、図版9・70）

10号竪穴（住居跡）は、調査区S5-51区他に所在する。23・24号炉穴と重複する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は5.31（主軸）×5.12m、床面積は21.00㎡を測る。建て替えは現状で確認できないが、主柱穴部は柱痕のみの調査のため不確実である。確認面からの深さは0.66m、主軸方位はN-48°-Wである。主柱穴はP1~4、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設Pitである。炉は、主軸線上北西側にあり、平面規模は0.96×0.58mを測る。竪穴堆積土は、1~5層に分層され、1・3・4層が黒褐色土層、2・5層が褐色土層である。炉内、6層は黒褐色土層、7層は焼土層である。

出土土器は、1~3・5~10が壺形土器、4・11~14が甕形土器、15・16が椀ないしは高杯形土器であり、1は床面から、3・4・13・16は覆土から出土している。他の出土状況は不明。

本竪穴の時期は、3期と推定される。

11号竪穴（第44図、図版9・70・77）

11号竪穴（住居跡）は、調査区S5-66区他に所在する。竪穴南半部の調査は、平成5年度（山田橋大塚台遺跡）に実施したが、今回北半部を調査するにあたり、再度全体を掘り上げた。121号竪穴と重複し、北側約1/3が破壊されている。また、竪穴中央東西方向に浅い溝が横断している。竪穴平面形態は楕円形を呈し、全体規模は7.30（主軸推定）×6.0mを測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.27m、主軸方位はN-25°-Wである。主柱穴はP6~7であり、P11は貯蔵穴、P15は出入口施設である。121号竪穴内中央の炉は、火床面というよりもその下部の被熱ローム範囲であり、本竪穴の炉の可能性が高い。現状規模は0.97×0.86mを測る。竪穴堆積土1~6層は、121号竪穴覆土である。本竪穴に対応する7層は、未注記のため不明。

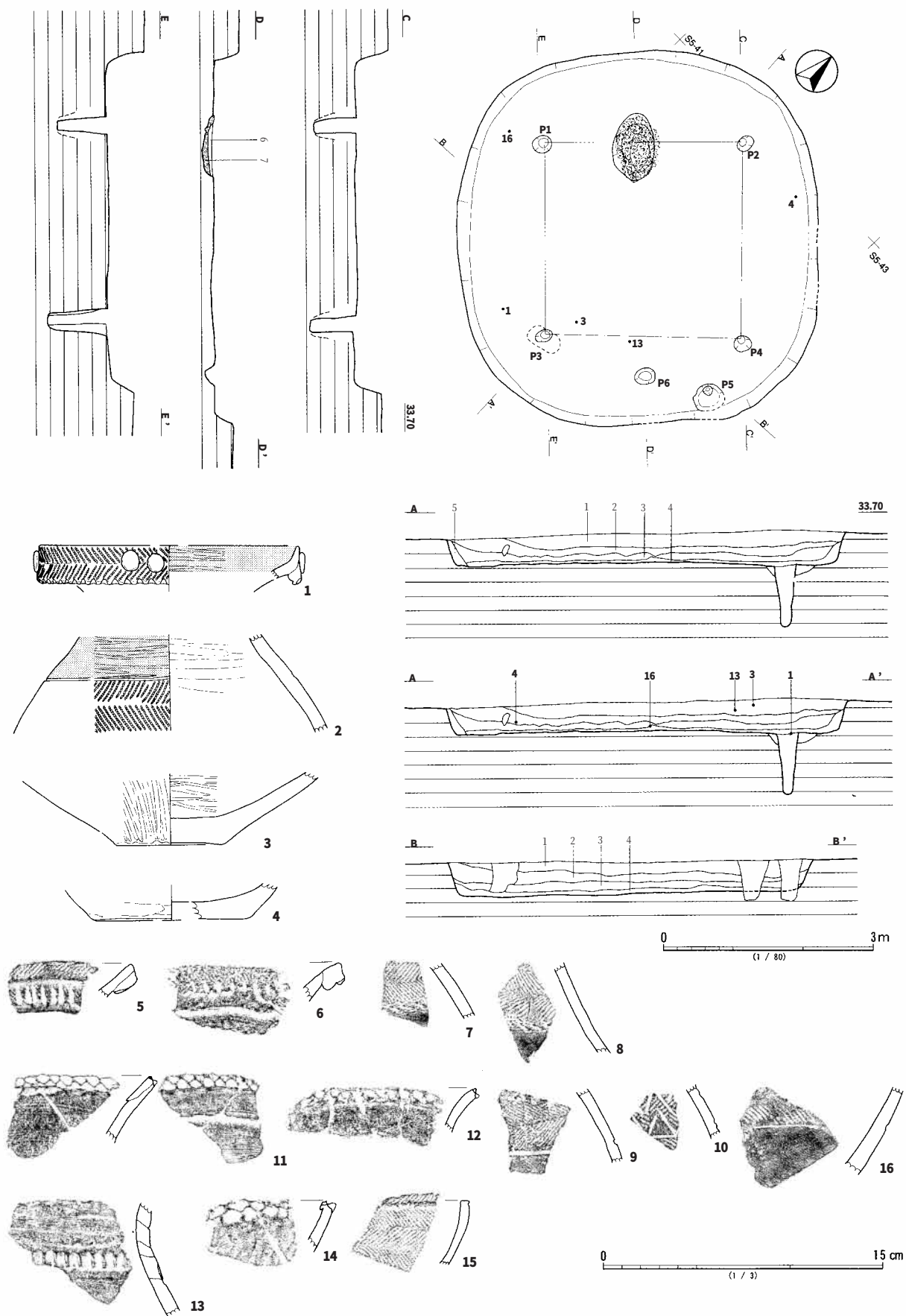
出土土器は、1の壺形土器のみである。1も121号竪穴覆土より出土したものであり、厳密に本遺構にともなう確証はない。なお、平成5年度調査時の出土遺物については、今回整理を行っていない。

本竪穴の時期は、壺形土器1を根拠とするならば、3~4期古段階であろうか。

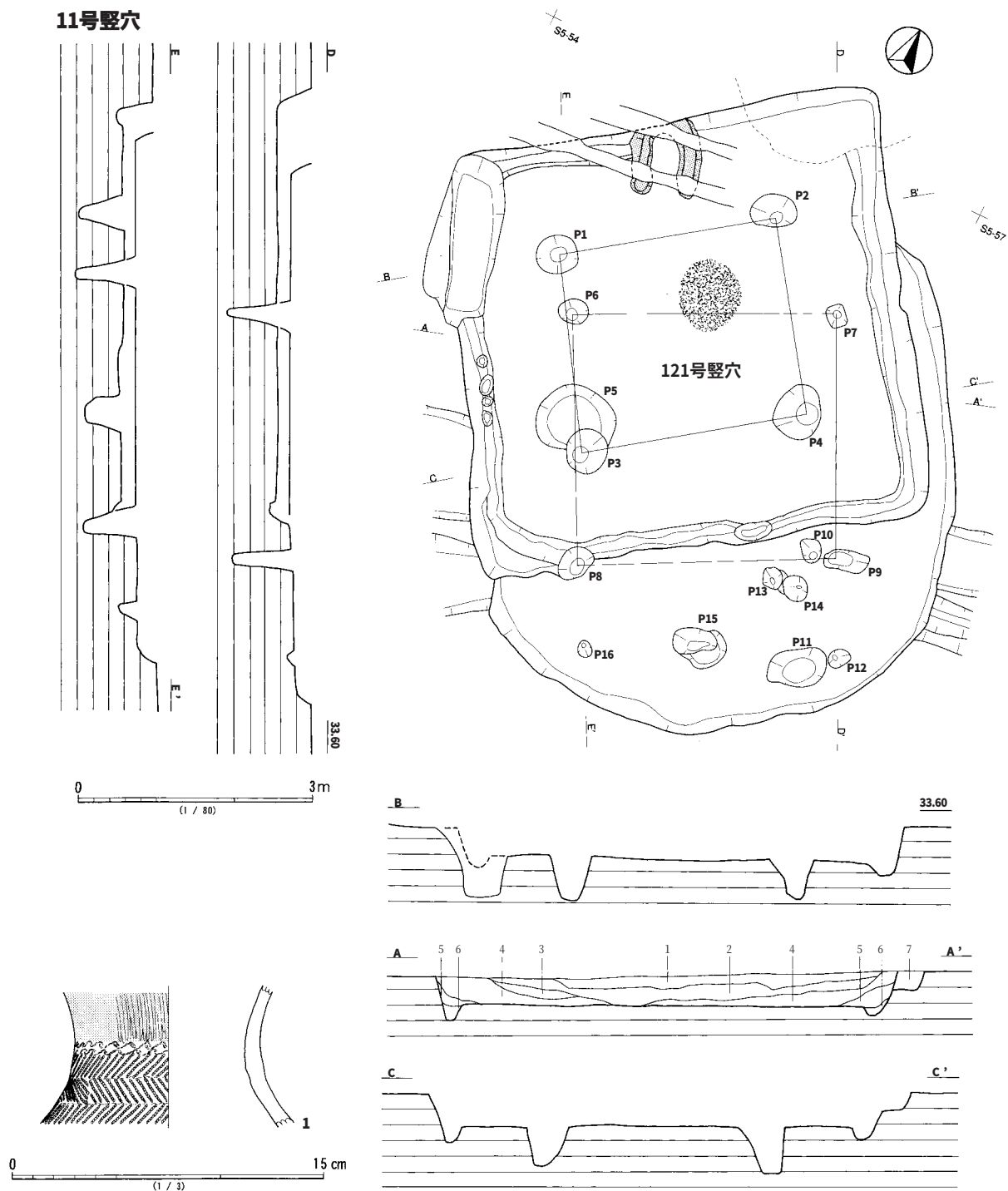
12号竪穴（第45図、図版9・48・70・80・82）

12号竪穴（住居跡）は、調査区S5-01区他に所在する。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体

10号竖穴



第43图 10号竖穴 遺構遺物

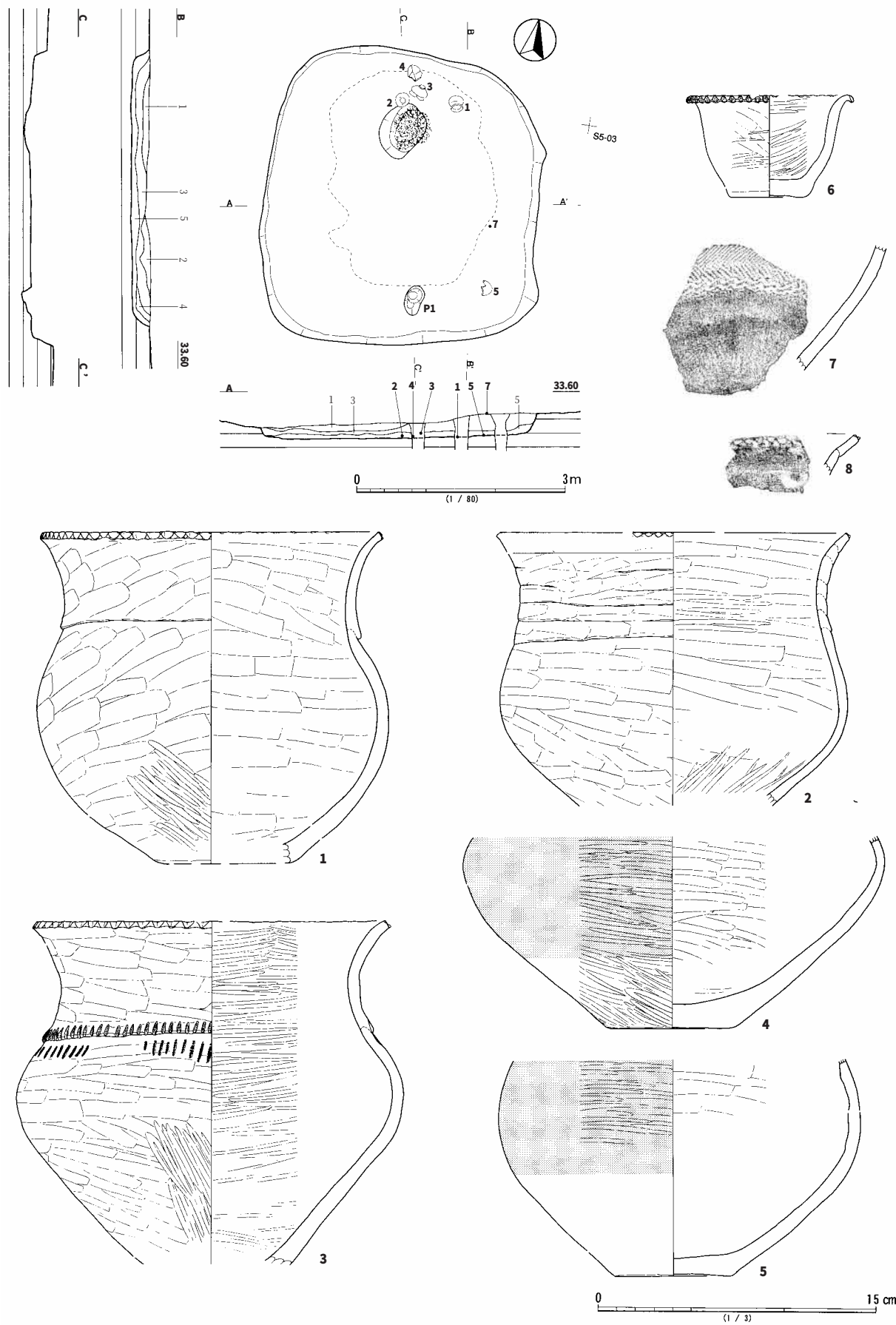


第44図 11号竪穴 遺構遺物

規模は4.23（主軸）×3.92m、床面積は13.68㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.38m、主軸方位はN-5°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は出入口施設である。炉は、0.81×0.62mを測る。竪穴堆積土は1～5層に分層される。1・2層が黒褐色土層、3・5層が暗褐色土層、4層が褐色土層である。本遺構は部分的にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

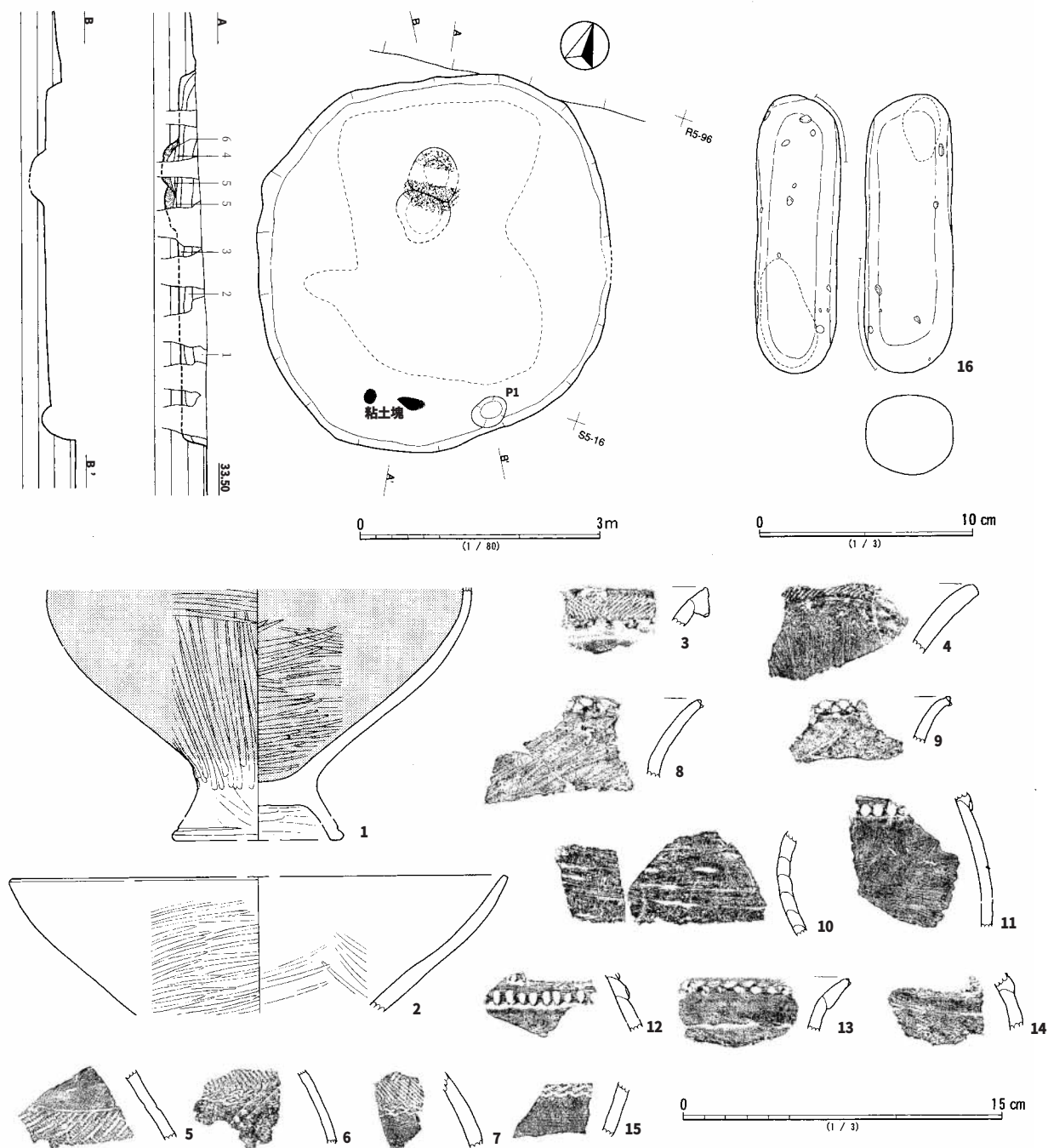
出土土器は、略完形の土器がまとまって出土している。1～3・8が甕形土器、4・5が壺形土器、6が小形甕形土器、7が椀ないしは高杯形土器であり、1～4は炉北側の床面から、5は南東隅床面から

12号竖穴



第45图 12号竖穴 遺構遺物

13号竪穴



第46図 13号竪穴 遺構遺物

出土している。これらは、本竪穴の遺存遺物と推定される。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

13号竪穴（第46図、図版9・48・70・85）

13号竪穴（住居跡）は、調査区S5-04区他に所在する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は4.60（主軸）×4.41m、床面積は15.33m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.35m、主軸方位はN-23°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴である。炉は、2基の重複と推定され、北側は、平面規模推定0.65×0.62mを測る。竪穴南壁側床面上で、粘土塊が認められた。竪穴堆積土は、1～3層、炉は4～6層に分層される。1・2・3・5層が暗褐色土層、4層が黒

褐色土層、6層が焼土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。出土土器は、3～7が壺形土器、8～14が甕形土器、1・2が高杯形土器、15が椀ないしは高杯形土器である。いずれも一括で取り上げられているため、出土状況は明らかではない。1の脚端部は、欠損後再整形の可能性がある。土器以外では、加工礫（磨石）1点が出土している。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

14号竪穴（第47図、図版9・70・76）

14号竪穴（住居跡）は、調査区S5－59区他に所在する。竪穴中央を、東西方向に浅い溝が横断している。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は5.22（主軸）×4.83m、床面積は20.78㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.4m、主軸方位はN－19°－Wである。主柱穴はP1～4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は東西方向で0.72mを測る。竪穴堆積土は1～3層に分層され、1・3層が黒褐色土層、2層が暗褐色土層である。本遺構は部分的にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。また、炉北側の土坑は、近年の攪乱坑である。

出土土器は、5～7・9～23が壺形土器、33が広口壺形土器、1・2・24～32・34が甕形土器、3・4が台付甕形土器、8・35～37が椀ないしは高杯形土器である。いずれも一括で取り上げられているため、出土状況は不明。うち、11・12、17～23、24・26は同一個体の可能性がある。17～23は、網目状燃糸文（0段2条）を地文とする幾何学縄文帯をもつが、全体の文様構成は不明である。別個体と推定されるが、19号竪穴8は類似する文様構成をもつ。また、24・26も19号竪穴10と酷似しており、19号竪穴とは、埋没過程を含め時期的な接点をもつ可能性が想定される。34は常総系の土器である。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

15号竪穴（第48図、図版9・70・78）

15号竪穴（住居跡）は、調査区S6－44区他に所在する。124号竪穴と重複し、124号竪穴の床面が本遺構の覆土上に認められた。また、竪穴中央を東西方向に浅い溝が横断している。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は3.93（主軸）×3.83m、床面積は11.61㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.44m、主軸方位はN－25°－Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴である。炉は、平面規模で0.87×0.49mを測る。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1・2・4層が黒褐色土層、3層が暗褐色土層である。5・6層は124号竪穴に対応する。本遺構は部分的にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

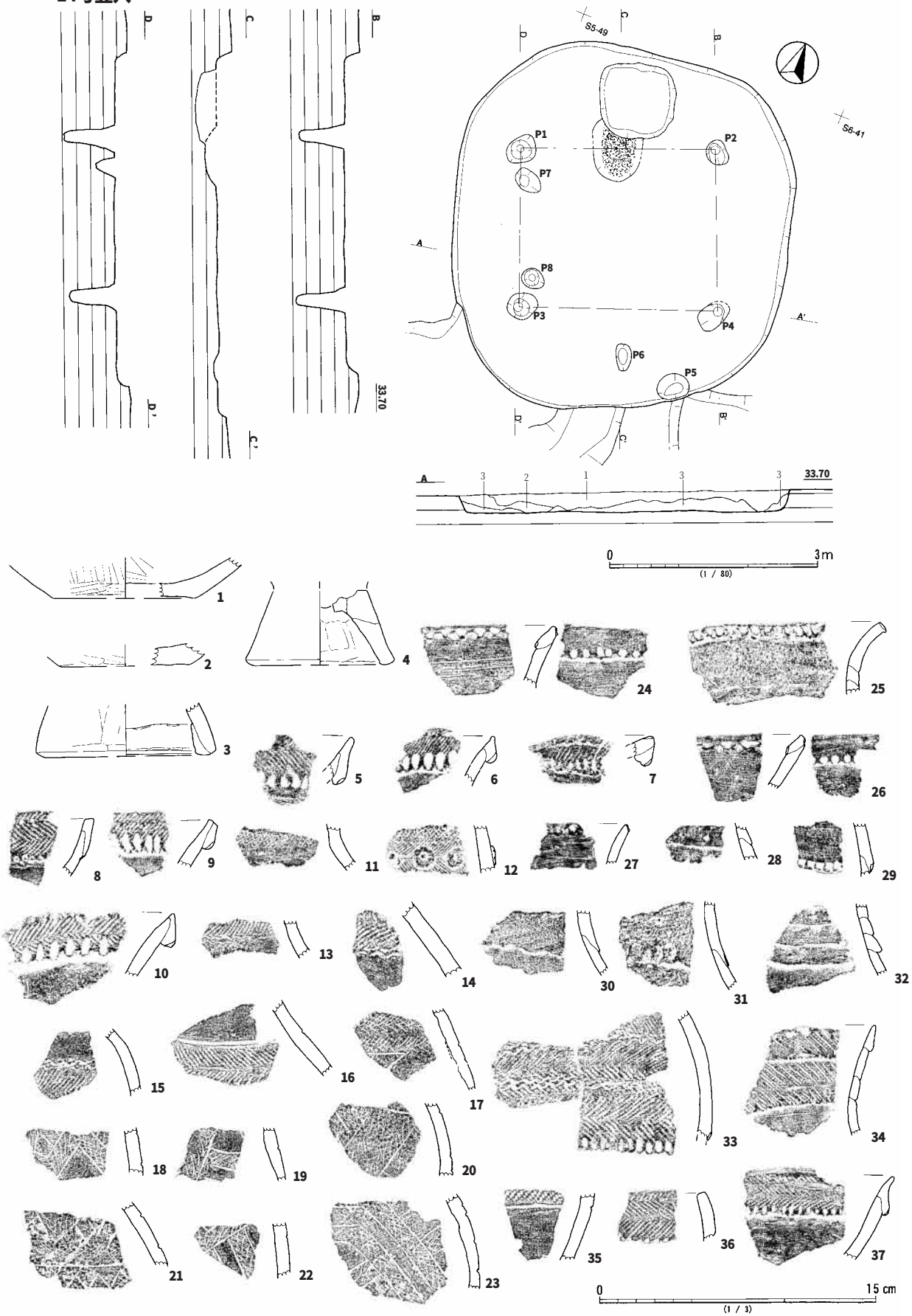
出土土器は、1・6～12が壺形土器、3・4・13～19が甕形土器、5が椀ないしは高杯形土器であり、12は床面から、1・4・9は覆土から出土している。17・18は同一個体の可能性が高い。9は網目状燃糸文（R2条）を地文とするが、付加条3種の可能性もある。10は別原体結節文（SR）による区画をもつ。15・17～19の粘土紐積上げ痕は、いずれも立体感があり、断面形態は丸みを残す。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩が出土している。

本竪穴の時期は、3期である。

16号竪穴（第49図、図版10・70）

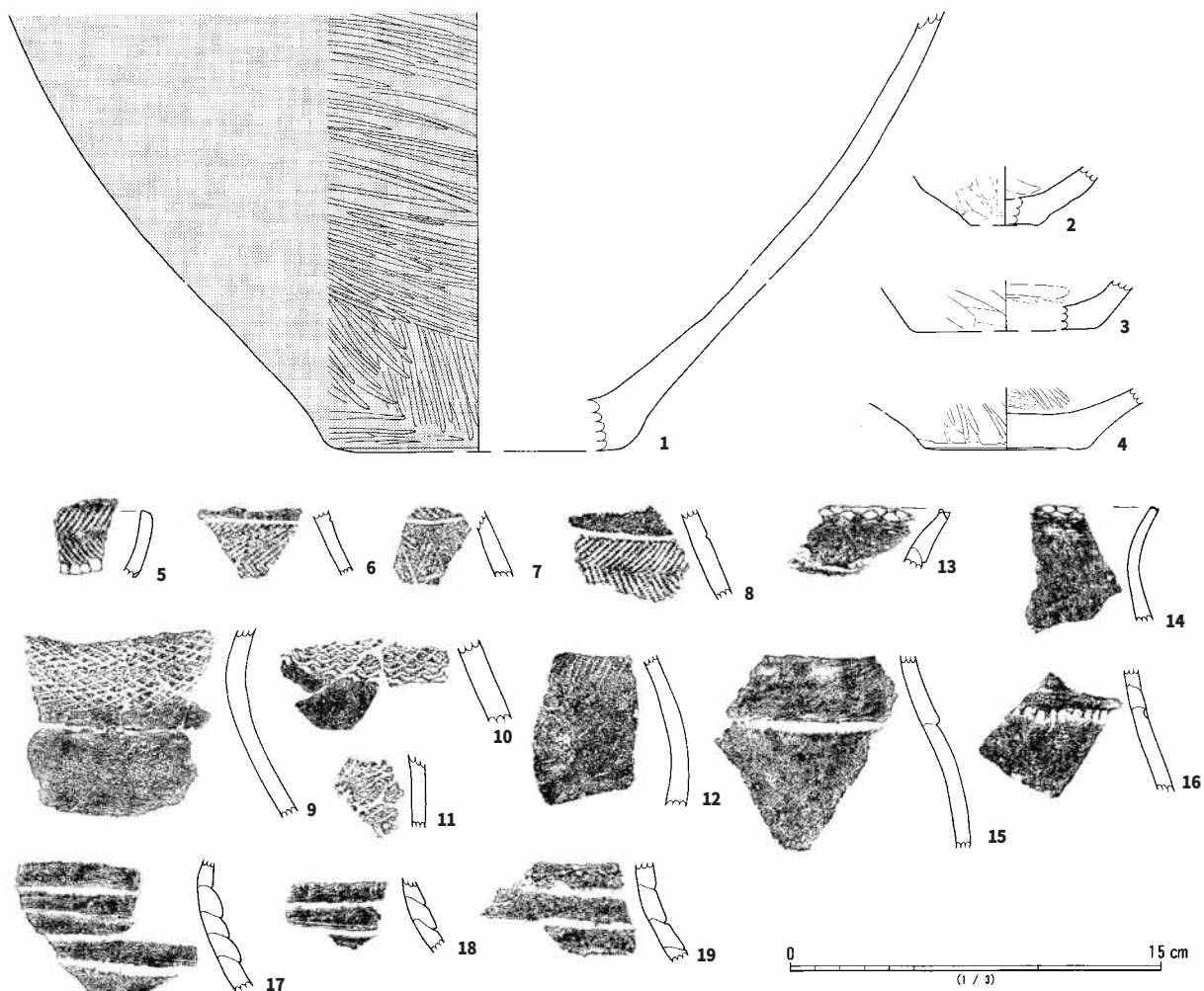
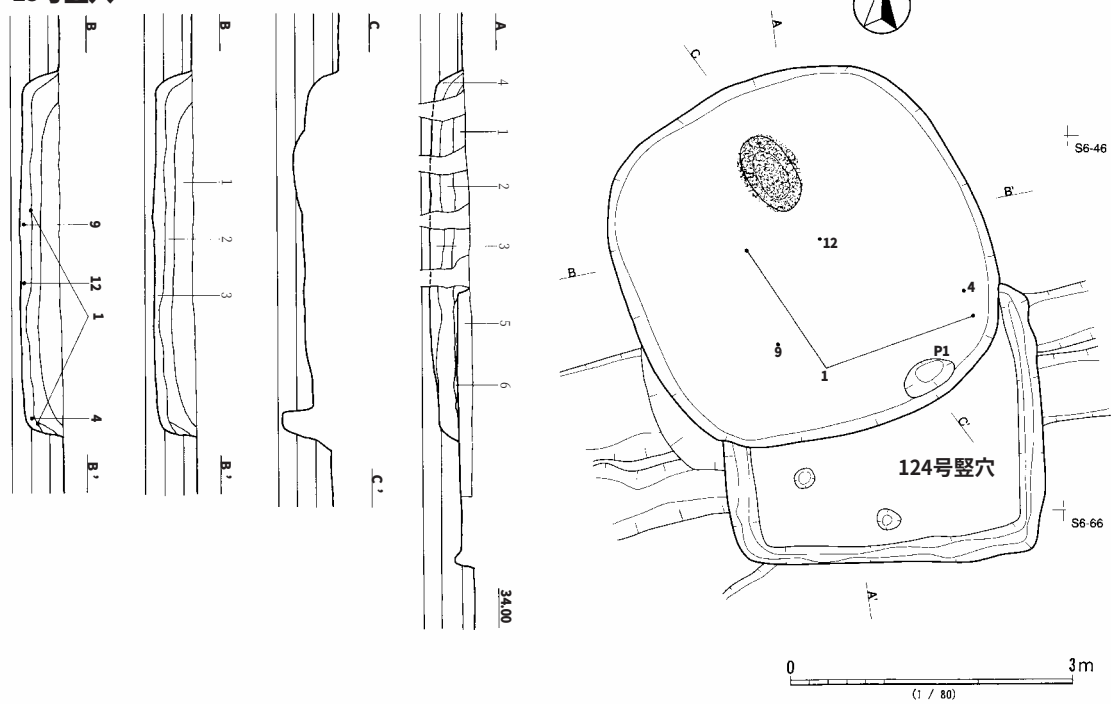
16号竪穴（住居跡）は、調査区S6－37区他に所在する。17号竪穴と重複し、本遺構に対し17号竪穴が新しい。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は4.2（主軸）×3.91（推定）m、床面積は12.77㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.22m、主軸方位はN－

14号竖穴



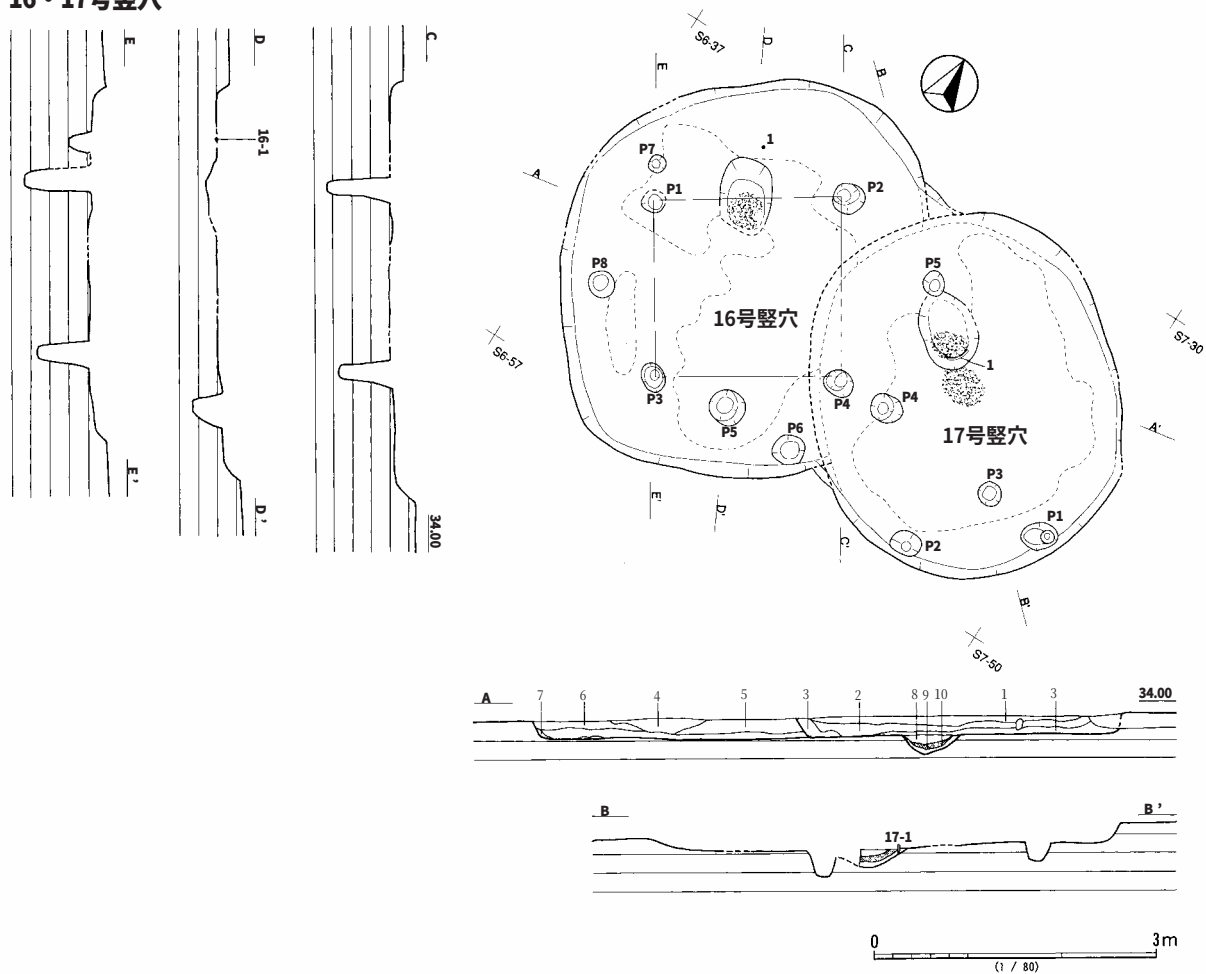
第47図 14号竖穴 遺構遺物

15号竖穴

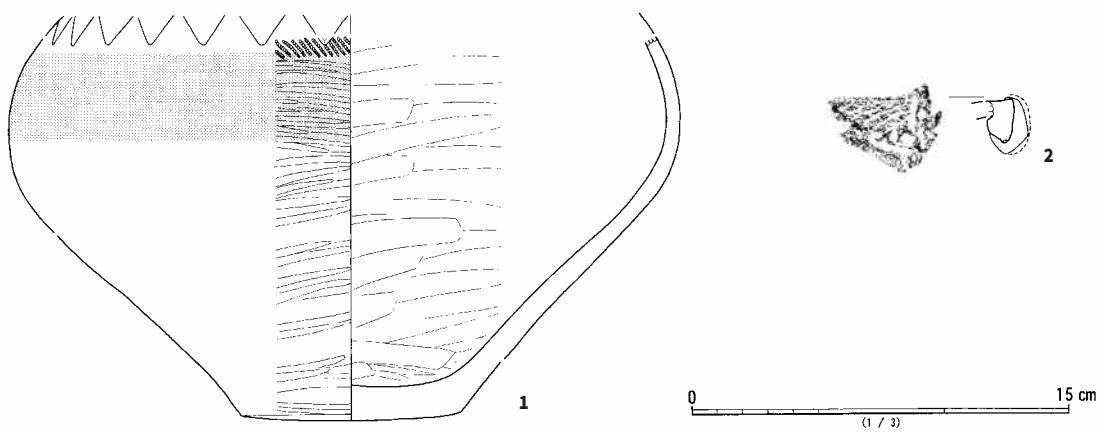


第48图 15号竖穴 遺構遺物

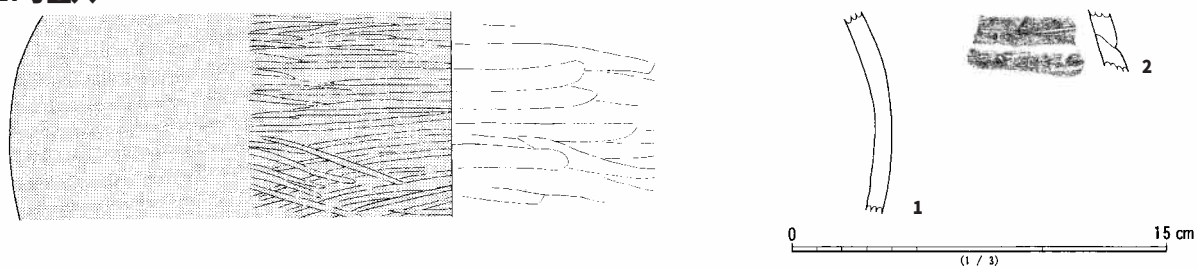
16・17号竖穴



16号竖穴

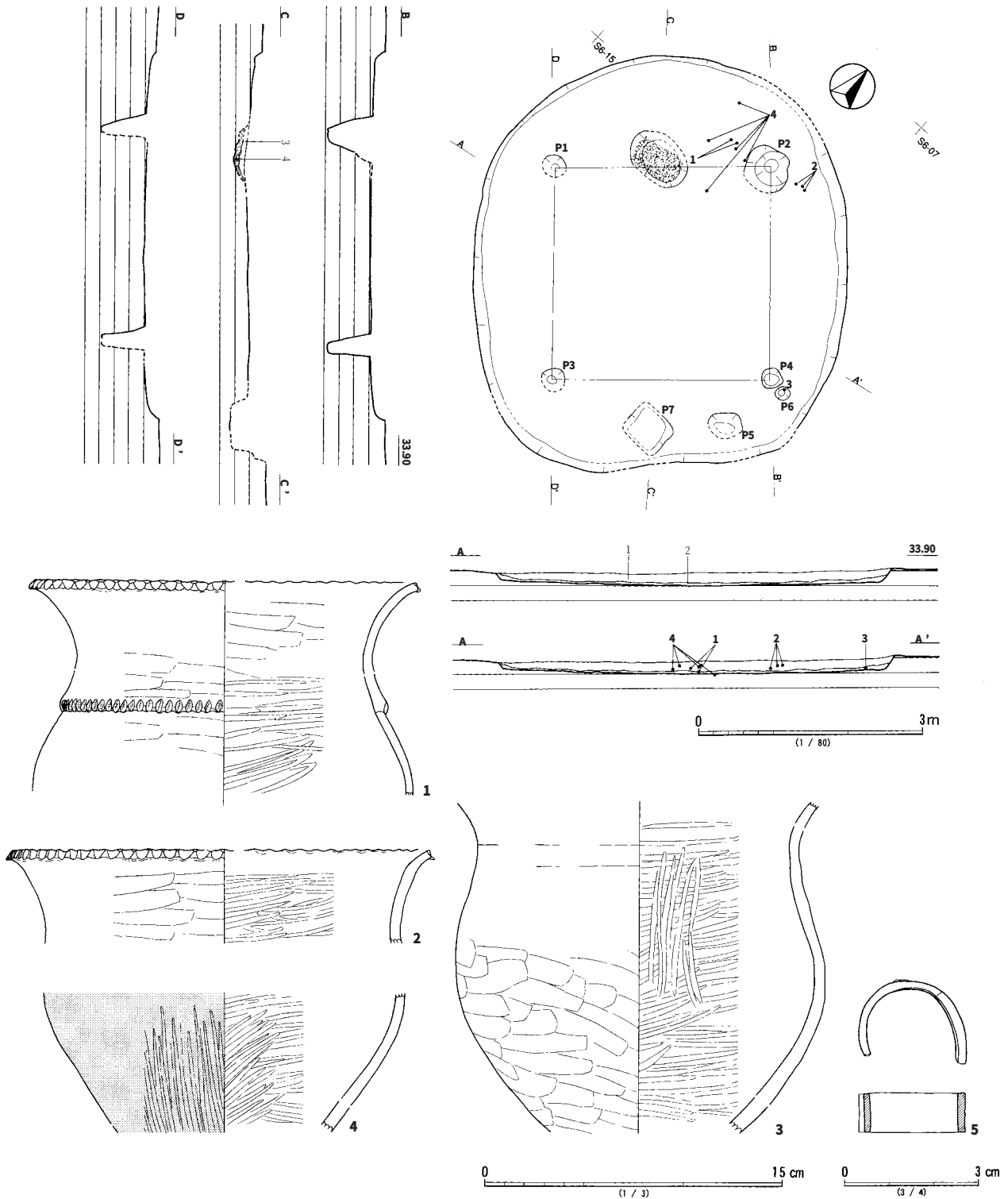


17号竖穴



第49图 16・17号竖穴 遺構遺物

18号竖穴

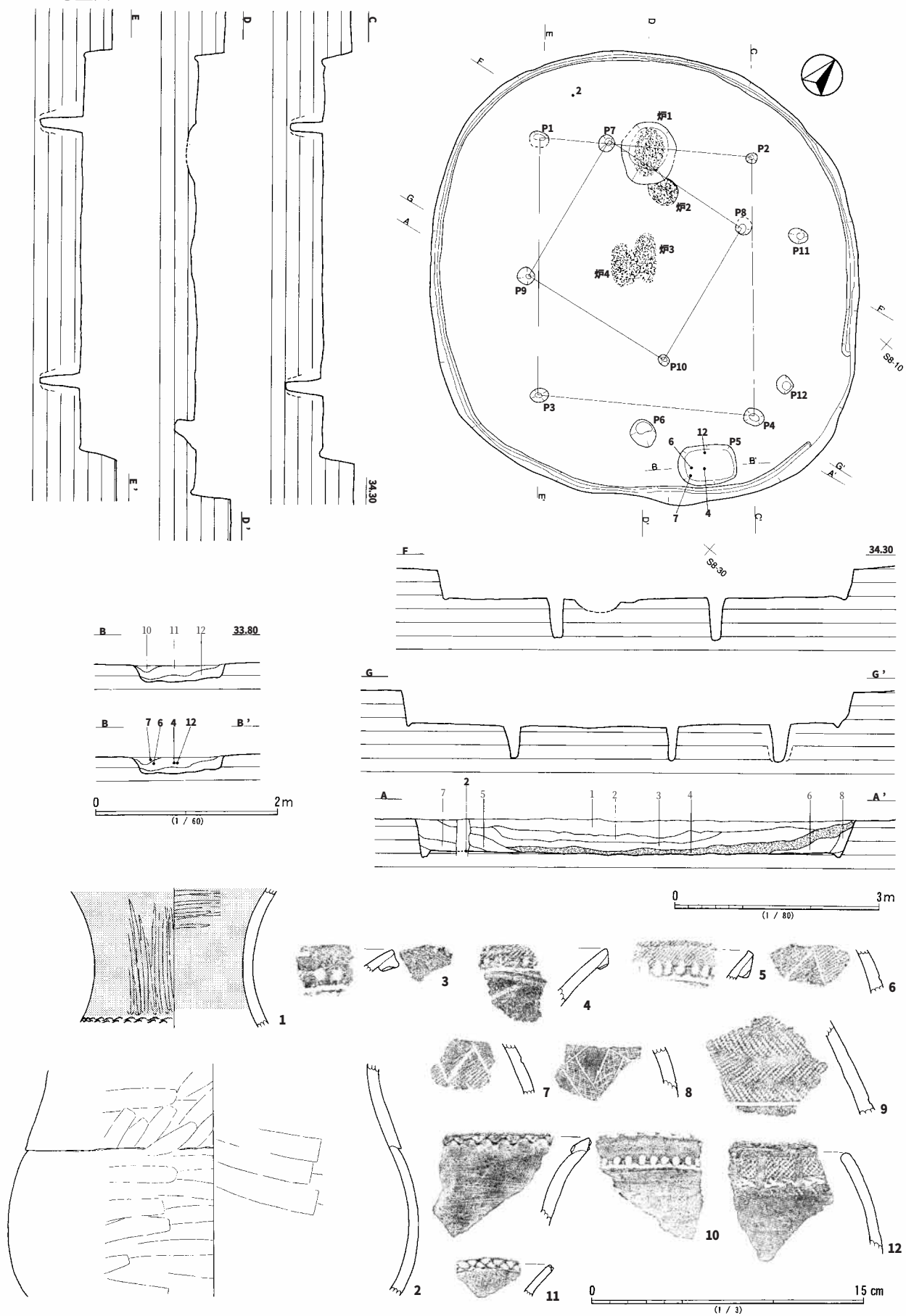


第50図 18号竖穴 遺構遺物

31°-Wである。主柱穴はP1~4であり、P6は貯蔵穴、P5は出入口施設である。炉は、0.8×0.55mを測る。竖穴堆積土は4~7層に分層され、4層が明褐色土層、5層が黒褐色土層、6・7層が暗褐色土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、1・2が壺形土器であり、1は床面から出土している。1は、単節斜縄文に沈線山形文

19号竖穴



第51图 19号竖穴 遺構遺物

を重ねるが、文様部分は小破片のため、全体の構成は明らかではない。

本竪穴の時期は、3～4期である。

17号竪穴（第49図、図版10）

17号竪穴（住居跡）は、調査区S6－39区他に所在する。16号竪穴と重複し、本遺構に対し16号竪穴が古い。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は3.82（主軸）×3.28m、床面積は9.19㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.25m、主軸方位はN－41°－Wである。主柱穴は検出されなかった。P3は出入口施設、P1・P2は貯蔵穴であろうか。炉は、平面規模0.83×0.58mを測り、南側を大形の壺形土器胴部で囲う。その南東側床面も焼けている。竪穴堆積土は1～3層に分層され、1・2層が黒褐色土層、3層が暗褐色土層である。8～10層は炉であり、8層が灰褐色土層、9層が焼土層、10層が被熱ローム層である。本遺構は、全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、1が壺形土器、2が甕形土器であり、1は炉体土器である。

本竪穴の時期は、16号竪穴に後出することから、3～4期ないしはそれ以降と推定される。

18号竪穴（第50図、図版10・49・80・84）

18号竪穴（住居跡）は、調査区S6－16区他に所在する。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は5.46（主軸）×4.96m、床面積は21.37㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.24m、主軸方位はN－46°－Wである。主柱穴はP1～4、P5は貯蔵穴である。炉は、現存部長軸長で0.85mを測る。竪穴堆積土は、1層が褐色土層、2層が暗褐色土層である。炉内、3層は暗褐色土層、4層は焼土層である。本遺構は、全体に東西方向のゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

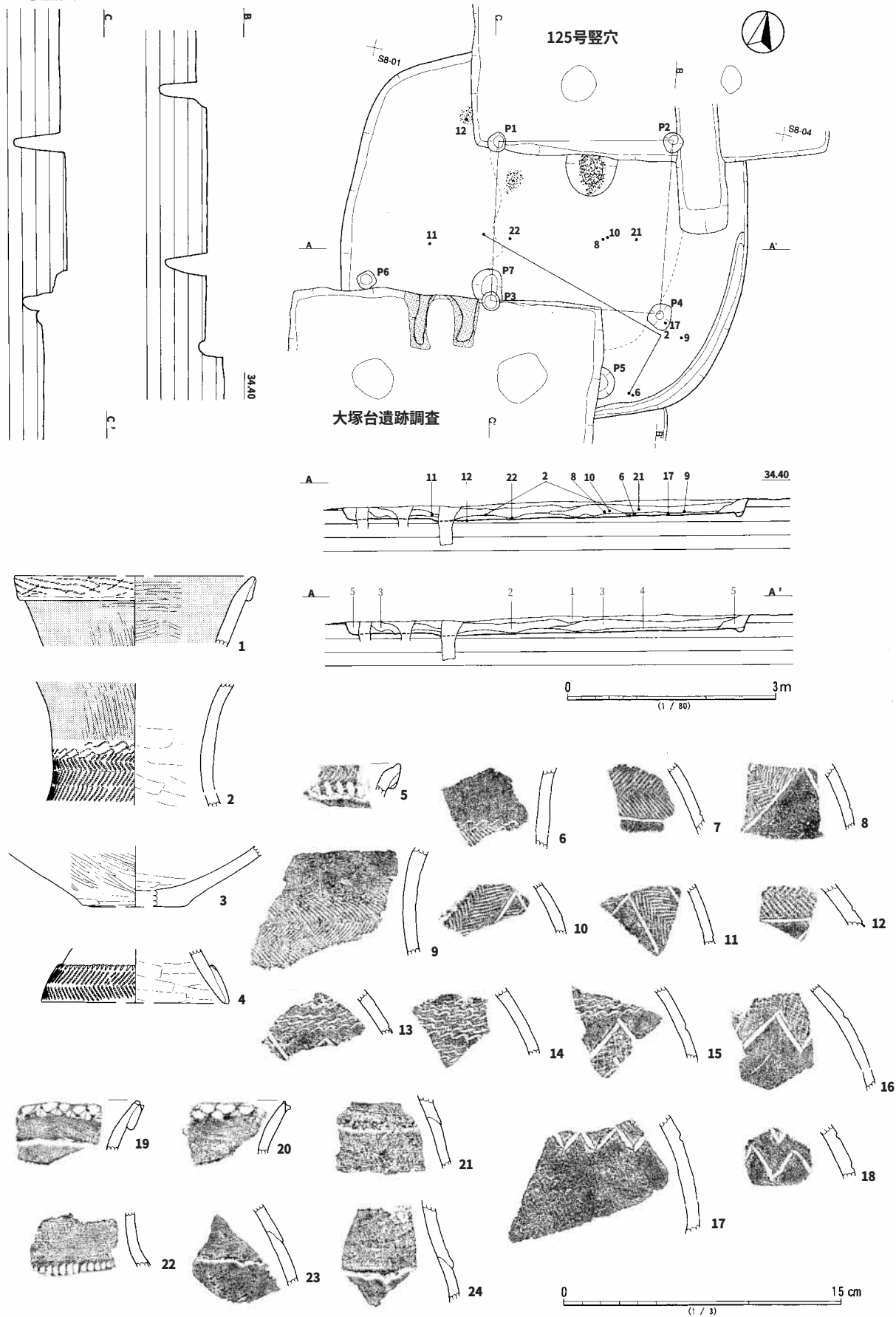
出土土器は、4が壺形土器、1～3が甕形土器であり、1・4は床面から、2・3は覆土から出土している。土器以外では、軽石1点（不実測）、環状銅製品1点が出土している。環状銅製品は、直径2.38cm、高さ0.69～0.71cm、厚さ0.16cmを測る。上下端部は明瞭な面をもち、側面はわずかに弧状を呈し、中央部が内側へ凹む。銅釧の再生品としては、他例に対して上下高が低い。なお、欠損部については、破断面のままで、新しい欠損の可能性もある。P2内から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期である。

19A・B号竪穴（第51図、図版10・70・80）

19号竪穴（住居跡）は、調査区S7－18区他に所在する。主柱穴の組み合わせから、19A号竪穴（P1～4）、19B号竪穴（P7～10）と呼称しておく。19B号竪穴が古く、竪穴範囲は確認できない。19A号竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は6.62（主軸）×6.28m、床面積は32.83㎡を測る。主柱穴は柱痕跡のみの調査のため、掘形の重複は確認できない。確認面からの深さは0.52m、19A号竪穴の主軸方位はN－39°－W、19B号竪穴はN－10°－Wである。P6は出入口施設、P5は貯蔵穴であり、19A号竪穴に帰属する。炉は、4基検出された。炉1の平面規模は0.93×0.81m、炉2は現存長0.48m、炉3は0.76×0.31m、炉4は0.64×0.38mを測る。このうち、明確な掘り込みが認められたのは炉1のみである。炉2については、19B号竪穴に帰属する可能性が高い。浅い周溝がほぼ全周する。竪穴堆積土は1～8層に分層される。1・2層は明褐色土層、3・5・8層は褐色土層、4・6・7層が暗褐色土層である。このうち、4層には多量の焼土、炭化物が認められた。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、焼土の堆積状況、遺物の出土状況からみて、失火、放火などの被災によるものではなく、

20号竖穴



第52図 20号竖穴 遺構遺物

竪穴破棄後の焼却によるものであろう。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

19B号竪穴は、炉の検出状況から、床面は19A号竪穴とほぼ同一レベルであったと推定される。建て替えの可能性を想定したが、主軸方位は一致しない。

出土土器は、1・3～9が壺形土器、12が椀ないしは無頸壺形土器、2・10・11が甕形土器であり、2は床面から、4・6・7・12はP5内から出土している。6・7は同一個体と推定される。前述したように、8・10は14号竪穴出土土器と近似する。19B号竪穴にともなう遺物は出土していない。

19A号竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

20号竪穴（第52図、図版10・49・70・76）

20号竪穴（住居跡）は、調査区S8-02区他に所在する。125号竪穴・大塚台遺跡調査区竪穴と重複し、本遺構に対し125号竪穴・大塚台調査区竪穴が新しい。実際には、大塚台遺跡側にもう1軒弥生時代後期の竪穴が重複するが、その新旧関係は不明である。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、主軸長は復原値で約5.33mを測る。竪穴西側は、支柱穴との位置関係から掘りすぎの可能性が高く、現状で5.8mを測るが、おそらく4.5m前後と推定される。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.24m、主軸方位はN-8°-Wである。支柱穴はP1～4であり、P5は貯蔵穴である。炉は現存部で0.7mを測る。他に2ヵ所で床面が焼けていた。周溝は南東側一部で検出された。竪穴堆積土は1～5層に分層され、1層が褐色土層、2・3・5層が暗褐色土層、4層は黒褐色土層である。本遺構は部分的にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、1～3・5～18が壺形土器、19～24が甕形土器、4が高杯形土器であり、6・12・17・22は床面から、2・8～11・21は覆土から出土している。10・11、13～16、17・18、23・24は同一個体の可能性がある。13～16は、結節文帯に、充填網目状撚糸文を地文とする山形縄文帯を付加する。安房系と考えられる。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

なお、大塚台遺跡調査区竪穴は、実際には今回大半を調査している（調査時46号遺構）。畿内産の暗文土器が出土した、山田橋遺跡群では数少ない奈良時代の竪穴である。

21号竪穴（第53図、図版10・70・80）

21号竪穴（住居跡）は、調査区S8-06区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は3.77（主軸）×3.62m、床面積は10.18m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.32m、主軸方位はN-15°-Wである。支柱穴は検出されなかった。炉は、0.65×0.49mを測る。竪穴堆積土は1～5層に分層され、1・3・5層が褐色土層、2・4層が暗褐色土層である。6・7層は炉覆土であり、7層は焼土層である。

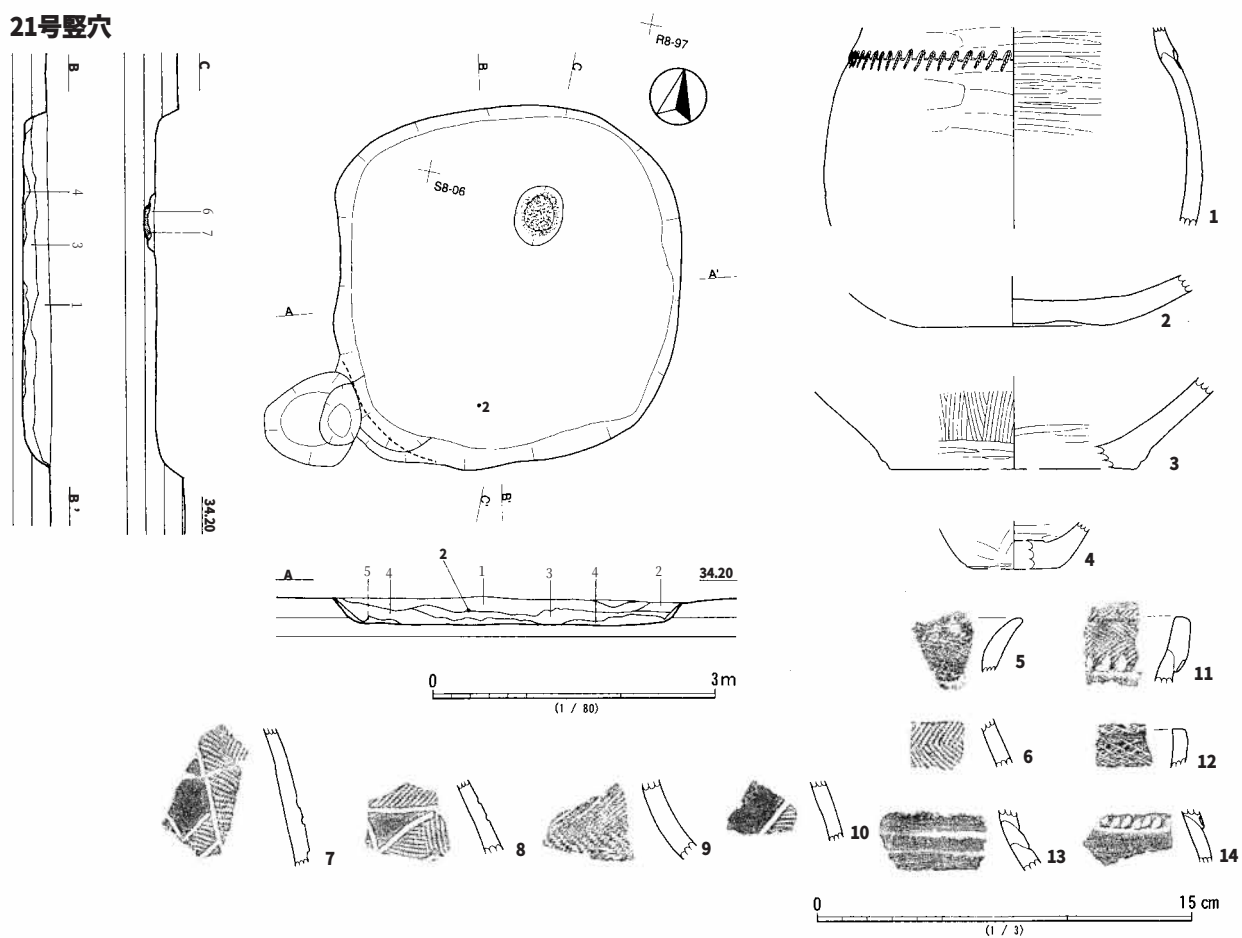
出土土器は、5～10が壺形土器、1～3・13・14が甕形土器、11・12が椀ないしは高杯形土器であり、2は覆土から出土している。8・10は同一個体と推定される。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

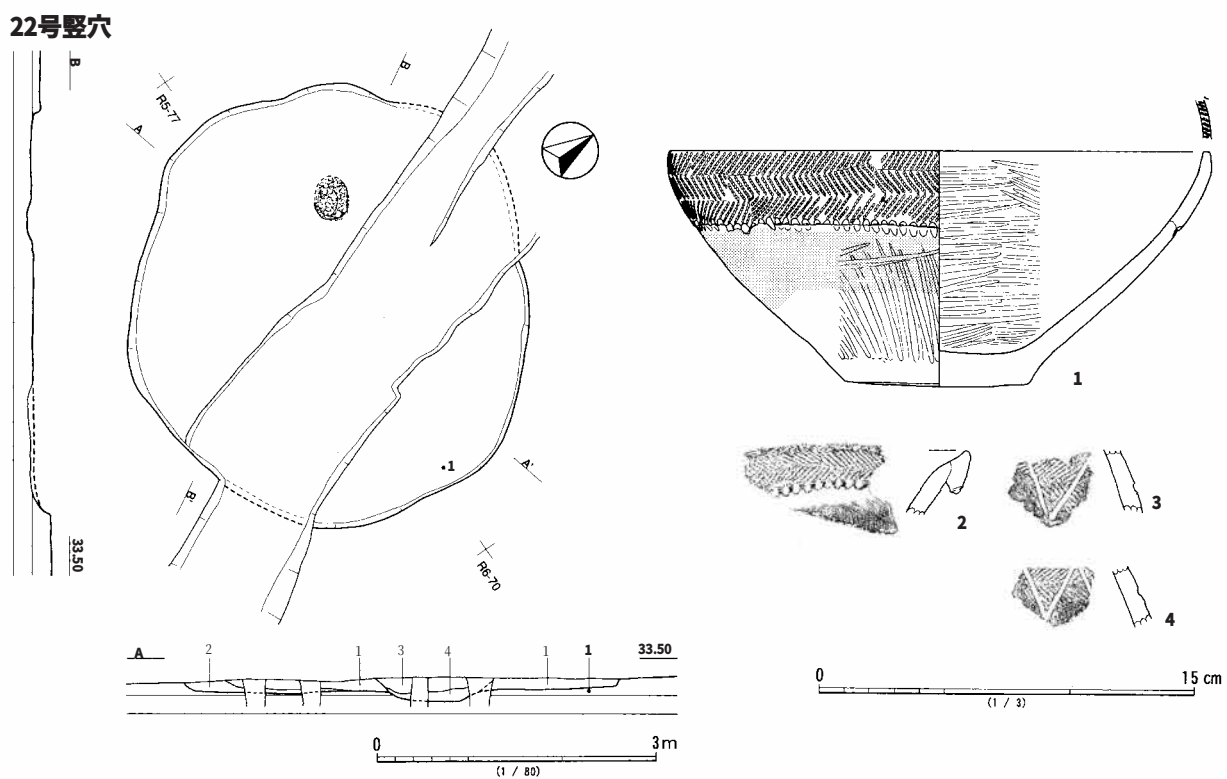
22号竪穴（第53図、図版10・49・70）

22号竪穴（住居跡）は、調査区R5-68区他に所在する。ほぼ中央を近世以降の溝が縦断する。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は4.72（主軸）×4.18m、床面積は14.63m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.14m、主軸方位はN-45°-Wである。支柱穴は検出されな

21号竖穴



22号竖穴



第53图 21・22号竖穴 遺構遺物

かった。炉は、 $0.49 \times 0.37\text{m}$ を測る。堆積土は1～4層に分層され、竪穴部分1層は暗褐色土層、2層は黒褐色土層である。溝3・4層は灰褐色土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、2～4が壺形土器、1が椀形土器であり、1は床面から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

23号竪穴（第54・56図、図版10）

23号竪穴（住居跡）は、調査区R5－17区他に所在する。18号炉穴、24号竪穴と重複するが、24号竪穴との新旧関係は明らかではない。竪穴の掘り込みは検出されていない。炉およびその周囲に硬化面が検出されたこと、弥生土器片が若干出土したことから竪穴と判断した。全体規模は不明であるが、主柱穴が確認されていないことから、比較的小規模と推定される。主軸方位は不明、炉の掘り込み規模も明確ではない。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

図示可能な出土土器は、1の甕形土器のみである。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、細別時期は不明。

24号竪穴（第54・56図、図版10・11・49・70・84）

24号竪穴（住居跡）は、調査区R6－10区他に所在する。18号炉穴、23号竪穴と重複し、本遺構に対し18号炉穴が古く、23号竪穴との関係は不明。竪穴平面形態は、隅丸長方形を呈し、全体規模は 10.82 （主軸） $\times 8.29\text{m}$ 、床面積は 81.25m^2 を測る。ただし、北西隅、南隅とも若干掘りすぎであると推定される。建て替えは確認できない。確認面からの深さは 0.35m 、主軸方位はN－ 38° －Wである。主柱穴はP1～4であり、いずれも柱は抜き取られている。P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模 $1.08 \times 0.8\text{m}$ を測り、粘土板状にロームを貼る。他に、竪穴東側床面が焼けていた。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1層が黒褐色土層、2層が褐色土層、3層が暗褐色土層、4層が焼土層である。P2は、5・7・9・10層が褐色土層、6層が暗褐色土層、8層が炭化粒を主体とする層、11層がロームブロックを主体とする層、炉は、12層が灰褐色土層、13層がソフトローム状の褐色土層、14層が被熱ローム層である。竪穴覆土に焼土層が部分的に認められたが、投棄によるものと推定される。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。なお、竪穴東辺部は確認調査によって一部破壊されている。

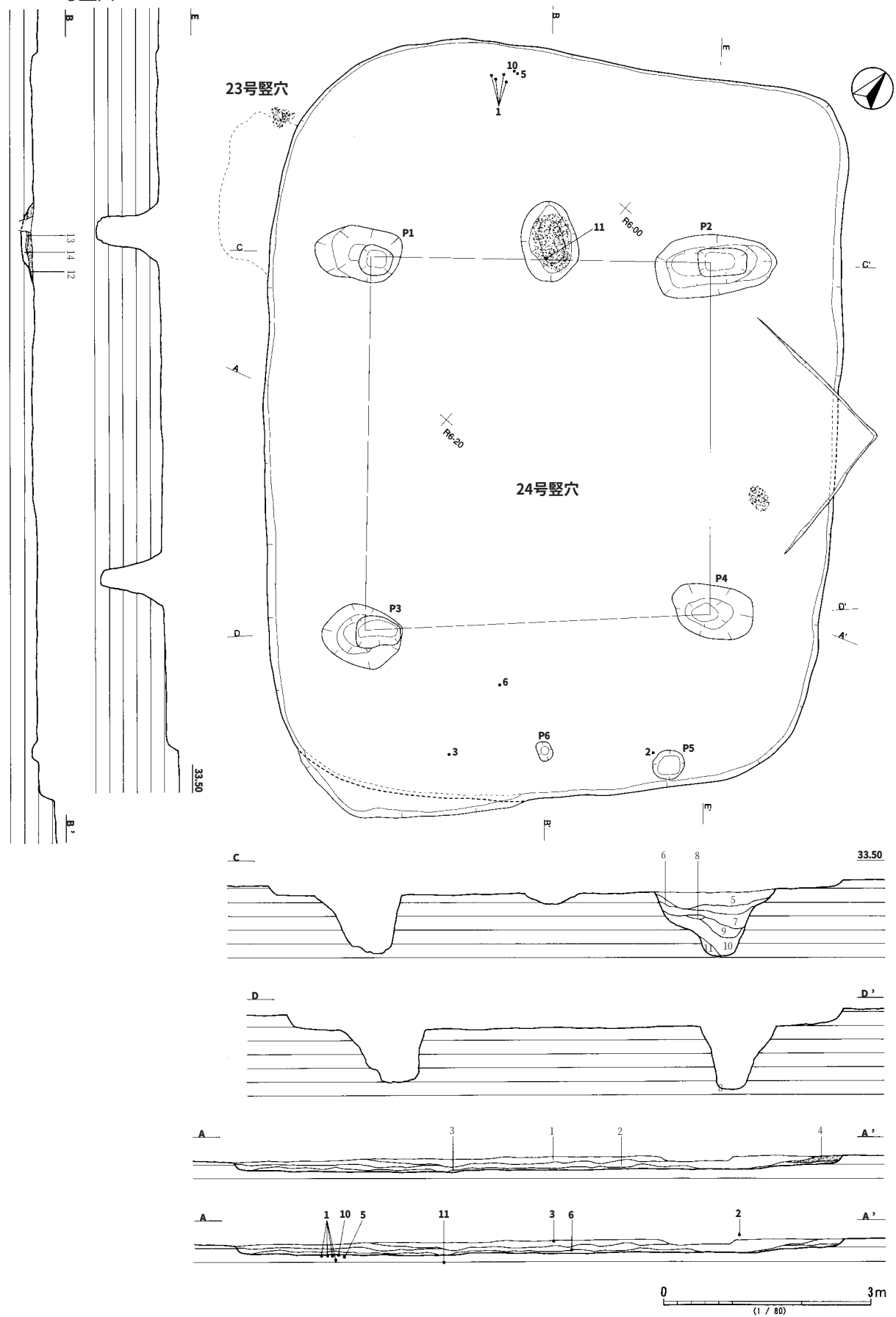
出土土器は、4～6・8・9が壺形土器、7が広口壺形土器、1・2が甕形土器、10が椀ないしは高杯形土器であり、1・5・10は床面から、2・3・6は覆土から出土している。土器以外では、土製紡錘車1点、土製勾玉1点が出土している。紡錘車は炉内から出土した。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

25A・B号竪穴（第55・56図、図版10・11・70・84）

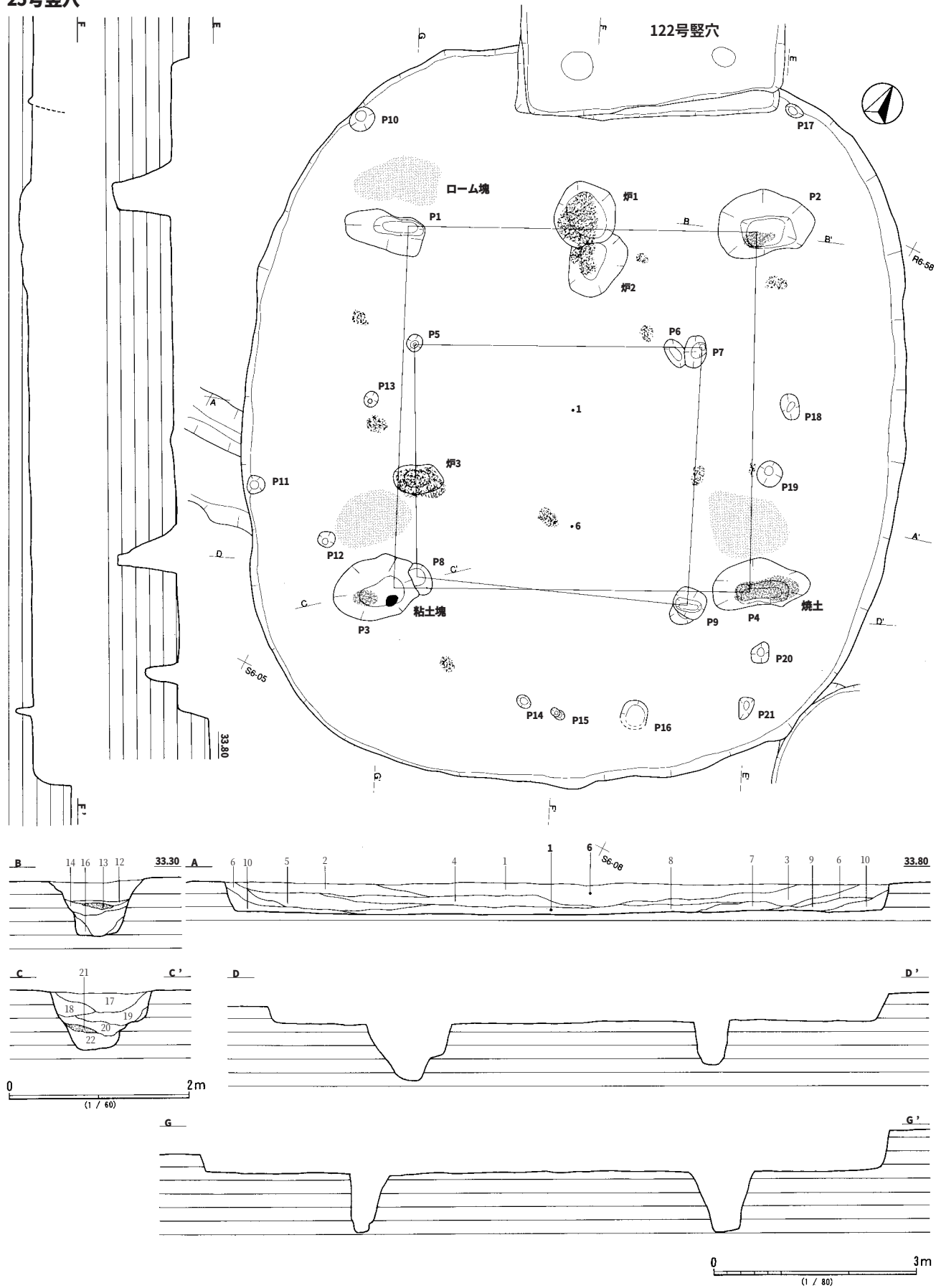
25号竪穴（住居跡）は、調査区R6－76区他に所在する。122号竪穴、26号竪穴と重複し、本遺構に対し、122号竪穴が新しく、26号竪穴との新旧関係は不明。建て替えによると推定される主柱穴の重複があり、組み合わせから、25A号竪穴（P1～4）、25B号竪穴（P5・7～10）と呼称しておく。25B号竪穴が古く、竪穴範囲は確認できない。25A号竪穴の平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は 10.98 （主軸） $\times 9.84\text{m}$ 、床面積は 88.44m^2 を測る。確認面からの深さは 0.61m 、主軸方位はN－ 24° －Wである。25B号竪穴の主軸もほぼ同方向である。25A号竪穴の主柱穴は、柱がすべて抜

23・24号竖穴



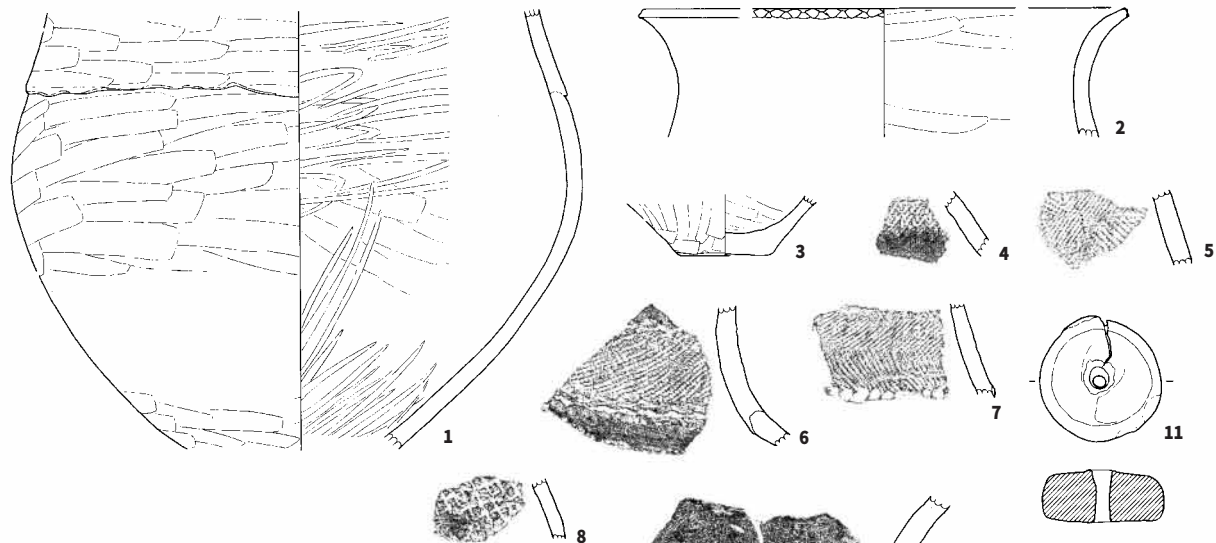
第54図 23・24号竖穴 遺構

25号竖穴

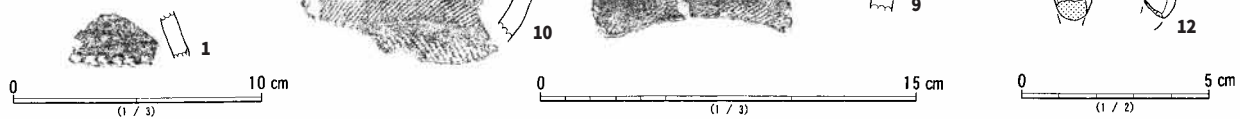


第55図 25号竖穴 遺構

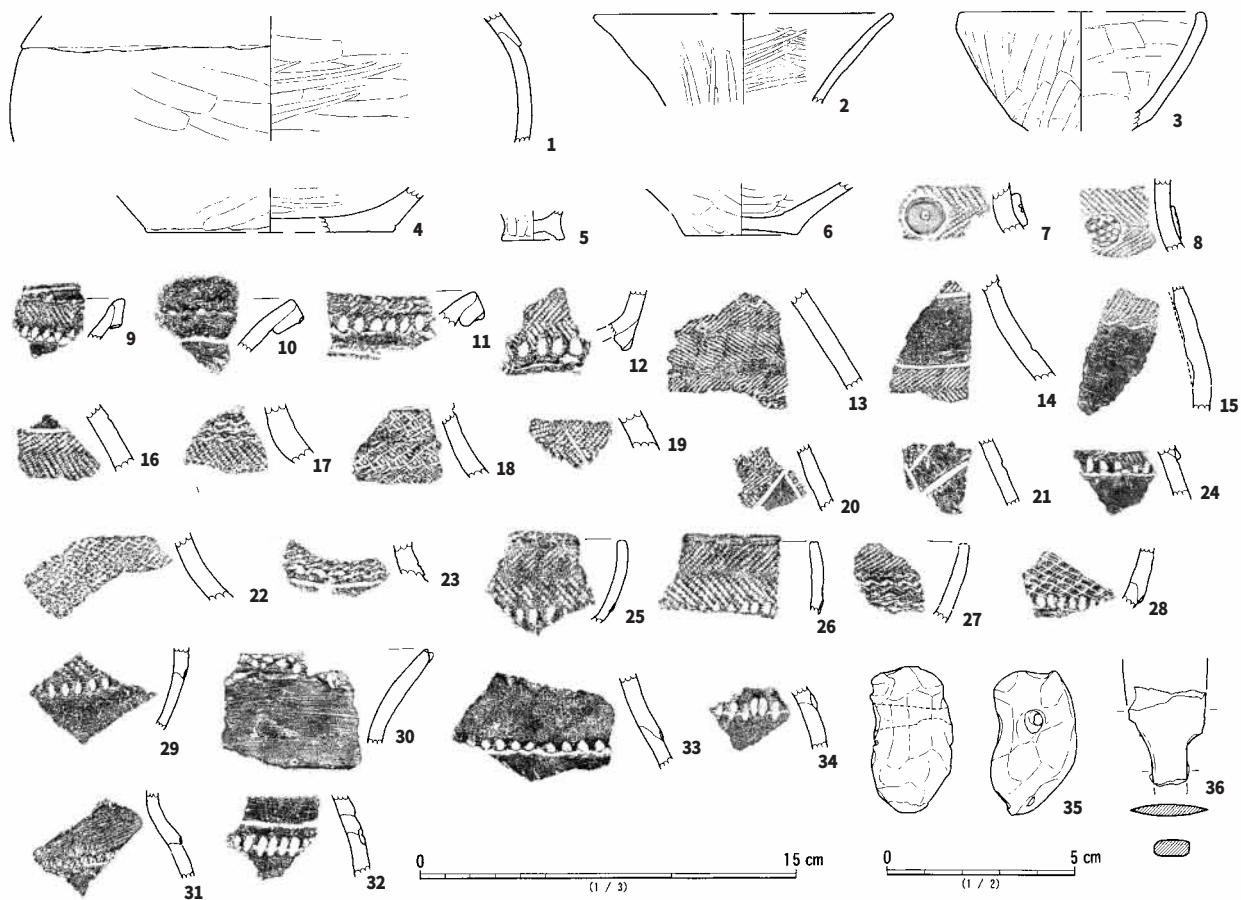
24号竖穴



23号竖穴



25号竖穴



第56图 23·24·25号竖穴 遺物

き取られており、抜き取り時の掘り上げ土と推定されるローム主体の土塊が、柱穴北側床面上で検出された。また、P2～4柱穴内中位に焼土が、P3内に粘土塊が認められた。焼土は、投げ込みによるものか、あるいはそこで火を燃やした痕跡かは判断できない。P14・15は出入口施設であろうか。炉火床面は、9ヵ所で検出された。このうち掘り込みが認められたのは炉1～3であり、他は床硬化面上が焼けていた。炉1の平面規模は0.97×0.91m、炉2は1.01×0.82m、炉3は0.74×0.44mを測る。炉2は、25B号竪穴に対応する可能性もあるが、この方向に主軸をとる竪穴は他に認められない。竪穴および柱穴の堆積土は1～22層に分層される。1・20層が黒褐色土層、2・6・9～12・14・15・17・18・22層が暗褐色土層、3・4・7・8・16・19層が褐色土層、5層が明褐色土層、13・21層が焼土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、2・7～23が壺形土器、4・6・30～34が甕形土器、3が椀形土器、1・24～29が椀ないしは高杯形土器であり、1・6は覆土から出土している。他は一括で取り上げられているため、出土位置等は不明。土器以外では、土製勾玉1点、柳葉式と推定される鉄鏃1点が出土している。ともに出土状況は不明。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

26号竪穴（第57図、図版11・70）

26号竪穴（住居跡）は、調査区R6－89区他に所在する。25号竪穴と重複しているが、接している程度であるため、新旧の判断はできない。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は4.27（主軸）×4.33m、床面積は14.97㎡を測る。確認面からの深さは0.49m、主軸方位はN－37°－Wである。主柱穴はP1～4であり、建て替えは確認できない。P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.75×0.67mを測り、南側を土器で囲う。竪穴堆積土は1～7層に分層され、1～4・6層が暗褐色土層、5層が褐色土層、7層が多量の炭化物を含む焼土層である。5層にも焼土が認められた。炭化物は、とくに竪穴中央部焼土下層に顕著であった。炉は8～10層であり、8層は焼土まじりの黒褐色土、9層は焼土層、10層は被熱ローム層である。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、焼土の堆積状況、遺物の出土状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

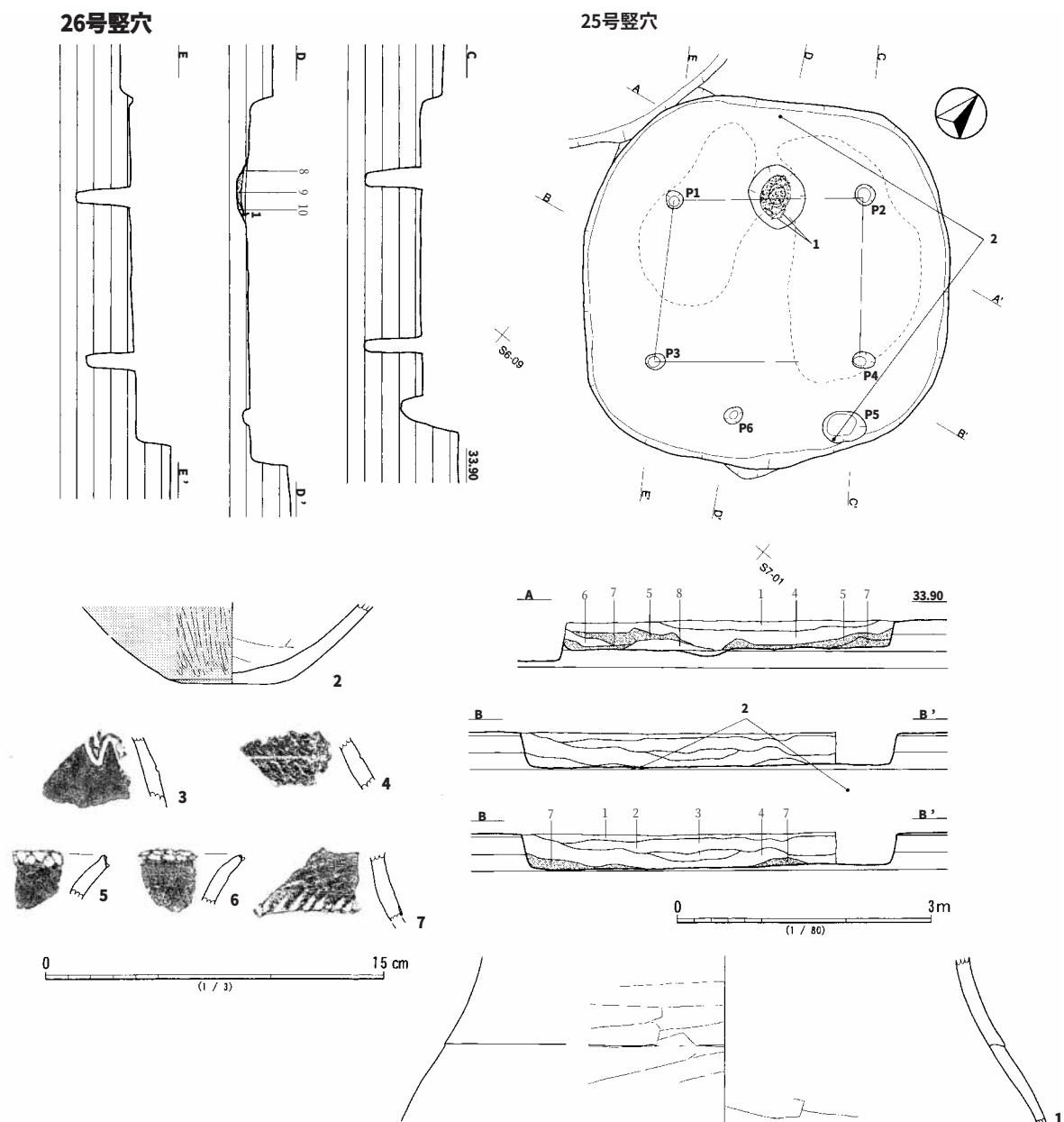
出土土器は、2～4が壺形土器、1・5～7が甕形土器であり、1は炉体土器、2・4はP5内から出土している。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩が出土している。

本竪穴の時期は、1～3期と推定される。

27号竪穴（第58図、図版11・70・84・85）

27号竪穴（住居跡）は、調査区R7－13区他に所在する。1号方形周溝墓と重複する。竪穴の土層断面に1号方形周溝墓周溝部の記載がなく、この観察結果によるならば本竪穴が新しい。ただし、出土土器等によるならば、新旧は逆である可能性も考えられる。27号竪穴と1号方形周溝墓は、調査年次が異なることもあり、土層断面の記載はかならずしも優先できない。

竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は4.2（主軸）×3.6m、床面積は11.91㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.5m、主軸方位はN－46°－Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模0.82×0.61mを測る。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1・2層が暗褐色土層、3層が粒状の炭化物を多量に含む焼土層、4層が黒褐色土層



第57図 26号竪穴 遺構遺物

である。焼土層は東辺部側に偏る。本竪穴は火災に遭っていると推定される。ただし、焼土の堆積状況、遺物の出土状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

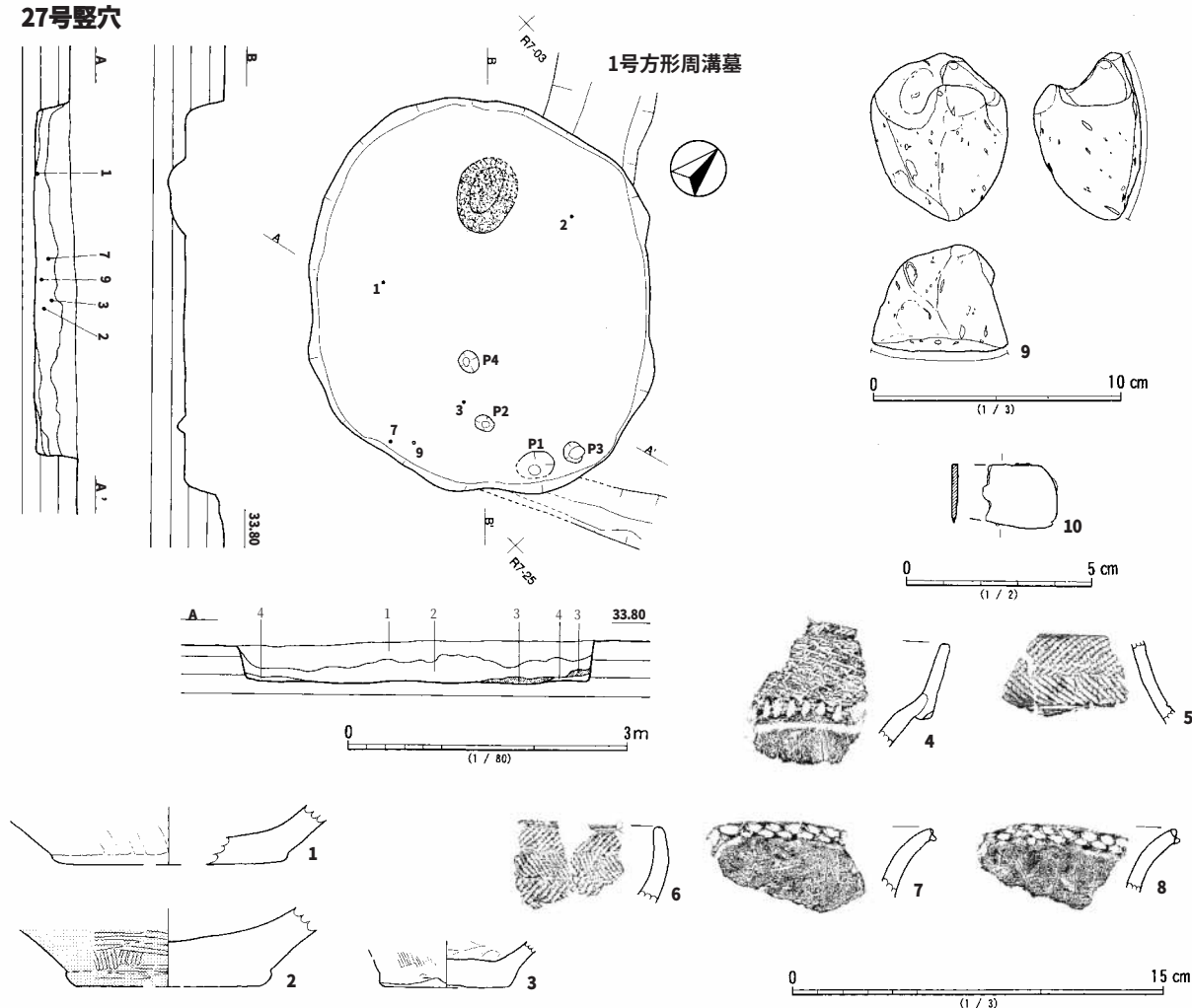
出土土器は、2・5が壺形土器、1・7・8が甕形土器、4・6が椀ないしは高杯形土器であり、1は床面から、2・3・7は覆土から出土している。7・8は同一個体と推定される。土器以外では、磨面が明瞭な軽石1点、鉄器片1点が出土している。鉄器は、一端に刃部をもつが、器種は特定できない。軽石は覆土から出土している。鉄器の出土状況は不明。

本竪穴の時期は、1～3期と推定される。

28号竪穴（第59図、図版12・31）

28号竪穴は、調査区Q7～89区他に所在する。2号方形周溝墓と重複し、本遺構に対し2号方形周溝

27号竖穴



第58図 27号竖穴 遺構遺物

墓が新しい。また、中央を近世以降の溝が縦断する。竖穴平面形態は、長方形を呈し、全体規模は3.35（主軸）×2.91m、床面積は8.03m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.14m、主軸方位はN-26°-Wである。支柱穴、炉等の施設は検出されなかった。堆積土は1～4層に分層され、1層が暗褐色土層、2層が明褐色土層、3層が黒褐色土層、4層が褐色土層であり、1・2層は焼土を多量に含む。本竖穴は火災に遭っていると推定される。

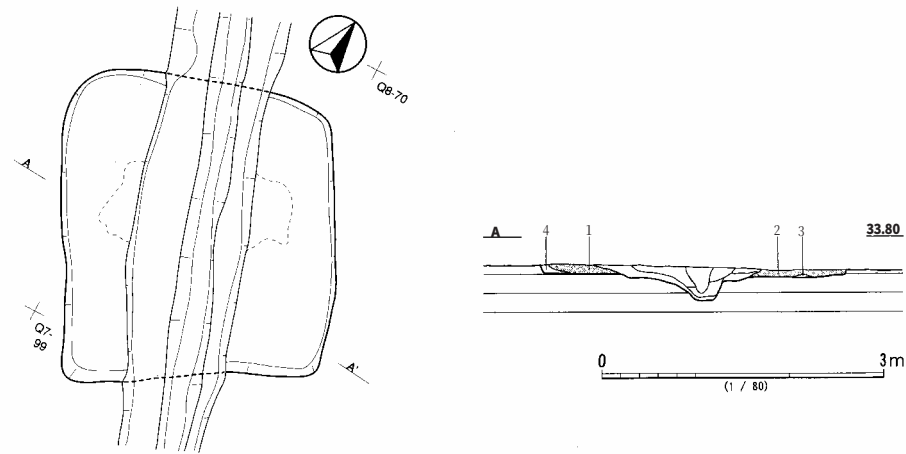
遺物は、出土していない。

本竖穴は、中央部を溝によって破壊されていることもあり、硬化面が認められること以外、住居としての機能が明確ではない。時期的な判断材料も乏しいが、一応弥生時代後期の所産と考えるならば、2号方形周溝墓との重複関係から、1～3期と推定される。

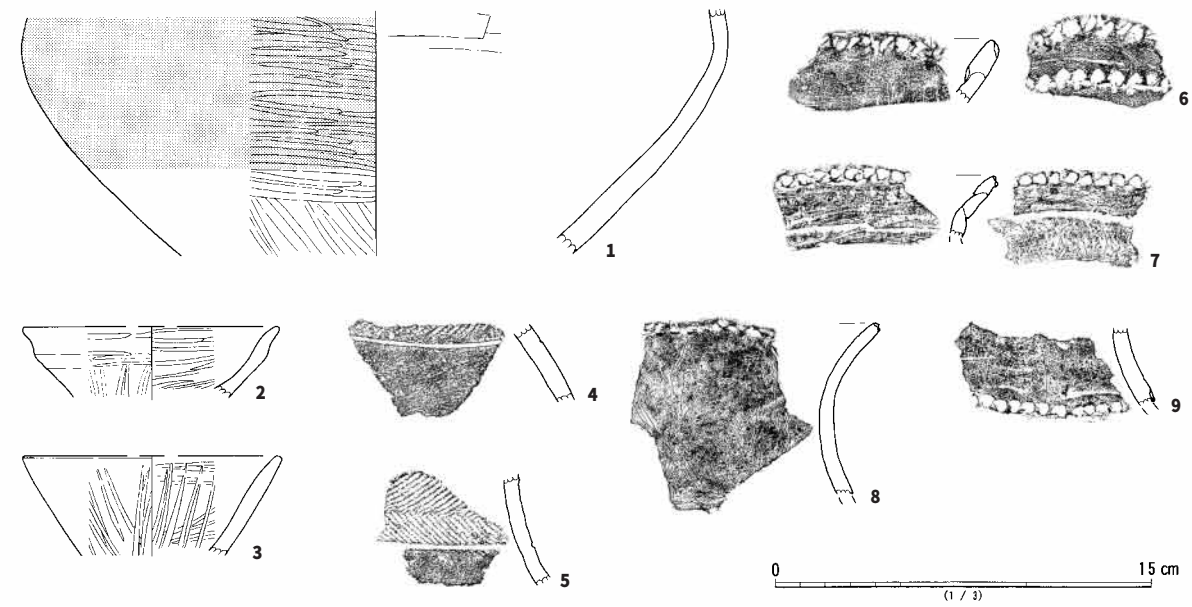
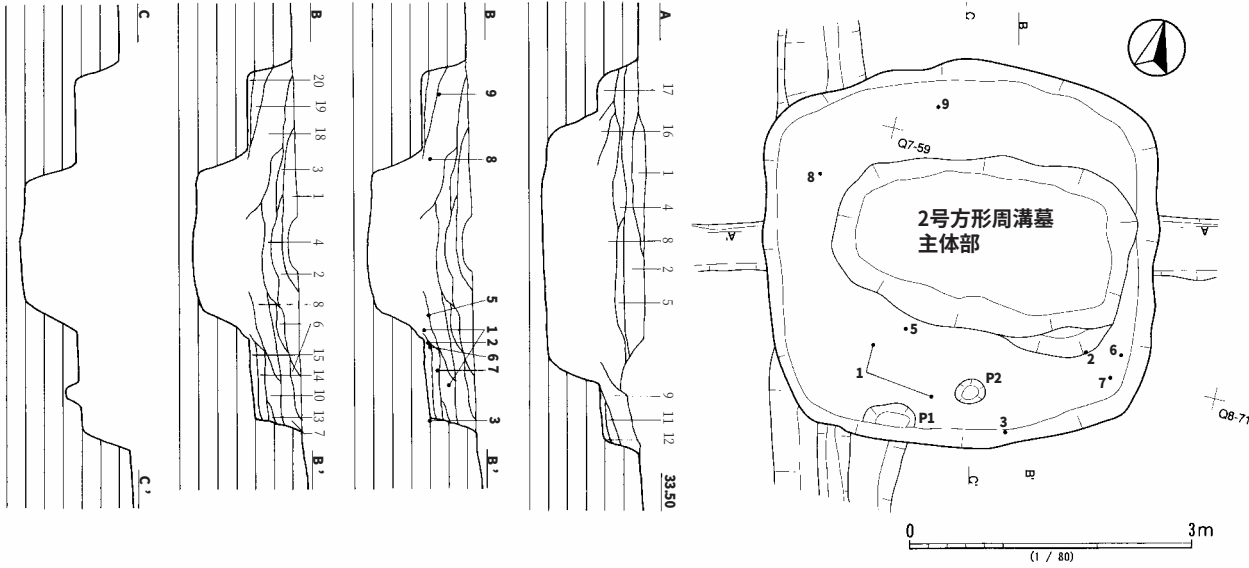
29号竖穴（第59図、図版12・70）

29号竖穴（住居跡）は、調査区Q7-59区他に所在する。2号方形周溝墓主体部と近世以降の溝と重複する。2号方形周溝墓主体部は、本竖穴廃棄直後に、その凹部を利用して構築されたものと推定される。竖穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は4.16（主軸）×4.18m、床面積は12.80m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.56m、主軸方位はN-15°-Wである。支柱穴は検出されなかった。P2は貯蔵穴、P1は出入口施設である。竖穴内土層のうち、1～9・16・18層

28号竖穴



29号竖穴



第59图 28・29号竖穴 遺構遺物

は方形周溝墓主体部埋土および棺内崩落土である。11～15・17・19・20層は29号竪穴覆土、竪穴覆土上10層はロームブロックからなる黄褐色土層であり、主体部掘り上げ土と推定される。

11～13・15・19・20層が黒褐色土層、14・17層が暗褐色土層である。

出土土器は、1・3～5が壺形土器、6～9が甕形土器であり、1・3・5・6は床面から、7～9は覆土から出土している。1・4は同一個体の可能性がある。2は、床面ないしは墓坑掘形肩部から出土している。器台形土器と推定されるが、その場合時期的にはあわない。

本竪穴の時期は、1～3期と推定される。

30号竪穴（第60・61図、図版12・50・70・78）

30号竪穴（住居跡）は、調査区R8—58区他に所在する。34・35号竪穴と重複し、本遺構に対し34・35号竪穴が古い。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は6.77（主軸）×6.05m、床面積は32.30㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.54m、主軸方位はN—42°—Wである。支柱穴はP1～4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模1.02×0.81mを測る。竪穴堆積土は1～6層に分層され、1層が灰褐色土層（攪乱）、2層が暗褐色土層、3～6層が褐色土層である。貯蔵穴は、7層が暗褐色土層、8層が褐色土層である。

出土土器は、1・8・10・13～23が壺形土器、2・3・5～7・11・24～28が甕形土器、9が器台形土器、12が高杯形土器、29・30が椀ないしは高杯形土器であり、1・2・6・8・26は床面から、5はP5内から、7は覆土から出土している。16～21は同一個体と推定され、付加条3種を地文とする。なお、37号竪穴13（第68図）のうち1片は、本竪穴から出土している。出土位置等是不明である。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

31号竪穴（第62図、図版12・49・50・70・77・79・82・85）

31号竪穴（住居跡）は、調査区Q8—53区他に所在する。2号方形周溝墓と接しているが、新旧関係は不明。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は4.17（主軸）×3.93m、床面積は12.44㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.36m、主軸方位はN—7°—Wである。確実に支柱穴と考えられるものは検出されなかった。P6は貯蔵穴、P5は出入口施設である。炉は、平面規模0.74×0.63mを測る。竪穴堆積土は1～6層に分層され、1～4層が暗褐色土層、5・6層が黒褐色土層であり、4～6層とくに6層に焼土が認められた。本竪穴は火災に遭っていると推定される。焼土の堆積状況からは、破棄後の上屋焼却によるものか、あるいは被災によるものかの判断は難しい。

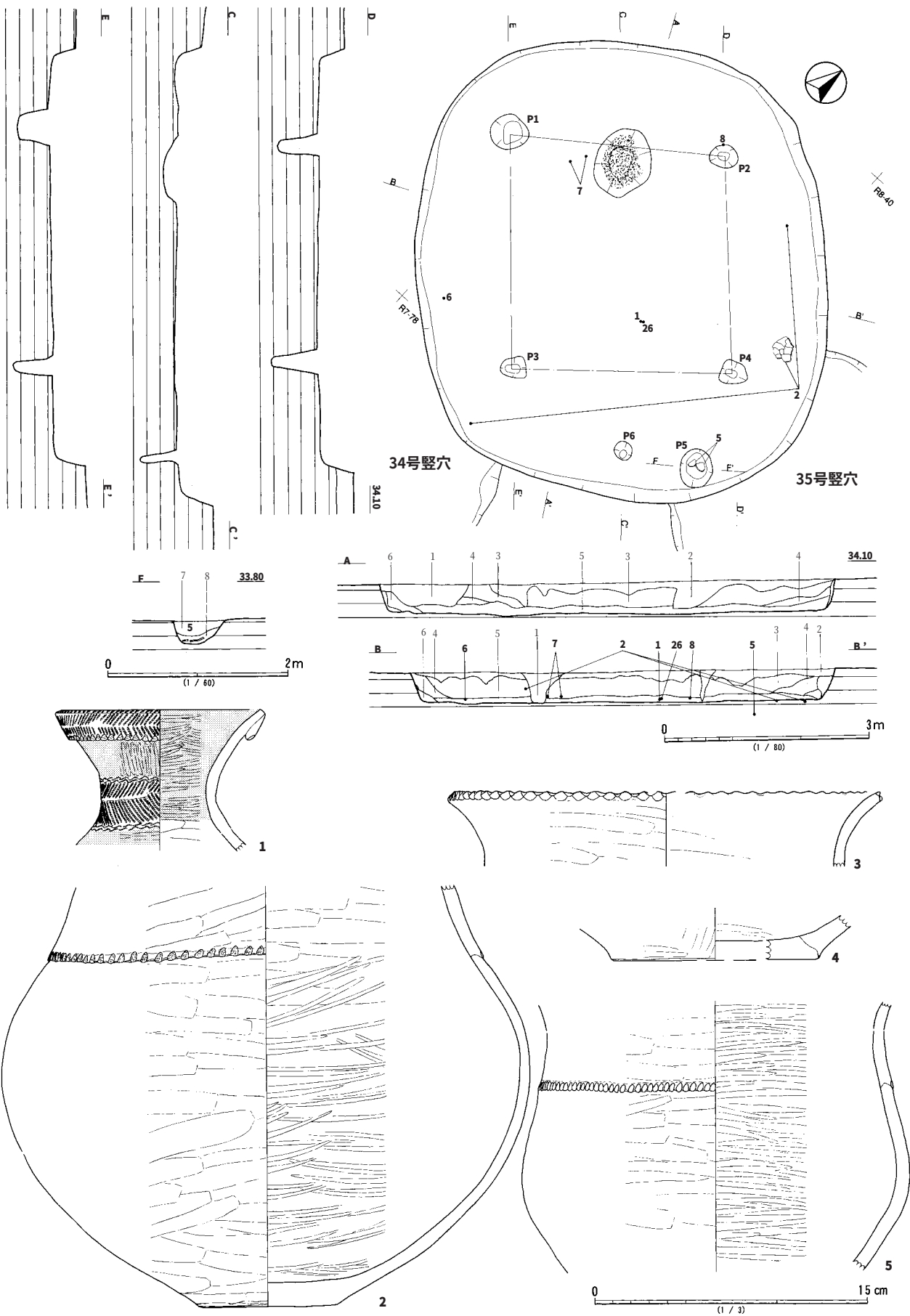
出土土器は、1・2・4・9が甕形土器、3が高杯形土器、5・6が壺形土器、7・8が椀ないしは高杯形土器であり、1・2・6・7・9は床面から、3～5・8は覆土から出土している。5・6は同一個体である。1は、ほぼ完形で、遺存遺物と考えられる。3は、覆土下層を中心に、破片が散在していた。土器以外では、砥石1点が出土している。出土状況は不明。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

32号竪穴（第61図、図版12）

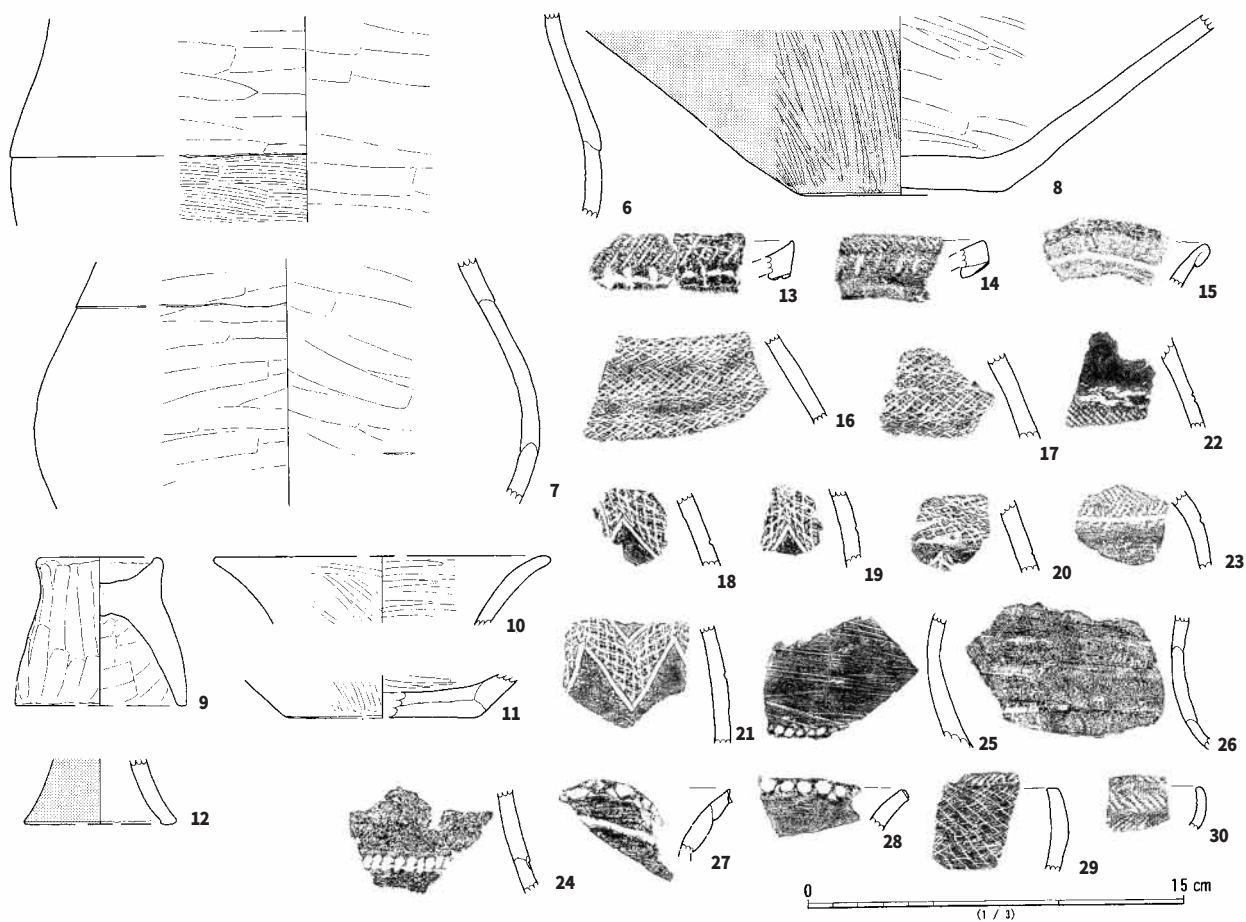
32号竪穴（住居跡）は、調査区R7—55区他に所在する。ゴボウ耕作溝による攪乱の影響で、竪穴北半部は範囲が不確実である。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は4.68（主軸）×4.04m、床面積は13.82㎡程度と推定される。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.25m、主軸方位はN—25°—Wである。支柱穴はP1～4であるが、竪穴の主軸と対応していない。P1は貯蔵穴、P2

30号竖穴

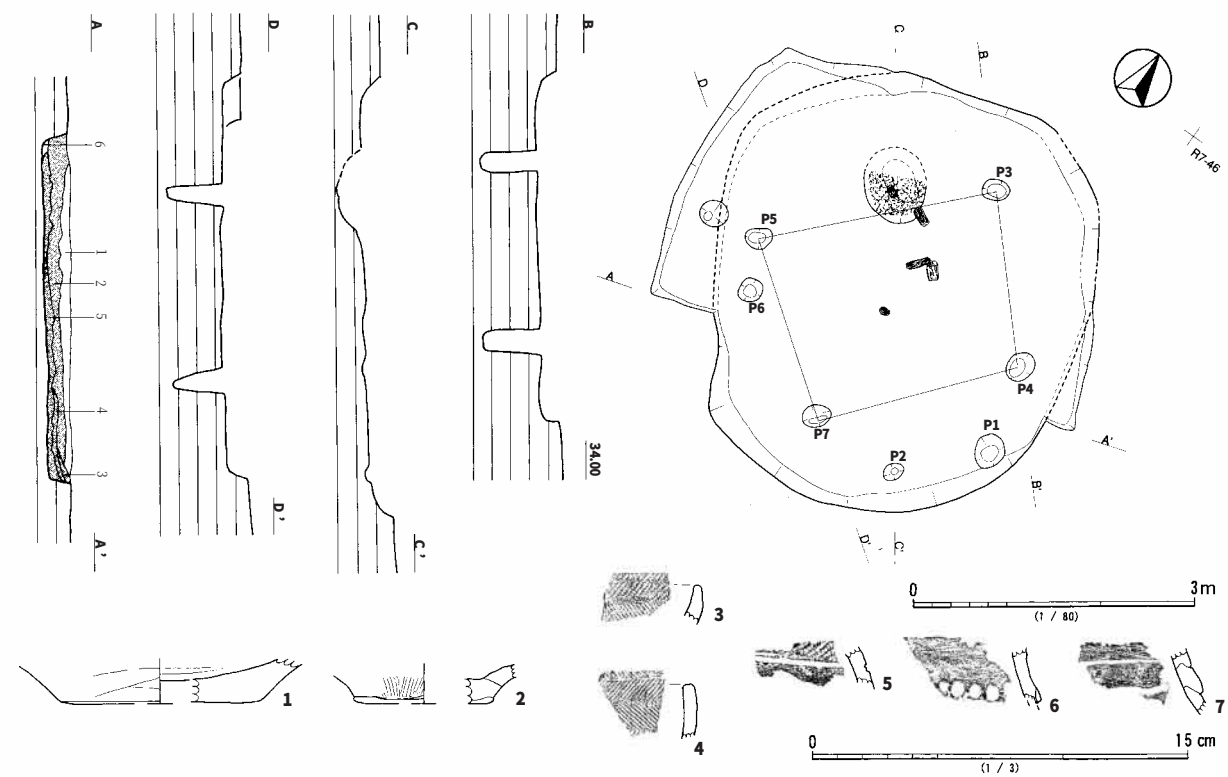


第60图 30号竖穴 遺構遺物

30号竖穴

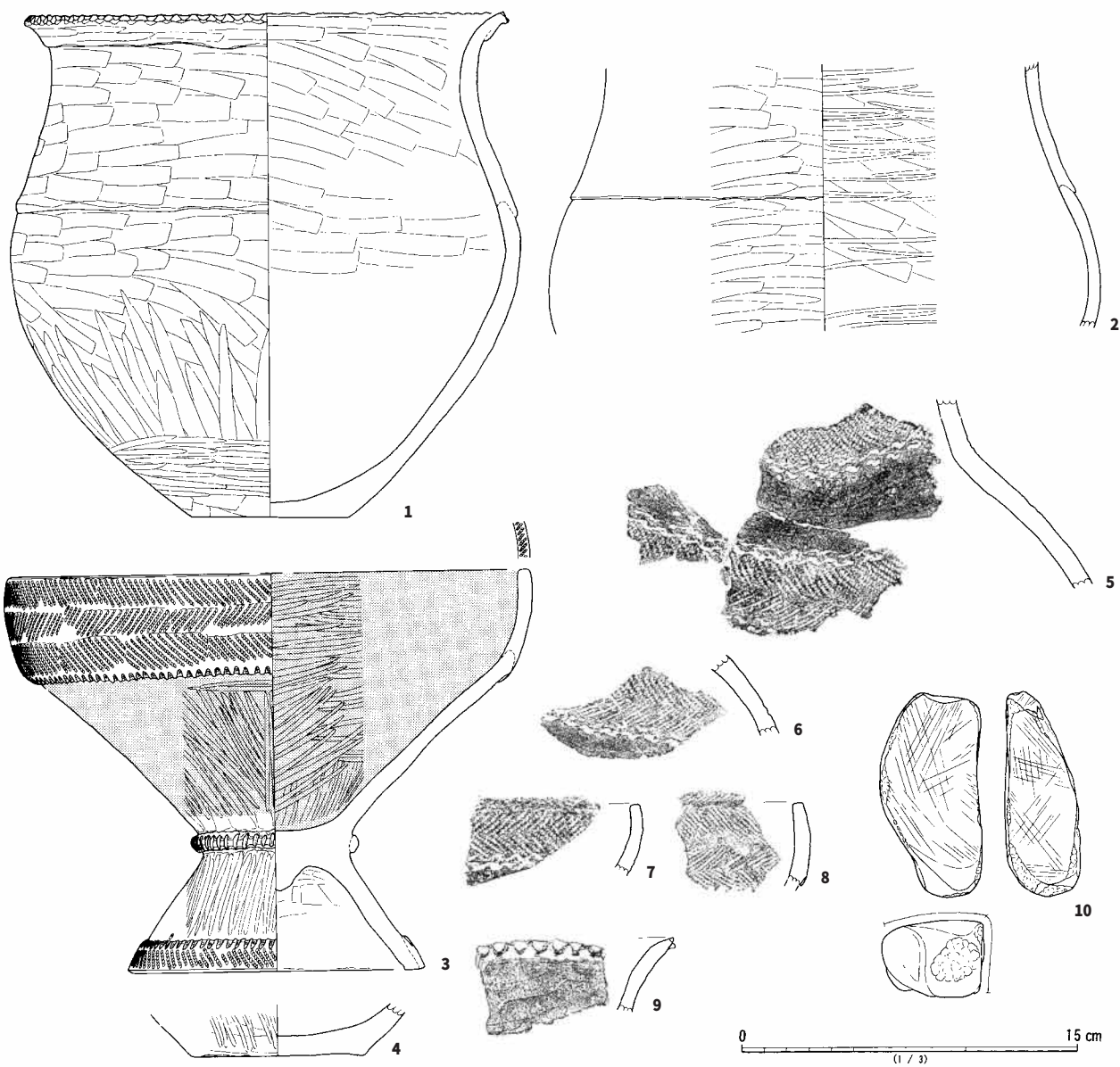
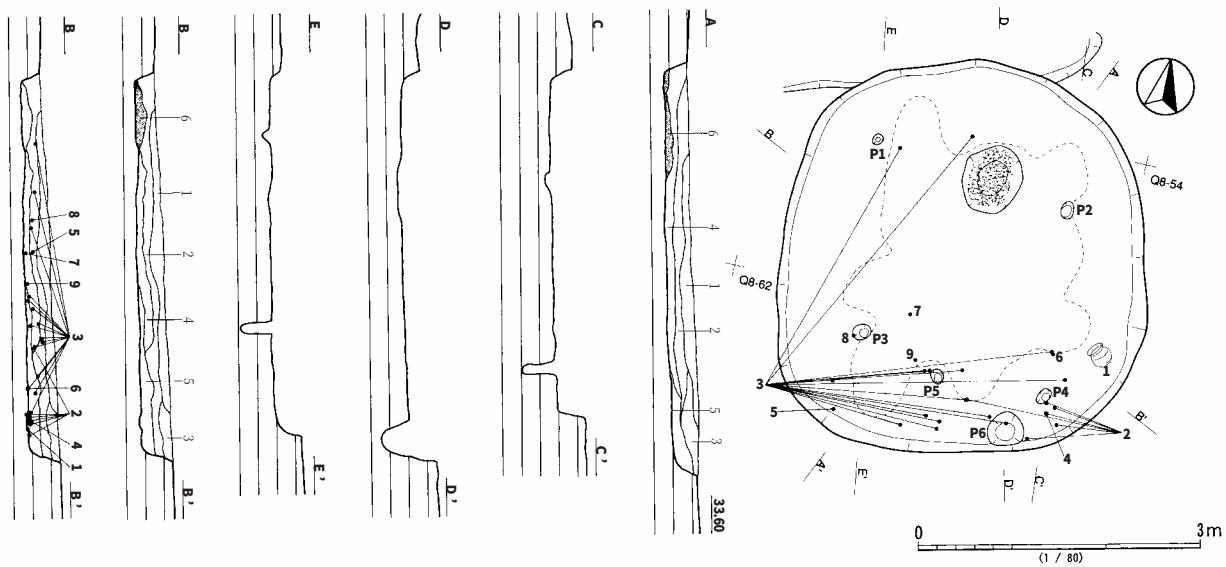


32号竖穴



第61图 30・32号竖穴 遺構遺物

31号竖穴



第62図 31号竖穴 遺構遺物

は出入口施設である。炉は、現存部長で0.75mを測る。竪穴堆積土は1～6層に分層され、1～4・6層が褐色土層、5層が暗褐色土層である。2～5層に焼土、炭化物が認められるが、2層が焼土を主体とするのに対して、下層にむかい炭化物が増える。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、焼土の堆積状況、遺物の出土状況からみて、失火、放火などの被災によるものではなく、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。

出土土器は、5が壺形土器、6・7が甕形土器、3・4が椀ないしは高杯形土器である。いずれも一括して取り上げられているため、出土状態は不明。

本竪穴の時期は、1～3期と推定しておきたい。

33号竪穴（第63・64図、図版12・49・70・78・84・85）

33号竪穴（住居跡）は、調査区R7－82区他に所在する。竪穴平面形態は、隅丸長方形を呈し、全体規模は4.5（主軸）×4.15m、床面積は14.55m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.58m、主軸方位はN－68°－Wである。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。また、壁際を中心として小Pitが検出されている。竪穴中央床面から、粘土塊が出土している。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1・4層が黒褐色土層、2・3層が暗褐色土層である。2層に多量のローム粒、3層に焼土、炭化粒、ローム粒が認められた。床面直上の4層には焼土があまり認められない。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、焼土の堆積状況、遺物の出土状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、5・13～19・22が壺形土器、23が広口壺形土器、1・3・24～32が甕形土器、6が小形甕形土器、7が台付甕形土器、8・12が高杯形土器、9が椀形土器、4・20・21が椀ないしは高杯形土器であり、1・9・10・22は床面から、3は覆土から出土している。24・25は同一個体と考えられる。5は、横連続回転の単節羽状縄文に沈線山形文を加え、上下をミガキにより磨り消している。19は、撚糸文ではなく、付加条3種（付加0段2条）と推定される。土器以外では、軽石2点、土製勾玉3点が出土している。未掲載の軽石は、小破片であり、研磨痕、使用痕とも認められない。これらの出土状況は不明。

本竪穴の時期は、4期と推定される。

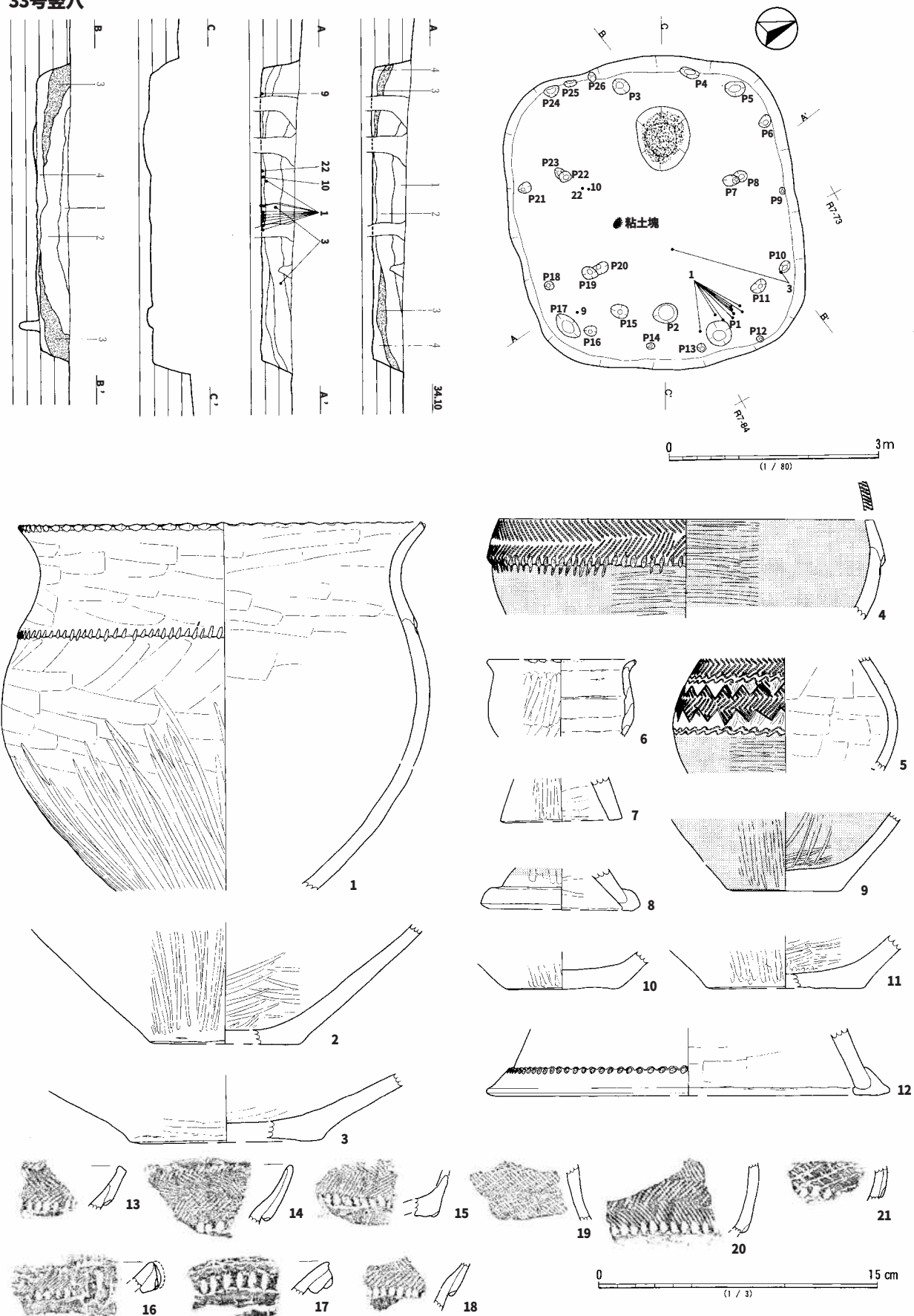
34号竪穴（第64図、図版12・49）

34号竪穴（住居跡）は、調査区R7－78区他に所在する。30号竪穴と重複し、本遺構に対し30号竪穴が新しい。全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけ、とくに北辺部は、範囲を明らかにすることができなかった。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は3.43（現存部主軸）×3.65mを測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.22m、主軸方位はN－14°－Wである。支柱穴は検出されなかった。P1は出入口施設であろうか。竪穴堆積土は1～3層に分層され、1・2層が褐色土層、3層が暗褐色土層である。

出土土器は、3が甕形土器、1が高杯形土器、2が椀ないしは高杯形土器であり、1は床面から、3は覆土から出土している。

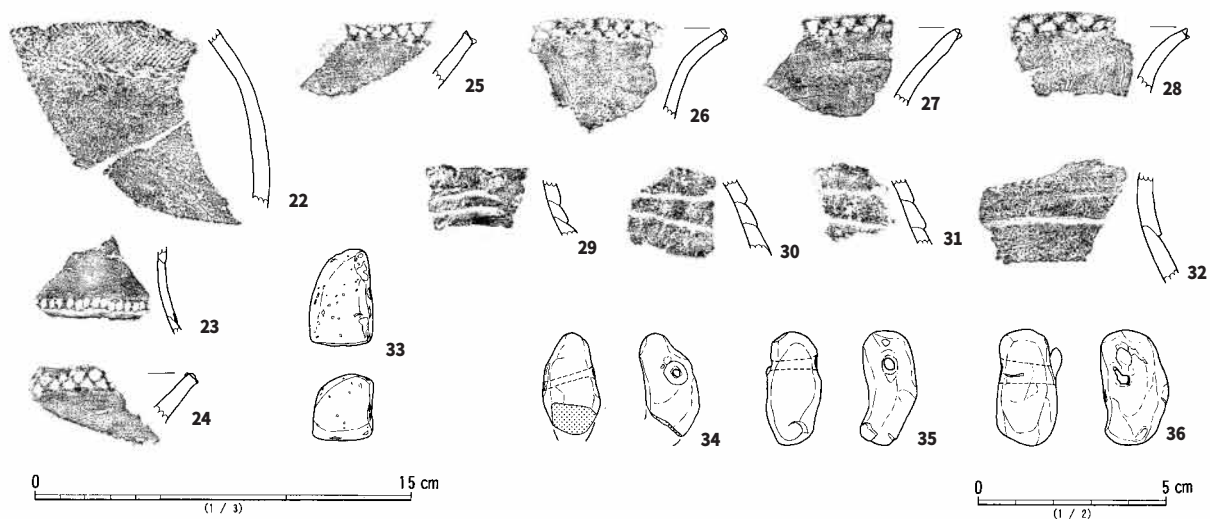
本竪穴の時期は、1～3期と推定される。

33号竖穴

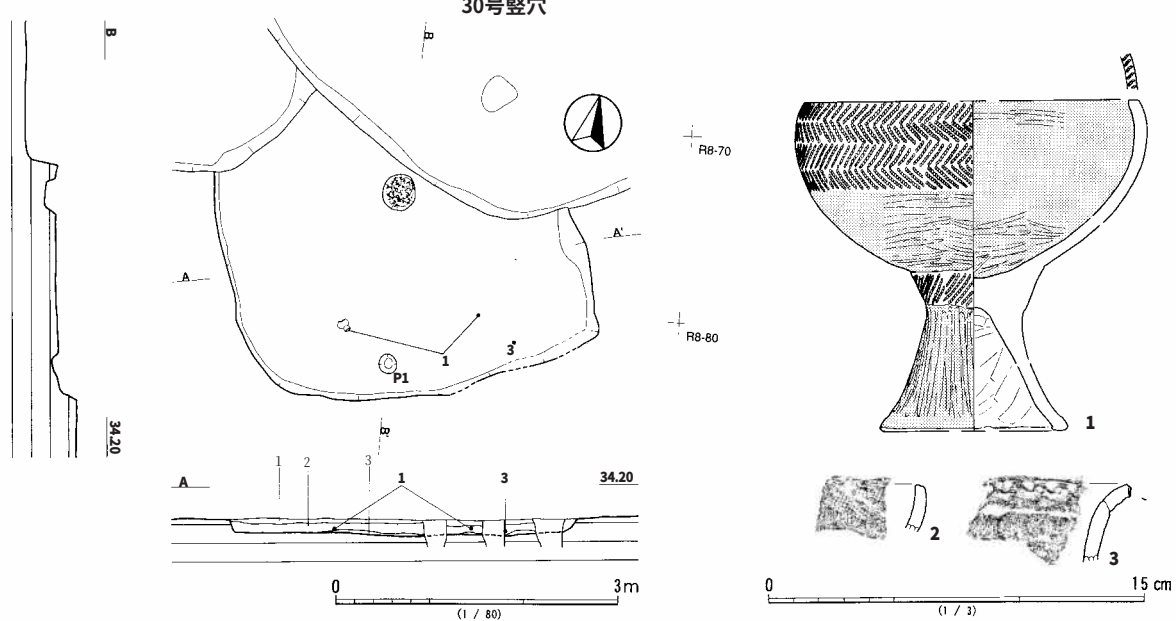


第63图 33号竖穴 遺構遺物

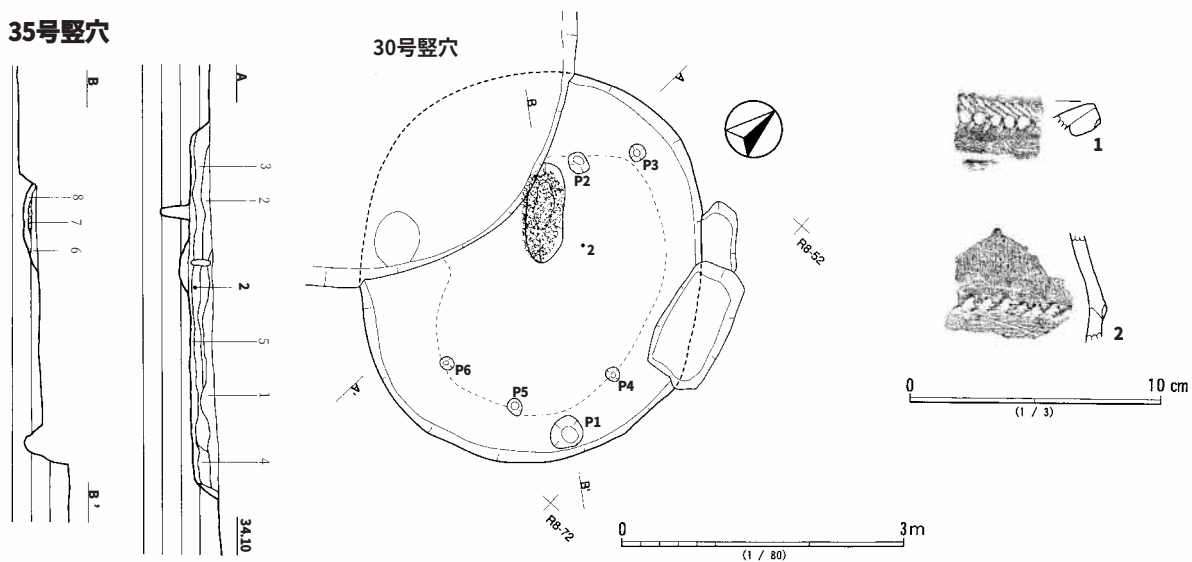
33号竖穴



34号竖穴

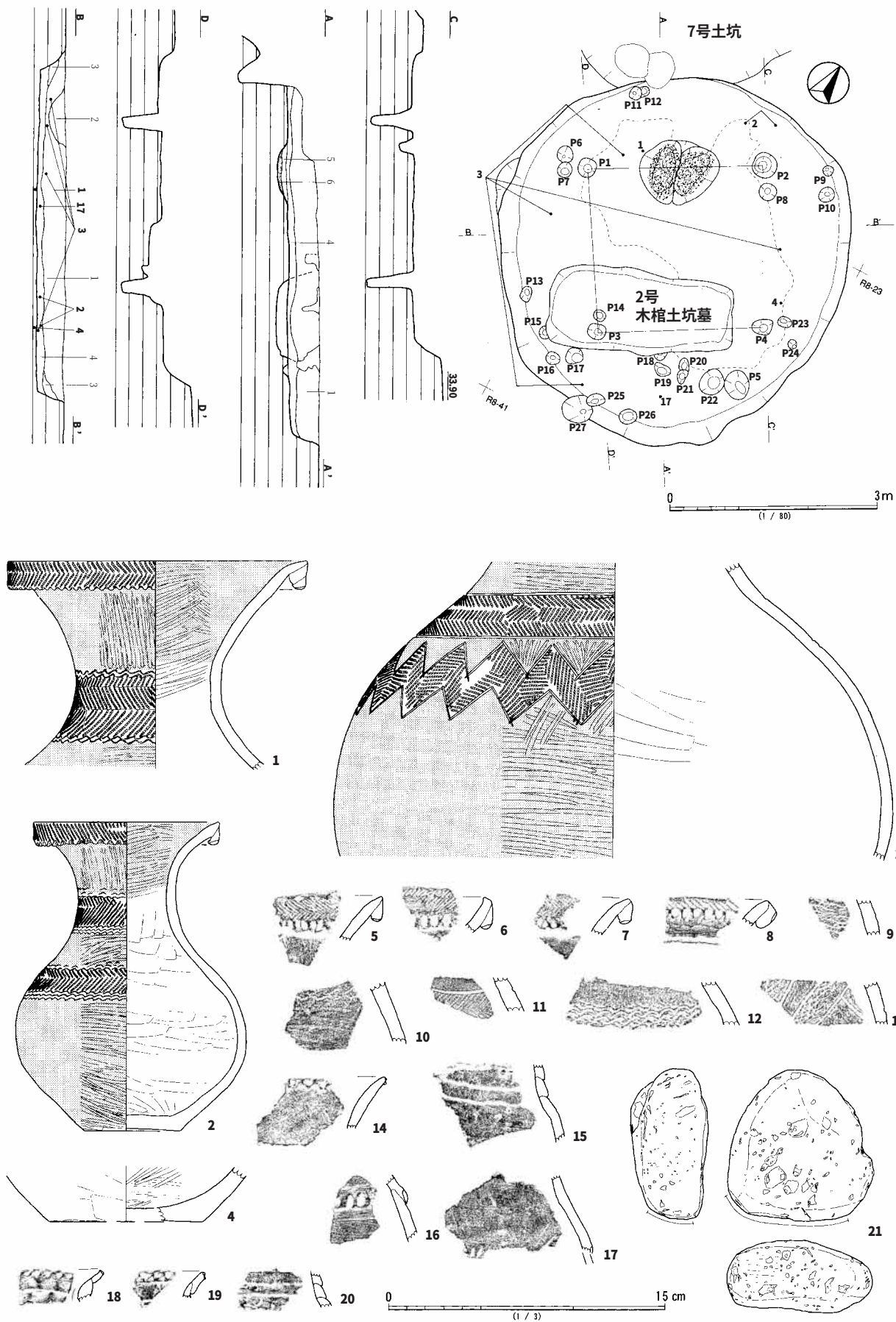


35号竖穴



第64図 33・34・35号竖穴 遺構遺物

36号竖穴



第65图 36号竖穴 遺構遺物

35号竪穴（第64図、図版13・70）

35号竪穴（住居跡）は、調査区R8-61区他に所在する。30号竪穴と重複し、本遺構に対し30号竪穴が新しい。東辺部土坑は、攪乱坑である。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は4.25（主軸）×3.62m、床面積は推定で11.46㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.28m、主軸方位はN-35°-Wである。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P5は出入口施設である。炉は、平面規模1.06×0.45mを測る。竪穴堆積土は1～5層に分層され、1・3層が暗褐色土層、2層が褐色土層、4・5層が黒褐色土層、炉は、6層が黒褐色土層、7層が焼土層、8層が被熱ローム層であり、7層上面に灰層が認められた。

出土土器は、1が壺形土器、2が甕形土器であり、2は覆土から出土している。1は、36号竪穴8と同一個体の可能性がある。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩が出土している。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

36号竪穴（第65図、図版13・32・50・51・70・76・77・78・85）

36号竪穴（住居跡）は、調査区R8-21区他に所在する。7号土坑、2号木棺土坑墓と重複する。2号木棺土坑墓は、上面に38号竪穴の床硬化面がおよんでいないことから、本遺構が新しいと推定される。調査段階では、竪穴廃棄直後の凹地を利用して木棺土坑墓がつくられたとの所見であったが、38号竪穴土層断面図では新旧関係を含め判断できない。ただし、2号方形周溝墓主体部、3号木棺土坑墓も竪穴を利用して造墓されており、本遺構も同例である可能性が高い。

竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は5.3（主軸）×5.08m、床面積は18.45㎡を測る。建て替えの可能性もあるが判断できない。確認面からの深さは0.46m、主軸方位はN-26°-Wである。支柱穴はP1～4、P5・6は貯蔵穴であろうか。出入口施設Pitは特定できない。炉は、掘形から判断する限りでは2基の重複からなり、長軸長はともに0.93mを測る。ただし、床硬化面の被覆等、新旧は判断できない。南辺部などにみられる小Pitの性格は不明。竪穴、炉堆積土は1～6層に分層され、1層が暗褐色土層、2層が灰褐色土層、3層が明褐色土層、4・5層が褐色土層、6層が焼土層である。

出土土器は、1～3・5～13が壺形土器、4・14～17が甕形土器、18～20が小形甕形土器であり、1・3・4は床面から、2・17は覆土から出土している。8は、35号竪穴1と同一個体の可能性がある。2は、ほぼ完形であり、1も頸部は全周する。

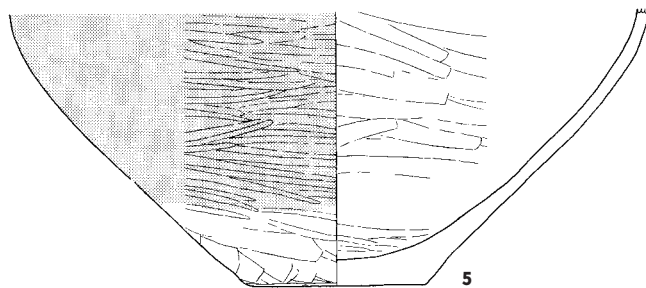
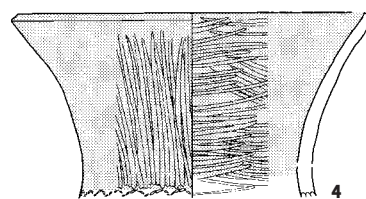
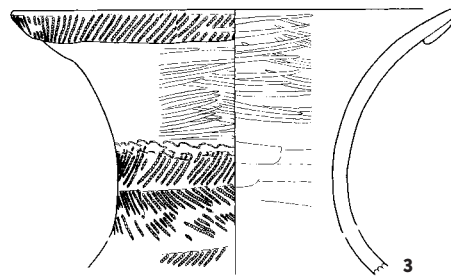
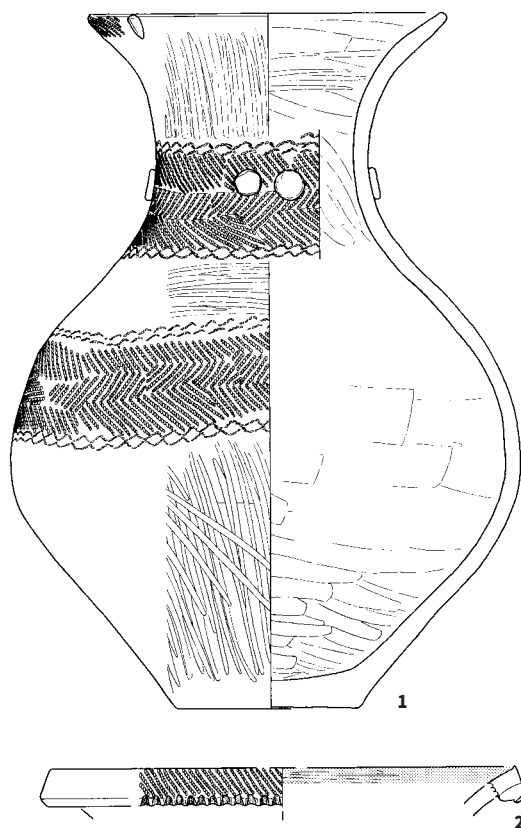
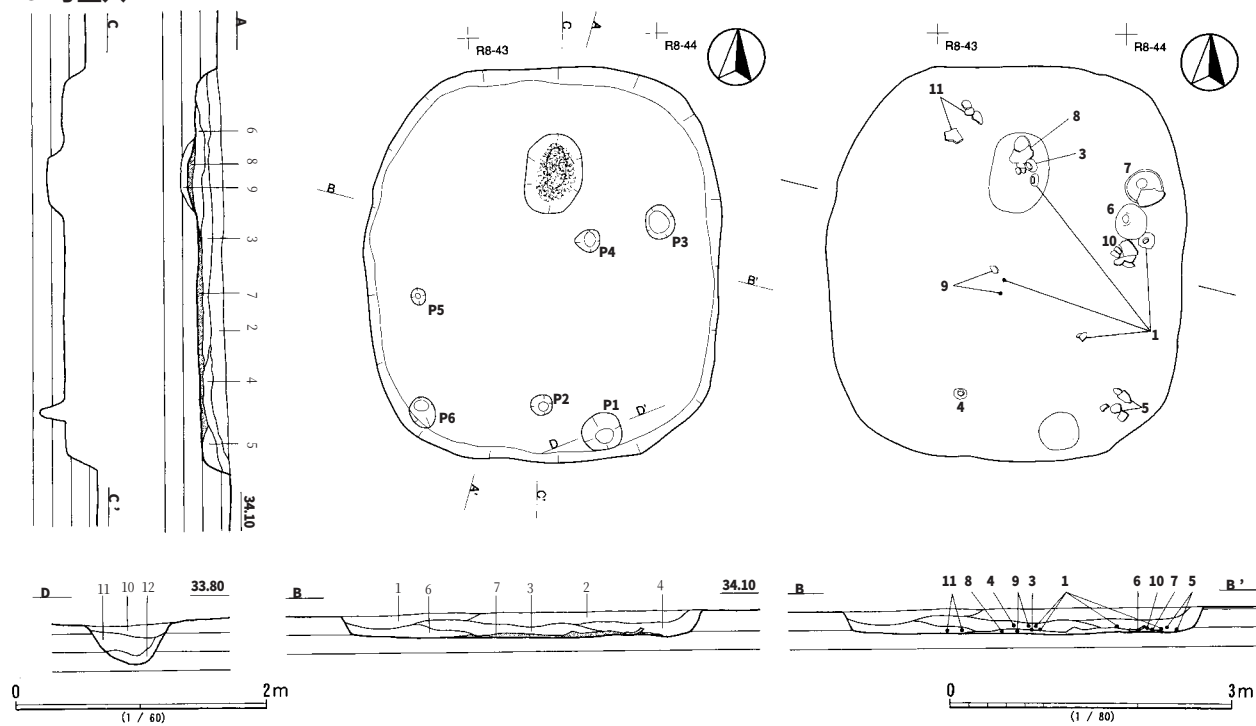
壺形土器帯縄文は、沈線区画、結節区画が混在する。沈線区画の3の山形縄文帯は、充填単斜縄文であり、沈線区画の土器としては新出の内容をもつ。これに対して、結節区画の1・2は、口縁部形態、器形に古い特徴を残す。土器以外では、軽石1点が出土している。軽石は、全体に研磨されているが、とくに下端面の使用痕が明瞭に認められる。出土状況は不明。軽石は、産地同定の分析を行っている（第3章第6節）。

本竪穴の時期は、3期と推定される。

37号竪穴（第66・67・68図、図版13・50・51・70・75・76・77・78）

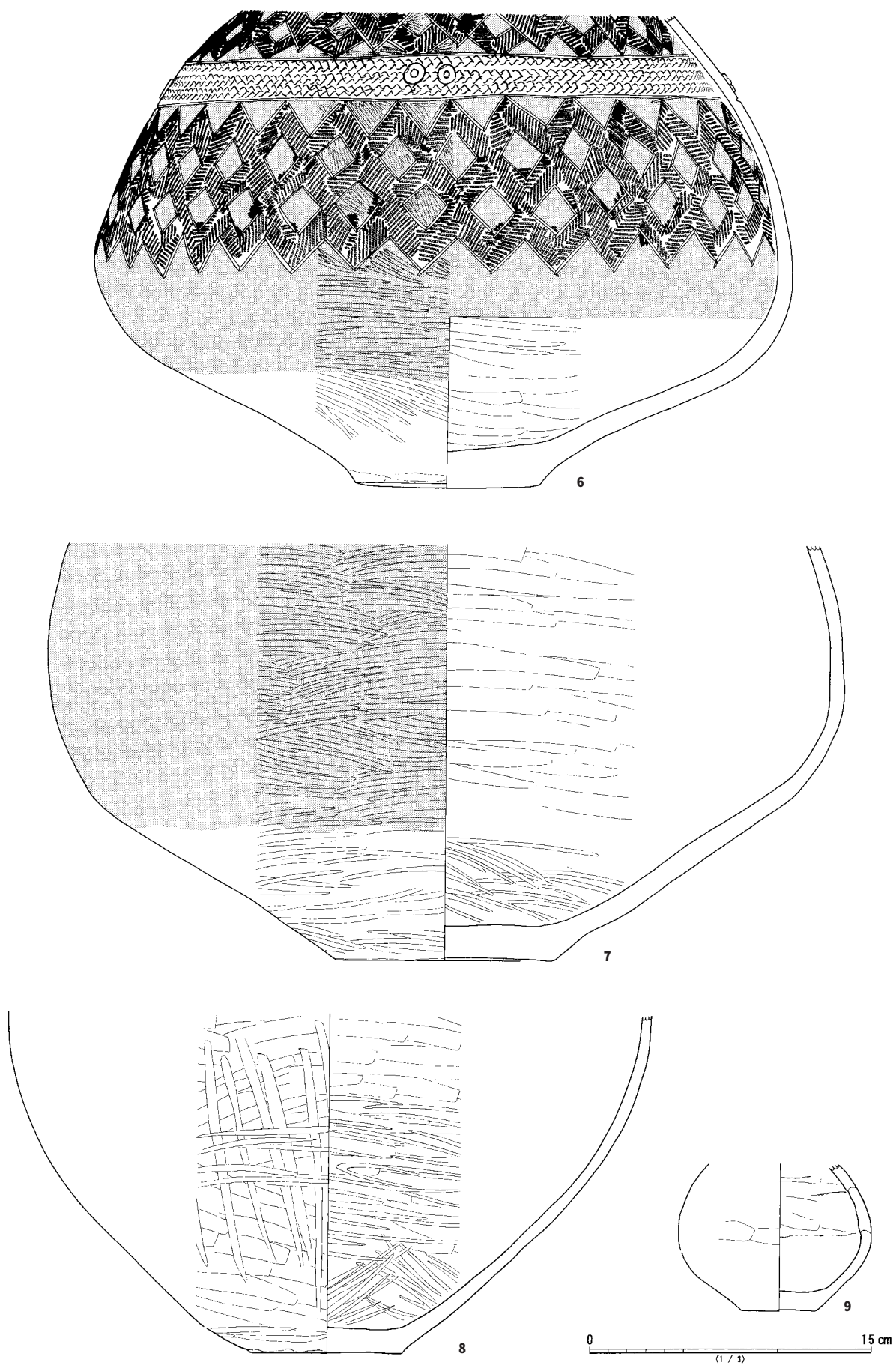
37号竪穴（住居跡）は、調査区R8-53区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は4.23（主軸）×3.81m、床面積は12.45㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.34m、主軸方位はN-2°-Eである。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模0.85×0.61mを測る。竪穴堆積土は1～7層に分層され、1・5・6層

37号竖穴



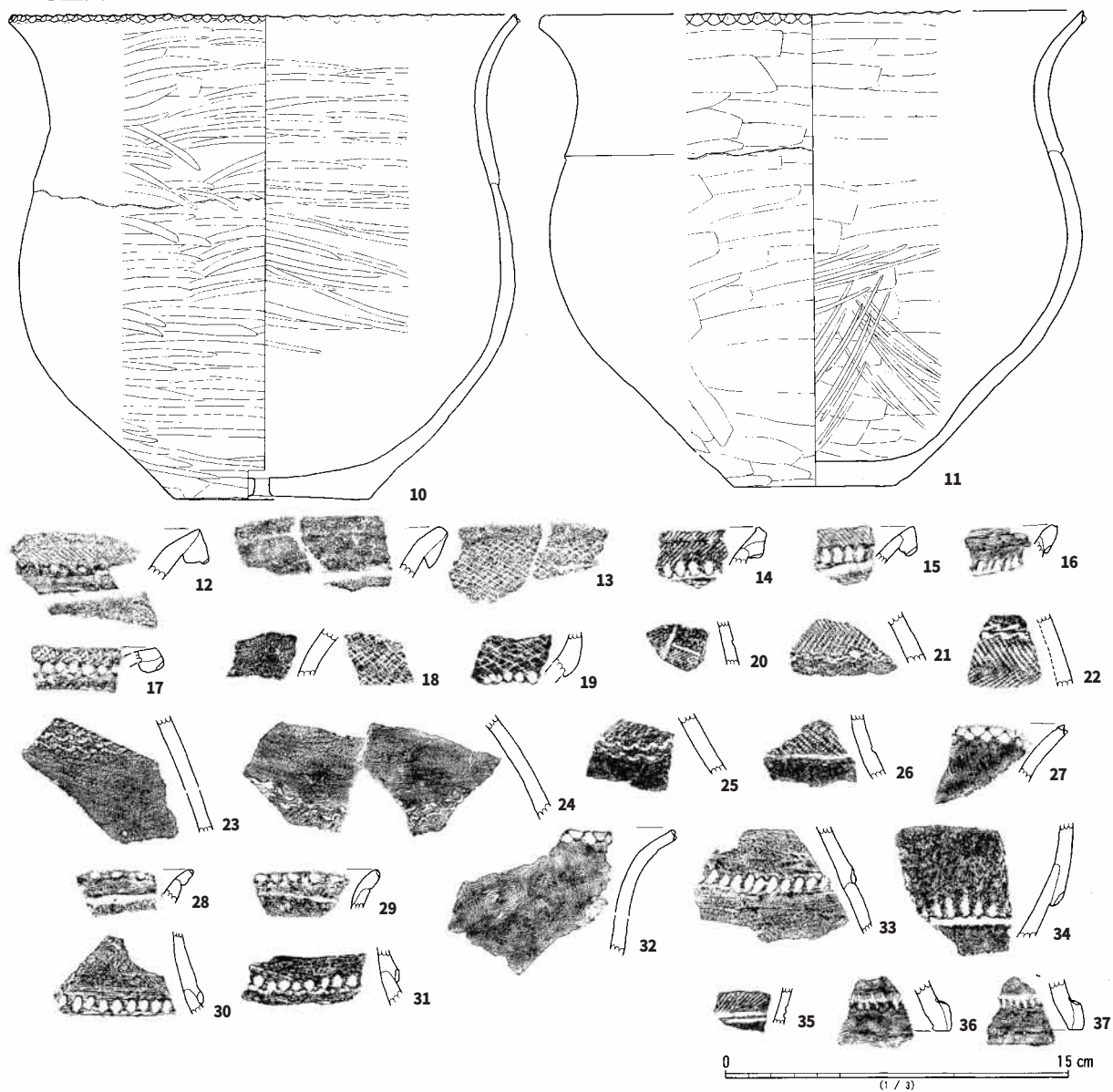
0 15 cm
(1 / 3)

第66図 37号竖穴 遺構遺物

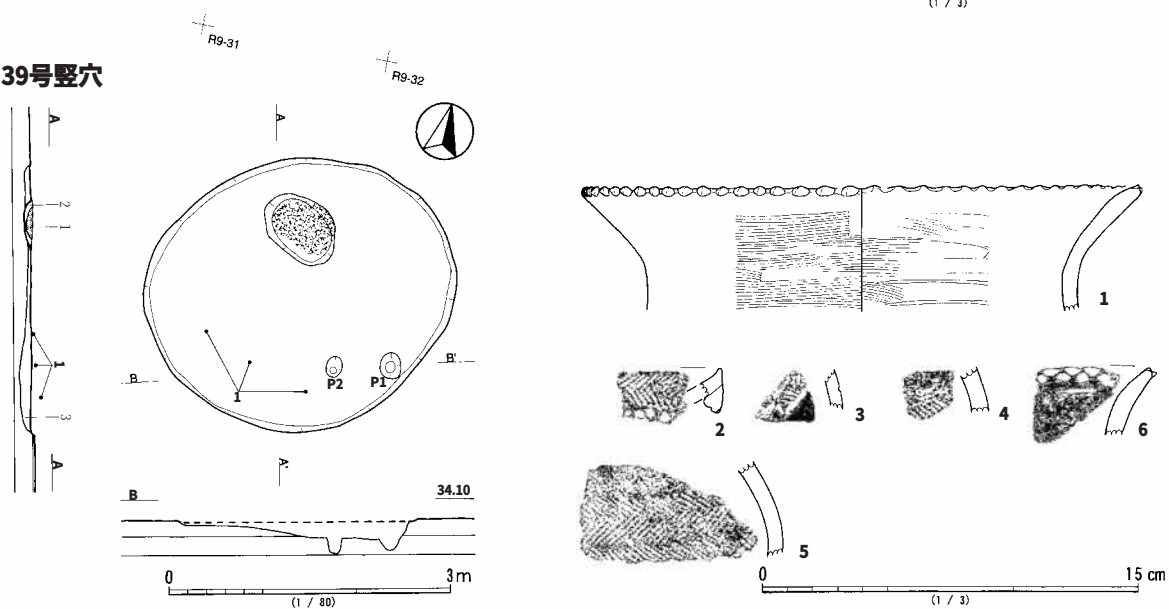


第67图 37号竖穴 遺物

37号竖穴



39号竖穴



第68图 37·39号竖穴 遺構遺物

が褐色土層、2～4層が暗褐色土層、7層が焼土層である。炉は、8層が焼土層、9層が被熱ローム層、P1は、10層が暗褐色土層、11層が黒褐色土層、12層が褐色土層である。P1内には、焼土の堆積は観察されていない。本竪穴は火災に遭っており、遺物の出土状況からみて、失火、放火などによる被災の可能性が想定される。

出土土器は、1～7・12～26が壺形土器、9が小形壺形土器、34が広口壺形土器、36・37が高杯形土器、8・10（転用甗）・11・27～33が甕形土器、35が椀ないしは高杯形土器であり、1・6・7・10・11は床面から、3・8は炉内、4・5・9は覆土から出土している。覆土出土土器も下層からの出土であり、これらは基本的に、遺存遺物と考えられる。口頸部を欠く壺形土器のうち、7については、正立位置で出土しており、耕作等によって口頸部が破損した可能性もある。ただし、6は、逆位で置かれており、口縁部を欠いて使用されていたものと推定される。炉内出土の3は、口頸部のみであり、支脚（炉器台）として利用された可能性も考えられる。ただし、二次的な被熱は明確ではない。4も、口縁部が完存し、器台的な使用が想定される。13・18は同一個体と考えられ、13の2片のうちの小破片は30号竪穴から出土した。いずれも出土状況は不明。23～25、30～33、36・37も同一個体と推定される。6は、この種の土器の文様としては比較的単純な構成をとる。なお、21の外面には、靱痕が明瞭に遺存していた（図版75）。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

38号竪穴（第69図、図版13・52・70・79）

38号竪穴（住居跡）は、調査区R8－37区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は4.37（主軸）×4.22m、床面積は14.19m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.62m、主軸方位はN－37°－Wである。主柱穴はP1～4、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.71×0.51mを測る。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1・2層が暗灰褐色土層、3層が暗褐色土層、4層が褐色土層である。炉は、5層が黒褐色土層、6層が焼土層である。

出土土器は、2～5が壺形土器、1・7が甕形土器、6が椀ないしは高杯形土器であり、1は、ほぼ完形で、床面から出土している。胴部中位から底面内面は、タール状の付着物により黒化する。

本竪穴の時期は、1～2期と推定される。

39号竪穴（第68図、図版13・14・79）

39号竪穴（住居跡）は、調査区R9－32区他に所在する。竪穴平面形態は、楕円形と推定されるが、遺存状態が不良で確実ではない。床面も全体に掘りすぎている。全体規模は2.75（主軸）×3.27m、床面積は6.85m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.03m、主軸方位はN－44°－W前後と推定される。主柱穴は検出されなかった。P2は出入口施設であろうか。炉は、平面規模0.88×0.62mを測る。炉土層断面は、1層が焼土、2層が被熱ロームである。

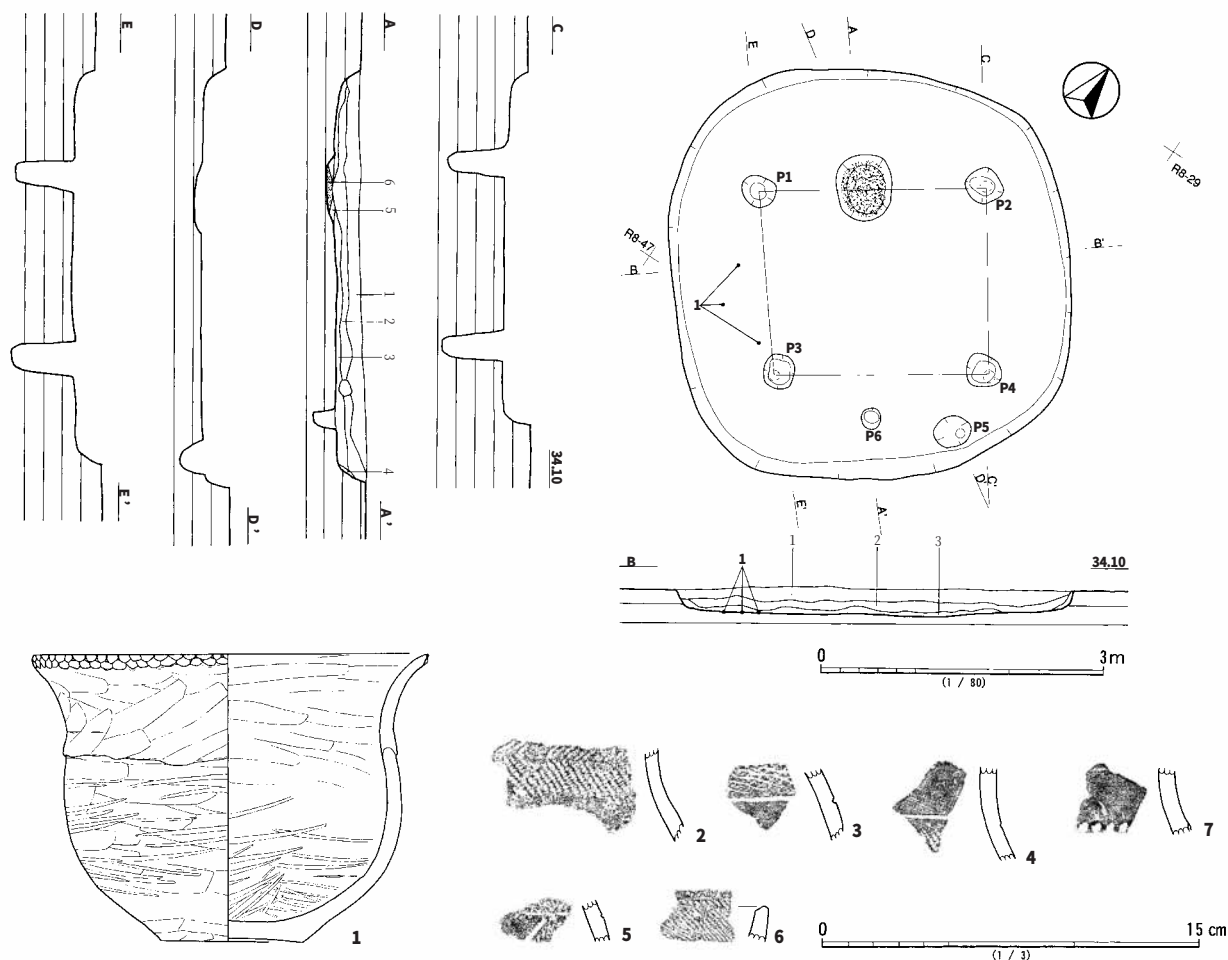
出土土器は、2～5が壺形土器、1・6が甕形土器であり、1・2・5・6は、床ないしは床面付近から出土している。1の口唇部押捺は、単位は細かいものの指頭押捺であり、宮ノ台式の特徴を残す。4・5は同一個体と推定される。

本竪穴の時期は、1期と推定される。

40号竪穴（第70・71図、図版14・70・71・85）

40号竪穴（住居跡）は、調査区R9－82区他に所在する。山田橋大塚台遺跡調査区掘立柱建物と重

38号竪穴



第69図 38号竪穴 遺構遺物

複し、本遺構に対し掘立柱建物が新しい。竪穴平面形態は、若干台形となる隅丸方形を呈し、全体規模は4.19（主軸）×3.90m、床面積は12.05㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.32m、主軸方位はN-38°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P2は出入口施設、P1は貯蔵穴であり、凸堤が圍繞する。炉は、平面規模0.87×0.59mを測る。竪穴堆積土は1～6層に分層され、1層が暗褐色土層、2・4層が褐色土層、3・5層が明褐色土層である。

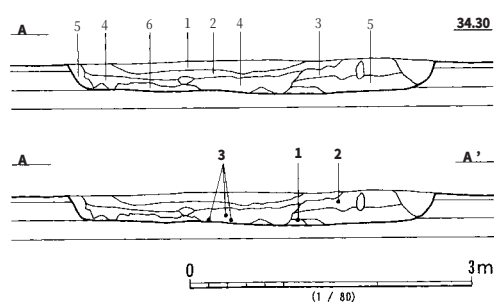
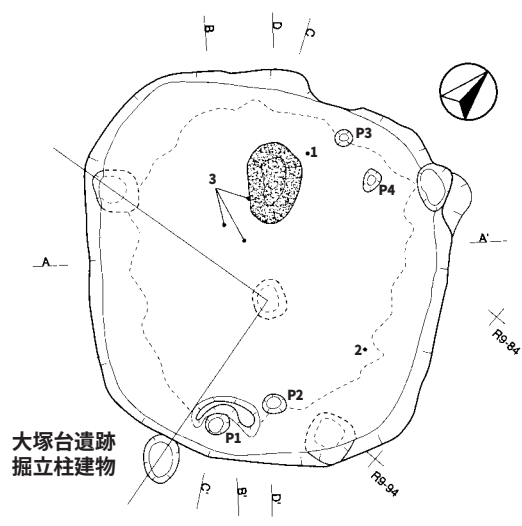
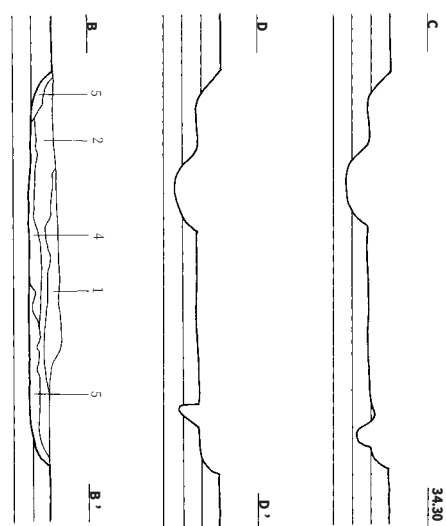
出土土器は、1・2・5・8・9が壺形土器、3・4・6・7・13が甕形土器、10～12が椀ないしは高杯形土器であり、1～3は覆土から出土している。1・2、3・6・7・13は、同一個体と推定される。3の口縁端部押捺部の形状は、48号竪穴8、49号竪穴7・8と似る。1は、粘土紐積上げによる輪積み装飾の甕であるが、段部はヘラナデにより平坦化している。土器以外では、軽石1点が出土している。出土状況は不明。

本竪穴の時期は、1～2期と推定される。

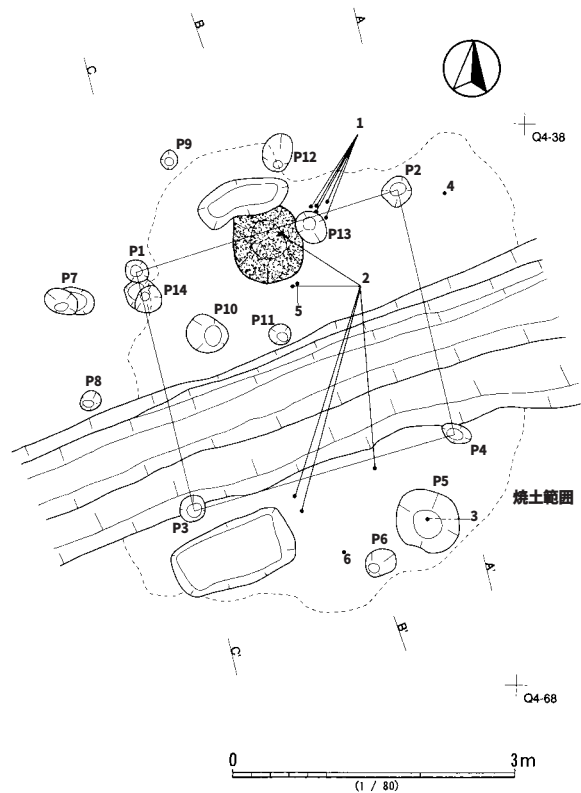
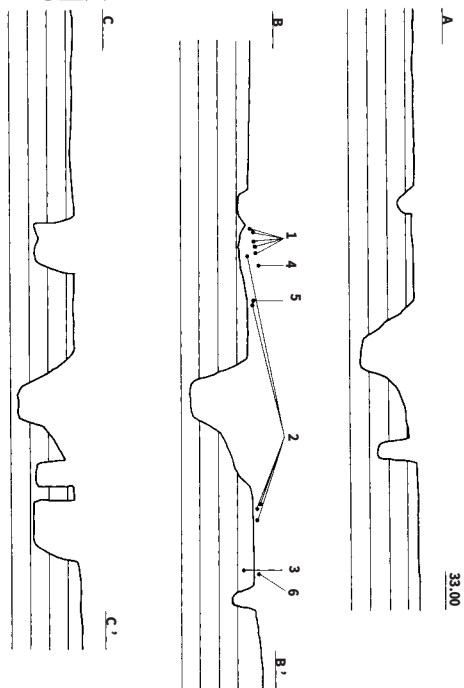
41号竪穴（第70・71図、図版14・71）

41号竪穴（住居跡）は、調査区Q4-46区他に所在する。中央部を近世以降の溝が横断する。遺存状態は不良で、竪穴の掘り込みは検出されなかった。炉、主柱穴および、これを中心として焼土が分布していたことから、およそその平面規模を推定することができる。規模は、主軸方向で5.3m程度

40号竖穴

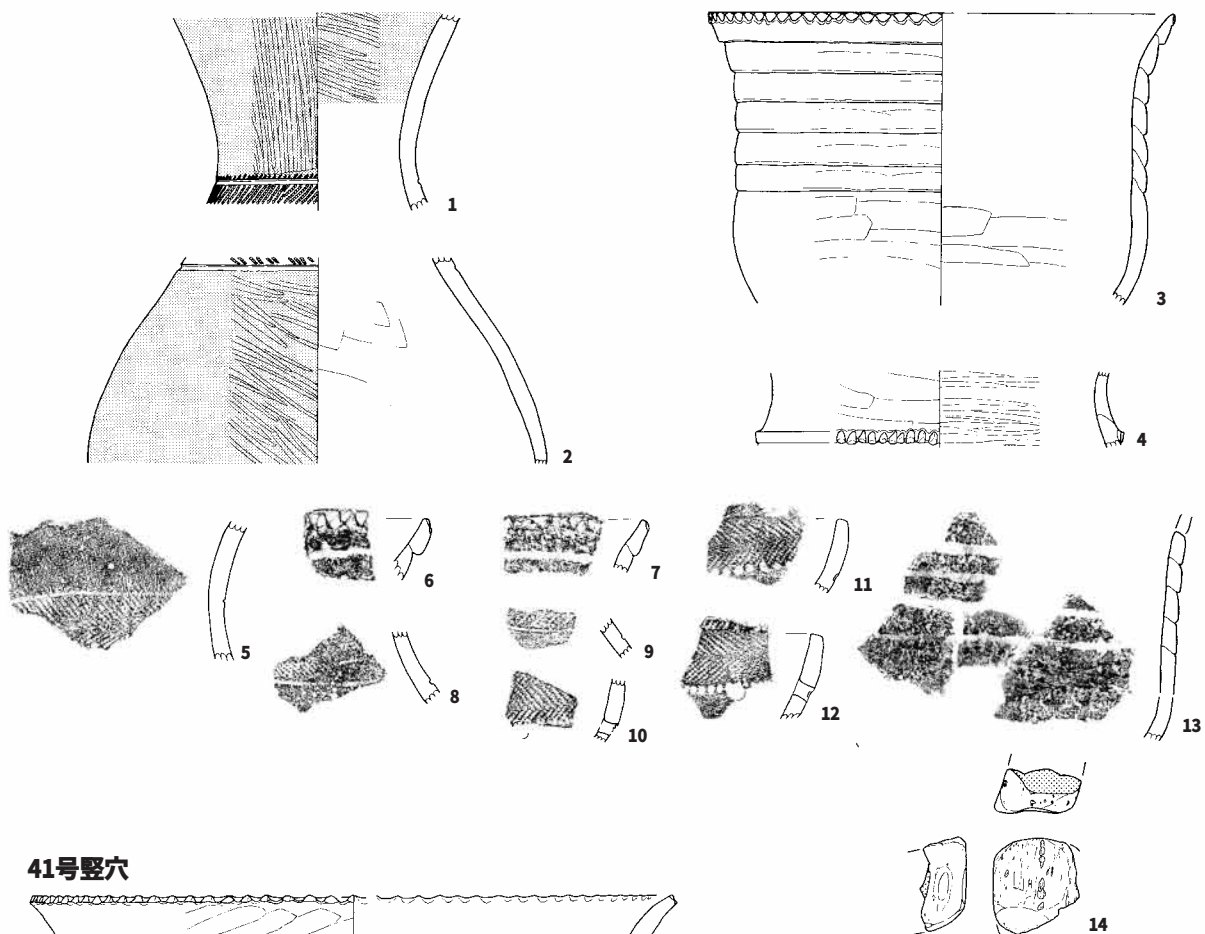


41号竖穴

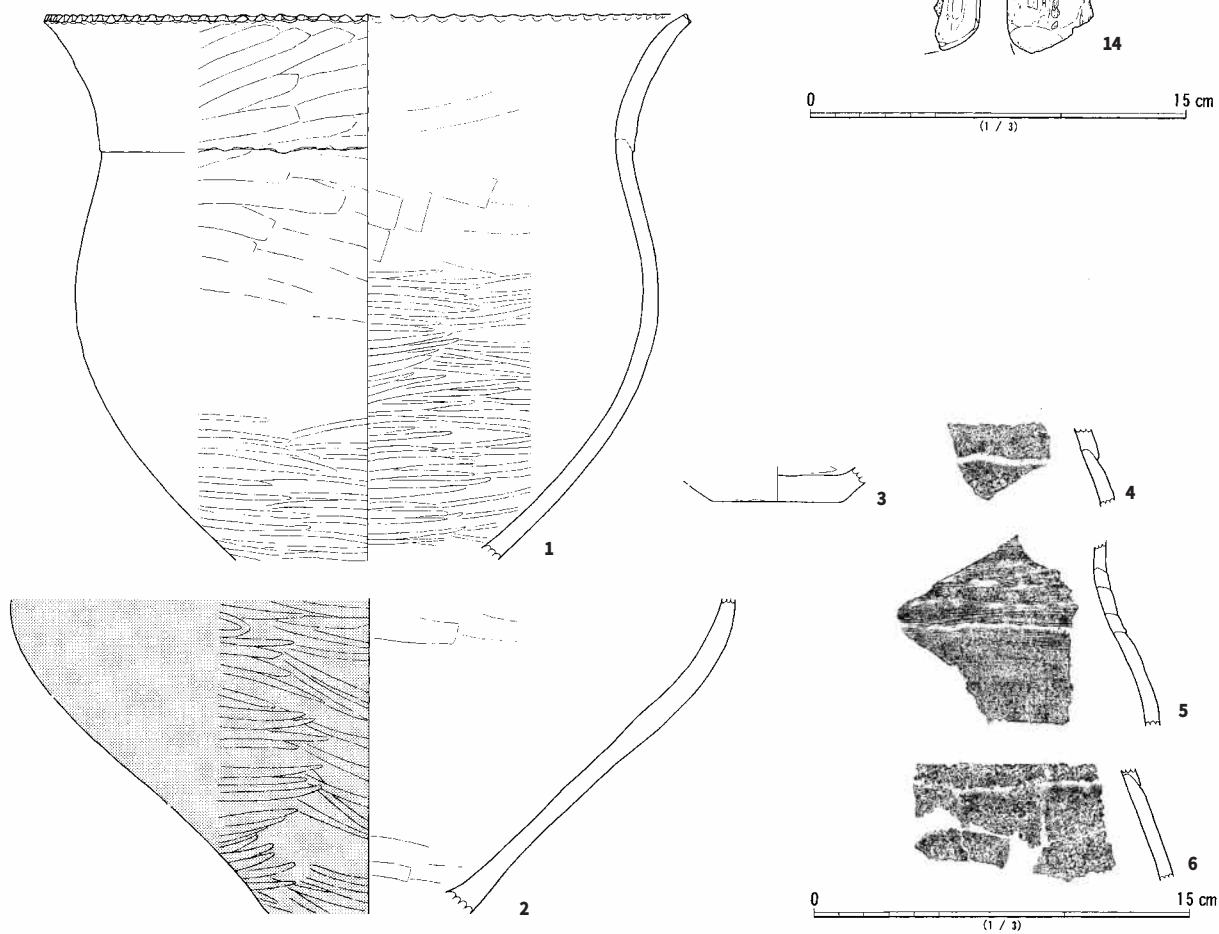


第70図 40・41号竖穴 遺構

40号竖穴



41号竖穴



第71图 40・41号竖穴 遺物

と推定される。建て替えは確認できない。主軸方位はN-17°-Wである。主柱穴はP1~4、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.85×0.74mを測る。焼土の分布から、火災に遭った可能性が想定される。

竪穴の遺存状態にもかかわらず、炉を中心に土器が出土している。2が壺形土器、1・4~6が甕形土器であり、3はP5内から出土した。

本竪穴の時期は、1~2期と推定される。

42号竪穴（第72図、図版14・52・71・82）

42号竪穴は、調査区P4-65区他に所在する。近世以降の溝が縦断する。竪穴平面形態は、やや不整の台形を呈し、全体規模は4.52（長軸）×3.23mを測る。確認面からの深さは0.21m、長軸方位はN-50°-Eである。炉、主柱穴等は検出されなかった。竪穴内南側は、土坑状に1段深くなる。土層断面の観察による限り、少なくとも竪穴に対して後出するものではない。底面も平坦で、本遺構に帰属する可能性も考えられる。北側の土坑は、攪乱坑である。竪穴堆積土は4層に分層され、いずれも暗褐色土層である。このうち、1・2・7層には焼土、炭化粒が認められたが、火災によるものかどうかは不明。3~6層は溝覆土であり、灰褐色土を基調とする。

本遺構は、住居としての機能が明確ではなく、建物かどうかを含め、その性格は明らかではない。

出土土器は、1~3・6・7が壺形土器、4が甕形土器（転用甕）、5が鉢形土器、8が椀ないしは高杯形土器であり、1~4・6・7は床面から出土している。1~3は、同一個体と推定されるが、1・3は帯縄文の区画が異なる。1は、黒斑が底部側面および対向する胴部中位にあり、覆い焼き焼成によると推定される。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

43号竪穴（第72図、図版14）

43号竪穴は、調査区P4-58区他に所在する。竪穴平面形態は、隅丸長方形を呈し、全体規模は3.89（長軸）×2.86m、床面積は9.30m²を測る。確認面からの深さは0.19m、長軸方位はN-48°-Eである。炉、主柱穴等は検出されなかった。土坑状の掘り込み2基については、本遺構にともなう可能性は低い。堆積土は1~7層に分層され、1・2層が暗灰褐色土層、3層が灰褐色土層、4・5・7層が暗褐色土層、6層が焼土層である。本竪穴は、火災に遭ったものと考えられる。

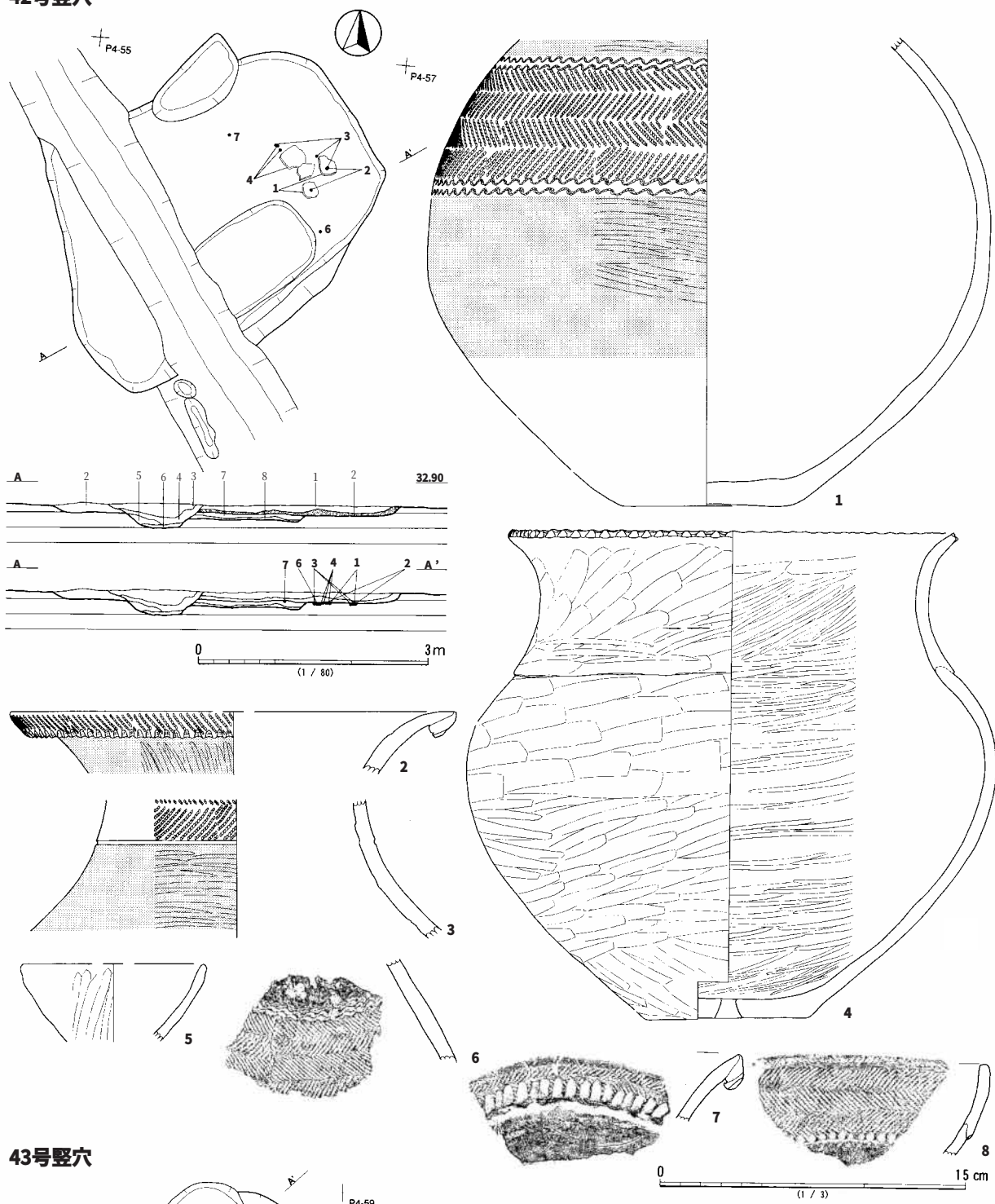
遺物は出土していない。42号竪穴と隣接し、その形状等も類似することから同時期の所産と推定しておくが、その性格を含め不明な点が多い。

44号竪穴（第73・74図、図版14・52・71・76・80・81・82）

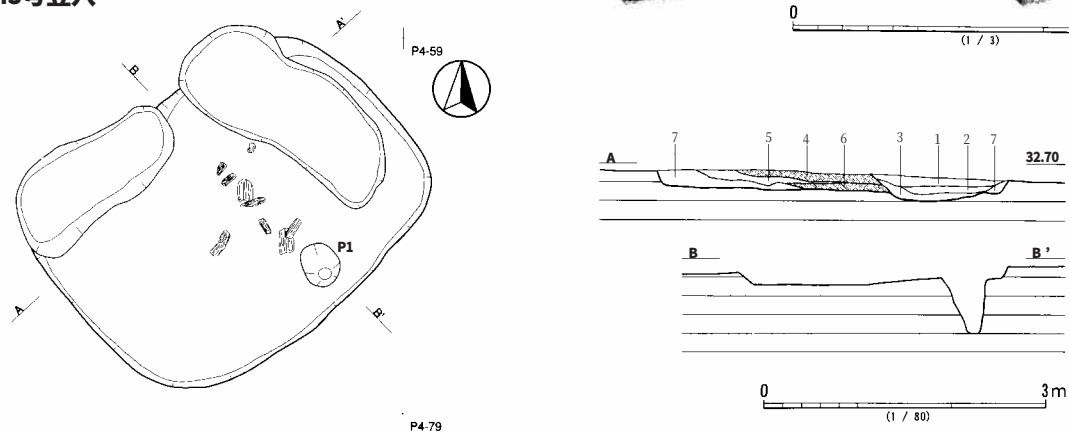
44号竪穴（住居跡）は、調査区P4-79区他に所在する。竪穴平面形態は、隅丸長方形を呈し、全体規模は3.92（主軸）×3.64m、床面積は11.40m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.39m、主軸方位はN-42°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模は0.92×0.60mを測る。竪穴堆積土は1~4層に分層され、1・3・4層が暗褐色土層、2層が黒褐色土層である。炉の覆土は、5層が暗褐色土層、6層が焼土混じりの層である。

出土土器は、1・2・4・5・7・11~23が甕形土器、6・24~28・32が壺形土器、3・9が椀形土器、8が転用甕形土器、29~31・33が椀ないしは高杯形土器である。13・14・16は同一個体と考えられる。2・3・7・9・23・25・29は床面から、1・4~6・8・10・11・13・15・16・18~22・24・30は覆土から出土しているが、小破片が全体に散在し、相互に接合することから、いずれも本遺構に直接ともな

42号竖穴

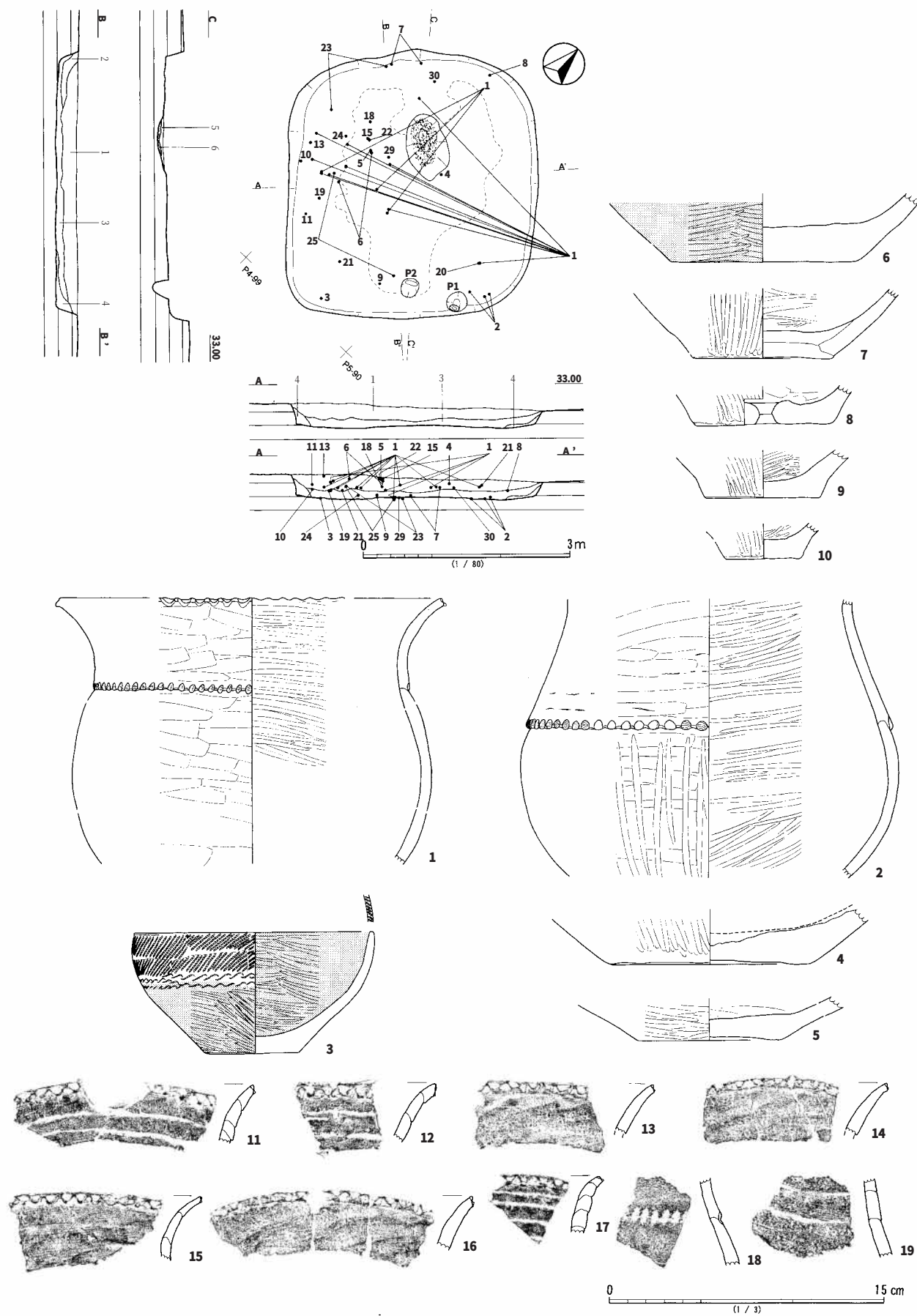


43号竖穴



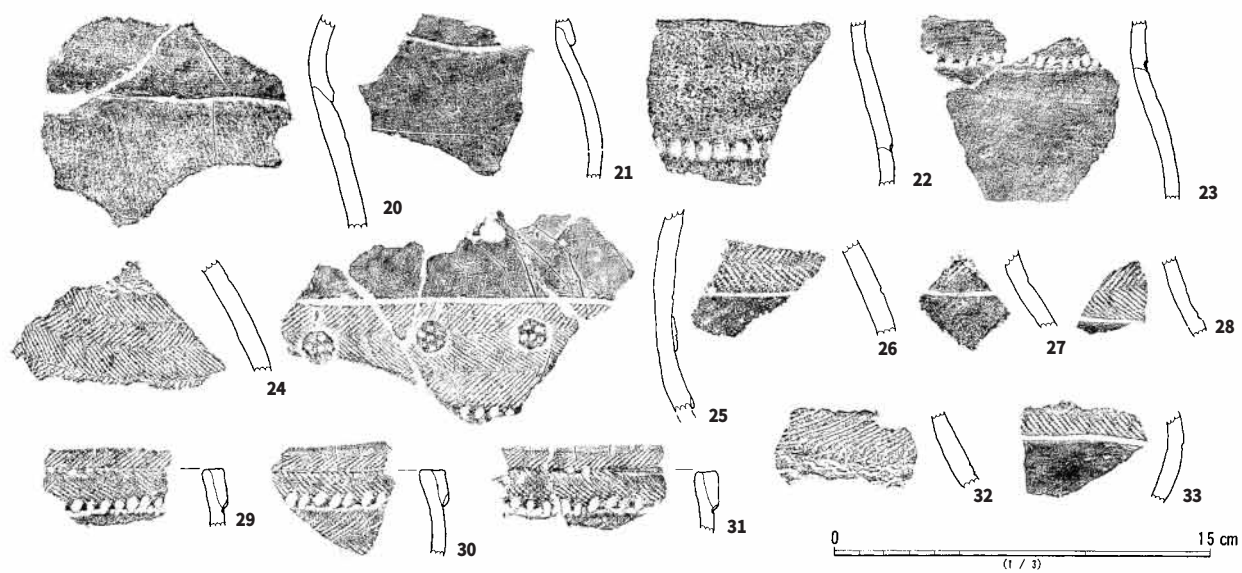
第72图 42·43号竖穴 遺構遺物

44号竖穴

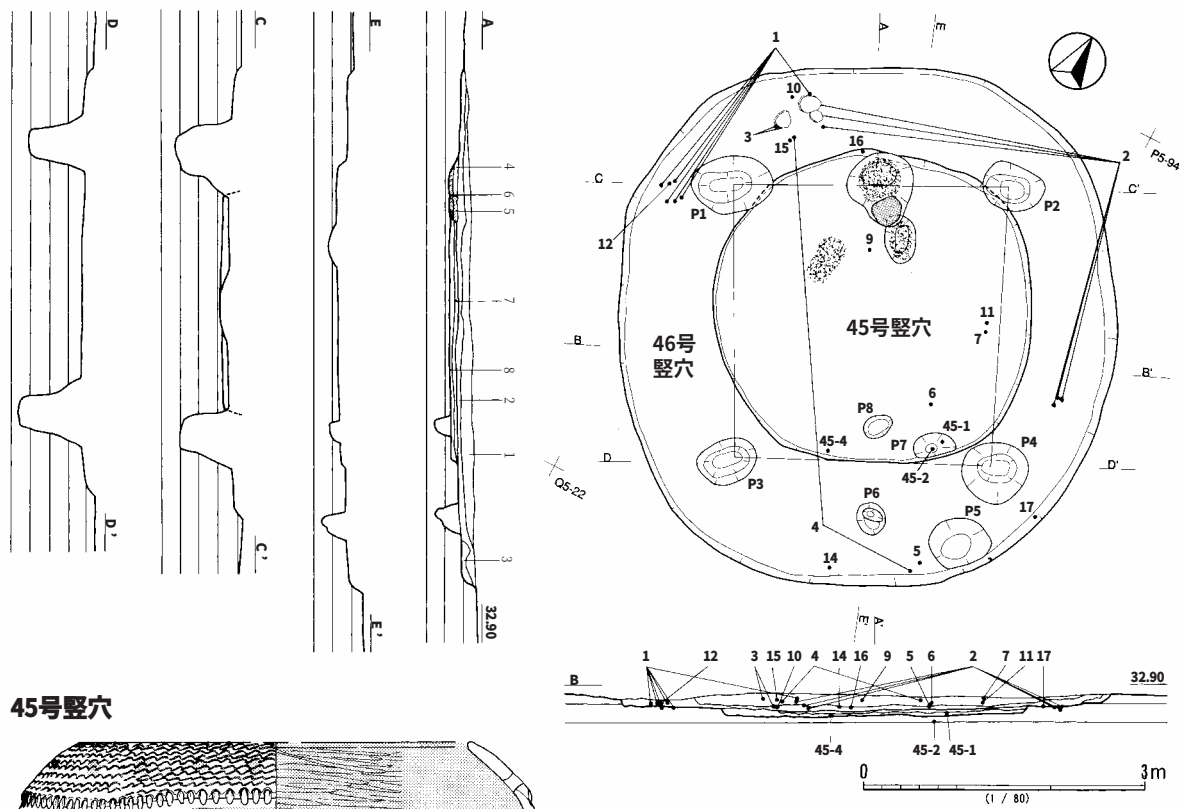


第73图 44号竖穴 遺構遺物

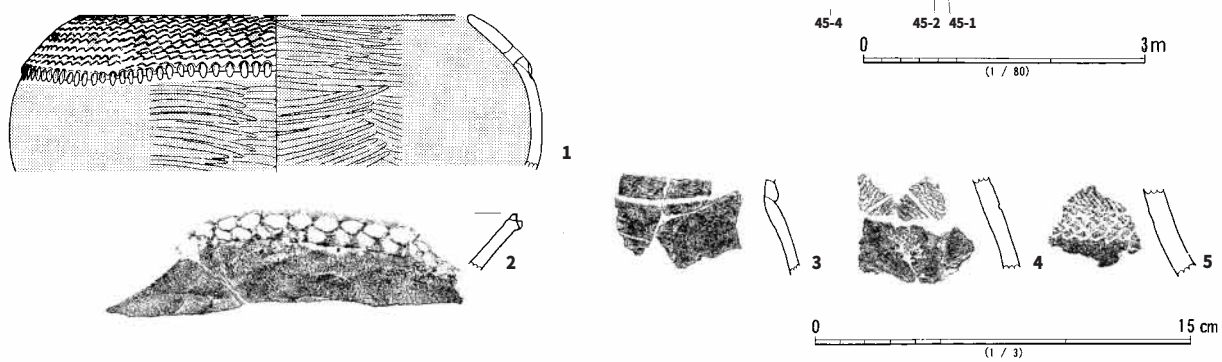
44号竖穴



45・46号竖穴



45号竖穴



第74图 44・45・46号竖穴 遺構遺物

うものとは考えにくい。

本竪穴の時期は、3期と推定される。

45号竪穴（第74図、図版14・15・52・71・79・82）

45号竪穴（住居跡）は、調査区Q5-02区他に所在する。46号竪穴と重複し、その下層に位置する。46号竪穴は、本遺構の建て替えによる可能性もあるが、床面レベルが異なり、若干の覆土間層をおく。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は3.32（主軸）×3.37m、床面積は8.52㎡を測る。46号竪穴との関係をのぞけば、建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.28m、46号竪穴床面との比高は0.08m、主軸方位はN-23°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P7は貯蔵穴、P8は出入口施設である。炉は、北側を46号竪穴の炉により若干破壊されている。平面規模0.50×0.32mを測る。他に、床が焼けている部分が1ヵ所認められた。土層断面7・8層は黒褐色土層であり、このうち7層は、46号竪穴床硬化部にあたる。

出土土器は、4が壺形土器、2・3・5が甕形土器、1が椀形土器であり、1・4は床面から、2はP7内から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

46号竪穴（第74・75図、図版15・52・53・71・78・79・85）

46号竪穴（住居跡）は、調査区Q5-02区他に所在する。8号炉穴、45号竪穴と重複し、45号竪穴上層に位置する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は5.47（主軸）×5.23m、床面積は22.88㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.2m、主軸方位はN-26°-Wである。主柱穴はP1～4、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.81×0.71mを測り、南側に黄白色の粘土板をおく。竪穴堆積土は、1・2層が黒褐色土層、3層が暗褐色土層、炉は、4層が暗灰褐色土層、5層が黄白色粘土板、6層が焼土層である。なお、10層は、床硬化部分にあたる。ただし、明確な貼り床構造はもたない。

出土土器は、炉西側の床面から覆土下層を中心に、比較的大形の破片が多数認められた。覆土も浅いことから、遺存遺物を含む可能性がある。1・2・8～11が壺形土器、3・4・15・16が甕形土器、5が椀形土器、7が高杯形土器、17がミニチュア形土器、6・12～14が椀ないしは高杯形土器であり、1・2・5・12・17は床面から、3・4・6・7・9～11・14・15は覆土から出土している。1は、充填単斜縄文の山形文をもつ。2は、帯縄文に沈線鋸歯文を重ねる。土器以外では、加工礫（敲石）1点、軽石1点が出土している。ともに、出土状況は不明。

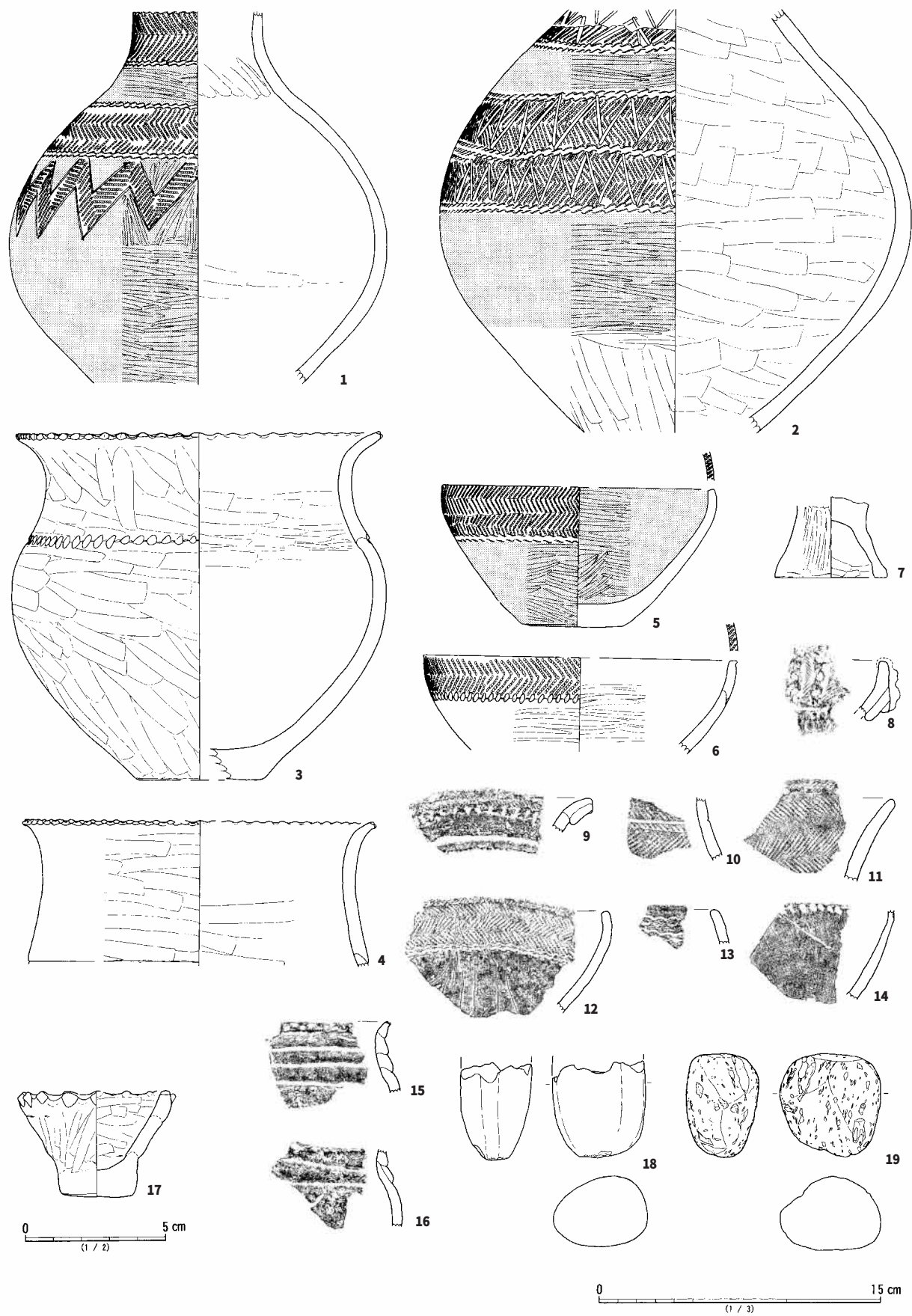
本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

47号竪穴（第76・77図、図版15・71・82）

47号竪穴（住居跡）は、調査区P5-15区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は5.43（主軸）×4.96m、床面積は21.90㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.33m、主軸方位はN-70°-Wである。主柱穴はP1～4、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.95×0.57mを測り、炉体土器をとまう。竪穴堆積土は1～5層に分層され、1層が灰褐色土層（攪乱）、2層が黒褐色土層、3層が暗褐色土層、4・5層が褐色土層である。調査所見では、3～5層は人為的な埋め戻し土とする。

出土土器は、1・2・9が甕形土器、3～6が壺形土器、7・8が椀ないしは高杯形土器であり、1・8は

46号竖穴



第75图 46号竖穴 遺物

床面から、2・4は炉内から出土している。2は、炉体土器である。

本竪穴の時期は、1～3期と推定される。

48号竪穴（第76・77図、図版15・53・71・76・79・85）

48号竪穴（住居跡）は、調査区P5－64区他に所在する。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は5.07（主軸）×4.51m、床面積は17.19m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.3m、主軸方位はN－28°－Wである。主柱穴は検出されなかった。P1～4は主柱穴とは考えにくい。P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.79×0.72mを測り、南側を土器で囲む。竪穴堆積土は1～5層に分層され、1・2層が暗褐色土層、3層が暗灰褐色土層、4・5層が褐色土層である。

出土土器は、1・4～6が壺形土器、2・3・7・8が甕形土器であり、1・3は床面、2は炉体土器である。5・6は同一個体と推定される。1の胴部下半内外面には、縦方向に焼成前の粘土補強痕が認められる。2は、深鉢形の甕であるが、口唇部の押捺は、後期に一般的な棒状工具等による交互押捺である。また、8の口縁端部押捺の形状は、40号竪穴3、49号竪穴7・8と似る。土器以外では、凹石1点が出土している。出土状況は不明。

本竪穴の時期は、1期と推定される。

49号竪穴（第78・79図、図版15・53・54・71・77・78・80・85）

49号竪穴（住居跡）は、調査区P6－14区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は6.19（主軸）×5.68m、床面積は28.73m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.28m、主軸方位はN－36°－Wである。主柱穴はP1～4、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。硬化面除去後にPit多数（P9～P18）が検出されたが、有意の配置は認められない。炉は、平面規模0.98×0.96mを測る。竪穴覆土は、1・2層が黒褐色土層、3層が暗褐色土層、炉は、4層が暗灰褐色土層、5層が焼土層である。

出土土器は、1～3・10～14が壺形土器、4・7・8・17～20が甕形土器、5・6が椀形土器、9が高杯形土器、15・16が椀ないしは高杯形土器であり、4・6～9・16は床面から、19はP4内から、1～3・5・10～12・14・18は覆土から出土している。このうち、10・12は同一個体と推定される。7・8の口縁端部押捺部の形状は、40号竪穴3、48号竪穴8と似る。甕形土器口頸部は粘土紐積み上げによる輪積み装飾をもつものが主体となる。7・8は、装飾部にヘラナデを施すが、輪積み痕断面は立体感がある。17～20は、指頭痕を全体に残している。壺形土器帯縄文区画は、沈線区画を主体とし、結節区画が混在する。1の山形縄文帯は、充填単斜縄文を地文とする。土器以外では、こて状の軽石1点が出土している。出土状況は不明。軽石は、産地同定の分析を行っている（第3章第6節）。

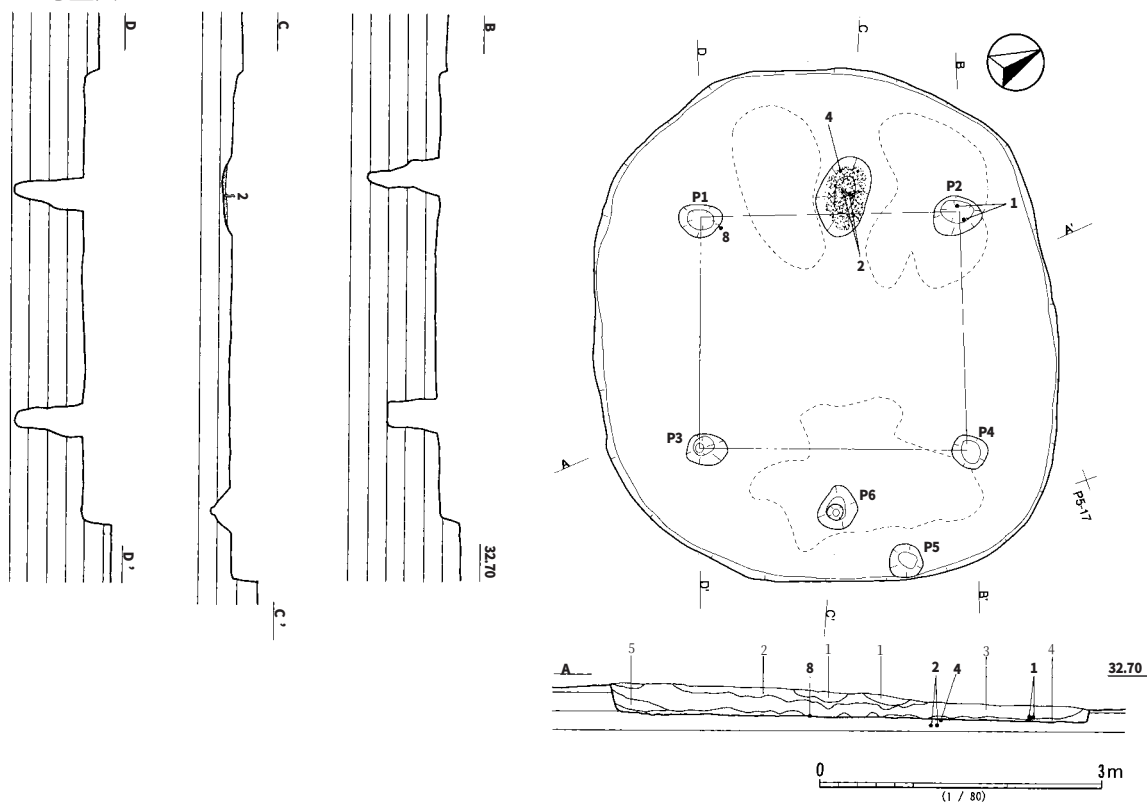
本竪穴の時期は、3期と推定される。

50号竪穴（第79図、図版15）

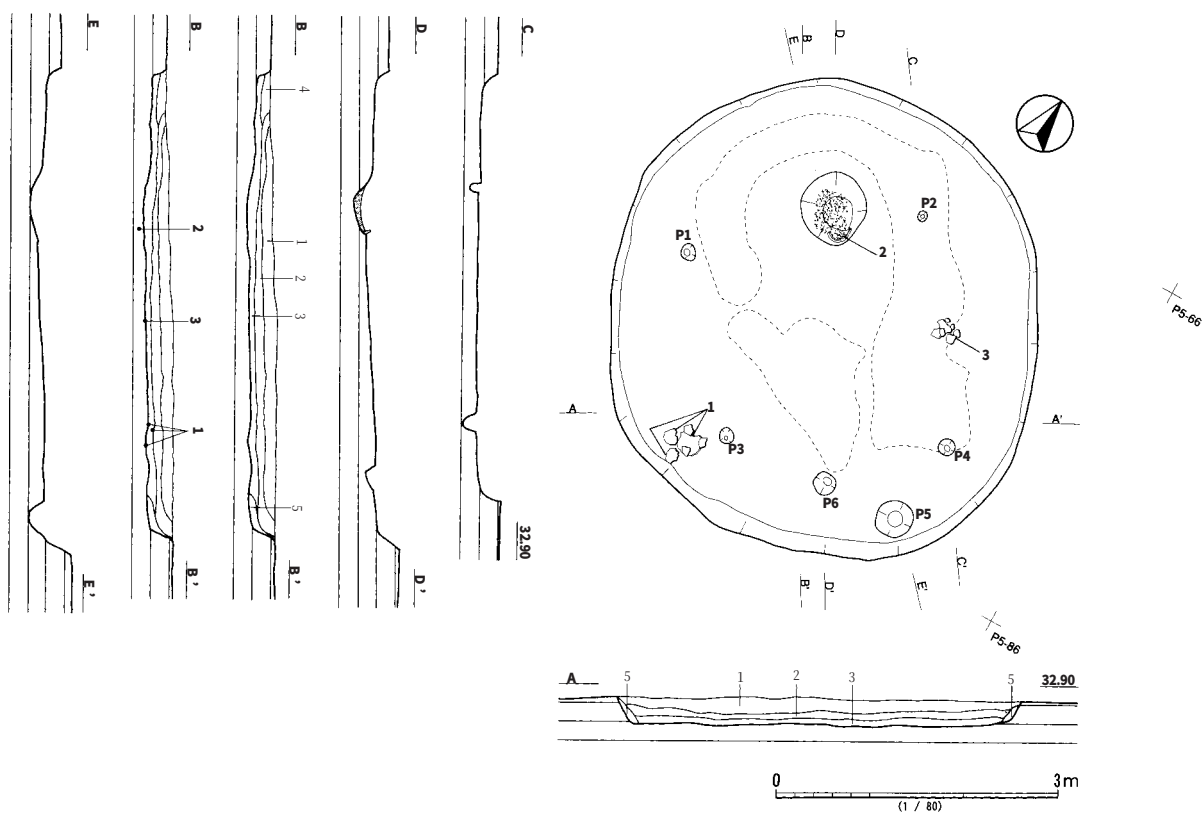
50号竪穴（住居跡）は、調査区P6－47区他に所在する。11号溝と重複する。竪穴の掘り込みは検出されず、炉および床硬化面から推定した。全体規模は主軸方向で5.0m程度、主軸方位はN－65°－W前後と推定される。P1は出入口施設の可能性がある。炉は、平面規模で0.51×0.43mを測る。炉覆土は、1層が暗灰褐色土層、2層が焼土層である。

出土土器は、1の甕形土器のみである。

47号竖穴

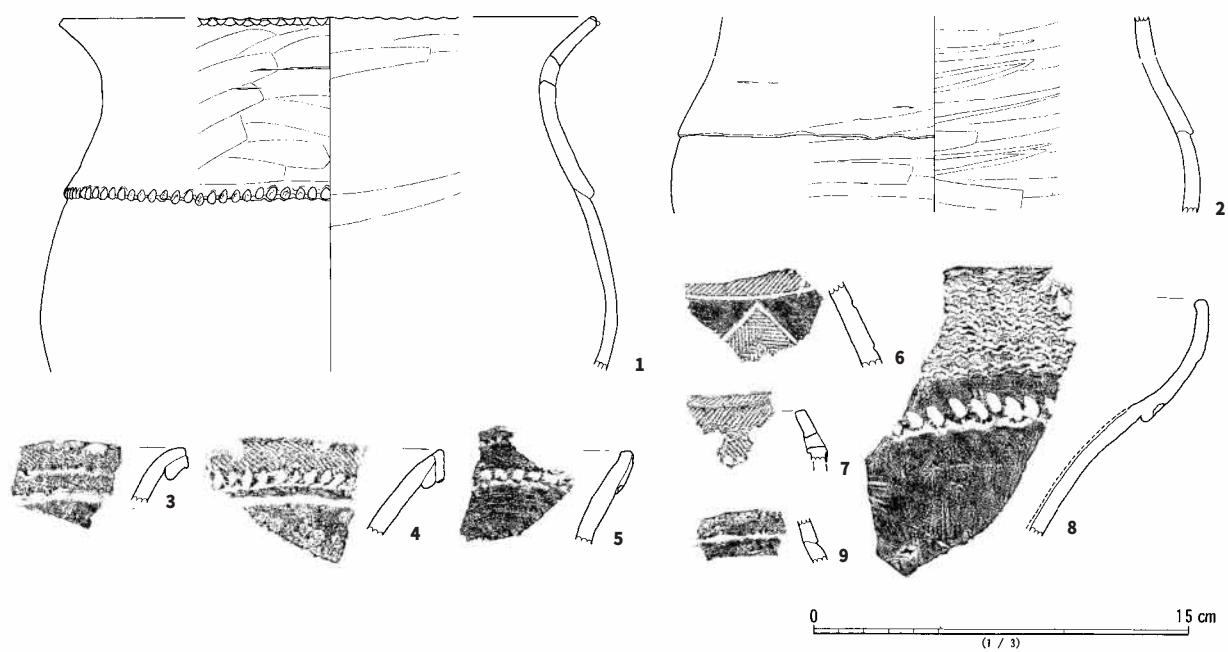


48号竖穴

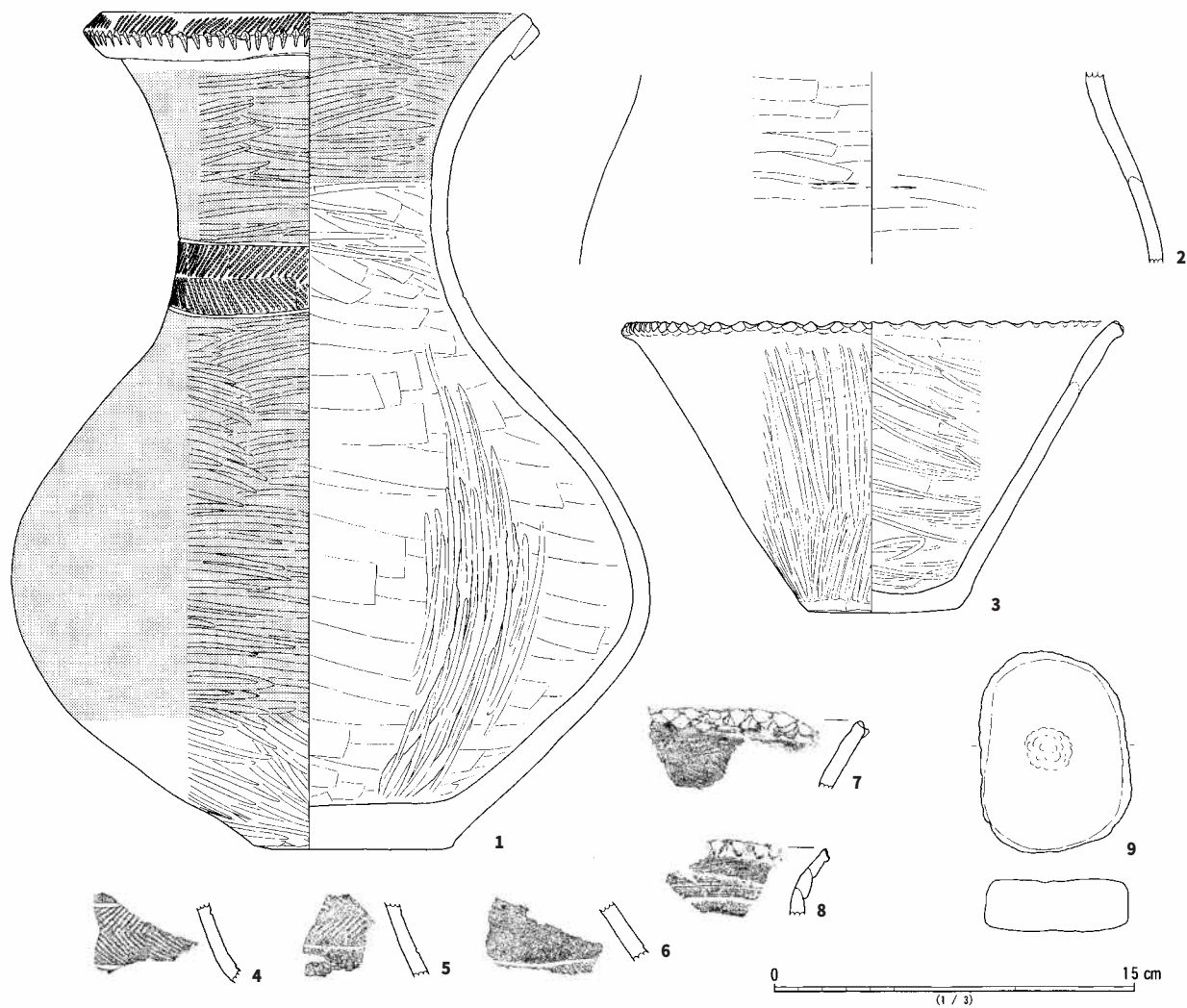


第76図 47・48号竖穴 遺構

47号竖穴

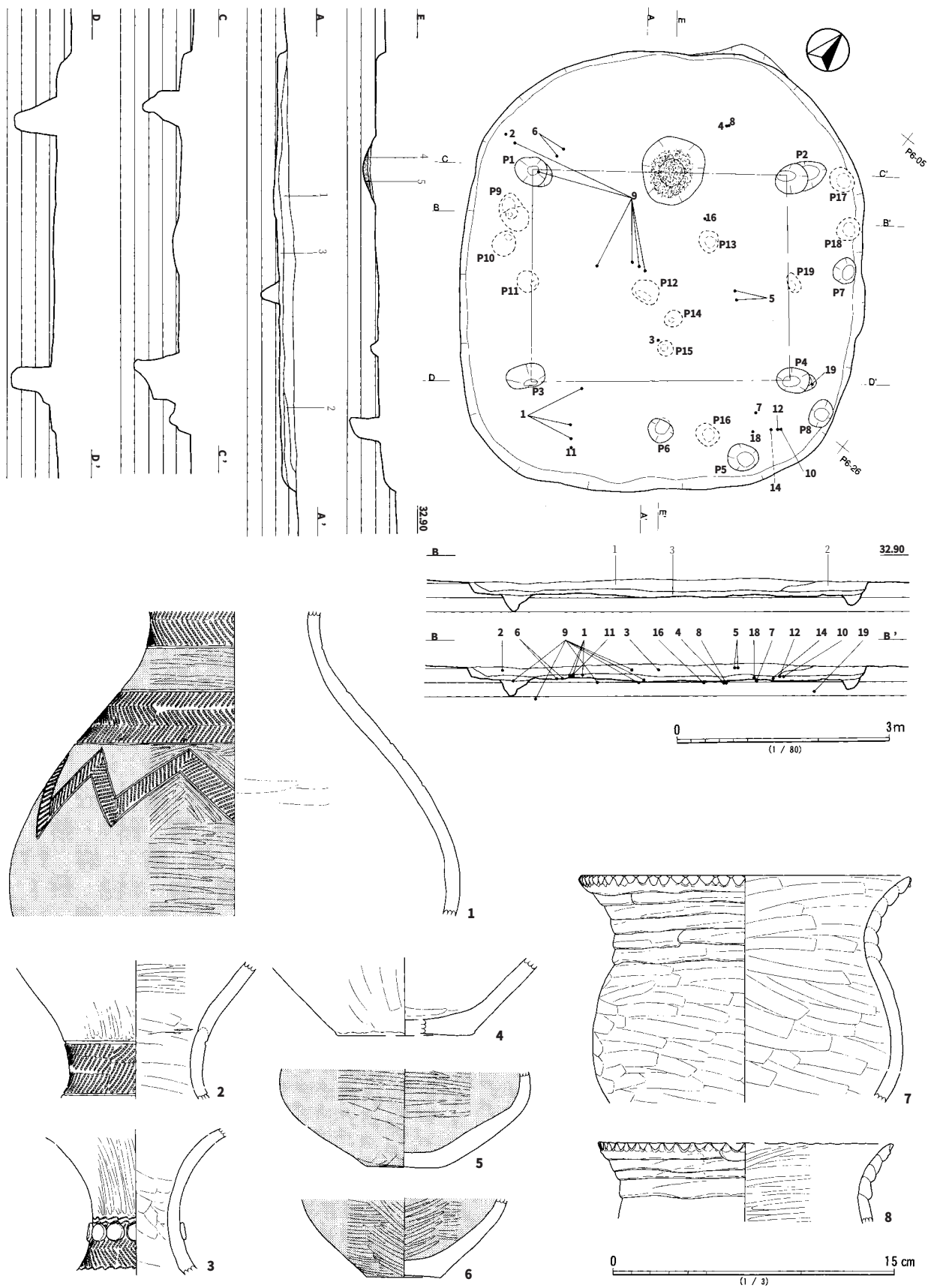


48号竖穴

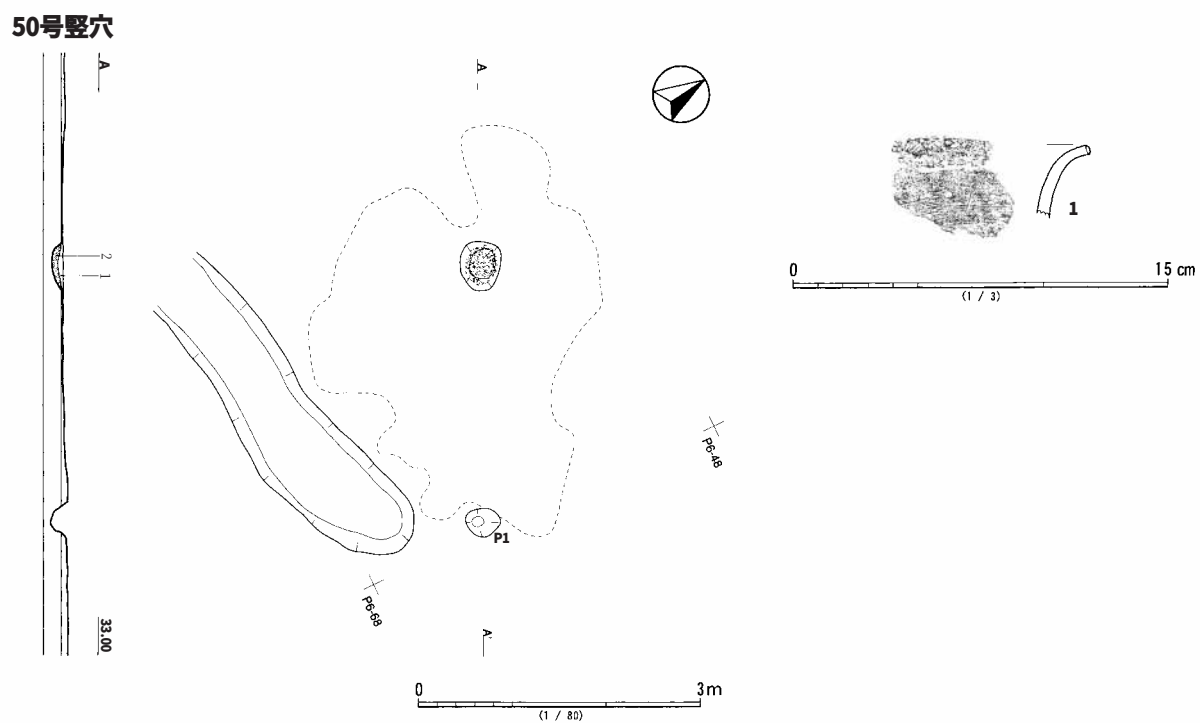
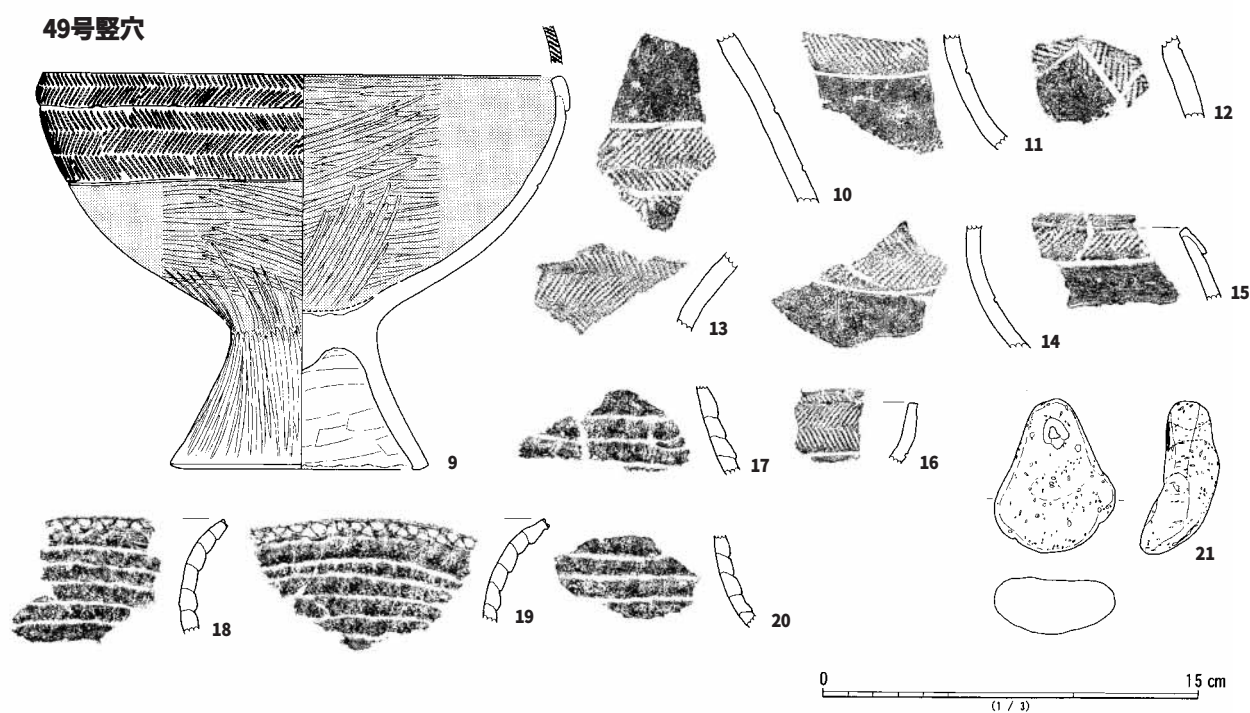


第77图 47・48号竖穴 遺物

49号竖穴



第78图 49号竖穴 遺構遺物



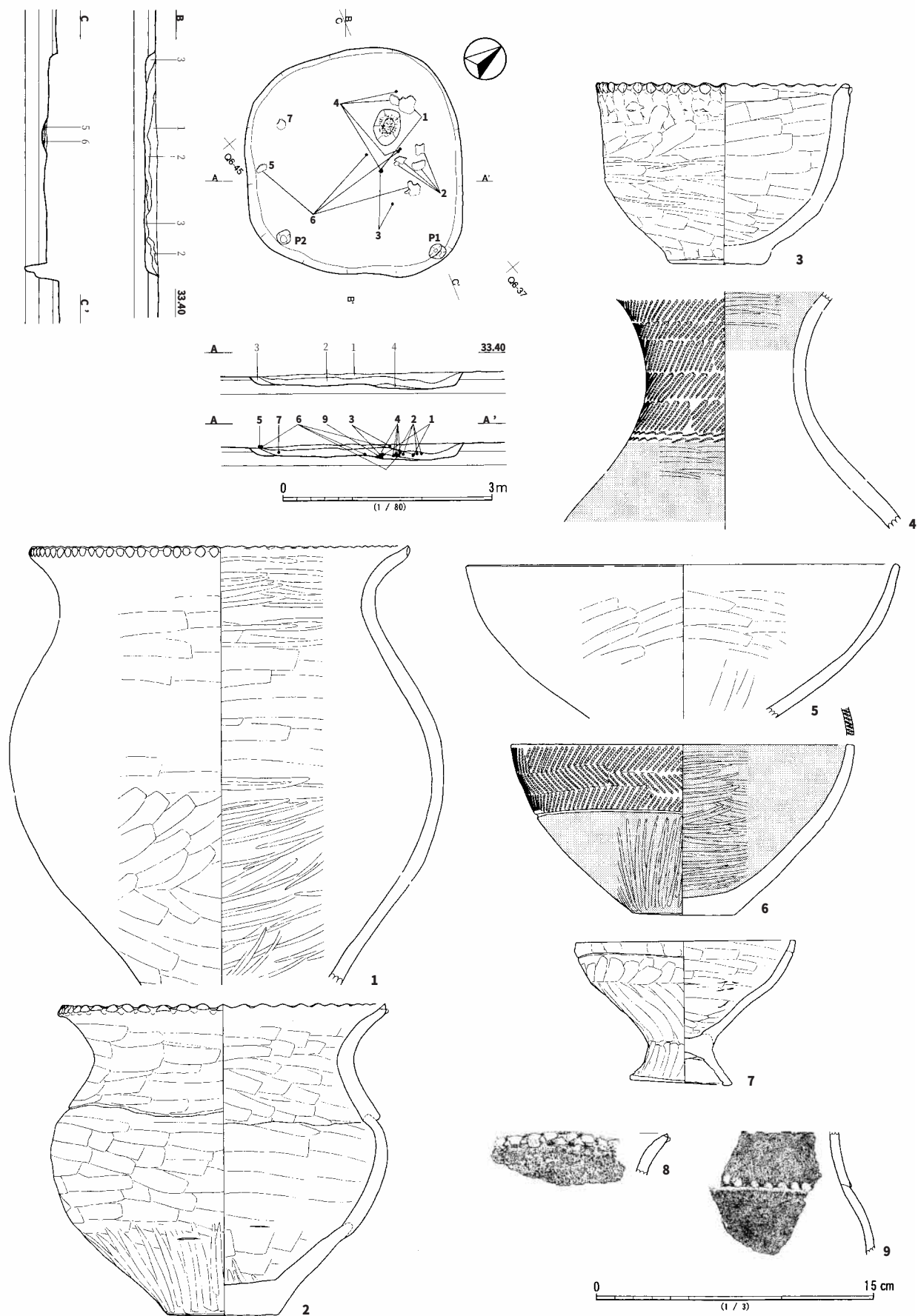
第79図 49・50号竪穴 遺構遺物

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、細別時期は不明。

51号竪穴（第80図、図版16・54・79・82）

51号竪穴（住居跡）は、調査区Q6-35区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は3.27（主軸）×3.11m、床面積は7.68m²を測る。確認面からの深さは0.22m、主軸方位はN-51°-Wである。主柱穴は検出されなかった。南、東隅に小Pitが検出されたが、性格は不明。

51号竖穴



第80图 51号竖穴 遺構遺物

炉は、平面規模0.53×0.37mを測る。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1・2層が暗褐色土層、3・4層が褐色土層である。炉覆土は、5層が暗褐色土層、6層が焼土層である。

出土土器は、1～3・8・9が甕形土器、4が壺形土器、6が椀形土器、7が高杯形土器、5が椀ないしは高杯形土器であり、炉周辺を中心に、1・3・9は床面、2・4～7は覆土から出土している。2・3・7はほぼ完存する。3は、器壁が厚く粗略なつくりである。細部はことなるものの、59号竪穴5に似る。

本竪穴の時期は、3期と推定される。

52号竪穴（第81・82・83図、図版16・54・55・71・77・78・80・81）

52号竪穴（住居跡）は、調査区O7-71区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は6.45（主軸）×5.67m、床面積は28.43㎡を測る。確認面からの深さは0.45m、主軸方位はN-35°-Wである。支柱穴はP1～4であり、このうちP1・2の掘形は段状となるが、建て替えによるものか、抜き取りによるものかは判断できない。P4南側は攪乱坑である。P6は出入口施設、P5・7は貯蔵穴であろうか。炉は、平面規模1.28×0.77mを測り、南側を土器で囲む。竪穴堆積土は1～6層に分層され、1層が黒褐色土層、2・4・6層が暗褐色土層、3・5層が褐色土層である。炉覆土は、7層が暗灰褐色土層、8層が焼土層である。

出土土器は、1～10・28・29・30が甕形土器、11～14・16・24～27が壺形土器、23が小形壺形土器、19・20が椀形土器、18が高杯形土器、22が鉢形土器、21・31が椀ないしは高杯形土器であり、1・3・6～8・10・11・13・16・17・19・21・22・26・29～31は床面から、9はP5内から、2・5・12・14・15・20・27・28は覆土から出土している。4は炉体土器である。このうち、21・31は同一個体と推定される。

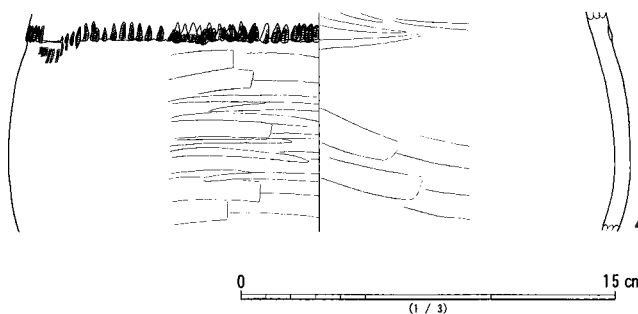
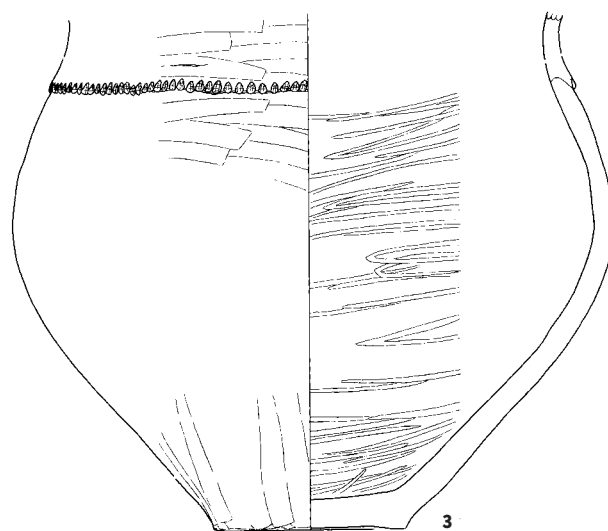
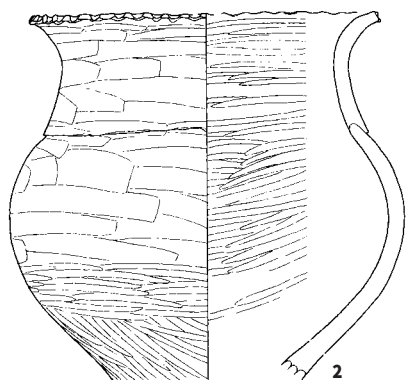
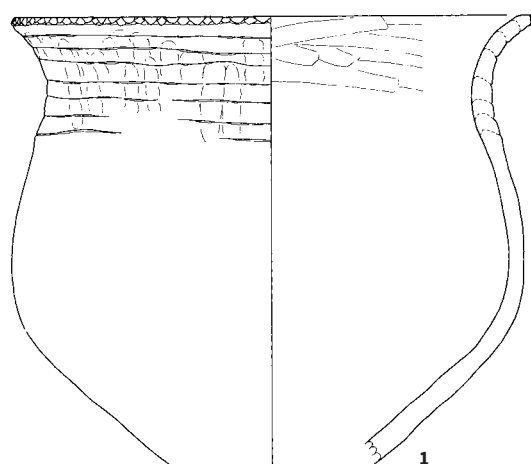
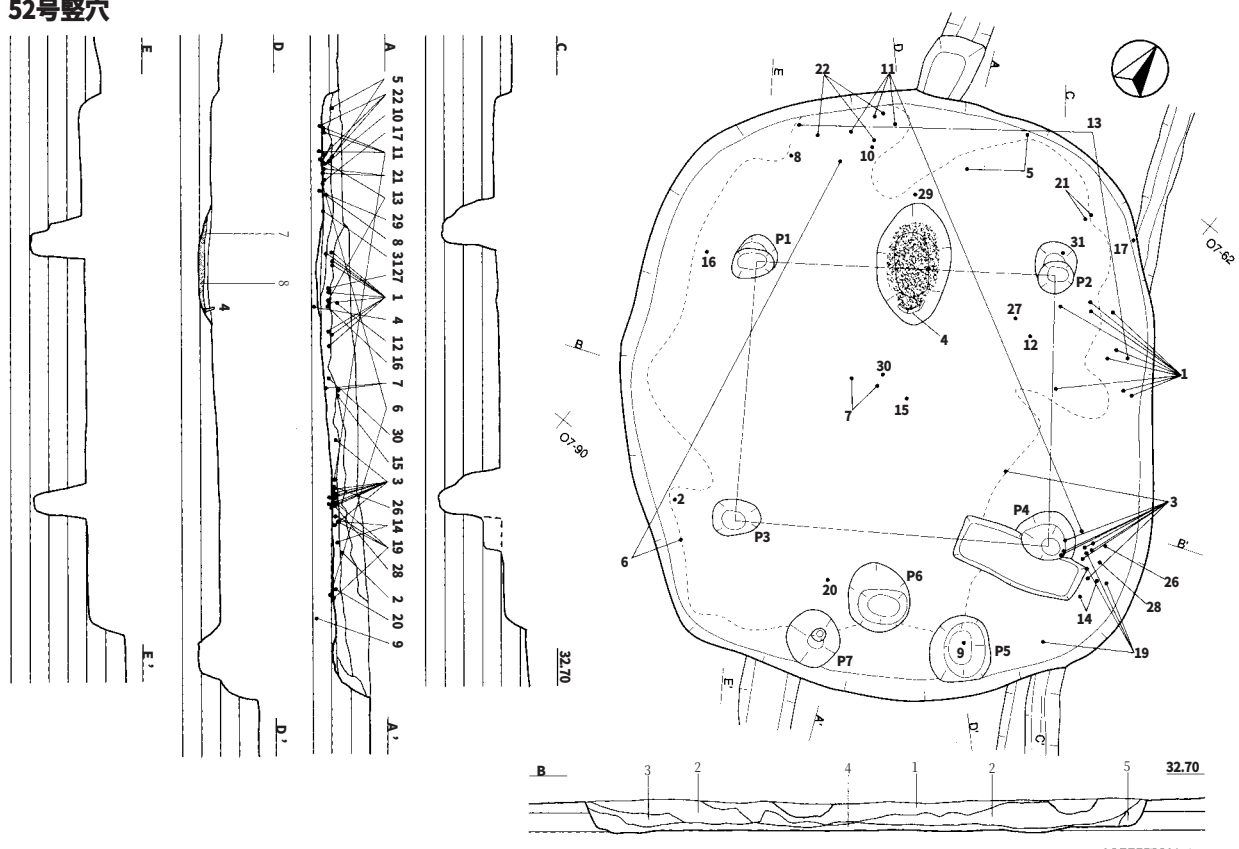
本竪穴の時期は、3期と推定される。

53号竪穴（第84・85図、図版16・56・72・78・82・84）

53号竪穴（住居跡）は、調査区O7-88区他に所在する。重複する土坑3基は攪乱坑である。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は3.76（主軸）×3.95m、床面積は10.81㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.34m、主軸方位はN-23°-Wである。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は現存部で、径0.42mを測る。主軸線上南側にも床面が焼けた部分が認められた。竪穴堆積土は1～5層に分層され、1層が暗灰褐色土層、2・3層が暗褐色土層、4層が黒褐色土層、5層がローム粒を主体とする層であり、炉覆土は6層が灰褐色土層、7層が焼土層である。本竪穴は火災に遭っていると推定される。

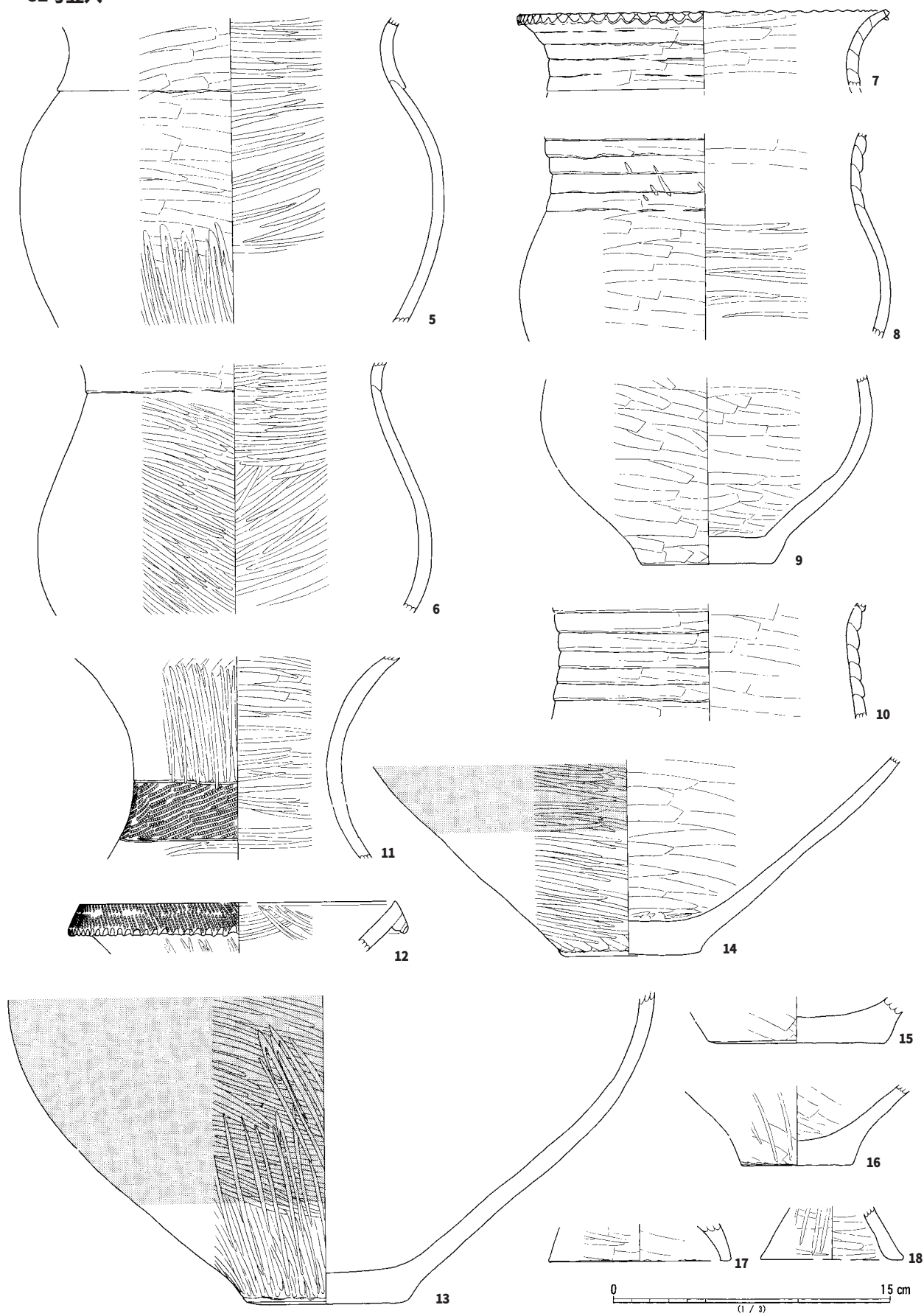
出土土器は、1・3～5・15が壺形土器、2が広口壺形土器、6・8・10～14が甕形土器、9・16が椀形土器であり、7が椀ないしは高杯形土器、17は鉢状、18は円筒状の土器である。19は器種を特定できない。4・6・10・11・13～16・18は床面、12は炉内から、1・2・5・7・17は覆土から出土している。1は、竪穴中央付近で床面近くからの出土がみられるものの、壁際に向かってレンズ状に分布することから、投棄ないしは流れ込みと考えられる。床面出土としたものも、破片が散在した状況であった。ただしこれが、被災による上屋の倒壊によるものか、竪穴破棄にともなう焼却後の投棄によるものかの判断は難しい。1は、大形の壺形土器であり、器高は61cmを測る。胴部幾何学文は省略が進んでいるが、口縁部形態は3とともに古い要素をもつ。18は、整形も粗略で、性格を特定することはできない。

52号竖穴



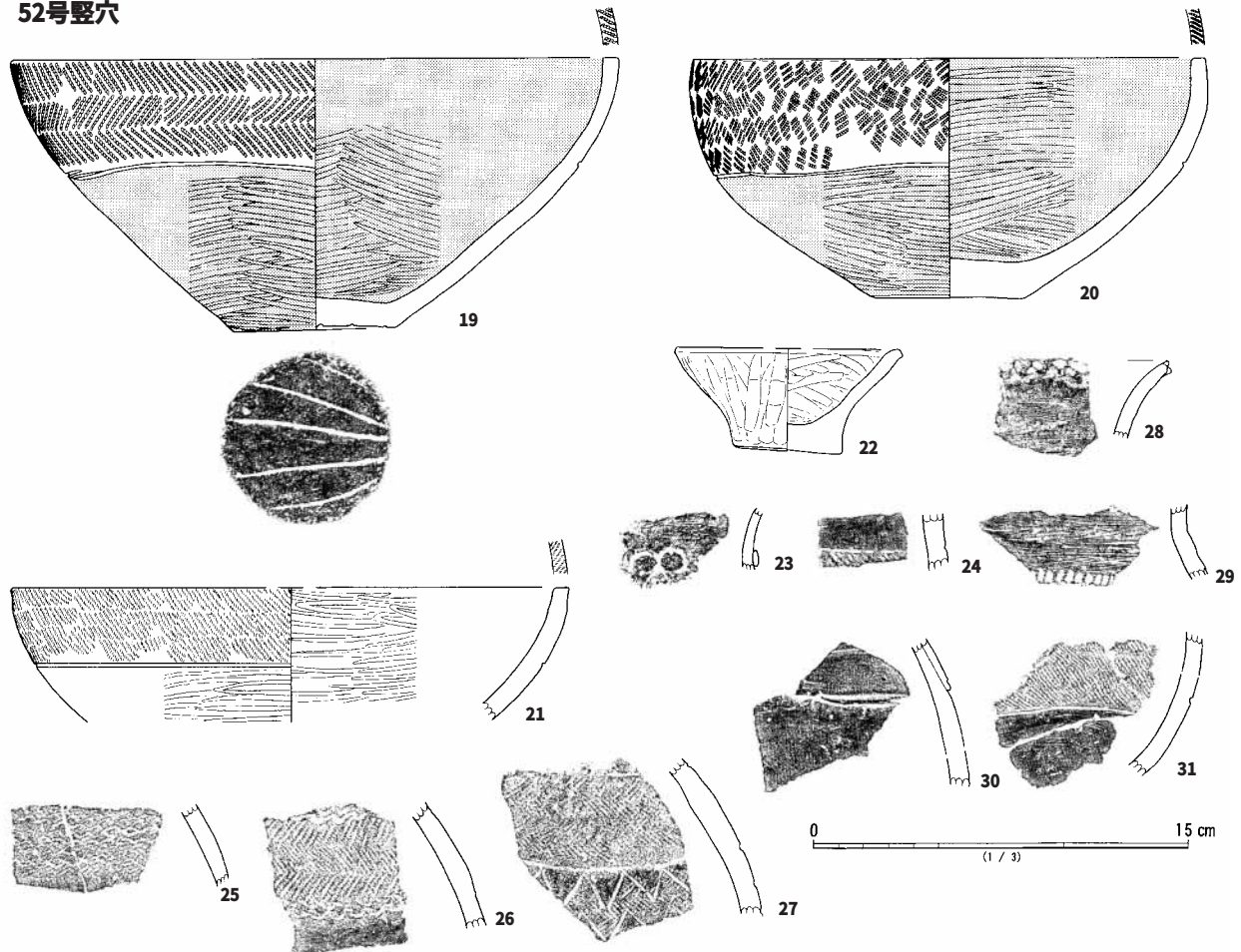
第81図 52号竖穴 遺構遺物

52号竖穴



第82图 52号竖穴 遺物 (1)

52号竪穴



第83図 52号竪穴 遺物 (2)

い。土器以外では、脚状土製品1点が覆土から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

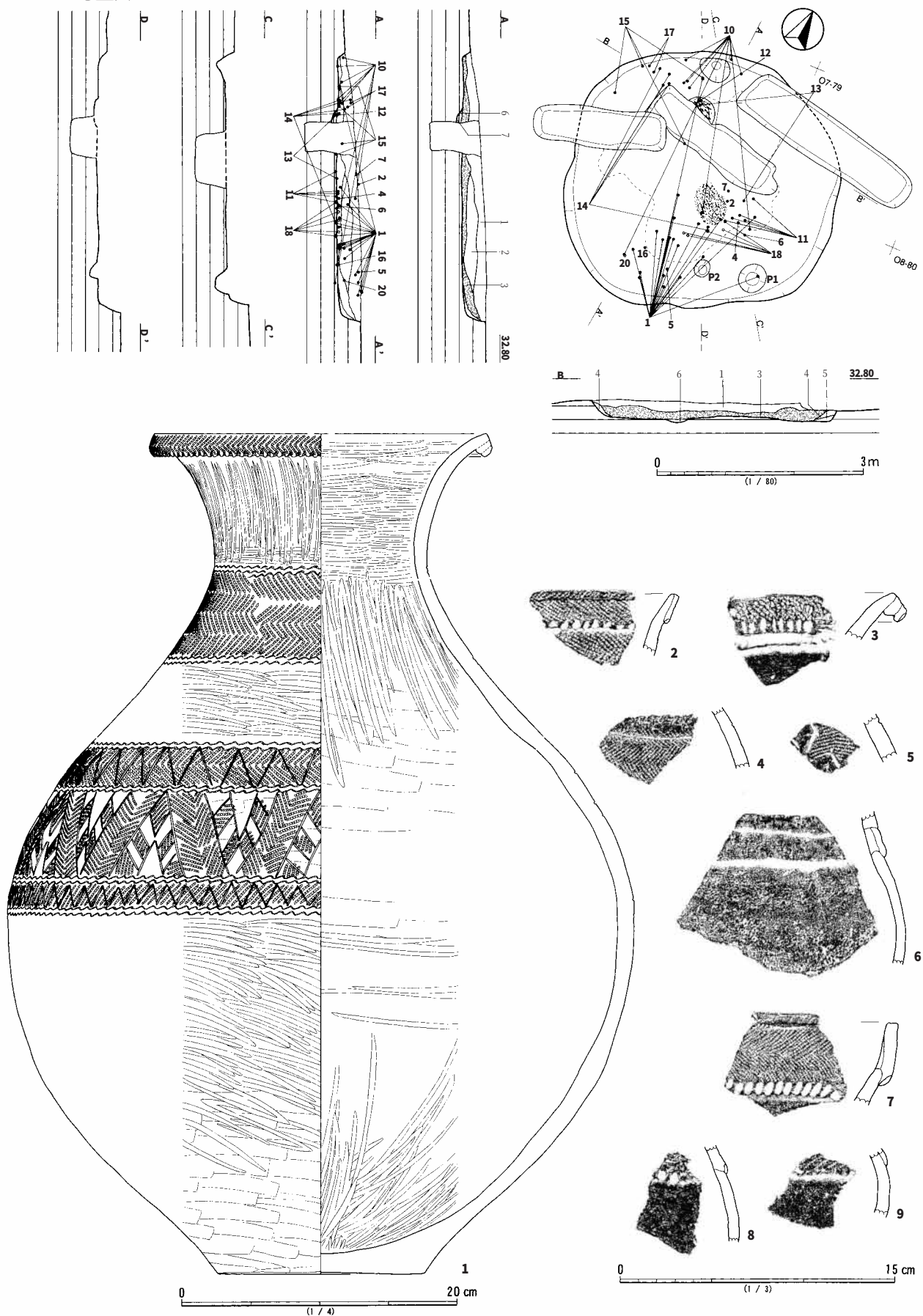
54号竪穴 (第86・87図、図版16・56・57・72・77・81・84・85)

54号竪穴(住居跡)は、調査区P8-17区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は5.13(主軸)×5.05m、床面積は20.35m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.53m、主軸方位はN-17°-Wである。支柱穴はP1～4、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.63×0.66mを測る。竪穴堆積土は1～8層に分層され、1～4・6・7層が暗褐色土層、5層が褐色土層、8層がロームブロックを主体する褐色土層であり、7層は、焼土、炭化物が多量に混じる。炉内、9層は暗灰褐色土層、10層は焼土層である。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、遺物の出土状況からみて、失火、放火などの被災によるものではなく、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。

出土土器は、1～7が壺形土器、8・10・12～14が甕形土器、9が小形甕形土器、11が高杯形土器、15が椀形土器であり、1・4・13・15は床面から、5・8・10・12・14は覆土から出土している。1は、55号竪穴4と酷似する。土器以外では、加工礫(敲石)1点、砥石1点、土製勾玉1点が出土している。17は床面、16・18は覆土からの出土である。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩が出土している。

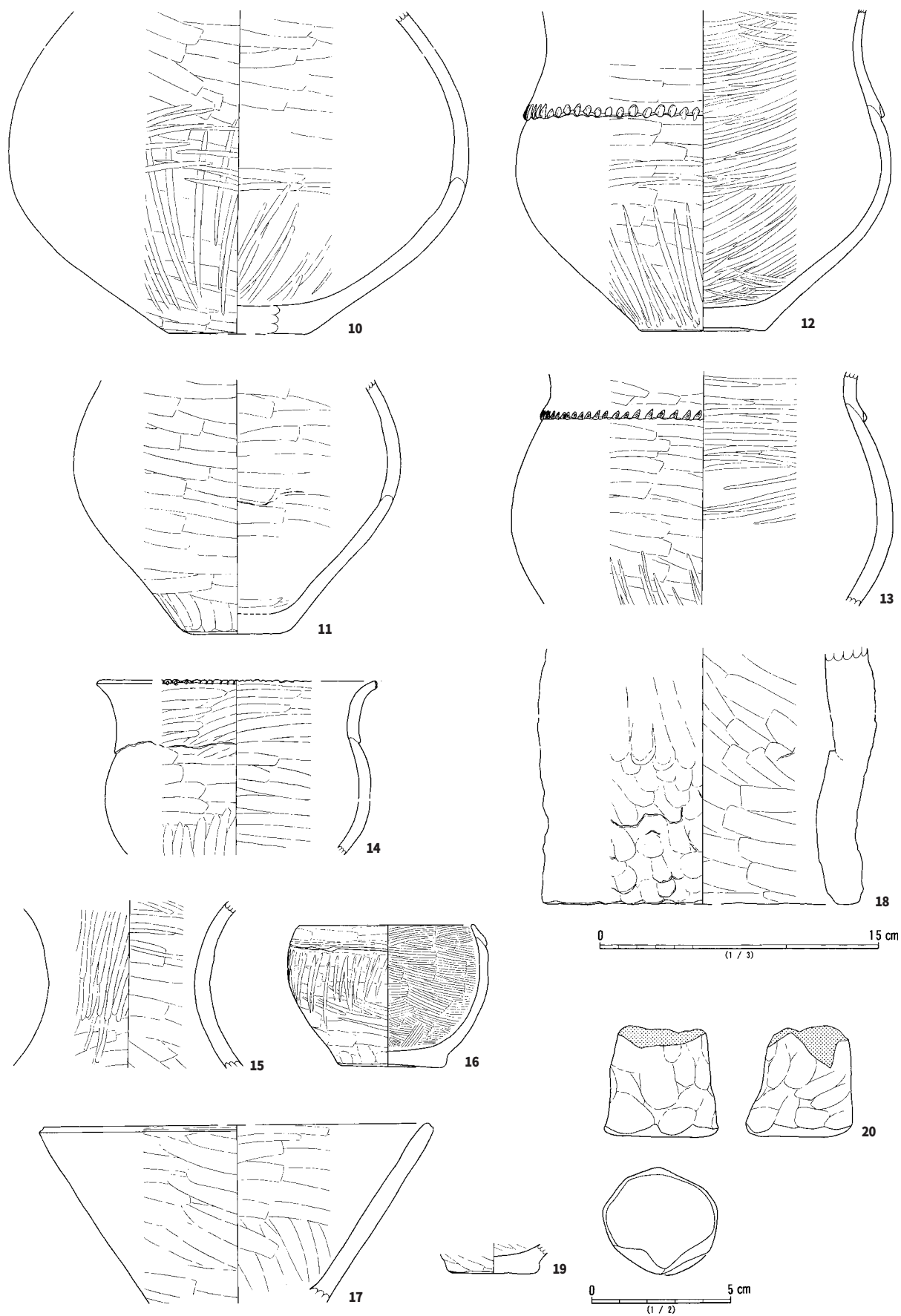
本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

53号竖穴



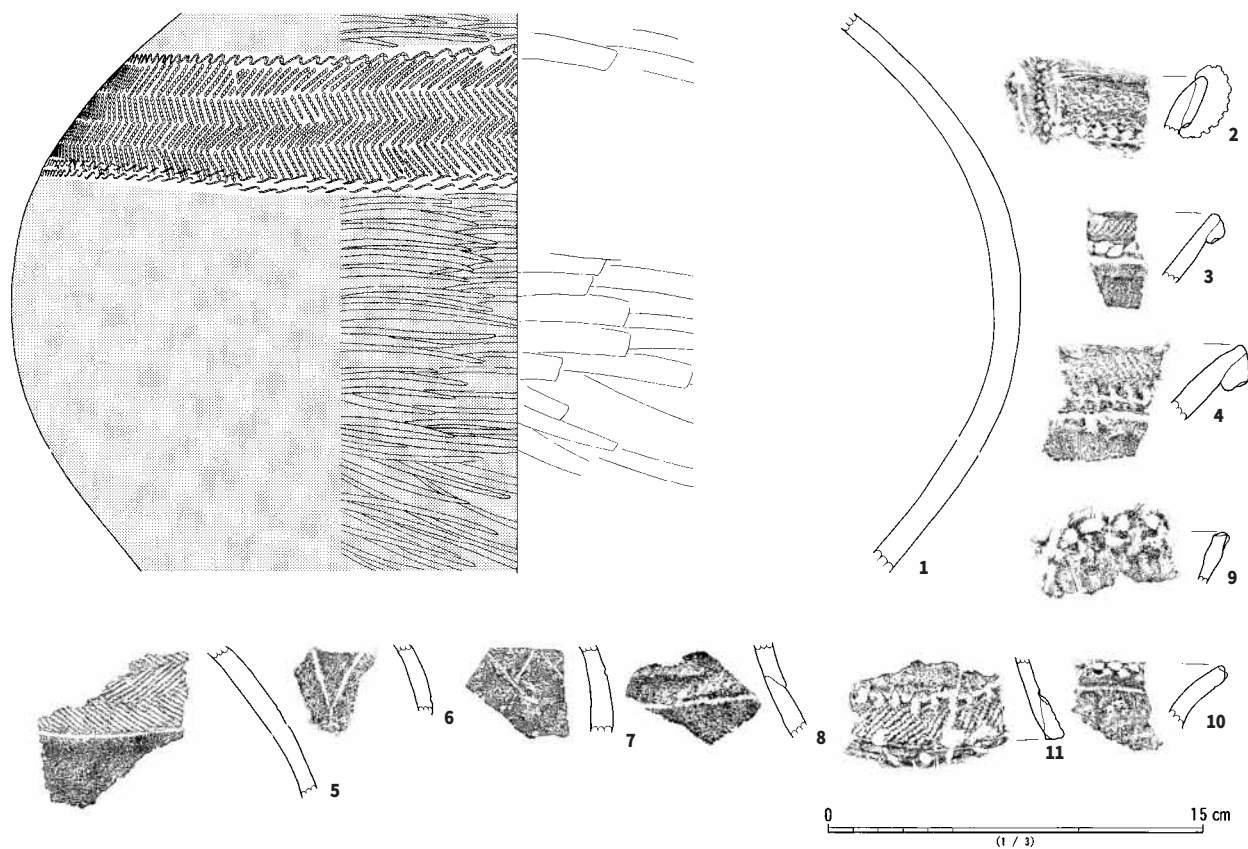
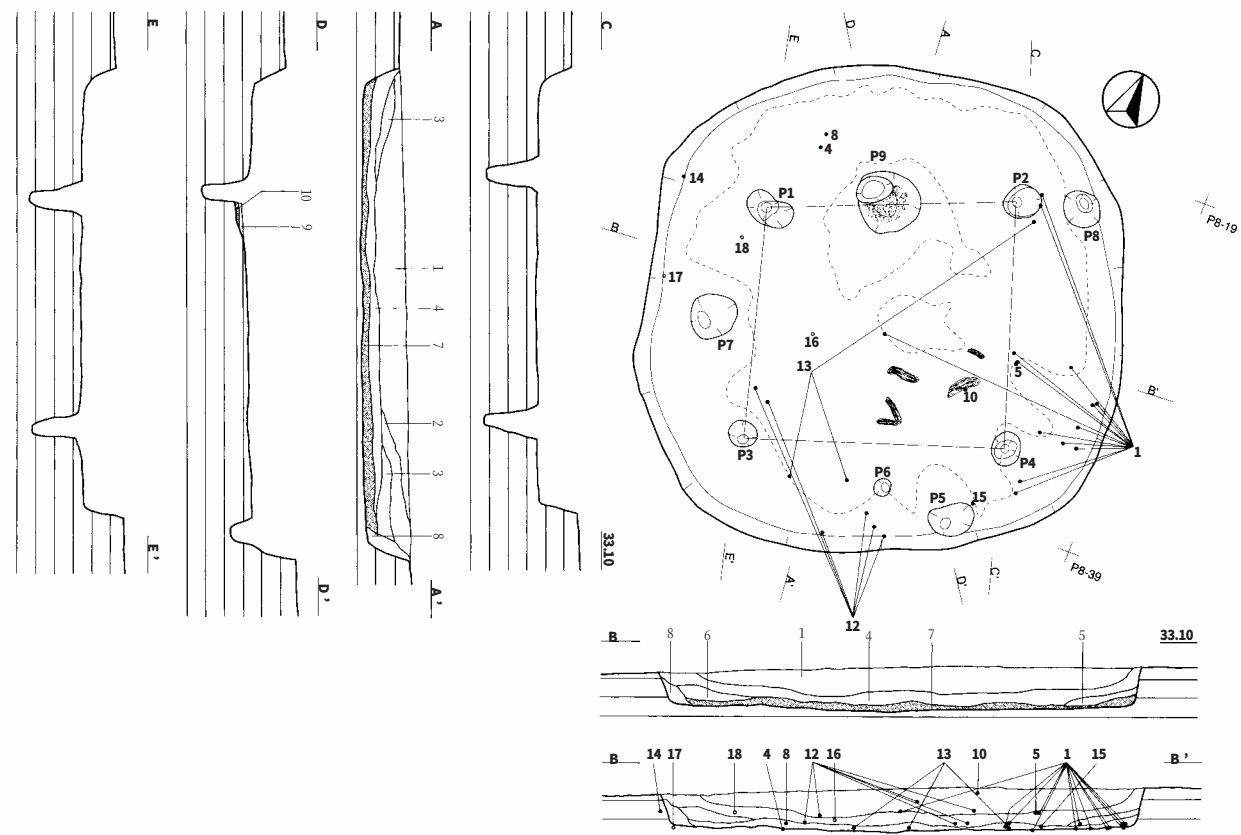
第84图 53号竖穴 遺構遺物

53号竖穴



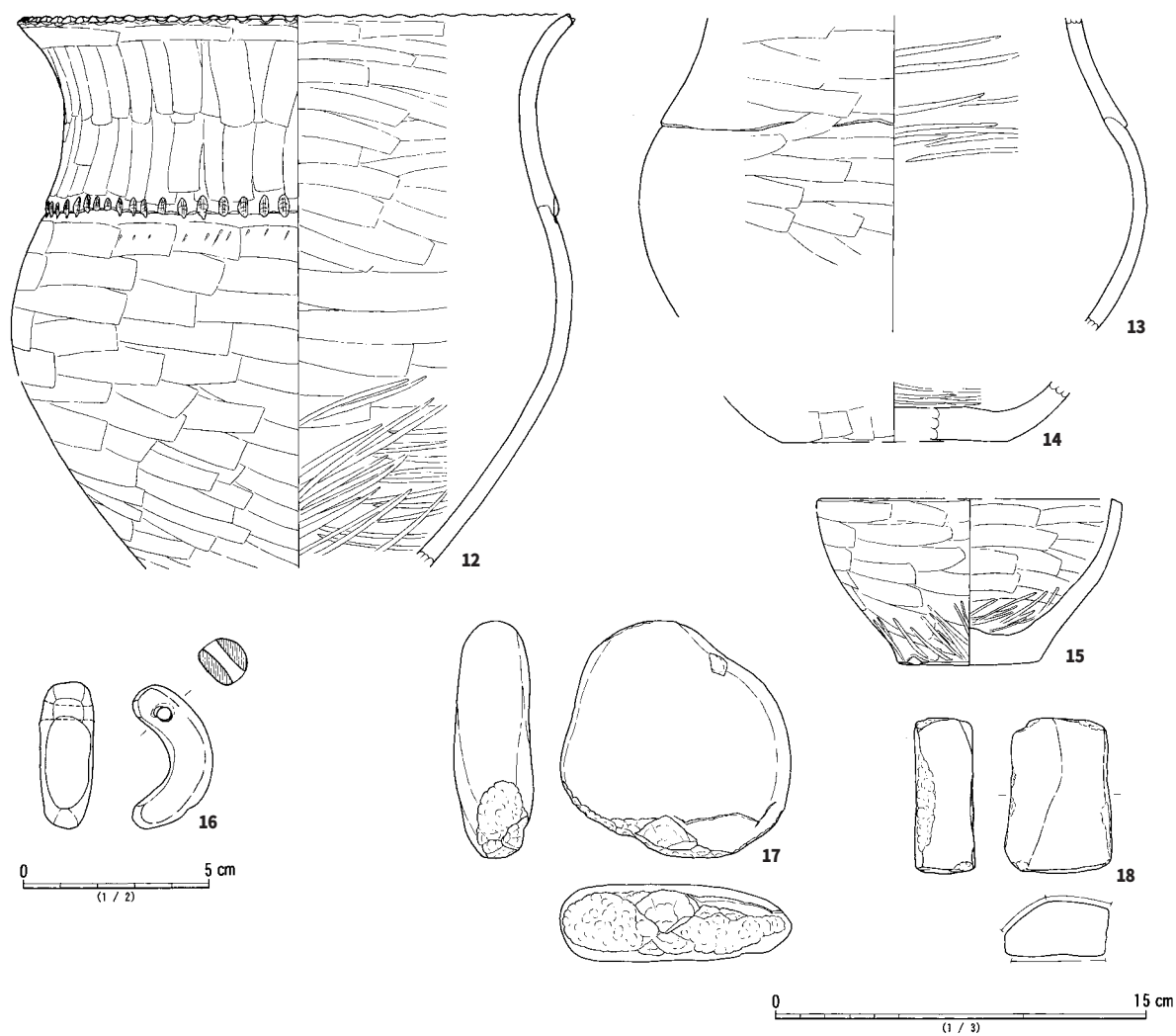
第85图 53号竖穴 遺物

54号竖穴

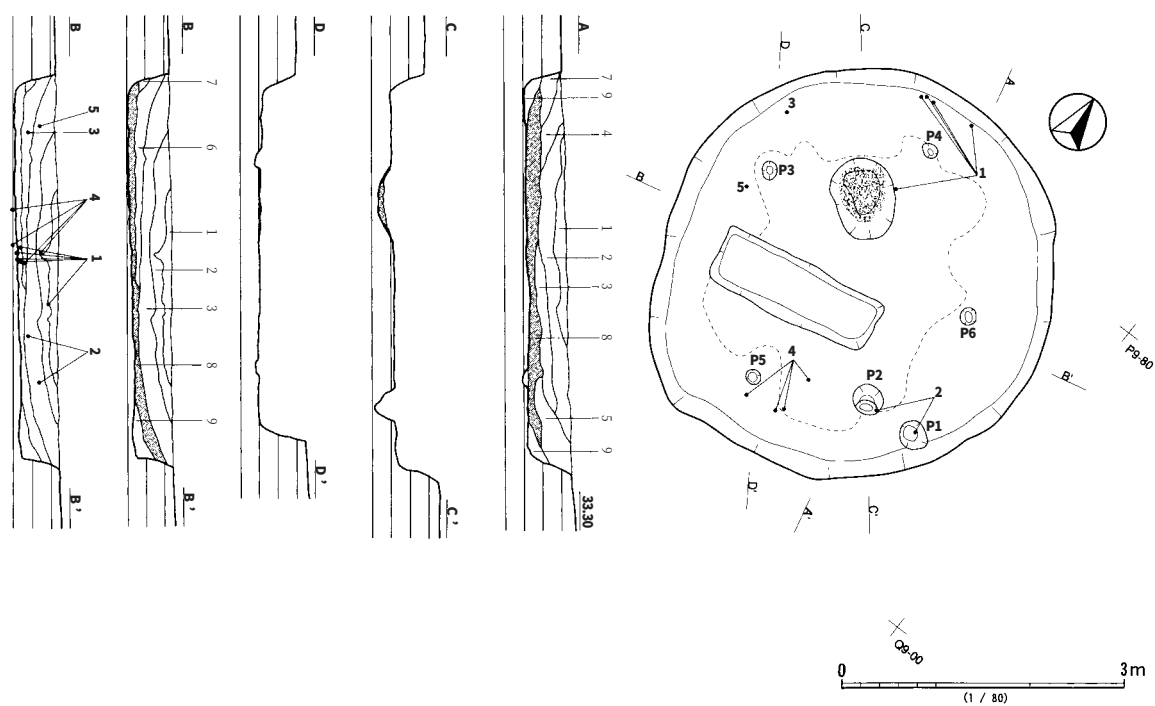


第86图 54号竖穴 遺構遺物

54号竖穴



55号竖穴



第87图 54・55号竖穴 遺構遺物

55号竪穴（第87・89図、図版17・57・72）

55号竪穴（住居跡）は、調査区P8-78区他に所在する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は4.31（主軸）×4.14m、床面積は12.58m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.46m、主軸方位はN-39°-Wである。P3-6は、主柱穴としては浅く、配置も安定していない。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模0.86×0.66mを測る。中央土坑は、攪乱坑である。竪穴堆積土は1-9層に分層され、1層が黒褐色土層、2-6層が褐色土層、7-9層が暗褐色土層であり、8層は焼土を多量に含む。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、焼土の堆積状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。

出土土器は、1・4が壺形土器、2・3・5が甕形土器であり、1・4は床面から、2・3・5は覆土から出土している。4は、54号竪穴1と酷似する。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩が出土している。

本竪穴の時期は、3期と推定される。

56号竪穴（第88・89図、図版17・57・72・76・81）

56号竪穴（住居跡）は、調査区P9-13区他に所在する。57号竪穴と重複するが、接している程度であるため、遺構上での新旧関係は確認できなかった。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は5.23（主軸）×4.91m、床面積は19.51m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.64m、主軸方位はN-70°-Wである。主柱穴はP1-4である。床面を精査する段階で、平板状（長方形）の柱痕が認められた。P5は貯蔵穴である。通常の出入口Pit位置に凸堤が圍繞する。ただし、凸堤内側からPitは検出されなかった。炉は、平面規模で0.79×0.57mを測る。竪穴堆積土は1-7層に分層され、1層が黒褐色土層、2・4・6層が暗褐色土層、3・5・7層がロームを多量に含む褐色土層である。

出土土器は、1・2・6-10が壺形土器、4・5・11-15が甕形土器、3が椀形土器であり、2-5・7・15は床面、9はP5内、1・6・13は覆土から出土している。1・3の地文は擬縄文であり、オオバコの花茎等の回転によると推定される。1は、沈線区画の壺形土器としては、口縁部高が低く短頸である。9・10および57号竪穴3は、同一個体と推定される。

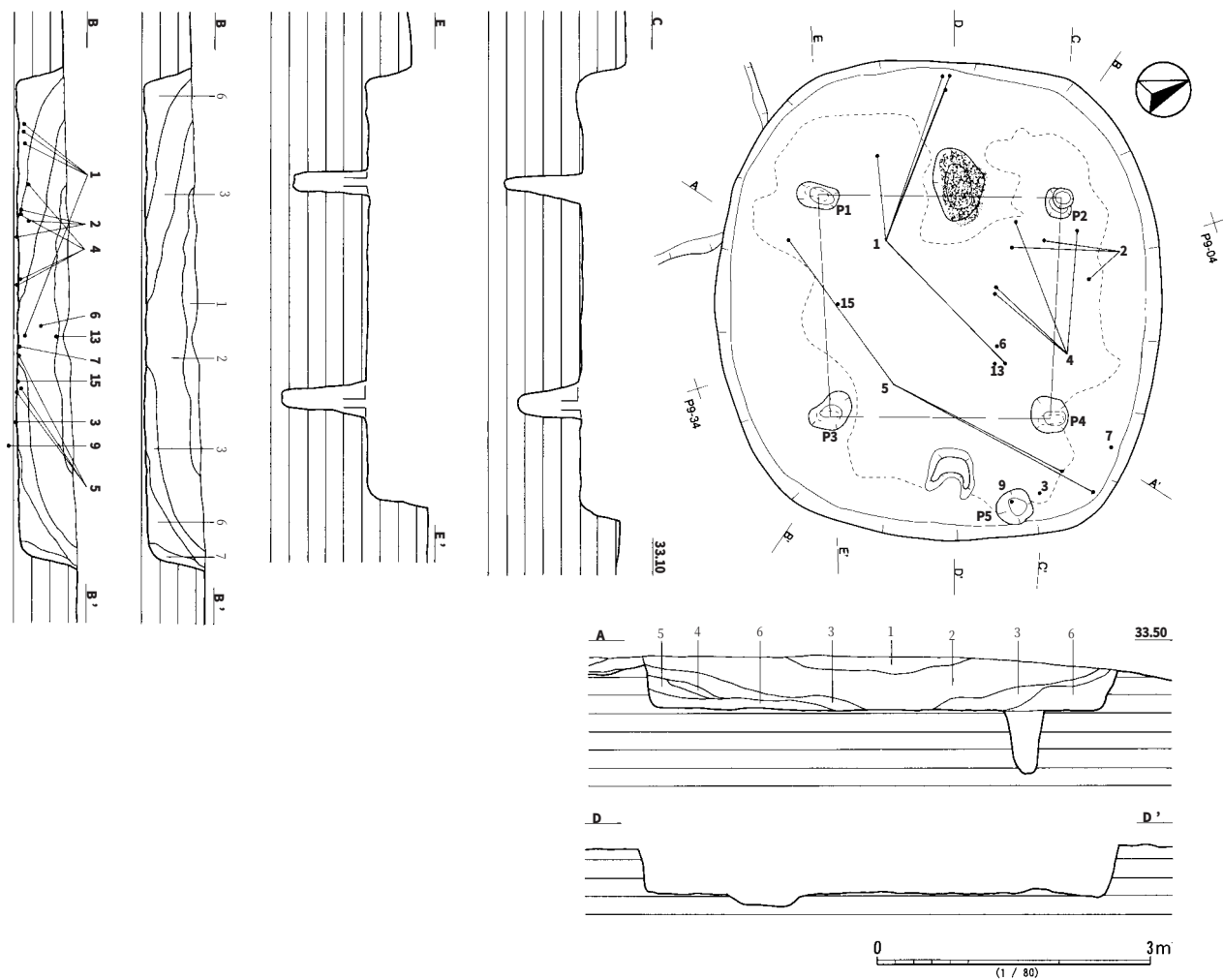
本竪穴の時期は、3期と推定される。

57号竪穴（第88・89図、図版17・72）

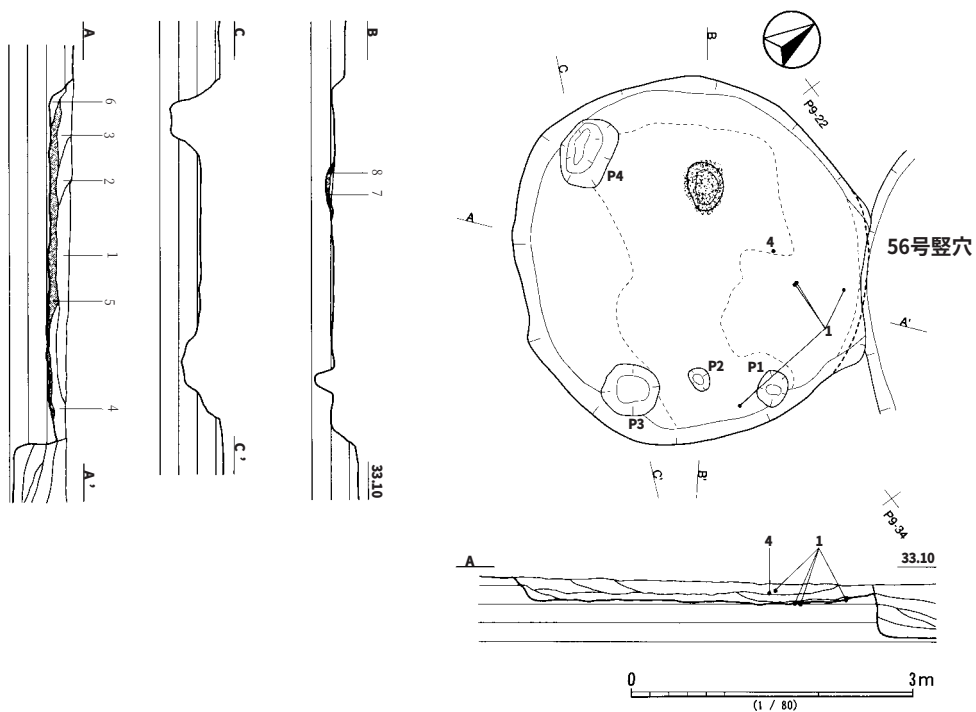
57号竪穴（住居跡）は、調査区P9-32区他に所在する。56号竪穴と重複するが、接している程度であるため、遺構上での新旧関係は確認できなかった。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は3.92（主軸）×3.68m、床面積は9.88m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.27m、主軸方位はN-42°-Wである。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。P3、P4については、本竪穴にともなうものかどうか不明。炉は、平面規模0.51×0.39mを測る。竪穴堆積土は1-6層に分層され、1-5層が暗褐色土層、6層が褐色土層である。各層とも焼土、炭化物の混入が認められたが、とくに5層に多い。炉内、7層は黒褐色土層、8層は焼土層である。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、壁際に間層（6層）をはさむ焼土の堆積状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。

出土土器は、1が広口壺形土器、2・3が壺形土器、4・5が甕形土器、6が椀ないしは高杯形土器であり、1は床面から、4は覆土から出土している。3は、56号竪穴9・10と同一個体と推定される。

56号竖穴

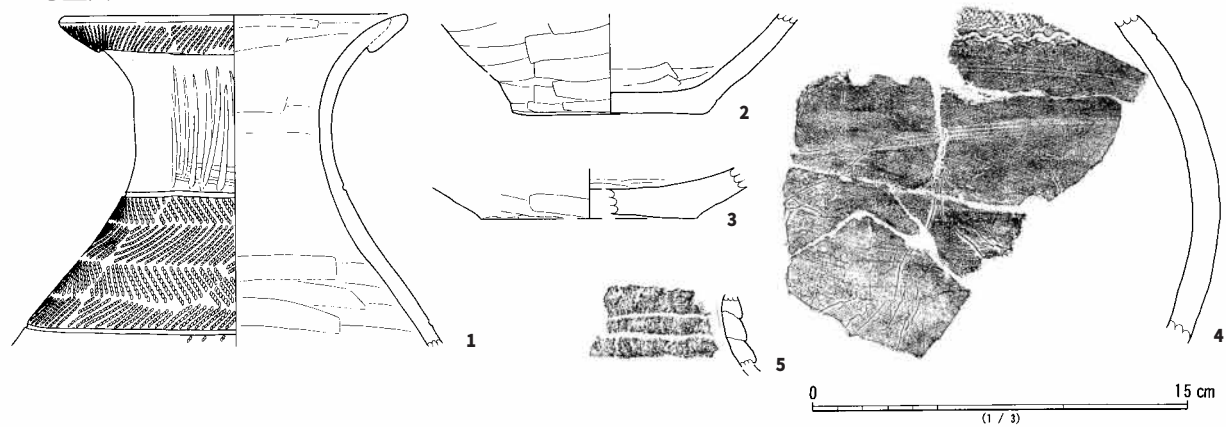


57号竖穴

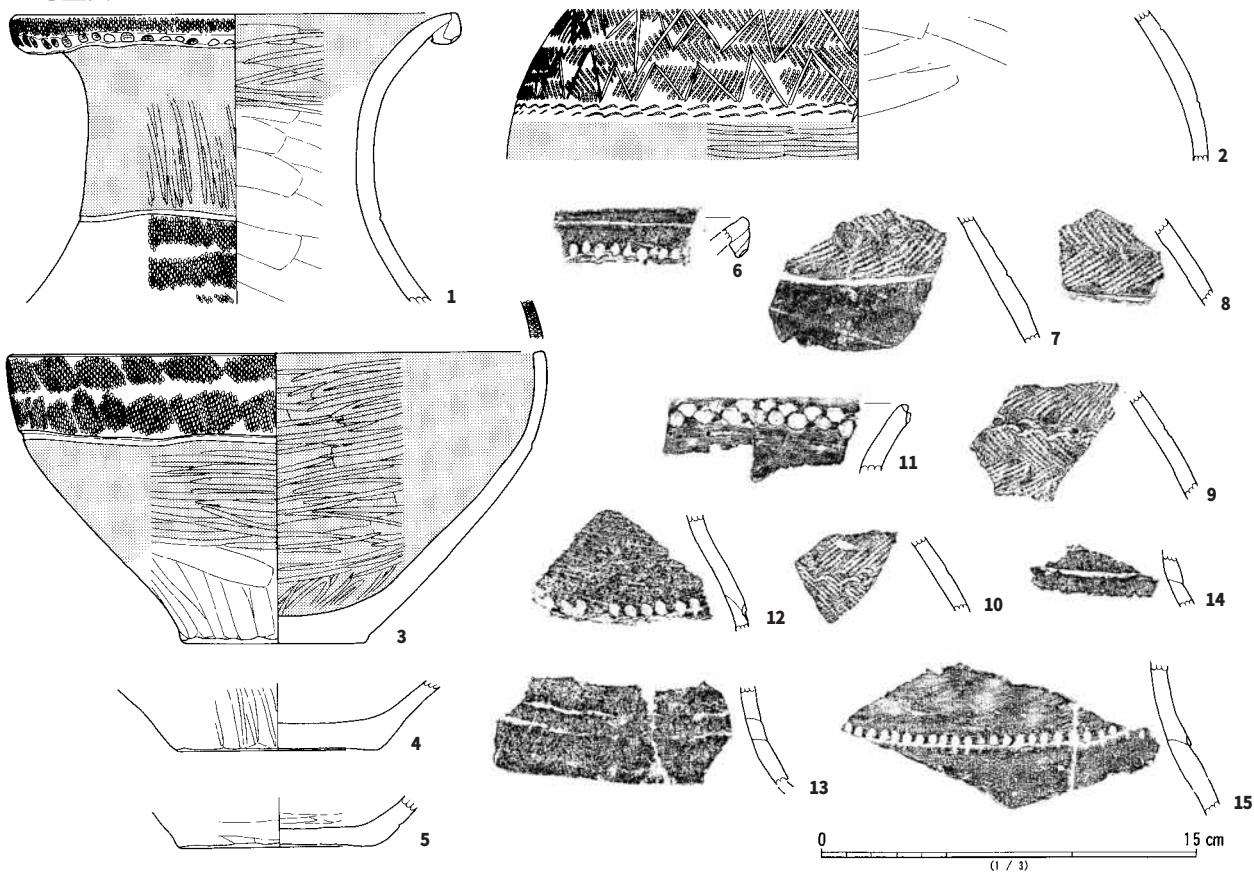


第88図 56・57号竖穴 遺構

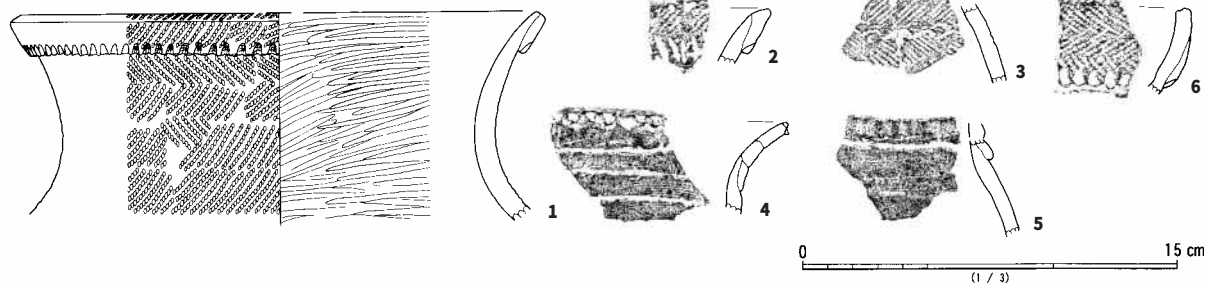
55号竖穴



56号竖穴

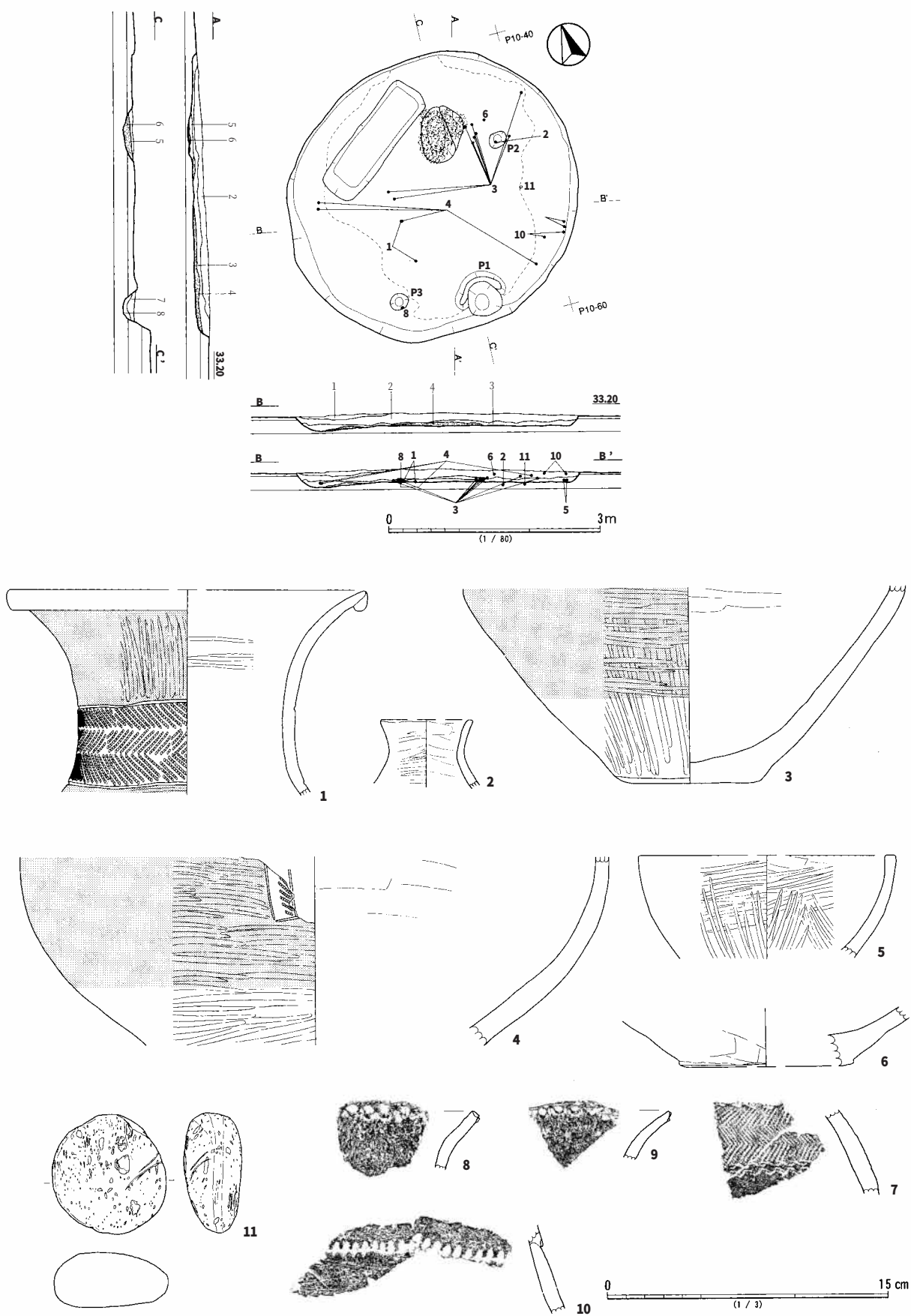


57号竖穴



第89图 55・56・57号竖穴 遺物

58号竖穴



第90图 58号竖穴 遺構遺物

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

58号竪穴（第90図、図版17・72・81・85）

58号竪穴（住居跡）は、調査区P9-49区他に所在する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は3.92（主軸）×4.15m、床面積は11.78m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.23m、主軸方位はN-10°-Eである。主柱穴は検出されなかった。P2は出入口施設、P1は貯蔵穴であり、凸堤が囲繞する。炉は、平面規模0.79×0.50mを測る。北西側土坑は、攪乱坑である。竪穴堆積土は1~4層に分層され、1層が灰褐色土層、2層が褐色土層、3・4層が暗褐色土層であり、4層は多量の焼土、炭化物を含む。炉内、5層は暗褐色土層、6層は焼土層、P1内7・8層は暗褐色土層である。P1内には焼土の堆積は確認されていない。

出土土器は、1・3・4・7が壺形土器、2が小形壺形土器、6・8~10が甕形土器、5が椀ないしは高杯形土器であり、1~5・8は床面から、6・10は覆土から出土している。1は、56号竪穴1、84号竪穴1と同様、沈線区画の壺形土器としては、口縁部高が低く短頸である。土器以外では、軽石1点が床面から出土している。

本竪穴の時期は、3期と推定される。

59号竪穴（第91図、図版17・57・72・85）

59号竪穴は、調査区P9-93区他に所在する。不整形の竪穴であり、全体規模は4.94（長軸）×4.09m、底面面積は12.66m²を測る。確認面からの深さは0.11m、長軸方位はN-71°-Wである。主柱穴、炉等の施設は検出されなかった。竪穴堆積土は1~13層に分層され、1・6・8・10・11層が暗褐色土層、2・4層が暗黄褐色土層、3・12層が黒褐色土層、5・7・9・13層が褐色土層である。2層上面に硬化層が部分的に認められたが、底面全体は凹凸をもつ。攪乱がからんでいる可能性もあるが、現状では、住居跡、建物跡かどうかの判断はできない。

出土土器は、1が広口壺形土器、6~9・11が壺形土器、12が小形壺形土器、2・3・10が甕形土器、5が鉢形土器であり、12は底面から、1・2・4・5・7~9は覆土から、3・10はP1内から出土した。8・10・11は同一個体と推定される。5は、細部はことなるものの、51号竪穴3に似る。

土器以外では、軽石1点が覆土から出土している。

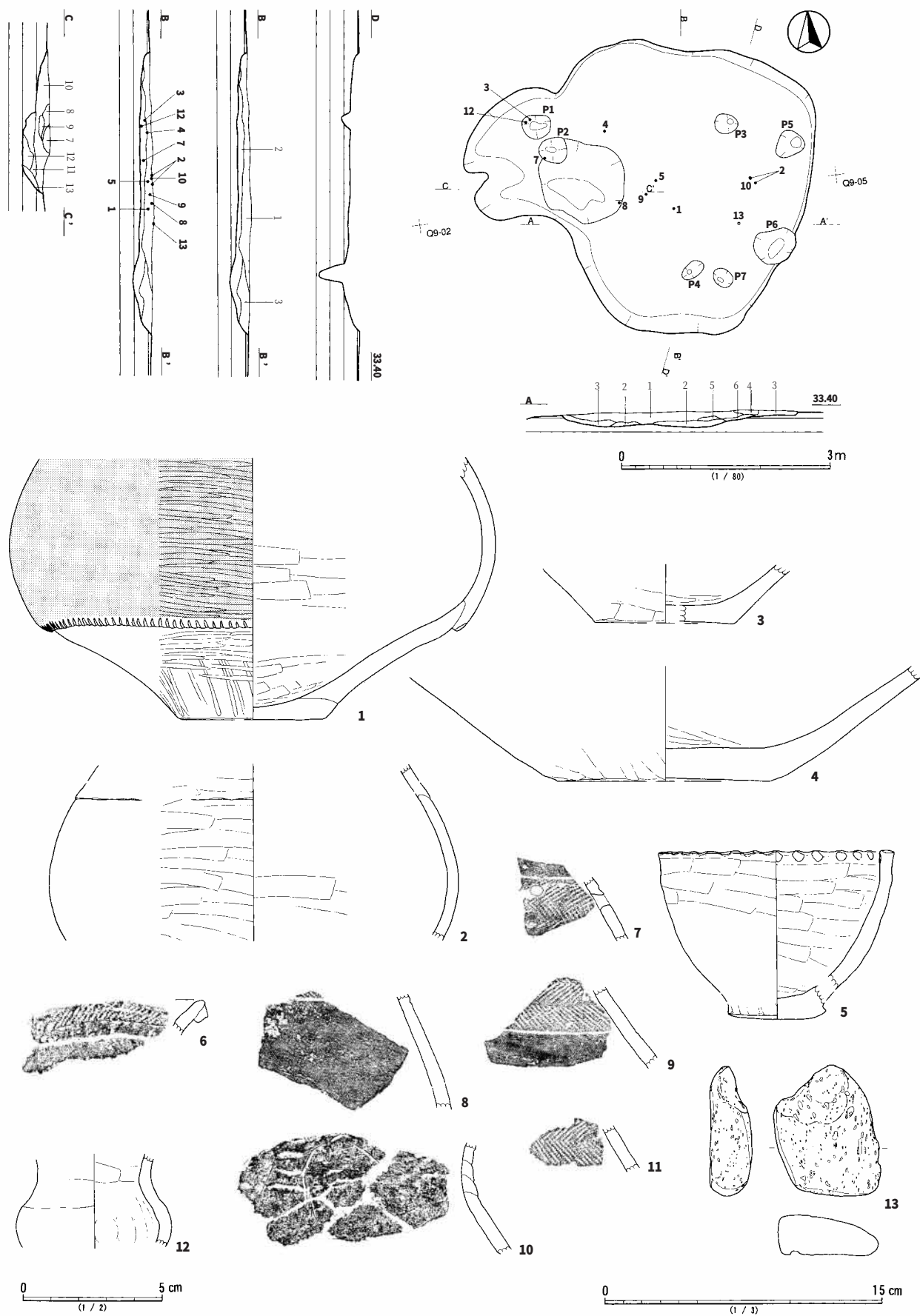
本竪穴の時期は、3期と推定される。

60号竪穴（第92・93図、図版17・18・57・58・72・78・79・80）

60号竪穴（住居跡）は、調査区Q9-53区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は5.46（主軸）×5.15m、床面積は21.81m²を測る。確認面からの深さは0.42m、主軸方位はN-36°-Wである。主柱穴はP1~4である。P3・4は掘形が段状となるが、建て替えによるものか抜き取りかの判断はできない。P1・2は平板状の柱痕を残す。掘形は未調査のため不明。P6~8は出入口施設と考えられるが特定はできない。P5は貯蔵穴である。北辺部を中心に小Pitが検出されたが、性格は不明。長方形の土坑は、攪乱坑である。炉は、平面規模0.90×0.65mを測り、南側に粘土塊をおく。竪穴堆積土は1~5層に分層され、1・4層が黒褐色土層、3層が暗褐色土層、2・5層が褐色土層である。炉は、6層が黒褐色土層、7層が焼土層、8層が黄白色粘土である。

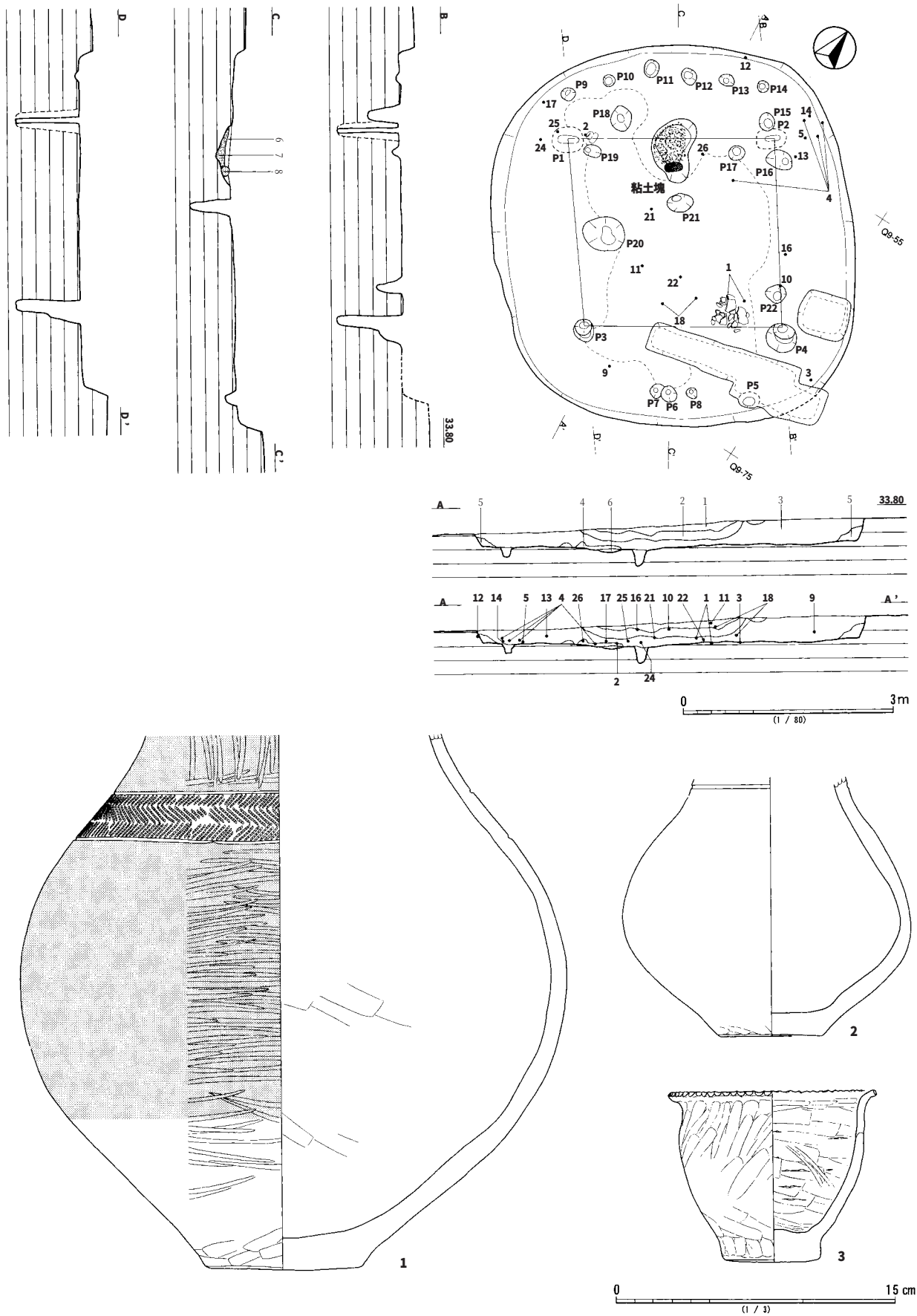
出土土器は、1・2・18~20が壺形土器、4~8・10・11・13~17が甕形土器、3・9・12が小形甕形土器、21・22が椀ないしは高杯形土器、23~26がミニチュア土器であり、1・3・5は床面から、

59号竖穴



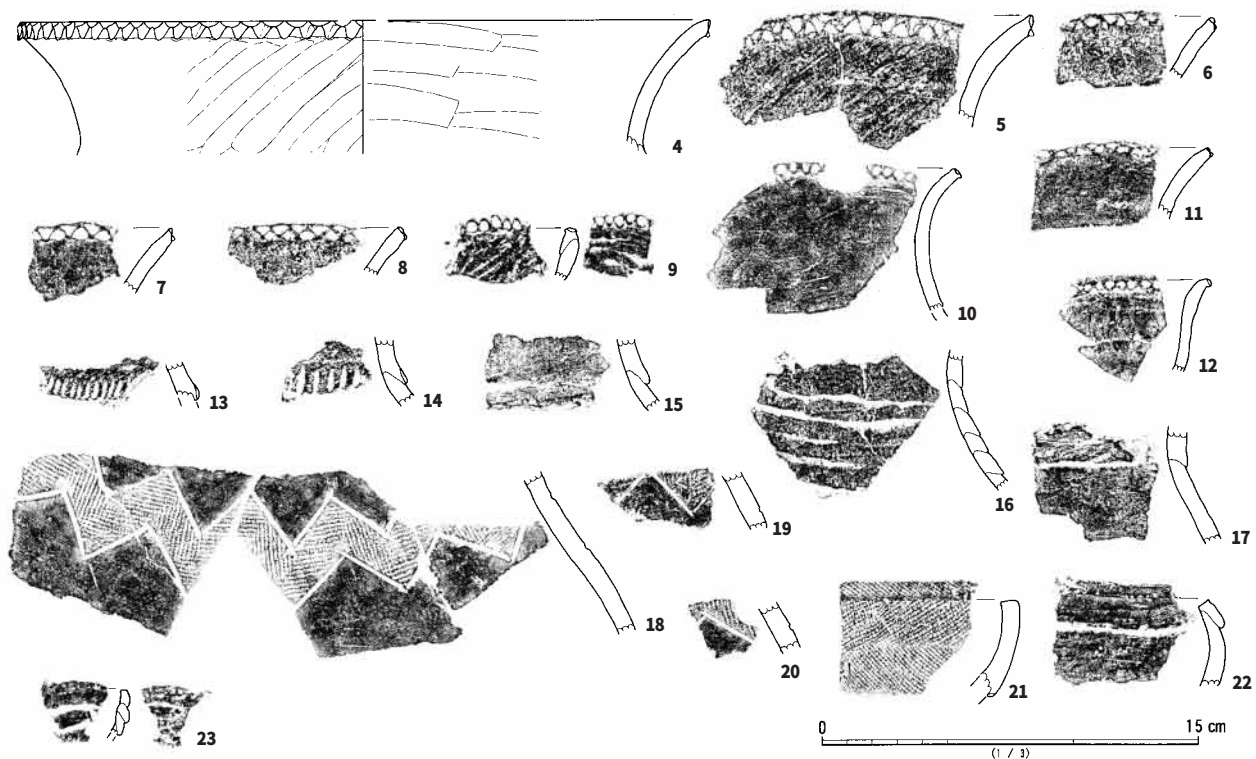
第91图 59号竖穴 遺構遺物

60号竖穴

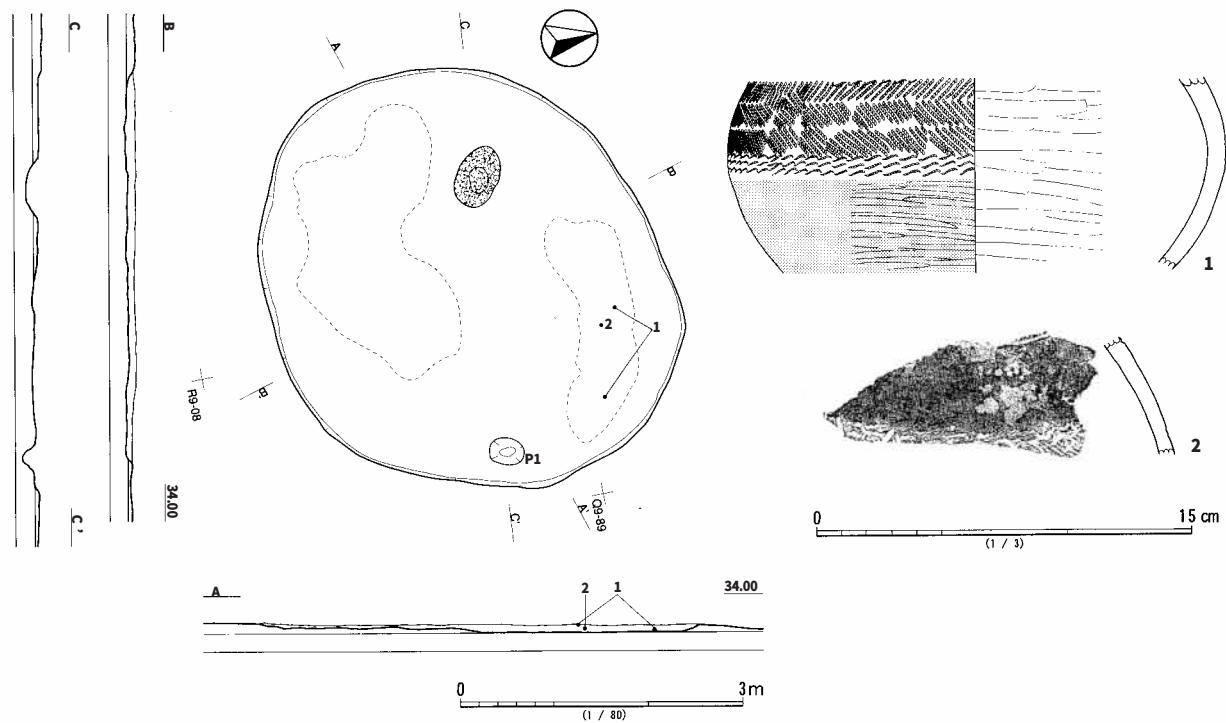


第92图 60号竖穴 遺構遺物

60号竖穴



61号竖穴



第93图 60・61号竖穴 遺構遺物

2・4・9～14・16～18・21・22・24～26は覆土から出土している。4・5、6～8は同一個体と推定される。1は、口頸部を欠くが、なで肩の胴部に沈線区画の帯縄文をもつ。4は、平縁で、斜めに面取りされた口縁端部に、側面からの押捺を加えるもので、38号竪穴1、40号竪穴3、49号竪穴7・8等に似る。

本竪穴の時期は、1～3期と推定される。

61号竪穴（第93図、図版18・72・82）

61号竪穴（住居跡）は、調査区Q9－87区他に所在する。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は4.36（主軸）×4.5m、床面積は15.01m²を測る。ただし、確認面からの掘り込みは浅く、炉および硬化面範囲から竪穴範囲を想定した部分もあり、不確実である。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.06m、主軸方位はN－75°－Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴の可能性がある。炉は、平面規模0.67×0.43mを測る。竪穴堆積土は暗褐色土層である。

出土土器は、1・2が壺形土器であり、ともに床面から出土している。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

62号竪穴（第94図、図版18）

62号竪穴（住居跡）は、調査区P10－36区他に所在する。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は5.88（主軸）×5.34m、床面積は23.45m²を測る。確認面からの深さは0.45m、主軸方位はN－12°－Wである。主柱穴はP1～9であり、P10・11は貯蔵穴、P12は出入口施設である。柱穴掘形の重複は抜き取りによるものと推定されるが、建て替えの可能性もある。炉は、平面規模1.15×0.81mを測る。竪穴堆積土は1～7層に分層され、1・7層が褐色土層、2～4・6層が暗褐色土層、5層が焼土を多量に含む黒褐色土層である。2・3層は、大小のロームブロックを含み、埋め戻し土の可能性はある。炉は、8層が黒褐色土層、9層が焼土層、P10・11は、10層が黒褐色土層、11・12層が褐色土層である。P10・11内に焼土は観察されていない。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況からみて、失火、放火などの被災によるものではなく、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。

実測可能な土器は、出土していない。P5脇床面から粘土塊が出土している。

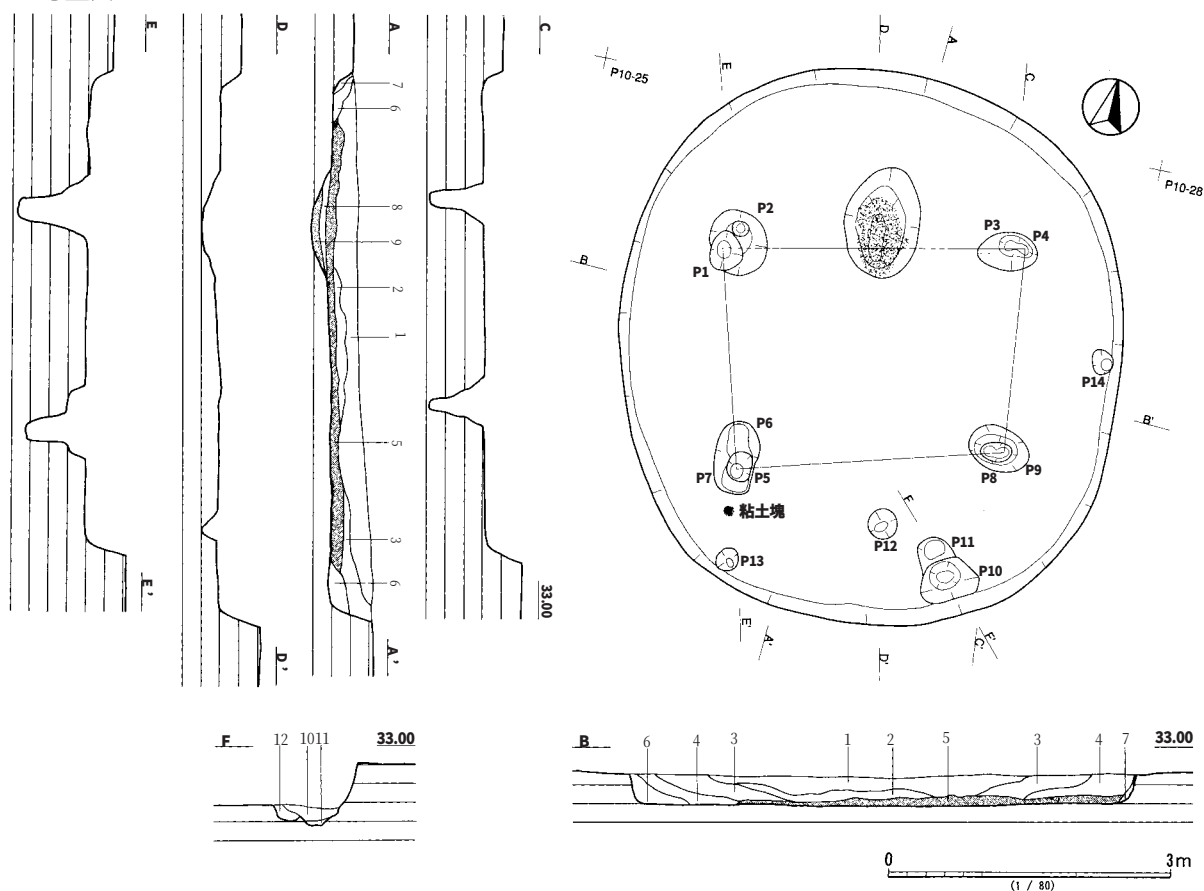
本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、細別時期は不明。

63号竪穴（第95・96図、図版18・58・59・72・76・78・79・80・82・84）

63号竪穴（住居跡）は、調査区Q10－19区他に所在する。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は3.03（主軸）×3.17m、床面積は7.41m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.34m、主軸方位はN－51°－Wである。主柱穴は検出されなかったが、北東辺を中心に壁柱穴が囲繞する。P7・8も壁柱穴と推定される。P1は出入口施設である。炉は、平面規模0.67×0.39mを測る。その南側にも、床面が焼けている部分が認められた。竪穴堆積土は1～7層に分層され、1・5・7層が褐色土層、2～4・6層が暗褐色土層であり、3・5・6層は焼土、炭化物を多量に含む。炉内、8層が黒褐色土層、9層が焼土層である。本竪穴は火災に遭っている。なお、貝の小ブロックが床面直上で検出された（第3章第1節）。また、貝ブロックおよび焼土層内より、イネの炭化種子が検出されている（第3章第7節）。

出土土器は、1・2・5・13・15～17・19が壺形土器、3・4・18が広口壺形土器、6～8・20・22・23

62号竖穴



第94図 62号竖穴 遺構

が甕形土器、21が小形甕形土器、9～11・25が椀形土器、12・24が椀ないしは高杯形土器であり、1・2・4・6～11・20・23は床面から、3・5・12～16・19・24・25は覆土から出土している。3・16、4・18は同一個体と推定される。比較的遺存率が高い土器が多く、6・7・8・11は略完形である。4・7など、割れて破片が点在する例もあるが、床面出土土器は、基本的に遺存遺物と考えられる。1・2も、胴部は欠くものの、口縁部は完存しており、器台的な使用が想定される。土器以外では、滑石製勾玉1点が覆土より出土している。

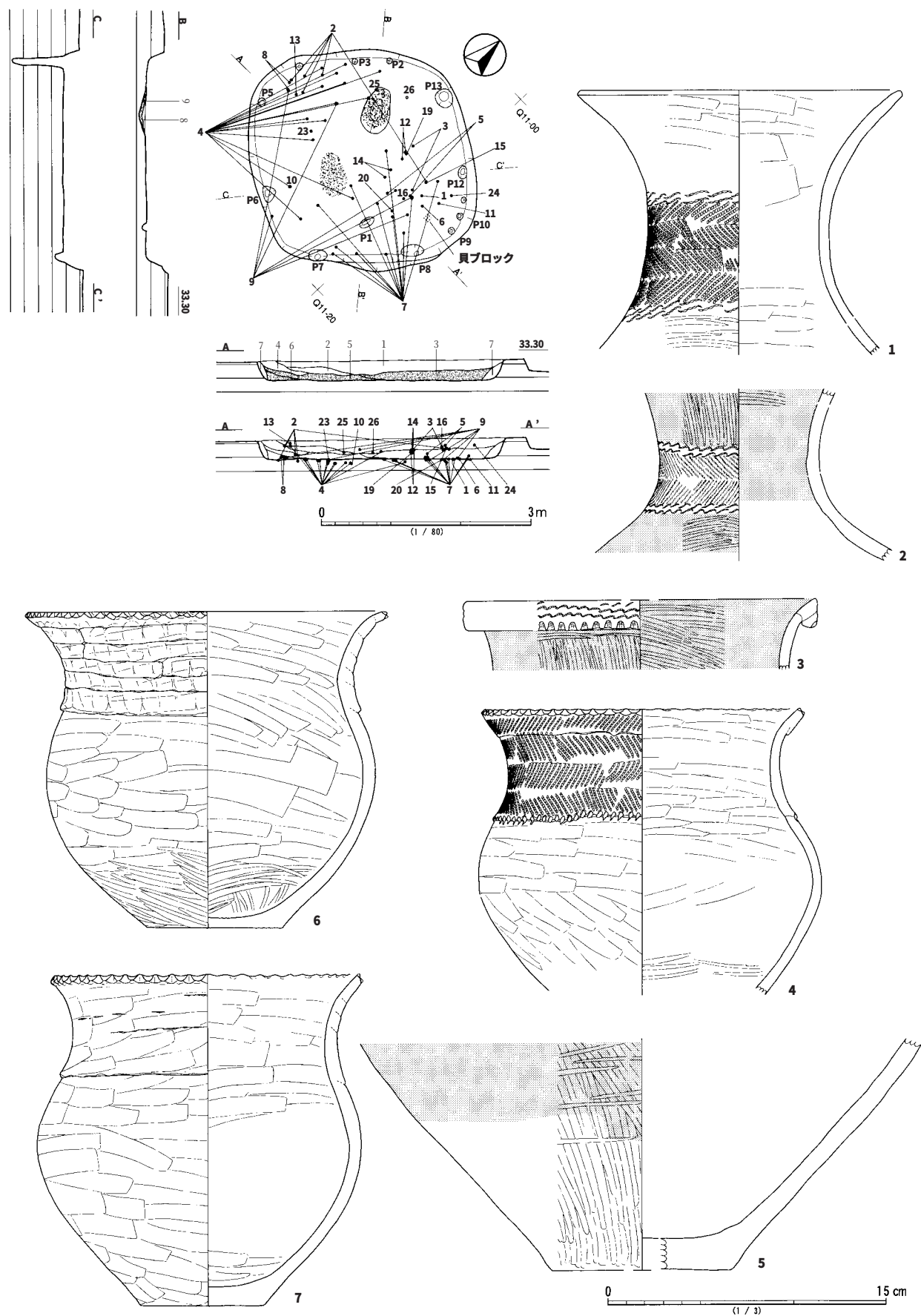
本竖穴の時期は、4期古段階と推定される。

64号竖穴（第96・97図、図版19・72・84）

64号竖穴（住居跡）は、調査区P11～51区他に所在する。竖穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は8.84（主軸）×8.22m、床面積は61.05m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.46m、主軸方位はN-60°-Wである。支柱穴はP1～4である。P1・3周辺は皿状に凹むが、性格は不明。P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。中央の炉は、平面規模1.40×1.02mを測る。他に6基検出されたが、北辺部の炉は、掘り込みが認められない。竖穴堆積土は1～4層に分層され、1～3層が暗褐色土層、4層が褐色土層である。5層は床硬化層である。

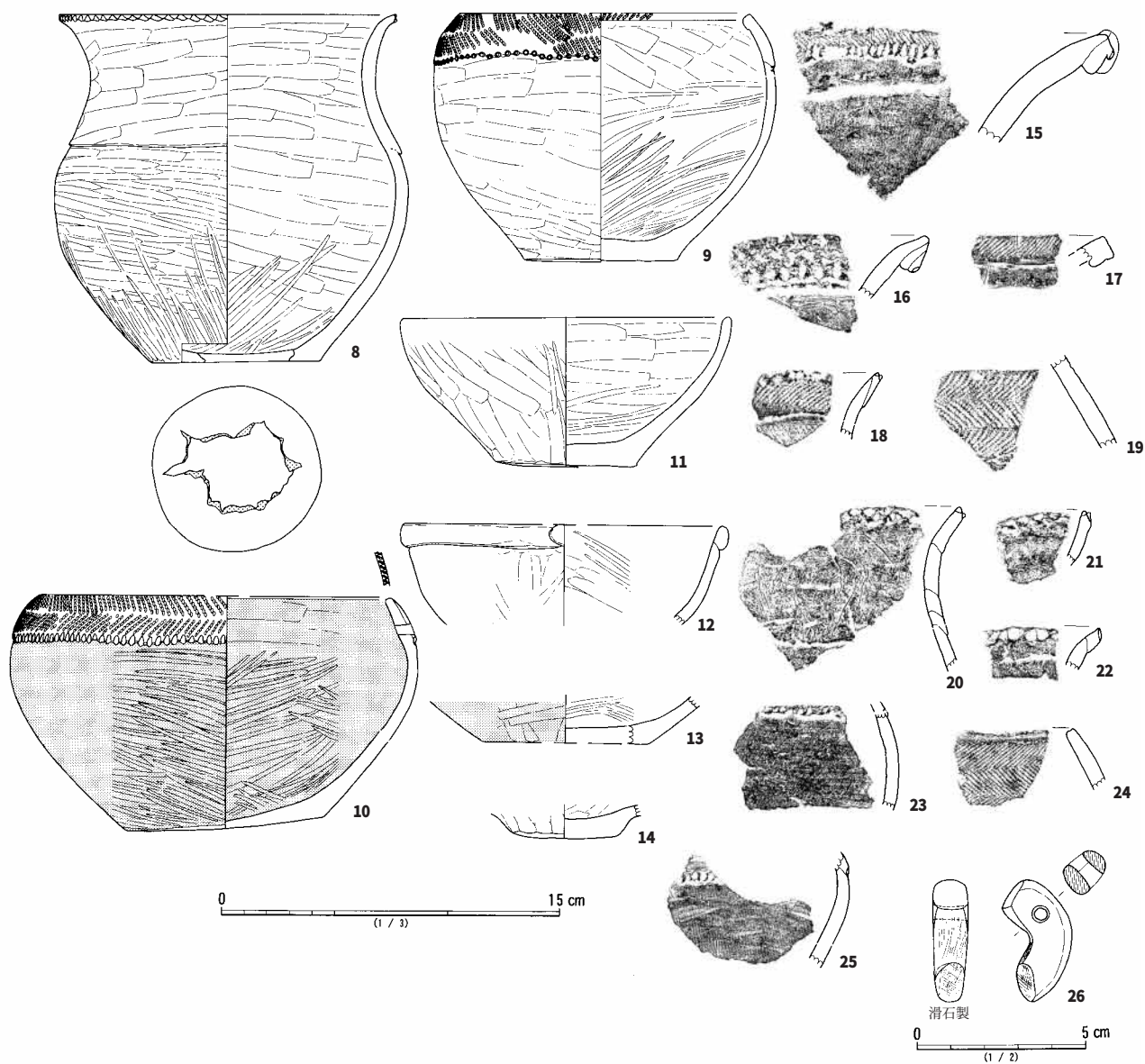
出土土器は少なく、1・3～7が壺形土器、8が甕形土器、2が転用甕形土器、9・10が椀ないしは高杯形土器であり、1・4は床面、3はP5内、2・5・6・8は覆土から出土している。土器以外では、土製勾玉1点、滑石製不明石製品2点が出土した。いずれも覆土からの出土である。滑石製石製品は、とも

63号竖穴

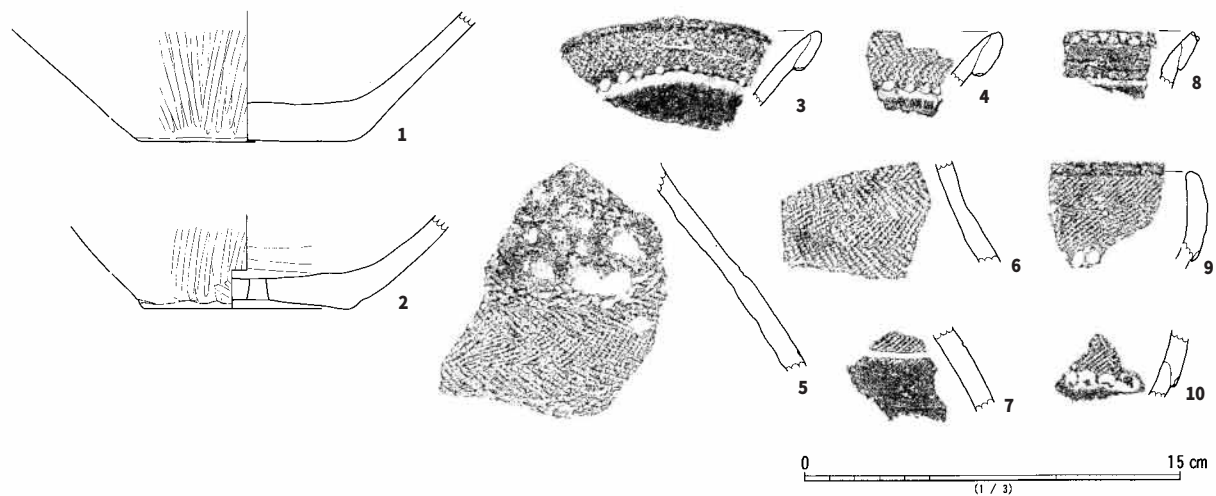


第95図 63号竖穴 遺構遺物

63号竖穴

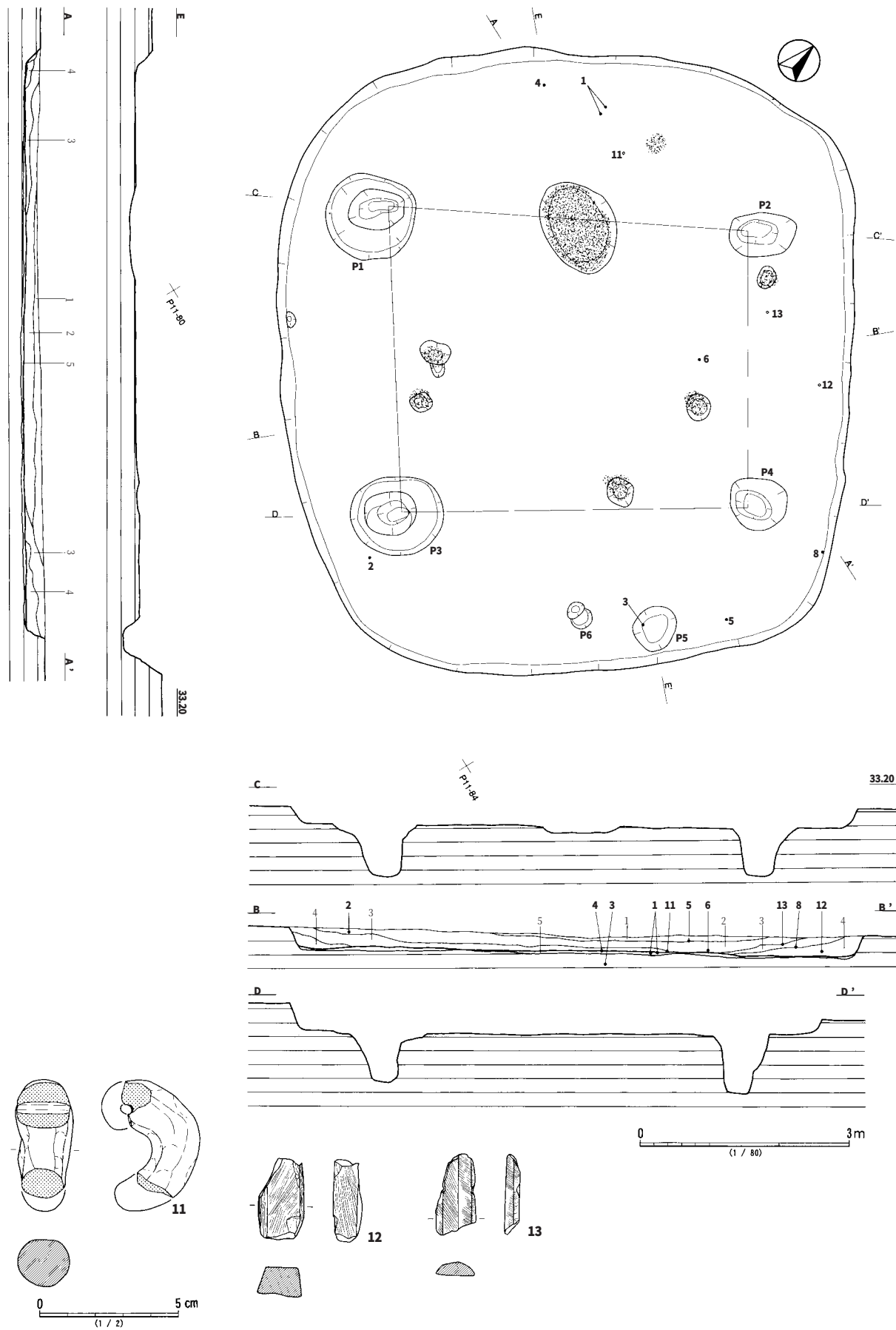


64号竖穴



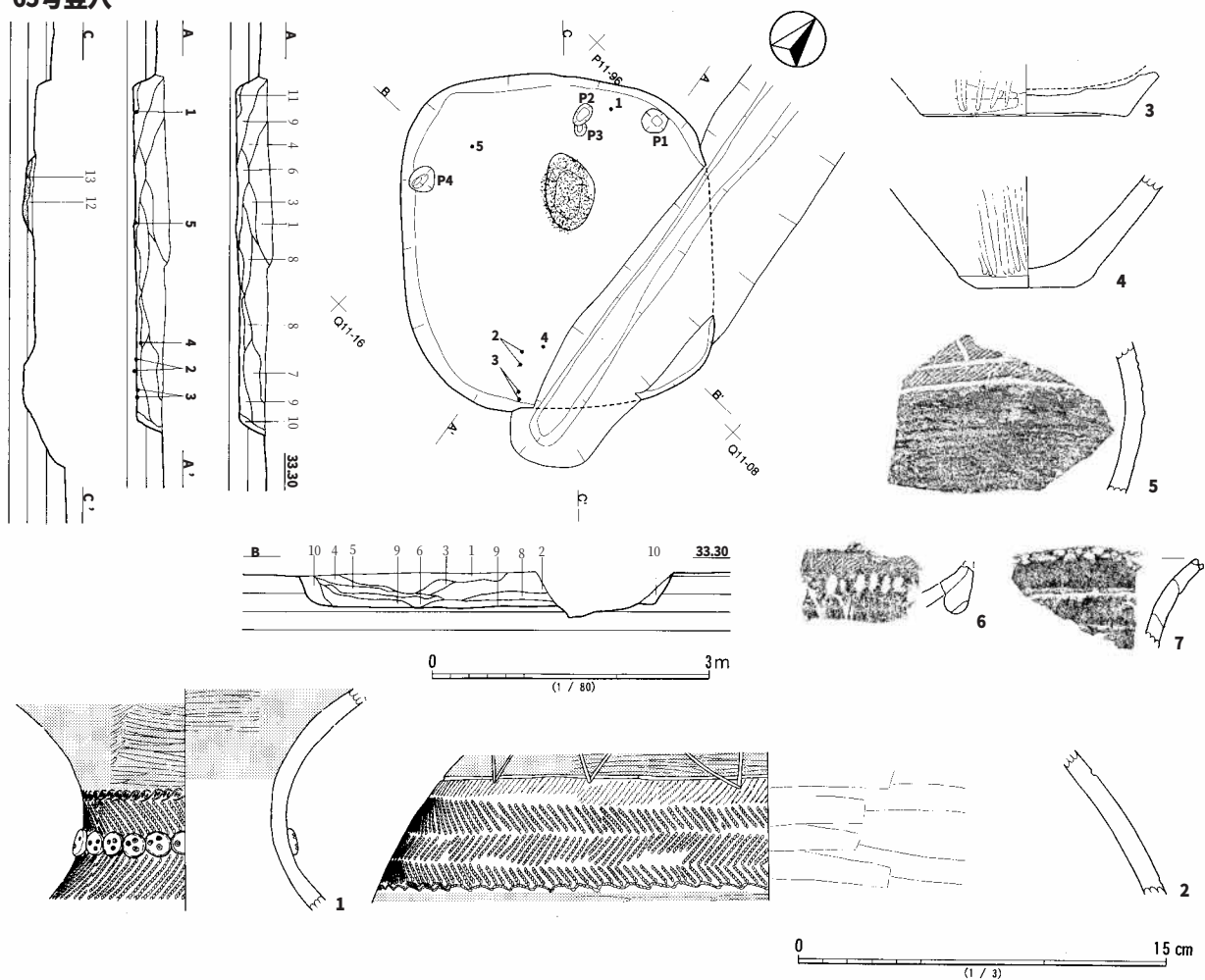
第96図 63・64号竖穴 遺物

64号竖穴

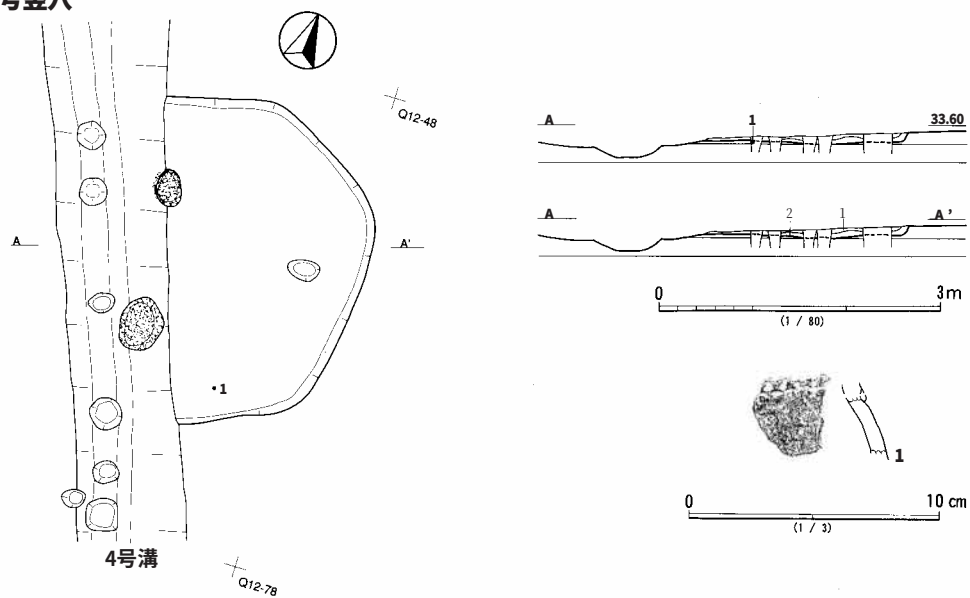


第97図 64号竖穴 遺構遺物

65号竖穴



67号竖穴



第98图 65・67号竖穴 遺構遺物

に両端部を欠き、側面部は面取り調整される。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

65号竪穴（第98図、図版19・59・72・77）

65号竪穴（住居跡）は、調査区P11－96区他に所在する。12号溝と重複し、本遺構に対し12号溝が新しい。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は3.65（主軸）×3.41m、床面積は9.56㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.32m、主軸方位はN－46°－Wである。主柱穴は検出されなかった。炉は、平面規模0.82×0.54mを測る。竪穴堆積土は1～11層に分層され、1・2・5・7・9層が暗褐色土層、3・4・6・8層が褐色土層である。炉内は、12層が黒褐色土層、13層が焼土層である。

出土土器は、1・2・4～6が壺形土器、3・7が甕形土器であり、1～3・5は床面から、4は覆土から出土している。2の帯縄文は、下部が結節区画、上が沈線区画で、間帯に鋸歯状の沈線文が認められる。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

66号竪穴（第99図、図版19・72）

66号竪穴（住居跡）は、調査区Q12－16区他に所在する。4号溝と重複し、本遺構に対し4号溝が新しい。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は5.47（主軸）×5.09m、床面積は22.30㎡を測る。確認面からの深さは0.32m、主軸方位はN－33°－Wである。主柱穴はP1～4であり、それぞれ段状の掘形をもつ。建て替えによるものかどうかは判断できない。P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.90×0.64mを測る。竪穴堆積土は1～3層に分層され、1層が褐色土層、2層がロームブロックを主体とする層、3層が暗褐色土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱を受けている。

出土土器は、2～4が壺形土器、1・5・6が甕形土器であり、2・4～6は床面から、3は覆土から出土している。3・4は同一個体と推定される。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩が出土している。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

67号竪穴（第98図、図版19）

67号竪穴（住居跡）は、調査区Q12－57区他に所在する。4号溝と重複し、東側約半分が遺存する。竪穴平面形態は、多角形状を呈すが、不確実である。規模は、主軸方向で3.47m、東西遺存部で2.22mを測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.12m、主軸方位はN－12°－W前後と想定される。主柱穴は検出されなかった。炉は2基検出され、北側は、現存部で0.40m、南側火床部範囲は0.58×0.47mを測る。竪穴堆積土は、1層が暗褐色土層、2層が褐色土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱を受けている。

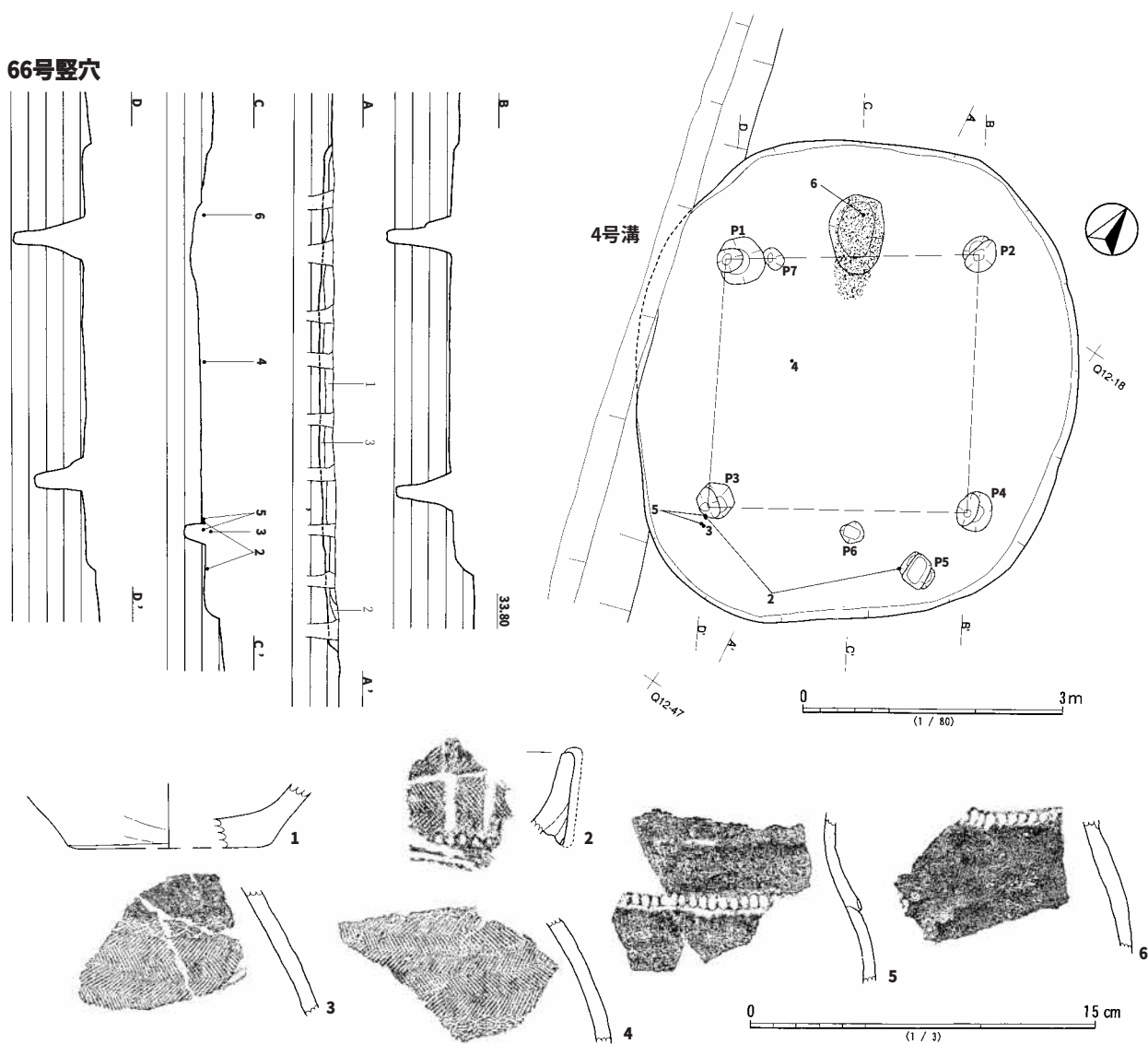
実測可能な出土土器は、1の甕形土器のみである。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、細別時期は不明。

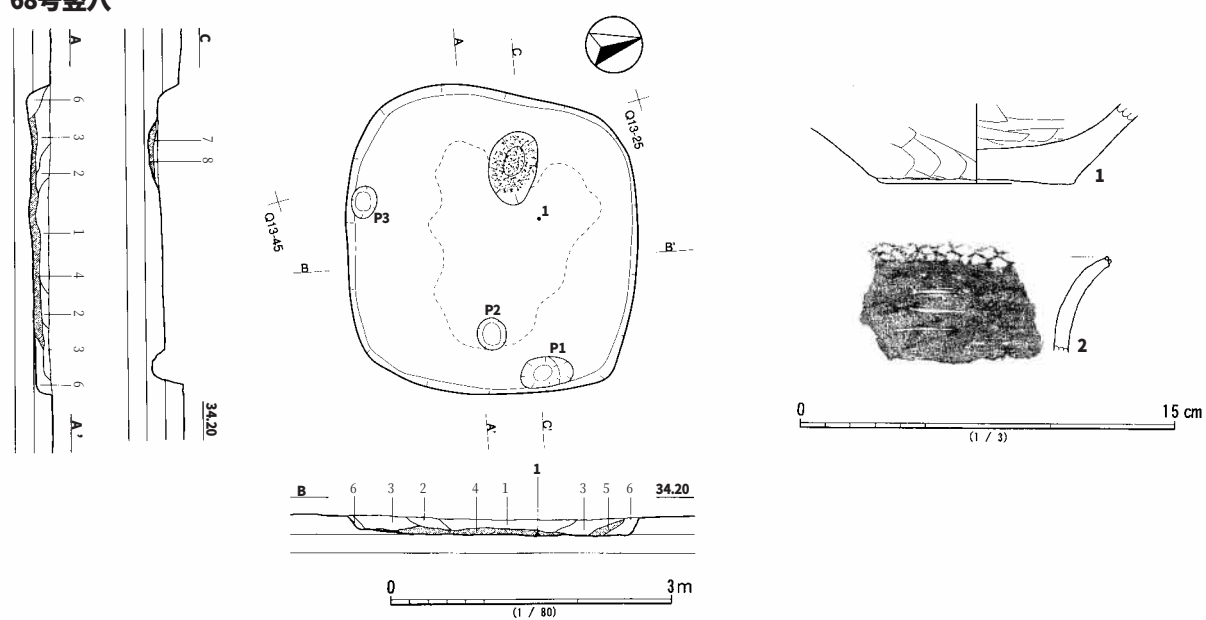
68号竪穴（第99図、図版19・72）

68号竪穴（住居跡）は、調査区Q13－25区他に所在する。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は3.20（主軸）×3.08m、床面積は7.97㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.21m、主軸方位はN－67°－Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模0.78×0.52mを測る。竪穴堆積土は1～6層に分層され、1～3層が灰褐色

66号竖穴



68号竖穴



第99图 66・68号竖穴 遺構遺物

土層、4～6層が暗褐色土層であり、4・5層は多量の焼土、炭化物を含む。とくに4層に炭化物、5層に焼土が多量に認められた。竪穴中央床面上には、炭化層が認められた。炉内は、7層が暗灰褐色土層、8層が焼土層である。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況からみて、失火、放火などの被災によるものではなく、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。

実測可能な出土土器は、1・2の甕形土器のみであり、1は床面から出土している。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、細別時期は不明。

69号竪穴（第100図、図版19）

69号竪穴（住居跡）は、調査区Q13-07区他に所在する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は3.71（主軸）×3.53m、床面積は9.81㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.33m、主軸方位はN-63°-Wである。P1～4は、主柱穴の可能性はあるが、いずれも浅く、配置も不揃いである。P5は貯蔵穴、P6は出入口施設であり、凸堤が囲繞する。炉は、平面規模0.86×0.62mを測る。周溝は、断続的であるが、全周する。竪穴の堆積土は1～7層に分層され、1層が黒褐色土層、2・5・7層が暗褐色土層、3・4・6層が褐色土層である。炉は、8層が黒褐色土層、9層が焼土層である。

出土土器は、1～3が壺形土器であり、2・3は覆土から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

70号竪穴（第100図、図版19・72・78・85）

70号竪穴（住居跡）は、調査区Q14-31区他に所在する。南側は、山田橋大塚台遺跡調査区になるが、諸事情により若干の掘り残しを生じている。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は、復原値で5.20（主軸）×4.55m、確認面での掘形面積は、推定で20.16㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.28m、主軸方位はN-61°-Wである。主柱穴はP1～3であり、出入口施設、貯蔵穴等は検出されていない。炉は、平面規模で0.84×0.67mを測る。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1層が暗褐色土層、2層がロームブロックを主体とする層、3・4層が黒褐色土層であり、とくに3層は多量の焼土、炭化物を含む。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、堆積状況からは、失火、放火などの被災によるものか、竪穴破棄後の焼却によるものかの判断はできない。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

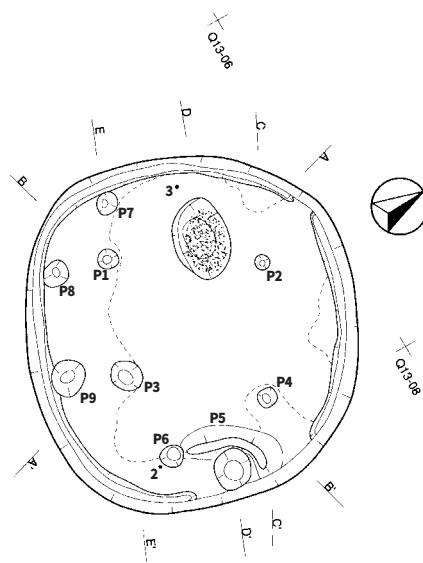
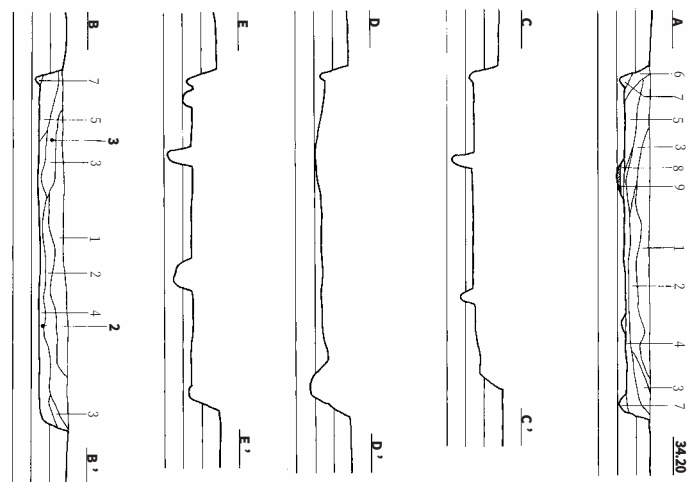
出土土器は、1が広口壺形土器、2・3が壺形土器、8・9が甕形土器、4～7が椀ないしは高杯形土器であり、1は床面から、2・3・5～9は覆土から出土している。1は、竪穴の火災によると推定される2次的な被熱により、表面は劣化している。土器以外では、台石1点が出土している。研磨痕は一面のみであり、使用程度は低い。覆土から出土している。

本竪穴の時期は、4期古～新段階と推定される。

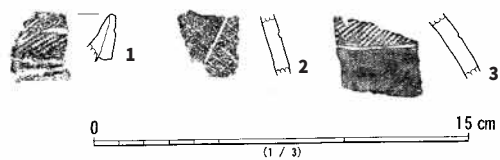
71号竪穴（第101図、図版19・20・33・60・72）

71号竪穴（住居跡）は、調査区Q14-06区他に所在する。3号木棺土坑墓と重複する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は5.20（主軸）×4.81m、床面積は19.53㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.42m、主軸方位はN-14°-Wである。主柱穴はP1～4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.99×0.44mを測る。竪穴内の土層は、1～7層が3号木棺土坑墓の埋土および棺内崩落土である。8・9層はロームブロックを主体とする褐色

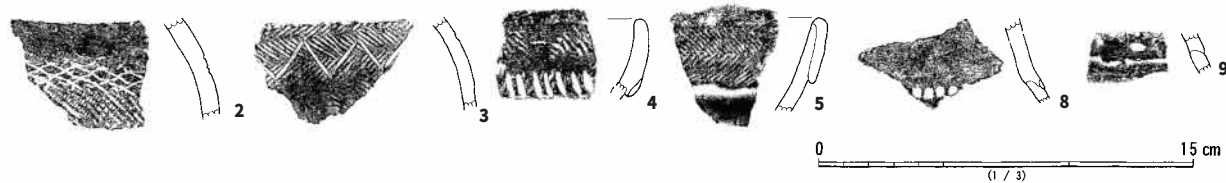
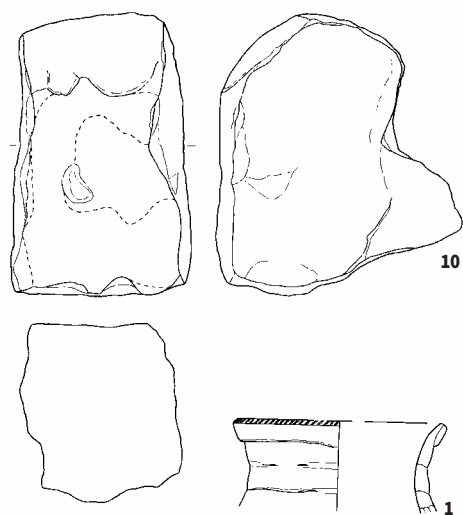
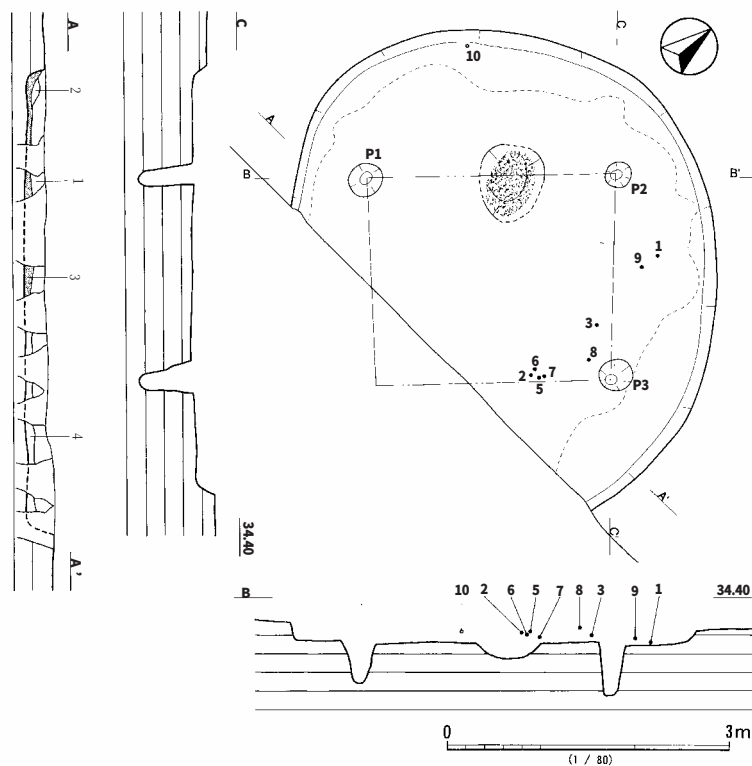
69号竖穴



0 3m
(1 / 80)



70号竖穴



第100図 69・70号竖穴 遺構遺物

土層であり、木棺土坑墓掘り上げ土と推定される。10・11・13層は暗褐色土層、炉内、14層（上層）は暗灰褐色土層、15層が焼土層である。3号木棺土坑墓の構築は、71号竪穴廃棄直後ではないが、比較的早い段階に、竪穴廃棄による凹地を利用してつくられた可能性が高い。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、1が台付甕形土器、2・4～6が甕形土器、7～10が壺形土器、3が広口壺形土器であり、1は床面から出土している。土器以外では、軽石1点（不実測）が出土しているが、各面とも破面で、整形痕、使用痕は認められない。産地同定の分析を行っている（第3章第6節）。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

72号竪穴（第102図、図版20・72）

72号竪穴（住居跡）は、調査区P12-76区他に所在する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は4.78（主軸）×4.74m、床面積は17.09m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.19m、主軸方位はN-17°-Wである。全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけ、主柱穴はP1・2のみが確認できた。P6は出入口施設、P3・4は貯蔵穴の可能性がある。炉は2基が重複し、平面規模は、北側が0.56×0.45m、南側が0.58×0.49mを測る。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1層が褐色土層、2～4層が暗褐色土層であり、とくに4層に多量の焼土、炭化物が認められた。焼土の平面的な堆積は、東から南壁際に顕著であった。本竪穴は火災に遭っていると推定される。堆積状況からは、失火、放火などの被災によるものか、竪穴破棄後の焼却によるものかの判断はできない。

出土土器は、1～3・5が壺形土器、4が甕形土器であり、1・3は床面から、5は覆土から出土している。1は、胴部下半がほぼ完存する。遺存遺物と考えられる。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

73号竪穴（第101図、図版20）

73号竪穴（住居跡）は、調査区P12-69区他に所在する。13号溝と重複するが、溝底面は床面まで達していない。確認面からの掘り込みが浅く、竪穴範囲はやや不確実である。規模は3.82（主軸）×4.02m、床面積は11.29m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.14m、主軸方位はN-52°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模0.75×0.53mを測る。竪穴堆積土は1～5層に分層され、1・2層が暗褐色土層、3・4層が灰褐色土層、5層が褐色土層、炉内は、6層が灰褐色土層、7層が焼土層である。

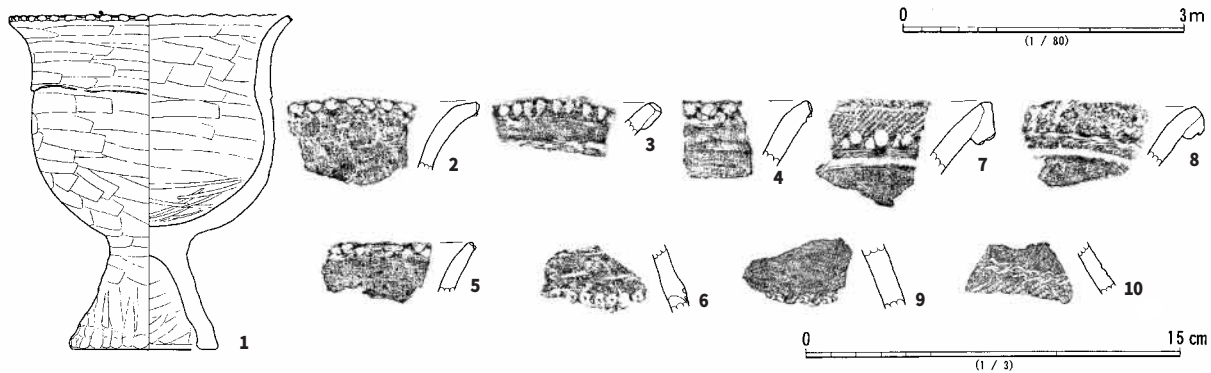
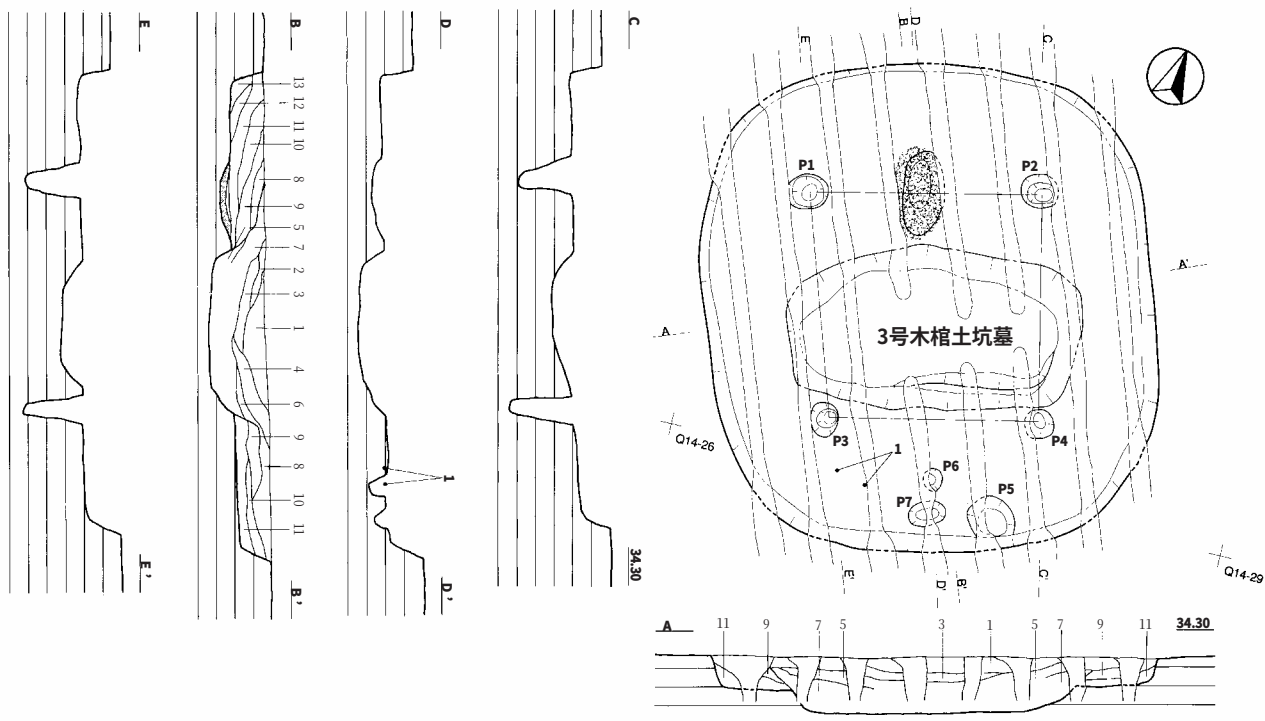
出土土器は、細片のみであり、図示できるものはない。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、細別時期は不明。

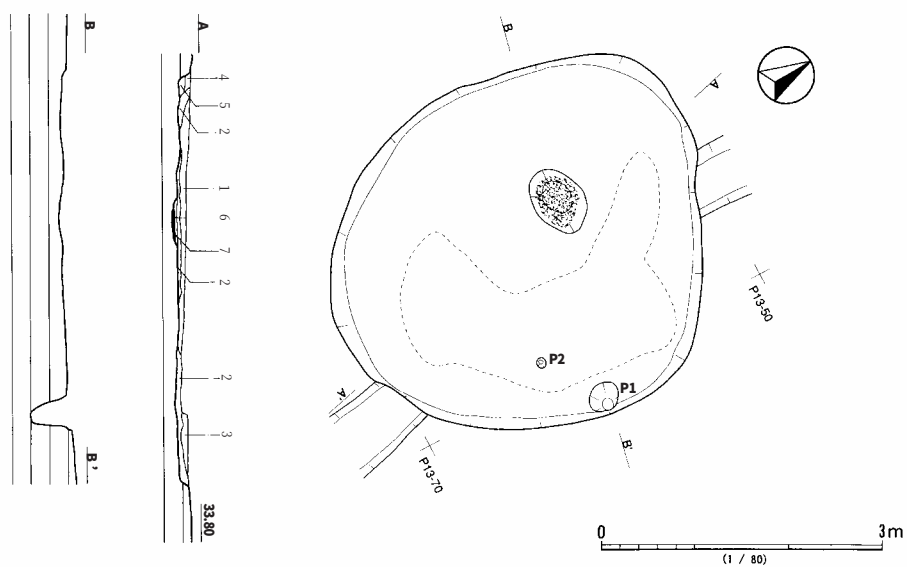
74号竪穴（第102・103図、図版20・72・73・81）

74号竪穴（住居跡）は、調査区P14-83区他に所在する。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は4.77（主軸）×4.32m、床面積は14.66m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.28m、主軸方位はN-30°-Wである。主柱穴はP1～4であり、P6は出入口施設である。P5は貯蔵穴位置にあるが不明。炉は、平面規模0.67×0.55mを測る。竪穴堆積土は1～8層に分層され、1層が暗褐色土層、2～7層が灰褐色土層、8層が褐色土層である。6・7層は、焼土、炭化物を多量に含むが、とくに7層は炭化物が多い。炉内、9層は黒褐色土層、10層は焼土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

71号竖穴

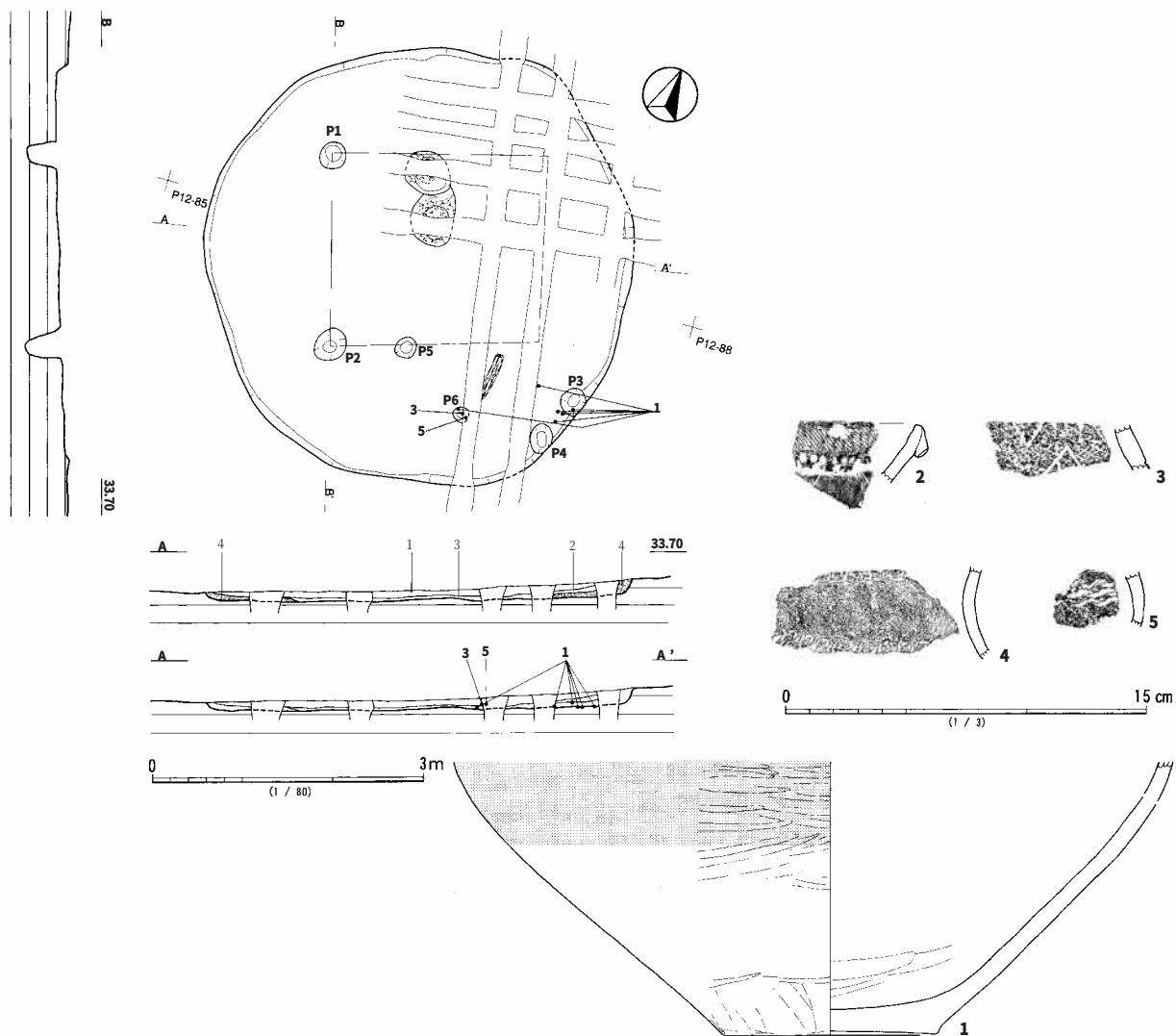


73号竖穴

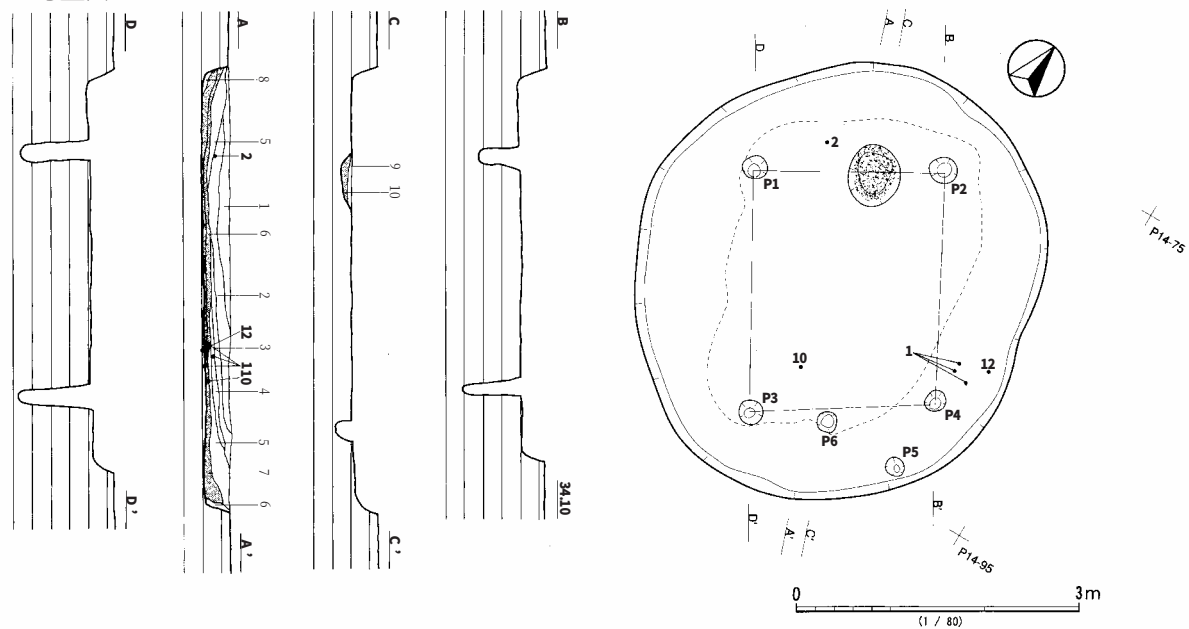


第101图 71·73号竖穴 遺構遺物

72号竖穴

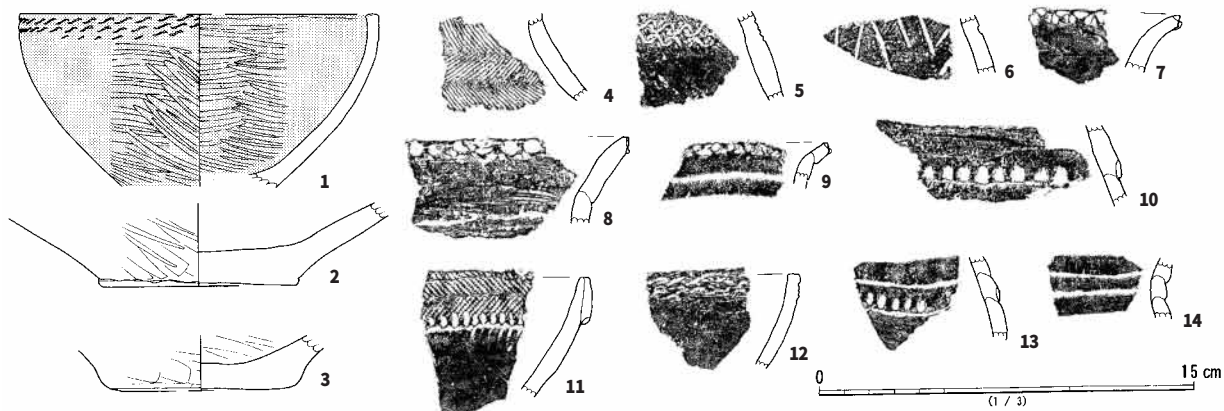


74号竖穴

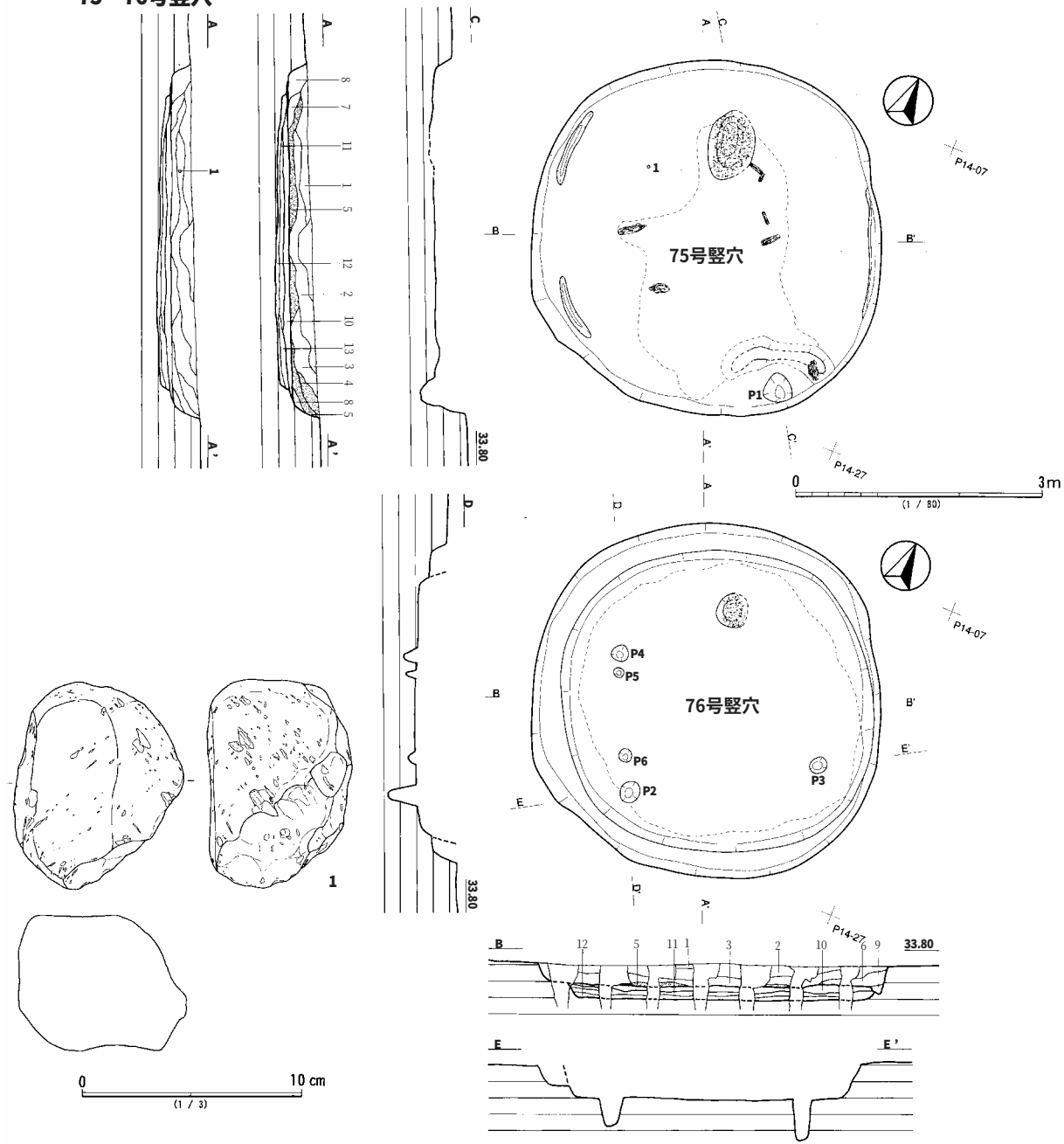


第102図 72・74号竖穴 遺構遺物

74号竖穴



75・76号竖穴



第103图 74・75・76号竖穴 遺構遺物

出土土器は、2・4～6が壺形土器、7～10・13・14が甕形土器、1・11・12が椀ないしは高杯形土器であり、1・10・12は床面から、2は覆土から出土している。1・12、9・14は同一個体の可能性がある。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

75号竪穴（第103図、図版20・85）

75号竪穴（住居跡）は、調査区P14-05区他に所在する。76号竪穴と重複し、76号竪穴上層に位置する。75号竪穴の建て替えによる可能性もあるが、床面レベルが異なり、若干の覆土間層をおく。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は3.68（主軸）×3.75m、床面積は10.31m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.50m、主軸方位はN-23°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴であり、凸堤が圍繞する。炉は、0.83×0.58mを測る。東辺部には、周溝が認められる。竪穴堆積土は1～9層に分層され、1・2層が灰褐色土層、3層がロームブロックからなる層、4・5層が焼土層、6・7層が暗褐色土層、8層が褐色土層、9層が黒褐色土層である。10層は、暗褐色土層であり、床硬化部にあたる。5層は焼土とともに、多量の炭化物を含む。火災に遭ったことが推定される。壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものと推定される。また、2・3層は大小多量のロームブロックを含むことから、破棄後の埋め戻しの可能性がある。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土遺物は、軽石のみである。方柱状を呈し、一端が破面、他は研磨され、側3面がやや凹状となる。性格は不明。産地同定の分析を行っている（第3章第6節）。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、細別時期は不明。

76号竪穴（第103図、図版20）

76号竪穴（住居跡）は、調査区P14-05区他に所在する。75号竪穴と重複し、75号竪穴下層に位置する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は4.33（主軸）×4.24m、床面積は13.62m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.34m、75号竪穴床面とは比高0.16mを測る。主軸方位はN-18°-Wである。主柱穴は検出されなかった。炉は、75号竪穴炉とほぼ同位置にある。平面規模は0.42×0.4mを測る。堆積土は11～13層に分層され、11・12層が黒褐色土層、13層が暗褐色土層である。75号竪穴とは、若干の堆積土をはさむ。ロームの混入が顕著でないことから、75号竪穴拡張時の堆積土とは考えにくい。ゴボウ耕作溝は、本竪穴床面まで達している。

図示可能な土器は出土していない。

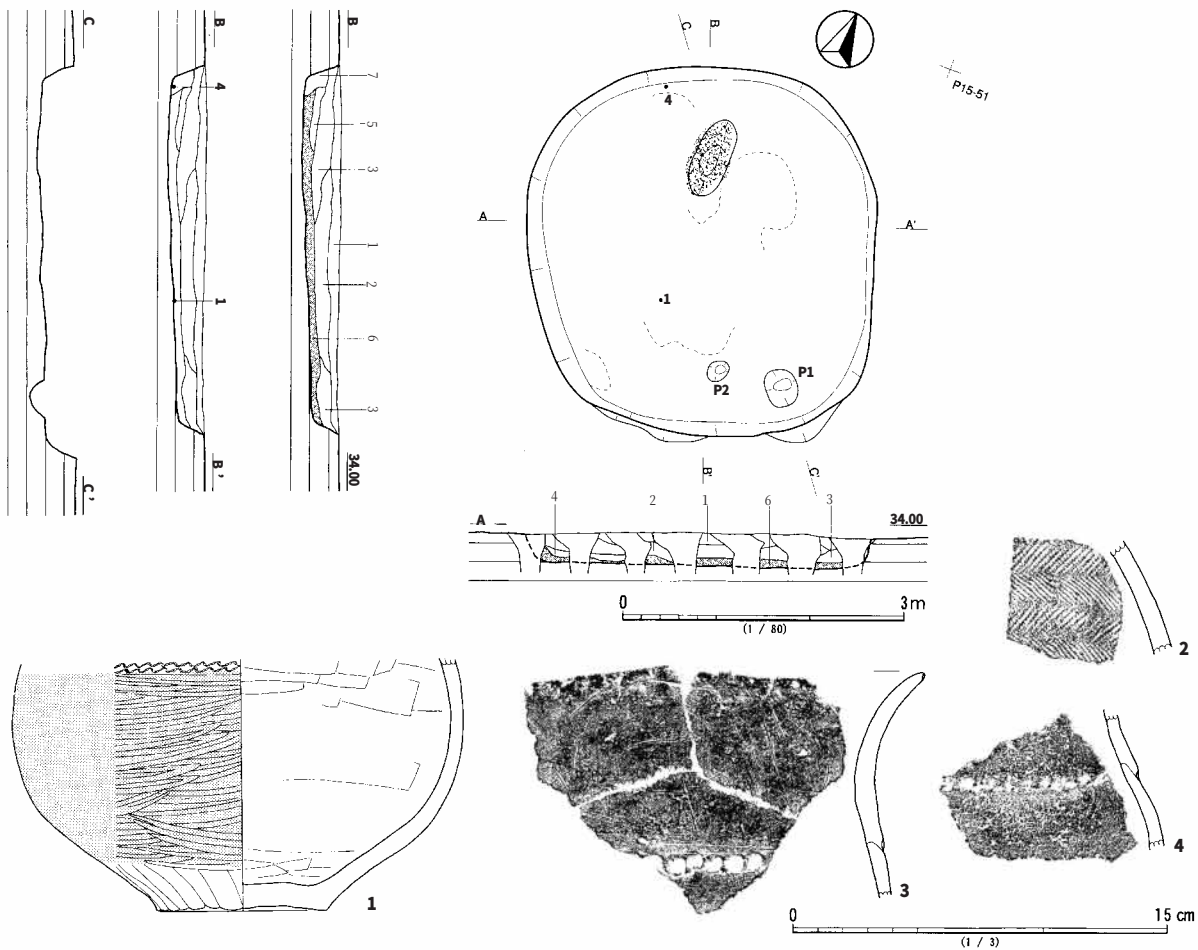
本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、細別時期は不明。

77号竪穴（第104図、図版20・21・60・73）

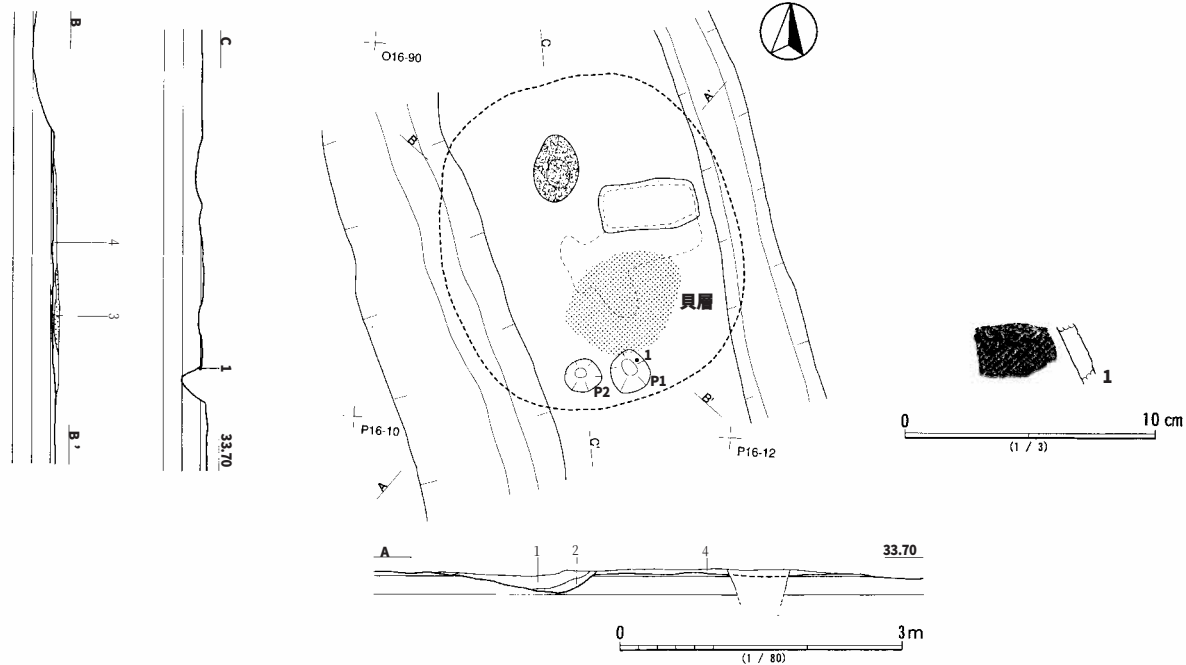
77号竪穴（住居跡）は、調査区P15-60区他に所在する。竪穴平面形態は、円形ないしは胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は3.93（主軸）×3.67m、床面積は10.77m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.36m、主軸方位はN-23°-Wである。主柱穴は検出されなかった。ただし、ゴボウ耕作溝による攪乱が激しく確実ではない。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模0.87×0.37mを測る。堆積土は1～7層に分層され、1・2層が黒褐色土層、3・5層が暗褐色土層、4層が褐色土層、6層が暗灰褐色土層であり、6層は多量の焼土を含む。本竪穴は、火災に遭ったことが推定される。土器の遺存状況から、おそらくは竪穴破棄後の焼却によるものと推定される。

出土土器は、1・2が壺形土器、3・4が甕形土器であり、1・4は床面から出土している。1は、胴部

77号竖穴



79号竖穴



第104図 77・79号竖穴 遺構遺物

下半はほぼ完存する。遺存遺物と考えられる。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

78A・B号竪穴（第105図、図版21・73・78）

78号竪穴（住居跡）は、調査区P15－34区他に所在する。1号溝により破壊され、約1／4程度を遺存する。竪穴平面形態は、楕円形ないしは胴張り隅丸長方形と推定される。全体規模は不明であるが、おそらく主軸長が8mをこえる大形の竪穴と推定される。確認面からの深さは0.39m、主軸方位はN－50°－Wである。主柱穴はP1、P2であり、建て替えが想定される。78A号竪穴（P1）、78B号竪穴（P2）と呼称しておく。78B号竪穴が古く、竪穴範囲は確認できない。堆積土は1～12層に分層され、1・2層は1号溝に対応する。3・4・8層が暗褐色土層、5～7・9・11層が黒褐色土層であり、5・8層に焼土を多量に含む。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。

出土土器は、1・2・5が壺形土器、4・6が甕形土器、3が広口壺形土器であり、4は床面から、1～3・5は覆土から出土している。1・2・5は同一個体の可能性がある。4は常総系の土器である。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

79号竪穴（第104図、図版21・73・87）

79号竪穴（住居跡）は、調査区P16－01区他に所在する。9号溝他に重複する。遺存状態は不良で、竪穴の掘り込みは検出されなかった。規模は、炉、貯蔵穴等の位置関係から、主軸方向で3.5m程度と推定される。建て替えは確認できない。主軸方位はN－10°－Wである。主柱穴は検出されなかった。P2は出入口施設、P1は貯蔵穴と推定される。炉は、平面規模0.7×0.5mを測る。中央土坑は攪乱坑である。堆積土は、1・2層が9号溝覆土で灰褐色土層。3層は混貝土層、4層は褐色土層である。貝層は、ほぼ床に密着した状態で検出された（第3章第1節）。また、貝層内より、イネ、コムギ等の炭化種子が検出されている（第3章第7節）。

図示可能な出土土器は、1の壺形土器のみである。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

80号竪穴（第106図、図版21・60・73・76）

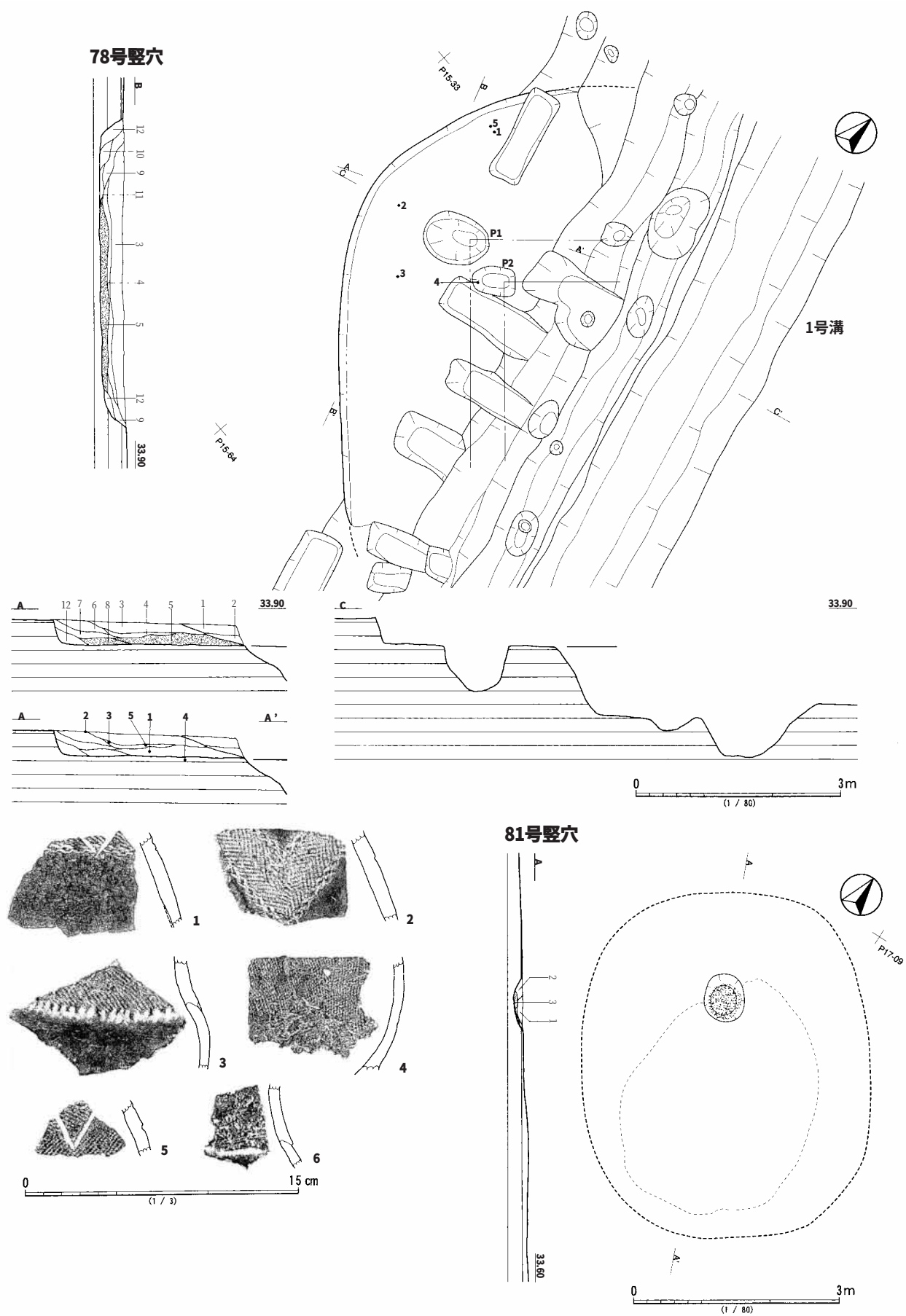
80号竪穴（住居跡）は、調査区P16－22区他に所在する。古墳時代前期の119号竪穴、近世以降と推定される溝と重複する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は主軸で3.95mを測る。東西方向は、推定で4.1m程度、床面積は12.31m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.22m、主軸方位はN－12°－Wである。主柱穴はP1～4であり、P5は出入口施設であり、貯蔵穴は検出されなかった。炉は、平面規模0.68×0.54mを測る。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1層が暗灰褐色土層、2・3層が暗褐色土層、4層が褐色土層である。本遺構は部分的にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、2～5が壺形土器、1が椀形土器であり、1～3・5は床面から出土している。1はほぼ完存する。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

81号竪穴（第105図、図版21）

81号竪穴（住居跡）は、調査区P17－18区他に所在する。遺存状態は不良で、竪穴の掘り込みは



第105图 78・81号竖穴 遺構遺物

[illegible]

第106图 80号竖穴 遺構遺物

検出されなかった。炉および床硬化面から竪穴と推定したが、規模は不明。主軸方位はN-33°-Wと推定したが不確実である。主柱穴等は検出されなかった。炉は、平面規模0.70×0.58mを測る。炉堆積土は、1・2層が褐色土層、3層が焼土層である。本遺構は、全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

図示可能な出土土器は出土していない。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定しておくが、確証はない。

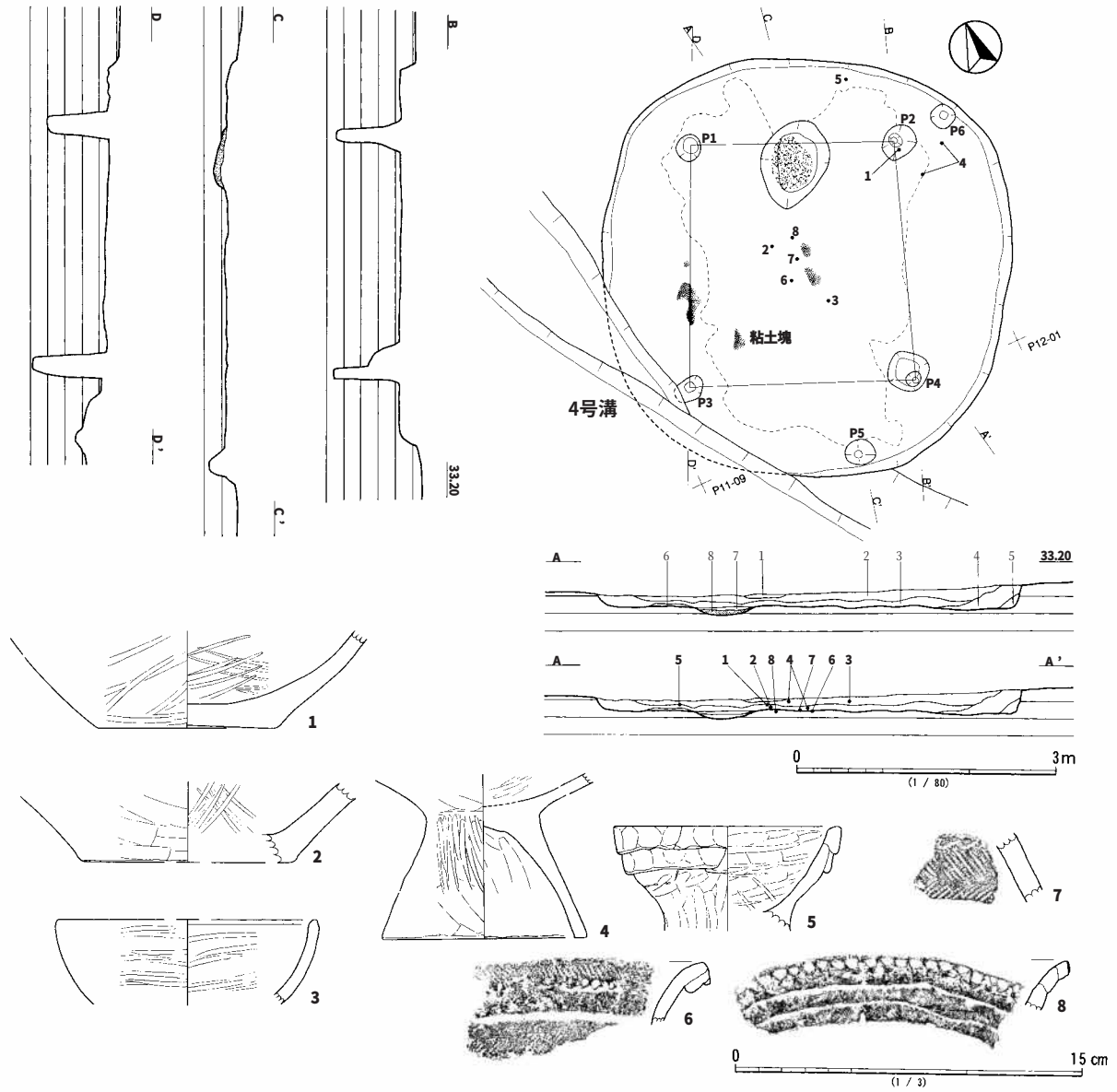
82号竖穴 (第107图、图版21·73)

82号竪穴（住居跡）は、調査区O12－90区他に所在する。4号溝と重複し、本遺構に対し4号溝が新しい。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は4.80（主軸）×4.74m、床面積は17.85m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.28m、主軸方位はN－25°－Eである。主柱穴はP1～4であり、P5は貯蔵穴と推定される。炉は、平面規模0.74×0.48mを測る。竪穴堆積土は1～6層に分層され、1層が黒褐色土層、2～4層が暗褐色土層、5・6層が褐色土層、炉内、7層は暗灰褐色土層、8層は焼土層である。なお、竪穴中央付近に粘土ブロックの分布が認められた。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

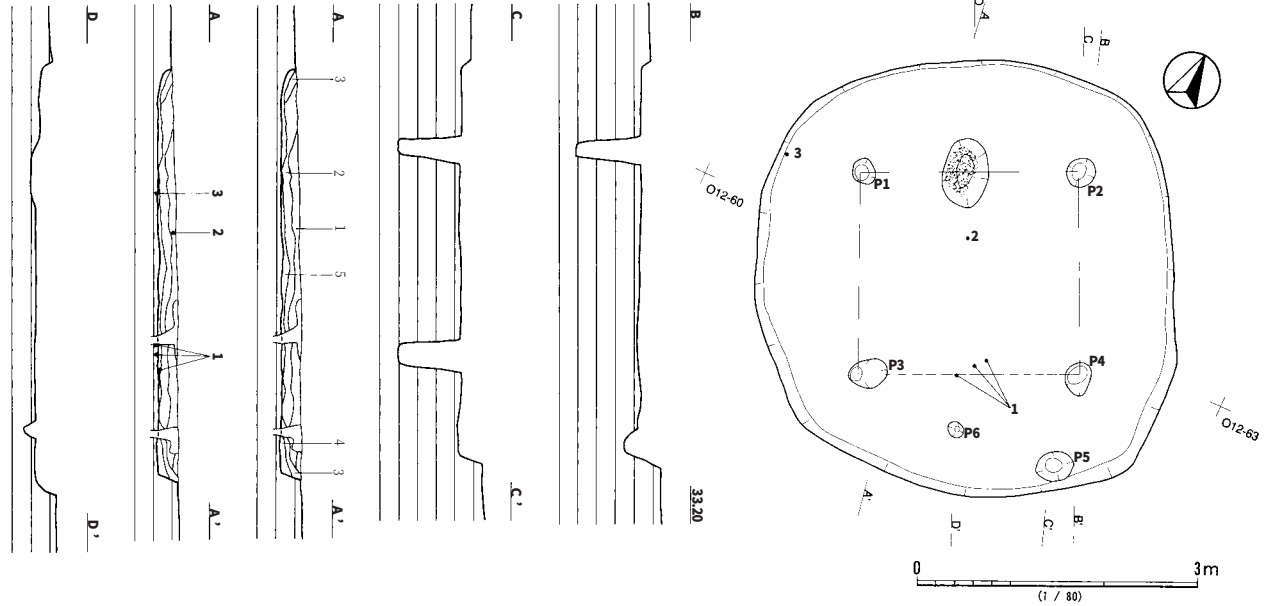
出土土器は、1・2・8が甕形土器、4が台付甕形土器、6・7が壺形土器、5が高杯形土器、3が椀ないしは高杯形土器であり、6～8は床面から、1～5は覆土から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

82号竖穴



83号竖穴



第107図 82・83号竖穴 遺構遺物

83号竪穴（第107・108図、図版21・60・73・82・85）

83号竪穴（住居跡）は、調査区O12-51区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は4.66（主軸）×4.55m、床面積は16.10m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.24m、主軸方位はN-28°-Wである。支柱穴はP1~4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.67×0.48mを測る。堆積土は、1層が明褐色土層、2・4層が褐色土層、3・5層が暗褐色土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、2・3が甕形土器、1が高杯形土器であり、1・3は床面から、2は覆土から出土している。土器以外では、軽石1点が出土している。4は、こて状を呈し、裏面一部が特に平滑で使用面と推定される。出土状態は不明。

本竪穴の時期は、3~4期と推定される。

84号竪穴（第108図、図版21・60・73）

84号竪穴（住居跡）は、調査区O11-29区他に所在する。14号溝と重複し、本遺構に対し14号溝が新しい。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は3.66（主軸）×3.52m、床面積は9.94m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.32m、主軸方位はN-21°-Wである。支柱穴は検出されなかった。P3は出入口施設、P1は貯蔵穴であろうか。炉は、平面規模0.63×0.38mを測る。堆積土は1~7層に分層され、1層が灰褐色土層、2層が黒褐色土層、3・5~7層が暗褐色土層、4層が褐色土層であり、5・6層は多量の焼土、炭化物を含む。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況からみて、失火、放火などの被災によるものではなく、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、1・2・5が壺形土器、3が甕形土器、4が椀ないしは高杯形土器であり、1・4は床面から、2・3・5は覆土から出土している。2は、古墳時代前期の土師器である。1は、56号竪穴1、58号竪穴1と同様、沈線区画の壺形土器としては、口縁部高が低く短頸である。

本竪穴の時期は、3期と推定される。

85号竪穴（第108図）

85号竪穴（住居跡）は、調査区N11-88区他に所在する。遺存状態は不良で、かつ4号溝、旧石器時代調査の試掘坑によって破壊され、炉のみの検出である。確証はないが、炉の形状から竪穴と判断した。炉は、平面規模0.80×0.56mを測り、1層が褐色土層、2層が焼土層である。

実測可能な遺物は出土していない。

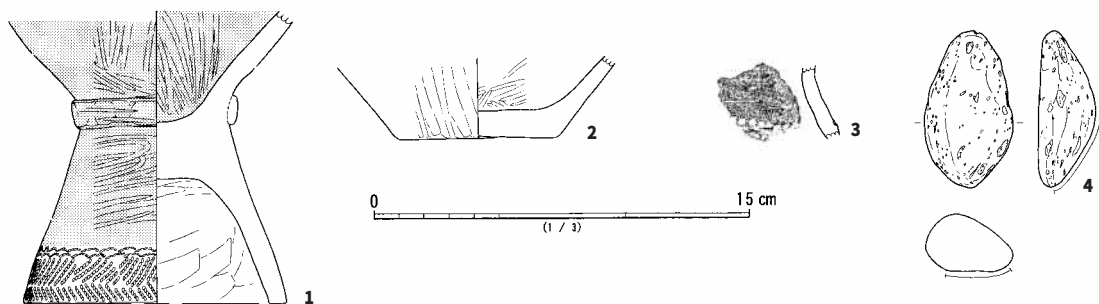
本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定しておくが、不確実である。

86号竪穴（第109図、図版22・60）

86号竪穴（住居跡）は、調査区N12-87区他に所在する。緩斜面地にあたり、北辺部は遺存が認められなかった。また、近年の攪乱坑が重複する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は4.4（主軸復原）×4.06m、床面積は約13.27m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.25m、主軸方位はN-18°-Wである。支柱穴はP1~4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、攪乱坑により半壊。竪穴堆積土は1~4層に分層され、1・2層が褐色土層、3・4層が暗褐色土層である。

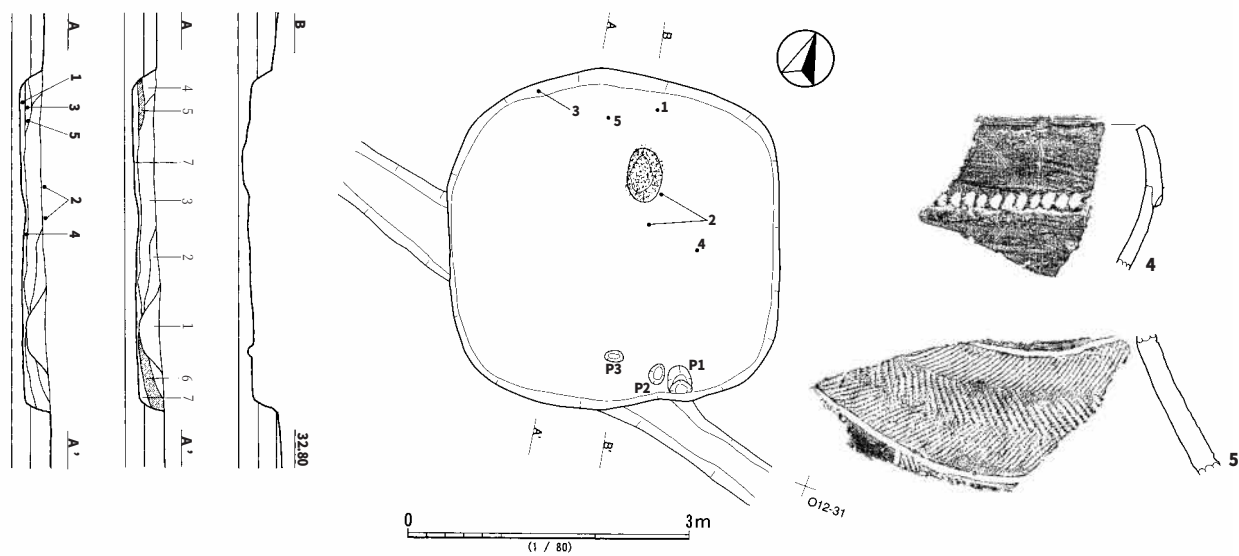
出土土器は、2~4が壺形土器、1が甕形土器であり、1・2・4は床面から出土している。

83号竖穴



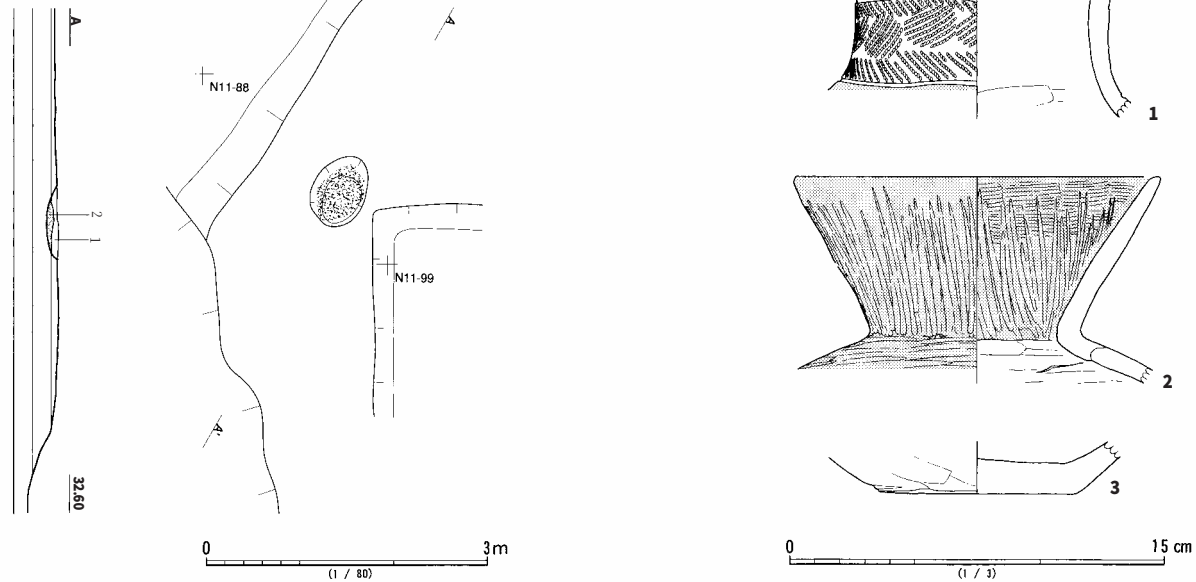
O11-18

84号竖穴



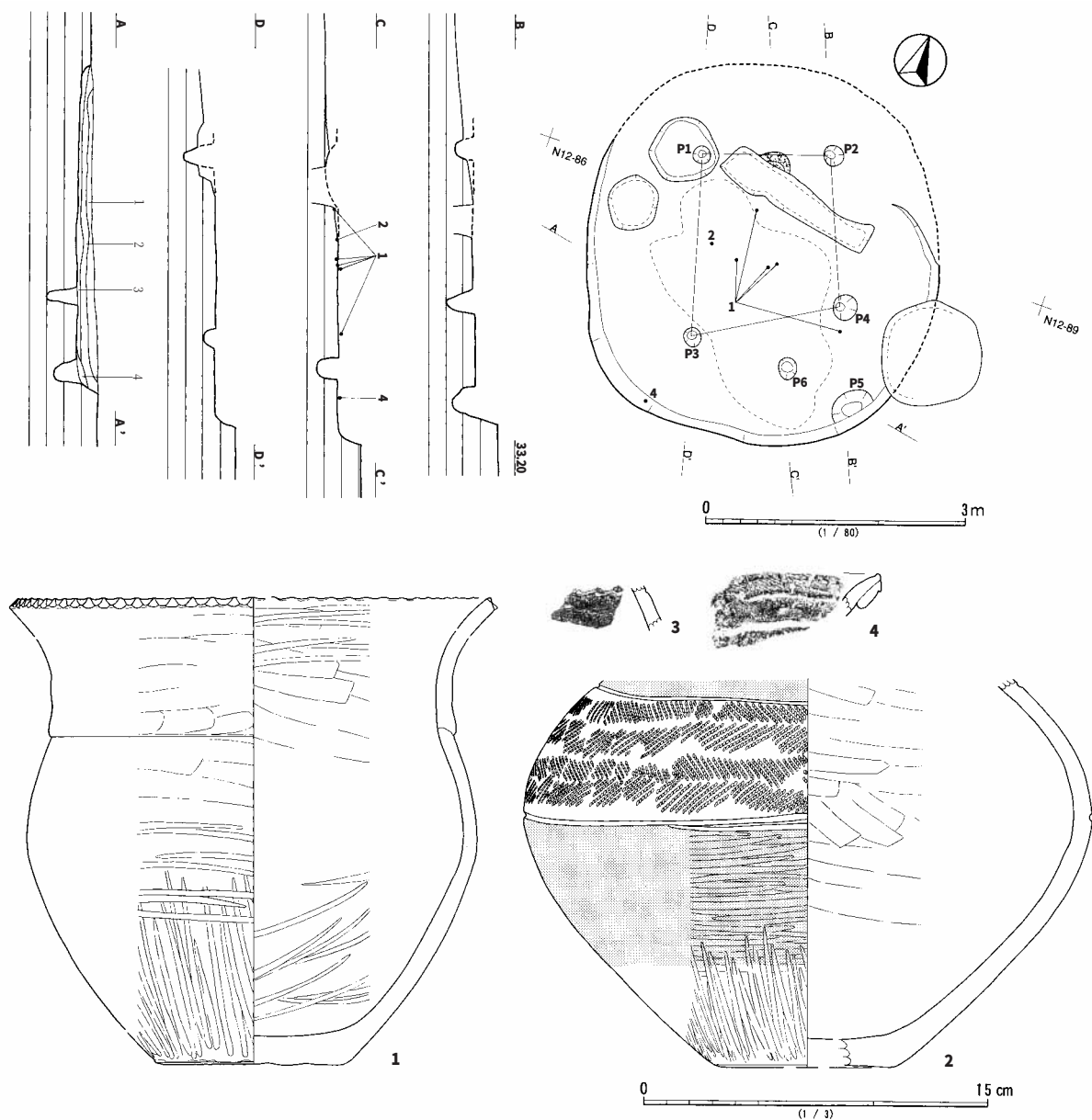
O12-31

85号竖穴



第108图 83・84・85号竖穴 遺構遺物

86号竪穴



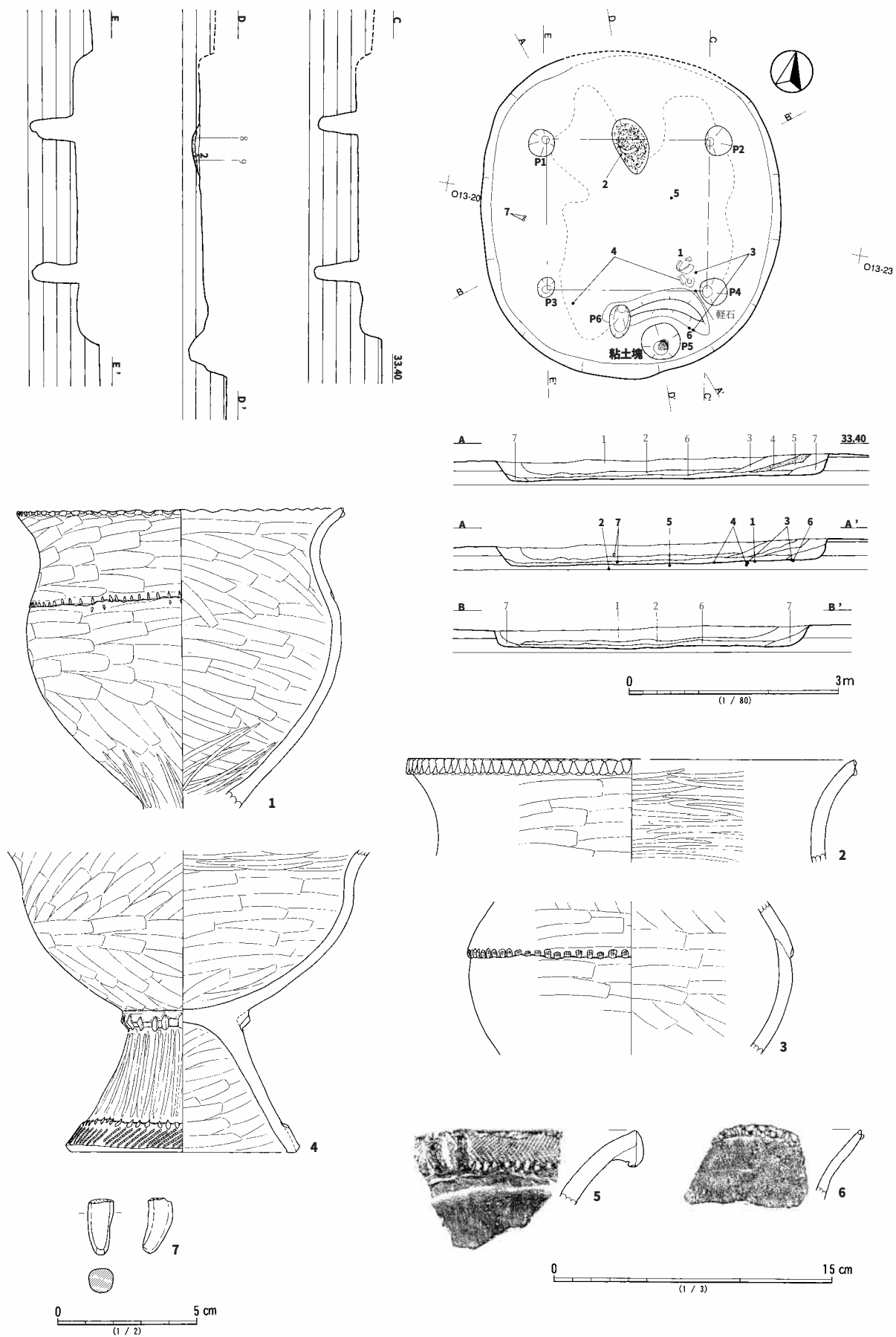
第109図 86号竪穴 遺構遺物

本竪穴の時期は、3期と推定される。

87号竪穴（第110図、図版22・61・73・79・81・82・84）

87号竪穴（住居跡）は、調査区O13-10区他に所在する。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は4.67（主軸復原）×4.27m、床面積は14.61m²程度を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.37m、主軸方位はN-10°-Wである。主柱穴はP1~4であり、P6は出入口施設、P5は貯蔵穴であり、凸堤が圍繞する。P5内底面から上20cmの位置より、粘土塊が出土している。炉は、平面規模0.84×0.47mを測り、南側に甕口縁部約1/3を配置する。竪穴堆積土は1~7層に分層され、1・3層が暗灰褐色土層、2・5・6層が黒褐色土層、4層が焼土層、7層が褐色土層であり、炉内、8層が黒褐色土層、9層が焼土層である。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。本遺構は全体にゴボウ耕作溝に

87号竖穴



第110図 87号竖穴 遺構遺物

よる攪乱をうけている。

出土土器は、5が壺形土器、1～3・6が甕形土器、4が高杯形土器であり、1・3～6は床面から出土している。2は炉体土器である。1は脚台部をもつと推定される。土器以外では、軽石1点（不実測）、土製勾玉尾部1点が出土している。軽石は、研磨面が若干認められるものの他破面であった。ともに覆土からの出土。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩が出土している。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

88号竪穴（第111図、図版22・73）

88号竪穴（住居跡）は、調査区O13－51区他に所在する。竪穴中央北側は、旧石器時代調査の試掘坑によって破壊してしまった。西側に3号方形周溝墓、北側に14号溝が接している。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は5.27（主軸）×4.62m、床面積は18.42m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.40m、主軸方位はN－28°－Wである。支柱穴はP1～4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。周溝が断続的に検出された。炉は、試掘坑によって破壊してしまった可能性が高い。試掘は、機械力（クラムシェル）を使用したため、当初から存在しなかったとは断定できない。竪穴堆積土は1～8層に分層され、1・3・6・7層が黒褐色土層、2・8層が暗褐色土層、4・5層が暗灰褐色土層である。

出土土器については、1・3が甕形土器、2が高杯形土器であり、1は床面から、2・3は覆土から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

89号竪穴（第111図、図版23・61・73・76・77）

89号竪穴（住居跡）は、調査区O15－89区他に所在する。9号溝と重複し、本遺構に対し9号溝が新しい。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は3.13（主軸）×2.96m、床面積は7.00m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.32m、主軸方位はN－25°－Wである。支柱穴は検出されなかった。P2は出入口施設、P1・P3は貯蔵穴の可能性がある。炉は、平面規模0.88×0.40mを測る。堆積土は1～12層に分層され、うち1層は9号溝に対応する。2層が暗灰褐色土層、3・5・9層が褐色土層、4・7・8層が暗褐色土層、6が黒褐色土層、炉内、10層は黒褐色土層、11層は灰褐色土層、12層は焼土層である。

出土土器は、1が壺形土器、2が椀ないしは高杯形土器であり、1は炉内から出土している。1は、支脚（炉器台）として使用されたと推定される。

本竪穴の時期は、3期と推定される。

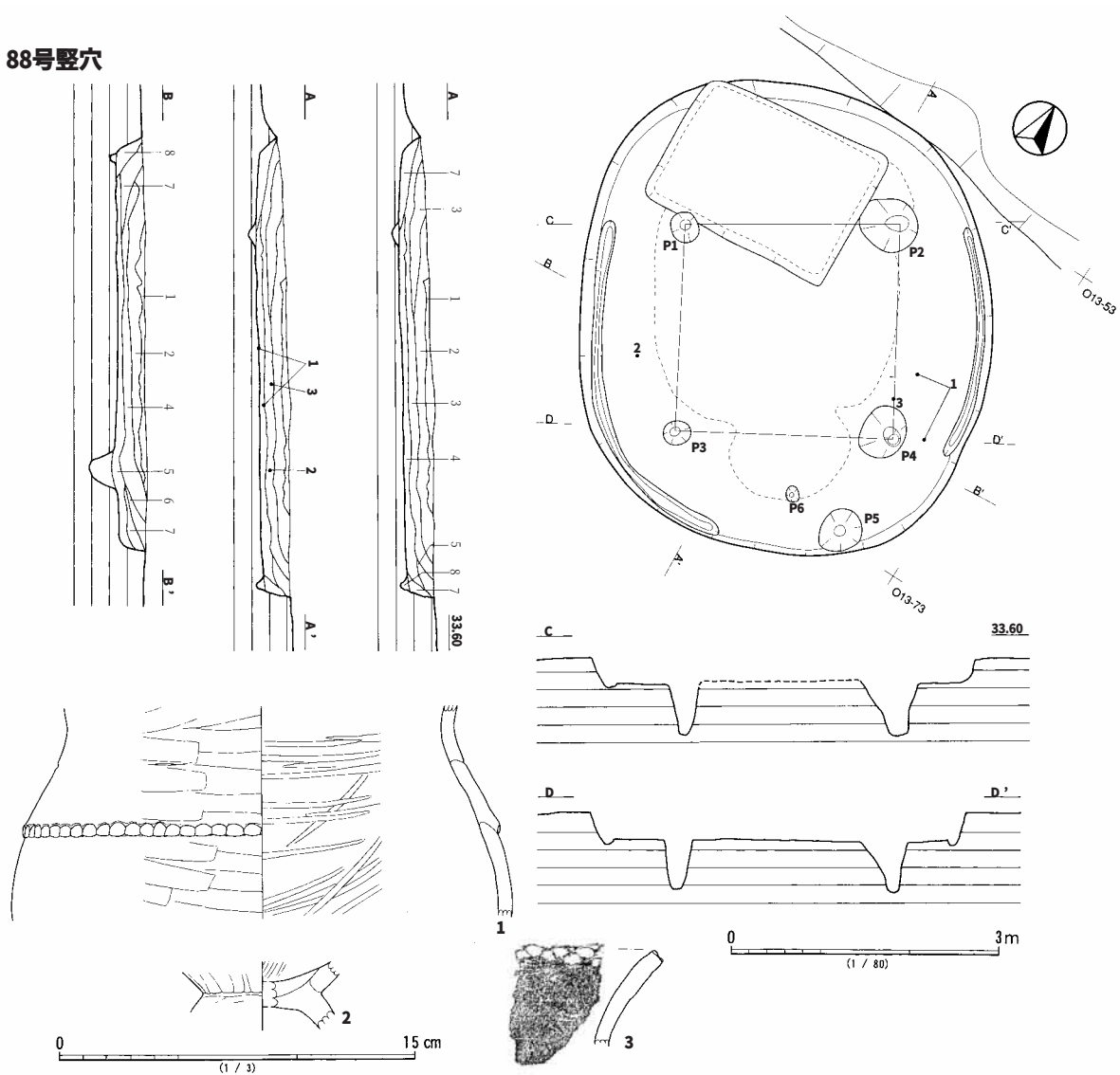
90号竪穴（第112図、図版23・73・79）

90号竪穴（住居跡）は、調査区O15－48区他に所在する。9号溝と重複し、本遺構に対し9号溝が新しい。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は3.00（主軸）×2.88m、床面積は6.46m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.32m、主軸方位はN－44°－Wである。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模0.70×0.42mを測る。東辺部土坑は攪乱坑である。堆積土は1～6層が黒褐色土層、7層が暗褐色土層、8層が褐色土層である。

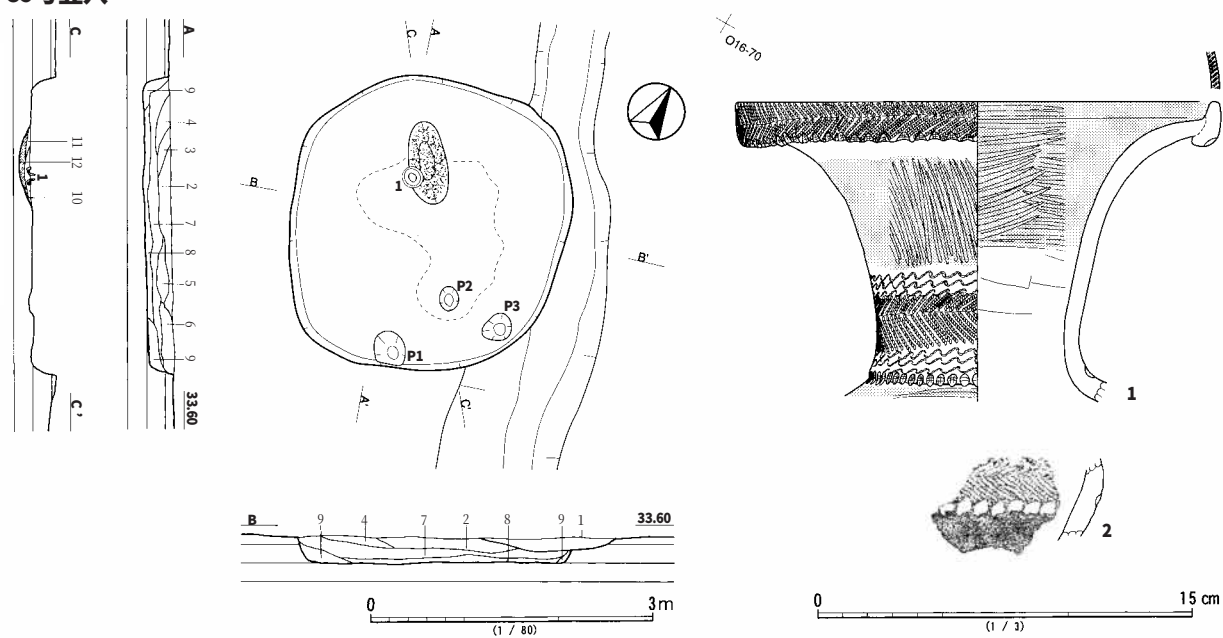
図示可能な土器は、1の広口壺形土器のみであり、覆土から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

88号竖穴



89号竖穴



第111图 88・89号竖穴 遺構遺物

91号竪穴（第112図、図版23・73・78・82）

91号竪穴（住居跡）は、調査区O15—06区他に所在する。8号溝およびこれと直交する近世以降の溝と重複するが、溝底面は竪穴床面に達していない。北辺部は攪乱坑により破壊される。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は2.68（主軸）×2.47m、床面積は4.73m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.40m、主軸方位はN—43°—Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、現存部で0.62mを測る。堆積土は1～7層に分層される。灰褐色系の1・2層は溝に対応する。3～6層が暗褐色土層、7層が褐色土層である。

出土土器は、1・3・4が甕形土器、2が椀ないしは高杯形土器、5・6が壺形土器であり、6は炉内から、2・3は覆土から出土している。5・6は同一個体と推定される。横連続回転による単節羽状縄文5段以上を地文とし、斜行文帯とこれに直行する沈線を加え、地文を部分的に磨り消す。2は、口縁部無段で押捺列をめぐらす。98号竪穴3と似る。

本竪穴の時期は、4期古～新段階と推定される。

92号竪穴（第112・113図、図版23・73・81）

92号竪穴（住居跡）は、調査区O16—00区他に所在する。攪乱坑により両端を破壊される。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は2.62（主軸）×2.86m、床面積は5.61m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.57m、主軸方位はN—5°—Eである。主柱穴は検出されなかった。P1は出入口施設である。炉は、平面規模0.62×0.72mを測る。竪穴堆積土は1～11層に分層され、1・3・7層が暗褐色土層、2・4～6・8～11層が黒褐色土層であり、5～7層に多量の焼土を含む。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、床面、壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。

出土土器は、2・4・7が壺形土器、1・5が甕形土器、3・6が椀ないしは高杯形土器であり、1・4は床面から、2・3・5は覆土から出土している。

本竪穴の時期は、4期古～新段階と推定される。

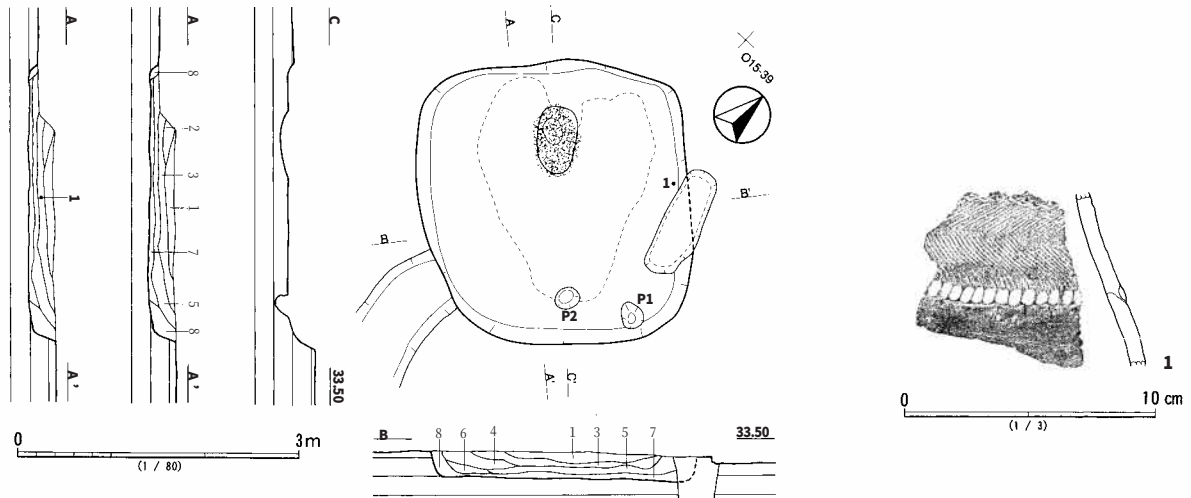
93号竪穴（第113・114図、図版23・61・73・76・77・81）

93号竪穴（住居跡）は、調査区O16—55区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は5.82（主軸）×5.54m、床面積は25.56m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.4m、主軸方位はN—36°—Wである。主柱穴はP1～4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.76×0.54mを測る。竪穴堆積土は1～6層に分層され、1層が黒褐色土層、2・3・7層が暗褐色土層、4層が暗灰褐色土層、5層が焼土層、6層がローム粒を主体とする層である。炉内、7層は暗褐色土層、8層は焼土層である。本竪穴は火災に遭っていると推定され、竪穴中央床面が全体に焼けていた。また、とくに東辺部に炭化物が認められた。壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況からみて、失火、放火などの被災によるものではなく、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

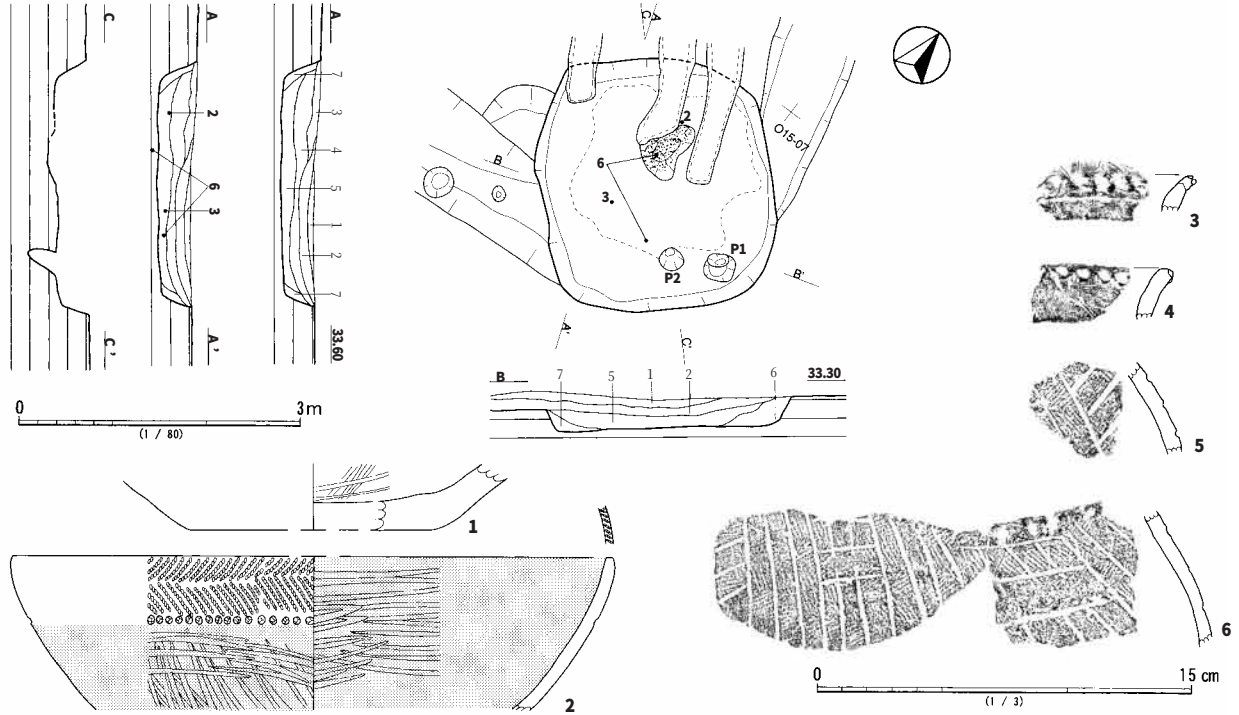
出土土器は、2・8～13が壺形土器、1・5・6が広口壺形土器、7・14が甕形土器、3・4・15椀形土器であり、1・5・6・15は床面から、2～4・7・9は覆土から出土している。11・12同一個体と推定される。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

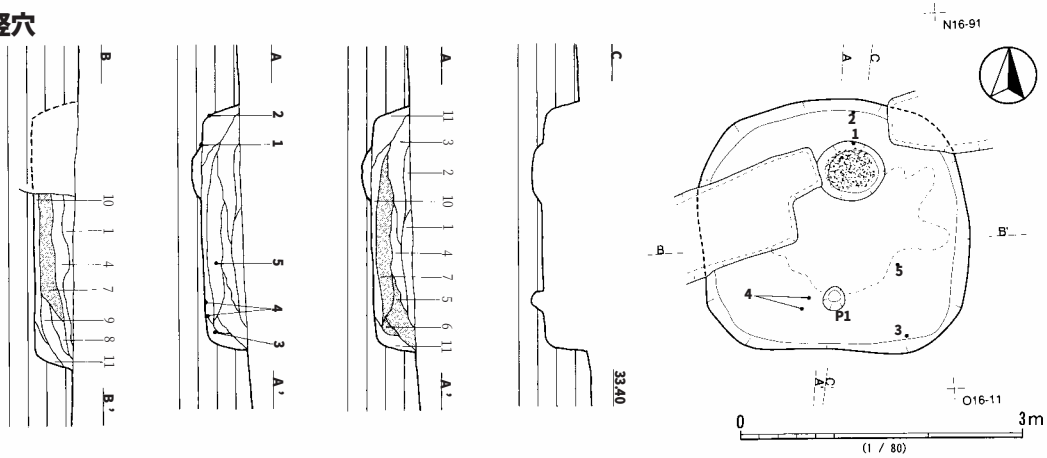
90号竖穴



91号竖穴

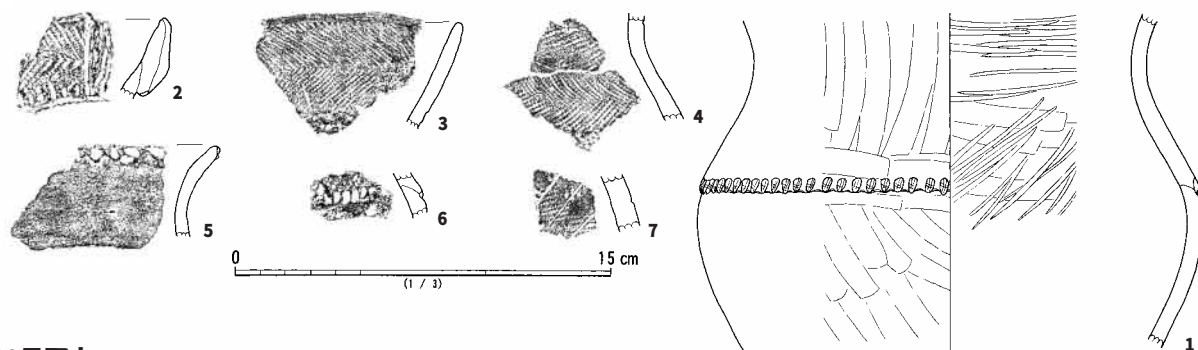


92号竖穴

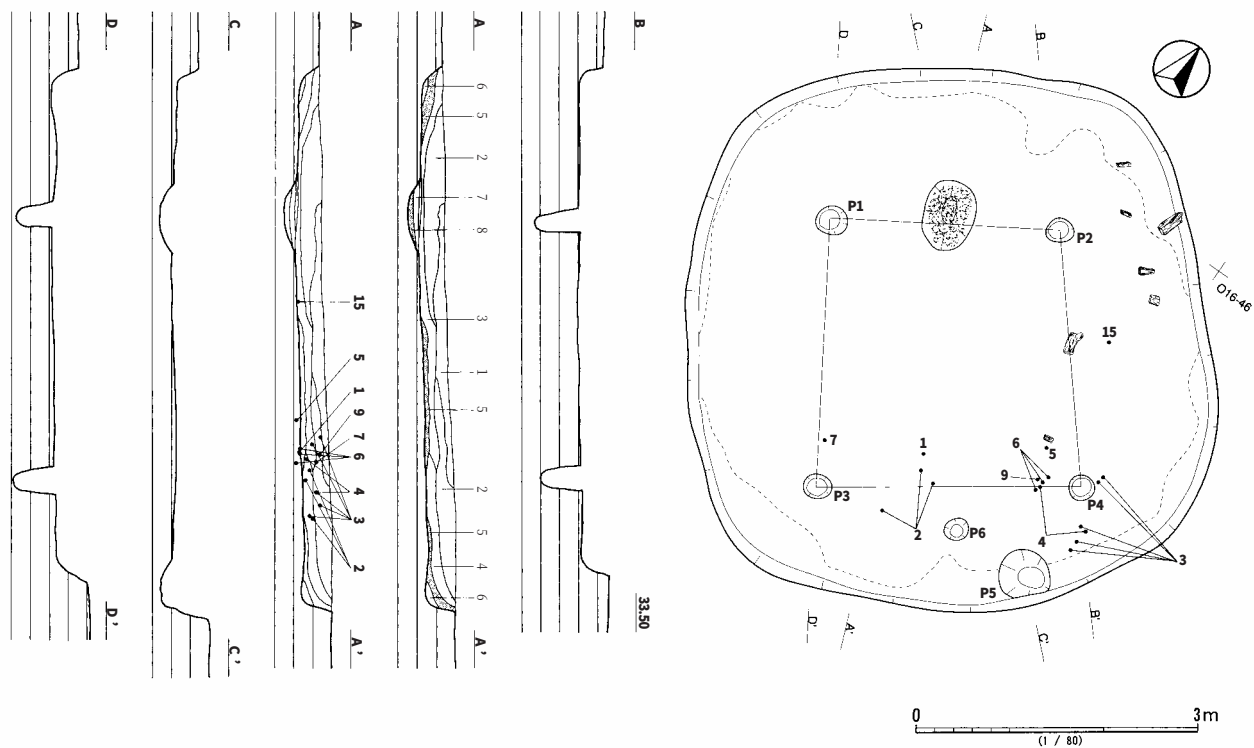


第112图 90・91・92号竖穴 遺構遺物

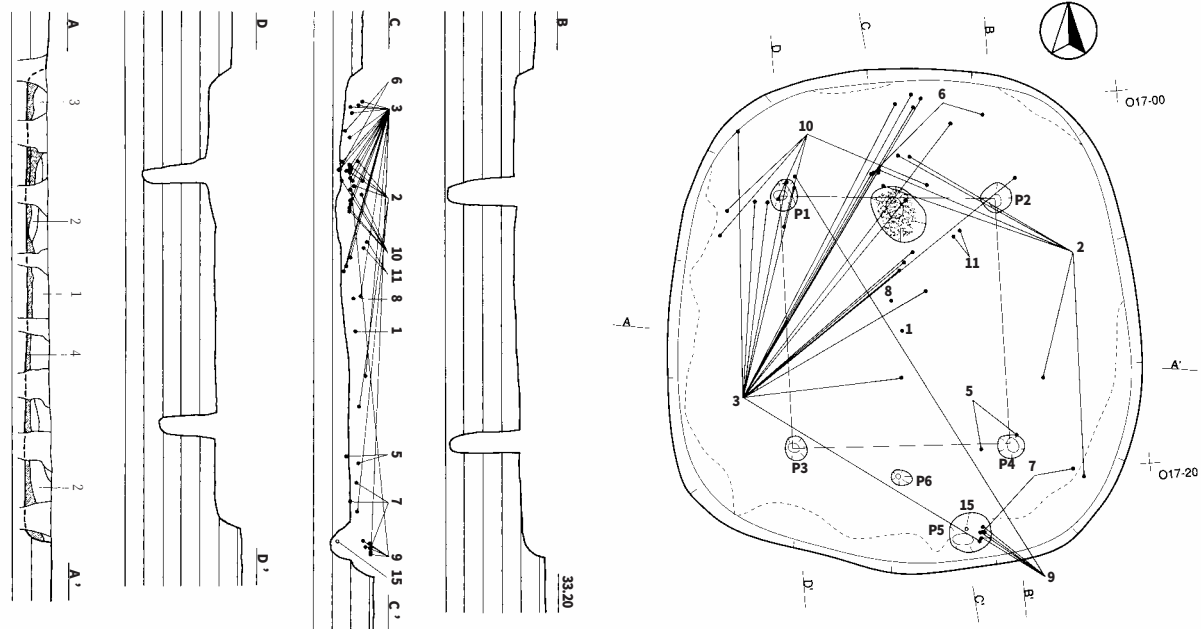
92号竖穴



93号竖穴

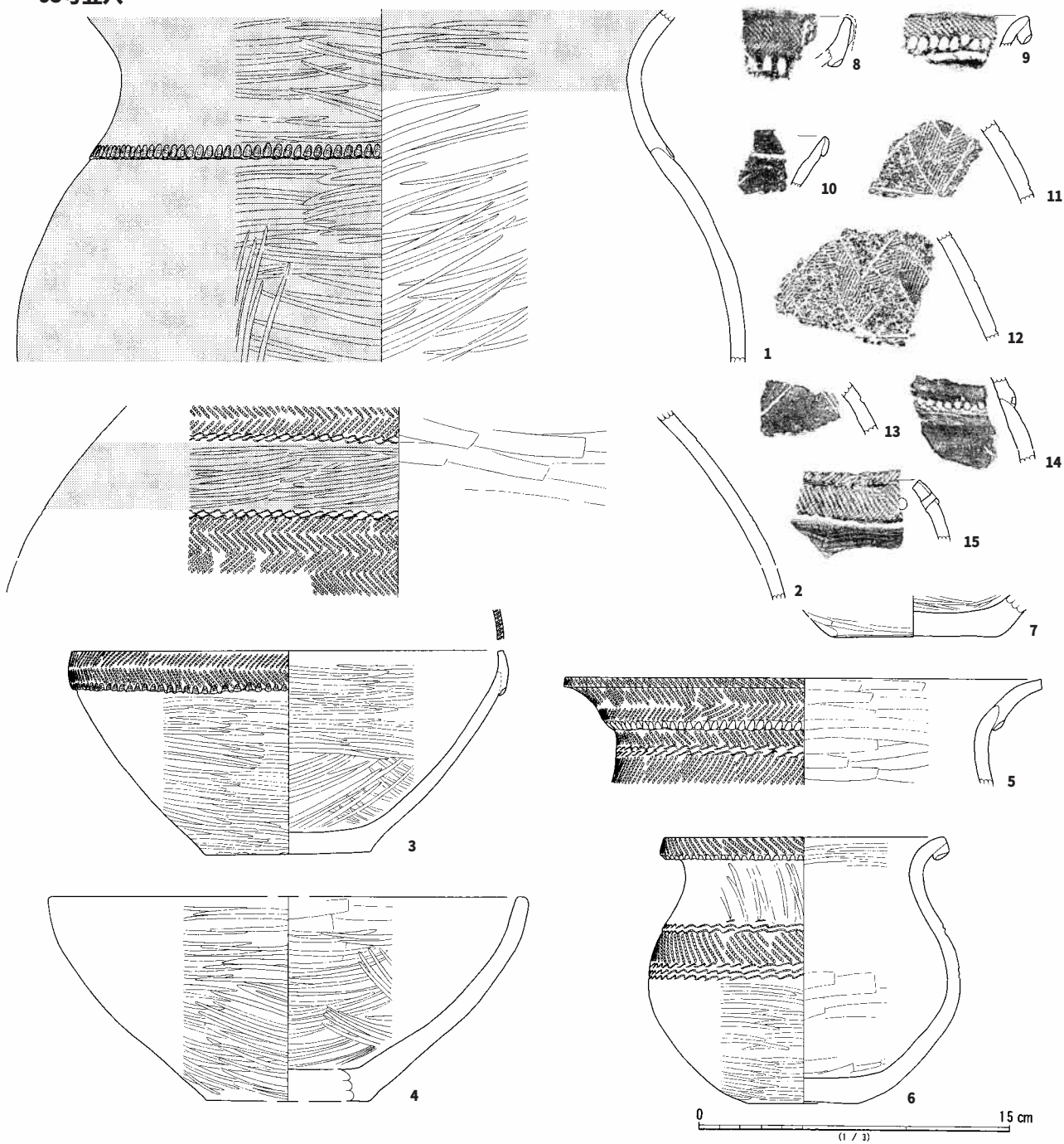


94号竖穴

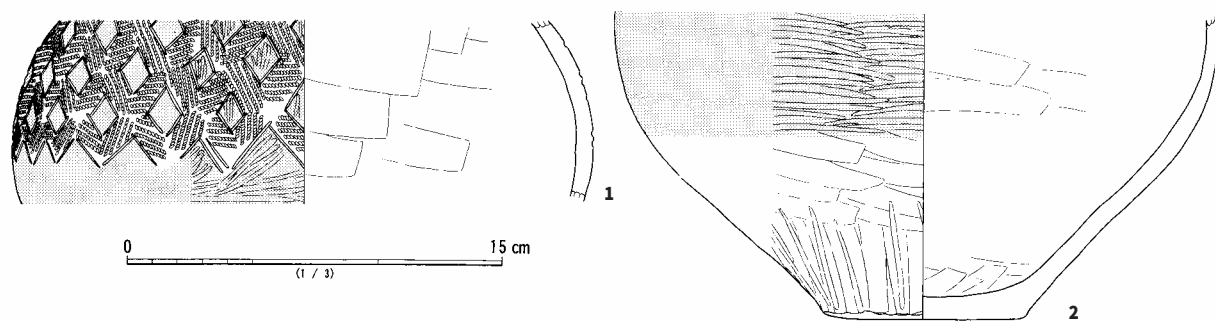


第113图 92・93・94号竖穴 遺構遺物

93号竖穴



94号竖穴



第114图 93・94号竖穴 遺物

94号竪穴（第113・114・115図、図版24・73・78・82・85・87）

94号竪穴（住居跡）は、調査区O16-18区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は5.37（主軸）×5.05m、床面積は21.03m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.33m、主軸方位はN-5°-Eである。主柱穴はP1~4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模1.26×0.92mを測る。竪穴堆積土は1~4層に分層され、1・3・4層が暗褐色土層、2層が黒褐色土層であり、4層に多量の焼土が、3層に焼土および多量のローム粒が認められた。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、焼土の堆積状況から廃棄後の焼却、被災の判断はできない。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、1・2・5・13・14が壺形土器、4が広口壺形土器、8が椀形土器、12がミニチュア形土器、3・9~11が甕形土器、6・7が椀ないしは高杯形土器であり、5~7は床面から、1~3・8~11は覆土から出土している。とくに、4層上に土器の投棄が認められた。3は、器形的にみて古墳時代前期に比定される可能性が考えられるが、出土状態に他と明確な差は認められない。14は、沈線区画内を刺突によって充填する。96号竪穴2と同一個体の可能性がある。土器以外では、加工礫（敲石）1点がP5内から出土している。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩、炭化したオニグルミの核が出土している（第3章第7節）。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

95号竪穴（第115図、図版24）

95号竪穴（住居跡）は、調査区O16-59区他に所在する。6号土坑と重複するが、新旧の関係は不明。全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけ、遺存状態は不良で、竪穴の掘り込みは確認できなかった。炉およびブロック状の硬化面のみの検出であるが、一応竪穴と判断した。炉は、平面規模0.72×0.46mを測る。炉堆積土は1~3層に分層され、1・3層が焼土層、2層が暗褐色土層である。

出土土器は細片のみであり、図示することはできない。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定しておくが、不確実である。

96号竪穴（第116図、図版24・73）

96号竪穴（住居跡）は、調査区O17-04区他に所在する。2号溝と重複し、本遺構に対し2号溝が新しい。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は5.25（主軸）×4.85m、床面積は18.74m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.10m、主軸方位はN-3°-Eである。主柱穴は検出されなかった。炉は、平面規模0.74×0.66mを測る。貯蔵穴等は検出されなかったが、全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけているため不確実である。

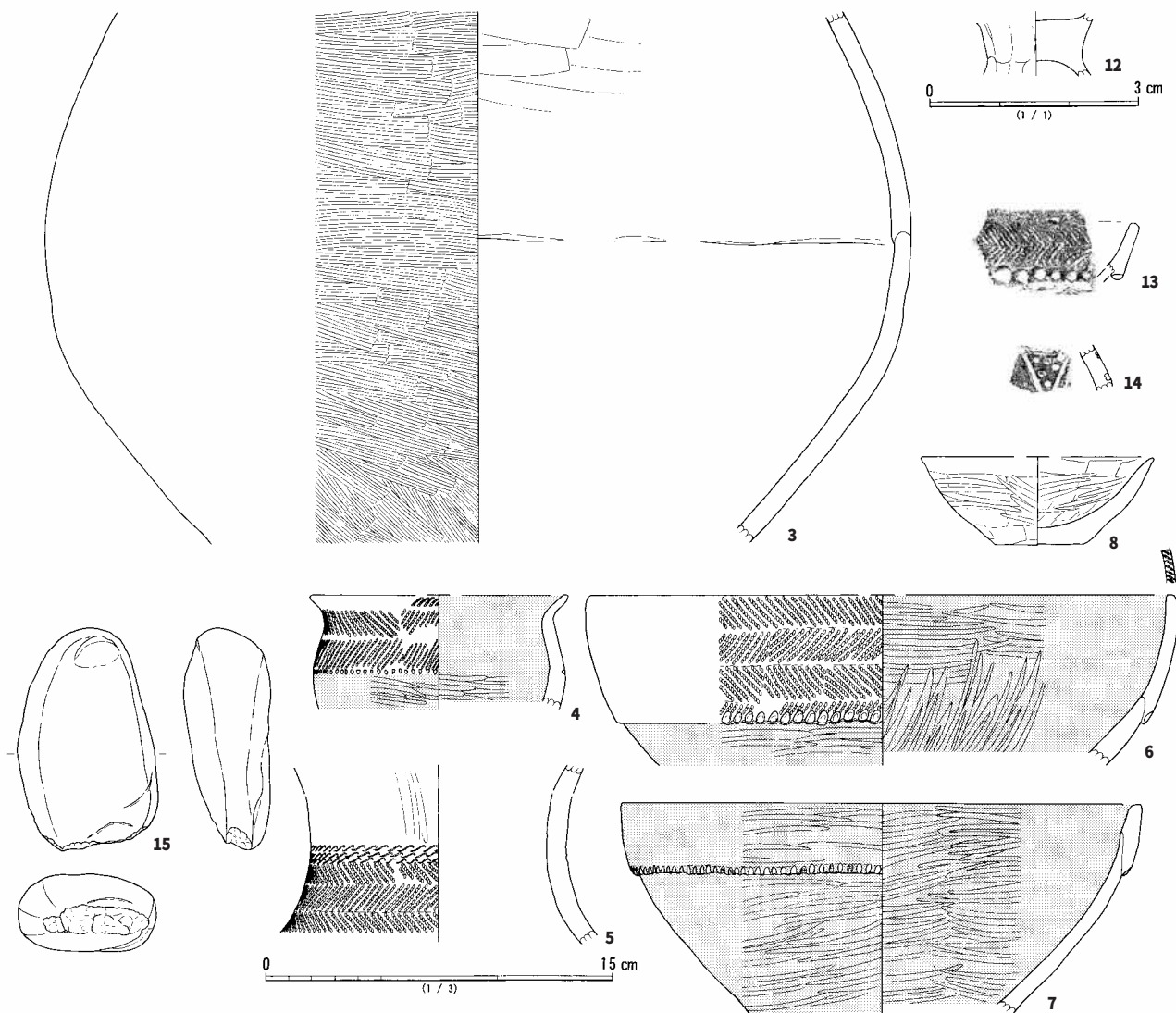
出土土器は、1・2が壺形土器、3が椀ないしは高杯形土器である。2は、94号竪穴14と同一個体の可能性がある。

本竪穴の時期は、3~4期と推定される。

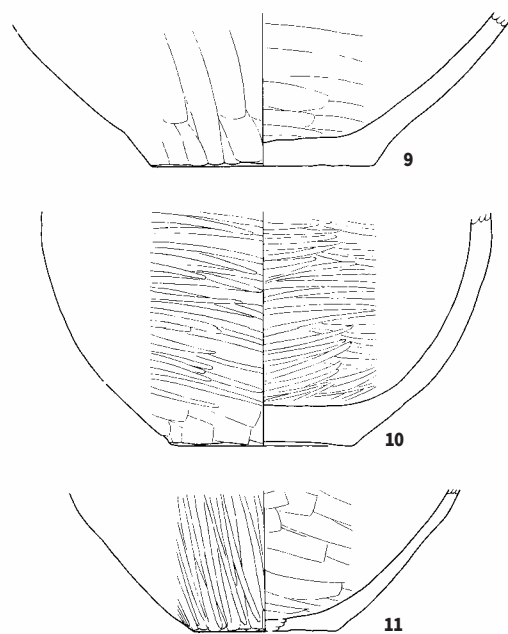
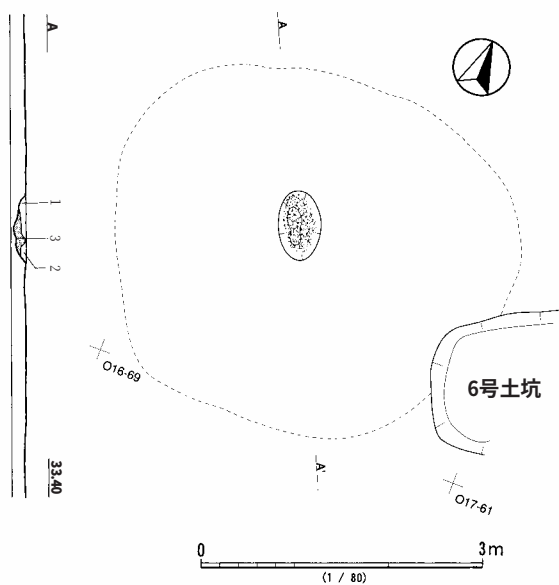
97号竪穴（第116・117図、図版24・61・62・84）

97号竪穴（住居跡）は、調査区N15-38区他に所在する。竪穴平面形態は、やや横長の楕円形を呈し、全体規模は3.58（主軸）×3.60m、床面積は8.41m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.32m、主軸方位はN-30°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P2は出入口施設、P1は貯蔵穴であろうか。炉の掘り込み範囲は、現存部で0.48mを測り、南側を土器で囲う。竪穴中

94号竖穴

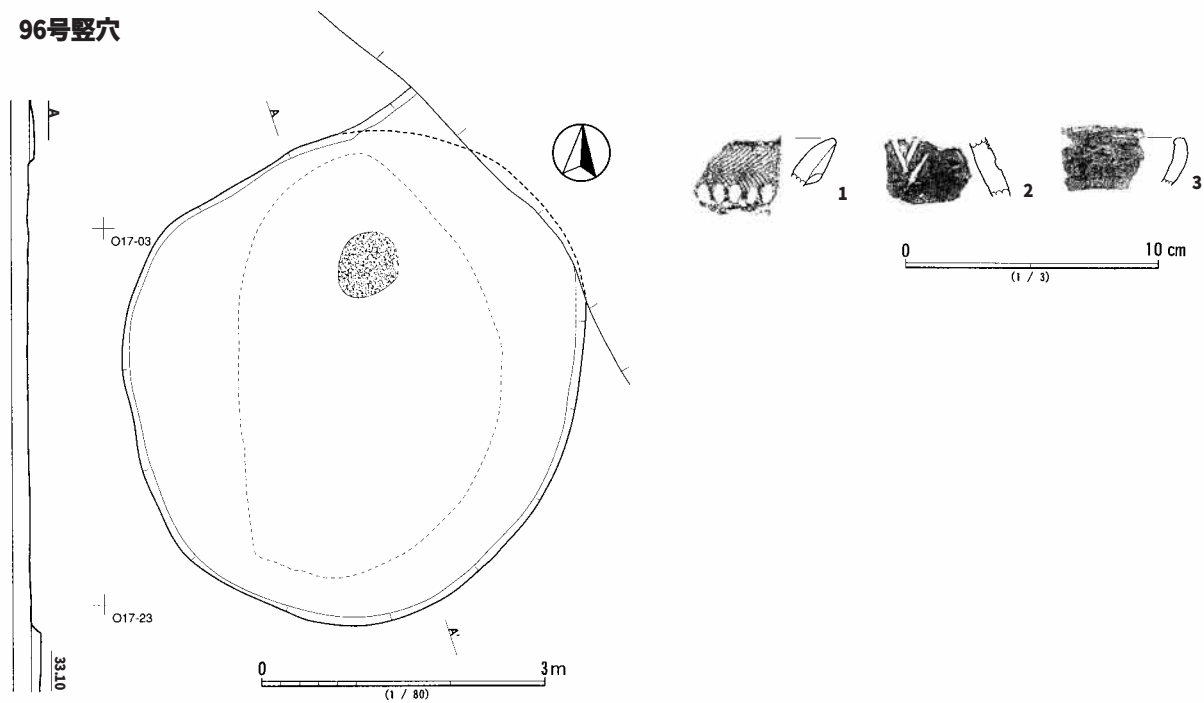


95号竖穴

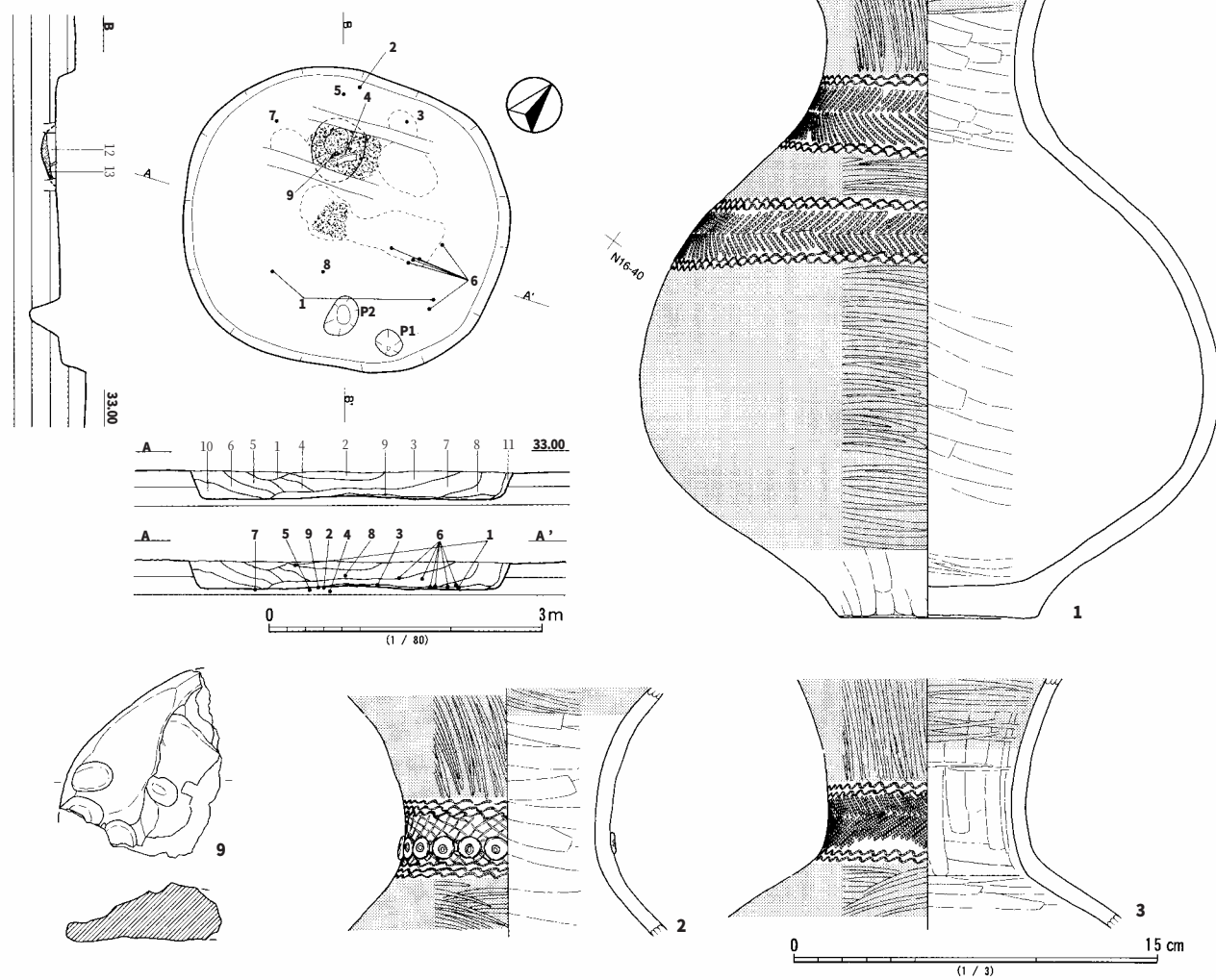


第115图 94・95号竖穴 遺構遺物

96号竖穴

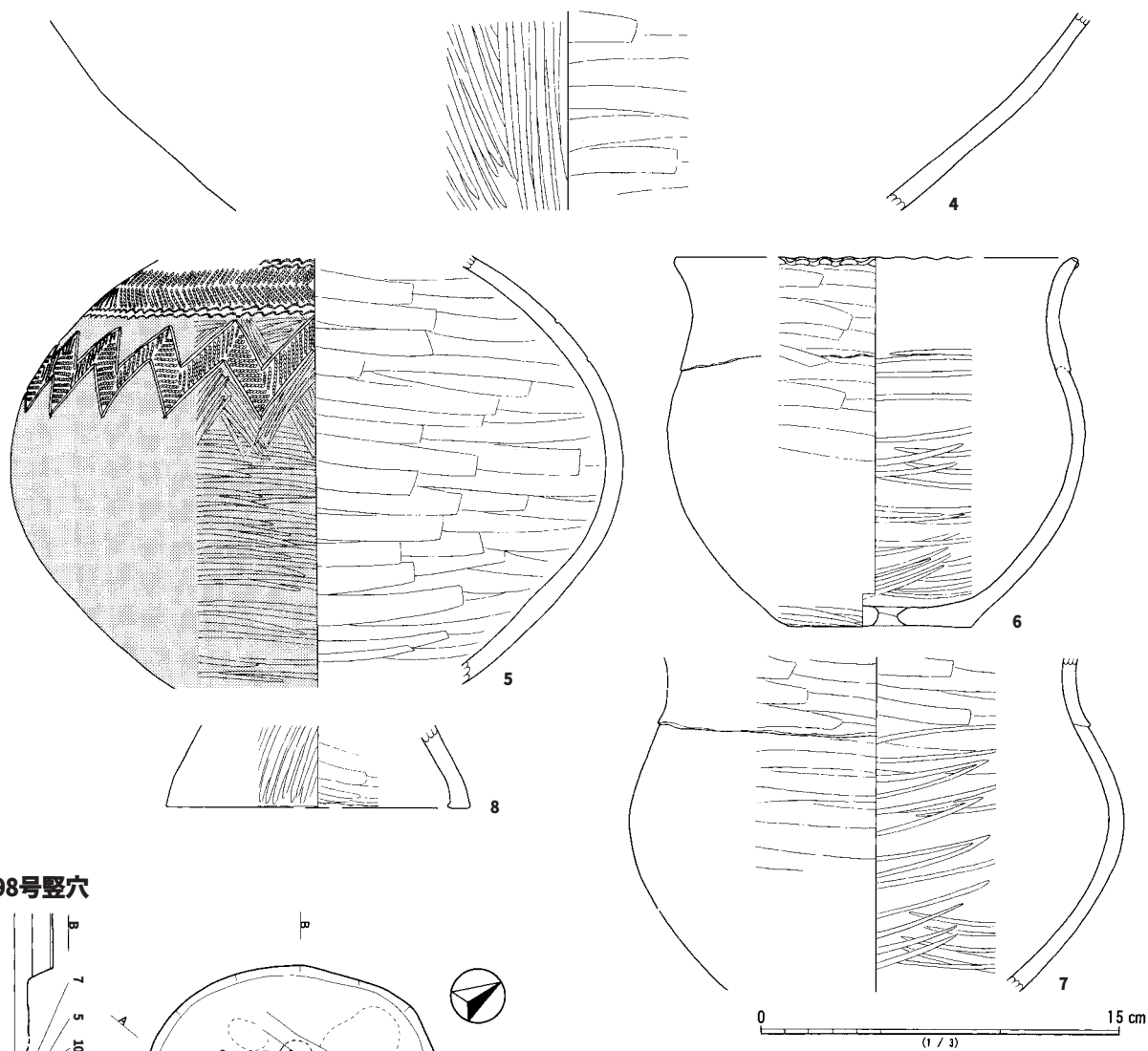


97号竖穴

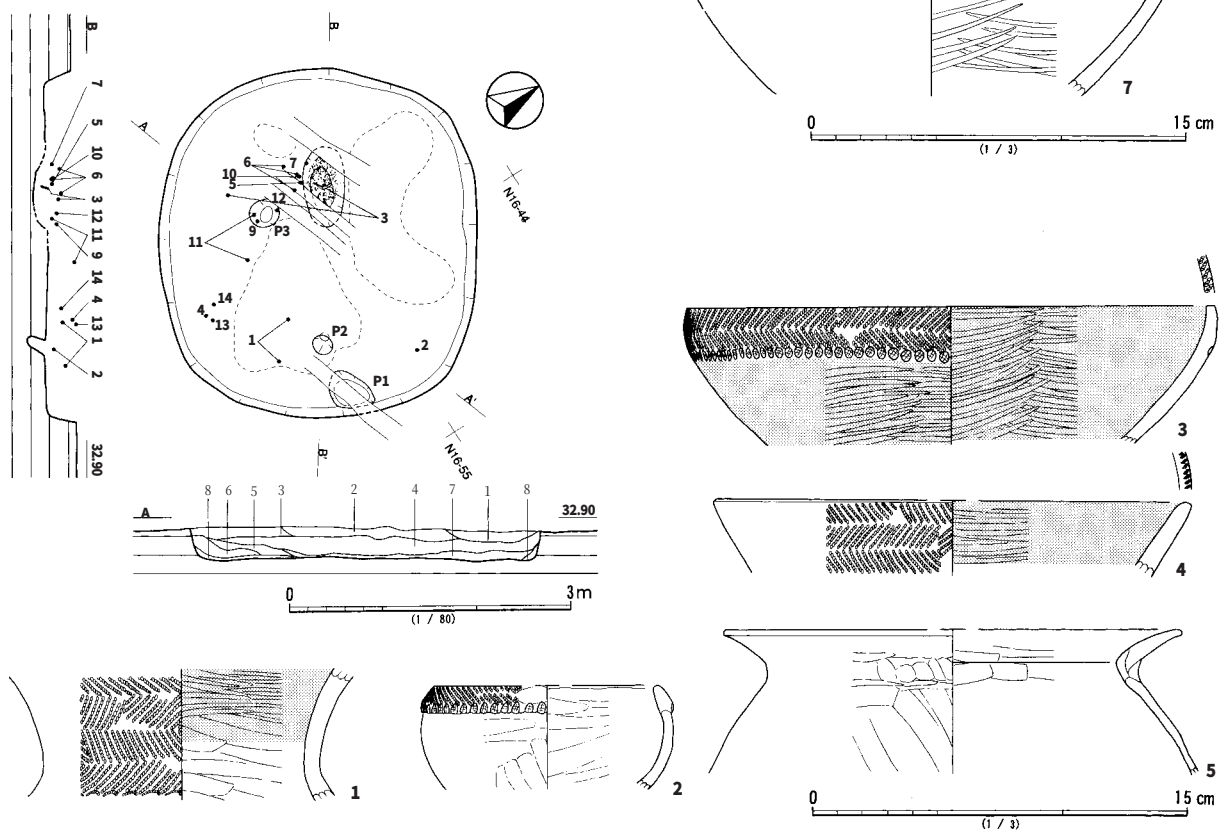


第116図 96・97号竖穴 遺構遺物

97号竖穴



98号竖穴



第117图 97・98号竖穴 遺構遺物

中央部にも床が焼けている範囲が認められた。竪穴堆積土は1～11層に分層され、1・2・5・7層が暗灰褐色土層、3・6・8・10層が暗褐色土層、4層が灰褐色土層、9層が黒褐色土層、11層が褐色土層であり、炉内、12層は黒褐色土層、4層は焼土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、1～5が壺形土器、6・7が甕形土器、8が台付甕形土器であり、1～3・5～7は床面から、8は覆土から出土している。4は炉体土器である。ゴボウ耕作溝による攪乱により、原位置をとどめていないものもあると思われるが、多くは遺存遺物であろう。3・5は、縄文施文が近似しており同一個体の可能性がある。2は、網目状撚糸文（0段2条）と思われるが、繊維状痕を残す軸がわずかに認められる。土器以外では、不明土製品1点が炉内より出土している。成形時の指頭痕を残す粗いつくりで、性格は不明。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

98号竪穴（第117・118図、図版24・73・74）

98号竪穴（住居跡）は、調査区N16—43区他に所在する。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は3.74（主軸）×3.40m、床面積は9.36㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.43m、主軸方位はN—56°—Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、現存部で0.45mを測る。竪穴堆積土は1～8層に分層され、1層が灰褐色土層、2・3層が暗灰褐色土層、4～7層が暗褐色土層、8層が褐色土層である。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、1・6～13が壺形土器、5が甕形土器、2～4・14が椀ないしは高杯形土器であり、3は炉内から、1・2・4～7・9～14は覆土から出土している。覆土出土土器は、層位的にまとまりをみせる。3は、口縁部無段で、押捺列をめぐらす。91号竪穴2と似る。5は、古墳時代前期の土師器。

本竪穴の時期は、4期古～新段階と推定される。

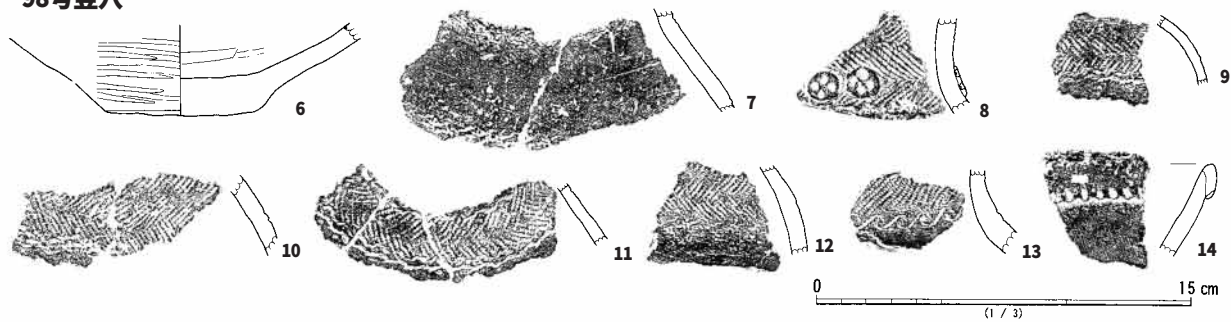
99号竪穴（第118図、図版24・74・84）

99号竪穴（住居跡）は、調査区N17—33区他に所在する。2号溝と重複し、本遺構に対し2号溝が新しい。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は5.63（主軸）×5.50（復原）m、床面積は25.06㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.46m、主軸方位はN—47°—Wである。主柱穴はP1～4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模1.06×0.86mを測る。竪穴堆積土は1～9層に分層され、1・6層が暗褐色土層、2層が黒褐色土層、3・7層が灰褐色土層、4・5層が暗灰褐色土層、8層がロームブロックを主体とする層、9層が焼土層であり、7層は、ローム粒、ロームブロック、焼土とともに、多量の炭化物を含む。炉内、10層は黒褐色土層、11層は焼土層である。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、焼土の堆積状況から廃棄後の焼却、被災の判断はできない。ただし、遺存遺物と想定されるものがほとんど認められない。本遺構は部分的にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

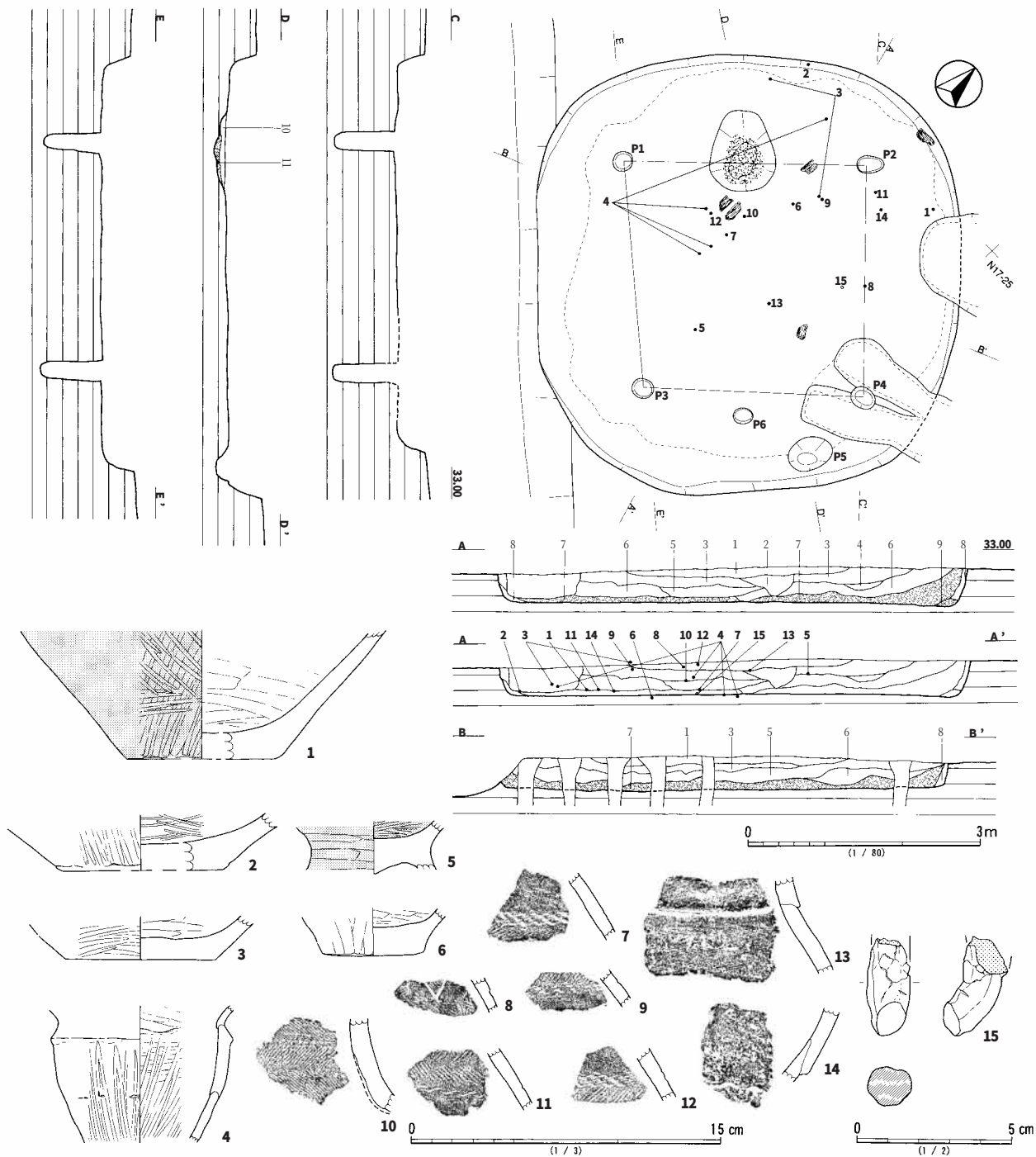
出土土器は、1・7～12が壺形土器、14が広口壺形土器、2～4・6・13が甕形土器、5が高杯形土器であり、4・6は床面から、1～3・5・7～14は覆土から出土している。土器以外では、土製勾玉尾部1点が床面から出土している。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

98号竖穴



99号竖穴



第118图 98・99号竖穴 遺構遺物

100号竪穴（第119図、図版25・74）

100号竪穴（住居跡）は、調査区M11-15区他に所在する。4号溝と重複し、遺存状態も悪い。竪穴の掘り込みは、東辺部のみで認められた。確認面からの深さは0.07mである。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形と推定され、全体規模は主軸推定値で約5.80m、東西方向は約5.55mを測る。主軸方位はN-9°-Wであろう。主柱穴はP1~4であり、建て替えは確認できない。P5は出入口施設位置にあるが不明。他のPit、土坑は、基本的に本竪穴にともなうものではない。炉は、平面規模0.69×0.56mを測る。

出土土器は、1の椀形土器のみである。1は、111号竪穴8と同一個体の可能性がある。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、詳細時期は不明。

101号竪穴（第119図）

101号竪穴（住居跡）は、調査区N12-03区他に所在する。近世以降の溝と重複し、遺存状態も悪い。竪穴の掘り込みは認められず、床硬化面も確認できなかった。炉および主柱穴から竪穴と判断した。全体規模は、主軸方向で4.34m程度、主軸方位はN-46°-Wと推定される。主柱穴はP1~4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.74×0.52mを測る。

図示可能な遺物は出土していない。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定しておくが、確証はない。

102号竪穴（第120図、図版25・74）

102号竪穴（住居跡）は、調査区M12-85区他に所在する。近世以降の溝と一部重複する。竪穴平面形態は、楕円形ないしは胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は4.35（主軸）×3.69m、床面積は12.79㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.31m、主軸方位はN-37°-Wである。主柱穴はP1~4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.49×0.46mを測る。竪穴堆積土は1~5層に分層され、1・2層が暗褐色土層、3・4層が黒褐色土層、5層が褐色土層であり、3層に焼土、4層に焼土と炭化物が多量に認められた。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、焼土の堆積状況から廃棄後の焼却、被災の判断はできない。

出土土器は、2・3が壺形土器、4・5が甕形土器、6が鉢形土器、7がミニチュア形土器であり、1は床面から、4は炉内から、2は覆土から出土している。7の出土状況は不明。

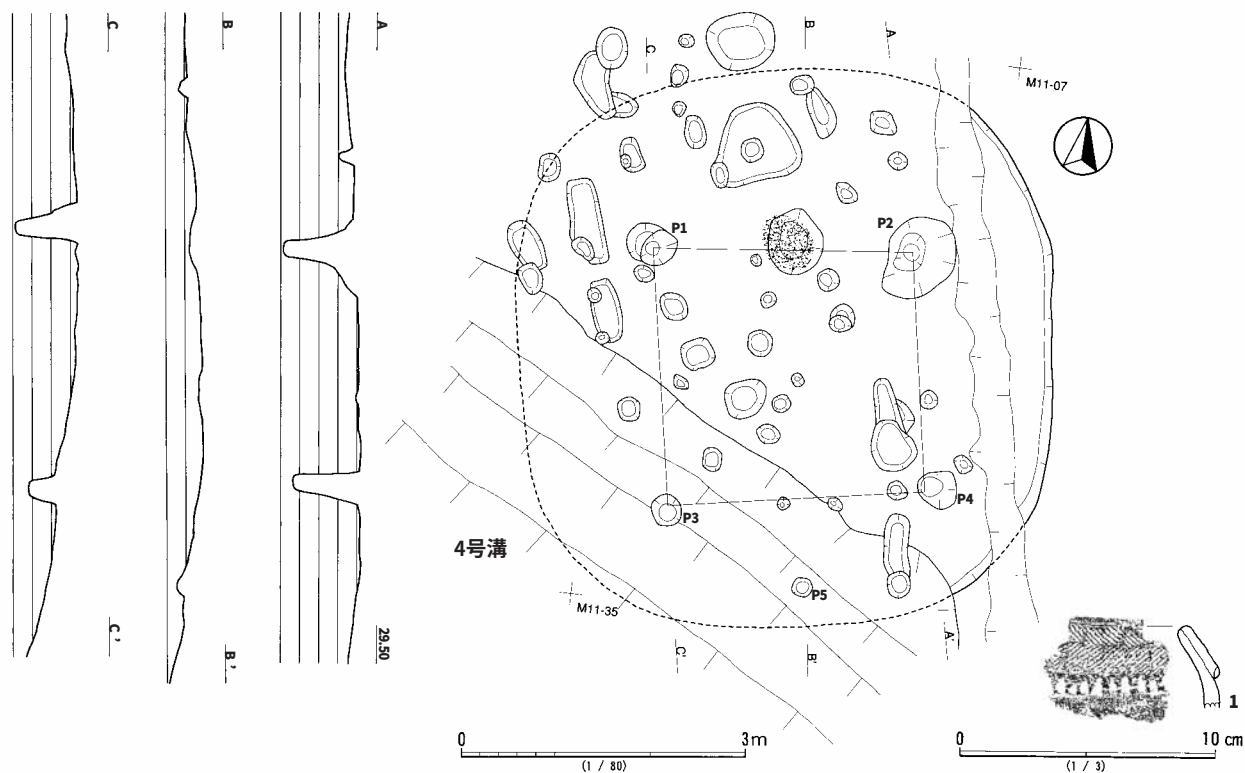
本竪穴の時期は、3~4期古段階と推定される。

103号竪穴（第120図、図版25・84・85）

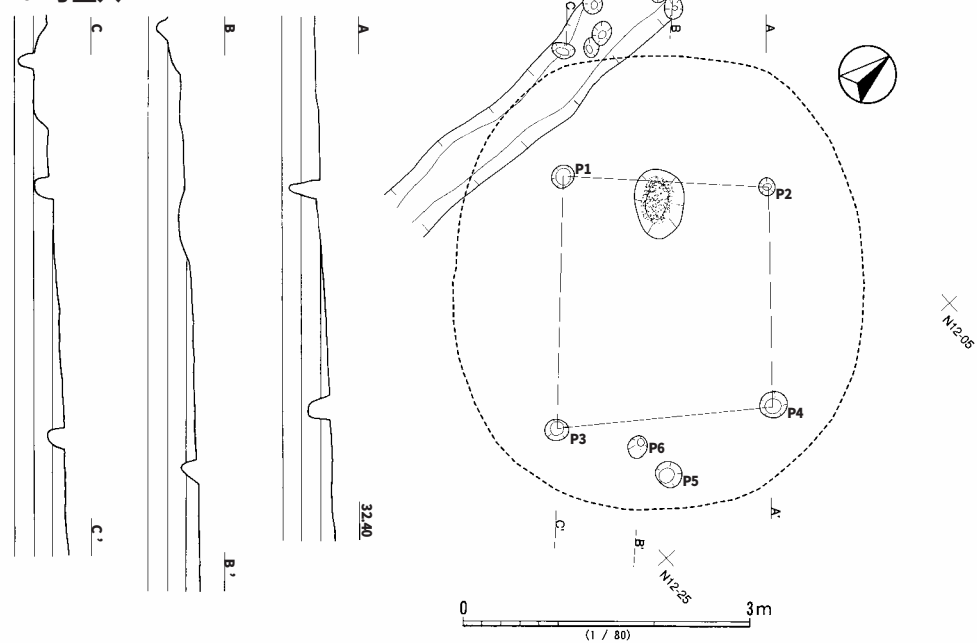
103号竪穴（住居跡）は、調査区L12-91区他に所在する。北側は、確認調査トレンチであり、部分的に床レベルまで掘りすぎている。竪穴平面形態は、楕円形ないしは隅丸長方形を呈する。緩斜面に位置し、北辺部は確認面からの掘り込みも浅い。全体規模は5.50（主軸）×4.69m、床面積は19.30㎡を測る。建て替えは確認できない。南側で確認面からの深さは0.56m、主軸方位はN-12°-Wである。炉とP2間を主軸と設定した場合の方位はN-20°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模1.04×0.59mを測る。竪穴堆積土は1~7層に分層され、1~6層が暗褐色土層、7層は掘りすぎの可能性がある。炉内、8層は黒褐色土層、9層は焼土層である。なお、南壁際床面上から、粘土塊が出土している。

出土土器は、1・2が甕形土器であり、ともに覆土から出土している。土器以外では、砥石1点、軽

100号竪穴



101号竪穴

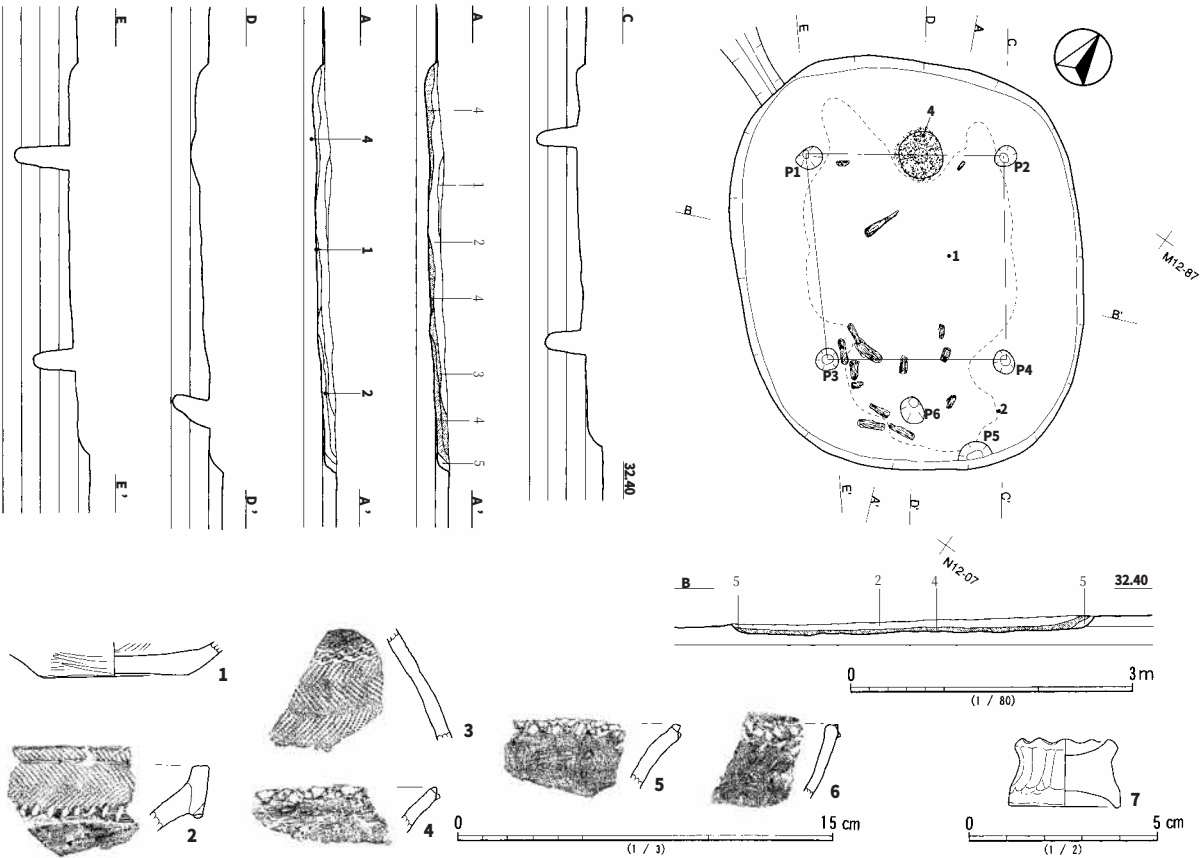


第119図 100・101号竪穴 遺構遺物

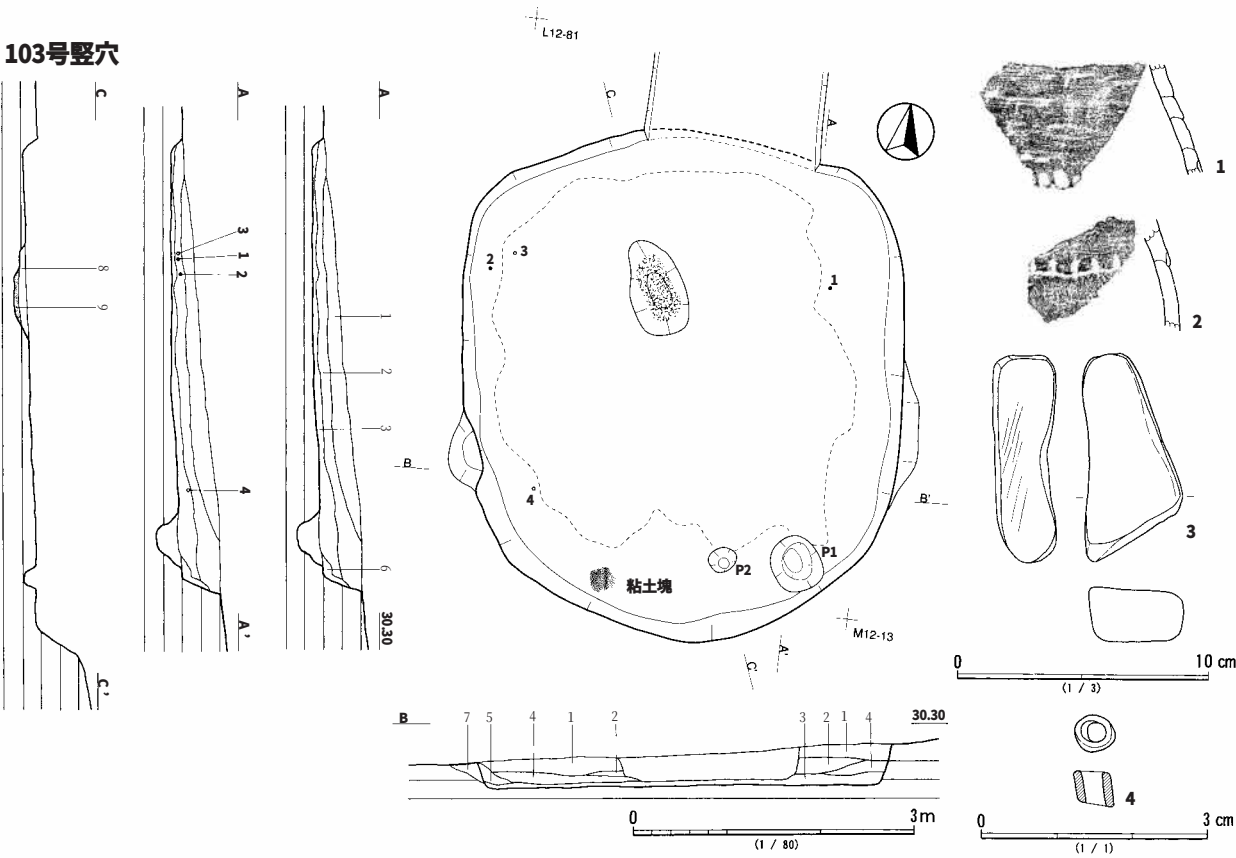
石1点（不実測）、ガラス小玉1点が出土している。軽石は、研磨痕等の使用痕跡は認められなかった。ガラス小玉は紺色系で、側面に押捺によると思われる平坦面が認められる。研磨痕は認められない。砥石、ガラス小玉は覆土から出土している。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、詳細時期は不明。

102号竖穴



103号竖穴



第120图 102・103号竖穴 遺構遺物

104号竪穴（第121図、図版25）

104号竪穴（住居跡）は、調査区M13-31区他に所在する。15号溝と重複する。また、旧畑地境にあたり、ゴボウ耕作溝など攪乱も多く、畑地造成により北側は破壊されている。竪穴平面形態は、南辺部をみるかぎりでは胴張り隅丸方形と推定される。主柱穴および炉位置から復原される全体規模は、5.9（主軸）×5.50m程度を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは、南壁付近で0.27m、主軸方位はN-43°-Wである。主柱穴はP1~4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、被熱ロームから位置が特定できるにすぎない。竪穴堆積土は1~5層に分層され、1~3層が暗褐色土層、4層が焼土層、5層が褐色土層である。本竪穴は、火災に遭ったことが推定されるが、焼土の分布等は不明確。

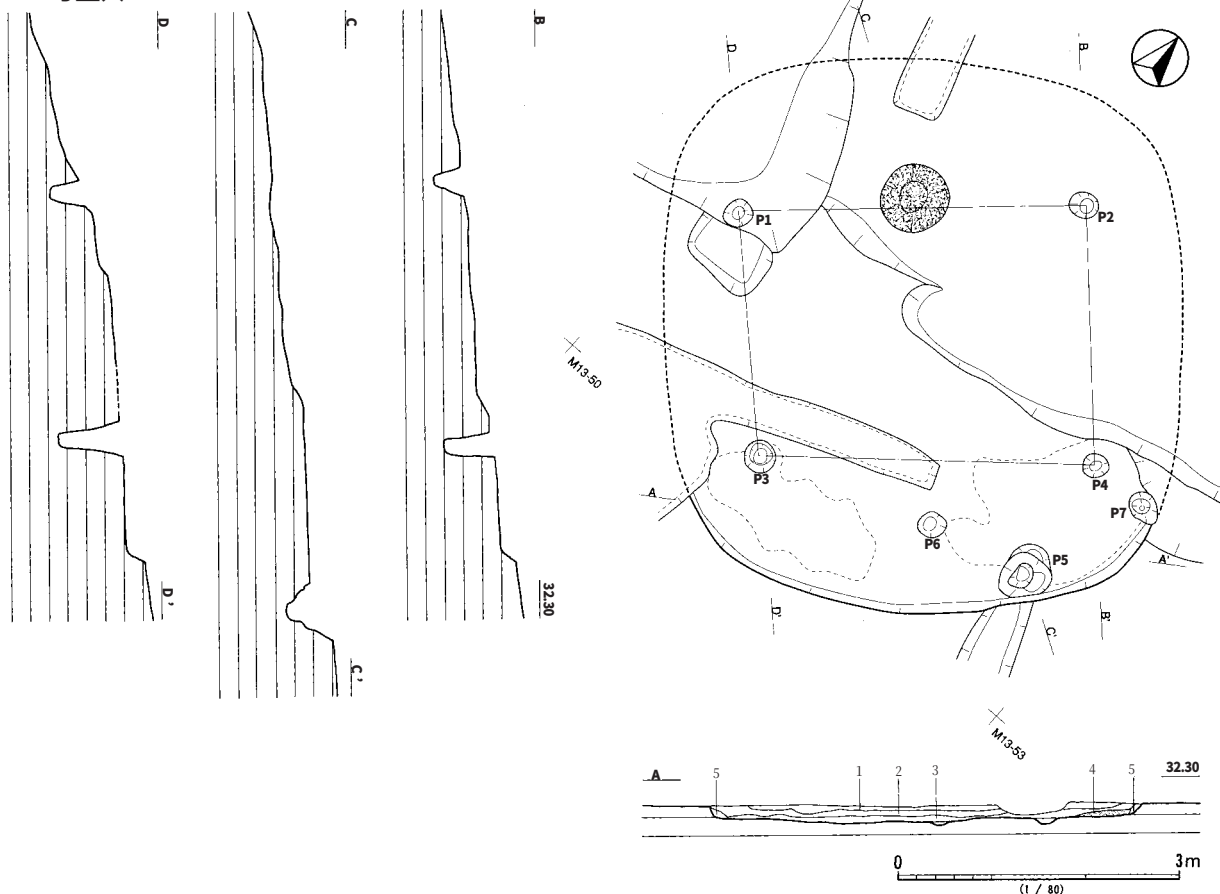
図示可能な遺物は出土していない。

本竪穴の時期は、弥生時代後期と推定されるが、詳細時期は不明。

105号竪穴（第122図、図版25・62・74・81・82・85）

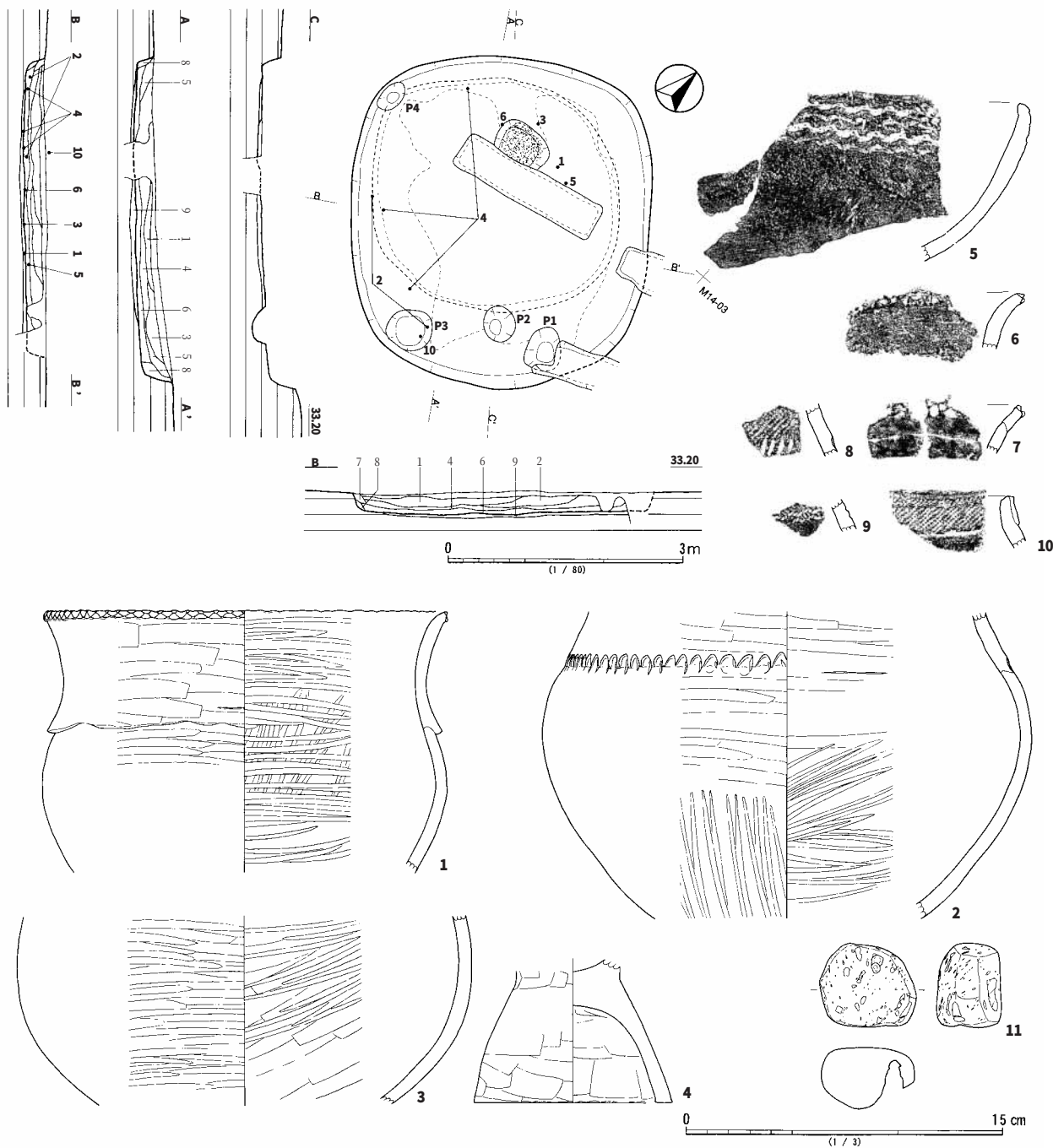
105号竪穴（住居跡）は、調査区M14-01区他に所在する。攪乱坑により、竪穴中央、東辺部が破壊されている。竪穴平面形態は、胴張り隅丸方形を呈し、全体規模は4.19（主軸）×3.77m、床面積は12.12m²を測る。確認面からの深さは0.47m、主軸方位はN-35°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P2は出入口施設、P1は貯蔵穴である。P3も貯蔵穴の可能性がある。炉は、現存部幅で0.70mを測る。竪穴中央付近は、掘形、貼り床構造をもち、中央やや西側2.95×3.12mの範囲が皿状に凹

104号竪穴



第121図 104号竪穴 遺構

105号竪穴



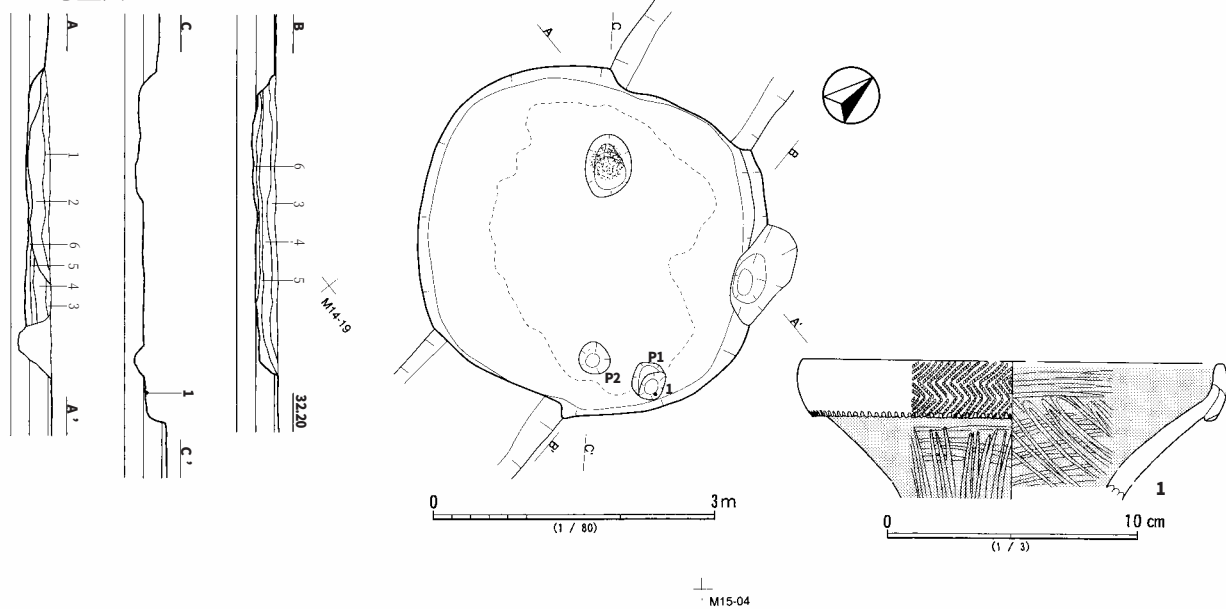
第122図 105号竪穴 遺構遺物

む。建て替えの可能性も否定できないが、確証はない。竪穴堆積土は1～9層に分層され、1～3層が灰褐色土層、4・6層が暗褐色土層、5層が黒褐色土層、7層がロームブロック、8層が褐色土層である。9層貼り床部分は、暗褐色土にロームブロックが混合する。

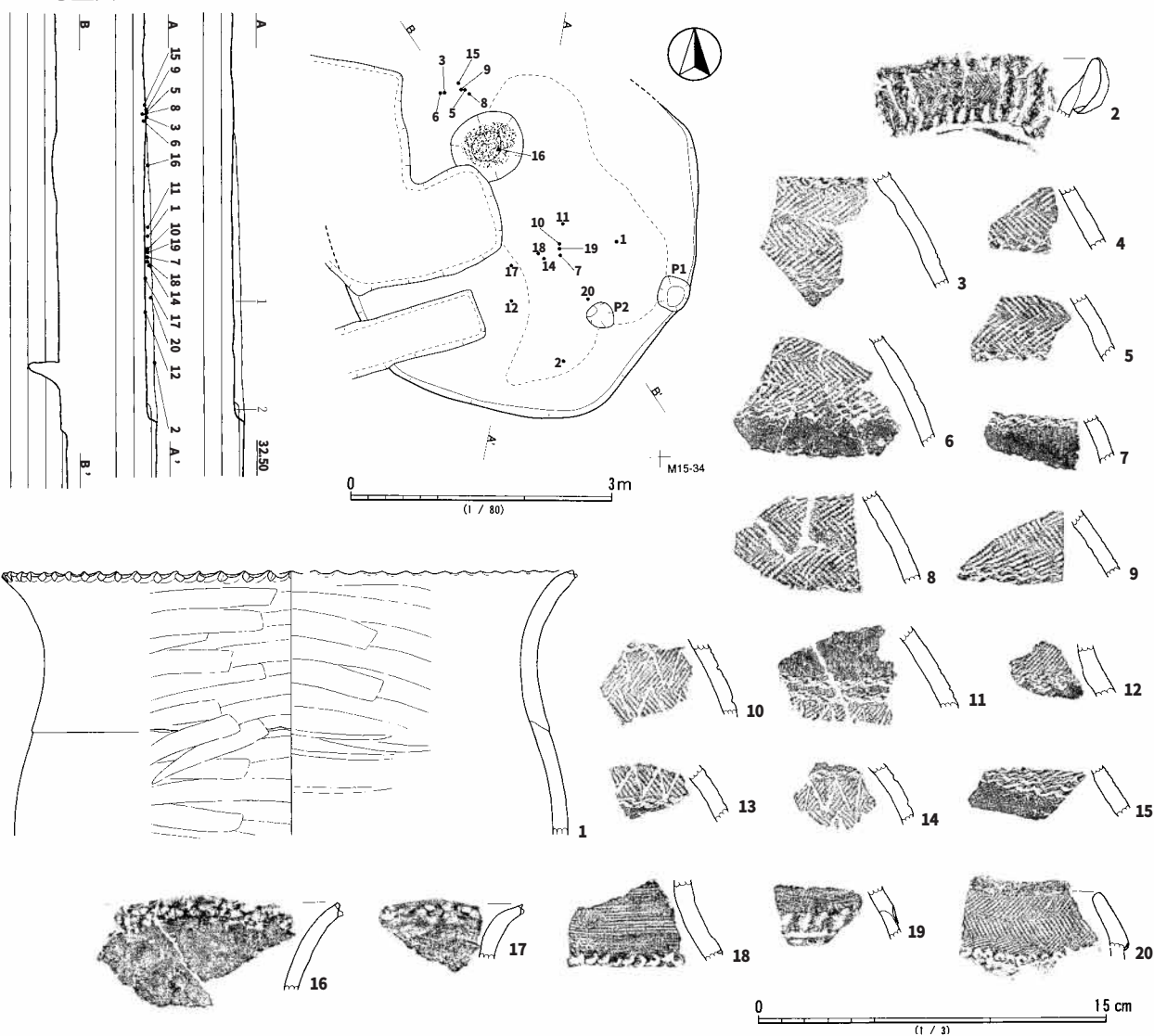
出土土器は、1～3・6・7が甕形土器、4が台付甕形土器、8が広口壺形土器、9が壺形土器、5・10が椀ないしは高杯形土器であり、3～6は床面から、1は貼り床下から、2・10は覆土から出土している。土器以外では、軽石1点が出土している。軽石は、各面とも平滑であるが、使用痕は特定できない。孔部は意図的な穿孔はない。出土状況は不明。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

106号竖穴



107号竖穴



第123图 106・107号竖穴 遺構遺物

106号竪穴（第123図、図版25・74・76）

106号竪穴（住居跡）は、調査区L14-99区他に所在する。8号溝と重複し、本遺構に対し8号溝が新しい。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は3.70（主軸）×3.58m、床面積は9.49㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.25m、主軸方位はN-45°-Wである。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模0.67×0.48mを測る。堆積土は1～6層に分層され、1・2層の灰色土層、灰褐色土層は8号溝に対応する。3・4層は灰褐色土層、5層は暗灰褐色土層、6層は黒褐色土層である。

図示可能な遺物は、1の壺形土器のみであり、P1内から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期古段階と推定される。

107号竪穴（第123図、図版26・74・78・79）

107号竪穴（住居跡）は、調査区M15-13区他に所在する。確認面からの竪穴の掘り込みは浅く、北側は範囲を特定することができなかった。また、西側は攪乱により破壊されている。竪穴平面形態は、現状で多角形を呈し、推定全体規模は、主軸方向で約4.2mを測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.07m、主軸方位はN-33°-W程度と推定される。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模で0.76×0.85mを測る。竪穴堆積土は、1層が暗褐色土層、2層が褐色土層である。

出土土器は、2～15が壺形土器、1・16～20が甕形土器であり、1・3・5～12・14～19は床面から、2・20は覆土から出土している。3～9、10・11・13・14は同一個体の可能性がある。10・11・13・14は、帯縄文にヘラ先による鋸歯文を重ねるものであり、部分的な磨り消しは認められない。

本竪穴の時期は、4期古～新段階と推定される。

108号竪穴（第124図、図版26・74）

108号竪穴（住居跡）は、調査区M17-70区他に所在する。北東側半分は山田橋表通遺跡042号遺構として調査されている。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は6.21（主軸）×6.06m、床面積は29.86㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.46m、主軸方位はN-45°-Wである。支柱穴はP1～3であるが、北隅は検出されていない。P5は出入口施設、P4は貯蔵穴である。P6・7についても貯蔵穴の可能性がある。炉は、攪乱坑により一部破壊され、現存部で0.95mを測る。土層は1～16層に分層され、1層が表土層、2・4層が黒褐色土層、3・5～11・13～16層が暗褐色土層、12層が褐色土層である。本遺構は部分的にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

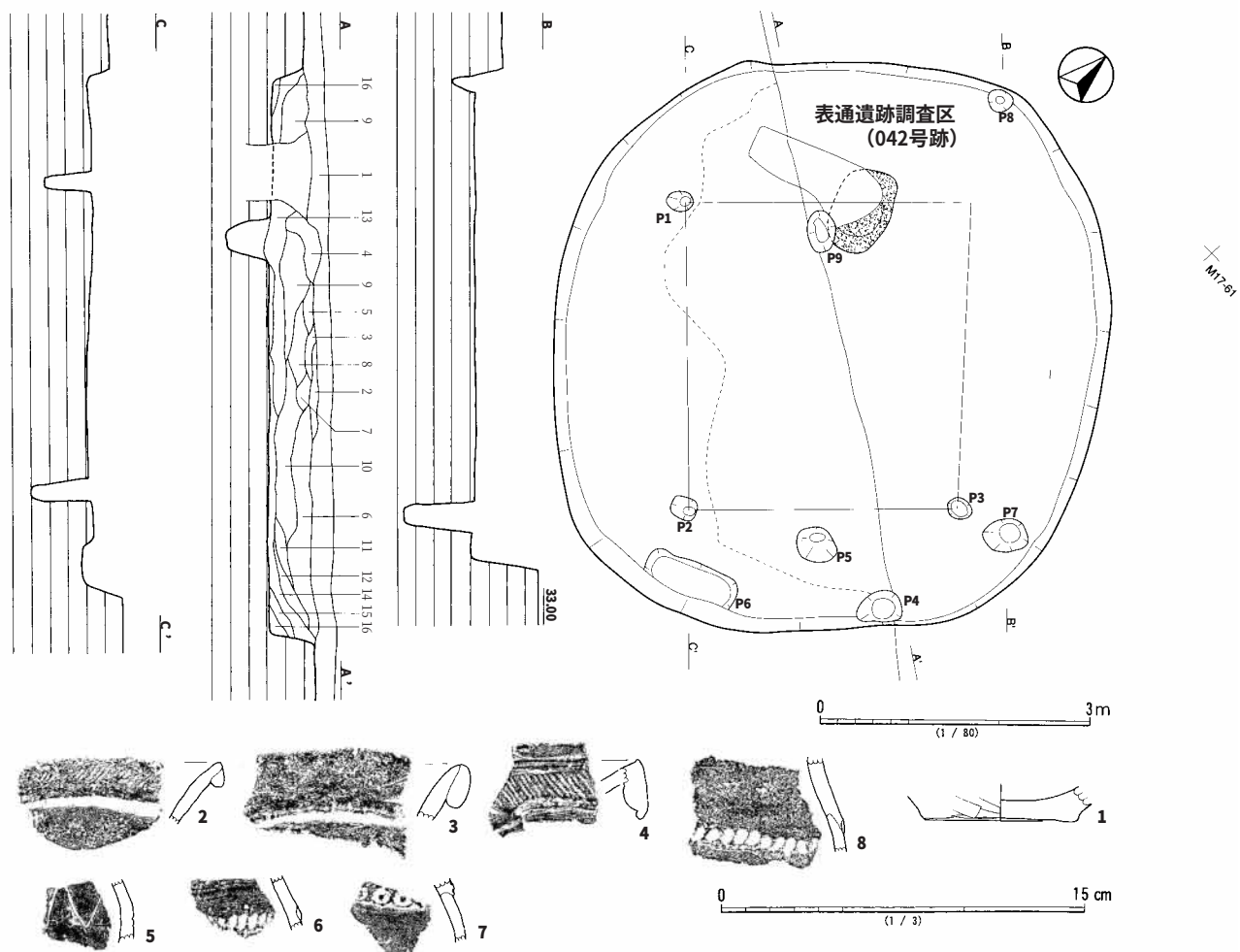
出土土器は、2～5が壺形土器、7が広口壺形土器、1・6・8が甕形土器であり、2は床面から、1・5・8は覆土から出土している。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

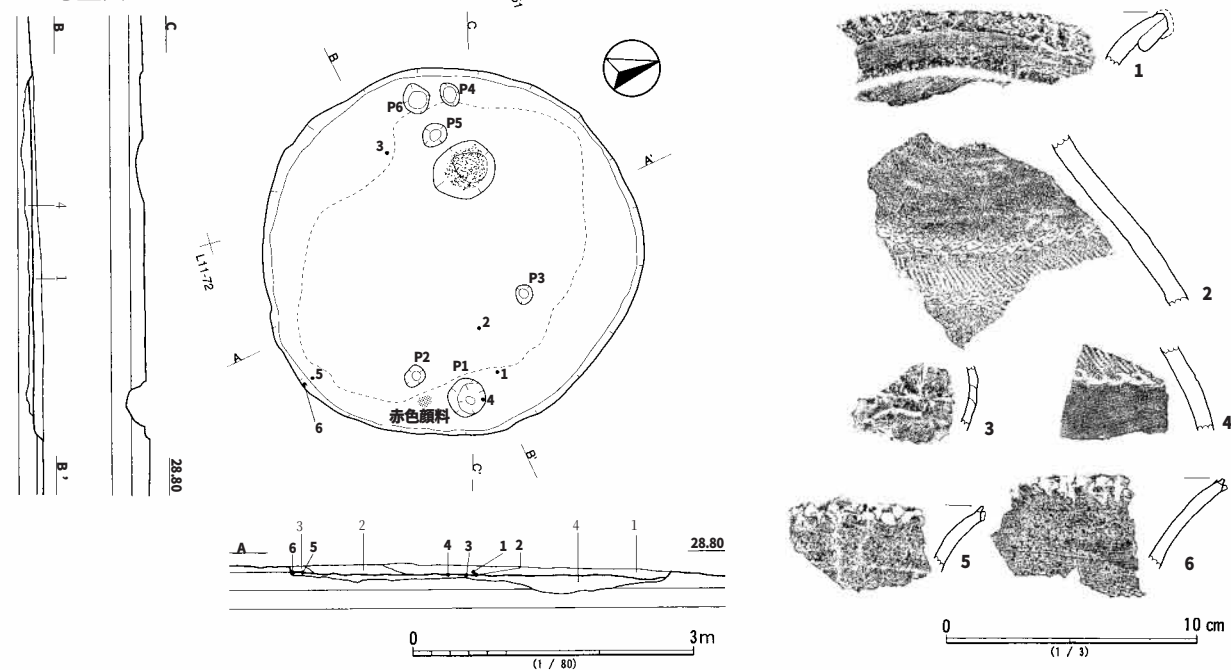
109号竪穴（第124図、図版26・74）

109号竪穴（住居跡）は、調査区L11-52区他に所在する。谷部に位置し、竪穴の掘り込みは、床面レベルでソフトロームに達する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は3.95（主軸）×4.03m、床面積は11.58㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.12m、主軸方位はN-59°-Wである。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。炉は、平面規模0.63×0.63mを測る。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1・2・4層が暗褐色土層、3層が褐色土層

108号竖穴



109号竖穴



第124図 108・109号竖穴 遺構遺物

である。なお、P1・2間床面上に、赤色顔料の分布が認められた。

出土土器は、1・2・4が壺形土器、5・6が甕形土器、3が椀形土器であり、2～6は床面から、1は覆土から出土している。1は、形状、施文原体とも110号竪穴3と似る。ただし、別個体である。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

110号竪穴（第125図、図版26・74・85）

110号竪穴（住居跡）は、調査区L11－57区他に所在する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は5.18（主軸）×5.37m、床面積は19.15m²を測る。確認面からの深さは0.48m、主軸方位はN－25°－Wである。主柱穴はP1～4であり、P5・6は貯蔵穴、P7は出入口施設である。P5は、床硬化面下より検出した。建て替えの可能性もあるが、主柱穴等の重複は認められなかった。炉は、平面規模1.07×0.67mを測る。竪穴堆積土は1～7層に分層され、1・3～5・7層が暗褐色土層、2・6層が黒褐色土層、炉内、8層が黒褐色土層、9層が焼土層である。

出土土器は、1・3～9が壺形土器、2・10～13が甕形土器、15・16ミニチュア形土器、14が椀ないしは高杯形土器であり、3・5・13・14・16は床面から、2は炉内から、1・7・8・10・12は覆土から出土している。3は、形状、施文原体とも109号竪穴1と似るが別個体である。17は砂岩製の砥石と推定されるが、線状痕は明瞭ではない。18の軽石は、磨石としての用途が想定され、1面が平滑化している。18は床面から出土している。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

111号竪穴（第126図、図版26・27・62・74・82）

111号竪穴（住居跡）は、調査区L11－28区他に所在する。竪穴平面形態は、円形を呈し、全体規模は3.85（主軸）×3.91m、床面積は10.92m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.41m、主軸方位はN－36°－Wである。P1～4は位置的に主柱穴と考えられるが、いずれも浅い。P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.60×0.77mを測る。竪穴堆積土は1～4層に分層され、1・3層が黒褐色土層、2層が暗褐色土層、4層が褐色土層である。P6脇床面から粘土塊が検出されている。

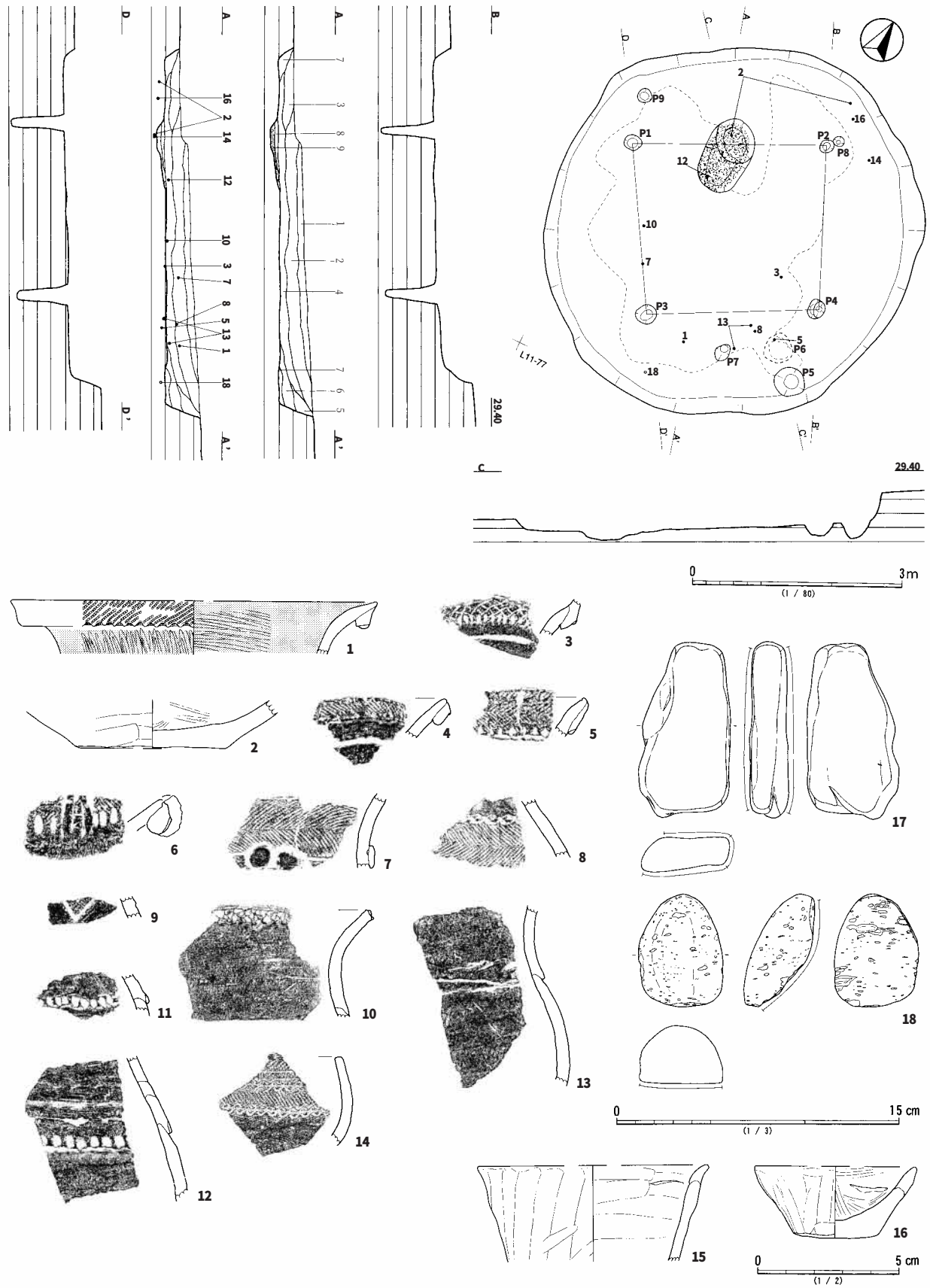
出土土器は、1～3・11～16が壺形土器、4・7・17・18が甕形土器、8・9が椀形土器、10・19が高杯形土器、20が椀ないしは高杯形土器であり、3・7・10・14・19は床面から、1・2・4・5・8・9・17は覆土から出土している。11・12は同一個体の可能性がある。また、8は、100号竪穴1と同一個体の可能性がある。土器以外では、軽石2点（不実測）が出土している。ともに、研磨面、使用痕は認められない。

本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

112号竪穴（第127・128図、図版27・63・74）

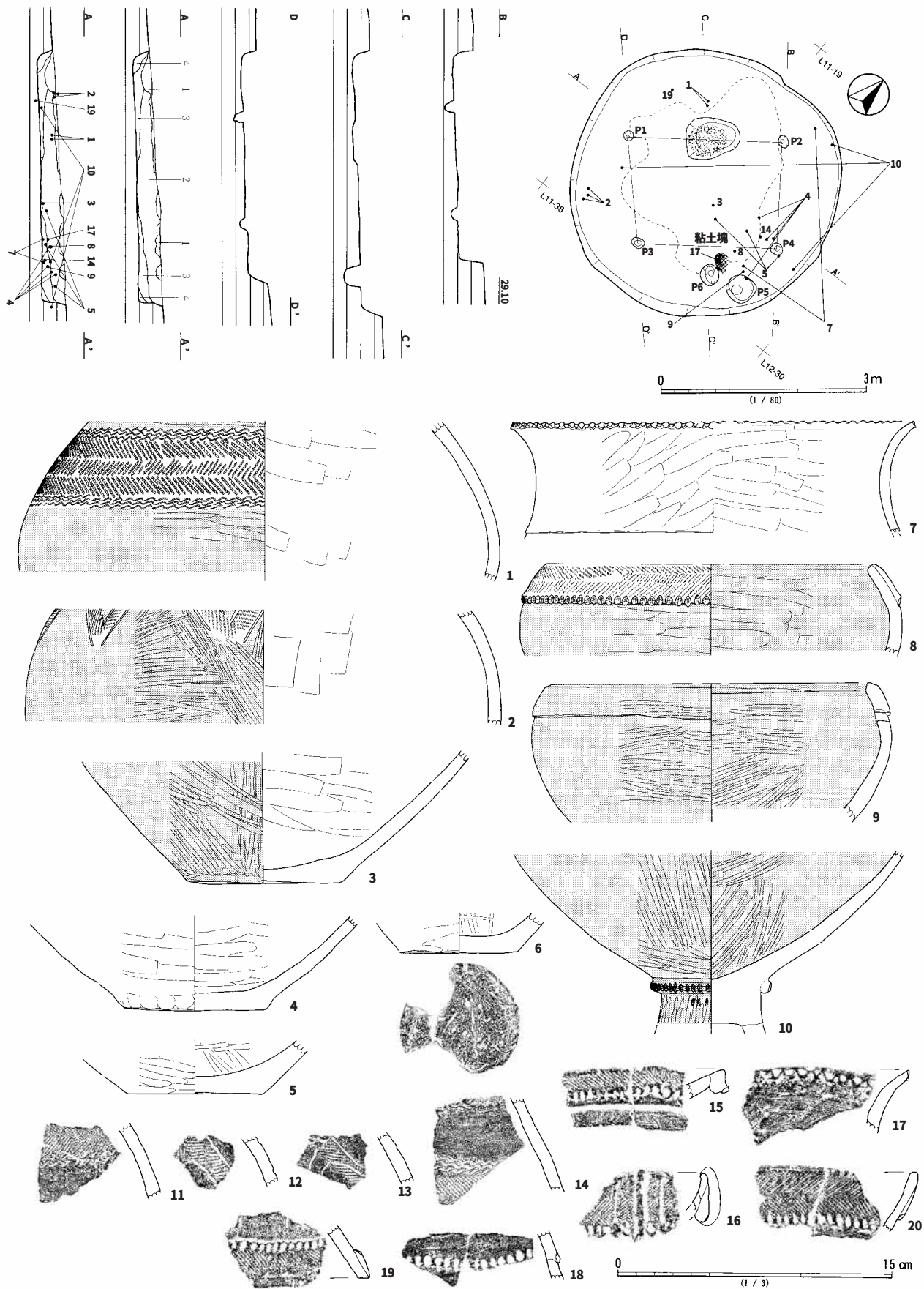
112号竪穴（住居跡）は、調査区L14－51区他に所在する。攪乱が激しく、また、緩斜面地にあたり、西側竪穴範囲は検出できなかった。竪穴平面形態は、胴張り隅丸長方形を呈し、全体規模は主軸方向が6.53m、主軸直交方向は5.8m程度と推定される。床面積は約31.10m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.15m、主軸方位はN－40°－Wである。主柱穴はP1～4であり、P6は出入口施設、P5は貯蔵穴であり、凸堤が圍繞する。炉は、平面規模0.80×0.85mを測る。堆積土は1～4層に分層され、1・2層が灰褐色土層、3・4層が暗褐色土層である。

110号竖穴



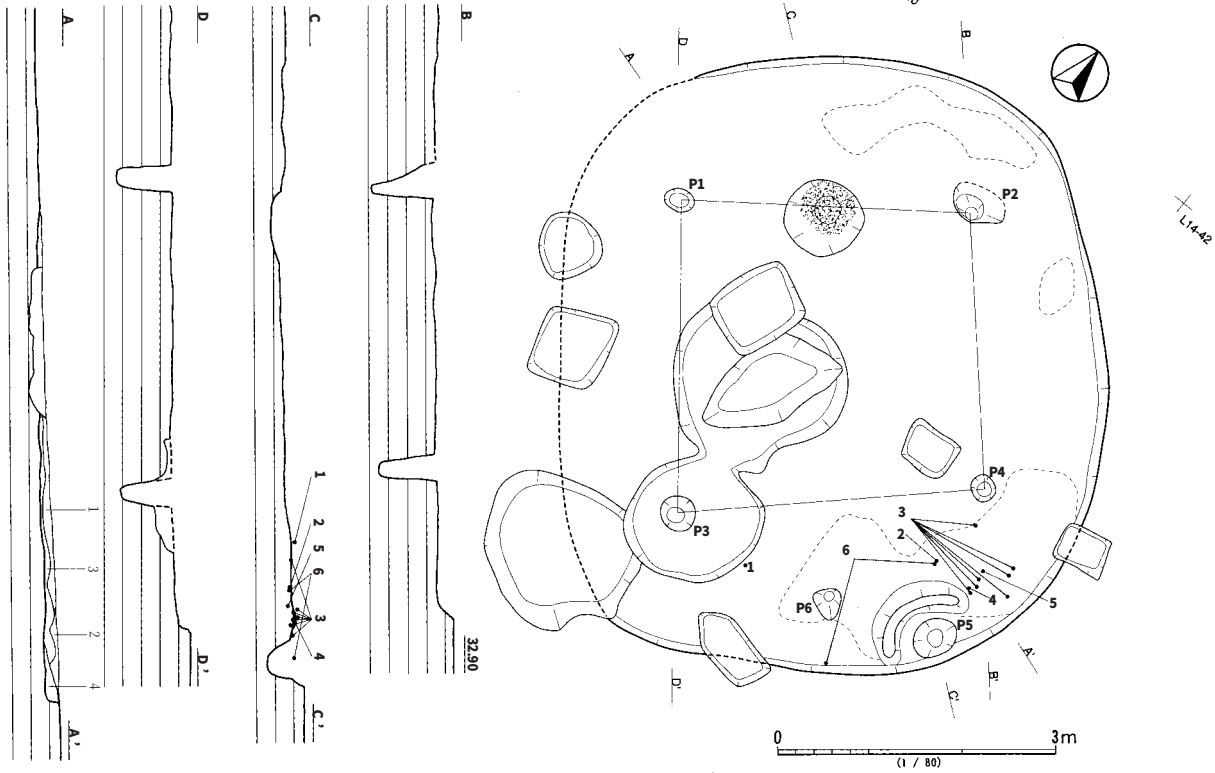
第125図 110号竖穴 遺構遺物

111号竖穴

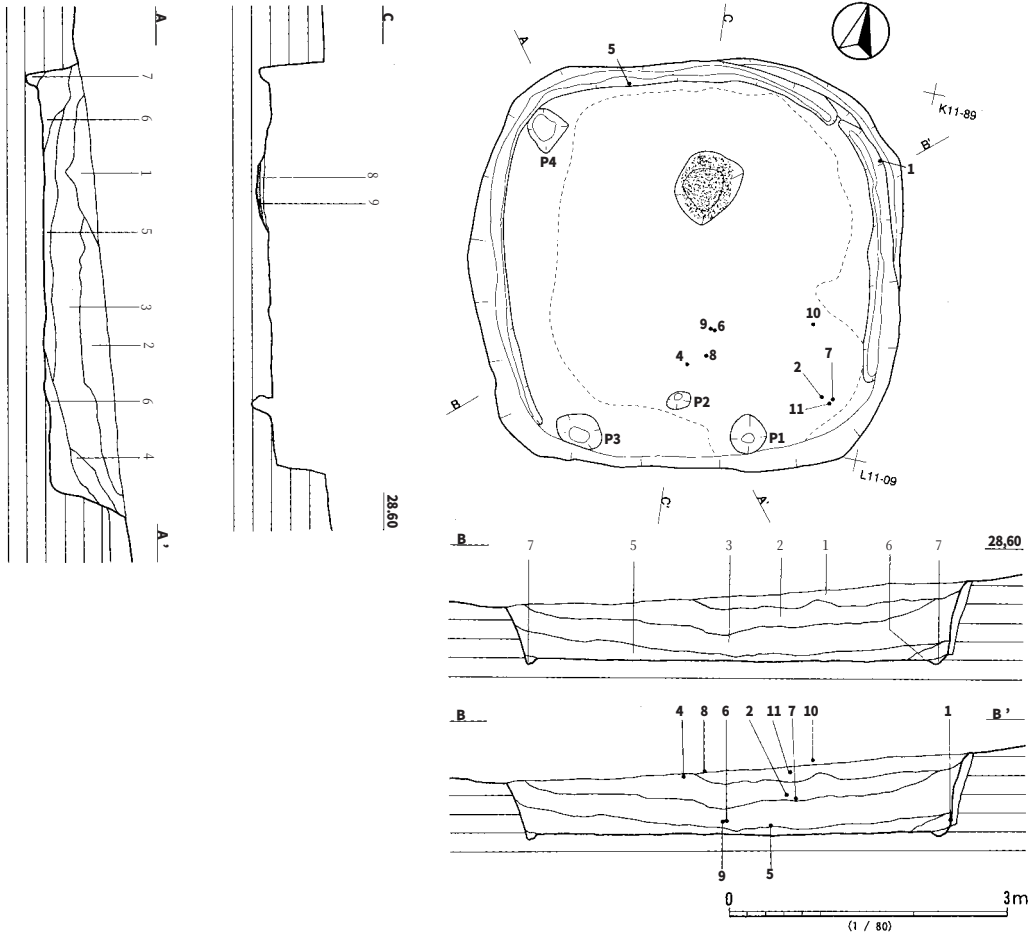


第126图 111号竖穴 遺構遺物

112号竖穴

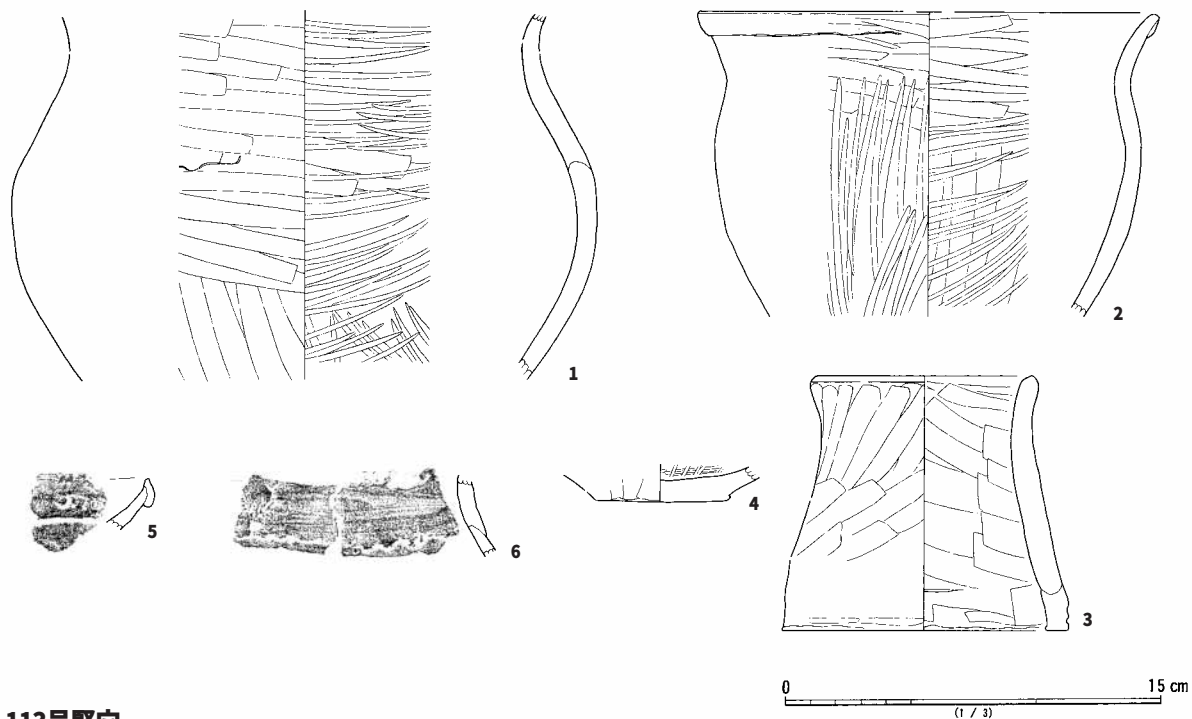


113号竖穴

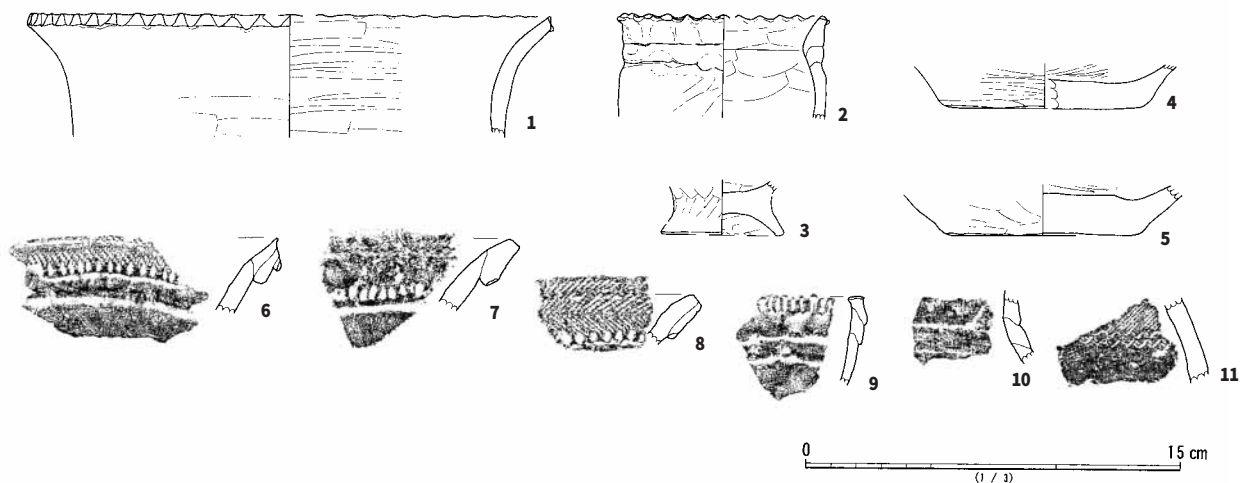


第127图 112・113号竖穴 遺構

112号竪穴



113号竪穴



第128図 112・113号竪穴 遺物

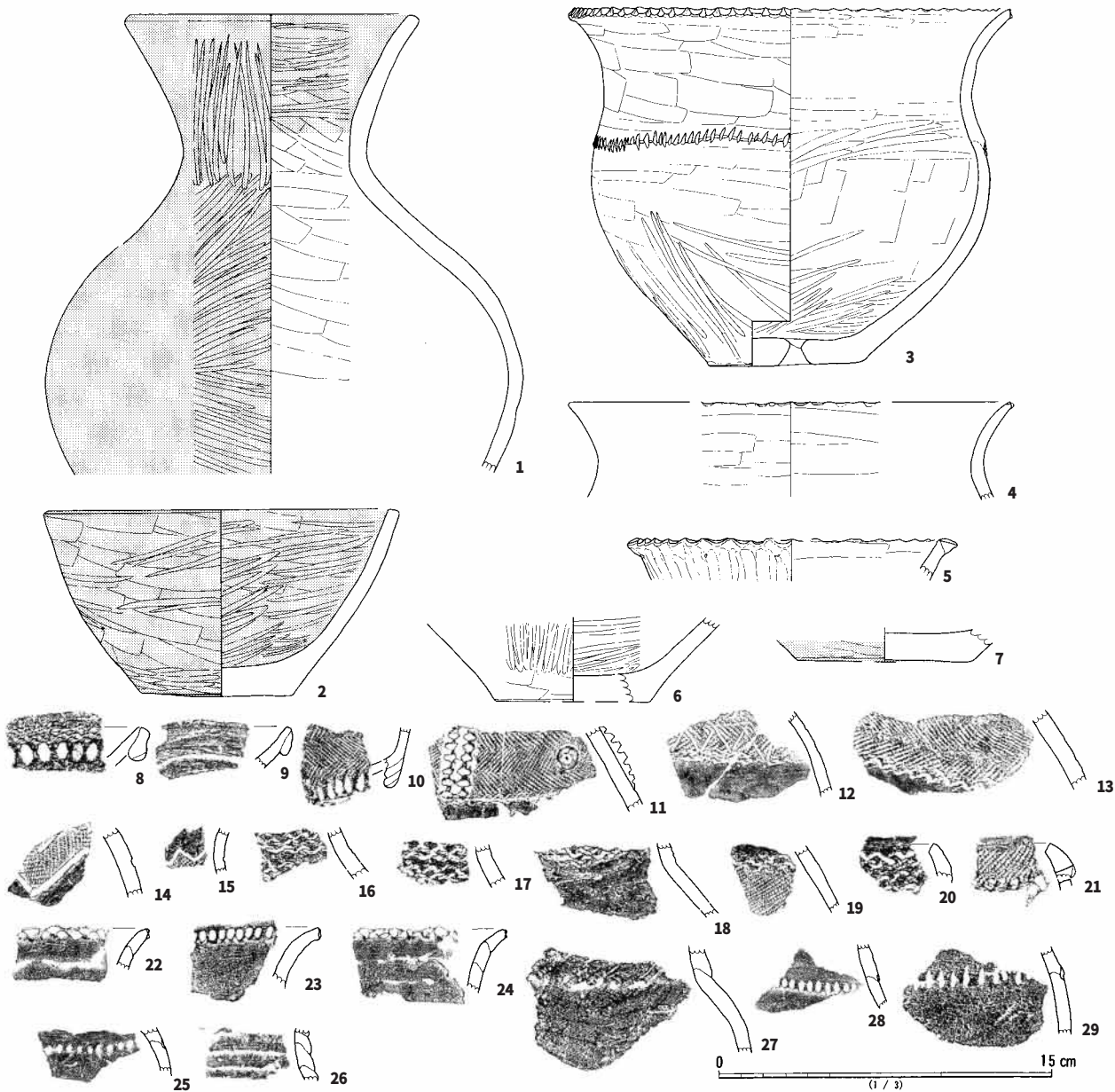
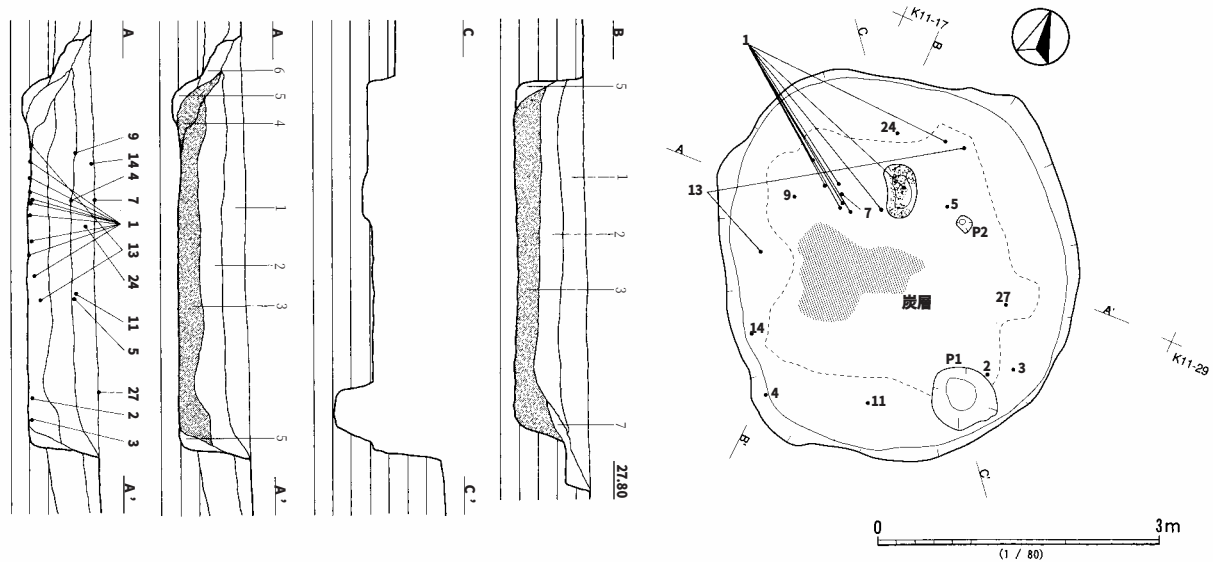
出土土器は、1・6が甕形土器、2が広口壺形土器、3が支脚形（炉器台）土器、5が小形の壺形土器であり、すべて床面から出土している。

本竪穴の時期は、4期古～新段階と推定される。

113号竪穴（第127・128図、図版27・74・76）

113号竪穴（住居跡）は、調査区K11-87区他に所在する。谷部に位置し、竪穴の掘り込みは、床面レベルでソフトロームに達する。竪穴平面形態は、隅丸長方形を呈し、全体規模は4.33（主軸）×4.51m、床面積は15.01m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは最深部で0.89mに達する。主軸方位はN-12°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。P3も貯蔵穴であろうか。炉は、平面規模0.77×0.62mを測る。南辺部をのぞき、周溝が圍繞する。竪穴堆積土は1～6層に分層され、1・6層が黒褐色土層、2・4・5層が暗褐色土層、3層が褐色

114号竖穴



第129図 114号竖穴 遺構遺物

土層、炉内は、7層が灰褐色土層、8層が焼土層である。

竪穴の遺存状況は良好であるが、遺物の出土はきわめて限られている。1・10が甕形土器、2が小形甕形土器、5～8・11が壺形土器、9が椀ないしは高杯形土器である。すべて覆土から出土しているが、層位的には2分され、1・5・6・9は最下層から出土している。土器以外では、軽石1点（不実測）が出土している。研磨面等は認められない。出土状況は不明。

本竪穴の時期は、3～4期と推定される。

114号竪穴（第129図、図版27・63・74・77・78・79・81）

114号竪穴（住居跡）は、調査区K11-27区他に所在する。谷部に位置し、竪穴の掘り込みは、床面レベルでソフトロームに達する。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は4.24（主軸）×3.74m、床面積は11.35㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.78m、主軸方位はN-34°-Wである。主柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴である。炉は、平面規模0.56×0.32mを測る。竪穴堆積土は1～7層に分層され、1・4・6層が暗褐色土層、2・3・7層が褐色土層、5層が黒褐色土層であり、3・4層に多量の焼土が認められた。竪穴外、8層は暗褐色土層、9層は黒褐色土層、10層はⅢ層、ソフトローム層である。本竪穴は、火災に遭ったことが想定され、竪穴中央床面には炭層が認められた。

出土土器は、1・7～14・16～19が壺形土器、15が小形壺形土器、4・5・22～29が甕形土器、3が甕形土器（転用甕）、2・6が椀形土器、20・21が椀ないしは高杯形土器であり、1～3・13は床面から、4・5・7・9・11・14・24・27は覆土上層から出土している。16・17、22・24は同一個体の可能性がある。P1脇床面から出土した2・3は、ほぼ完形の土器であり、遺存遺物と推定される。

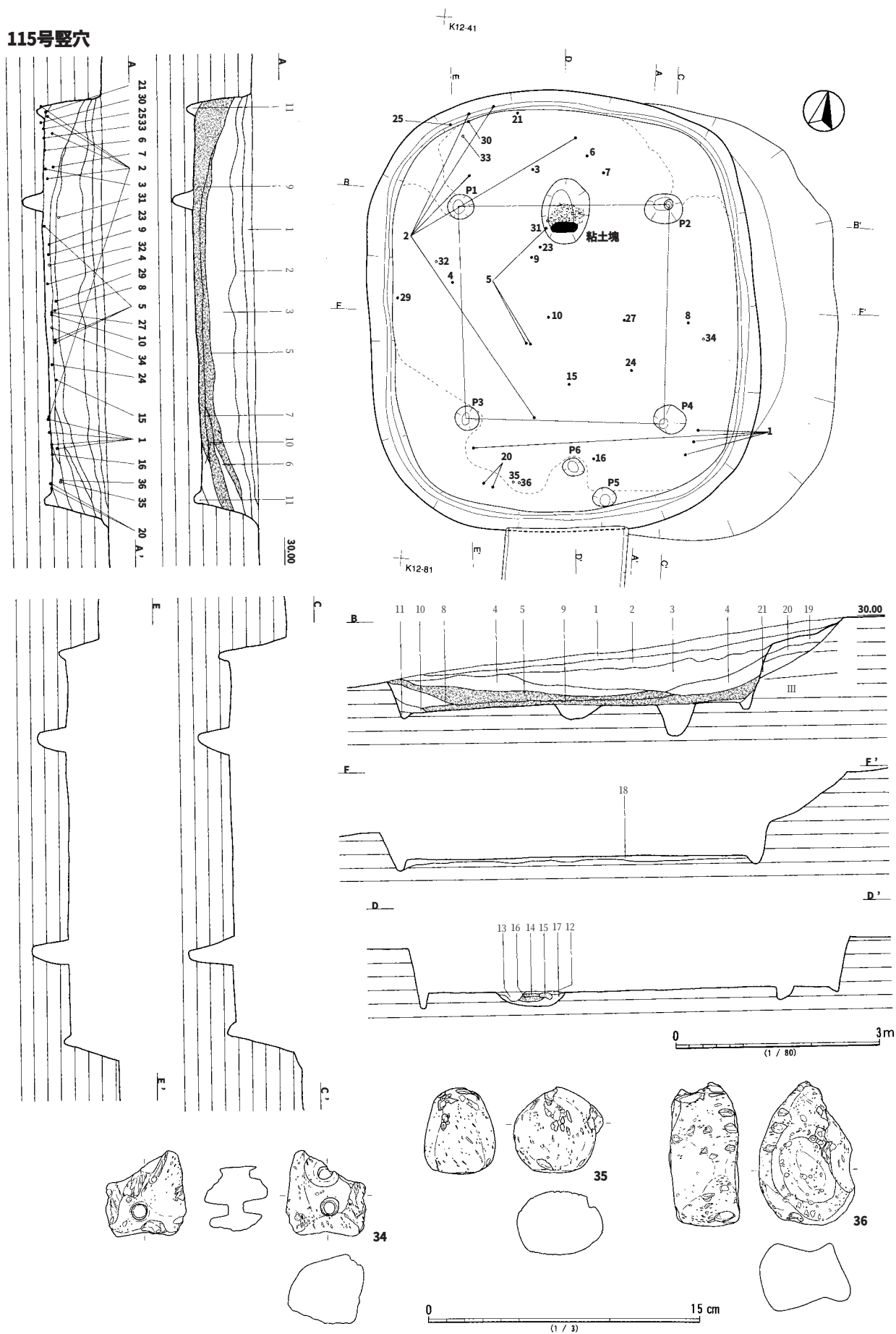
本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

115号竪穴（第130・131図、図版28・63・74・75・77・80・82・84・85）

115号竪穴（住居跡）は、調査区K12-51区他に所在する。谷部に位置し、Ⅱb層（新期テフラ）を確認面とする。竪穴の掘り込みは、東側2/3のみソフトロームに達している。竪穴平面形態は、隅丸長方形を呈し、全体規模は6.52（主軸）×5.67m、床面積は28.91㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは最深部で1.32m、主軸方位はN-5°-Wである。主柱穴はP1～4であり、P6は出入口施設、P5は貯蔵穴であろうか。炉は、平面規模0.95×0.68mを測り、南側に粘土塊をおく。周溝は全周し、貼り床構造をもつ。竪穴堆積土は1～11層に分層され、1・5・10層が黒褐色土層、2・7・9層が暗褐色土層、3・4・6・8層が褐色土層、11層がロームブロックを主体とする層であり、5・7・9層に多量の焼土、炭化物が認められた。18層は大小ロームブロックを主体とする褐色土層であり、貼り床部に相当する。炉内、12・17層は黒灰色土層、14・16層は焼土層、15層は黄白色粘土、竪穴外、19層はⅡb層、20層はⅡc層、21層はローム漸移層に相当する。本竪穴は火災に遭っていると推定されるが、壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況からみて、失火、放火などの被災によるものではなく、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。

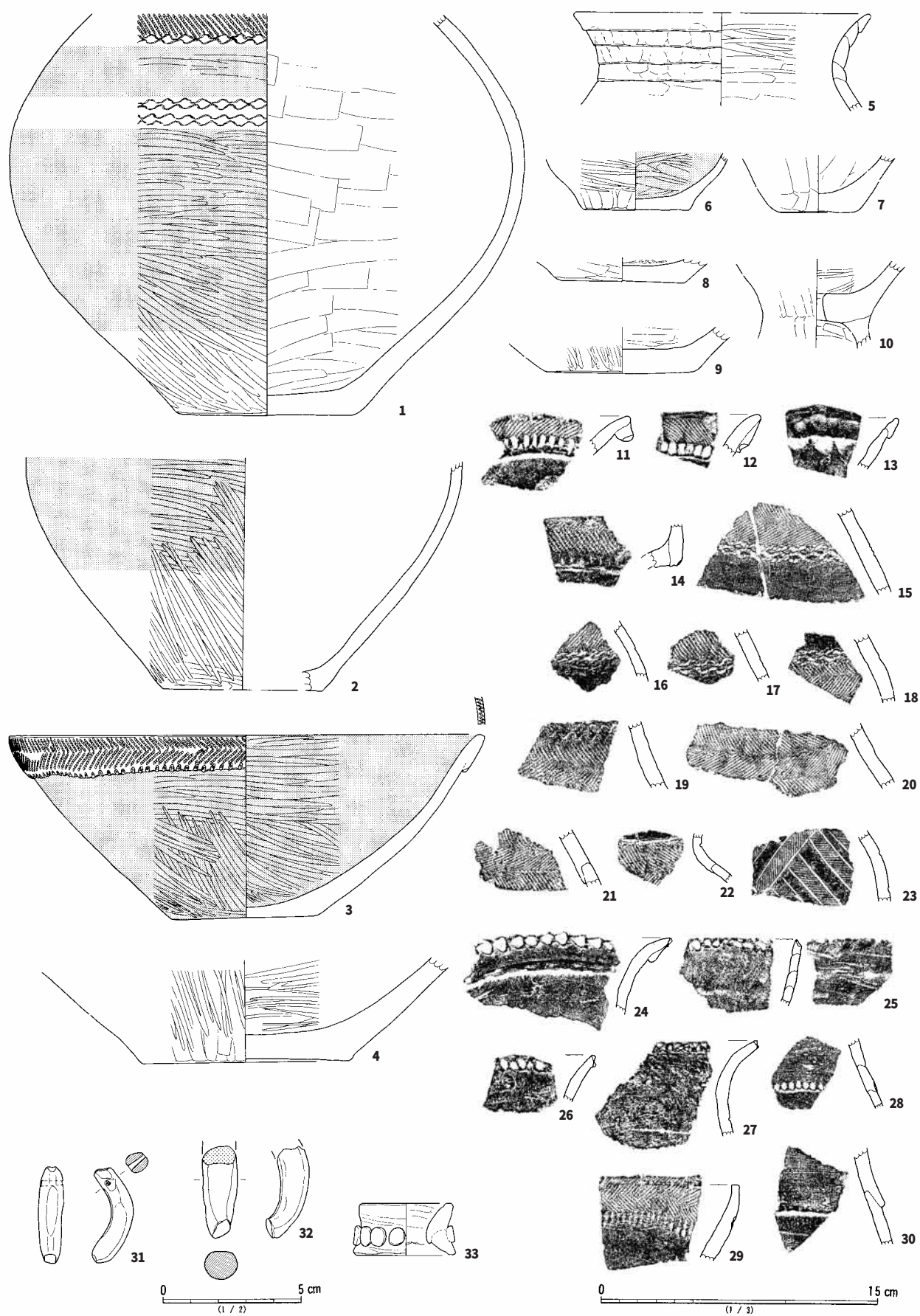
出土土器は、1・2・9・11・12・14～23が壺形土器、4・5・7・8・24・26～28・30が甕形土器、3が椀形土器、10が高杯形土器、25が鉢形土器、29が椀ないしは高杯形土器であり、1～4・6・16・20・25・30は床面から、5・7～10・14・15・21・23・24・27～29は覆土から出土している。ただし、層位的にはほぼ同一であり、焼土層内にまとまる。20・21は同一個体と推定される。14は、116号竪

115号竖穴



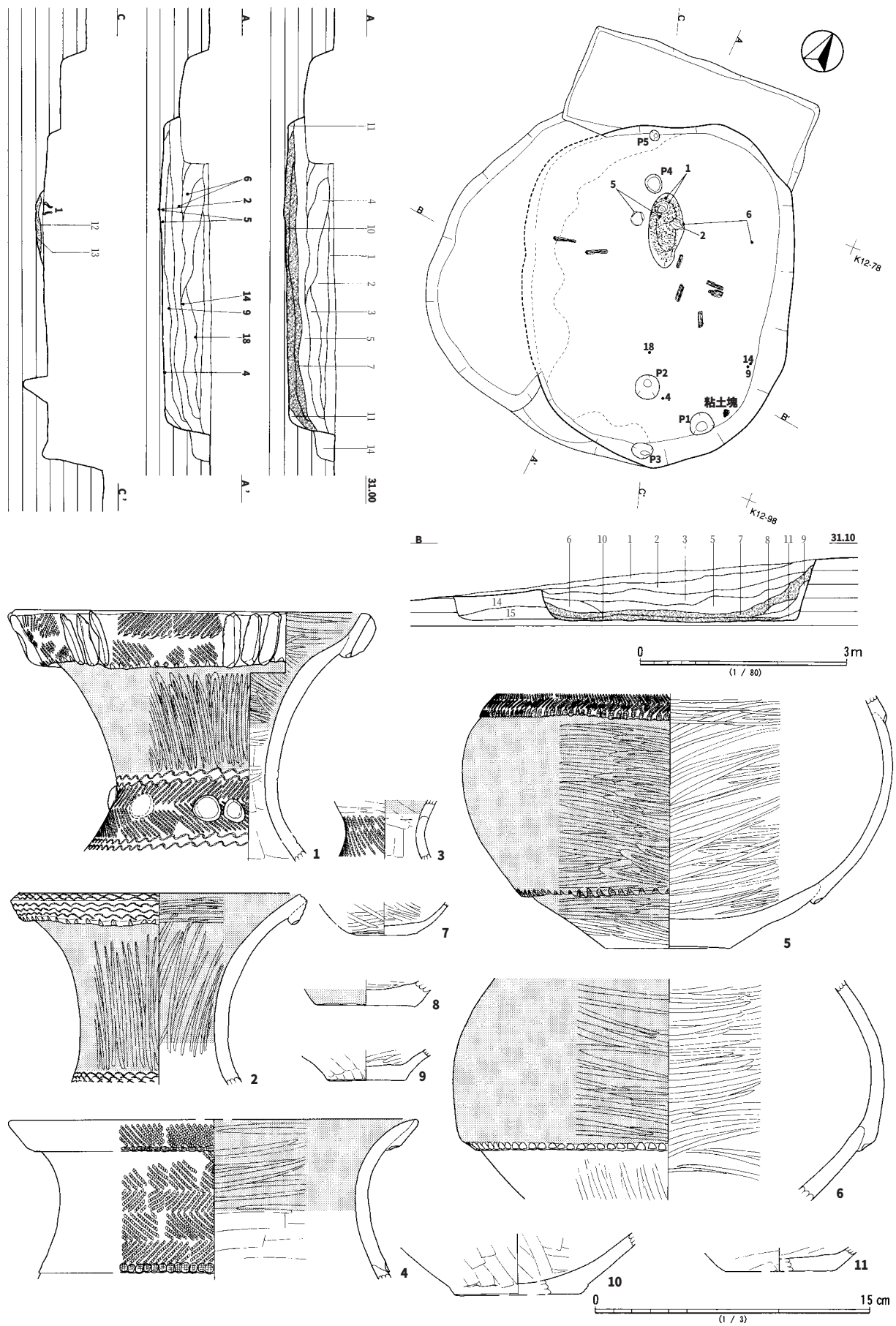
第130图 115号竖穴 遺構遺物

115号竖穴



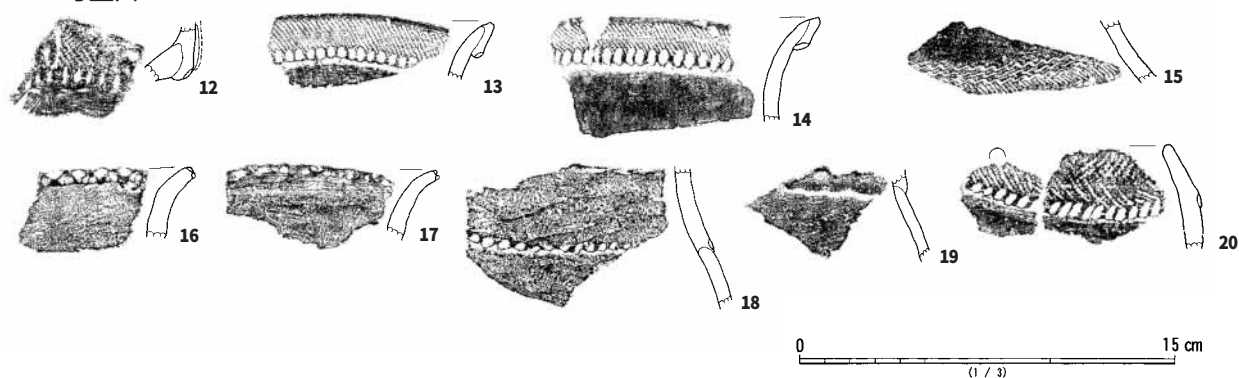
第131图 115号竖穴 遺物

116号竖穴



第132图 116号竖穴 遺構遺物

116号竪穴



第133図 116号竪穴 遺物

穴12と同一個体の可能性がある。なお、6の内面には、赤色顔料の付着が認められた。土器以外では、土製勾玉2点、環状土製品1点、軽石4点（1点不実測）が出土している。31は炉内、32・34～36は覆土、33は床面からの出土である。34には、人為的な穿孔が認められる。

本竪穴の時期は、4期古～新段階と推定される。

116号竪穴（第132・133図、図版28・63・64・75・76・77）

116号竪穴（住居跡）は、調査区K12－76区他に所在する。谷部に位置し、Ⅱb層（新期テフラ）を確認面とする。床面はソフトローム上面におく。北側は確認調査坑であり、西側は掘りすぎである。竪穴平面形態は、楕円形を呈し、全体規模は4.96（主軸）×3.92m、床面積は13.81m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.93m、主軸方位はN－22°－Wである。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。P1脇床面から粘土塊が出土している。炉は、平面規模1.09×0.51mを測る。竪穴堆積土は1～11層に分層され、1・9層が黒褐色土層、2～4・6・10層が暗褐色土層、5・7・8・11層が褐色土層であり、7・10層は多量の焼土、炭化物を含む。炉内、12層は黒灰色土層、13層は焼土層、竪穴外14層はⅡb層、15層はⅡc層～ローム漸移層に相当する。本竪穴は火災に遭っていると推定される。被災あるいは竪穴破棄後の焼却によるものかどうかの判断は難しい。

出土土器は、1～3・8・12が壺形土器、10・16～19が甕形土器、4～6・13～15が広口壺形土器、20が椀形土器であり、4・5は床面から、1・2は炉内から、6・14・18は覆土から出土している。1・2は炉器台として使用されたものであろう。1・2・5は遺存遺物と考えられる。13～15は同一個体と推定される。12は、115号竪穴14と同一個体の可能性がある。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩が出土している。

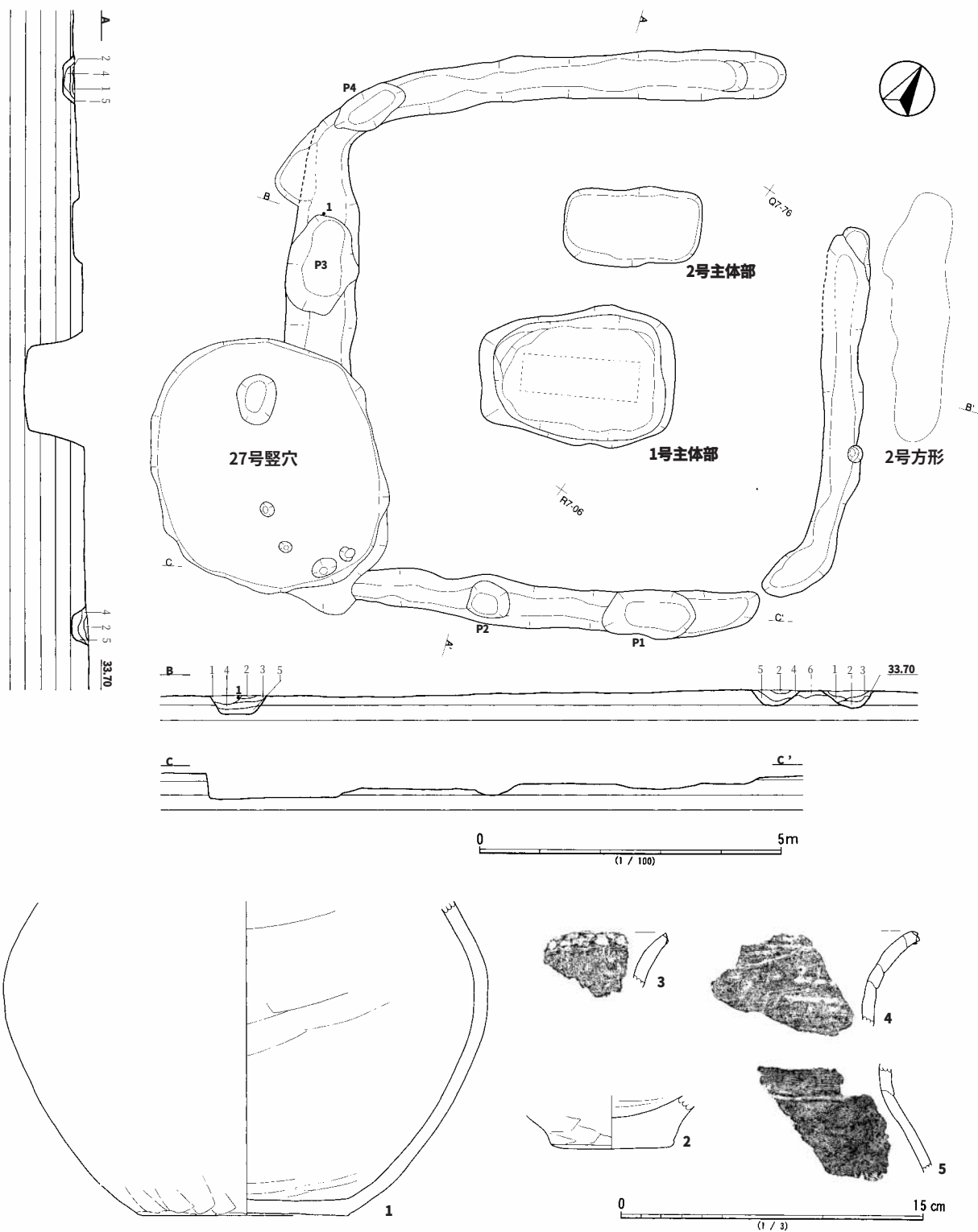
本竪穴の時期は、4期古段階と推定される。

（2）方形周溝墓

1号方形周溝墓（第134・135図、図版30・84）

1号方形周溝墓は、調査区Q7－85区他に所在する。全体に削平が進み、ゴボウ耕作溝による攪乱も激しいため、不確実な点も多い。周溝平面形態は、北東側1隅開口形と推定される。東側周溝では浅く不連続になるが、東溝北端、北溝東端は比較的明瞭に立ち上がる。南西隅については、27号竪穴と重複するため不確実ではあるが、南溝西端はおおむね南西隅に達していると判断される。27号竪穴

1号方形周溝墓



第134図 1号方形周溝墓 遺構遺物 (1)

との関係は、27号竖穴土層断面図に周溝覆土が確認されていないため、この観察結果によるならば本竖穴が新しい。ただし、出土土器等によるならば、新旧は逆である可能性も考えられる。27号竖穴と1号方形周溝墓は、調査年次がことなることもあり、土層断面での判断はかならずしも優先できない。平面規模はほぼ正方形であるが、北溝が開口部に対して若干開く関係で南北に若干長く、南北軸で、

周溝外径9.70m、方台部（周溝内側下端）8.50m、周溝内径8.17m、東西軸で、周溝外径9.52m、方台部8.13m、周溝内径7.75mを測る。後述する1号主体部推定頭位方向を主軸とするならば、方位はN-56°-Eとなる。確認面からの周溝の深さは、土坑状の掘り込み部分をのぞき0.35m以内で、北西隅周辺が若干深くなる。周溝底の標高値は、北・西溝が33.10m、南溝で33.30m、東溝で33.20m前後を測る。周溝底には、皿状の浅い掘り込みが認められる。南溝P1は、全長1.53m、周溝底からの深さ6cm、P2は、全長0.68m、深さ10cm、西溝P3は、全長1.55m、深さ10cm、北溝P4は、全長1.25m、深さ5cmである。いずれも、埋葬施設としての確証は得られていない。周溝覆土は1～5層に分層される。1層は黒褐色土層、2～4層は暗褐色土層、5層はロームを多量に含む暗褐色土層である。

方台部埋葬施設は2基検出されている。1号主体部は、木棺土坑墓である。平面規模は、確認面掘形で3.22（主軸）×2.36m、掘形底面で2.51×1.71mを測る。木棺部据え位置は掘形底面が若干掘り込まれている。棺痕跡全長は1.94m、東端幅0.66m、西端幅0.63mで、東側が若干幅広となる。玉類の出土も東側にまとまることから、頭位は東側に推定され、主軸はN-60°-Eを測る。棺痕跡は、側板、小口板の関係は検出されておらず、平面規模については、外寸最大値をしめすものと考えられる。棺底部の深さは、確認面から1.15m、標高値は32.22mであり、周溝底と比較して約0.9mほど深い。土層は、1～7層が埋土および棺内崩落土である。1・2・6層はローム粒、局所的にロームブロックを含む暗褐色土層、3層はロームを主体とする褐色土層、4・5層はローム粒、大形のロームブロックを多量に含む暗褐色土層、7層は暗灰褐色土粒とローム粒を混合する層である。棺裏込め土については、大小ロームブロック、ローム粒を主体とし、暗褐色土の多少によって分層される。

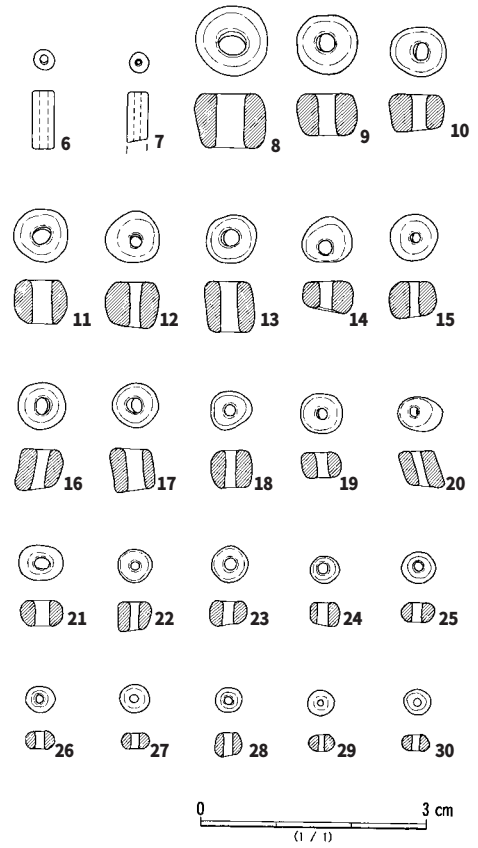
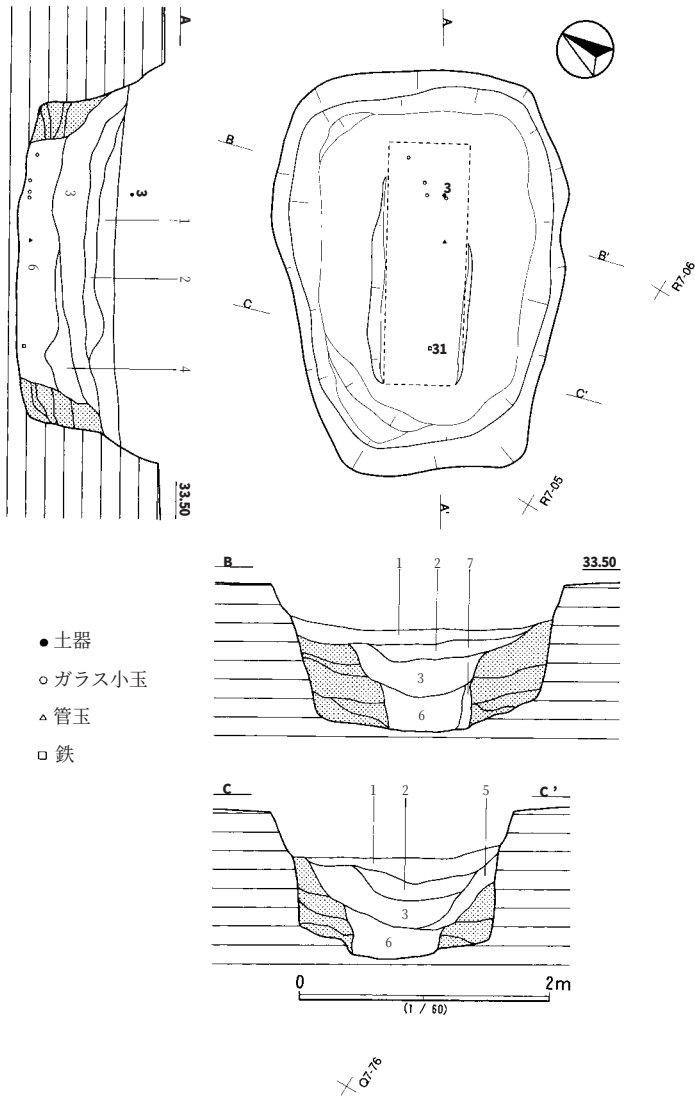
2号主体部は、1号主体部北側に併設される。平面規模は、確認面で2.27（主軸）×1.31m、深さは0.17m、標高値は33.14mを測る。主軸はN-60°-Eである。木棺痕跡は検出されていない。土層は、1層が暗灰褐色土層、2・3層が暗褐色土層である。

出土遺物は、1号主体部から碧玉製管玉2点、ガラス小玉23点、鉄板片3点が出土している。玉類のうち原位置を確認できたものは、管玉1点、ガラス小玉4点のみであったが、これらはいずれもほぼ棺底東側にまとまる。管玉2点のうち6は完存であるが、7は一端を再調整している。ガラス小玉は、透明のカリ石灰ガラスである。24・26が淡青色（スカイブルー）系、他は紺色（コバルトブルー）系であり、青緑系は皆無である。基本的に孔と平行して球状気泡の列状配列を確認することが可能であり、引き伸ばし、管切り法によるものと推定される。他の方形周溝墓、木棺土坑墓出土ガラス玉と比較すると、法量的に大小に大別されること、小口平坦面が比較的明瞭なものが多いことなどが特徴として認められる。鉄器は、一端が遺存する鉄板片が出土している。幅は1.2cmを測り、各端面とも面取りは認められない。全体に弧状を描くことから、鉄釧の可能性も考えられる。一般に螺旋形、渦巻形鉄釧は、断面形態が三角形ないしは蒲鉾形を呈し、幅も4～9mm程度で、本例とはことなるが、円環形の可能性は残しておきたい（岩本2002）。ただ、釧とした場合、その出土位置には疑問が残る。他に、同一個体と推定される鉄破片2点が出土している。

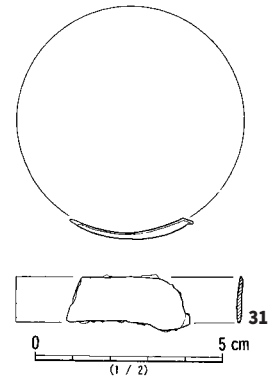
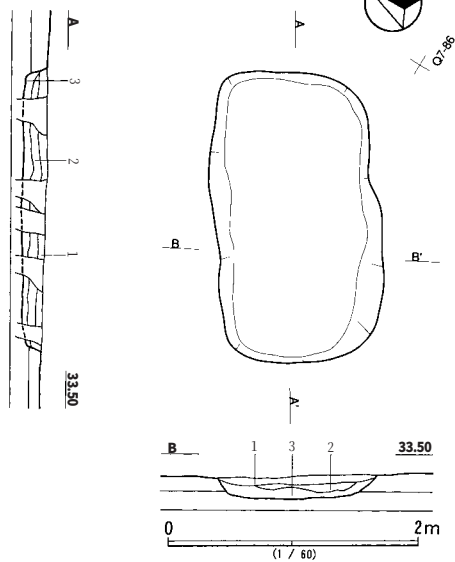
土器は、全体に出土量が少ない。1・3～5は甕形土器である。1は西溝覆土上層からの出土。3・4は覆土一括、2・5は1号主体部埋土、崩落土内から出土している。

時期を決定する根拠は乏しいが、4期古段階に推定しておく。

1号方形周溝墓
1号主体部

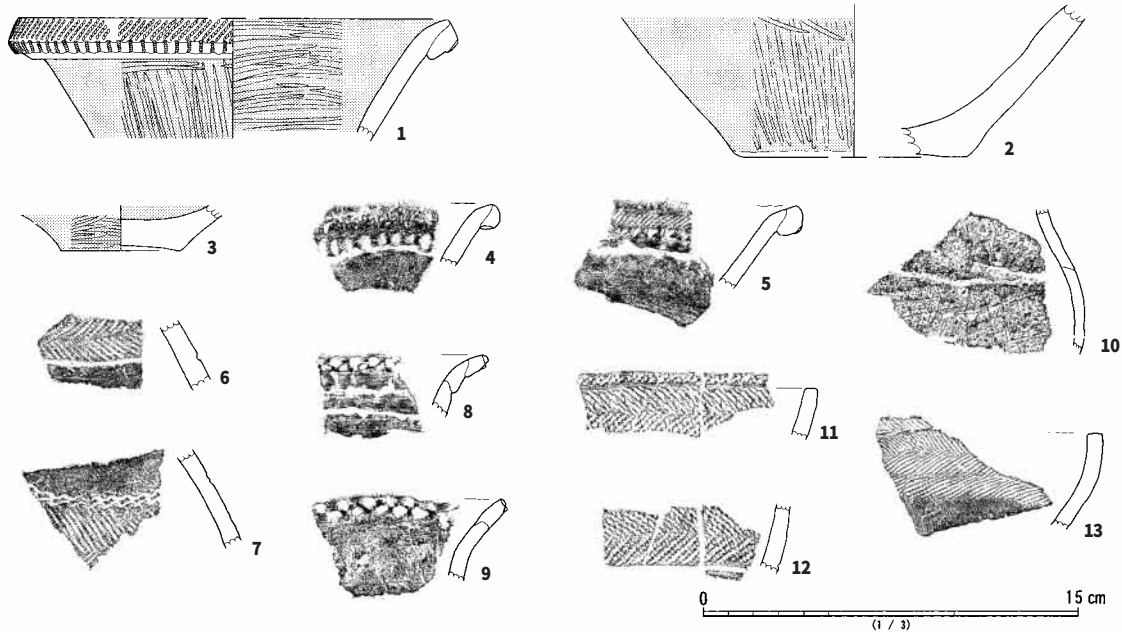
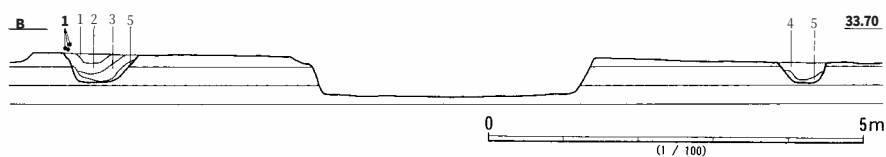
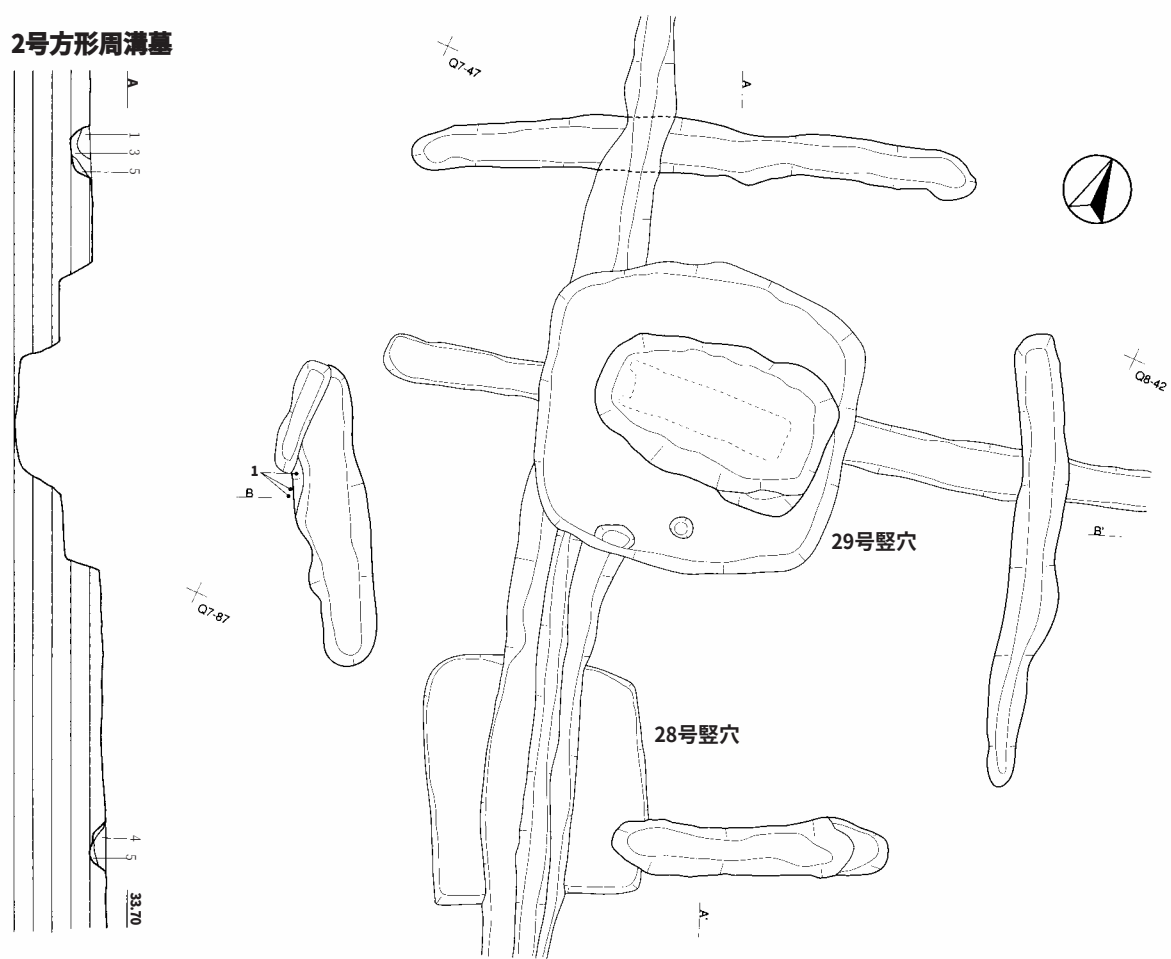


2号主体部



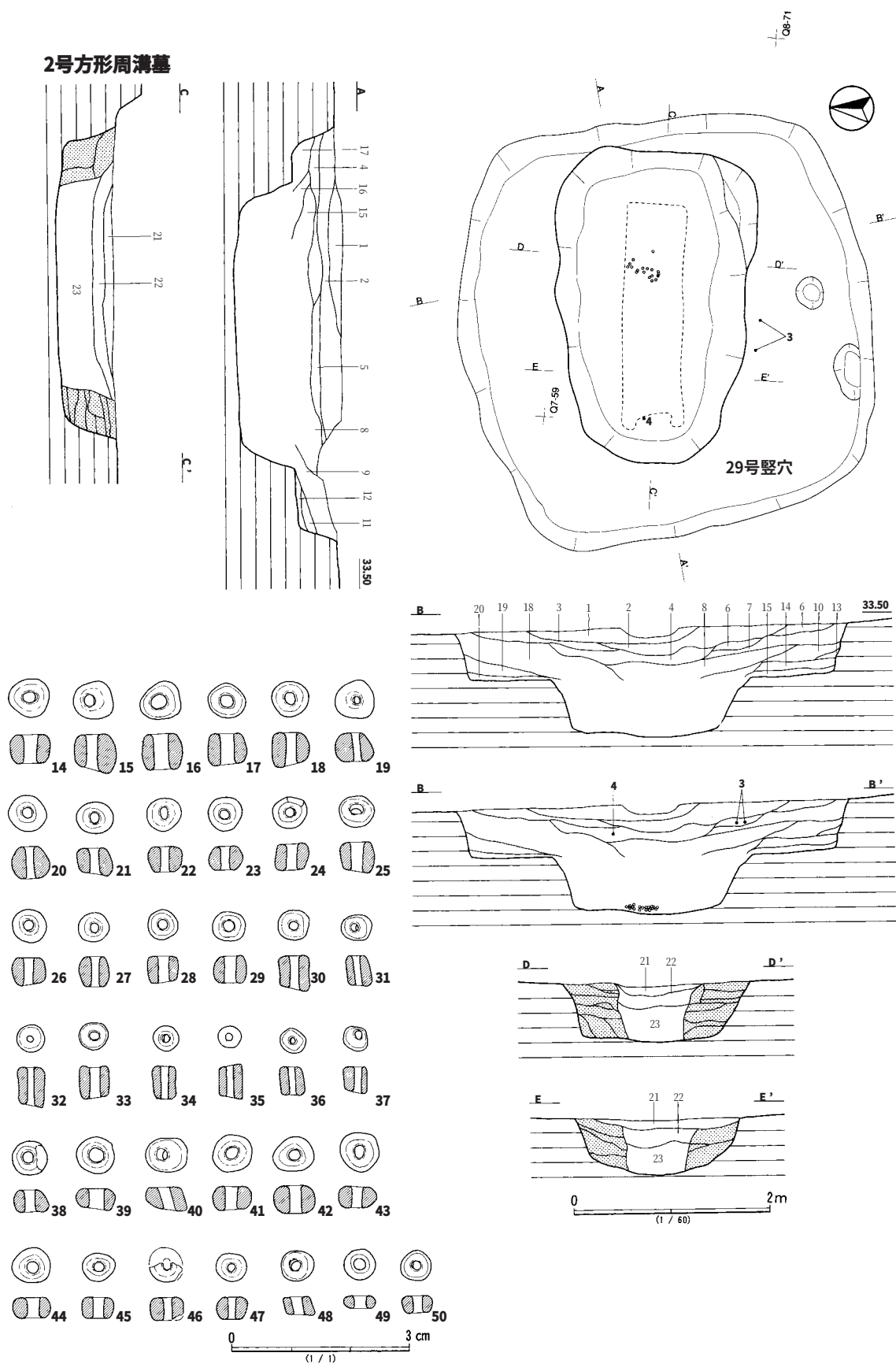
第135図 1号方形周溝墓 遺構遺物 (2)

2号方形周溝墓



第136图 2号方形周溝墓 遺構遺物 (1)

2号方形周溝墓



第137图 2号方形周溝墓 遺構遺物 (2)

2号方形周溝墓（第136・137図、図版12・30・31・75・76・84）

2号方形周溝墓は、調査区Q7－59区他に所在する。1号方形周溝墓東側に併置される。全体に削平が進み、溝も浅いが、周溝平面形態は、4隅開口形と推定される。周溝平面規模はほぼ正方形を呈し、東西軸で、周溝外径10.24m、方台部（周溝内側下端）9.02m、周溝内径8.60m、南北軸で、周溝外径10.06m、方台部8.90m、周溝内径8.67mを測る。東西方向を主軸として仮定するならば、方位はN－67°－Eとなる。確認面からの周溝の深さは、0.2～0.4m程度で、周溝底の標高値は、東溝が33.10m、西溝が33.15m、南溝が33.25m、北溝が33.05m前後を測る。周溝覆土は1～5層に分層される。1・2・4層は暗褐色土層、3層は黒褐色土層、5層はロームを多量に含む暗黄褐色土層である。竪穴2軒と重複関係をもつ。28号竪穴は、竪穴覆土内で周溝範囲が確認できたため、本遺構よりも古いと判断される。29号竪穴についても、竪穴廃棄直後に、その凹部を利用して本遺構主体部が構築されたことが確認されている。方形周溝墓中央を走行する溝は、近世以降の所産と推定される。

方台部埋葬施設は、木棺土坑墓が1基検出されている。平面規模は、確認面掘形で3.12（主軸）×2.04m、棺痕跡全長で2.28m、幅0.59mを測る。棺部西側は小口板位置が検出され、側板端から約15cm内側にはいる。玉類の出土が東側にまとまることから、東側に頭位が推定される。主軸方位はN－96°－Eを測る。棺底部の深さは、確認面から1.05m、29号竪穴床面から0.59m、底面標高値は32.28mである。土層は、1～9・16・18・21～23層が埋土および棺内崩落土である。11～15・17・19・20層は29号竪穴覆土、竪穴覆土上10層はロームブロックからなる黄褐色土層であり、主体部掘り上げ土と推定される。1・2・4・5・7・9・16・18・21～23層は暗褐色土層であり、3層は明褐色土層、6層は褐色土層、8層は暗灰褐色土層である。とくに、2～6層は大小ロームブロック、ローム粒を多量に含む。また、2・7・23層には炭化粒が認められた。中位の8・21層はしまりを欠く。棺裏込め土については、大小ロームブロック、ローム粒を含む暗褐色土であり、部分的にロームを主体とする褐色土をはさむ。なお、棺底部23層下には、硬化した黒褐色土が認められた。

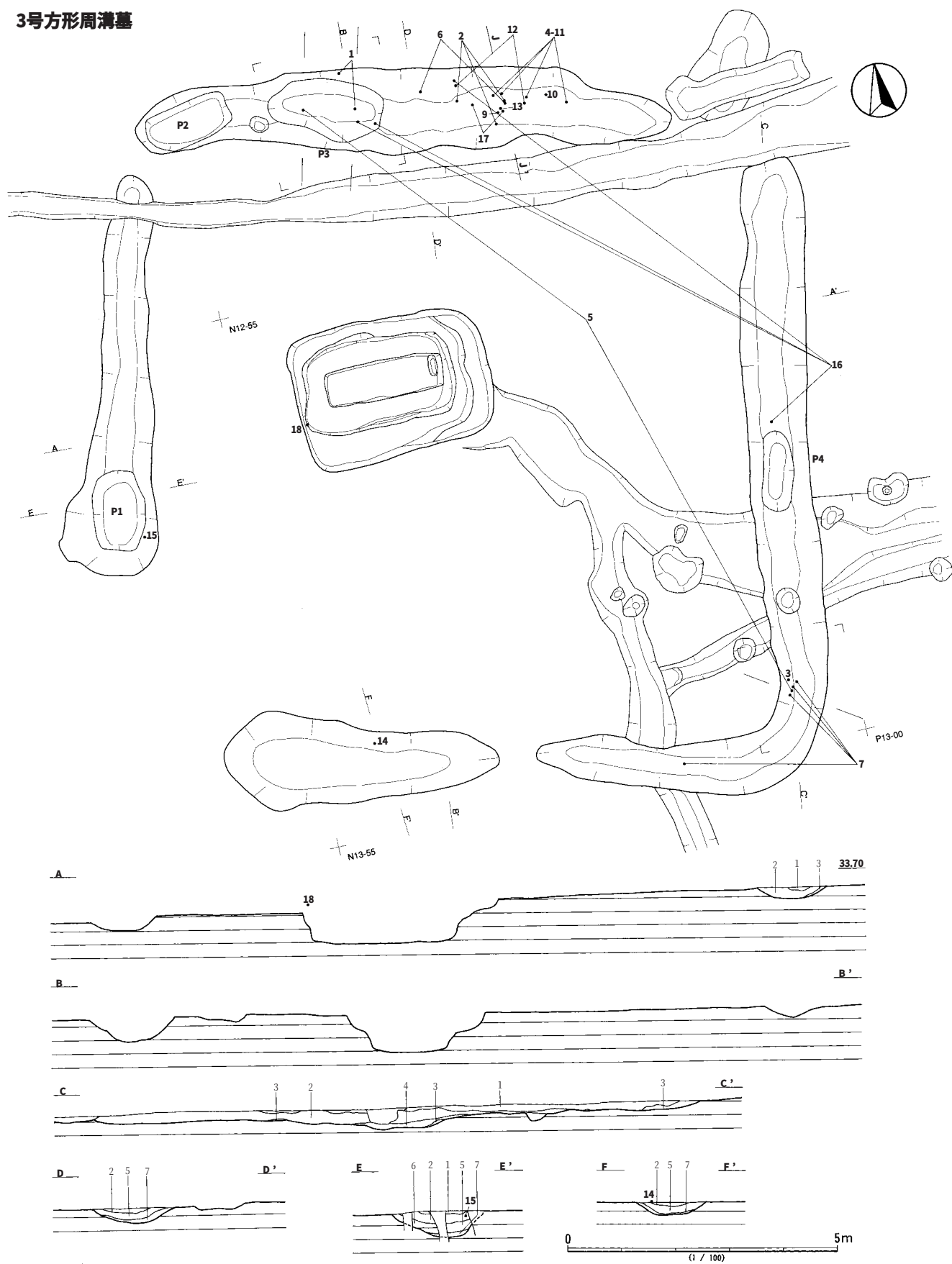
出土遺物は、現場記録時の台帳によるならば、主体部からガラス小玉41点が出土している。このうち18点について原位置が判明しており、これらはほぼ棺底東側にまとまる。実測個体は37点であり半損の1点については省略した。他3点については所在が不明である。38点は、すべて紺色（コバルトブルー）系透明のカリ石灰ガラスであり、色調による変化は乏しい。基本的に孔と平行して球状気泡の列状配列を確認することが可能であり、引き伸ばし、管切り法によるものと推定される。他の方形周溝墓、木棺土坑墓出土ガラス玉と比較すると、形状にゆがみが激しいものが多く、全体に不揃いである。土器は、全体に出土量が少なく、確実に本遺構にともなうものは出土していない。1・2・4～7は壺形土器、8～10は甕形土器、3・11～13は椀ないしは高杯形土器である。4・5、11・12は同一個体であり、1・7・8・11・13は周溝内から、他は主体部埋土、崩落土内から出土している。

本遺構の時期は、重複する竪穴との関係から、3期に推定しておく。

3号方形周溝墓（第138・139・140図、図版31・32・65・75・80・81・84）

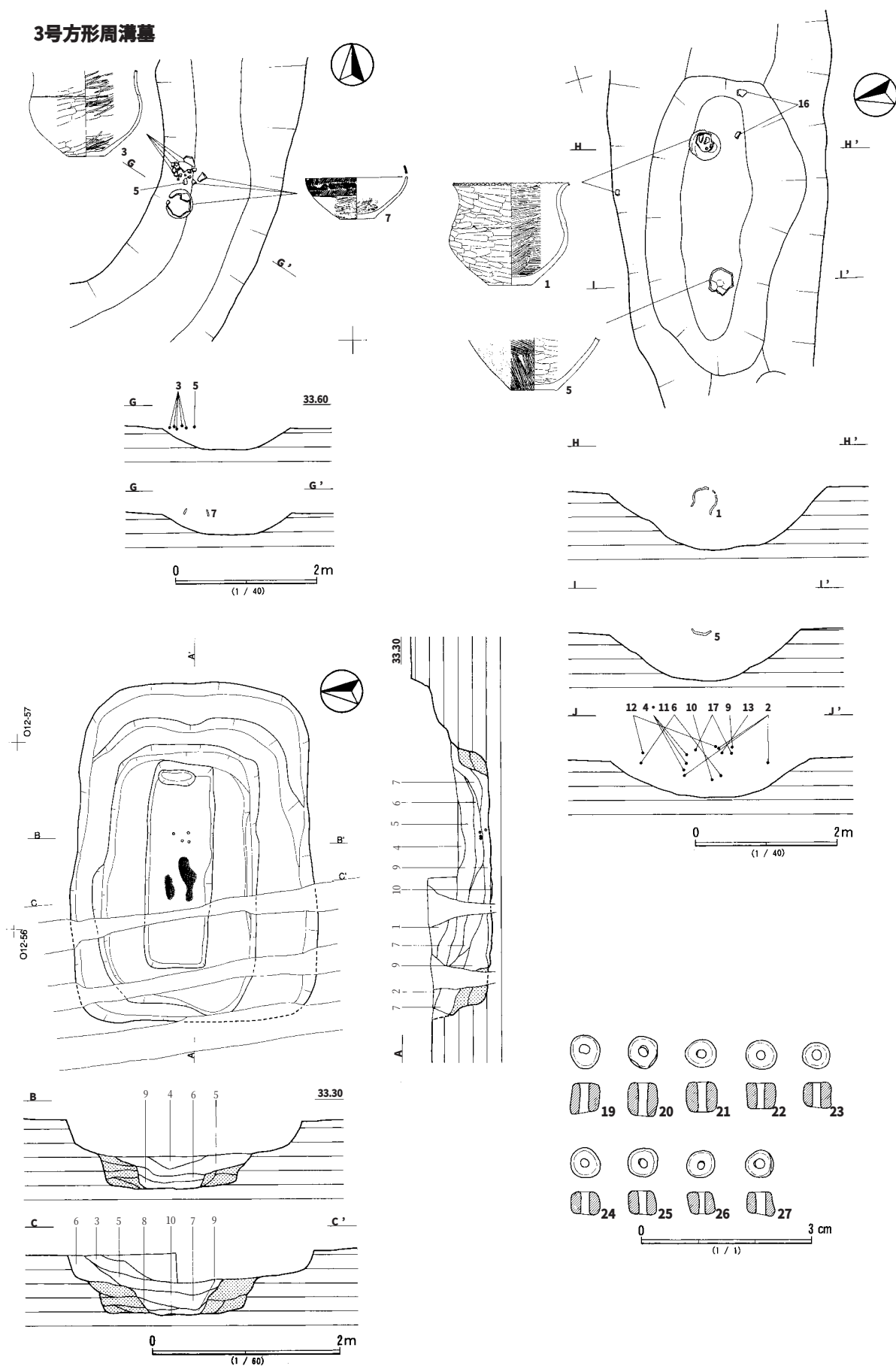
3号方形周溝墓は、調査区N12－66区他に所在する。全体に削平が進み、西半部はゴボウ耕作溝により破壊され、遺存状態はよくない。周溝は、現状で断続的であるが、北西隅、北東隅、南溝については本来連続していた可能性が高い。これに対して西溝南端、南溝西端は比較的明瞭に立ち上がることから、南西部1隅開口形と推定しておきたい。周溝平面規模はほぼ正方形を呈し、南北軸で、周溝

3号方形周溝墓



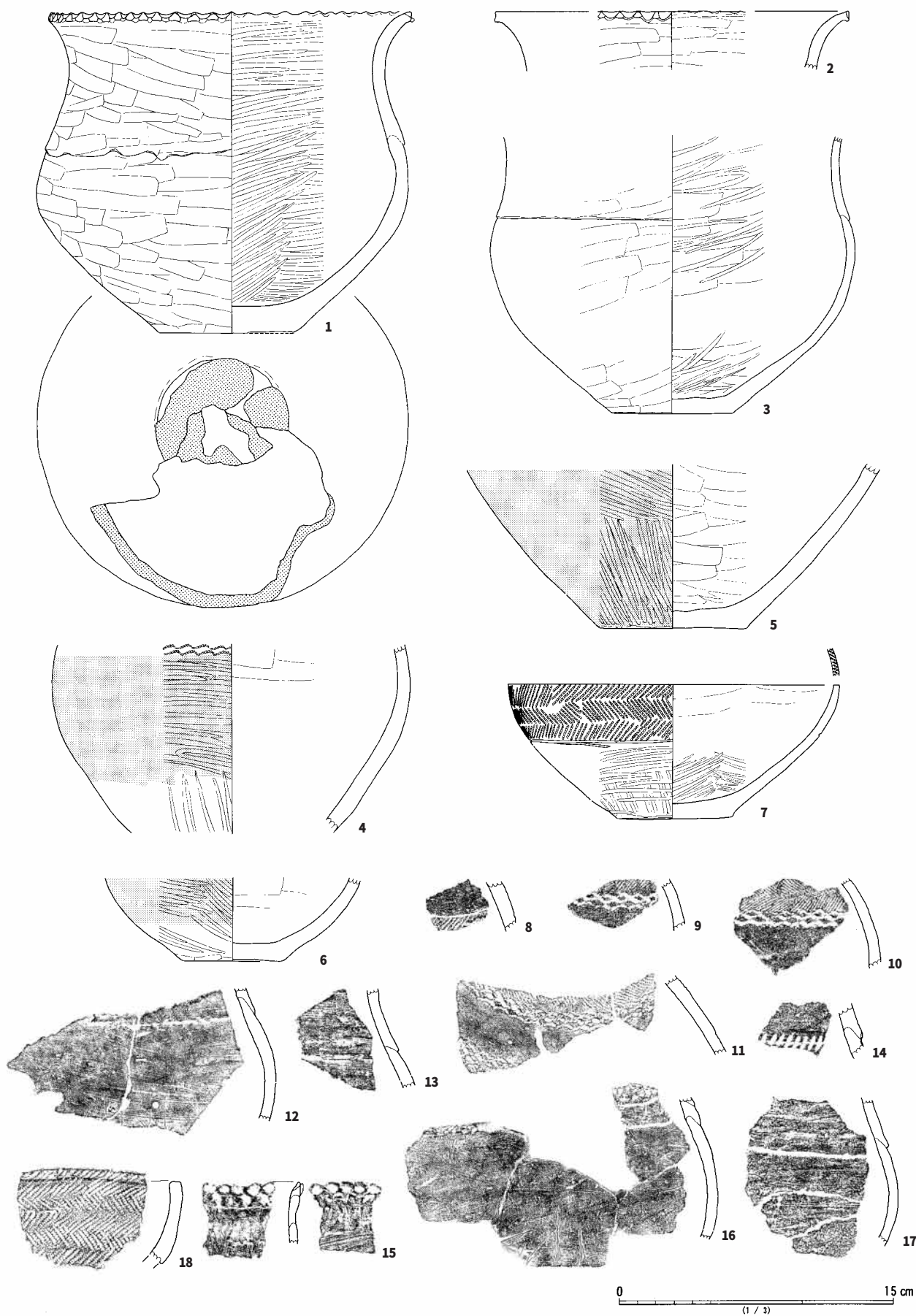
第138图 3号方形周溝墓 遺構

3号方形周溝墓



第139图 3号方形周溝墓 遺構遺物

3号方形周溝墓



第140图 3号方形周溝墓 遺物

外径13.40m、方台部（周溝内側下端）11.38m、周溝内径10.70m、東西軸で、周溝外径13.14m、方台部11.67m、周溝内径11.00mを測る。東西方向を主軸として仮定するならば、方位はN-102°-Eとなる。確認面からの周溝の深さは、土坑状の掘り込み部分をのぞき0.55m以内であるが、凹凸が激しい。周溝底の標高値は、東溝が33.15m、西溝が32.64m、南溝が32.86m、北溝が32.78m前後を測る。周溝底には、皿状の浅い掘り込みが認められる。西溝P1は、全長1.46m、周溝底からの深さ18cm、北溝P2は、全長1.58m、深さ28cm、北溝P3は、全長2.12m、深さ14cm、東溝P4は、全長1.50m、深さ13cmである。いずれも、木棺痕跡、副葬品等埋葬施設としての明確な根拠は認められなかった。ただ、銅釧を出土した富津市高砂遺跡SZ022（小高1999）にみられるように、当該地域の溝中埋葬は、後期中葉以前には遡ることが確実であり、直上覆土から土器が出土した北溝P3は、高砂遺跡SZ022の状況と似る。

周溝覆土は1～7層に分層される。1層は黒褐色土層、2・4～6層は暗褐色土層、3・7層はロームを多量に含む暗黄褐色土層である。重複溝については、いずれも近世以降と推定される。また、東側に接して8号竪穴が存在する。これも時期的に同時期とは考えられない。

方台部埋葬施設は、木棺土坑墓が1基検出されている。平面規模は、確認面掘形で3.58（主軸）×2.63m、掘形中段で2.78×1.77m、棺痕跡部で2.18×0.72mを測る。棺部東端から小口板を挿入したと考えられる溝が検出されており、これを西側にも想定した場合の棺内法は、1.75m程度と推定される。玉類の出土が東側にまとまることから、東側に頭位が推定される。また、棺中央部底面には、赤色顔料が認められたが、これについては、位置的に頭部とは考えにくい。主軸方位はN-92°-Eを測る。棺底部の深さは、確認面から0.79m、底面標高値は32.36mである。土層は、1～9層が埋土および棺内崩落土である。1層が小形のロームブロックを多量に含む暗黄褐色土層、2～6層が暗褐色土層であり、とくに4～6層にロームブロック、ローム粒が目立つ。7～9層はロームを主体とする褐色土層であり、9層は全体が粒状であった。10層は赤色顔料である。棺裏込め土は、ロームブロック、ローム粒を主体とする層、黒色土とロームをブロック状に混合する層、暗褐色土層が互層になっていた。

出土遺物としては、主体部からガラス小玉9点が出土している。このうち5点について原位置が判明しており、これらはほぼ棺底東側にまとまる。すべて紺色（コバルトブルー）系透明のカリ石灰ガラスであり、色調による変化は乏しい。基本的に孔と平行して球状気泡の列状配列を確認することが可能であり、引き伸ばし、管切り法によるものと推定される。他の方形周溝墓、木棺土坑墓出土ガラス玉と比較すると、形状、法量とも比較的均一である。土器は、1～3、12～17が甕形土器、4～6、8～11が壺形土器、7・18が椀ないしは高杯形土器である。いずれも周溝覆土からの出土であり、とくに北溝、南東隅からまとまって出土している。北溝中央部については、すべて破片であり、投棄された可能性が高い。遺存状態から本遺構にともなう可能性があるものは、1・3・7であり、1の底部については、意図的な破損である可能性も考えられる。

本遺構の時期は、4期古段階と推定される。

文 献

岩本崇 2002「東日本における弥生時代鉄釧の製作背景」『古代文化』第54巻第5号

小高幸男 1999『高砂遺跡Ⅱ』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第154集

(3) 木棺土坑墓

1号木棺土坑墓（第141図、図版32・84）

1号木棺土坑墓は、調査区R7-01区他に所在する。ゴボウ耕作溝による攪乱が激しいが、棺底までは及んでいない。1号方形周溝墓西側に平行してあり、方形周溝墓と無関係に配置されたものとは考えにくい。平面規模は、確認面掘形で3.34（主軸）×2.27m、棺痕跡部は全長が2.02m、幅は0.57～0.64mで、南側がやや幅広となる。玉類の出土を頭位側と仮定した場合の方位は、掘形がN-153°-E、棺部でN-160°-Eを測る。棺底部の深さは、確認面から1.13m、底面標高値は32.58mである。土層は、1～7層が埋土および棺内崩落土である。1～3、5・6層が暗褐色土層であり、1・5・6層は大小ロームブロック、ローム粒を多量に、2・3層はローム粒を均等に含む。4・7層は黒褐色土層である。棺裏込め土は、ロームブロック、ローム粒を多量に含む暗褐色土を基調とし、ロームを主体とする褐色土を間層としてはさむ。とくに下層は、ハードローム状に硬化する。なお、棺底中央部、3号方形周溝墓とほぼ同位置で赤色顔料層が認められた。これについては、X線回折による分析を委託したが、ベンガラとは特定されていない（第3章第5節）。サンプル採取時間問題かどうか、判断できない。ただ、方形周溝墓埋葬施設での赤色顔料の使用は、当該地域においても、宮ノ台式期に遡ることは確実である。

出土遺物としては、碧玉製管玉3点、ガラス小玉8点が出土している。このうち管玉2点、ガラス小玉5点について原位置が判明しており、これらはほぼ棺底南側にまとまる。すべて紺色（コバルトブルー）系透明のカリ石灰ガラスである。色調による変化は乏しい。基本的に孔と平行して球状気泡の列状配列を確認することが可能であり、引き伸ばし、管切り法によるものと推定される。他の方形周溝墓出土ガラス玉と比較すると、比較的透明感があり、細かい気泡が筋状にならぶものが多い。形状的には、算盤玉状のものも認められる。土器は、椀ないしは高杯形土器の口縁部破片が図化できるにすぎない。

時期決定にかかわる根拠は乏しいが、並列する方形周溝墓との関係から4期古段階に推定しておく。

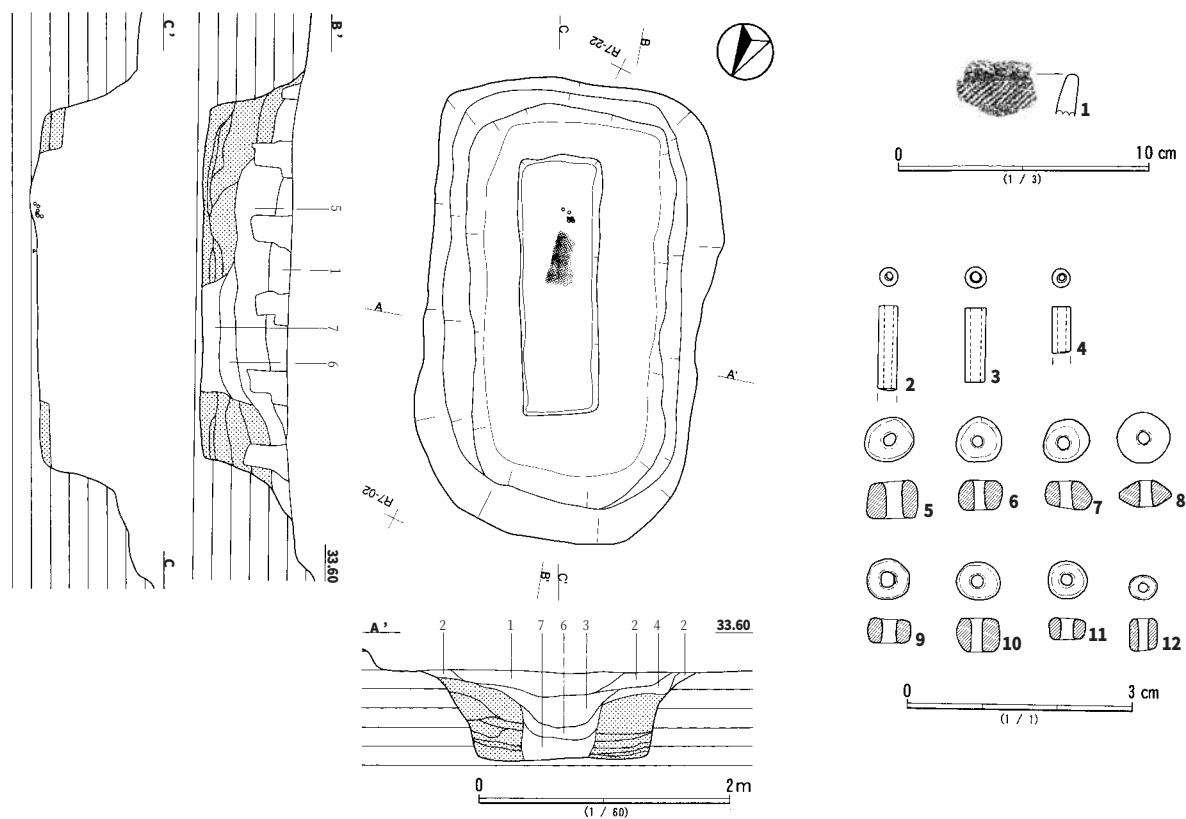
2号木棺土坑墓（第141・142図、図版13・32・75・81）

2号木棺土坑墓は、調査区R8-21区他に位置し、1・2号方形周溝墓南側、36号竪穴内に所在する。1・2号方形周溝墓、1号木棺土坑墓とともに群を形成する。平面規模は、36号竪穴床面で掘形2.67（主軸）×1.18m、棺痕跡部は全体で2.48×0.65m、小口板位置を基準とすると2.16mを測る。主軸方位は、N-67°-E、棺底部の深さは、竪穴床面から0.18m、底面標高値は33.18mである。棺内1層は暗褐色土層であり、2層はロームブロック、ローム粒を多量に含む褐色土層、3層は灰褐色土層である。棺裏込め部は、ロームを多量に含む暗褐色土層である。

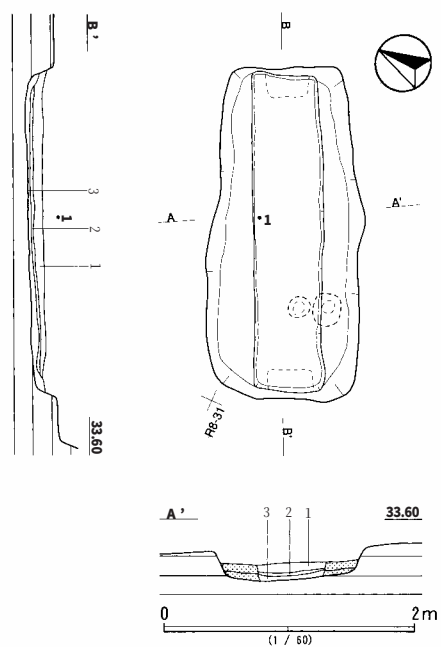
上面に36号竪穴の床面がおよんでいないことから、本遺構が新しいと推定される。調査段階では、竪穴廃棄直後の凹地を利用してつくられたとの所見であったが、36号竪穴断面図では（第65図）新旧関係を含め判断できない。ただし、2号方形周溝墓主体部、3号木棺土坑墓も竪穴を利用して構築されており、本遺構も同例である可能性が高い。

玉類の出土はない。土器は、1・3～5が椀ないしは高杯形土器、2が広口壺形土器、6が壺形土器、7・8が甕形土器である。確実に本遺構にともなうものはない。他に、軽石小破片が2点（不実測）出

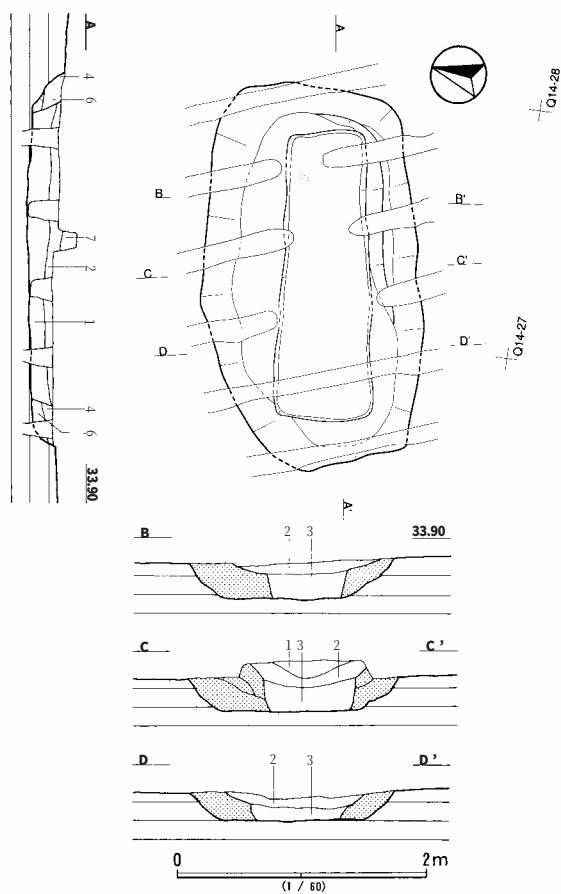
1号木棺土坑墓



2号木棺土坑墓

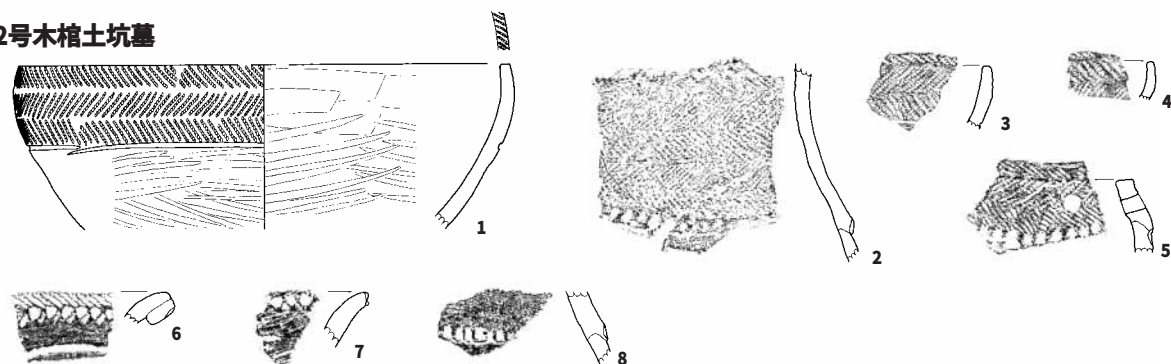


3号木棺土坑墓



第141图 1·2·3号木棺土坑墓 遺構遺物

2号木棺土坑墓



3号木棺土坑墓



第142図 2・3号木棺土坑墓 遺物

土している。出土状況は不明。

本遺構の時期は、3期と考えられる。

3号木棺土坑墓（第141・142図、図版19・20・33・75）

3号木棺土坑墓は、調査区Q14-16区他に位置し、71号竪穴内に所在する。平面規模は、71号竪穴床面で掘形3.07（主軸）×1.70m、棺痕跡部は全長で2.34m、幅は0.78～0.62mであった。棺底東側に赤色顔料（酸化鉄）が認められた。主軸方位は、掘形でN-77°-E、棺部でN-86°-E、棺底部の深さは、竪穴床面から0.3m、底面標高値は33.41mである。1・3層は暗褐色土層、2層はロームブロックを多量に含む褐色土層である。棺裏込め部は、ロームを多量に含む暗褐色土層である。

71号竪穴との関係は、本遺構が新しい。71号竪穴内の土層は（第101図）、1～7層が埋土および棺内崩落土である。すべて暗褐色土層であるが、2～4、6～7層はとくにロームを多量に含む。なお、8・9層はロームブロックを主体とする褐色土層であり、掘り上げ土と推定される。3号木棺土坑墓の構築は、71号竪穴廃棄直後ではなく、ある程度埋没が進行した段階と推定されるが、竪穴廃棄による凹地を利用してつくられた可能性が高い。

玉類の出土はない。土器は、1が広口壺形土器、2が壺形土器、3・4が甕形土器である。確実に本遺構にともなうものはない。

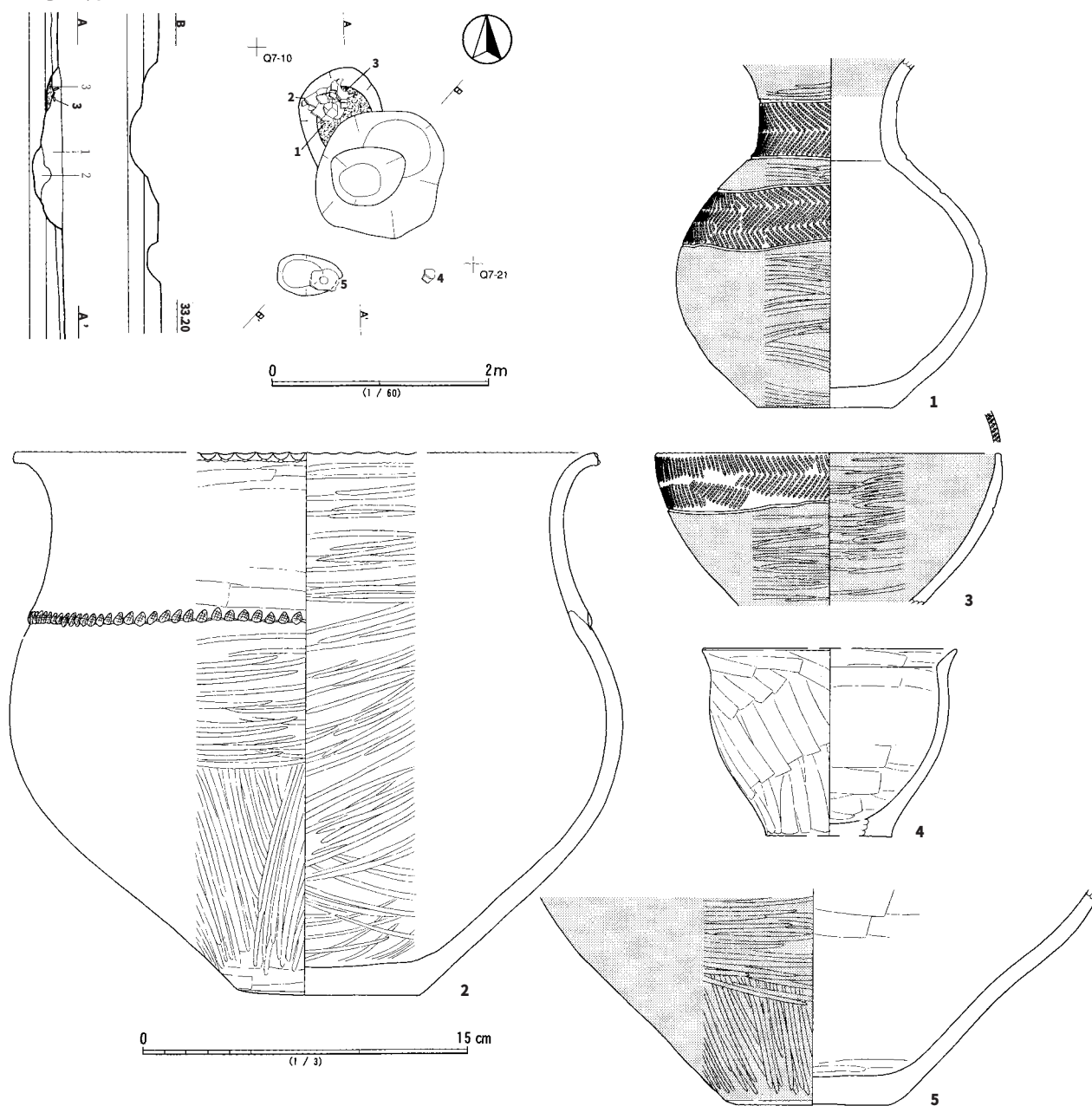
時期決定にかかわる根拠は乏しいが、4期古段階に推定しておきたい。

(4) 土 坑

4号土坑（第143図、図版40・65・66）

4号土坑は、調査区Q7-10区他に所在する。焼土をとともう不定形の浅い土坑である。竪穴住居跡の残存である可能性も当然想定されるが、周囲から床硬化面、柱穴等は検出されていない。焼土をとともう部分は、炉状を呈するが、火床面は明確ではない。平面的には、中央Pitと重複するようにもみえるが判然としない。平面規模は1.65×1.19m、確認面からの深さは0.26mを測る。南西側小Pitは、

4号土坑



第143図 4号土坑 遺構遺物

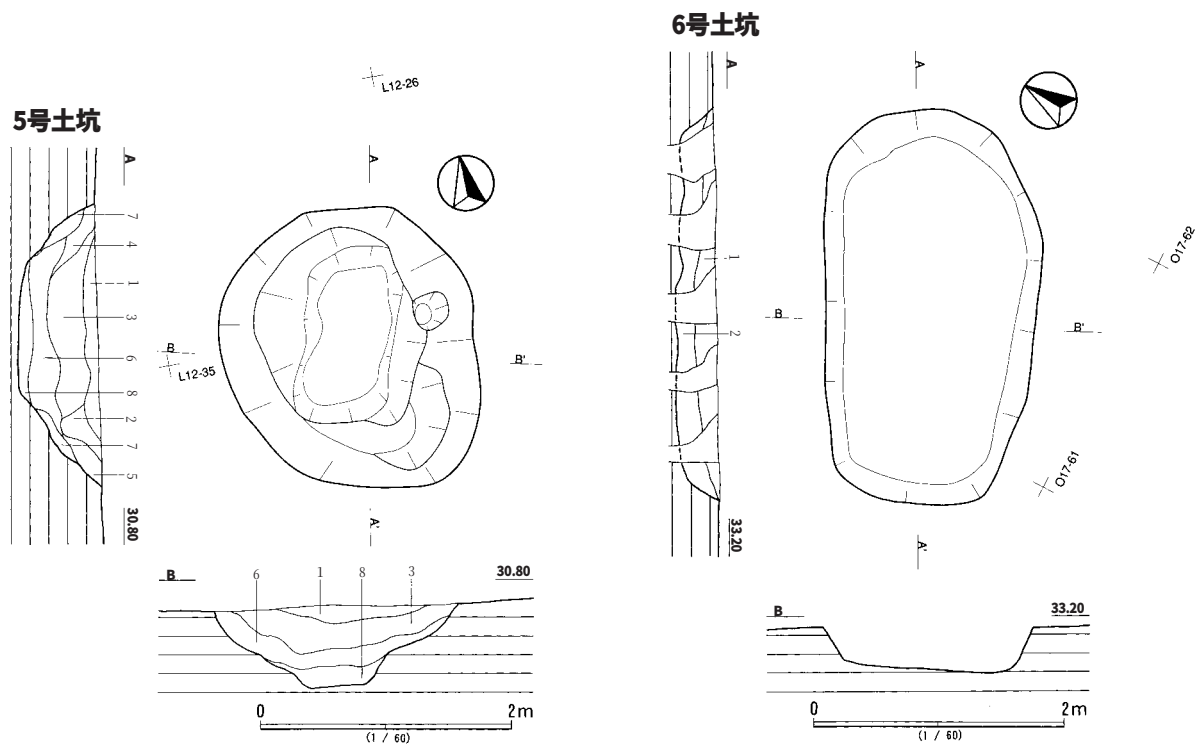
0.56×0.36m、深さ0.14mを測る。覆土は1～3層に分層され、1層は黒褐色土層、2層はロームを多量に含む褐色土層、3層は焼土を含む暗褐色土層である。

出土遺物は、弥生土器が土坑内および周囲からまとまって出土している。1・5は壺形土器、2は甕形土器、3は椀ないしは高杯形土器、4は鉢形土器である。

時期は、出土土器から3期と考えられる。

5号土坑 (第144図、図版41)

5号土坑は、調査区L12-35区他に所在する。平面形態は、確認面で円形を、中段で長方形を呈す。平面規模は、確認面で2.22(主軸)×2.04m、中段で1.42×0.73m、深さは0.76mを測る。主軸方位は、N-15°-Eである。覆土は1～8層に分層され、1層は灰褐色土層、2・4～6層は黒褐色土層、3層は



第144図 5・6号土坑 遺構

暗褐色土層であり、7層はロームを多量に含む褐色土層、8層はロームブロックを多量に含む暗褐色土層である。

本遺構は、1・2号方形周溝墓、1・2号木棺土坑墓と近接することから、埋葬遺構である可能性も考えられるが確証はない。

出土遺物は、弥生時代後期土器小片が出土しているのみである。土坑墓の可能性も考えられるが、確証はない。

6号土坑（第144図、図版41）

6号土坑は、調査区O17-51区他に所在する。平面形態は、楕円形を呈す。平面規模は、確認面で3.12（主軸）×1.73m、深さは0.37mを測る。主軸方位は、N-63°-Eである。覆土は2層に分層され、1層は黒褐色土層、2層はローム粒、ロームブロックを多量に含む黒褐色土層である。

出土遺物は、弥生時代後期土器小片が出土しているのみである。土坑墓の可能性も考えられるが、確証はない。

第4節 古墳時代前中期

(1) 竪 穴

117号竪穴（第145・146図、図版28・29・64・75・77）

117号竪穴（住居跡）は、調査区Q13-21区他に所在する。13号溝と重複し、本遺構に対し13号溝が新しい。竪穴平面形態は、隅丸長方形を呈し、全体規模は6.55（主軸）×5.91m、床面積は34.06m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.77m、主軸方位はN-34°-Wである。支柱穴はP1-4であり、長方形の掘形をもつ。P6・7は出入口施設、P5は貯蔵穴である。P8・10も貯蔵穴であろうか。北西隅に凸堤が圍繞するが、内側からPit等は検出されなかった。炉は2基あり、北側は0.67×0.49m、南側は0.34×0.30mを測る。北側の炉には土器囲いが認められた。周溝は、ほぼ全周する。貼り床構造をもつ。竪穴堆積土は1-13層に分層され、1層が13号溝に対応する灰色土層、2・11・15層が黒褐色土層、3-7・10層が暗褐色土層、8・9・12・13層が褐色土層であり、11層は若干の焼土粒とともに炭化物を多量に含む。14層は貼り床部分に相当し、ロームブロックを多量に含む暗褐色土層である。

本竪穴は火災に遭っていると推定され、壁際に間層をはさむ焼土・炭化物層の堆積状況からみて、竪穴破棄後の焼却によるものであろう。焼土、炭化物の堆積状況は、炭化物を主とし、P3・4間床面には炭化物が層状に認められた。焼土の有無は、焼却時の状況にもよるが、土葺きの有無等の上屋構造による可能性もある。

出土土器は、2・14-18が壺形土器、1・3-6・9・10・12・19が甕形土器、7・11・13が高杯形土器、8が椀ないしは高杯形土器であり、2-6・8・9・13は床面から、7はP5内から、1・10-12・14・17-19は覆土から出土している。1の分布状況は明らかに投棄、あるいは流れ込みによるものと判断される。

本竪穴の時期は、古墳時代前期初頭と推定される。

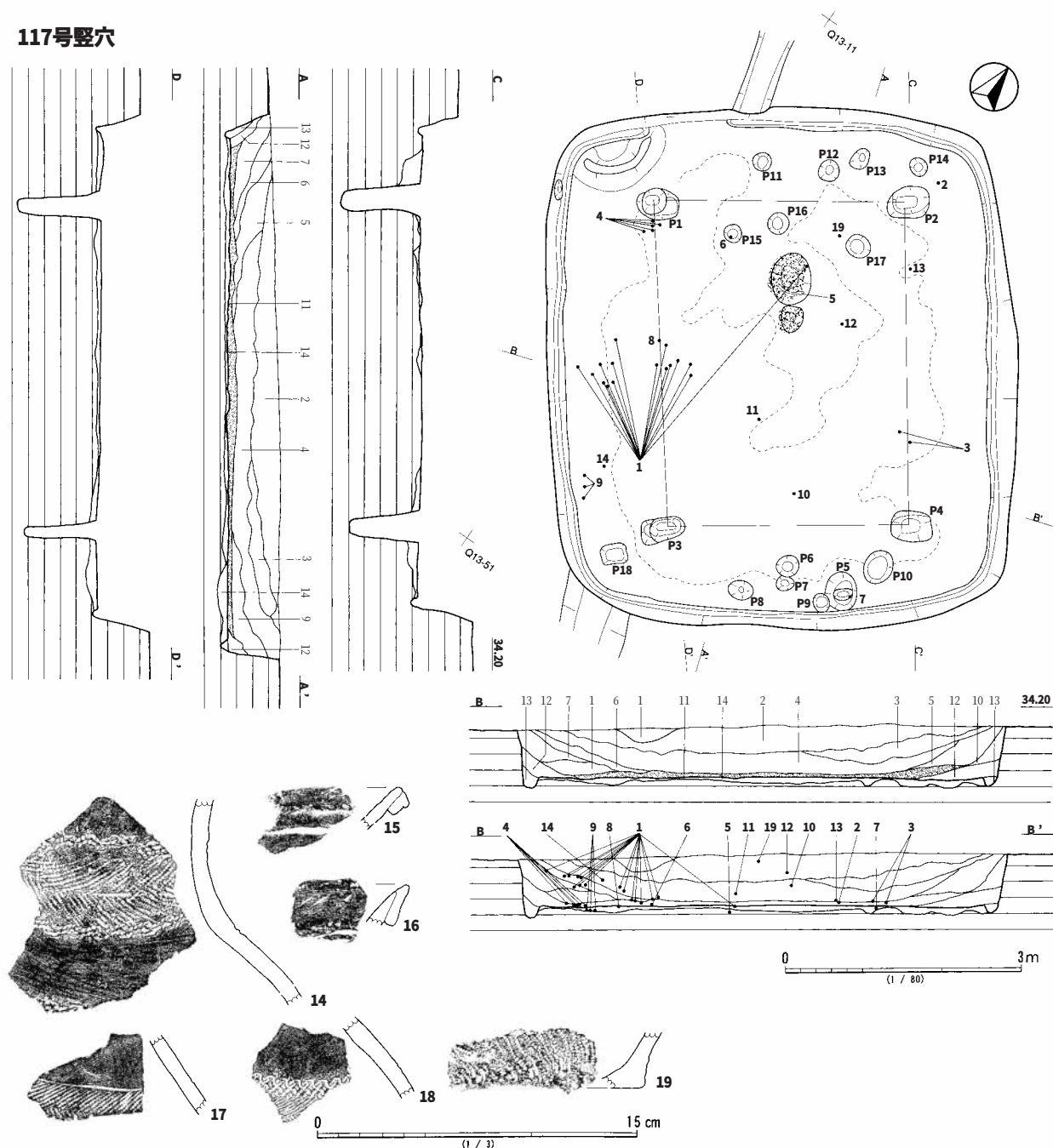
118号竪穴（第147図、図版29・75）

118号竪穴（住居跡）は、調査区P15-83区他に所在する。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は4.03（主軸）×4.25m、床面積は14.23m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.47m、主軸方位はN-36°-Wである。支柱穴は検出されなかった。P1は貯蔵穴、P2は出入口施設である。他に掘形面でPitが検出されているが、性格を特定できるものはない。炉は、平面規模0.75×0.47mを測る。周溝は、北東隅部をのぞきほぼ全周する。竪穴堆積土は1-11層に分層され、1・6-9層が黒褐色土層、2-4層が暗褐色土層、5層が暗灰褐色土層、10層が炭化物を多量に含む黒褐色土層、11層が褐色土層である。炉内、12層は黒褐色土層、13層は焼土層であり、14層は貼り床部分に相当する。

本竪穴は火災に遭っていると推定される。遺存遺物が認められないことから、竪穴破棄後の焼却による可能性が高い。焼土、炭化物の堆積状況は、炭化物を主とする。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、4が壺形土器、2・8-13が甕形土器、1が高杯形土器、5-7が椀ないしは高杯形土器であり、1-3は床面から、4・5・7・9-13は覆土から出土している。他に、穿孔貝巢穴痕跡泥岩が出土している。

117号竪穴



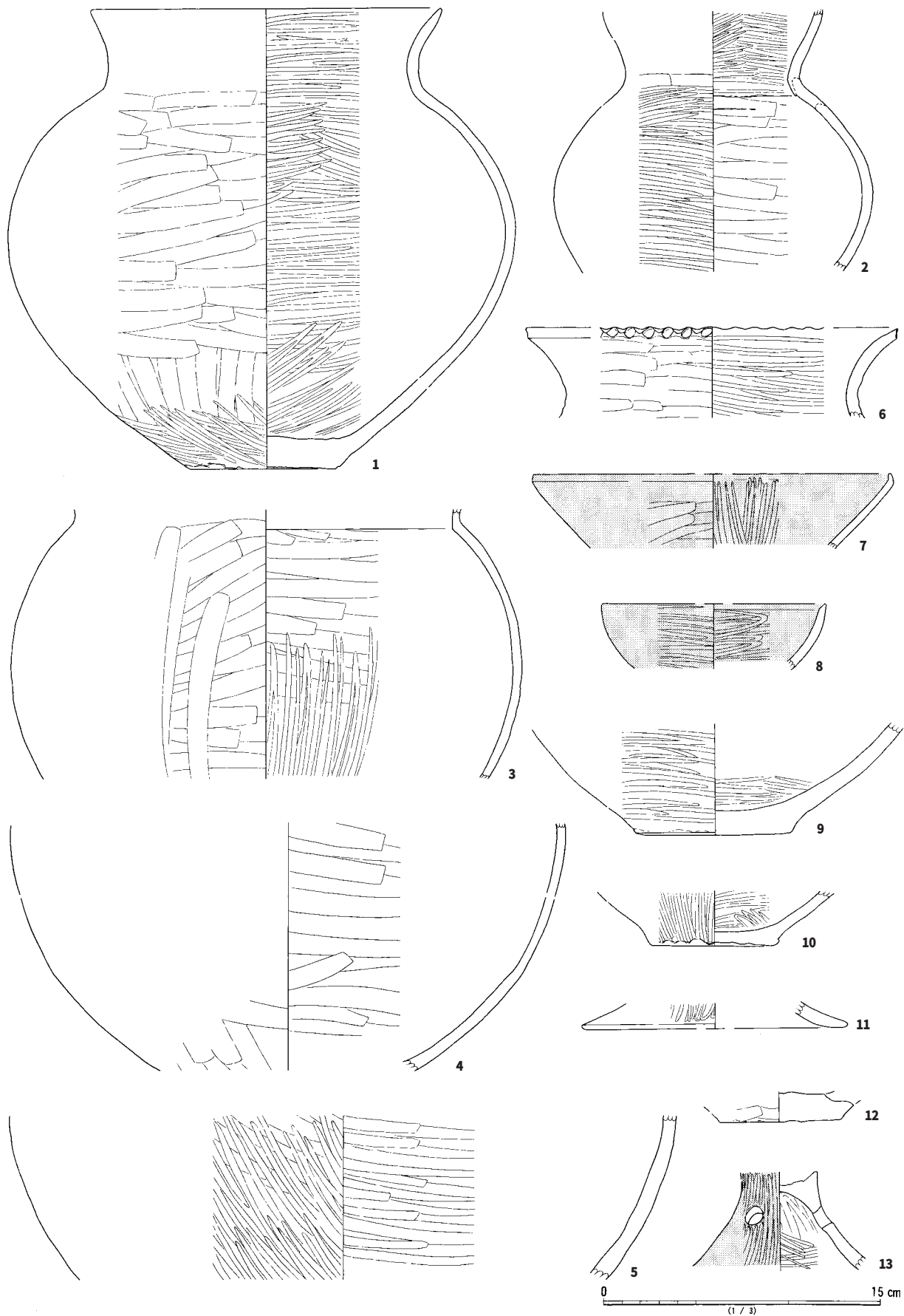
第145図 117号竪穴 遺構遺物

本竪穴の時期は、古墳時代前期初頭と推定される。

119号竪穴（第147・148図、図版29）

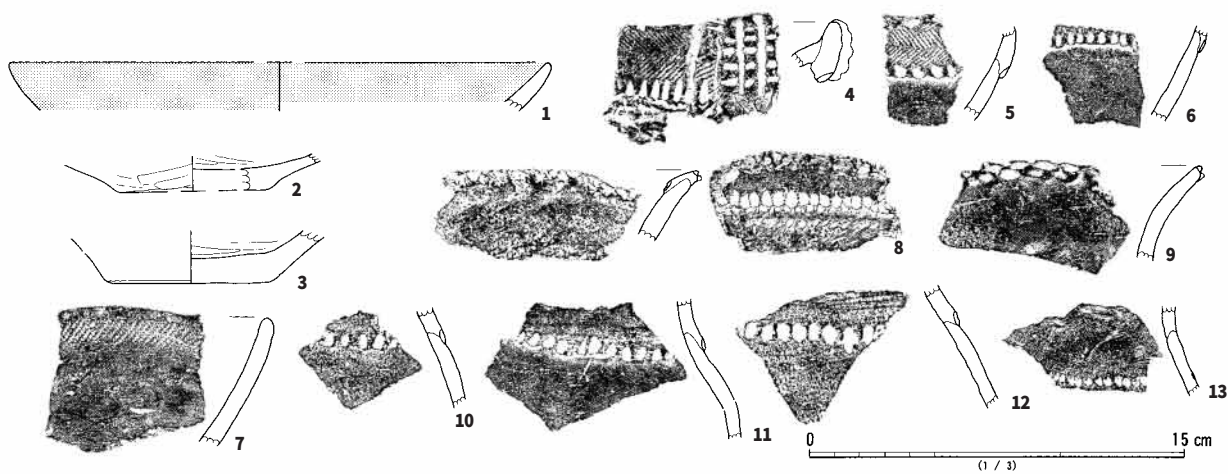
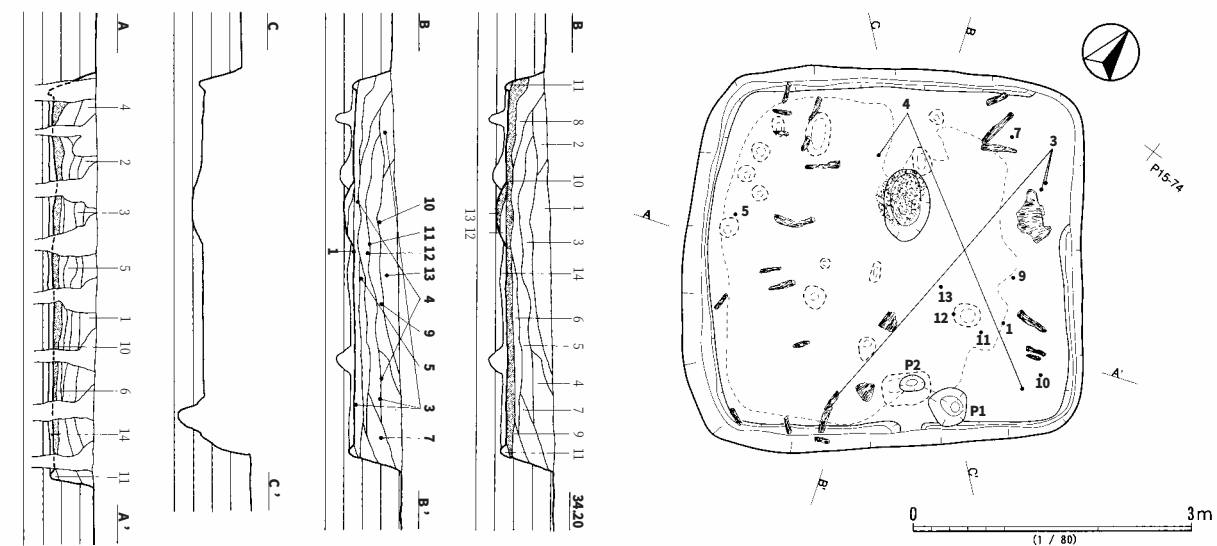
119号竪穴（住居跡）は、調査区P16-24区他に所在する。80号竪穴と重複し、本遺構に対し80号竪穴が古い。竪穴平面形態は、方形を呈し、全体規模は5.22（主軸）×5.56m、床面積は26.28m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.38m、主軸方位はN-23°-Wである。支柱穴はP1~4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。炉は、平面規模0.58×0.63mを測る。床は、貼り床構造をもつ。竪穴堆積土は1~7層に分層され、1・2・6・層が暗褐色土層、3・4層が暗灰褐色土層、5層が黒褐色土層、7層が褐色土層であり、2~5層は焼土、炭化物を多量に含む。117・118号

117号竖穴

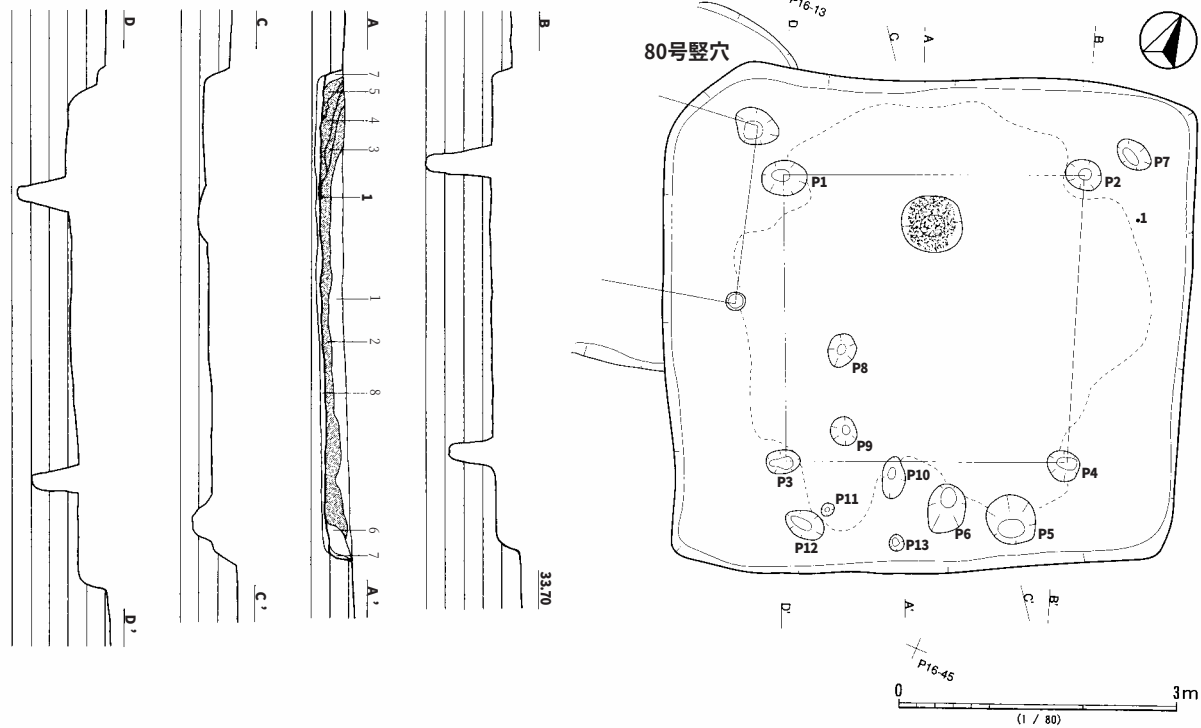


第146图 117号竖穴 遺物

118号竖穴



119号竖穴



第147图 118・119号竖穴 遺構遺物

竪穴と比較して、焼土の堆積が明瞭に認められた。8層はローム混じりの暗褐色土層であり、貼り床部に相当する。本竪穴は火災に遭っていると推定される。壁際に間層をはさむ焼土の堆積状況、遺存遺物が認められないことから、竪穴破棄後の焼却による可能性が高い。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

図示可能な土器は、1の高杯形土器のみであり、床面から出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代前期初頭と推定される。

120号竪穴（第148図、図版29・64）

120号竪穴（住居跡）は、調査区N16-69区他に所在する。南側は、攪乱坑により破壊され、ゴボウ耕作溝も全体に認められた。竪穴平面形態は、隅丸方形を呈し、全体規模は4.42（主軸）×4.22m、床面積は15.96㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.35m、主軸方位はN-1°-Eである。支柱穴は検出されなかった。P1・2・4は貯蔵穴に関連するものと考えられる。P1は凸堤が圍繞する。炉は、主軸線上やや東側で検出された。平面規模0.94×0.79mを測る。竪穴堆積土1～2層は黒褐色土層であり、2層は、焼土、炭化物、ローム粒を多量に含む。8層は暗褐色土層であり、貼り床部に相当する。P1内、3層が焼土を含む黒褐色土層、4層が暗褐色土層、5層が褐色土層、炉内、6層は黒褐色土層、7層は焼土層である。

本竪穴は火災に遭っていると推定される。焼土等の堆積状況からは、被災あるいは竪穴破棄後の焼却によるものかどうかの判断は難しい。

出土土器は、1が鉢形土器、3・4が壺形土器、6が小形壺形土器、7が甕形土器、2・5が高杯形土器であり、2・4は床面から、1は炉内から、3はP1内から、6・7は覆土から出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代前期初頭と推定される。

(2) 古 墳

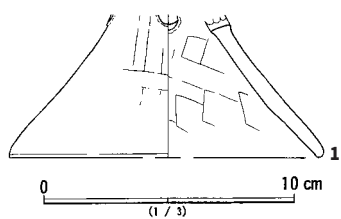
山田橋大塚台2号墳（第149・150図、図版33・66）

今回の調査区から検出された古墳は、本遺構1基のみである。ただし、分布地図上、「山田橋大塚台古墳群」としてすでに登録されているため、隣接する山田橋大塚台遺跡調査区で、一部周溝を調査した大形円墳を1号墳とし、本遺構を2号墳として報告する。

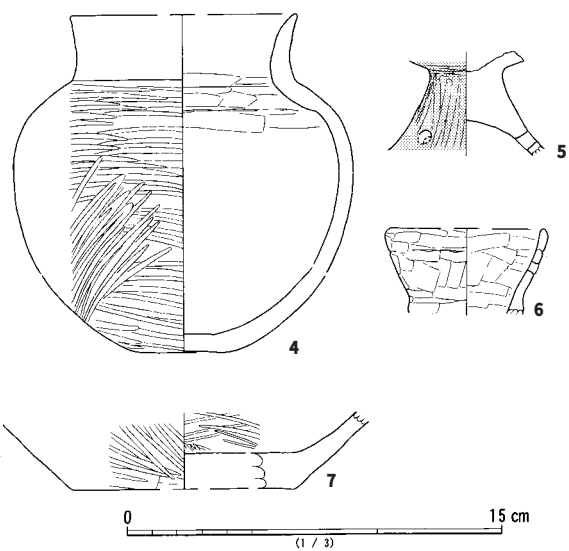
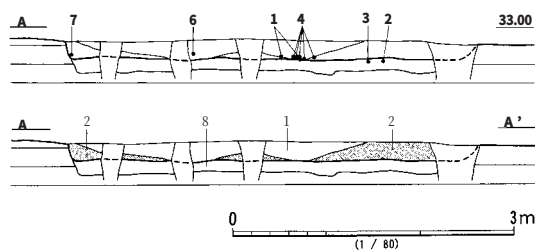
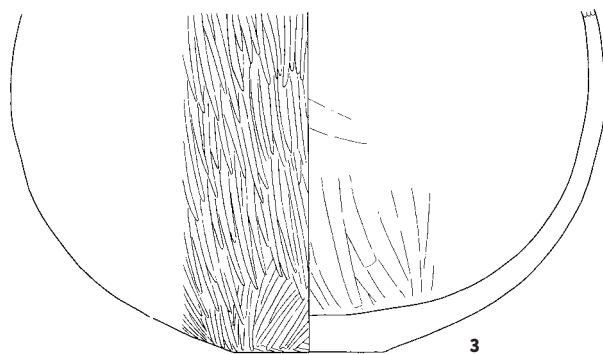
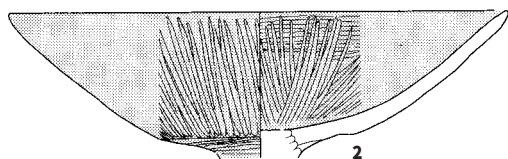
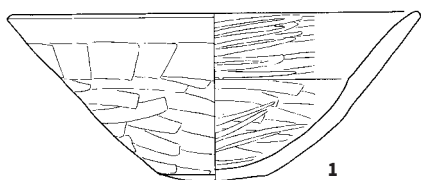
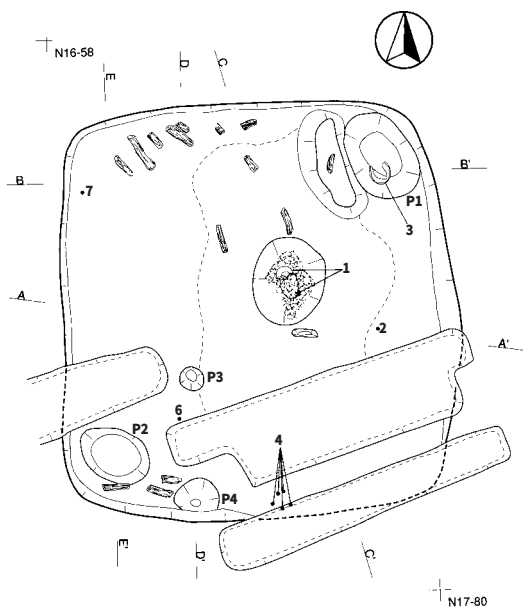
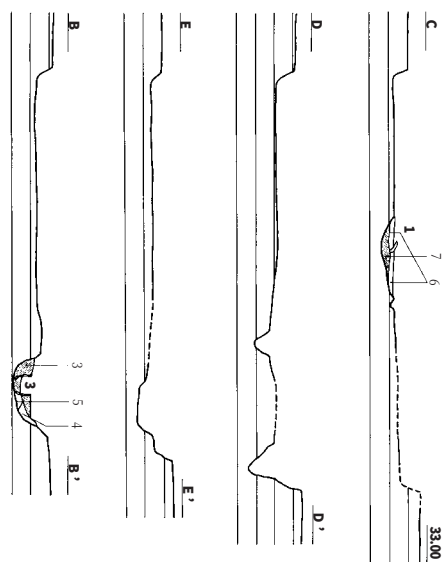
山田橋大塚台2号墳は、調査区R4-34区他に所在する。円墳であり、墳丘はまったく遺存していない。南北軸で、周溝外径15.27m、墳丘部（周溝内側下端）13.02m、周溝内径12.25m、東西軸で、周溝外径14.79m、方台部12.98m、周溝内径12.37mを測る。周溝の深さは、確認面から0.34～0.57m、周溝底の標高値は、31.73～32.40mであり、南東側が若干浅くなる。周溝覆土は、1～3層が黒褐色土層で、とくに3層はローム粒の混入が認められた。4・5層は暗褐色土層であり、5層はロームブロック、ローム粒を多量に含む。

埋葬施設は、北西部周溝底で検出された。周溝底面精査時に検出したため、掘り込み面は明らかではない。周溝底面からの深さは0.14mしかないため、周溝がある程度埋まった段階で設置されたものと推定される。平面は、掘形で1.97（主軸）×0.65m、棺痕跡部は1.47×0.44mであった。主軸方位はN-54°-Eを測る。土層は、6層が暗褐色土層、7・8層が褐色土層、棺裏込め土である9層はロームを主体とする。

119号竖穴

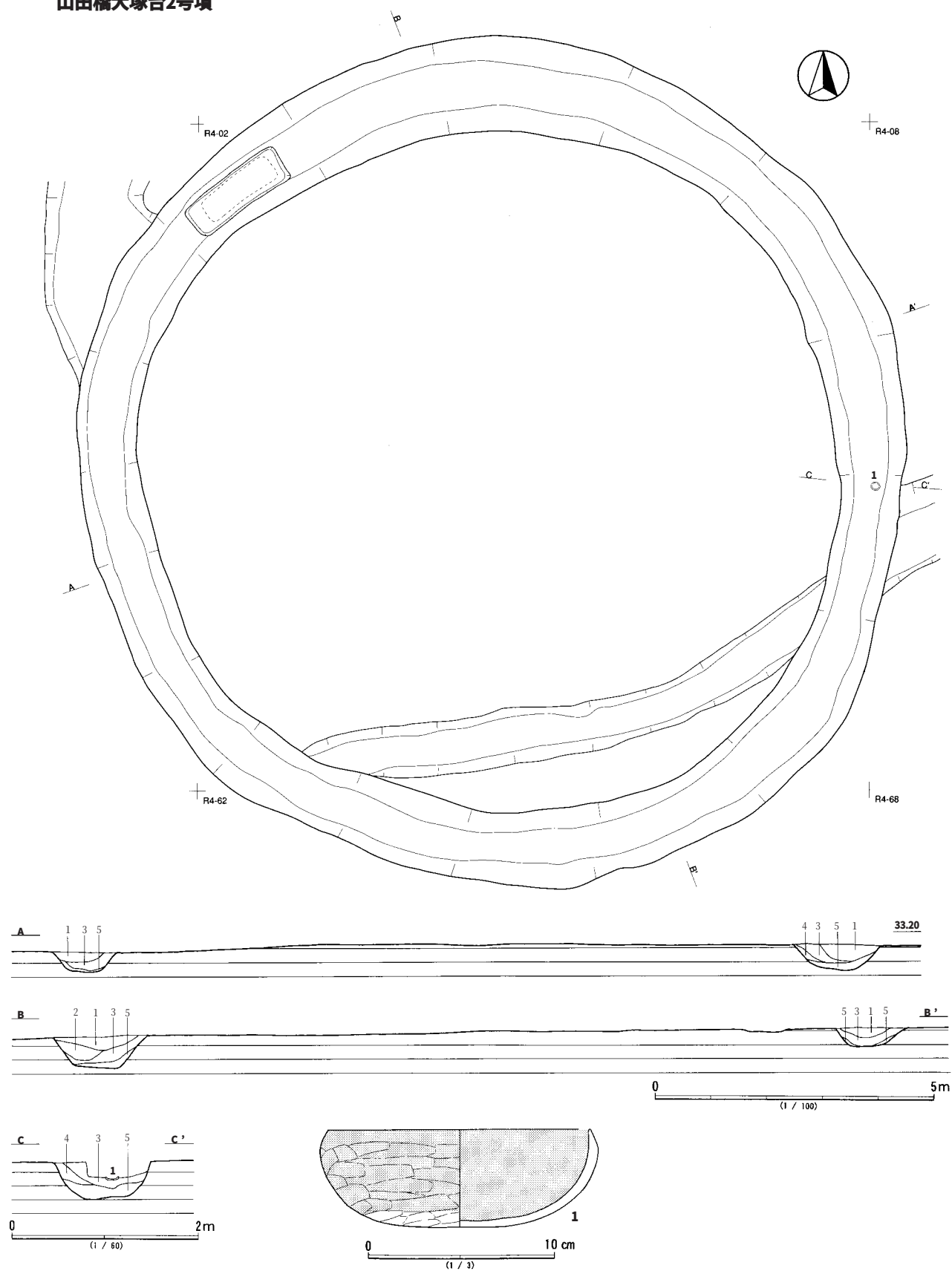


120号竖穴



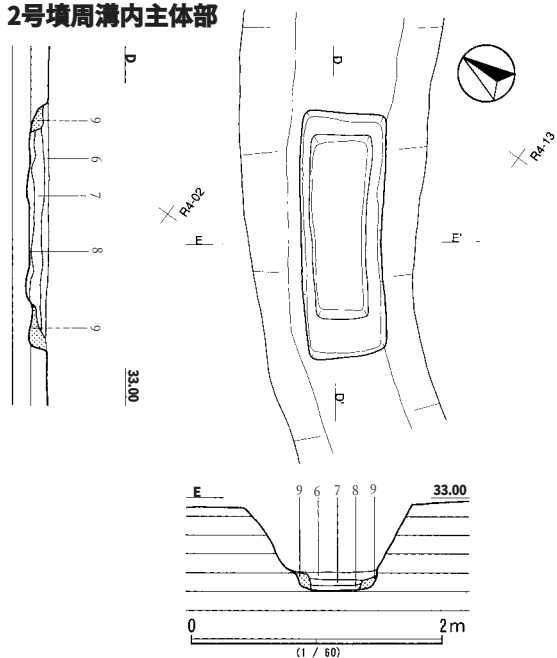
第148图 119・120号竖穴 遺構遺物

山田橋大塚台2号墳



第149図 山田橋大塚台2号墳 遺構遺物

2号墳周溝内主体部



第150図 山田橋大塚台2号墳 遺構

出土遺物は、東側周溝覆土中位から、完形の土師器杯形土器1点が出土した。

本遺構の時期は、出土土器から、鬼高式の最古段階、中期中葉に比定される。近接する稲荷台1号墳とほぼ同時期であるが、当該期の遺構は本調査区からは検出されていない。

なお、1号墳については、1993年（山田橋大塚台遺跡1次）に、古墳周溝の1／3程度を発掘調査している。

推定墳丘規模約27m程度の円墳であり、墳丘高は4mを測る。周溝断面は皿状で比較的浅いが、幅は約9mを測る。

現状では未整理のため、時期を特定することはできないが、墳丘部際より、開脚高杯の杯部、ないしは椀形土器が出土しているのを現地で確認している。これがともなうものであるならば、

弥生時代終末期から古墳時代前期初頭の円丘墓の可能性が考えられる。ただし、弥生時代終末期は、既調査区域内では、竪穴住居跡等の遺構は検出されていない。



山田橋大塚台古墳（1号墳）現況（2003年9月12日撮影）

第5節 古墳時代終末期以降

(1) 竪 穴

121号竪穴（第151・152図、図版9・29・66・84・85）

121号竪穴（住居跡）は、調査区S5-65区他に所在する。11号竪穴と重複し、本遺構に対し11号竪穴が古い。竪穴平面形態は、方形を呈し、全体規模は5.41（主軸）×5.73m、床面積は26.82m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.52m、主軸方位はN-31°-Wである。カマドは、北壁中央にある。煙道部は確認できなかったが、攪乱により不確実である。竪穴中央の炉状部は、火床面というよりはその下部の被熱ローム範囲であり、11号遺構に帰属する可能性が高い。主柱穴はP1-4である。周溝は全周する。P5は、本竪穴に帰属するものかを含め不明。北東隅部、破線図示範囲は風倒木痕である。本竪穴より古い時期の所産であるが、掘りすぎにより、貯蔵穴の有無は確認できない。掘形部については不明。ただし、竪穴中央部は貼り床ではない。竪穴堆積土は1-7層に分層され、1-5層が暗褐色土層、6層が褐色土層であり、2層には若干の焼土が認められた。本遺構は部分的にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。北西隅は攪乱坑である。

出土土器は、1-4・6が杯形土器、5・10が椀形土器、14-16が高杯形土器、7が甑形土器、13が須恵器蓋、8・9・11・12甕形土器である。2-6は、漆等による黒色処理が施される。1は床面から、6・8・12はカマド内から出土している。土器以外では、土製支脚1点、刀子状鉄製品1点が出土している。ともに、床面からの出土。

本竪穴の時期は、古墳時代終末期と推定される。

122号竪穴（第152・153図、図版29・66・84・85）

122号竪穴（住居跡）は、調査区R6-45区他に所在する。25号竪穴と重複し、本遺構に対し25号竪穴が古い。竪穴平面形態は、方形を呈し、全体規模は3.98（主軸）×3.95m、床面積は12.85m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.33m、主軸方位はN-27°-Wである。カマドは、北壁中央にある。煙道部は攪乱により確認できなかった。主柱穴はP1-4である。周溝は全周する。掘形、貼り床構造は不明。竪穴堆積土は1-4層に分層され、1・4層が暗褐色土層、2層が黒褐色土層、3層が褐色土層である。南壁際床面から覆土下層に粘土塊が認められた。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

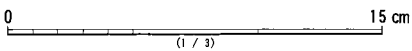
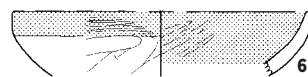
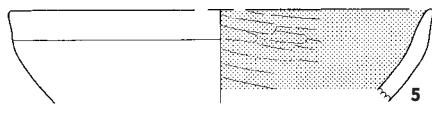
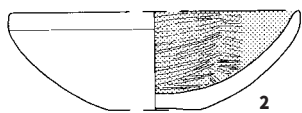
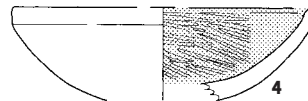
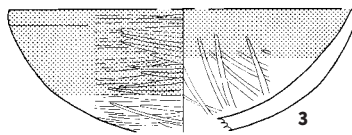
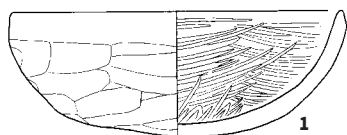
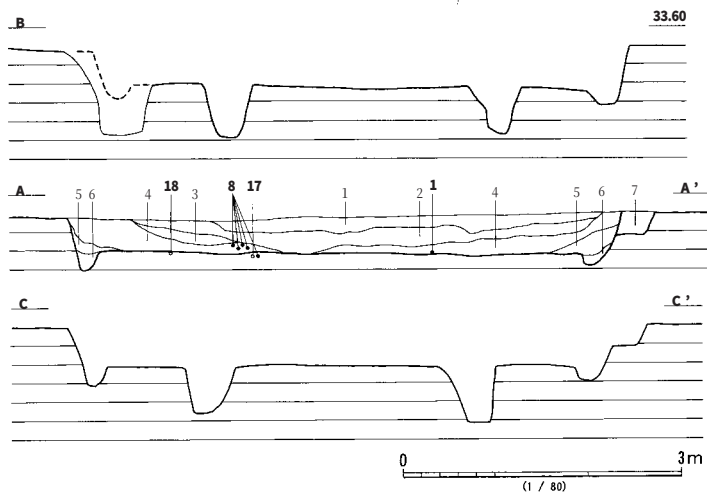
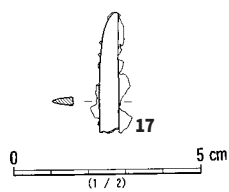
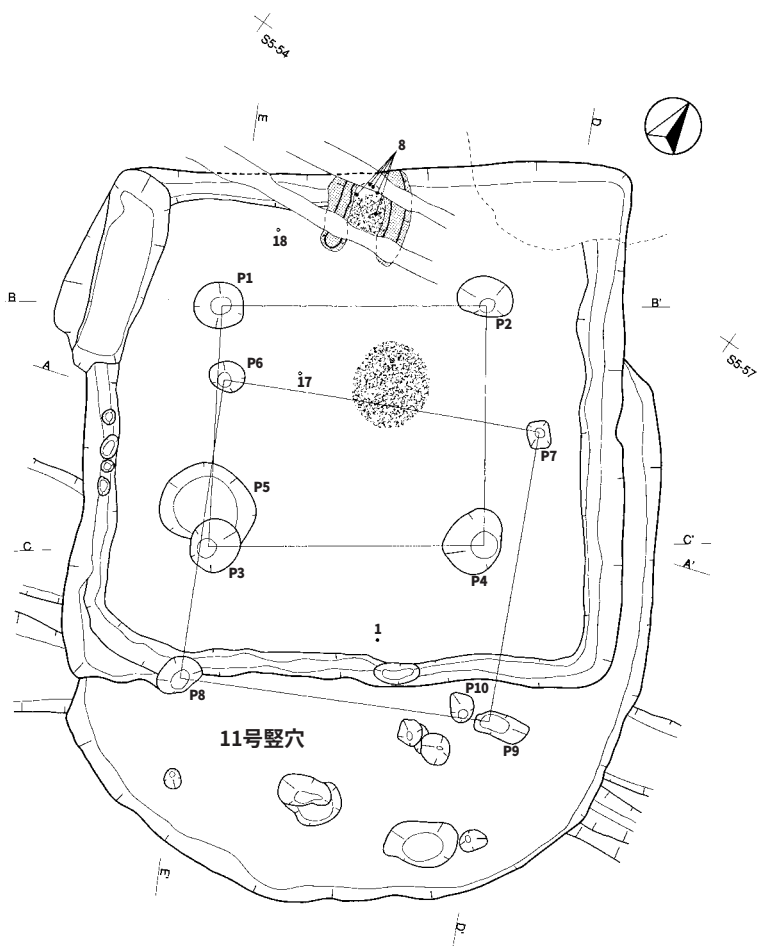
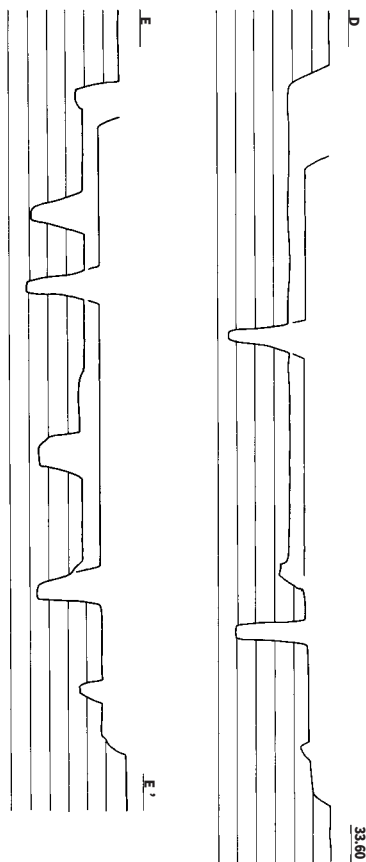
出土土器は、1・2・4が杯形土器、3が甕形土器、5が高杯形土器であり、1は床面から、3・4は覆土から出土している。土器以外では、土製支脚1点、鉄製鎌1点が出土している。支脚はカマド定位置からの出土。鎌は出土状況不明。

本竪穴の時期は、古墳時代終末期と推定される。

123号竪穴（第153図、図版29・66・85）

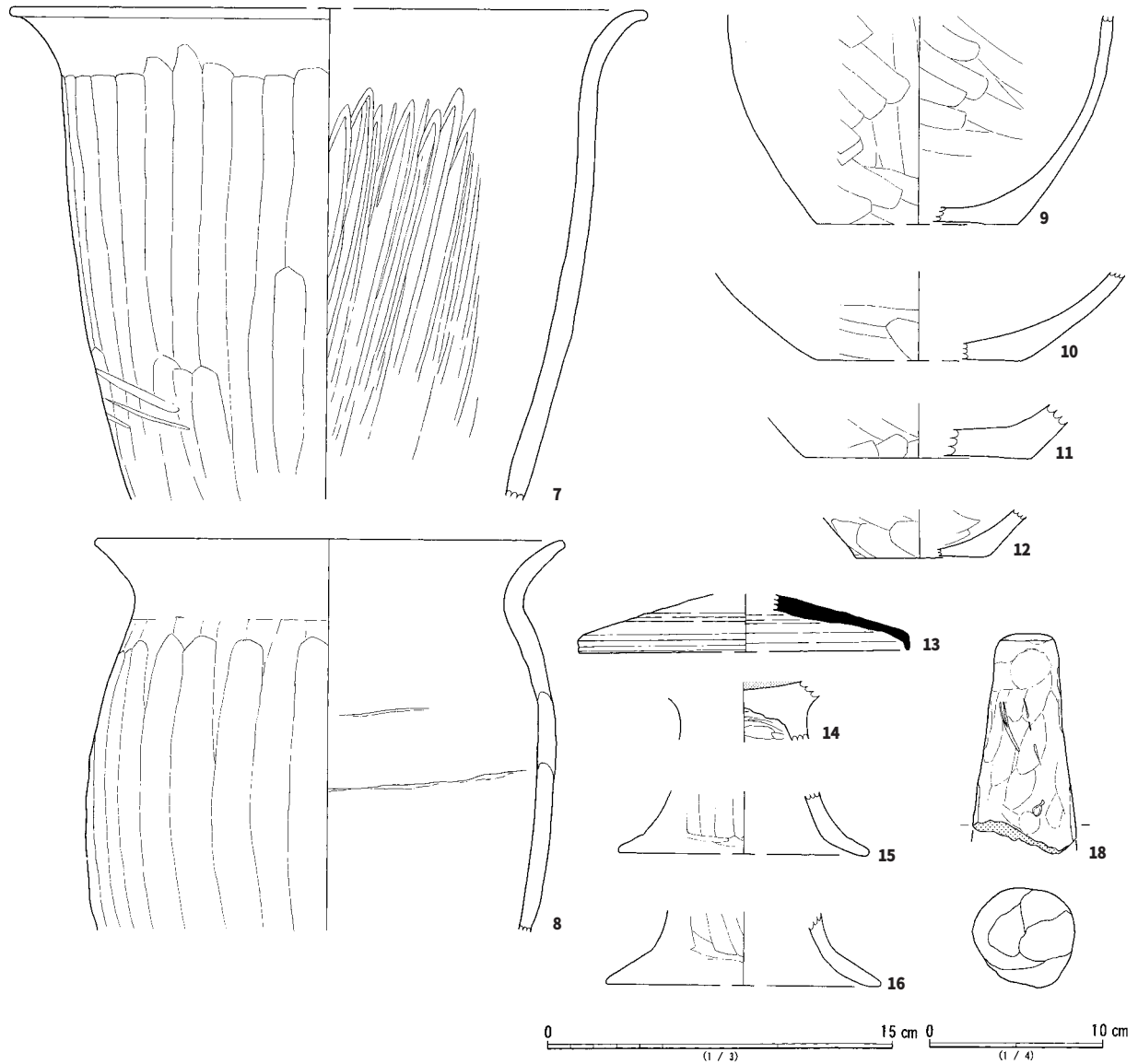
123号竪穴（住居跡）は、調査区R6-19区他に所在する。竪穴平面形態は、方形を呈し、全体規模は4.62（主軸）×4.42m、床面積は17.99m²を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.33m、主軸方位はN-27°-Wである。カマドは、北壁中央にある。煙道部を含む竪穴主軸長は5.16mを測る。主柱穴はP1-4であり、P5は貯蔵穴、P6は出入口施設である。周溝は全周する。掘形、貼り床構造は不明。竪穴堆積土は1-3層に分層され、1層が暗褐色土層、2層が焼土層、3層が褐色土層である。本竪穴は火災に遭っていると推定される。焼土等の堆積状況からは、被災あるいは竪

121号竖穴

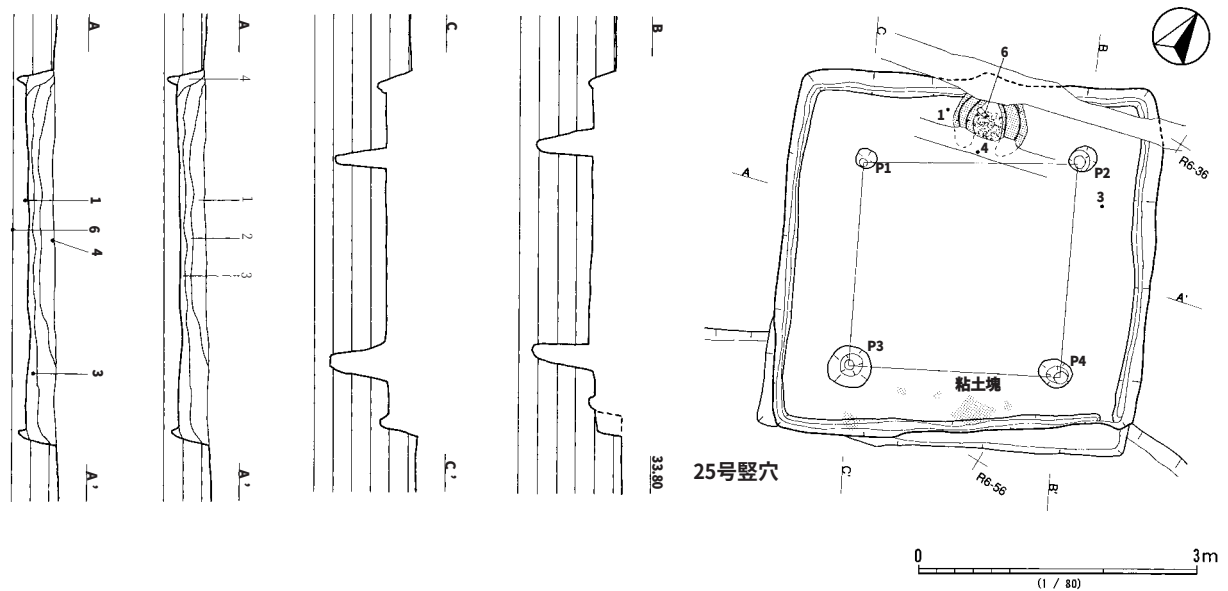


第151图 121号竖穴 遺構遺物

121号竖穴

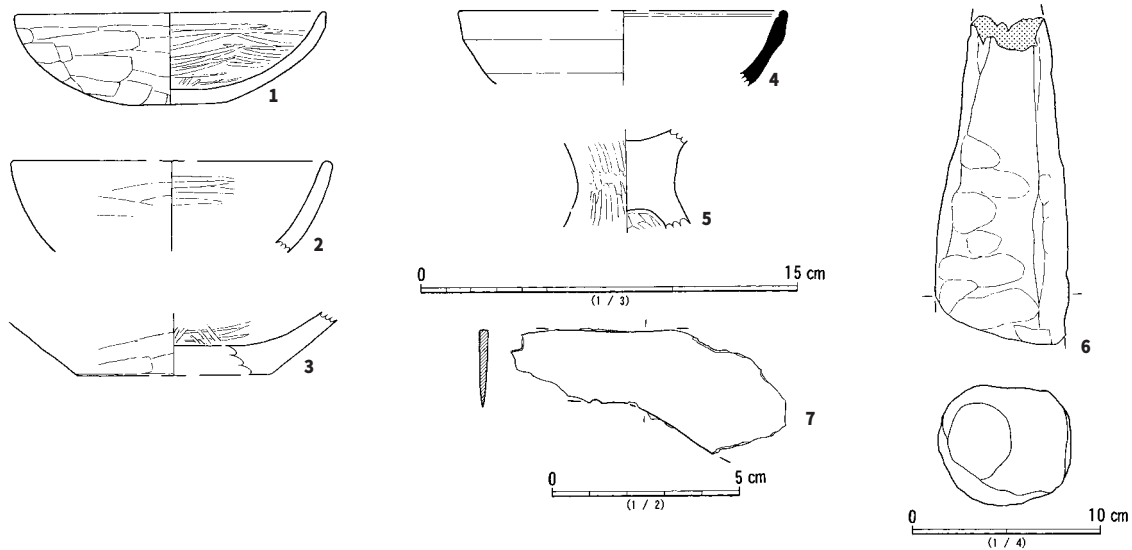


122号竖穴

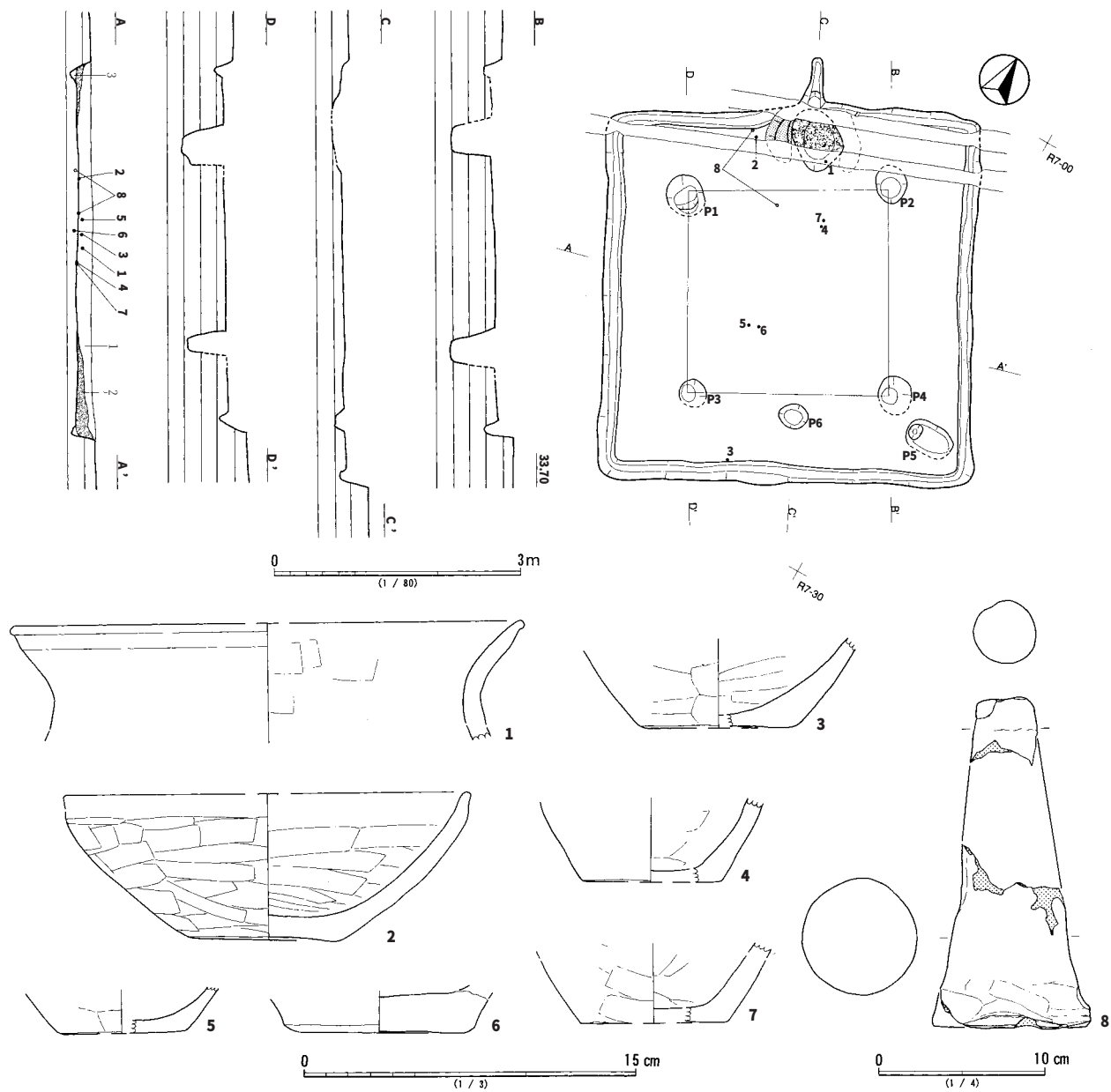


第152図 121・122号竪穴 遺構遺物

122号竖穴



123号竖穴



第153图 122・123号竖穴 遺構遺物

穴破棄後の焼却によるものかどうかの判断は難しい。本遺構は全体にゴボウ耕作溝による攪乱をうけている。

出土土器は、2が鉢形土器、1・3～7が甕形土器であり、2・4・6・7は床面から、1・3・5は覆土から出土している。土器以外では、カマド脇から土製支脚が出土している。

本竪穴の時期は、古墳時代終末期と推定される。

124号竪穴（第154図、図版30）

124号竪穴（住居跡）は、調査区S6—55区他に所在する。15号竪穴と重複し、北半部は15号竪穴覆土上に床をつくる。竪穴平面形態は、やや横長の長方形を呈し、全体規模は2.97（主軸）×3.38m、床面積は8.24㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.22m、主軸方位はN—4°—Wである。支柱穴は検出されなかった。カマドは、北壁中央主軸線上やや東側に所在する。煙道部を含む竪穴主軸長は3.07mを測る。P1は出入口施設である。掘形部、貼り床構造は不明。

図示可能な遺物は、出土していない。

本竪穴の時期は、古墳時代終末期以降と推定されるが不明。

125号竪穴（第154図、図版30・66・85）

125号竪穴（住居跡）は、調査区R8—92区他に所在する。20号竪穴と重複し、本遺構に対し20号竪穴が古い。中央南北を攪乱坑が縦断する。竪穴平面形態は、やや横長の長方形を呈し、全体規模は4.43（主軸）×5.09m、床面積は19.33㎡を測る。建て替えは確認できない。確認面からの深さは0.30m、主軸方位はN—12°—Wである。支柱穴はP1～4である。カマドは、北壁中央主軸線上やや東側に所在する。P5は、掘形面で検出された土坑状の施設である。ただし、本遺構にともなうものであるかどうかは不明。竪穴堆積土は1～12層に分層され、1・4・6・7層が暗褐色土層、2・3・5・10層が黒褐色土層、8層が褐色土層、9層が黄褐色土層、11層が暗黄褐色土層であり、12層は貼り床部に対応する。カマド部、13層が黄白色粘土層、14・17層が黒褐色土層、15層が被熱した粘土ブロックを主体とする層、16層が灰褐色土であり、15層は天井部の崩落によるものと推定される。

出土土器は、3が杯形土器、1・4・5が甕形土器、2が須恵器蓋であり、1～3は覆土から出土している。土器以外では、軽石1点、同一個体と推定される支脚2点が出土している。支脚は床面からの出土。

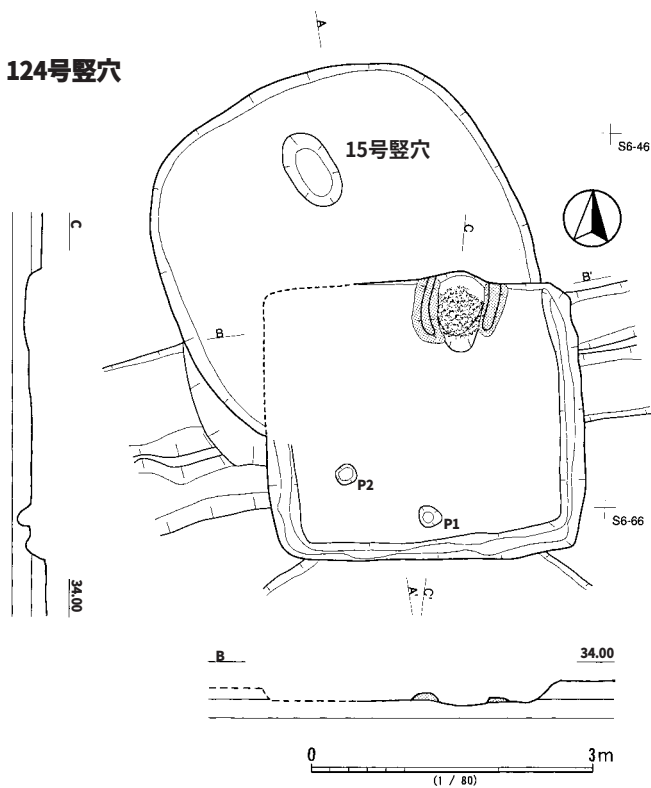
本竪穴の時期は、古墳時代終末期から奈良時代と推定される。

(2) 土 坑

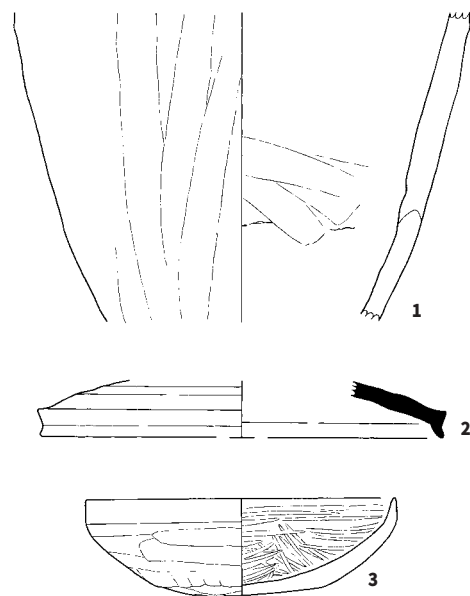
7号土坑（第155図、図版41・75・87）

7号土坑は、調査区R8—00区他に所在する。平面形態が円形で、すり鉢状の断面形態をもつ。所謂「井戸状遺構」である。平面規模は、4.82×4.60m、確認面からの深さは2.52mを測る。上部に、上屋に関連するものか、斜行するPitが検出されている。軸方位を、N—22°—E前後にとった場合、ほぼ左右対称のPit配置が復原できる。Pitの深さは0.5m前後を測る。西側には、テラス状の平坦部がつけられる。柱列の平側にあたることから、本遺構に本来ともなう可能性が高い。覆土は15層に分層される。1層は灰褐色土層、2層は黒褐色土層、3～6層は暗褐色土層であり、6層はロームブロックを部分的に多量に含む。6層以下、6・7層、7・8層間は明瞭に分層される。1～6層は、自然堆積層と判断されるのに対して、7層は大小ロームブロック、ローム粒を多量に含む暗褐色土層であり、しまりをま

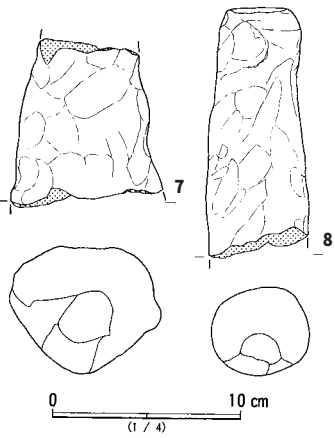
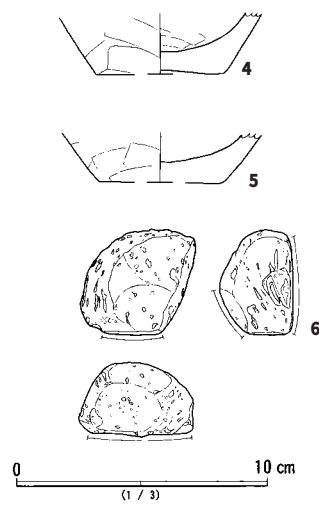
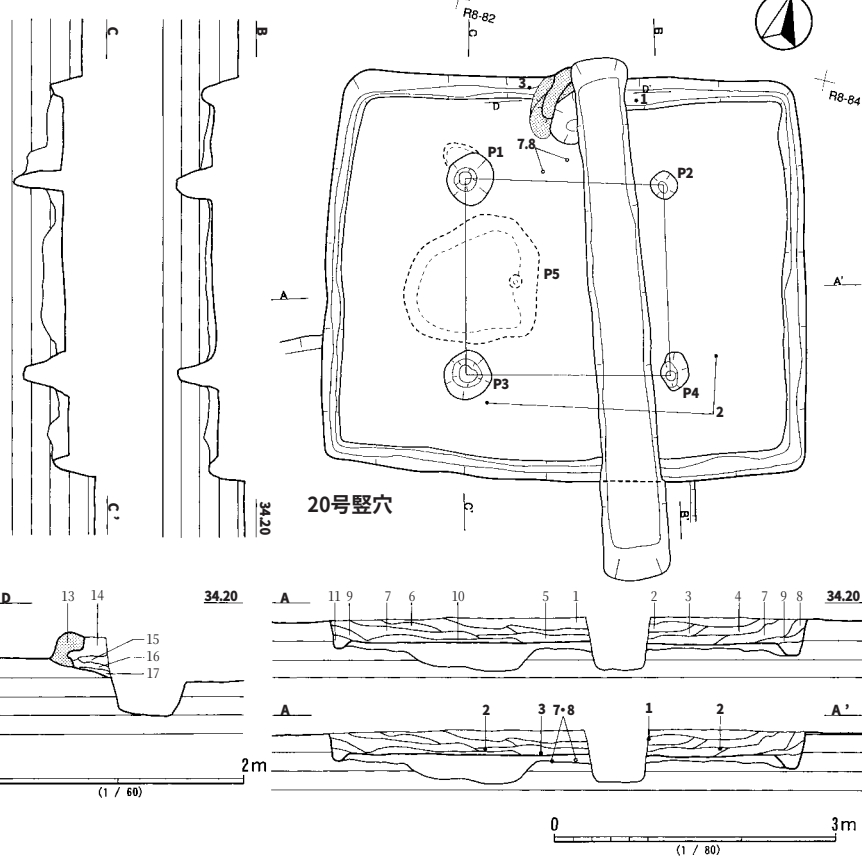
124号竖穴



125号竖穴

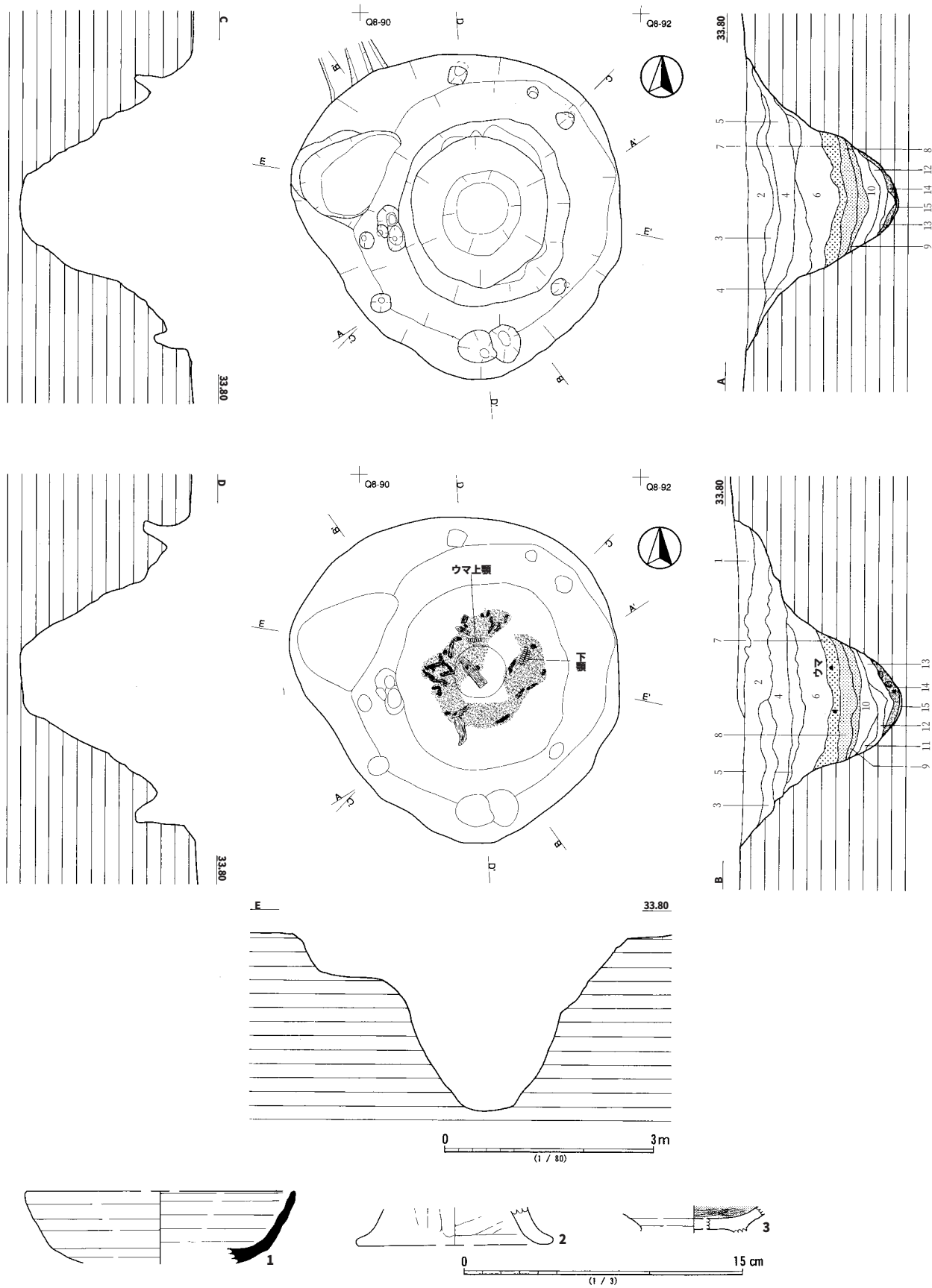


125号竖穴



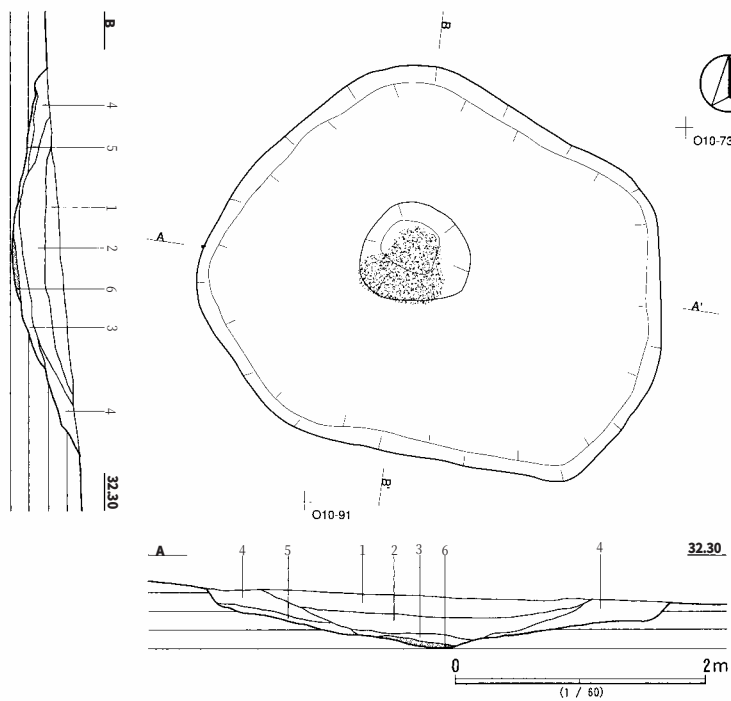
第154图 124・125号竖穴 遺構遺物

7号土坑

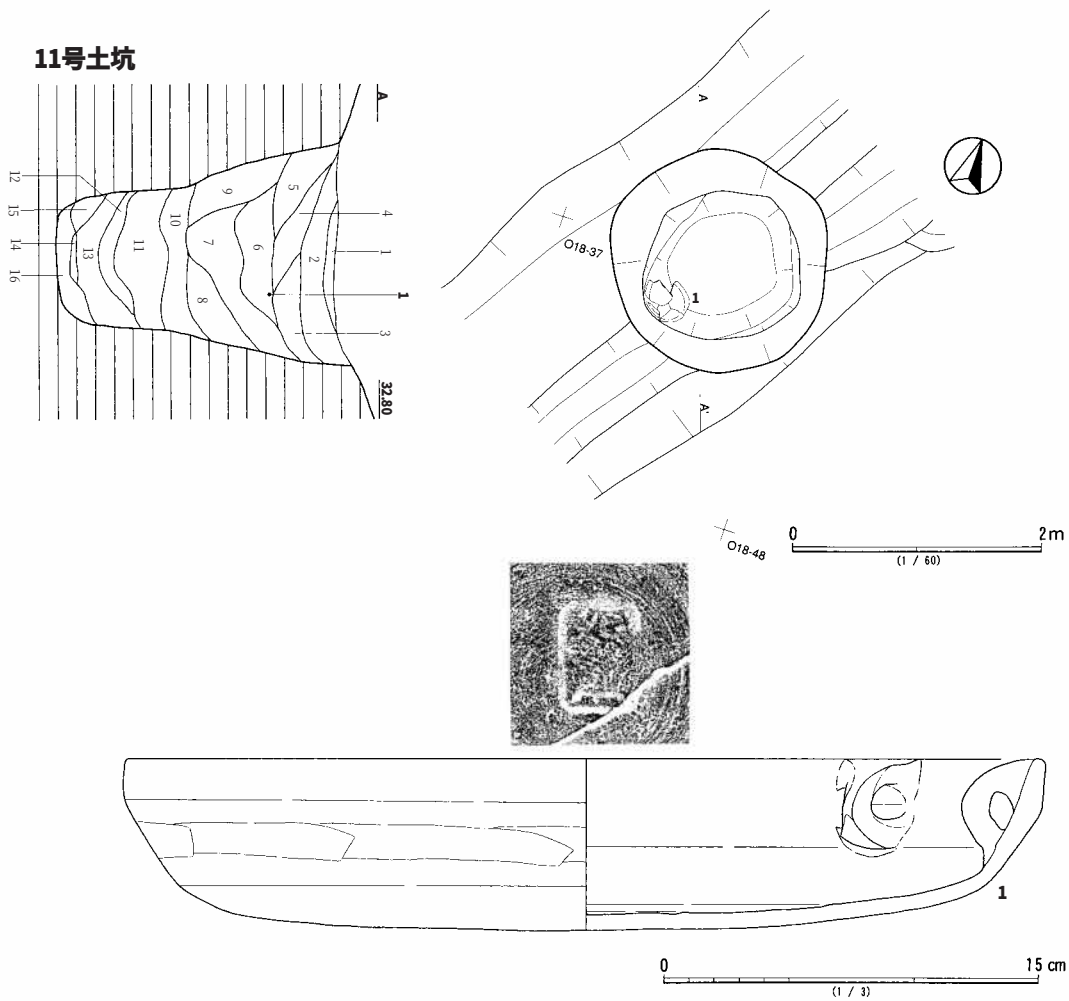


第155図 7号土坑 遺構遺物

10号土坑



11号土坑



第156图 10・11号土坑 遺構遺物

ったく欠く。8・9層は黒褐色土層であり、きわめて硬質であった。10層も8・9層と基本的に同質であったが、硬化は認められなかった。11層はロームブロックの堆積層、12・13層はしまりのない黒褐色土層であり、酸化鉄分が目立つ。14層は焼土層であり、大小の炭化材を多量に含む。壁面も明瞭に焼けており、投棄されたものではない。15層はシルト質の暗灰色土層である。

7層から、一体分のウマの上下顎臼歯が検出されている。おそらく、人為的に踏み固められた8層上におかれ、7層はこれを被覆したものと推定される。7層にいたる過程は、明らかに、なんらかの意図をもった人為的な行為としてとらえられる。ウマの上下顎臼歯については、第3章第2節に詳述してある。なお、本遺構は、実際雨天時にも滞水することはなく、「井戸」としての機能は考えられない。

確実に、本遺構にともなう遺物は存在しない。1は須恵器杯、2は土師器高杯、3は内面黒色処理の高台付杯である。本遺構の時期については、出土土器それぞれが異なる時期であるため、確定的なこととは言えない。ここでは、他遺跡の類例から、1を根拠とし、8世紀中葉頃に推定しておきたい。

8号土坑（第162図、図版41・66）

8号土坑は、調査区M15－38区他に所在する。2号溝に接し、同溝に関連する可能性が高い。平面形態は不定形で、平面規模は1.48×0.87m、深さは確認面から0.11mを測る。覆土は1～3層に分層され、1層は黒褐色土層、2層は暗褐色土層、3層は暗灰褐色土層である。

遺構としての認定は、ほぼ完形のロクロ土師器杯の出土による。9世紀中葉に比定される。

9号土坑（第166・169図、図版75）

9号土坑は、調査区O11－17区他に所在する。4号溝に接している。土坑というよりは、4号溝肩部に掘り込まれた段状の遺構である。底面の凹凸も激しく、不定形である。約7.4×4.3mの範囲をもち、深さは確認面から約0.9mを測る。

遺構としての認定は、緑釉陶器片が出土したことによる。ただし、出土状況は不明であり、時期的にも特定できるわけではない。少なくとも、なんらかの独立した機能を想定することは困難であり、4号溝に関連する可能性が高いと思われる。他に、北宋銭（「熙寧元寶」）が出土している（第18表、図版84）。

10号土坑（第156図、図版42）

10号土坑は、調査区O10－71区他に所在する。浅いすり鉢状の土坑であり、中央底面に炉状の施設をそなえる。平面規模は4.98×4.09m、深さは確認面から0.69mを測る。長軸方位は、N－66°－Wである。覆土は1～6層に分層され、1～3層は黒褐色土層であり、2層が最も暗色を呈す。4層は暗褐色土層、5層は褐色土層、6層は火床面をとともなう焼土層である。

遺物は出土していない。

11号土坑（第156図、図版42・66）

11号土坑は、調査区O18－37区他、3号溝内に所在する。平面形態は円形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれている。平面規模は1.79×1.74m、深さは確認面から2.43mを測る。覆土は、1層がハードロームブロックを多量に含む黒褐色土層、2・3・5・6層は明黒褐色土層、4層は黒褐色土層であり、2～6層はしまりを欠く。7・8層は明黒褐色土層、9・10・13～16層は黒褐色土層、11・12層は暗褐色土層であり、7～9層は硬化している。

遺物は、完形の焙烙が6層レベルから出土している。

(3) 溝（道路跡）

1号溝（第157・158・159・160・161・171図、図版42・43・44）

1号溝は、調査区中央東側、L14～P15区を縦断する。今回の調査による検出全長は98.2mで、南側山田橋大塚台遺跡、北側山田橋表通遺跡に接続する。走行方向はおおむねN-20°-Wで、調査区北側でN-3°-Wへゆるやかに屈曲する。確認面での溝全体幅は、断面B部分で4.53m、南側へむかって幅広となり、断面Dで6.94m、断面Gで8.47m、断面Jで10.18mを測る。

确实には4条の重複、3回の掘り直しによって形成される。4条の溝は、順次西側へ向かって掘り直されており、最も新しい段階のものから、1A号溝、1B号溝、1C号溝、1D号溝とする。このうち1B号溝は、1A号溝の掘削により、土層断面上部分的に確認できるにすぎない。1A号溝、1B号溝、1C号溝は、いずれも断面形状が葉研状を呈し、比較的短期間のうちに継起的に掘削されたものと推定される。これに対して1D号溝は、皿状の断面形状を呈し、底面に路盤状の硬化面をもつことから、当初から道路として開削されたものと推定され、1A～C号溝とは、時期、性格を異にする。

1A号溝は、断面E部分で現存幅3.45m、底面から西側を反転した復原幅で約4.4m、確認面からPit部分をのぞく深さ1.5mを測る。断面Gで現存幅4.34m、復原幅5.0m、深さ2.18m、断面Kで現存幅4.3m、復原幅5.6m、深さ1.48mを測る。底面は溝状に掘り込まれ、不規則にPitが穿たれる。Pitを含む全体の形状はV字形に近い。底面の標高は、断面A～E間で約31.5m前後、断面F～H間で約30.6m前後と最も深くなり、断面J部分付近以南は、底面溝が途切れることにより32.2m前後になる。

1B号溝は、おおむね1A号溝と重複し、全体の形状は明らかではないが、1A号溝、1C号溝に比してやや浅くなるものと推定される。

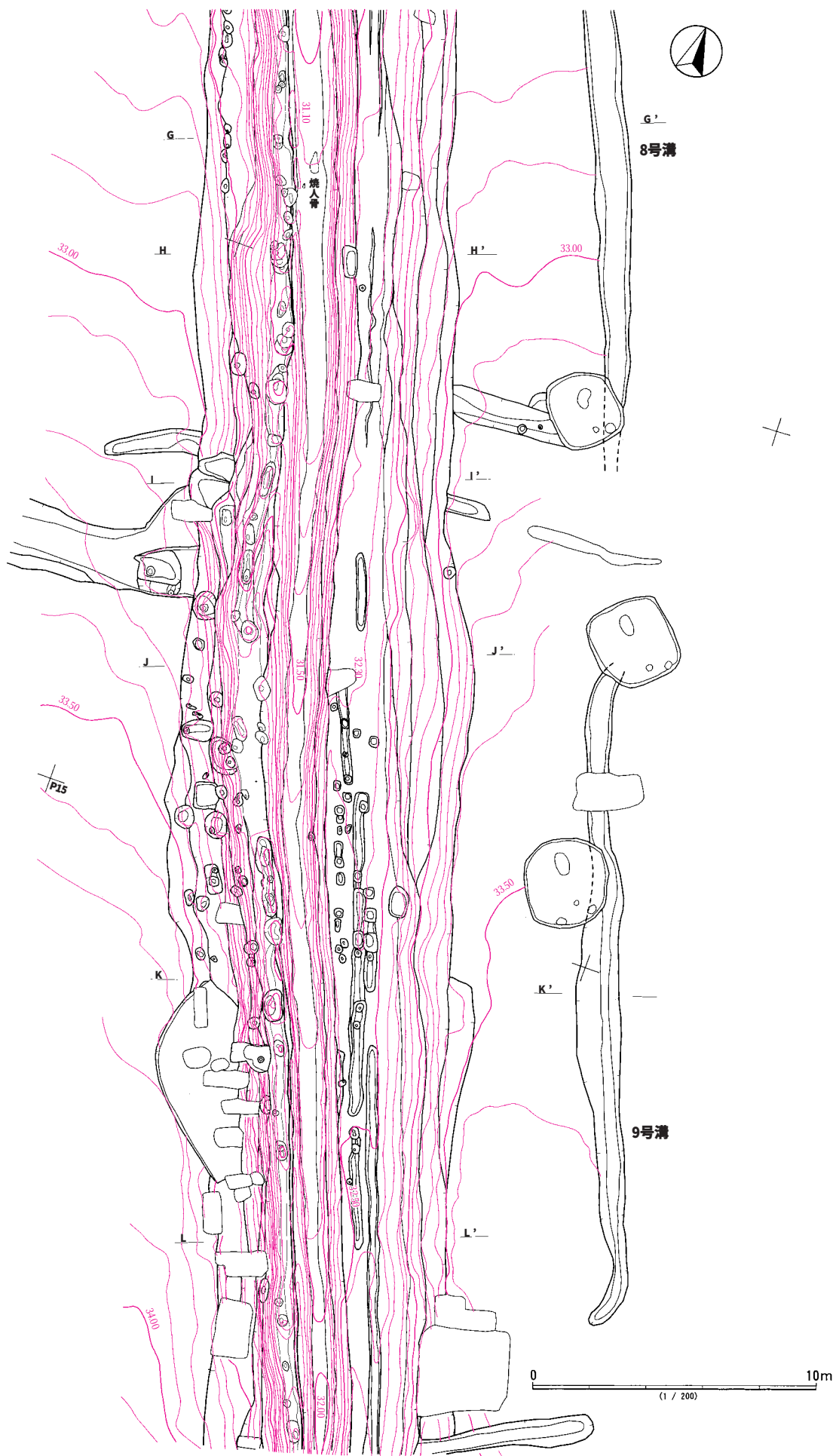
1C号溝は、断面E部分で、現存幅2.55m、底面から西側を反転した復原幅約4.0m、確認面からの深さ1.75mを測る。断面Gで現存幅2.33m、復原幅3.3m、深さ1.77m、断面Iで現存幅2.99m、復原幅3.8m、深さ1.88m、断面Kで現存幅3.17m、復原幅4.9m、深さ1.9mを測る。底面の標高は、おおむね31.0～31.5m前後で安定しているが、調査区南端にむかい若干浅くなる。

1D号溝は道路跡である。調査区北端では、1A～C号溝と完全に重複する。西側上端の遺存が全くないため、全体幅を復元することができない。また、断面形が皿状となり、側溝も確認できないため、路肩と路面部分の境界も判然としない。断面Eで、現存幅3.28m、底面現存幅約1.5m、確認面からの深さ0.67m、断面Gで、現存幅2.77m、底面現存幅約1.22m、確認面からの深さ0.51m、断面Iで、現存幅3.73m、底面現存幅約1.7m、確認面からの深さ0.94m、断面Kで、現存幅4.78m、底面現存幅約2.2m、確認面からの深さは1.07m、中心部側で1.02mを測る。底面の標高は、おおむね32.2m前後で安定しているが、調査区南端にむかい若干浅くなる。断面Lで32.6mを測る。

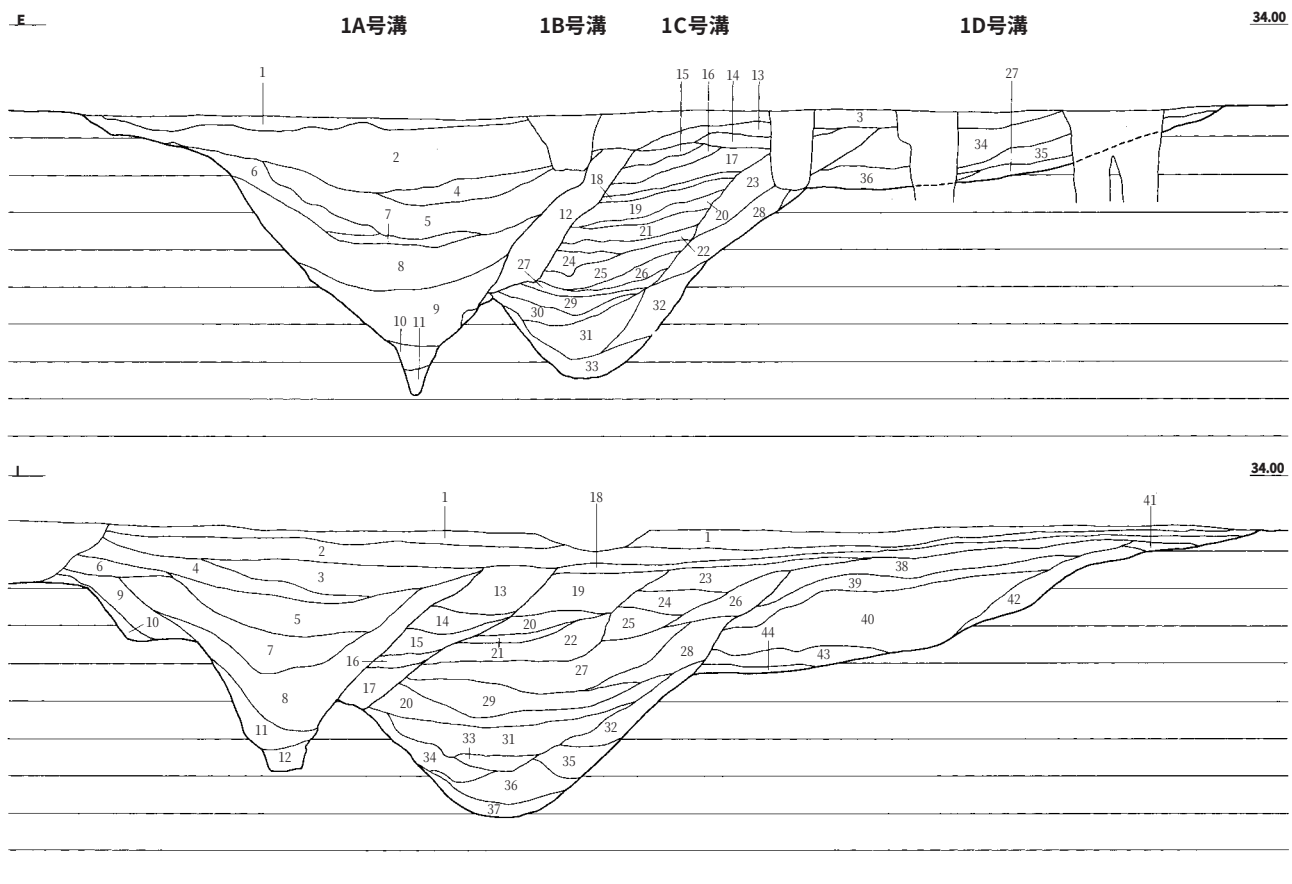
断面E堆積土は、1～3層が溝全体を覆う灰褐色土層であり、1層に富士宝永の火山灰が認められる。2層は焼土粒を比較的多量に含む。1A号溝堆積土は4～11層である。5・7～11層は灰褐色土層であり、5層は全体にしまりが強い。4層はロームを主体とする褐色土層、6層は暗灰褐色土層である。12層は1B号溝覆土であり、灰褐色土層である。1C号溝堆積土は13～33層である。14～17・20～22・24～25・28・29・32・33層が灰褐色土層であり、14・15・17・20・21層に硬化が認められる。13・18・19・23・26・27層は暗灰褐色土層である。30・31層がロームを主体とする褐色土層であり、31層は硬化する。1D号溝堆積土は、34～37層である。34・35層は黒褐色土層、37層は暗灰褐色土層、36層



第157図 1号溝 遺構 (1)



第158图 1号溝 遺構 (2)



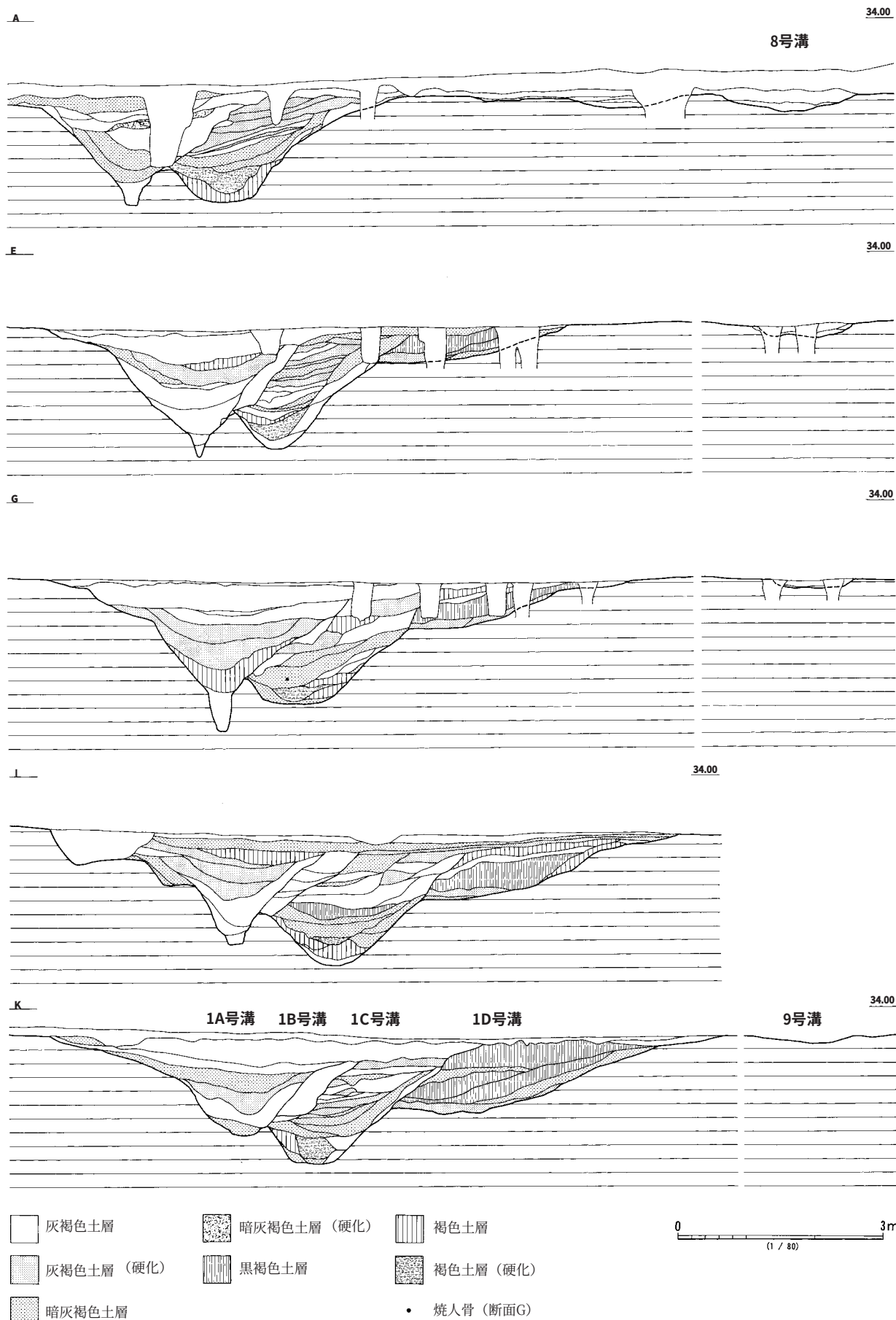
第159図 1号溝 遺構 (3)

0 2m
(1 / 50)

は灰褐色土層で路盤状に硬化する。

断面I堆積土は、1・2層が溝全体を覆う。1層は上層に富士宝永の火山灰を多量に含む灰褐色土層、2層は暗灰褐色である。1A号溝堆積土は3～12層である。4～8・11・12層は灰褐色土層、9・10層は暗灰褐色土層、3層はロームを主体とする褐色土層である。3～7層は全体にしまりが強い。1B号溝堆積土は13～17層であり、いずれも灰褐色土層である。1C号溝堆積土は18～37層である。20・22～28層が灰褐色土層、18・19・21・29～32・35・37層が暗灰褐色土層、33・34・36層がロームを主体とする褐色土層である。このうち、27層には多量のロームが混入する。また、23・25・33層は硬化が認められ、とくに33層上面は路盤状に硬化する。1D号溝堆積土は38～44層である。38・42層はロームを主体とする褐色土層であり、38層は路盤状の硬化ブロックを含む。39・41・43・44層は灰褐色土層、40層は黒褐色土層であり、43・44層は路盤状に硬化する。

全体の堆積状況は、各断面およそ一致する。富士宝永の火山灰を含む断面E・Iの各1層により、埋没時期をおおむね限定することができる。1A号溝は、灰褐色土を基調とし、覆土中位に硬化層が形成される。1C号溝は、覆土上部に硬化層を含む灰褐色土があり、その下部に暗灰褐色土層が形成される。下層に褐色土層があり、その上面は部分的に路面状の硬化が認められる。1D号溝覆土は、黒褐色土を基調とし、1A～1C号溝とは明確に分離される。路面による硬化層は底面に限定される。ただし、断面G・Iでは上層には埋め戻しによると推定される褐色土層があり、断面Iでは、路面によ



第160图 1号溝 遺構 (4)

ると推定されるブロック状の硬化層が検出されている。

なお、1C号溝断面G南側で、焼骨を含む焼土層が確認されている。

1号溝に並行する8・9号溝は、覆土が灰褐色土からなり（断面A・E・G）、時期的に1D号溝と関連するものとは考えられない。この1号溝周辺では、他にも走行方向をほぼ一致させる溝、硬化面が確認されている。とくに1号溝西側では耕作土直下まで多数の硬化面が検出されたが、これらについてはすべてを記録していない。1号溝断面Iでも、宝永の火山灰を含む1層下に、連続的な路面による硬化層が確認されている（18層）。

出土遺物は、各時代にわたるが、古代についてはおおむね9世紀後葉以降を中心とする（第171図3～7）。中世については、龍泉窯系青磁盤（第170図3・4）・碗1点、瀬戸・美濃系陶器平碗1点、常滑系炆器甕（第170図2）計2点が出土している。これらの層序的な関係は不明である。

1D号溝（道路跡）は、官衙関連遺跡と推定される稻荷台遺跡に接続するルート上に存在する。今回の発掘調査では、その開削時期に対する積極的な裏付けを得るにはいたっていない。1A～1C号溝については、道路跡ではなく区画溝として掘削され、江戸時代前期には埋没したことが推定される。中近世の遺物については、第3表に記載した。

2・3号溝（道路跡）（第162・163・164・171図、図版43・44・45）

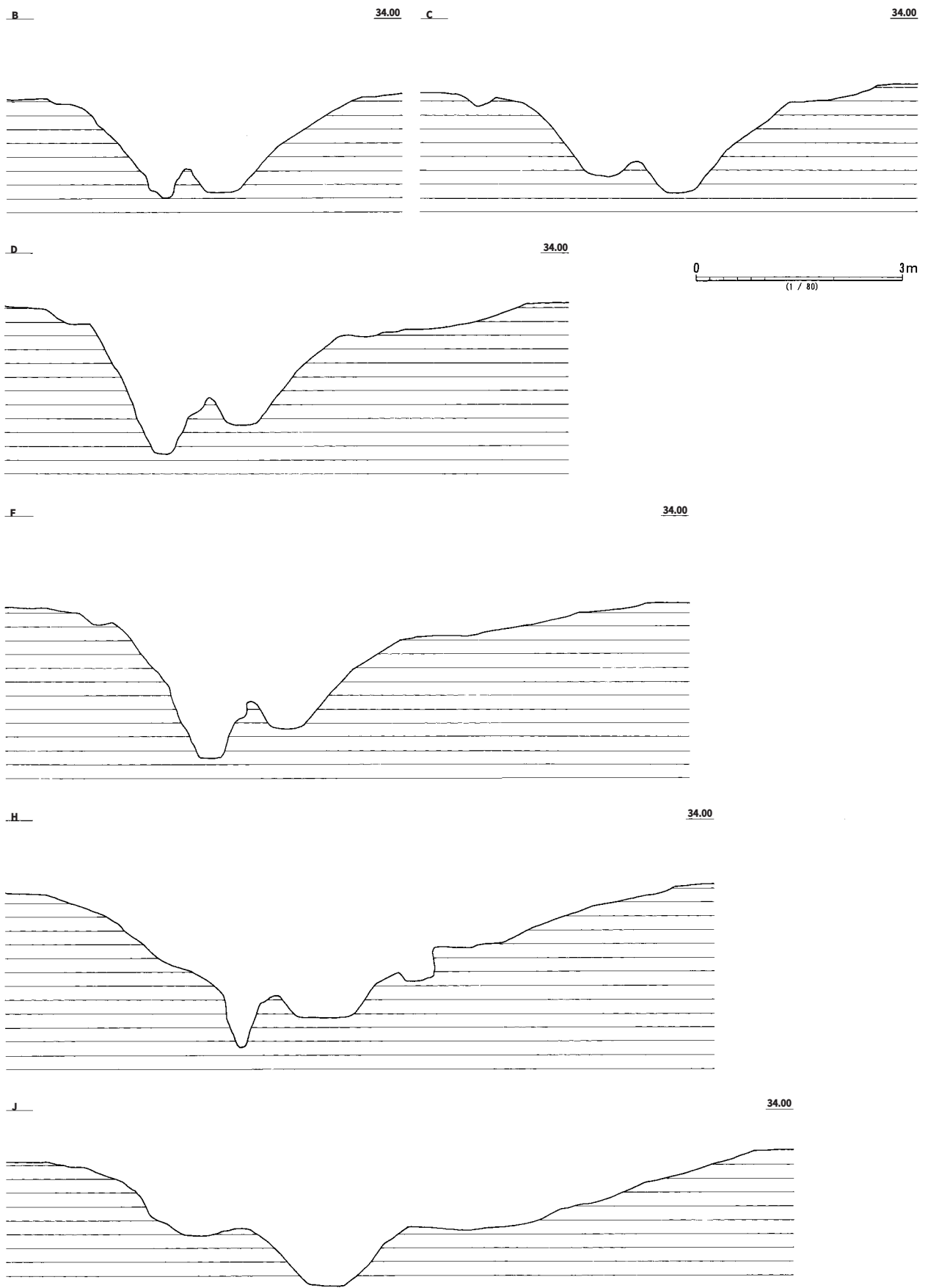
2号溝は、調査区東側、M14～P18区間に所在する。今回の調査による検出全長は99.0mで、北側山田橋表通遺跡において1号溝から分岐する。また、調査区内で直交する4号溝が接続する。走行方向はおおむね直線的でN-35°-Wを測る。確認面での溝全体幅は、断面B部分で4.93m、断面Eで5.19m、断面Hで7.02mを測る。

2号溝は、大別すると並行する2条の溝状遺構から構成される。北東側を2A号溝、南東側を2B号溝とする。さらに、その中央部に、2A号溝と重複しながら2C号溝が断続的に走行する。3条の溝は、当初から道路として開削されたものと想定される。路面は大別すると3面からなるが、2A号溝、2B号溝最下層路面は時期が異なるものと推定される。

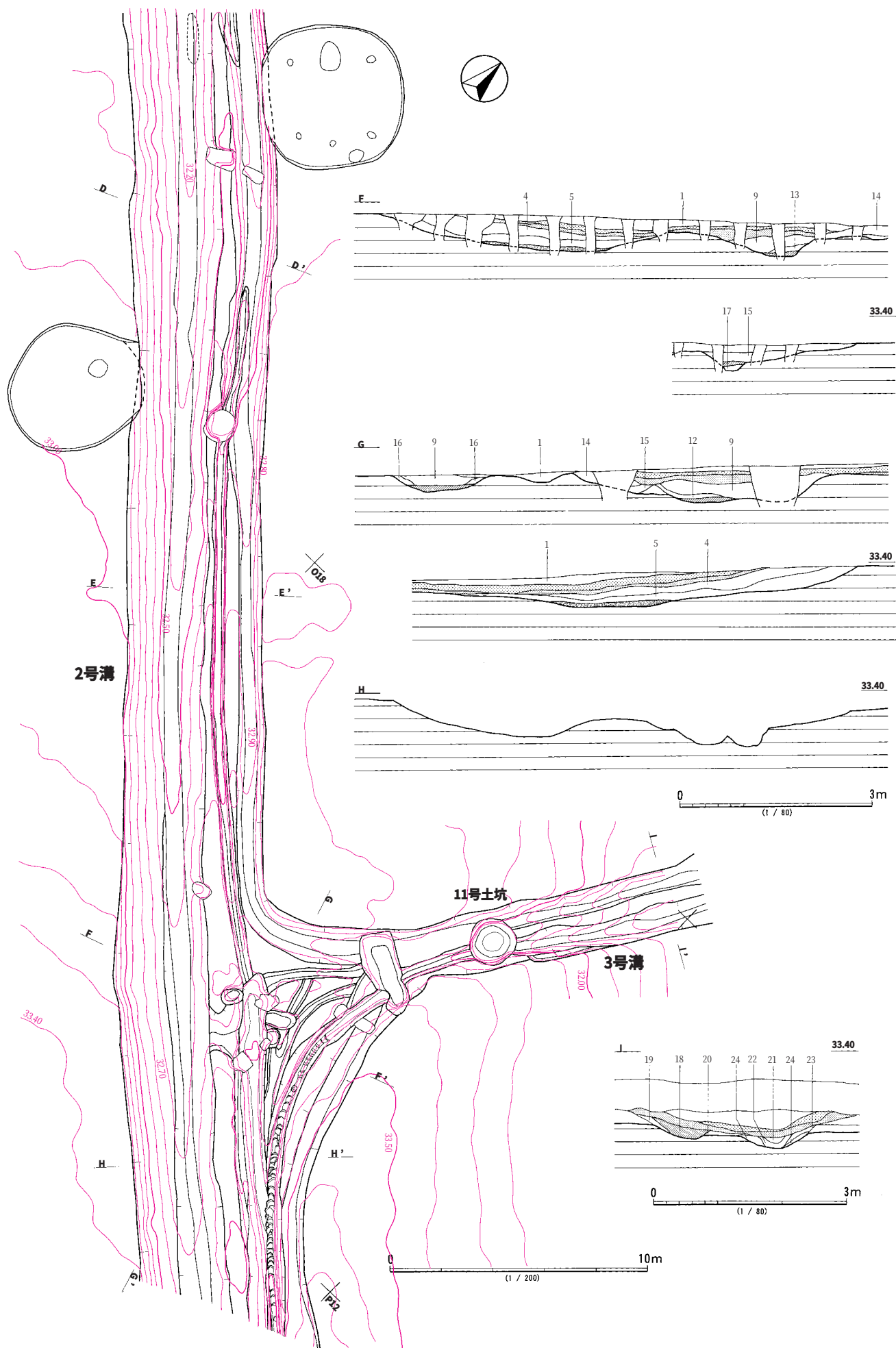
2A号溝は、掘形断面形は皿状を呈し、現状で確認できる幅は1.6m～2.0m程度を測る。深さは、断面A部分で標高32.05m、確認面からの深さ0.25m、断面Dで標高32.4m、深さ0.43m、断面Hで標高32.57m、深さ0.63mを測る。底面の路面幅は、硬化面からみると、約0.6～0.8m程度を測る。3号溝との接点では、その溝底が3号溝に屈曲していくが、全体としての掘形、および平面的に確認された硬化面範囲は直線方向にも連続する。なお、南東側から3号溝へ屈曲する溝底面に明瞭な鋤痕を残す。

2B号溝は、2A号溝同様、掘形断面形は皿状を呈し、断面B部分で2.53m、断面Eで2.98m、断面Hで3.05mを測る。深さは、断面A部分で標高31.84m、確認面からの深さ0.45m、断面Dで標高32.3m、深さ0.55m、断面Hで標高32.7m、深さ0.55mを測る。底面の路面幅は、断面形状からは判然としないが、硬化面等からみると、約0.8～1.0m程度である。2A号溝と2B号溝の重複関係は、土層断面上の切り合い関係からは判然としないが、堆積土、出土遺物等から、2B号溝が古く、1D号溝と関連する可能性が考えられる。

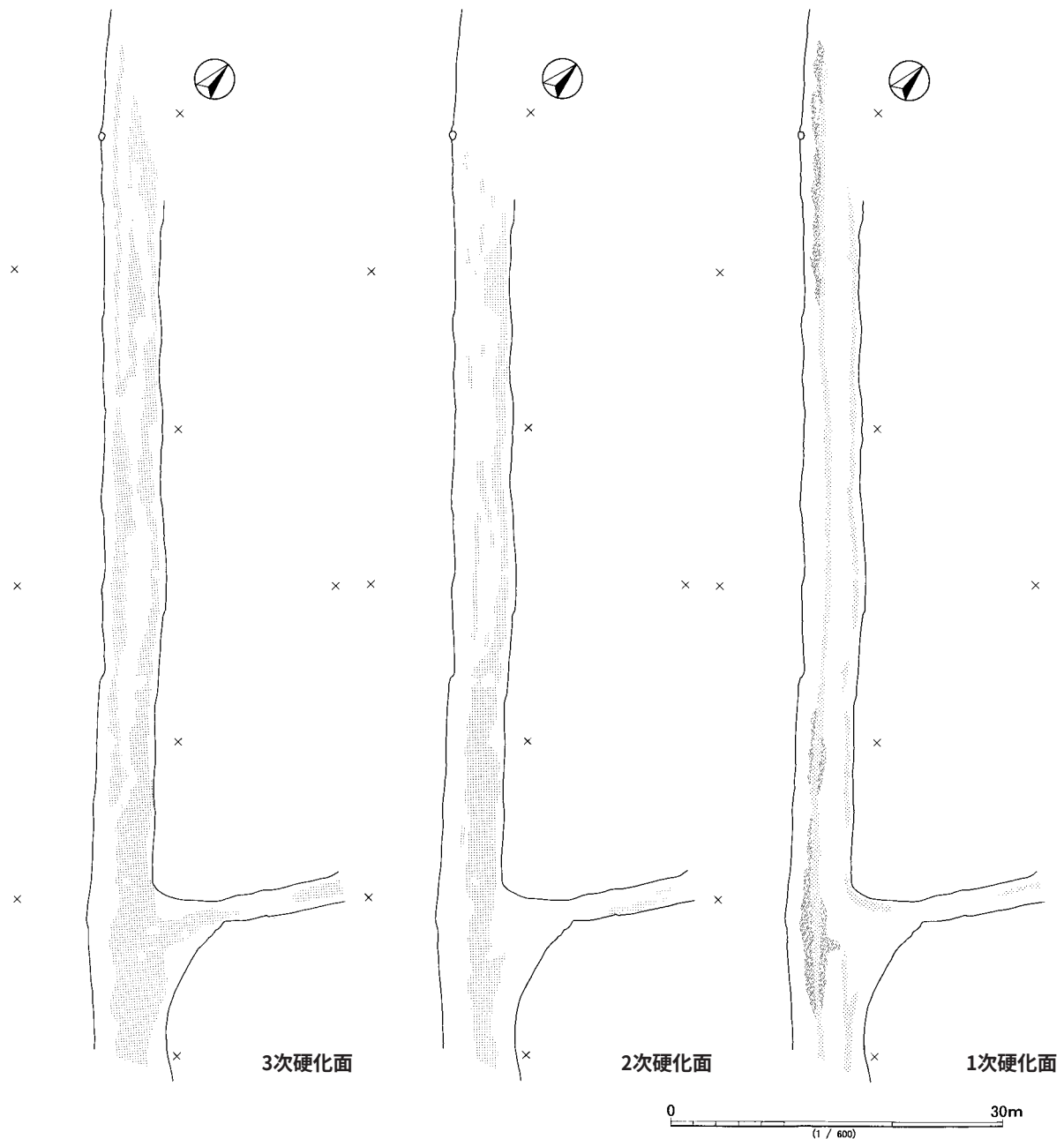
2C号溝は、断面C部分で幅0.45m、断面E部分で幅0.42mを測る。部分的な遺存にすぎないが、覆土に硬化面が認められないことから、2B号溝に先行する道路跡の側溝である可能性が想定され、2B号溝とともに、1D号溝と関連することが考えられる。



第161図 1号溝 遺構 (5)



第163图 2·3号溝 遺構



第164図 2・3号溝 硬化面変遷図

3号溝は、O18区で2号溝と接続する。掘形面をみる限りでは2条の溝から構成される。2A号溝底から分岐する溝は、接続部分では側溝状を呈するが、それぞれ溝底面に硬化面をもつ。なお、これが断面I部分の溝2条と対応するものかどうかは判然としない。断面Iを見る限りでは、掘形底面の溝2条は新旧関係をもつ。3号溝と2B号溝と2C号溝との関係は明らかではない。

土層No.は各断面共通する。1・2・3層は、2・3号溝全体を覆う。1層は、砂質の暗灰褐色土層、2層は灰褐色土層で、その上面は路盤状に硬化し、富士宝永火山灰の2次堆積層がのる。3層も路盤状に硬化する暗灰褐色土層である。4～7層は、2B号溝の堆積土である。4層は黒褐色土層、5・6層は暗灰褐色土層であり、底面の6層は路盤状に硬化する。7層は暗褐色土層である。8層は2C号溝の堆積土で

あり、黒褐色土である。9～13層は2A号溝に対応する。9・11・12層は灰褐色土層、13層は褐色土層、10層は暗灰褐色土層であり、路盤状に硬化する。14～24層は、2・3号溝接合部から3号溝の堆積土である。14・19・22層は灰褐色土層、15～18・20・21・23層は暗灰褐色土層、24層は褐色土層であり、18層は硬化する。18層については、10層と一連である可能性が考えられる。なお、平面的に確認された硬化面範囲と、断面とはかならずしも一致しない。また、2B号溝の路面6層は、平面的には2面になる。

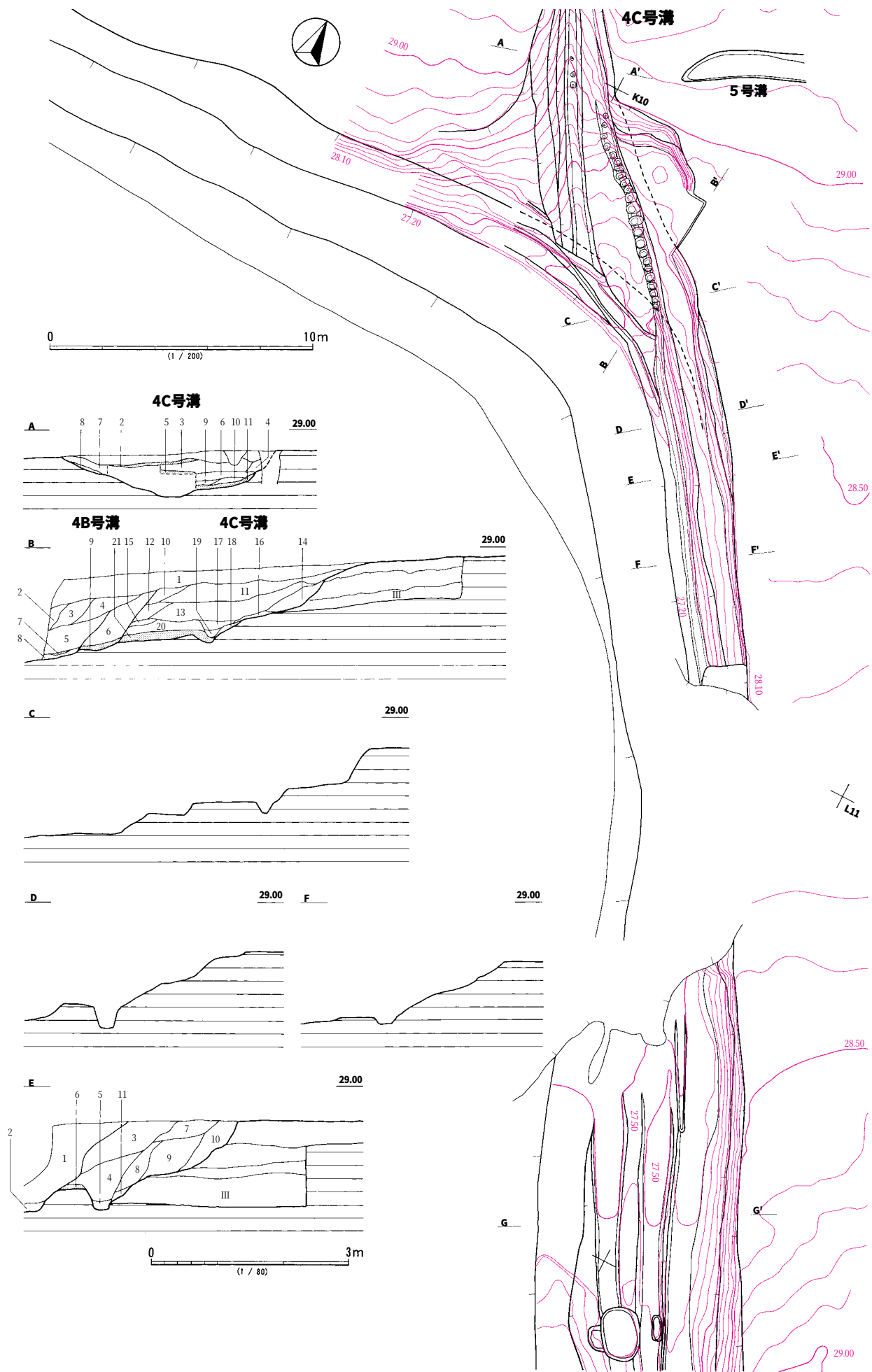
2B号溝、N17-41区最下層硬化面上から須恵器細片がまとまって出土している（第162図平面図破線範囲）。復原は不可能であり、実測個体は底部1片のみである（第171図11）。小形の底部で、近隣地域では類例が乏しい。ただし、関連遺構と推定される9号土坑出土土師器杯は9世紀中葉前後、灰釉高台付椀（第171図8）は9世紀前半と推定され、おおむね9世紀代に年代的なまとまりが認めらる。大枠としての使用年代を想定する根拠にはなる。道路側溝と推定される2C号溝はこれに先行することは確実であり、1号溝とともにその開削年代が9世紀ないしはそれ以前に遡ることを示唆するものと考えられる。中世については、龍泉窯系青磁碗片1点、常滑系炆器甕片2点が出土している。近世以降の遺物については、第170表に記載した。

4号溝（道路跡）（第165・166・167・168・169・171図、図版45・46・47）

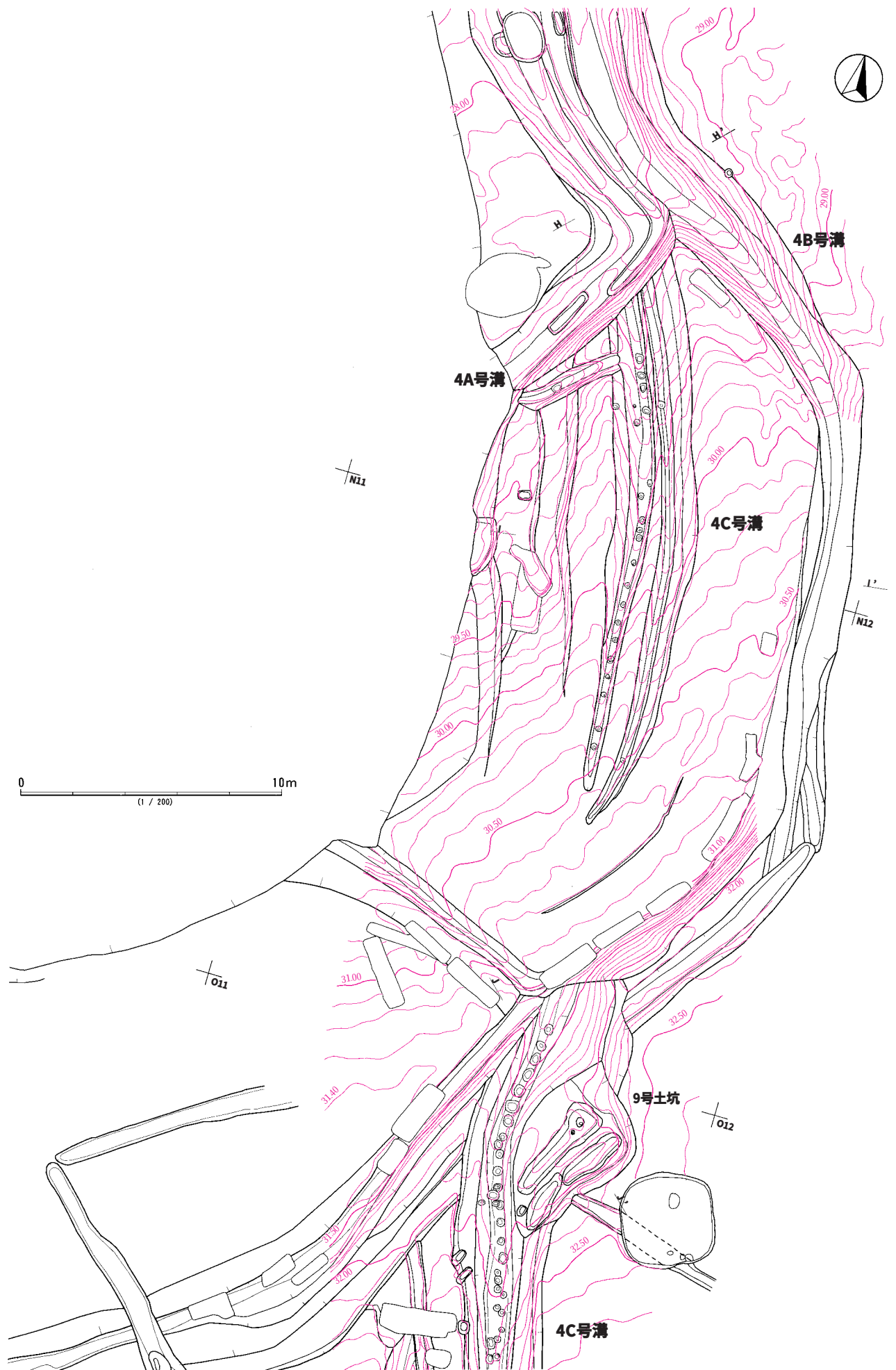
4号溝は、調査区中央、おおむねK9～Q12区間に所在する。今回の調査による検出全長は直線距離で約150mを測る。基本的に道路跡と考えられ、谷頭部を巻くようにつくられている。谷部南北で分岐するが、これは時期差によるものであり、一部は調査前の現道と一致し、各時代にわたって維持されていたことが想定される。

溝は、その掘形をみても複雑に重複し、硬化面層についても重層するが、掘形から3条（4A・4B・4C号溝）に大別することができる。

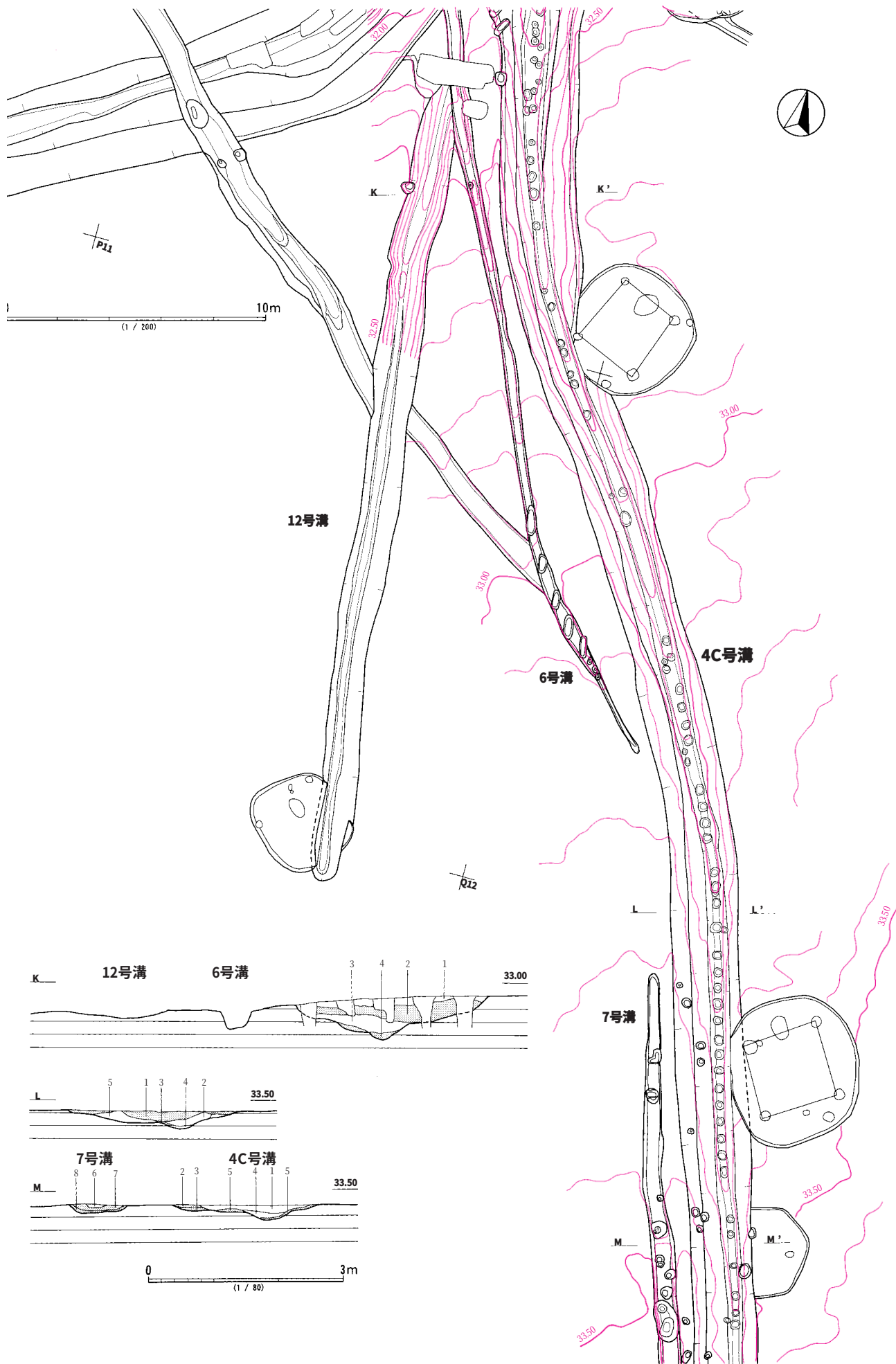
断面Aは、4C号溝の堆積土である。1～3層は暗褐色土層、4・7層は灰褐色土層、5・6・10層は黒褐色土層、8・9層は褐色土層、11層は暗灰褐色土層であり、2・5・11層の3面に硬化が認められる。断面B、2～9層は4B号溝、10～21層は4C号溝覆土に対応する。1・2・20・21層は暗灰褐色土層、3・10・12・14・15層は暗褐色土層、5・7層は灰褐色土層、4・6・8・9・11・13・16・18・19層は褐色土層であり、7・9・21層が硬化する。17層は黒褐色土層である。断面Eは、1・2層が4B号溝、3～11層が4C号溝に対応する。1・2・3層は灰褐色土層、4・5層は暗灰褐色土層、7・8層は暗褐色土層、9・10層は黒褐色土層、11層は褐色土層である。6層は硬化層であり、褐色土と暗褐色土が互層になる。断面Gは、1層が現道の硬化層、2～10層は4A号溝、11～21層は4B号溝に対応する覆土であり、4C号溝は認められない。2・4～11・13～16・18・19・21層は灰褐色土層、3・12・17層は暗灰褐色土層であり、4・6・14・16・18層は硬化層である。硬化面下20層は富士宝永の火山灰層である。断面I、1～10層は4C号溝に対応する。1・2・6層は灰褐色土層でローム粒を多量に含む。3層は暗灰褐色土層、4・9層はロームを主体とする褐色土層、5・7・8・10層は灰褐色土層で硬化する。断面Kは、1層が褐色土層でローム粒を多量に含む。2・3層は黒褐色土層で、2層上面が硬化する。4層は暗灰褐色土層の最下面硬化層である。断面L、1・2・5層は黒褐色土層で1層は硬化する。3層は褐色土層、4層は暗灰褐色土層の最下面硬化層である。断面Mは、1～5層が4C号溝、7～8層は7号溝に対応する。1・4層は黒褐色土層で1層は若干硬化が認められる。2層は黒褐色土層、3層は褐色土層とともに硬化する。



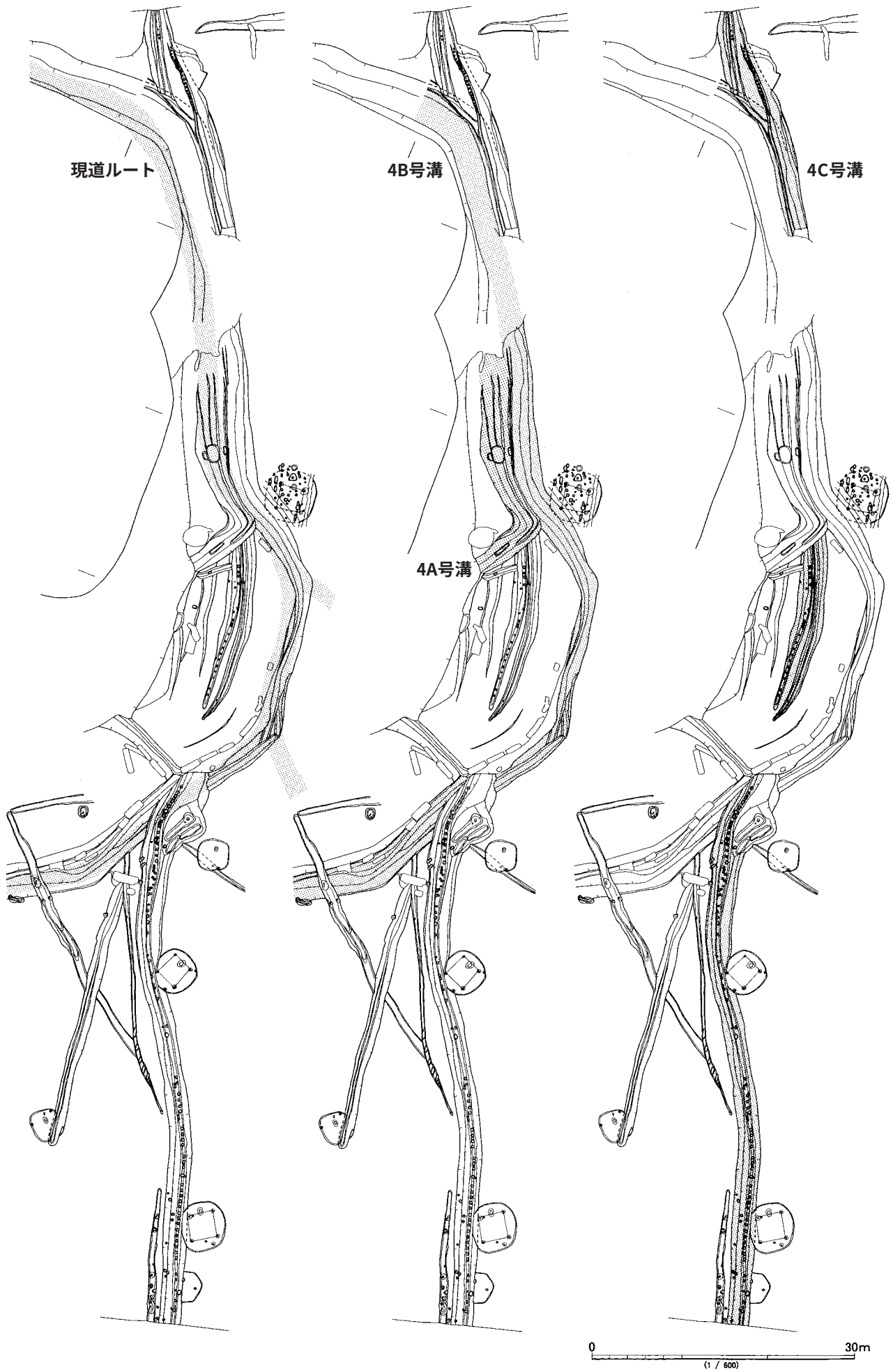
第165圖 4号溝 遺構



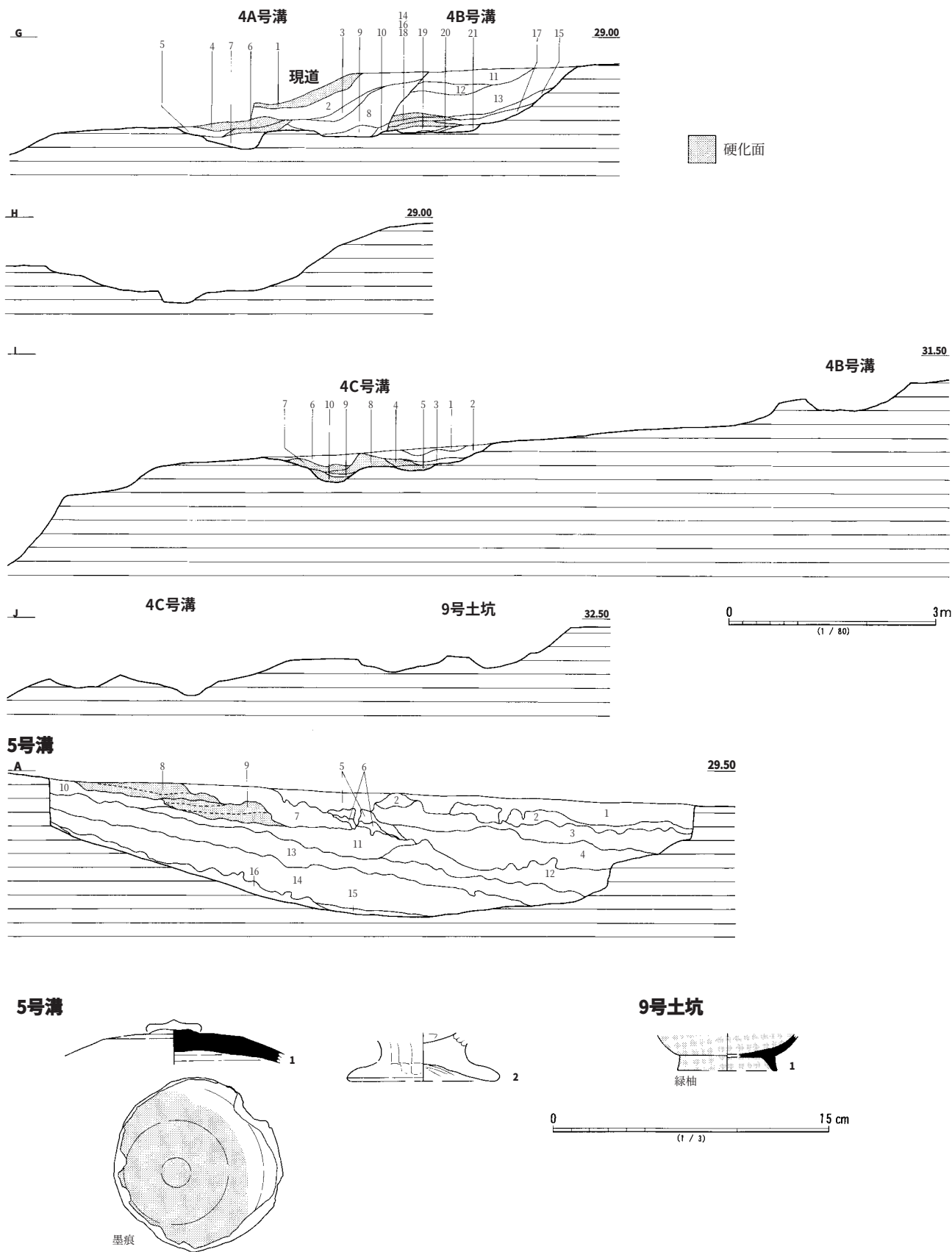
第166图 4号溝、9号土坑 遺構



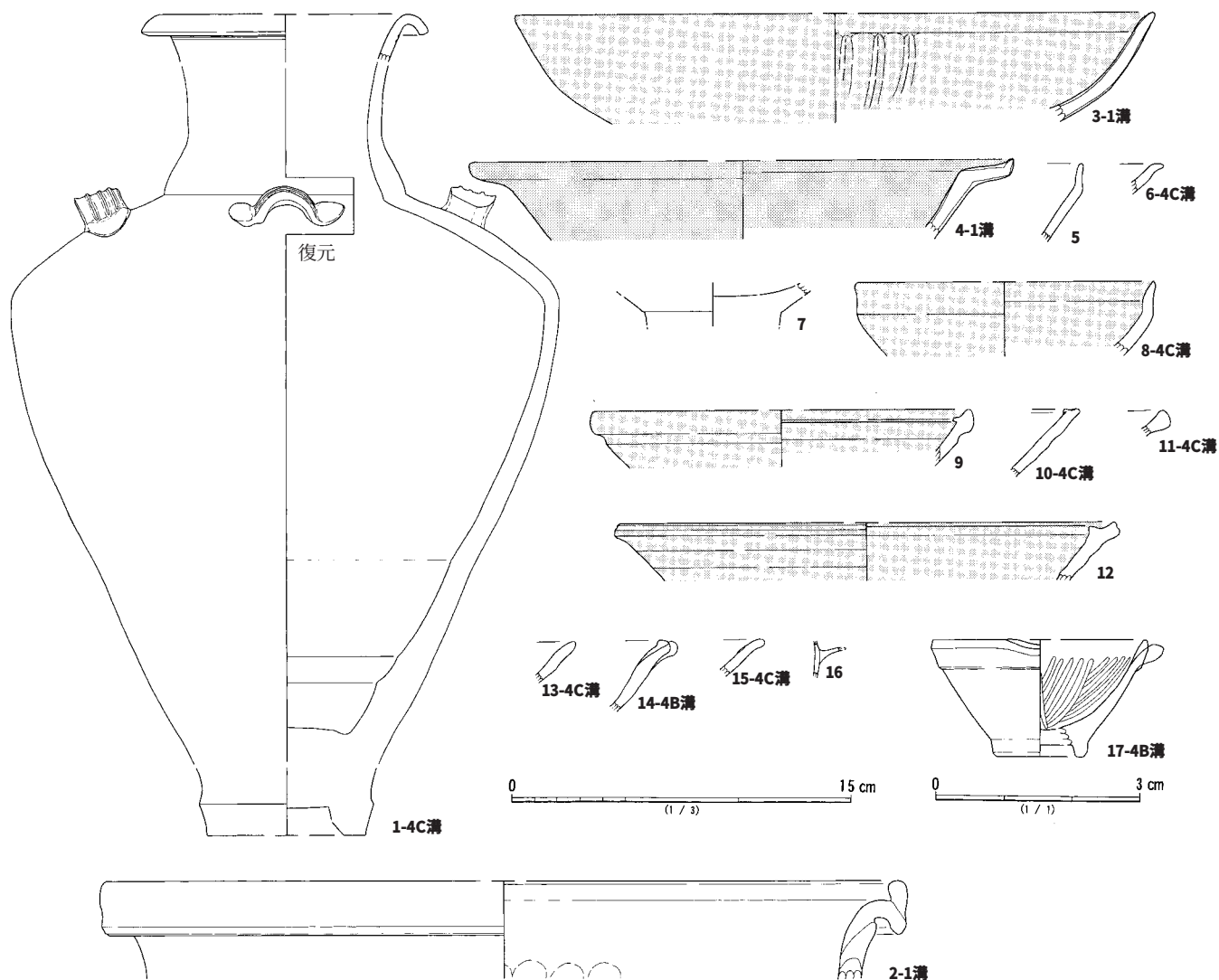
第167图 4号沟、6·7号沟 遺構



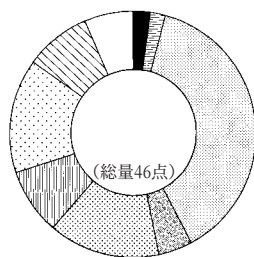
第168図 4号溝 変遷図



第169図 4・5号溝、9号土坑 遺構遺物

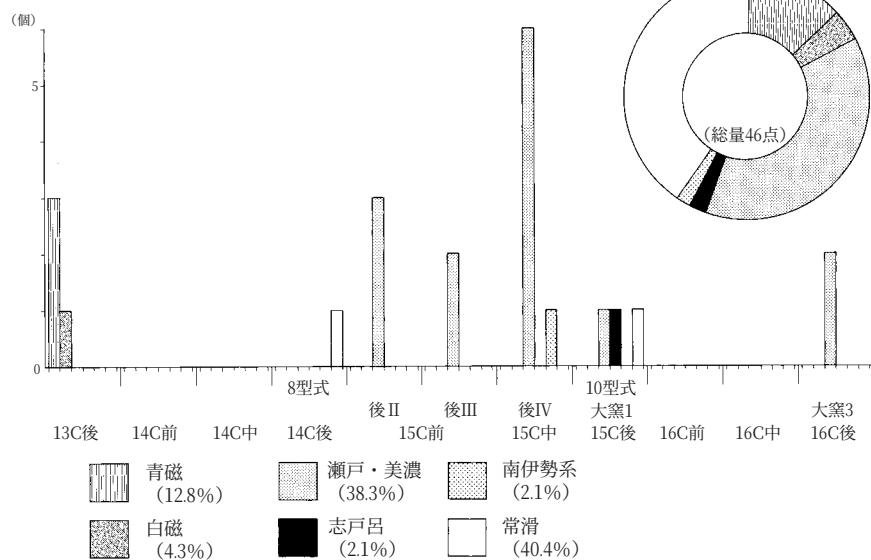


中世陶磁器類器種

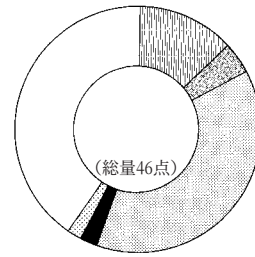


四耳壺 (2.1%)	小皿 (8.5%)
土釜 (2.1%)	碗 (14.9%)
甗 (38.3%)	卸皿 (8.5%)
鉢 (4.3%)	搦鉢 (6.4%)
深皿・中皿 (14.9%)	

中世陶磁器類時期

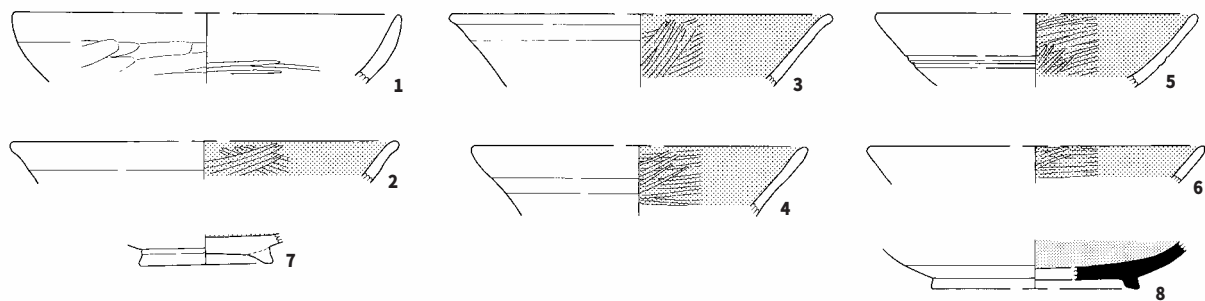


中世陶磁器類種別

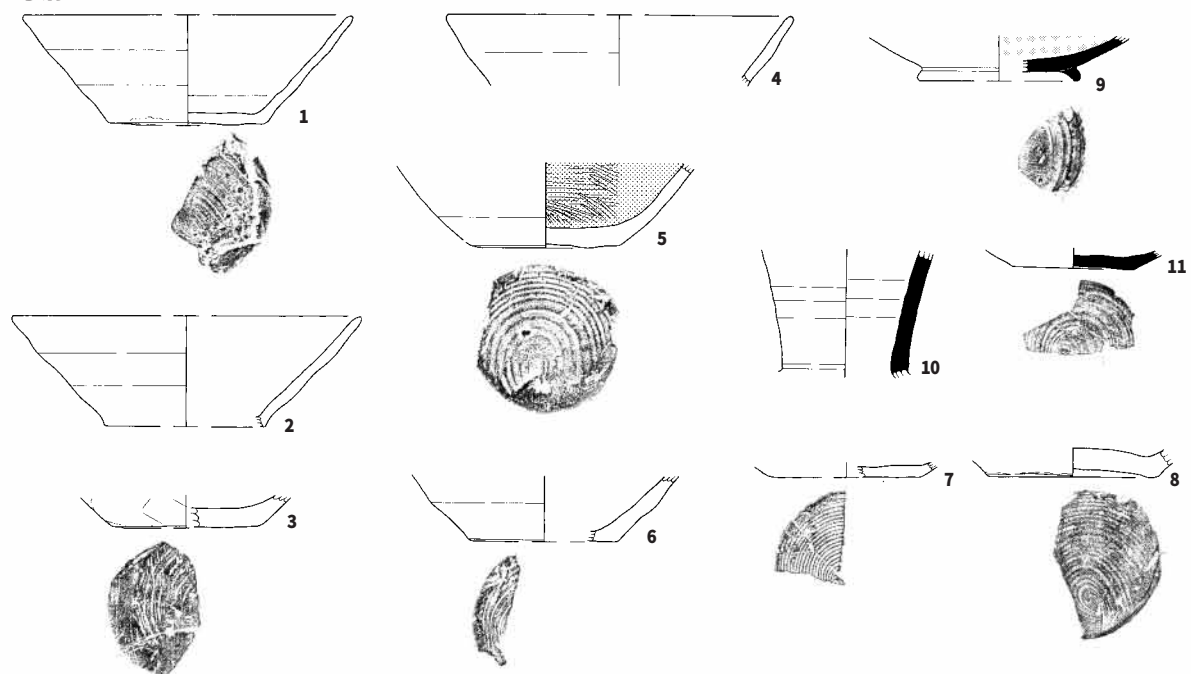


第170図 中・近世陶磁器 遺物・組成比

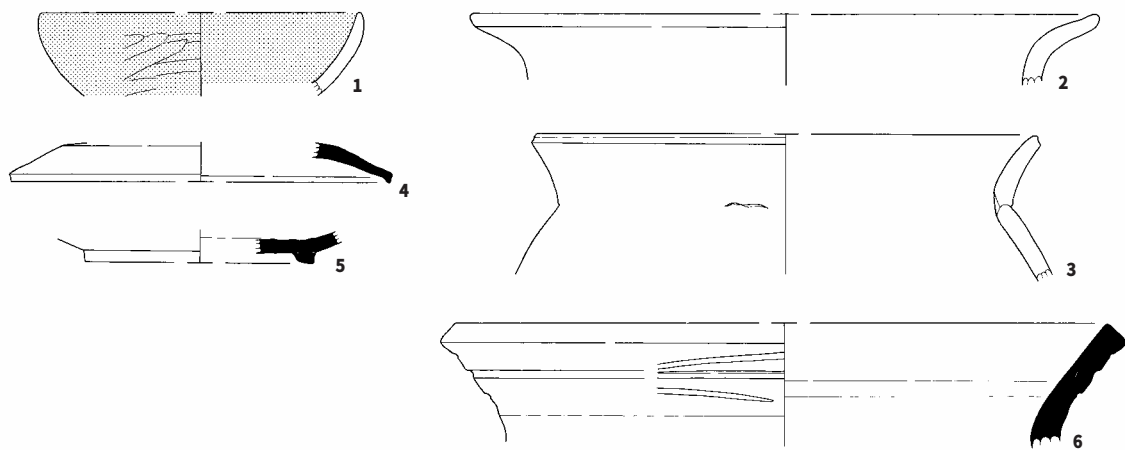
1号溝



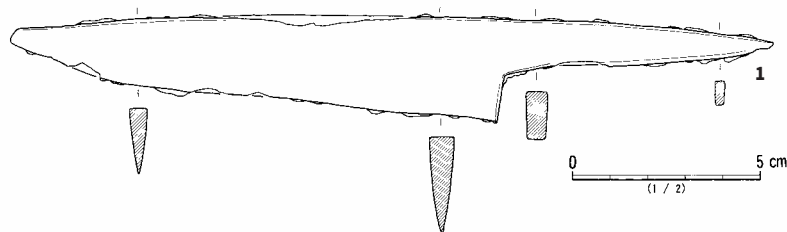
2号溝



4C号溝



4B号溝



0 15 cm
(1 / 3)

第171図 1・2・4B・4C号溝 遺物

1号溝		数量	数量	4C号溝(南台地部)			
龍泉窯系青磁	3	盤碗	2 13～14C 1 13～14C	肥前系磁器	2	碗 湯飲み茶碗	1 IV期(17C末～18C末) 1 V期(18C末～19C中葉)
瀬戸・美濃系陶器	2	平碗碗	1 古瀬戸後期様式期 1 近世	瀬戸・美濃系陶器	5	折縁中皿碗 德利	1 後II期(14C末～15C初頭) 2 近世 2 18C末以降
信楽系陶器	1	小皿	1 近世	瀬戸・美濃系磁器	3	碗	3 明治以降
常滑系炆器	2	甕	2 6a型式(13C中葉)	常滑系炆器	5	甕	5 中世4、近世1
他		寛永通寶	1 別表				
2・3号溝				4B号溝			
龍泉窯系青磁	1	碗	1 13～14C	龍泉窯系青磁	1	碗	1 森田 I-5類(13C)
肥前系磁器	2	皿 紅猪口	1 V期(18C末～19C中葉) 1 近世	志戸呂系陶器	2	搦鉢 德利	1 大窯1並行期(15C末) 1 17C末～18C末
肥前系陶器	1	鉢	1 II期(17C前葉)	肥前系磁器	29	碗 皿 向付 鉢 湯飲み茶碗 猪口 水滴 不明	19 III期(17C後葉)3、IV期(17C末～18C末)16 2 II-2期(17C前葉)1、V期(18C末～19C中葉)1 1 IV期(17C末～18C末) 1 V期(18C末～19C中葉) 3 V期(18C末～19C中葉) 1 IV期(17C末～18C末) 1 V期(18C末～19C中葉) 1 近世
瀬戸・美濃系陶器	6	碗 灯明皿 香炉 不明	1 18C以降 2 近世 1 17C後葉以降 2	肥前系陶器	2	鉢	2 II期(17C前葉)
瀬戸・美濃系磁器	3	皿 茶碗	1 明治以降 2 明治以降	瀬戸・美濃系陶器	32	天目茶碗 腰鎗茶碗 柳茶碗 志野皿 皿 灯明皿 石皿 搦鉢 德利 仏花瓶 香炉 壺 不明	1 近世 2 18C 1 18C後葉 1 近世 1 18C 6 近世 1 19C 2 17C以降2、18C以降1、19C以降1、近世時期不明4 6 18C初頭～後葉3、18C末以降3 1 18C中葉～19C中葉 2 18C中葉 2 近世 6 近世
常滑系炆器	3	甕	3 中世2、近世1				
信楽系陶器	2	小皿他	2 近世				
他		寛永通寶	1 別表				
		小皿	1 近世				
4C号溝(調査区北端部)							
肥前系磁器	2	湯飲み茶碗 不明	1 V期(18C末～19C中葉) 1 近世				
肥前系陶器	1	鉢	1 II期(17C前葉)				
瀬戸・美濃系陶器	9	天目茶碗 端反碗 鉦皿 緑釉皿 不明 腰鎗茶碗 長の茶碗 香炉	1 後IV期古(15C中葉) 1 後II期(14C末～15C初頭) 2 後III期(15C前葉)1、後IV期(15C後葉)1 1 後IV期(15C後葉) 1 古瀬戸後期様式期 1 18C 1 18C末以降 1 17C後葉以降	瀬戸・美濃系磁器	6	花瓶 茶碗 皿	2 幕末 3 幕末～明治 1 明治
常滑系炆器	5	片口鉢II 甕	1 10型式(15C後葉) 4 中世	信楽系陶器	9	小杉茶碗 碗 片口鉢 搦鉢	1 18C後葉以降 6 近世 1 近世 1 近世
他		寛永通寶	2	常滑系炆器	5	甕 急須	4 中世3、近世1 1 幕末～明治
4C号溝(谷部)							
中国白磁	3	四耳壺	3 12～13C(同一個体か)	堺系炆器	3	搦鉢	3 18C以降
瀬戸・美濃系陶器	3	緑釉皿 搦鉢 不明	1 後IV期(15C後葉) 1 後IV期以降(15C後葉以降) 1 幕末～明治	今戸焼	1	搦鉢ミニ	1 18C以降
京焼系陶器	1	不明	1 近世	産地不明磁器 (東北系)	1	德利	1 幕末
不明磁器	1			不明陶器片	2	他	
				他		泥メンコ 寛永通寶 近世硯	1 近世 2 別表 1

遺構	No.	種別	器種	外面の特徴	内面の特徴	遺存度	胎土色調	胎土	時期
4C号溝	1-1	中国白磁	四耳壺	全面透明釉	全面透明釉	口縁部1/4以下	明灰白色		12～13世紀
4C号溝	1-2	中国白磁	四耳壺	削り出し高台、豊付無釉、底裏無釉	遺存せず	底部1/4以下、2破片	明灰白色		12～13世紀
1号溝	2	常滑系炆器	甕	緑色自然釉、N字状口縁	露胎部暗赤色	1/4以下	褐灰色	白色・黒色粒混入	6a型式・13世紀中葉
1号溝	3	龍泉窯系青磁	盤	緑灰色の青磁釉厚い	ゆるい端連弁	1/4以下	灰白色		13～14世紀
1号溝	4	龍泉窯系青磁	盤	緑灰色の青磁釉厚い	緑灰色の青磁釉厚い	1/4以下	灰白色		13世紀後葉
(49号堅穴)	5	瀬戸・美濃系陶器	天目茶碗	鉄釉、光沢ある極暗褐色	鉄釉	1/4以下	にぶい黄褐色		大窯5・17世紀前葉～後葉
4C号溝	6	瀬戸・美濃系陶器	端反碗	浅黄色の灰釉	灰釉	1/4以下	灰白色		後II・14末～15世紀初頭
(51号堅穴)	7	中国白磁	皿	高台無釉	口縁に灰釉	1/4以下	灰白色	締まる	中世
4C号溝	8	瀬戸・美濃系陶器	天目茶碗	鉄釉、赤黒色	鉄釉	1/4以下	灰白色		後IV古・15世紀中葉
(18号堅穴)	9	瀬戸・美濃系陶器	鉦皿	灰釉、オリブ灰色	灰釉	1/4以下	灰白色		後III・15世紀前葉
4C号溝	10	瀬戸・美濃系陶器	鉦皿	口縁に緑色の灰釉施釉	口縁に灰釉	1/4以下	にぶい褐色		後III・15世紀前葉
4C号溝	11	瀬戸・美濃系陶器	鉦皿	口縁に緑色の灰釉施釉	口縁に灰釉	1/4以下	灰白色		後IV・15世紀後葉
(2号墳)	12	瀬戸・美濃系陶器	鉦皿	鉄釉、にぶい赤褐色	鉄釉	1/4以下	浅黄褐色		後IV古・15世紀中葉
4C号溝	13	瀬戸・美濃系陶器	緑釉皿	口縁灰釉	口縁灰釉、使い込む	1/4以下	灰白色		後IV・15世紀後葉
4B号溝	14	志戸呂系陶器	搦鉢	鉄釉	鉄釉	1/4以下	褐灰色	締まる	大窯1並行・15世紀末
4C号溝	15	南伊勢系土器	鈐釜	頸部に鈐廻る	非常に薄い	1/4以下	灰白色	きめ細かい	15世紀
4B号溝	17	今戸焼	搦鉢ミニチュア	無釉、堺系搦鉢を模倣	無釉、全面描り目	1/2程度	橙色色		18世紀以降

第3表 1～4号溝出土中・近世陶磁器類組成表、実測遺物観察表

5層は暗灰褐色土層の最下面硬化層、6・7層は黒褐色土層、8層は灰褐色土層で、7・8層はともに硬化する。

4B号溝は、基本的に現道ルートと重複するが、断面Gの覆土堆積状況をみても明らかなように、時期的には幅があり、富士宝永の火山灰層を根拠とするならば、掘削は少なくとも18世紀初頭以前に遡る。またその間、4A号溝にみられるように、ルートの変更も想定される。

4C号溝の開削は、4B号溝を確実に遡る。おおむね1号溝と平行し、山田橋表通遺跡を經由し、亥の海道遺跡調査地点付近で分岐合流するものと推定される。断面A部分確認面での幅は3.32m、路面幅は約1.8m程度と推定される。谷部については路面幅全体は把握できないが、断面B～Fで東側の側溝が確認できる。谷南側斜面部分のM11・N11区では、確認面での幅は約3.3mを測り、おおむね2条の溝から構成される。ただ、これについては側溝とは認めにくい。調査区南半部では、断面K部分で現存幅2.95m、断面L部分で約2.6m、断面M部分で約2.3mを測る。掘り込みは浅く、路面幅は確認できない。溝底面には、深さ10cm程度の浅いPit列が並ぶ。調査段階では、西側に並行する6・7号溝を一体のものとする可能性が想定されていたが、少なくとも側溝とする根拠は乏しい。調査区内全体の比高は、断面A最下層硬化面上で標高28.65m、断面E最下層硬化面上で標高27.5m、断面M最下層硬化面で標高33.05mを測る。また、谷部断面B・E遺構外最下層がソフトローム層にあたる。したがって、断面Eの4C号溝路面高は、ローム層上面とほぼ対応する。

4C号溝は、調査段階から、1D号溝（道路）、2B・C号溝（道路）とともに古代道としての可能性が指摘されてきた。4C号溝の出土遺物については、調査区北端部で奈良時代に遡る土器が、また、関連遺構と考えられる9号土坑から9世紀代と推定される緑釉陶器が出土しているが、第3表をみても明らかなように全体として時期的な混乱が激しい。谷部での重複関係から、当初の開削時期を近世以前遡らせることは可能ではあるが、開削時期を限定することは困難である。とくに南台地部分については、ゴボウの耕作溝による攪乱が激しいものの、近世以降の遺物を確実に含んでおり、少なくとも現状で認識できる溝跡を直接古代道とすることはできない。

なお、中世の遺物では、口縁底部とも小破片ではあるが、谷部から出土した四耳壺が注目される（第170図1）。

5号溝（第169図）

5号溝は、明確な掘り込みは不明確であった。断面Aの層序は、1層がローム粒を多量に含む灰褐色土層、2層が黒褐色土層、3層が褐色土層、ローム粒を多量に含む硬質の褐色土層、5・6層は暗褐色土層であり、6層には白色・橙色粒の集積が認められた。7層は暗灰褐色土層。8・9層が5号溝路盤硬化面に相当する。8層は暗褐色砂質の硬化層、9層は褐色砂質の硬化層であり、ともに白色、灰色のスコリア粒を多量に含む。10・11層は暗褐色土層、12層は黒褐色土層、13層は赤色スコリアを多量に含む褐色土層であり、房総Ⅱb層に対応する。14層は暗褐色土層、15層は黒色土層、16層はローム漸移層である。路面および6層で火山灰層が確認されたため、分析委託を行っている（第3章第3節）。

10～15号溝（第5・6・7・167図）

本遺跡では、調査区内で多数の溝が検出されている。時期的には、中世以降現代にいたるものを含むと考えられるが、上記溝以外で、中世以降の遺物の出土があったもの、宝永期の火山灰層が明瞭に認められたものについてのみ遺構番号を付した。

10号溝（P5～Q5区）、11号溝（P6区）は、多量の宝永火山灰の堆積が認められた。硬化面は認検出されておらず、なんらかの区画に関係するものと推定される。12号溝（O11～P11区）も宝永火山灰の堆積が確認された溝である。道路である4号溝と接続するが、硬化面は認められず、地割り溝と推定される。

13号溝（O12～Q13区）は道路跡である。断続的な硬化面からなり、O12区で東方向へ分岐し、コ字状の区画溝と重なる。出土遺物は、中国白磁皿片（12世紀）1点、備前系磁器花瓶片（V期 18世紀末～19世紀中葉）1点が出土している。

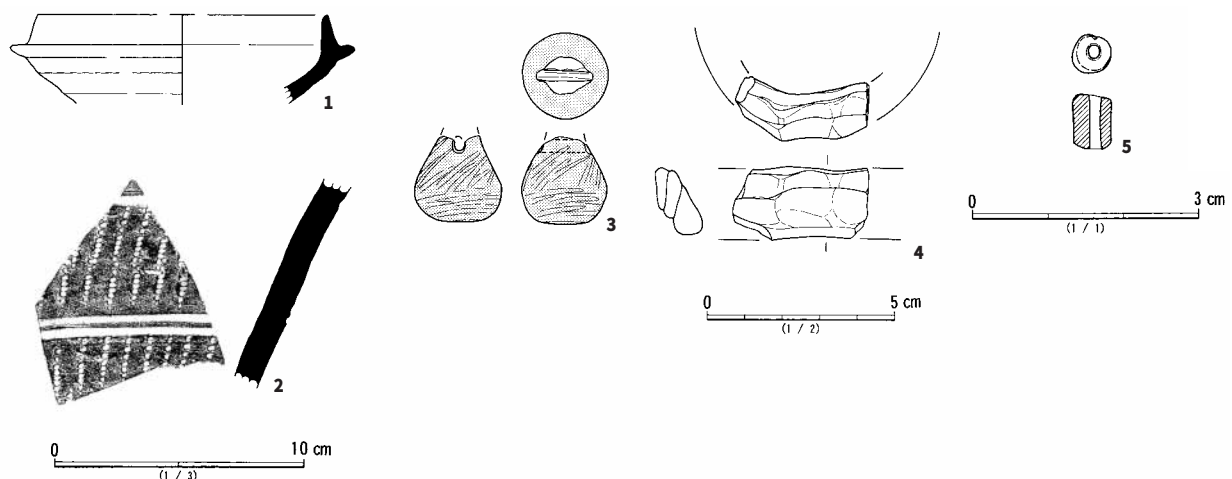
14号溝（O11～O15区）は、1号溝から4号溝にいたる道路跡であり、硬化面は1号溝をこえて東側に断続する。出土遺物は、肥前系磁器椀・水滴片（V期、18世紀末～19世紀中葉）各1点、瀬戸・美濃系陶器片（近世）1点、瀬戸・美濃系陶器茶碗片（近代）1点、信楽系陶器小皿片（近世）1点、信楽系陶器土瓶片（明治期）1点が出土している。

15号遺構（M13区）は、複数条の硬化面をとまなう溝からなり、道路跡と推定される。出土遺物は、肥前系磁器仏飯器片（IV期、17世紀末～18世紀末）1点、肥前系磁器碗片（V期、18世紀末～19世紀中葉）1点、瀬戸・美濃系陶器茶碗片（大正以降）1点、常滑系炆器播鉢（18世紀）1点が出土している。

第6節 弥生時代以降遺構外出土の遺物

弥生時代以降については、基本的に遺構外遺物は報告対象としなかった。ただし、特殊遺物など若干について取り上げておく。

3は、土製の垂飾品であり、全面にミガキ、赤彩が施される。当該地域では、弥生時代後期に類例が多数認められる（第13表）。4は、環状の土製品である。粘土紐を残す成形から、弥生時代後期の所産と推定される（第13表）。5は、紺色（コバルトブルー）系透明のカリ石灰ガラスである（第16表）。これも、弥生時代後期のものであろう。1は、須恵器蓋杯である。古墳時代後期、TK10型式前後期と推定される。この段階の遺構は、今回の調査では検出されていない。



第172図 弥生時代以降遺構外出土遺物

遺構No.	時期	Grid	主(長)軸長 (m)	副(短)軸長 (m)	掘形面積 (㎡)	床面積 (㎡)	内区面積 (㎡)	主軸 方位	方位	出土遺物	備考
1号竪穴	縄文早期	O6-83	3.52	3.48	9.55	8.39					
2号竪穴	縄文早期?	Q9-24	3.85	3.35	10.25	8.93		71	W		
3号竪穴	縄文早期?	P7-81	5.25	5.25	22.18	20.39					
4号竪穴	縄文?	P9-45	4.34	3.56	11.37	10.38					住居跡?。
5号竪穴	縄文?	N14-94	3.88	3.48	10.73	8.53		37	W		住居跡?。
6号竪穴	縄文?	N15-46	2.57	2.15	4.55	3.78		60	E		住居跡?。
7号竪穴	縄文中期	S5-34	4.30	4.30	17.15	15.86		19	E	土器片錘1、加工礫(蔽石)1。	貝層。
8号竪穴	縄文中期	Q6-94	4.88	4.33	16.58	15.37		45	W	砥石1。	貝層。
9号竪穴	縄文中期	Q12-31	(6.30)		(31.20)					石斧1、加工礫(磨石)1。	
10号竪穴	3	S5-51	5.31	5.12	23.49	21.00	7.78	48	W		
11号竪穴	(3~4古)	S5-66	(7.30)	6.00			10.61	25	W		
12号竪穴	(4古)	S5-01	4.23	3.92	15.08	13.68		5	W		
13号竪穴	(4古)	S5-04	4.60	4.41	16.97	15.33		23	W	加工礫(磨石)1。	粘土塊。
14号竪穴	(3~4古)	S5-59	5.22	4.83	21.99	20.78	6.55	19	W		
15号竪穴	3	S6-44	3.93	3.83	13.04	11.61		25	W	穿孔貝巢穴痕跡泥岩。	
16号竪穴	3~4	S6-37	4.20	(3.91)	(14.14)	(12.77)	3.72	31	W		
17号竪穴	3~4	S6-39	3.82	(3.28)	(10.46)	(9.19)		41	W		土器囲い炉。
18号竪穴	3~4	S6-16	5.46	4.96	23.30	21.37	8.26	46	W	環状銅製品1、軽石1。	
19A号竪穴	(3~4古)	S7-18	6.62	6.28	34.24	32.83	11.87	39	W		
19B号竪穴	(1~4)	S7-18					5.45	10	W		2軒の重複の可能性。長軸長4m程度か。
20号竪穴	(3~4古)	S8-02	(5.33)	(4.50)			5.96	8	W		
21号竪穴	(3~4古)	S8-06	3.77	3.62	12.01	10.18		15	W		
22号竪穴	(3~4古)	R5-68	4.72	4.18	15.61	14.63		45	W		
23号竪穴	(1~4)	R5-17									
24号竪穴	(4古)	R6-10	10.82	8.29	83.53	81.25	26.17	38	W	土製紡錘車1、土製勾玉1。	ローム敷き炉。
25A号竪穴	(3~4古)	R6-76	(10.98)	9.84	(92.46)	(88.44)	28.13	24	W	土製勾玉1、鉄鏃1。	粘土塊。土器囲い炉。
25B号竪穴	(1~4)	R6-76					15.10	24	W		建て替えか。
26号竪穴	(1~3)	R6-89	4.27	4.33	16.13	14.97	4.38	37	W	穿孔貝巢穴痕跡泥岩。	土器囲い炉。
27号竪穴	(1~3)	R7-13	4.20	3.60	13.09	11.91		46	W	軽石1、鉄器片1。	
28号竪穴	(1~3)	Q7-89	3.35	2.91	8.99	8.03		26	W		
29号竪穴	(1~3)	Q7-59	4.16	4.18	15.16	12.80		15	W		
30号竪穴	4古	R8-58	6.77	6.05	35.07	32.30	10.72	42	W		
31号竪穴	4古	Q8-53	4.17	3.93	13.78	12.44		7	W	砥石1。	
32号竪穴	(1~3)	R7-55	4.68	(4.04)	(15.80)	(13.82)		25	W		
33号竪穴	(4)	R7-82	4.50	4.15	16.58	14.55		68	W	軽石2、土製勾玉3。	粘土塊。
34号竪穴	(1~3)	R7-78	(3.43)	3.65				14	W		
35号竪穴	3~4	R8-61	4.25	(3.62)	(12.68)	(11.46)		35	W	穿孔貝巢穴痕跡泥岩。	
36号竪穴	3	R8-21	5.30	5.08	21.18	18.45	5.77	26	W	軽石1。	
37号竪穴	4古	R8-53	4.23	3.81	14.20	12.45		2	E		
38号竪穴	(1~2)	R8-37	4.37	4.22	15.89	14.19	4.55	37	W		
39号竪穴	1	R9-32	2.75	3.27	7.45	6.85		44	W		
40号竪穴	1~2	R9-82	4.19	3.90	13.78	12.05		38	W	軽石1。	
41号竪穴	(1~2)	Q4-46					7.67	17	W		
42号竪穴	4古	P4-65	(4.52)	(3.23)	(12.70)			50	E		土坑状の竪穴。
43号竪穴	(1~4)	P4-58	3.89	2.86	(10.30)	(9.30)		48	E		土坑状の竪穴。
44号竪穴	3	P4-79	3.92	3.64	12.78	11.40		42	W		
45号竪穴	(3~4古)	Q5-02	3.32	3.37	9.14	8.52		23	W		
46号竪穴	4古	Q5-02	5.47	5.23	24.38	22.88	8.30	26	W	加工礫(蔽石)1、軽石1。	粘土板敷き炉。
47号竪穴	(1~3)	P5-15	5.43	4.96	22.96	21.90	7.04	70	W		土器囲い炉。
48号竪穴	1	P5-64	5.07	4.51	18.97	17.19		28	W	凹石1。	土器囲い炉。
49号竪穴	3	P6-14	6.19	5.68	30.89	28.73	10.77	36	W	軽石1。	
50号竪穴	(1~4)	P6-47	(5.00)					65	W		
51号竪穴	3	Q6-35	3.27	3.11	8.73	7.68		51	W		
52号竪穴	3	O7-71	6.45	5.67	31.14	28.43	9.31	35	W		土器囲い炉。
53号竪穴	(3~4古)	O7-88	3.76	3.95	12.22	10.81		23	W	脚状土製品1。	
54号竪穴	(3~4古)	P8-17	5.13	5.05	22.68	20.35	6.95	17	W	加工礫(蔽石)1、砥石1、土製勾玉1、穿孔貝巢穴痕跡泥岩。	
55号竪穴	3	P8-78	4.31	4.14	14.92	12.58		39	W	穿孔貝巢穴痕跡泥岩。	
56号竪穴	3	P9-13	5.23	4.91	21.96	19.51	6.21	70	W		
57号竪穴	(4古)	P9-32	3.92	(3.68)	(11.64)	(9.88)		42	W		
58号竪穴	3	P9-49	3.92	4.15	13.05	11.78		10	E	軽石1。	
59号竪穴	(3)	P9-93	(4.94)	4.09	(14.73)	(12.66)		71	W	軽石1。	
60号竪穴	1~3	Q9-53	5.46	5.15	24.00	21.81	7.73	36	W		炉、枕石状粘土塊。
61号竪穴	(4古)	Q9-87	4.36	4.50	15.73	15.01		75	W		
62号竪穴	(1~4)	P10-36	5.88	5.34	25.91	23.45	6.85	12	W		粘土塊。
63号竪穴	4古	Q10-19	3.03	3.17	8.45	7.41		51	W	滑石製勾玉1。	貝ブロック。
64号竪穴	4古	P11-51	8.84	8.22	64.95	61.05	21.18	60	W	土製勾玉1、滑石製不明石製品2。	
65号竪穴	4古	P11-96	(3.65)	(3.41)	(10.85)	(9.56)		46	W		
66号竪穴	(4古)	Q12-16	5.47	(5.09)	(23.63)	(22.30)	8.57	33	W	穿孔貝巢穴痕跡泥岩。	
67号竪穴	(1~4)	Q12-57	3.47	(2.22)				12	W		
68号竪穴	(1~4)	Q13-25	3.20	3.08	8.84	7.97		67	W		
69号竪穴	(3~4古)	Q13-07	3.71	3.53	10.99	9.81		63	W		
70号竪穴	(4)	Q14-31	(5.20)	(4.55)	(20.16)		(5.71)	61	W	台石1。	
71号竪穴	3~4	Q14-06	5.20	4.81	21.70	19.53	5.58	14	W	軽石1。	
72号竪穴	3~4	P12-76	4.78	4.74	18.21	17.09		17	W		
73号竪穴	(1~4)	P12-69	3.82	4.02	12.74	11.29		52	W		
74号竪穴	3~4	P14-83	4.77	4.32	16.05	14.66	4.96	30	W		
75号竪穴	(1~4)	P14-05	3.68	3.75	11.52	10.31		23	W	軽石1。	
76号竪穴	(1~4)	P14-05	4.33	4.24	15.15	13.62		18	W		
77号竪穴	3~4	P15-60	3.93	3.67	12.40	10.77		23	W		
78A号竪穴	(4古)	P15-34						50	W		
78B号竪穴	(1~4)	P15-34						50	W		建て替え。

第4表 山田橋大山台遺跡遺構一覧竪穴 (1)

遺構No.	時期	Grid	主(長)軸長 (m)	副(短)軸長 (m)	掘形面積 (㎡)	床面積 (㎡)	内区面積 (㎡)	主軸 方位	方位	出土遺物	備考
79号竪穴	3～4	P16-01	(3.50)					10	W		貝層。
80号竪穴	3～4	P16-22	3.95	(4.10)	(13.43)	(12.31)	5.24	12	W		
81号竪穴	(1～4)	P17-18						33	W		
82号竪穴	3～4	O12-90	4.80	4.74	(19.00)	(17.85)	6.87	25	E		粘土塊。
83号竪穴	3～4	O12-51	4.66	4.55	17.45	16.10	4.99	28	W	軽石1。	
84号竪穴	3	O11-29	3.66	3.52	11.06	9.94		21	W		
85号竪穴	(1～4)	N11-88									
86号竪穴	3	N12-87	(4.40)	4.06	(14.79)	(13.27)	3.08	18	W		
87号竪穴	(3～4古)	O13-10	(4.67)	4.27	(16.44)	(14.61)	4.97	10	W	土製勾玉1、軽石1、穿孔貝 巢穴痕跡泥岩。	粘土塊。
88号竪穴	3～4	O13-51	5.27	4.62	20.28	18.42	5.72	28	W		
89号竪穴	3	O15-89	3.13	2.96	7.71	7.00		25	W		
90号竪穴	3～4	O15-48	3.00	2.88	7.66	6.46		44	W		
91号竪穴	(4)	O15-06	2.68	2.47	5.72	4.73		43	W		
92号竪穴	(4)	O16-00	2.62	2.86	6.73	5.61		5	E		
93号竪穴	4古	O16-55	5.82	5.54	27.79	25.56	7.40	36	W		
94号竪穴	4古	O16-18	5.37	5.05	22.98	21.03	6.11	5	E	加工礫(敲石)1、穿孔貝巢穴 痕跡泥岩。	
95号竪穴	(1～4)	O16-59									
96号竪穴	3～4	O17-04	(5.25)	4.85	(20.09)	(18.74)		3	E		
97号竪穴	4古	N15-38	3.58	3.60	9.60	8.41		30	W	不明土製品1。	土器囲い炉。
98号竪穴	(4)	N16-43	3.74	3.40	10.55	9.36		56	W		
99号竪穴	(4古)	N17-33	5.63	(5.50)	(26.90)	(25.06)	8.83	47	W	土製勾玉1。	
100号竪穴	(1～4)	M11-15	(5.80)	(5.55)	(28.02)		7.10	9	W		
101号竪穴	(1～4)	N12-03	(4.34)	(4.26)	(16.90)			46	W		
102号竪穴	(3～4古)	M12-85	4.35	3.69	14.04	12.79	4.30	37	W		
103号竪穴	(1～4)	L12-91	(5.50)	4.69	(21.56)	(19.30)		12	W	砥石1、軽石1、ガラス小玉1。	粘土塊。
104号竪穴	(1～4)	M13-31	(5.90)	(5.50)	(28.73)		9.74	43	W		
105号竪穴	(4古)	M14-01	4.19	3.77	13.54	12.12		35	W	軽石1。	建て替えの可能性。
106号竪穴	(3～4古)	L14-99	3.70	3.58	10.66	9.49		45	W		
107号竪穴	(4)	M15-13	(4.20)					33	W		
108号竪穴	3～4	M17-70	6.21	6.06	32.73	29.86	(10.19)	45	W		山田橋表通遺跡042号跡。 赤色顔料。
109号竪穴	(4古)	L11-52	3.95	4.03	12.58	11.58		59	W		
110号竪穴	4古	L11-57	5.18	5.37	22.02	19.15	6.05	25	W	砥石1、軽石1。	建て替えの可能性。
111号竪穴	4古	L11-28	3.85	3.91	12.00	10.92	3.28	36	W	軽石2。	粘土塊。
112号竪穴	(4)	L14-51	6.53	(5.80)	(32.66)	(31.10)	9.91	40	W		
113号竪穴	3～4	K11-87	4.33	4.51	17.29	15.01		12	W	軽石1。	
114号竪穴	4古	K11-27	4.24	3.74	12.91	11.35		34	W		
115号竪穴	(4)	K12-51	6.52	5.67	32.46	28.91	9.52	5	W	土製勾玉2、環状土製品1、 軽石4。	炉、枕石状粘土塊。
116号竪穴	4古	K12-76	4.96	(3.92)	(16.44)	(13.81)		22	W	穿孔貝巢穴痕跡泥岩。	粘土塊。
117号竪穴	古墳前期	Q13-21	6.55	5.91	36.86	34.06	12.59	34	W		土器囲い炉。
118号竪穴	古墳前期	P15-83	4.03	4.25	16.22	14.23		36	W	穿孔貝巢穴痕跡泥岩。	
119号竪穴	古墳前期	P16-24	5.22	5.56	28.40	26.28	9.45	23	W		
120号竪穴	古墳前期	N16-69	(4.42)	4.22	(17.40)	(15.96)		1	E		
121号竪穴	古墳終末期	S5-65	5.41	5.73	(30.99)	(26.82)	7.35	31	W	土製支脚1、刀子状鉄製品1。	
122号竪穴	古墳終末期	R6-45	3.98	3.95	14.70	12.85	5.01	27	W	土製支脚1、鉄鎌1。	粘土塊。
123号竪穴	古墳終末期	R6-19	4.62	4.42	20.15	17.99	5.98	27	W	土製支脚1。	
124号竪穴		S6-55	2.97	3.38	(9.83)	(8.24)		4	W		
125号竪穴	奈良	R8-92	4.43	5.09	21.77	19.33	4.37	12	W	土製支脚2、軽石1。	

第5表 山田橋大山台遺跡遺構一覧竪穴 (2)

遺構No.	時期	Grid	主(長)軸長 (m)	副(短)軸長 (m)	主軸方位	方位	底面標高 (m)	深さ(m)	炉跡	備考
1号炉穴	縄文早期	P3-35	1.36	1.29			31.37	0.30	1	
2号炉穴	縄文早期	P3-66	2.50	2.13		75 E	31.49	0.57	2	
3号炉穴	縄文早期	Q3-18	2.01	0.88		48 E	32.14	0.50	2	
4号炉穴	縄文早期	P4-91	2.44	1.21		153 W	31.91	0.62	1	
5号炉穴	縄文早期	Q4-00	1.38	0.66		171 E	32.32	0.18	1	
6号炉穴	縄文早期	P4-15	2.83	1.38		139 W	31.67	0.68	1	
7号炉穴	縄文早期	P5-62	1.07	0.80		145 E	32.38	0.25	1	
8号炉穴	縄文早期	Q5-04	(1.16)	0.56		73 W	32.35	0.19	1	
9号炉穴	縄文早期	Q5-22	1.58	0.83		121 W	32.46	0.35	1	
10号炉穴	縄文早期	P5-88	2.45	0.81		10 W	32.58	0.21	1	
11号炉穴	縄文早期	P5-96	2.37	0.90		175 E	32.46	0.33	4	
12号炉穴	縄文早期	Q5-06	1.68	1.54		31 E	32.69	0.14	2	
13号炉穴	縄文早期	Q5-07	1.99	1.81		3 W	32.50	0.33	4	
14号炉穴	縄文早期	Q5-18	1.63	1.55		43 W	32.64	0.25	1	
15号炉穴	縄文早期	Q5-36	1.71	1.42			32.56	0.35	3	
16号炉穴	縄文早期	Q5-48	1.37	0.93		160 E	32.55	0.44	1	
17号炉穴	縄文早期	Q6-41	2.03	1.21		168 E	32.73	0.32	1	
18号炉穴	縄文早期	R5-17	(1.57)	0.83			32.82	0.21	1	
19号炉穴	縄文早期	R4-59	1.22	1.03			32.88	0.17	1	
20号炉穴	縄文早期	R5-60	1.45	1.04		163 W	32.95	0.12	1	
21号炉穴	縄文早期	R5-57	0.61	0.54			32.94	0.24	1	
22号炉穴	縄文早期	S4-19	2.88	1.72			32.70	0.45	4	
23号炉穴	縄文早期	S5-61	2.08	0.87		134 W	32.83	0.76	1	
24号炉穴	縄文早期	S5-63	(2.10)	(0.93)		27 W	33.95	0.45	2	
25号炉穴	縄文早期	S5-72	(1.59)	0.80		160 W	33.20	0.28	1	
26号炉穴	縄文早期	S5-18	1.51	0.73		7 E	33.02	0.15	1	
27号炉穴	縄文早期	Q6-93	0.68	0.66			33.01	0.14	1	
28号炉穴	縄文早期	R6-51	0.99	0.95			33.08	0.25	1	
29号炉穴	縄文早期	N6-80	2.58	1.52		171 W	31.01	0.70	1	
30号炉穴	縄文早期	O7-02	2.01	1.30		161 W	31.54	0.31	1	

第6表 山田橋大山台遺跡遺構一覧土坑等 (縄文時代) (1)

遺構No.	時期	Grid	主(長)軸長 (m)	副(短)軸長 (m)	主軸方位	方位	底面標高 (m)	深さ(m)	炉跡	備考
31号炉穴	縄文早期	O7-45	2.46	2.09	125	E	31.89	0.43	2	
32号炉穴	縄文早期	R8-88	1.18	0.67	150	W	33.68	0.30	1	
1号陥穴	縄文	O11-80	2.09	0.78	83	E	31.14	0.95		
2号陥穴	縄文	O11-21	1.36	1.10	21	W	30.31	0.80		
3号陥穴	縄文	O14-92	1.56	0.81	34	W	32.33	1.20		
4号陥穴	縄文	O16-57	1.63	0.71	90	E	30.97	1.21		
1号土坑	縄文?	Q11-18	(3.40)	(3.00)			32.75	0.65		
2号土坑	縄文中期	R9-38	0.86	0.71	30	E	33.09	0.76		
3号土坑	縄文	M15-99	1.02	0.95			32.65	0.84		

第7表 山田橋大山台遺跡遺構一覧土坑等（縄文時代）（2）

遺構No.	時期	Grid	主長軸長 外径(m)	主長軸長 墳丘(m)	主長軸長 内径(m)	副短軸長 外径(m)	副短軸長 墳丘(m)	副短軸長 内径(m)	主軸 方位	方位	形態	埋葬施設	備考
1号方形周溝墓	(4古)	Q7-85	9.52	8.13	7.75	9.70	8.50	8.17	56	E	北東1隅開口	方台部2基	周溝内土坑4。
2号方形周溝墓	(3)	Q7-59	10.24	9.02	8.60	10.06	8.90	8.67	67	E	4隅開口	方台部1基	
3号方形周溝墓	4古	N12-66	13.14	11.67	11.00	13.40	11.38	10.70	102	E	南東1隅開口	方台部1基	周溝内土坑4。
大塚台2号墳	古墳中期	R4-34	15.27	13.02	12.25	14.79	12.98	12.37			円墳	周溝内1基	

第8表 山田橋大山台遺跡遺構一覧方形周溝墓・古墳等

遺構No.	時期	Grid	主(長)軸 長掘形	副(短)軸 長掘形	主(長)軸 長棺(m)	副(短)軸 長棺(m)	底面標高 (m)	深さ(m)	主軸方位	方位	備考
1号方周 1号主体部	(4古)	Q7-95	3.22	2.36	1.94	0.66	32.22	1.15	60	E	碧玉製管玉2、ガラス小玉23、鉄板片3。
1号方周 2号主体部	(4古)	Q7-75	2.27	1.31			33.14	0.17	60	E	
2号方周 主体部	(3)	Q7-69	3.12	2.04	2.28	0.59	32.28	1.05	96	E	ガラス小玉41。
3号方周 主体部	4古	N12-56	3.58	2.63	2.18	0.72	32.36	0.79	92	E	ガラス小玉9、棺底面赤色顔料。
1号木棺土坑墓	(4古)	R7-01	3.34	2.27	2.02	0.64	32.58	1.13	160	E	碧玉製管玉3、ガラス小玉8、棺底面赤色顔料(分析対象)。
2号木棺土坑墓	3	R8-21	2.67	1.18	2.48	0.65	33.18	0.65	67	E	棺小口間2.16m。
3号木棺土坑墓	(4古)	Q14-16	3.07	1.70	2.34	0.78	33.41	0.45	86	E	棺底面赤色顔料。
2号墳周溝内主体部	古墳中期	R4-02	1.97	0.65	1.47	0.44	32.37	0.71	54	E	

第9表 山田橋大山台遺跡遺構一覧埋葬遺構

遺構No.	時期	Grid	主(長)軸長 (m)	副(短)軸長 (m)	底面標高 (m)	深さ(m)	主軸方位	方位	備考
4号土坑	3	Q7-10	1.65	1.19	32.75	0.26			土坑重複、周辺にもPit、堅穴の可能性。
5号土坑	弥生?	L12-35	2.22	2.04	29.90	0.76	30	E	
6号土坑	弥生?	O17-51	3.12	1.73	32.74	0.37	63	E	井戸状遺構、ウマ上下顎臼歯出土。
7号土坑	奈良	R8-00	4.82	4.60	30.95	2.52			
8号土坑		M15-38	1.48	0.87	32.10	0.11			2号溝関連遺構か。
9号土坑		O11-17	7.40	4.30	31.82	0.90			4号溝関連遺構か。
10号土坑		O10-71	4.98	4.09	31.36	0.69			
11号土坑	近世	O18-37	1.79	1.74	30.20	2.43			焙烙出土。

第10表 山田橋大山台遺跡遺構一覧土坑（弥生時代以降）

遺構No.	No.	種別	素材	特徴	現存量	長(cm)	幅(cm)	高(cm)	重量(g)	備考	出土状況
1号土坑	1	石鏃	チャート		完存	2.25	1.86	0.50	1.60		
11号炉穴	11	石皿	輝石安山岩	表裏面ともゆるやかくくぼむ。研磨・打痕とも不明瞭。	約1/4	(9.7)	(9.5)	4.0	(527.0)		一括
7号堅穴	21	加工礫(蔽石)	輝石安山岩	下端に細かい打痕、剥離。上端剥離痕。	完存	8.3	5.3	3.8	248.0		覆土
8号堅穴	5	砥石	輝石安山岩	上下端を含む各面とも研磨。とくに左面に明瞭な線状痕を残す。上下端一部に軽い打痕。	完存	11.4	5.9	4.0	360.0		覆土
9号堅穴	6	石斧	無斑晶ガラス安山岩(武尊火山)	片面に自然面を残す。	半損	(4.75)	4.4	1.2	(36.1)		一括
9号堅穴	7	加工礫(蔽石)	石英斑岩	研磨痕および軽い打痕。表裏面平滑。	半損	(4.7)	9.6	4.7	(290.0)		一括
13号堅穴	16	加工礫(磨石)	輝緑岩	全体に礫面は荒れる。両端側面に研磨。	完存	12.9	4.1	3.9	427.0		一括
18号堅穴	-	-	軽石	すべて破面。	破片	(3.8)	-	-	16.7	不実測。	一括
27号堅穴	9	磨石	軽石	全面に整形を加え、握り状のつくりをもつ。研磨具として底面を使用か。ただし明確な使用痕は認められない。	完存か	6.70	5.50	4.30	28.40		覆土
31号堅穴	10	砥石	デイサイト	表面、右側面を中心に、裏面、頭部の一部を含め研磨痕。ランダムな方向に光沢をもつ研磨痕が認められる。下端部に弱い蔽打痕。	完存	9.1	4.5	3.4	183.0		一括
33号堅穴	33	磨石	軽石	角柱状。破面は認められない。器面があられており、整形痕、使用痕とも不明瞭。研磨具か。	完存	3.8	2.5	2.7	4.4		一括
33号堅穴	-	-	軽石	すべて破面。	破片	(1.7)	(1.66)	(0.96)	(1.1)	不実測。	一括
36号堅穴	21	磨石	軽石	各面とも平滑で破面はない。下面はとくに平坦で一定方向の擦痕を残す。	完存	8.1	7.9	4.2	46.2	産地同定分析試料。	一括
40号堅穴	14	-	軽石	上端は破断面。他面は整形されるが、使用痕は認められない。	一端のみ	3.3	3.4	(1.8)	(7.3)		一括
46号堅穴	18	加工礫(蔽石)		頭部蔽打痕。	半損	(5.0)	4.9	3.8	(138.3)		一括
46号堅穴	19	-	軽石	全体に平滑。明確な特徴をもつ使用痕は認められない。	完存	5.5	5.4	3.8	20.7		一括
46号堅穴	9	凹石	輝石安山岩	両面に凹部。その周囲も平滑。	完存	8.3	6.3	2.2	206.0		一括
49号堅穴	21	こて状	軽石	穿孔。全体に平滑。ただし、明確な線状痕は見られない。	完存	6.1	4.7	2.2	10.1	産地同定分析試料。	一括
54号堅穴	17	加工礫(蔽石)	砂岩	円礫を使用し、下端に著しい打痕。上端部にも若干の打痕。	完存	9.5	9.2	3.1	412.0		床面

第11表 縄文時代以降石器観察表（1）

遺構No.	No.	種別	素材	特徴	現存量	長(cm)	幅(cm)	高(cm)	重量(g)	備考	出土状況
54号堅穴	18	砥石	アブライト	側3面研磨、平滑。擦痕は明瞭ではない。	完存か	6.2	4.3	2.3	83.9		覆土
58号堅穴	11	-	軽石	全体に平滑。一部擦痕がみられるものの、遺物洗浄時の可能性が高い。	完存	6.35	6.0	3.05	19.1		床面
59号堅穴	13	磨石	軽石	各面とも平坦、平滑。とくに左側面が平滑であるが、特定の使用痕は認められない。	完存	7.0	5.4	2.2	15.1		覆土
70号堅穴	10	台石	安山岩	一面研磨により平滑化。線状痕等は認められない。	完存か	11.2	7.1	9.8	1035.0		覆土
71号堅穴	-	-	軽石	各面とも破面。研磨痕跡は認められない。	破片	(8.5)	(7.3)	(4.9)	(53.9)	不実測。産地同定分析試料。	一括
75号堅穴	1	-	軽石	方柱状、一端破面。研磨面4面のうち3面が凹状となる。	一端欠	(9.45)	7.7	6.5	(93.2)	産地同定分析試料。	覆土
83号堅穴	4	こて状	軽石	こて状。破面は認められない。裏面一部が特に平滑、使用面か。線状痕は認められない。	完存	6.25	3.5	2.25	7.8		一括
87号堅穴	-	-	軽石	研磨面若干認められるものの他破面。	破片	(2.9)	(2.8)	(1.1)	(2.2)	不実測。	覆土
94号堅穴	15	加工礫(砥石)	砂岩	下端部打痕、研磨。	完存	9.6	6.0	3.7	292.0		P5内
103号堅穴	3	砥石	凝灰質砂岩	表面摩滅。部分的にミガキ状の光沢をもつ研磨痕。	完存	8.2	3.9	3.5	46.8		覆土
103号堅穴	-	-	軽石	不定形。研磨面は認められない。	破片	(2.9)	(2.3)	(2.2)	(3.6)	不実測。	一括
105号堅穴	11	-	軽石	各面とも平滑。使用痕は特定できない。孔部は意図的な穿孔はない。	完存	3.90	4.4	2.8	9.3		一括
110号堅穴	17	砥石	砂岩	両面および1側面平滑化。線状痕は認められない。	完存	9.2	4.8	2.0	128.6		一括
110号堅穴	18	磨石	軽石	片面のみ使用。線状痕は認められない。	完存	5.95	4.5	3.0	12.5		床面
111号堅穴	-	-	軽石	基本的に破面。	破片	(5.1)	(4.9)	(3.65)	(11.9)	不実測。	一括
111号堅穴	-	-	軽石	すべて破面。	破片	(2.8)	(1.9)	(1.35)	(1.5)	不実測。	一括
113号堅穴	-	-	軽石	すべて破面。	破片	(4.6)	(3.8)	(1.9)	(6.2)	不実測。	一括
115号堅穴	34	-	軽石	表面2孔、裏面1孔。意図的な穿孔。穿孔部に付着物等の変化は認められない。各面は明確な整形痕なし。	部分か	(4.7)	(4.2)	(3.8)	(11.9)		覆土
115号堅穴	35	-	軽石	全体に研磨。両面に凹部。	完存か	7.9	5.2	3.8	32.6		覆土
115号堅穴	36	-	軽石	全体に研磨。	完存	4.7	4.9	3.9	18.5		覆土
115号堅穴	-	-	軽石	角状端部。研磨3面。	一端のみ	(4.5)	(3.1)	(2.8)	(3.9)	不実測。	覆土
125号堅穴	6	磨石	軽石	各面とも平滑、破面はない。とくに3面が平滑。	完存	4.2	4.2	2.9	8.8		一括
2号木棺土坑墓	-	-	軽石	すべて破面。	破片	(4.0)	-	-	(5.1)	不実測。	一括
2号木棺土坑墓	-	-	軽石	すべて破面。	破片	(3.9)	-	-	(4.8)	不実測。	一括
遺構外	1	石礫	黒曜石		片脚部欠損	2.25	(1.75)	0.70	(1.7)	24号堅穴(R6区)出土。	
遺構外	2	石礫	流紋岩		完存	2.19	1.69	0.35	0.9	125号堅穴(R8区)出土。	
遺構外	3	石礫	黒曜石		先端部一部欠	(1.85)	1.55	0.38	(0.8)	36号堅穴(R8区)出土。	
遺構外	4	石礫	黒曜石		先端のみ	(1.21)	(1.45)	(0.23)	(0.3)	O5区出土。	
遺構外	5	石礫	黒曜石		完存	1.80	1.26	0.33	0.6	26号堅穴(R7区)出土。	
遺構外	6	凹石(石皿)	多孔質輝石安山岩	石皿裏面多孔。	石皿一部	(14.50)	(8.8)	7.2	(528.0)	O14区出土。	

第12表 縄文時代以降石器観察表 (2)

遺構No.	No.	種別	特徴	現存量	長(cm)	幅径(cm)	高厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	出土状況
24号堅穴	11	紡錘車	ナデ整形。両面からの穿孔。	完存	-	3.2～3.3	1.4	0.45～0.55	13.4	明褐色	炉内一括
24号堅穴	12	勾玉	指ナデ整形。器面凹凸が激しい。焼成前の穿孔2回。片面、両面は判断できない。	頭部のみ、半損	(2.0)	(1.2)	1.1	0.1	(1.6)	暗灰黄色	一括
25号堅穴	35	勾玉	指ナデ整形。器面凹凸が激しい。穿孔は方向を変えて2回。両面からの穿孔。	完存	3.9	2.30	2.20	0.30～0.77	15.1	明黄褐色	一括
33号堅穴	34	勾玉	指ナデ整形。器面凹凸が激しい。穿孔は1回。	頭部のみ、半損	(2.7)	1.6	1.5	0.15	(4.8)	灰黄色	一括
33号堅穴	35	勾玉	体部の屈曲が弱い。指ナデ整形。器面凹凸が激しい。穿孔は1回。器面状態不良。	完存	3.0	1.45	1.45	0.25	5.5	明黄褐色	一括
33号堅穴	36	勾玉	体部の屈曲が弱い。指ナデ整形。器面凹凸が激しい。穿孔は3回以上。器面状態不良。	完存	3.0	1.8	1.65	不定	7.8	橙色	一括
53号堅穴	20	脚状土製品	指ナデ	基部のみ	4.0	3.8	(4.0)	-	(52.1)	橙色	覆土
54号堅穴	16	勾玉	体部屈曲。腹部は平坦で、背部はまるみをおびる。指ナデ整形、器面平滑。両面穿孔か。	完存	3.9	1.45	1.20	0.45	8.4	にぶい黄橙色	覆土
64号堅穴	11	勾玉	全体に丸みをおびる。指ナデ整形、器面平滑。穿孔は1回。	頭部、尾部欠	(4.2)	2.05	1.70	-	(18.0)	にぶい橙色～褐灰色	覆土
87号堅穴	7	勾玉	指ナデ整形、器面平滑。	頭部欠、尾部のみ	(2.0)	0.90	0.85	-	(1.4)	にぶい黄橙色	覆土
97号堅穴	9	不明土製品	円盤状か。表面指ナデ。指頭によると推定される凹部。裏面の調整は粗い。	1/4程度	(7.7)	(6.6)	2.5	-	(71.3)	橙色	炉内一括
99号堅穴	15	勾玉	指ナデ整形か。成形時、焼成時の割れが目立つ。	頭部欠、尾部のみ	(3.20)	1.15	1.37	-	(5.4)	明褐色	床面
115号堅穴	31	勾玉	指ナデ整形、平滑。ミガキを加えている可能性。片面からの穿孔。	穿孔部周辺剥落	3.5	0.88	0.80	0.13～0.23	3.1	褐灰色	炉内
115号堅穴	32	勾玉	指ナデ整形、平滑。器面状態不良。	頭部欠、半損	(3.3)	1.24	1.09	-	(4.6)	にぶい黄橙色	覆土
115号堅穴	33	環状土製品	屈折部に連続する円形浮文。ヘラ先によるナデ。	1/2周	3.7	1.10	1.90	-	-	暗灰黄色	床面
121号堅穴	18	支脚	成形は芯粘土に板状粘土を巻きつける。器面ナデ。	基部付近	(12.7)	(6.0)	-	-	(294.8)	橙色	床面
122号堅穴	6	支脚	成形は芯粘土に板状粘土を巻きつける。器面ナデ。	先端部	(17.5)	(7.1)	(6.4)	-	(620.0)	橙色～にぶい黄色	カマド内
123号堅穴	8	支脚	成形は芯粘土に板状粘土を巻きつける。器面ナデ。	基部欠損	(4.1)～(11.1)	(9.0)	-	-	-	にぶい橙色	床面
125号堅穴	7	支脚	成形は芯粘土に板状粘土を巻きつける。器面指ナデ痕を残す。	両端欠損	(8.9)	(8.0)	-	-	(343.2)	橙色	カマド内
125号堅穴	8	支脚	断面観察不能。部分的に粘土の巻つけ痕跡がみられる。器面ナデ。		(13.3)	(5.3)	-	-	(259.4)	橙色	床面
遺構外4		環状土製品	内外面とも粘土紐積上げ痕3段を明瞭に残す。縦方向の指ナデ。	基部付近	-	2.1	0.75	-	(8.1)	にぶい黄色	床面
遺構外3		有孔垂飾	ミガキ、赤彩。	先端部	-	2.30	(2.20)	-	-	赤褐色	床面

第13表 弥生・古墳時代土製品観察表

遺構No.	No.	種別	素材	特徴	現存量	長(cm)	幅径(cm)	高厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	出土状況
63号堅穴	26	勾玉	滑石製	腹部、尾部線状痕。各面とも丸みを欠く。両面穿孔。	尾部欠損再研磨	(1.82)	0.67	0.5	0.45	1.3	オリーブ灰色	覆土
64号堅穴	12	不明石製品	滑石製	側3面研磨、平滑。擦痕を残す。	両端、裏面破断面	(2.9)	(1.6)	(1.1)	-	(7.3)	オリーブ灰色	覆土
64号堅穴	13	不明石製品	滑石製	各側面研磨、平滑。擦痕を残す。	両端欠損	(2.9)	1.4	0.5	-	(3.2)	オリーブ灰色	覆土
103号堅穴	4	小玉	ガラス製	円柱状で器壁はうすい。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡、列状配列。小口側押捺不明確。側面押捺による平坦面4面程度。	完存	-	0.50～0.55	0.47	0.22～0.37	0.1685	紺色	覆土
1号方形周溝墓	6	管玉	碧玉製	整形痕は明瞭ではない。片面穿孔か。	完存	-	0.29～0.30	0.78	0.12	0.1098	濃緑色	棺底
1号方形周溝墓	7	管玉	碧玉製	整形痕は明瞭ではない。片面穿孔か。	破断面を再調整か	-	0.28	(0.70)	0.06～0.09	(0.0874)	濃緑色	棺部一括
1号方形周溝墓	8	小玉	ガラス製	球状に近い。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。片小口面平坦。側面押捺による平坦面。	一部破損、割れ	-	0.91～0.95	0.71	0.38～0.40	(0.7187)	濃紺色	棺底
1号方形周溝墓	9	小玉	ガラス製	球状に近い。引き伸ばし、管切り法か。球状気泡、配列不明確。片小口面平坦。側面押捺不明確。	完存	-	0.80～0.81	0.56	0.22～0.24	0.5312	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	10	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡、列状配列。両小口面平坦。側面押捺による平坦面2面以上。	完存	-	0.65～0.75	0.53	0.16～0.21	0.3849	濃紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	11	小玉	ガラス製	球状に近い。引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列か、片小口面平坦。側面押捺による平坦面3面程度。	一部表面剥落	-	0.70～0.71	0.59	0.23～0.27	(0.3712)	濃紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	12	小玉	ガラス製	球状に近い。引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列か、小口面、側面とも押捺は不明確。	完存	-	0.69～0.72	0.61	0.16	0.4086	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	13	小玉	ガラス製	円柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡、列状配列。小口面押捺不明確。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。	完存	-	0.65～0.67	0.64	0.23	0.3782	濃紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	14	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡、列状配列。片小口面押捺、平坦。側面押捺による平坦面1面以上。	完存	-	0.60～0.68	0.45	0.19～0.23	0.2252	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	15	小玉	ガラス製	球状。引き伸ばし、管切り法か。球状気泡。小口面押捺、平坦。側面押捺不明確。	一部破損	-	0.63～0.65	0.50	0.12～0.14	(0.2602)	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	16	小玉	ガラス製	球状に近い。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡、列状配列。小口面、側面とも押捺は不明確。	一部破損	-	0.62～0.64	0.55	0.20～0.27	(0.2730)	濃紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	17	小玉	ガラス製	円柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡、列状配列。小口面は断面はゆるやかに弧状をえがき、押捺痕不明確。側面押捺による平坦面3面以上。	完存	-	0.61～0.63	0.58	0.21～0.24	0.2799	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	18	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列。小口面押捺痕不明確。側面押捺による平坦面2面以上。	完存	-	0.51～0.55	0.50	0.14～0.15	0.1889	紺色	棺底
1号方形周溝墓	19	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列。両小口面平坦。側面押捺不明確。	完存	-	0.53～0.55	0.34	0.14～0.16	0.1373	濃紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	20	小玉	ガラス製	円柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。両小口面平坦。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。	完存	-	0.46～0.59	0.48	0.10	0.1727	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	21	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。両小口面押捺、平坦。側面両側からの押捺。	完存	-	0.46～0.57	0.34	0.16～0.21	0.1335	濃紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	22	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。片小口面平坦。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。	完存	-	0.45～0.46	0.40	0.13～0.15	0.1084	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	23	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。両小口、側面とも押捺不明確。	完存	-	0.49～0.50	0.34	0.17	0.0960	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	24	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡多、列状配列か、小口、側面とも押捺不明確。	完存	-	0.37～0.40	0.33	0.12～0.14	0.0638	淡青色	棺底
1号方形周溝墓	25	小玉	ガラス製	算盤玉状。引き伸ばし、管切り法か。大小球状気泡多、列状配列。両小口平坦。側面押捺不明確。	完存	-	0.42～0.46	0.27	0.12～0.14	0.0708	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	26	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法か。大小球状気泡が部分的に泡立つ。散在、列状配列。両小口平坦。側面押捺不明確。	完存	-	0.35～0.39	0.25	0.11	0.0407	淡青色	棺底
1号方形周溝墓	27	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法。小球状気泡多、列状配列。両小口面押捺、平坦。側面押捺不明確。	完存	-	0.38～0.40	0.22	0.10～0.14	0.0468	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	28	小玉	ガラス製	球状。引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列。小口面、側面とも押捺は不明確。	完存	-	0.35～0.36	0.34	0.13～0.15	0.0564	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	29	小玉	ガラス製	算盤玉状。引き伸ばし、管切り法。小球状気泡、列状配列。両小口平坦。側面押捺不明確。	完存	-	0.34～0.36	0.23	0.08～0.11	0.0406	紺色	棺部一括
1号方形周溝墓	30	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。両小口平坦。側面押捺不明確。	完存	-	0.35～0.39	0.23	0.10	0.0431	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	14	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。片小口面平坦。側面押捺は不明確であるが平坦面1面以上。	完存	-	0.66～0.69	0.49	0.19～0.24	0.3142	紺色	棺底
2号方形周溝墓	15	小玉	ガラス製	いびつ。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口面押捺痕不明確。側面押捺による平坦面3面以上。	完存	-	0.64～0.70	0.69	0.17	0.3780	濃紺色	棺底
2号方形周溝墓	16	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口面押捺痕不明確。側面押捺による平坦面3面以上。側面縦方向に浅い条線1条。	完存	-	0.64～0.70	0.60	0.21～0.25	0.3698	濃紺色	棺底
2号方形周溝墓	17	小玉	ガラス製	球状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列か、小口面押捺痕不明確。側面押捺による平坦面3面以上。部分的にくぼむ。	完存	-	0.59～0.66	0.55	0.22～0.25	0.2905	濃紺色	棺底

第14表 弥生時代石製・ガラス製玉類、石製品観察表（1）

遺構No.	No.	種別	素材	特徴	現存量	長(cm)	幅径(cm)	高厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	出土状況
2号方形周溝墓	18	小玉	ガラス製	球状。引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列か。小口面押捺痕不明確。側面押捺による平坦面2面程度。	完存	-	0.61～ 0.64	0.58	0.18～ 0.21	0.2792	濃紺色	棺底
2号方形周溝墓	19	小玉	ガラス製	いびつな算盤玉状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口平坦面は認められない。側面多方向からの押捺平坦面。	完存	-	0.65～ 0.67	0.49	0.12～ 0.14	0.2796	紺色	棺底
2号方形周溝墓	20	小玉	ガラス製	いびつ。引き伸ばし、管切り法か。球状気泡、配列不明確。小口面押捺不明確。側面弱い押捺。	完存	-	0.61～ 0.65	0.55	0.14～ 0.16	0.2871	濃紺色	棺底
2号方形周溝墓	21	小玉	ガラス製	いびつ。引き伸ばし、管切り法か。球状気泡、配列不明確。小口面押捺不明確。側面押捺による平坦面3面以上。	完存	-	0.53～ 0.62	0.49	0.14～ 0.20	0.2038	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	22	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。小球状気泡多、列状配列。片小口面平坦。側面弱い押捺。	完存	-	0.58～ 0.59	0.42	0.12～ 0.21	0.1949	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	23	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法か。大小球状気泡少、配列不明確。小口、側面とも押捺不明確。	一部破損	-	0.58	0.41	0.16～ 0.18	(0.1737)	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	24	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列。小口面押捺不明確。側面押捺による平坦面5面程度。	完存	-	0.54～ 0.59	0.45	0.17～ 0.20	0.1792	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	25	小玉	ガラス製	球状。引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列。小口面押捺不明確。側面押捺による平坦面1面以上。	完存	-	0.53～ 0.60	0.52	0.16～ 0.22	0.2179	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	26	小玉	ガラス製	球状。引き伸ばし、管切り法。球状気泡多、列状配列。小口面押捺不明確。側面弱い押捺。	完存	-	0.56～ 0.59	0.48	0.14～ 0.16	0.2121	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	27	小玉	ガラス製	球状。引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。小口面押捺不明確。側面押捺により部分的にくぼむ。	完存	-	0.48～ 0.52	0.51	0.15～ 0.18	0.1656	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	28	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列。小口面押捺不明確。側面弱い押捺。	完存	-	0.52～ 0.53	0.47	0.18	0.1713	濃紺色	棺底
2号方形周溝墓	29	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡、列状配列。小口面押捺不明確。側面弱い押捺。	一部破損	-	0.50～ 0.56	0.46	0.19～ 0.22	(0.1776)	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	30	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口面押捺不明確。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。孔断面もゆがむ。	完存	-	0.51～ 0.54	0.64	0.14～ 0.16	0.2492	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	31	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口面押捺不明確。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。	完存	-	0.44～ 0.52	0.53	0.12～ 0.14	0.1644	紺色	棺底
2号方形周溝墓	32	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口面押捺不明確。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。	割れ、一部破損	-	0.46～ 0.48	0.68	0.12～ 0.15	(0.1943)	紺色	棺底
2号方形周溝墓	33	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。片小口平坦面。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。	完存	-	0.47～ 0.50	0.57	0.14～ 0.16	0.1942	紺色	棺底
2号方形周溝墓	34	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口面押捺不明確。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。	完存	-	0.44	0.56	0.12～ 0.14	0.1420	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	35	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。両小口から側面は、小口の切断面を残すように明確な稜線を残す。側面押捺は不明確。縦方向の浅い条線3条。黒色粒の不純物を含む。	完存	-	0.38～ 0.40	0.60	0.09～ 0.11	0.1167	紺色	棺底
2号方形周溝墓	36	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。両小口平坦面。側面押捺により平坦面2面。側面に縦方向の条線。	完存	-	0.41～ 0.44	0.48	0.08～ 0.10	0.1301	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	37	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法か。球状気泡少。片小口平坦面。側面押捺による平坦面。	完存	-	0.41～ 0.42	0.46	0.12～ 0.14	0.1044	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	38	小玉	ガラス製	ゆがみ、扁平。引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列。小口面押捺不明確。側面不定方向からの押捺、平坦面2面以上。縦方向の浅い条線。	一部破損	-	0.58～ 0.60	0.38	0.17～ 0.19	(0.1623)	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	39	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法か。大小球状気泡。片小口平坦面。側面押捺痕。縦方向の浅い条線1条。	完存	-	0.61～ 0.68	0.37	0.20～ 0.23	0.1749	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	40	小玉	ガラス製	ゆがみ、扁平。引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。両小口平坦面。側面不定方向からの押捺。縦方向の浅い条線。	一部破損	-	0.59～ 0.74	0.42	0.18～ 0.21	(0.2024)	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	41	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。片小口平坦面。側面押捺不明確。	一部破損	-	0.63～ 0.67	0.40	0.18～ 0.22	(0.2142)	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	42	小玉	ガラス製	小口面から見て一向に扁平。引き伸ばし、管切り法か。球状気泡少。小口面押捺不明確。	完存	-	0.58～ 0.70	0.47	0.14～ 0.21	0.2764	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	43	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法か。球状気泡少。小口平坦は認められるが、押捺状ではない。側面押捺不明確。	完存	-	0.65～ 0.66	0.37	0.12～ 0.14	0.2213	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	44	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法か。球状気泡少。片小口平坦面。押捺状ではない。側面押捺不明確。	完存	-	0.60～ 0.65	0.35	0.18～ 0.20	0.1852	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	45	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡、列状配列。両小口平坦面。押捺状ではない。側面弱い押捺。	完存	-	0.49～ 0.55	0.35	0.14～ 0.17	0.1362	濃紺色	棺底
2号方形周溝墓	46	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法か。球状気泡少。小口面、側面とも押捺不明確。	半損	-	(0.57)	0.38	0.13	(0.0705)	紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	47	小玉	ガラス製	球状。引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。小口面押捺不明確。側面弱い押捺。	完存	-	0.49～ 0.52	0.38	0.12	0.1340	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	48	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法か。気泡少。両小口平坦面。側面押捺による平坦面2面以上。	完存	-	0.52～ 0.56	0.33	0.19～ 0.22	0.1238	濃紺色	棺部一括
2号方形周溝墓	49	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法。球状気泡多、列状配列。両小口平坦面。側面押捺不明確。	完存	-	0.55～ 0.57	0.22	0.18	0.0895	紺色	棺底
2号方形周溝墓	50	小玉	ガラス製	扁平。引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。両小口平坦面。側面押捺不明確。	完存	-	0.51～ 0.52	0.30	0.13	0.1130	紺色	棺部一括

第15表 弥生時代石製・ガラス製玉類、石製品観察表（2）

遺構No.	No.	種別	素材	特徴	現存量	長(cm)	幅径(cm)	高厚(cm)	孔径(cm)	重量(g)	色調	出土状況
2号方形周溝墓		小玉	ガラス製	全体に剥離状の割れ。観察不能。	1/4程度	－	(0.62)	0.46	－	(0.0888)	紺色	棺底
2号方形周溝墓		小玉	ガラス製	所在不明。		－	－	－	－	－	－	棺底
2号方形周溝墓		小玉	ガラス製	所在不明。		－	－	－	－	－	－	棺底
2号方形周溝墓		小玉	ガラス製	所在不明。		－	－	－	－	－	－	棺底
3号方形周溝墓	19	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法か。大小球状気泡多、列状配列不明確。片小口平坦面。側面押捺による平坦面2面以上。	完存	－	0.52～ 0.58	0.55	0.16～ 0.19	0.2259	紺色	棺底
3号方形周溝墓	20	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口面押捺不明確。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。	完存	－	0.46～ 0.5	0.59	0.16～ 0.18	0.1927	紺色	棺底
3号方形周溝墓	21	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口面押捺不明確。側面押捺による平坦面2面以上。	完存	－	0.5～ 0.54	0.52	0.16～ 0.18	0.1970	濃紺色	棺部一括
3号方形周溝墓	22	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。小口面、側面とも弱い押捺。	完存	－	0.5～ 0.53	0.44	0.16～ 0.18	0.1642	濃紺色	棺部一括
3号方形周溝墓	23	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。小口面、側面とも弱い押捺。	完存	－	0.46～ 0.48	0.46	0.19	0.1412	紺色	棺底
3号方形周溝墓	24	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。小口面、側面とも弱い押捺。	完存	－	0.52～ 0.53	0.41	0.15	0.1618	紺色	棺部一括
3号方形周溝墓	25	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。両小口明確な押捺面。側面は弱い押捺。	完存	－	0.51～ 0.53	0.43	0.14	0.1677	紺色	棺部一括
3号方形周溝墓	26	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡多、列状配列。小口面押捺不明確。側面押捺による平坦面3面以上。	完存	－	0.48～ 0.51	0.40	0.12～ 0.16	0.1611	紺色	棺底
3号方形周溝墓	27	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡多、列状配列。両小口平坦面。側面押捺による平坦面4面以上。	完存	－	0.48～ 0.5	0.46	0.19	0.1378	紺色	棺部一括
1号木棺土坑墓	2	管玉	碧玉製	整形痕は不明瞭。片面穿孔か。片面破面。	半損	－	0.25	(1.13)	0.1～ 0.11	(0.1151)	灰緑色	棺底
1号木棺土坑墓	3	管玉	碧玉製	整形痕は不明瞭。片面穿孔か。	完存	－	0.27	1.00	0.1～ 0.13	0.1190	濃緑色	棺部一括
1号木棺土坑墓	4	管玉	碧玉製	整形痕は不明瞭。片面穿孔か。片面破面。	半損	－	0.25～ 0.26	(0.61)	0.09～ 0.12	(0.0669)	灰緑色	棺底
1号木棺土坑墓	5	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。小口面押捺不明確。側面押捺による平坦面4面以上。	完存、表面一部剥離	－	0.58～0.67	0.49	0.18～ 0.2	0.2889	紺色	棺部一括
1号木棺土坑墓	6	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡多、筋状、列配列。小口面押捺不明確。側面弱い押捺。	完存	－	0.59～ 0.61	0.42	0.16	0.2167	紺色	棺底
1号木棺土坑墓	7	小玉	ガラス製	いびつ。引き伸ばし、管切り法。球状気泡多、筋状、列配列。小口面押捺不明確。側面弱い押捺。	完存	－	0.57～ 0.63	0.40	0.18	0.1794	紺色	棺底
1号木棺土坑墓	8	小玉	ガラス製	算盤玉状。引き伸ばし、管切り法か。大小球状気泡多、配列不明確。側面押捺か。表面気泡がゆがむ。	完存	－	0.66～0.7	0.35	0.18～ 0.2	0.1829	紺色	棺底
1号木棺土坑墓	9	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。球状気泡少、列状配列。小口面押捺不明確。側面弱い押捺。	完存	－	0.54～ 0.57	0.33	0.2～ 0.24	0.1244	濃紺色	棺底
1号木棺土坑墓	10	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法か。球状気泡少、配列不明確。小口面側面押捺による平坦面3面以上。	完存	－	0.50～ 0.52	0.47	0.16	0.1823	濃紺色	棺部一括
1号木棺土坑墓	11	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。小球状気泡、筋状、列配列。小口面、側面とも押捺不明確。	完存	－	0.50～ 0.52	0.20	0.18	0.1244	紺色	棺底
1号木棺土坑墓	12	小玉	ガラス製	柱状。引き伸ばし、管切り法。小球状気泡、列状配列。両小口平坦面。側面弱い押捺。	完存	－	0.32～ 0.36	0.38	0.14	0.0628	紺色	棺部一括
遺構外	5	小玉	ガラス製	引き伸ばし、管切り法。大小球状気泡多、列状配列。小口面押捺不明確。押捺により、部分的に側面中央がくぼむ。側面に縦方向の条線。	完存	－	0.53～ 0.56	0.66	0.13	0.3	濃紺色	一括

ガラス玉について、基本的にはカリ石灰の透明ガラスであり、不透明、半透明はあくまでも相対的な基準。
ガラス玉押捺面は、すべてが意図的な押捺とは判断できない。
ガラス玉側面のくぼみは、両小口面からの押捺による可能性もある。
ガラス玉小口、側面の押捺は、押捺の先後によって形状が異なってくる可能性がある。押捺が不明確としたものも、別面の押捺によって、平坦面が弧状になることも想定される。

第16表 弥生時代石製・ガラス製玉類、石製品観察表（3）

遺構No.	No.	種別	素材	特徴	現存量	長径(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	備考	出土状況
18号堅穴	5	環状	銅製	両端部は破断面、調整等認められない。側端部は明確な面をもつ。	約1/2周	(2.38)	0.69～ 0.71	0.16	(2.0)	欠損部は新しい割れか。	P2内か
25号堅穴	36	鎌	鉄製	柳葉式か。	間部分のみ。	(2.7)	(2.05)	(0.45)	(4.7)		一括
27号堅穴	10		鉄製	部位等不明。一方側端部刃部形成。	半損	(2.02)	1.73	0.20	(2.30)		一括
121号堅穴	17	刀子状	鉄製		切先のみ	(3.22)	(0.52)	0.20	(1.5)		床面
122号堅穴	7	鎌	鉄製		両端欠損	(17.3)	(3.3)	0.30	(19.2)		一括
1号方形周溝墓	31	釧状	鉄製	板状。両側端は明確な面をもたない。径は6cm程度か。	接合部一端遺存	(3.3)	1.20	0.13	(1.3)	他に小破片2。	1号主体部棺底
4B号溝	1	刀子(包丁)	鉄製	錆は認められない、平造り。	ほぼ完存、錆が進み剥落が激しい	20.3	2.8	0.55	95.4	錆が進み剥落が激しい。	一括

第17表 鉄器・青銅器観察表

遺物No.	遺構No.	種別	素材	特徴	現存量	外径上下(mm)	外径左右(mm)	内径上下(mm)	内径左右(mm)	厚(mm)	重量(g)	備考	出土状況
1	9号土坑	璽章元寶	銅製	篆書、北宋(1068年初鑄)	完存	23.86	23.93	19.90	20.71	0.99～1.22	2.50	写真図版84掲載。	一括
2	1号溝	寛永通寶	銅製		完存	23.18	23.10	18.42	18.92	1.27～1.38	3.00	写真図版84掲載。	一括
3	2号溝	寛永通寶	銅製		完存	23.13	22.75	18.89	18.46	1.17～1.36	3.00	写真図版84掲載。	一括
4	4B号溝	寛永通寶	銅製		約1/4	(25.58)	(25.80)	(22.54)	(22.54)	0.95～1.23	(0.70)	写真図版84掲載。	一括
5	4C号溝	寛永通寶	銅製		完存	23.50	23.54	19.15	18.68	1.16～1.35	2.90	写真図版84掲載。	一括
6	遺構外	不明	銅製		完存	22.77	22.59	19.78	19.55	1.07～1.26	2.50	未掲載。	一括
7	4B号溝	寛永通寶	銅製		完存	27.58	27.28	24.98	24.86	1.21～1.52	4.10	未掲載。	一括
8	4C号溝	寛永通寶	銅製		約1/2	(25.56)	(25.51)	(22.23)	(21.86)	1.02～1.41	(1.00)	写真図版84掲載。	一括

第18表 古銭観察表

第3章 自然遺物および自然科学的分析

第1節 山田橋大山台遺跡出土の貝類遺体について

1. 資料と分析の方法

大山台遺跡では、縄文時代中期末葉の3遺構（7号竪穴・8号竪穴・2号土坑）と、弥生時代後期の2遺構（63号竪穴・79号竪穴）の合計5カ所の遺構から貝層が確認された。貝層はブロック状をなして確認されたため、ブロック単位毎に貝層を全量採取した。なお後世の耕作等による攪乱が認められた貝層では、攪乱を免れた部分についてのみ採取を行なった（以下、採取した貝層を「貝層サンプル」と表記する）。

採取した貝層サンプルの選別作業は発掘調査現場において行なった。貝層サンプルは自然乾燥させた後、10ミリ、4ミリ、2ミリ、1ミリの各メッシュ寸法の試験フルイを用いて篩い分けされた。篩い分け作業は、貝層サンプルを直接試験フルイへ投入して行なわれたが、2ミリと1ミリメッシュのフルイを用いた一部の作業では、水洗選別を実施した。選別作業により検出された動物遺存体は貝類のみで、魚類骨や獣骨などの脊椎動物骨は見られなかった。完全な水洗選別処理を実施していないものの、選別に用いたフルイのメッシュ寸法は最小1ミリであり、選別作業の過程で微小な動物遺存体資料が流失する、いわゆる「サンプリングエラー」は生じていないと判断される。

出土貝類種の同定は、市原市文化財センター所蔵の現生貝類標本及び貝塚出土貝類標本との比較により行なった。集計は、腹足類（巻貝）では軸部を完存するもの、二枚貝綱では殻頂部の残存するものを対象とした。二枚貝類は、左右殻の出土数量の多い方をもって出土個体数（最小個体数）とした。また二枚貝類の主体となるハマグリとマガキについては、左右殻の数量の多い方から完形資料を抽出し、殻高の計測を行なった。微小貝類については、フルイ上残留物中から複数の作業員により、拡大鏡を用いた慎重な抽出作業が行なわれた後、生物実体顕微鏡下で種の同定を行なった。微小貝類の集計方法については、上述の大型貝類における集計規準に準じた。（鶴岡英一・加納哲哉）

（腹足綱）

イボキサゴ *Umbonium (Suchium) moniliferum*
スガイ *Lunella coronata coreensis*
カワニナ *Semisulcospira libertina*
ウミニナ *Batillaria multiformis*
ツメタガイ *Glossaulax didyma*
アカニシ *Rapana venosa*
イボニシ *Thais (Reishia) clavigera*
アラムシロガイ *Hinia festiva*

（二枚貝綱）

サルボウガイ *Scapharca subcrenata*
マガキ *Crassostrea gigas*
アサリ *Ruditapes philippinarum*
オキシジミ *Cyclina sinensis*
ハマグリ *Meretrix lusoria*
シオフキガイ *Mactra quadrangularis*
バカガイ *Mactra chinensis*
マテガイ *Solen strictus*

第19表 貝類種名一覧

2. 貝類同定結果

腹足綱（巻貝）8種・二枚貝綱8種の計16種（微小貝類を除く）の貝類が同定された。ほぼ鹹水産の内湾棲息種によって構成されるが、わずかに淡水産のカワニナも検出されている。各遺構ともにイボキサゴが最も多く、東京湾東岸地域の貝塚における貝種組成の一般的傾向に一致する。

一方、市内の弥生時代以降の貝層からは、水田とのかかわりが深いとされるマルタニシが検出されることがあり、周辺の東千草山遺跡（金子1989）や根田祇園原貝塚（忍澤1999）においてもこの種が検出されているが、大山台遺跡の弥生期の貝層からは認められなかった。（鶴岡）

3. 貝類組成と殻高の特徴

7号竪穴 貝層は住居跡中央部の床面上に広く分布するが、後世の耕作による攪乱が激しい。貝層の遺存状況は悪く、貝殻破碎率（同定された貝殻の重量÷貝殻の総重量）は87.0%に達する。貝層の組成ではイボキサゴが81.7%、マガキが8.7%を占める。イボキサゴとこれを採取する際に混獲されたと考えられるアラムシロ・ウミナナ類の3種を除くとマガキの比率は78.1%となる。

マガキの計測資料数は2,156点で、最小個体数4,338点の約50%に相当する。おおむね殻高16mm～50mmの範囲に納まり、平均でも33.66mmと小型の個体を中心に構成されている。一方、ハマグリ of 計測資料数はわずか48点で、最小個体数905点の5.3%に過ぎない。殻高の分布は12～64mmの範囲までばらつきがあるが、25mm前後を中心とした小型の個体がやや多い傾向が認められる。ただし、貝殻破碎率の高さを考慮すると、より小型の個体が破損を免れている可能性もあり、選別作業時の印象でも、計測不能資料の中にも比較的大型のハマグリが含まれていた。

8号竪穴 貝層は住居跡中央付近に小規模なブロック状に分布する。貝層サンプルはブロック毎に6地点で採取されている。貝層の組成ではイボキサゴが91.1%、マガキ3.5%となる。イボキサゴ・アラムシロ・ウミナナ類を除くと、マガキの比率は77.6%となり、これにハマグリ・シオフキ・アサリが少量加わる。7号竪穴貝層の組成と同様の傾向を示すが、貝殻破碎率は30.3%と低く、この点は7号竪穴と異なる。

マガキの計測試料数は1,336点で、最小個体数2,213点の約60%に相当する。7号竪穴に比べ40mm台の個体がやや多く認められるが、おおむね殻高18mm～50mmの範囲に納まり、平均でも35.43mmと小型の個体を中心となる点ではほぼ共通している。ハマグリ of 計測試料数は46点で、最小個体数412点の11.2%に過ぎない。殻高の分布範囲は10～38mmの間で、7号竪穴のように大型のハマグリが混じることは少ない。平均も22.91mmで小型の個体が主体となる。

2号土坑 直径0.8m・深さ0.7mほどを測る土坑の中層に堆積する小規模な貝層である。貝層は上下2つのブロックに分けられ、最低2回の廃棄が行なわれたと推測できる。いずれの貝層ブロックもイボキサゴを主体とし、両貝層ブロック全体では98.9%を占める。イボキサゴ以外では、マガキ・ハマグリ・シオフキの3種が含まれる。

計測を行ったハマグリは貝層ブロック3から出土した1点のみで、殻高30～32mmの範囲であった。

63号竪穴 貝層は住居跡東壁付近に小規模なブロック状に分布する。イボキサゴが81.3%を占め、その他ハマグリ・シオフキ・アサリの3種が含まれる。計測を行ったハマグリは2点のみで、殻高38～46mmの範囲であった。

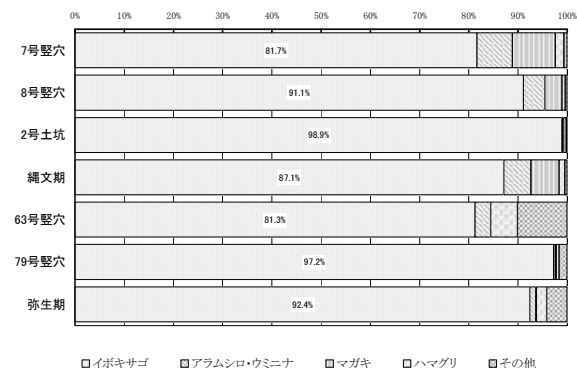
資料No.	遺構No.	地点	層位	フルイ水洗後残留物重量 (g)				集計対象貝 (g)	貝殻破砕率 (%)	フジツバガ類 (g)				磯 (点)				炭化物 (g)				土器片 (点)	(g)	峠石 (点)	フレイクチップ(点)																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
				10mm	4mm	2mm	1mm			10mm	4mm	2mm	1mm	10mm	4mm	2mm	1mm	10mm	4mm	2mm	1mm				10mm	4mm	2mm	1mm	計																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																										
				530.0	112.2		2,700.0	3,342.2	642.2	80.8																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																													

第20表 貝層サンプル内容物一覧

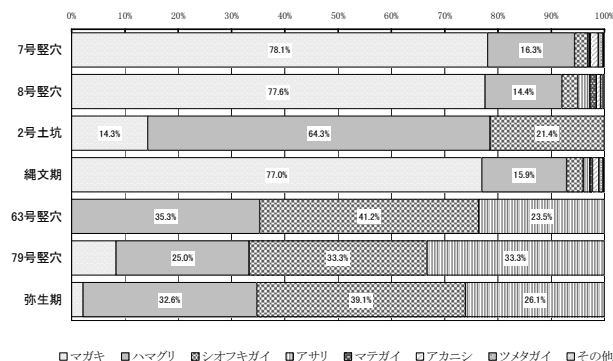
資料No.	遺構No.	地点	層位	腹足綱										二枚貝綱										備考																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
				イ ボ キ サ ゴ	ス ガ イ	カ ワ ニ ナ	ウ ミ ニ ナ 類	ツ メ タ ガ イ	ア カ ニ シ	イ ボ ニ シ	アラ ム シ ロ ガ イ	サ ル ボ ウ		マ ガ キ		ア サ リ		オ キ シ シ ミ		ハ マ グ リ		シ オ フ キ ガ イ			バ カ ガ イ		マ テ カ ガ イ																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
												L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																
1	7号塹穴	炉内	I	40,250	7		2,843	48	81	1	640																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											</

第21表 貝類検出数一覧

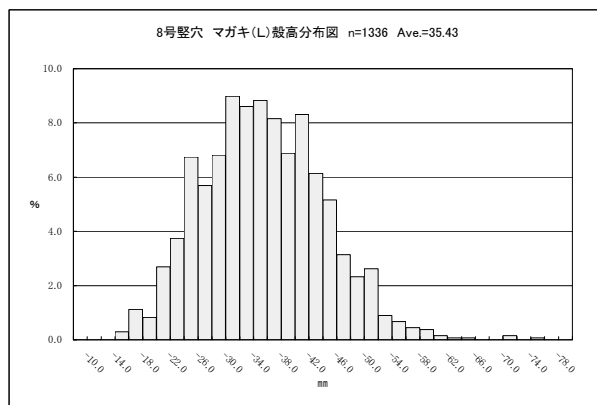
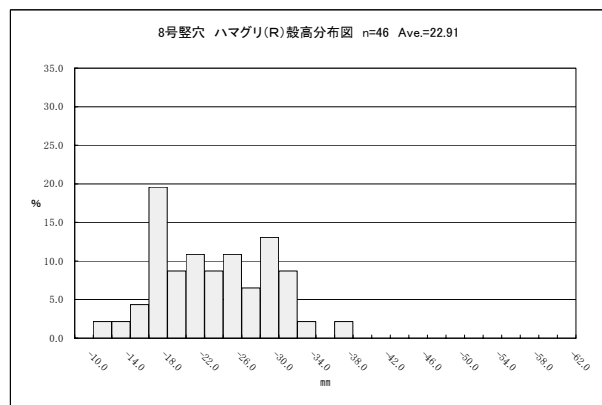
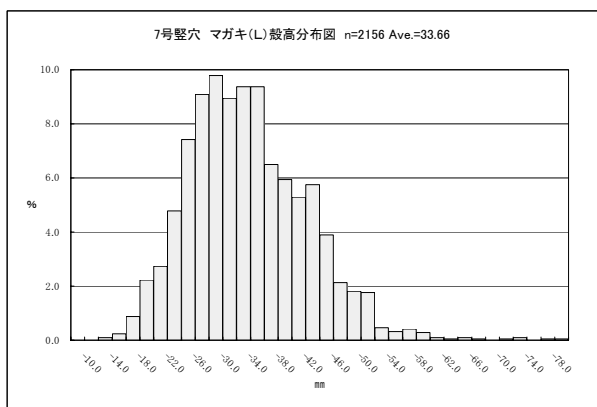
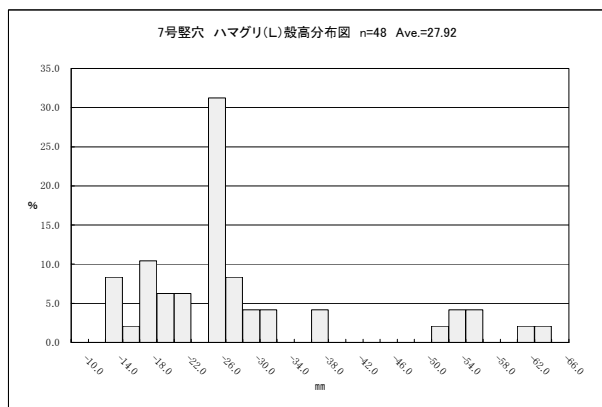
全体の組成



イボキサゴ、アラムシロガイ、ウミミナを除いた組成



第173図 貝種組成



第174図 殻高分布図

79号竪穴 貝層は住居跡の炉跡南寄りに小規模なブロック状に分布するが、覆土は床面付近まで削られている。貝層の遺存状況は極めて悪く、貝殻破砕率は96.3%に達する。イボキサゴが97.2%を占め、その他ハマグリ・シオフキ・アサリと少量のマガキが含まれる。殻高の計測可能なハマグリ、マガキ殻は無かった。(鶴岡)

4. 微小貝類

陸産種9種・非陸産種（主に海産種）3種の計12種の微小貝類が同定された。市原市文化財センターによる貝層サンプルの選別作業では、浮遊選別あるいは水洗選別が行なわれず、乾燥した貝層試料を直接篩がけする方法が採られたが、篩がけには最小1mmメッシュ寸法の試験フルイが用いられ、フルイ上残留試料からの微小遺物の検出も、複数の作業員による慎重な作業が行なわれた。したがって

資料No.	遺構No.	地点	層位	二枚貝類									
				サルボウガイ		マガキ		アサリ		ハマグリ		シオフキガイ	
				L	R	L	R	L	R	L	R	L	R
1	7号堅穴	炉内			1			11	5	452	474	12	12
計					1			11	5	452	474	12	12
5	8号堅穴	ブロック15						3	2	42	27	2	1
6		ブロック16									2	1	
7		ブロック17						5	3	147	127	5	8
8		ブロック18								6	4	1	2
9		ブロック19				1			1			1	1
計						1		8	6	195	160	10	12

第22表 稚貝検出数一覧

資料No.	遺構No.	地点	層位	海産微小貝					陸産微小貝							不明微小貝
				ツボミガイ	クチキレモドキの一種	ムラクモキジビキガイ	ミジンヤマトニシ	キセルガイ科の一種	オカチヨウジガイ	ホソオカチヨウジガイ	ハリマキビ属の一種	キビガイ	ヒメベッコウ属類似種	ヒメコハクの一種		
1	7号堅穴	炉内						1								
3				31	1	1	1	1	27	13	1		34	90	6	
計				31	1	1	1	2	27	13	1		34	90	6	
5	8号堅穴	ブロック15		2								1				
7		ブロック17		2				5					3	1		
計				4				5				1	3	1		
11	2号土坑			3		1										
計						1										

第23表 微小貝検出数一覧

微小貝類に関して、種組成に影響を与えるほどに大きなサンプリングエラーの可能性は低いと判断した。陸産貝類は、7号堅穴貝層では比較的多く検出されたが、逆に他の遺構内貝層では検出量が少ない。おそらく、陸産貝類の検出量が少ない貝層では、投棄直後の貝層表面に遺構周辺の陸産貝類が浸入することは出来ても、投棄後の貝殻が短時間に土砂などで被覆されるなどの理由により、陸産貝類の繁殖を可能にするほどの時間的間隔が与えられなかったと考えられる。一方、陸産貝類の検出量が多い7号堅穴内貝層の場合は、他の貝層と比較して何らかの理由で貝殻が地表面に露出している時間が長かった可能性が考えられる。

非陸産種（主に海産種）の検出量も少ない。比較的小型のイボキサゴが主体をなす貝層では、イボ

(陸産貝類)

- ミジンヤマトニシ *Nakadaella micron* (PILSBRY)
 キセルガイ科の1種 *Clausilidae* spp.
 ホソオカチヨウジ *Allopeas pyrgula* (SCHMACKER & BOETTGER)
 オカチヨウジ *Allopeas clavulinum kyotoense* (PILSBRY & HIRASE)
 ハリマキビ属の1種 *Parakaliella* sp.
 キビガイ *Gastrodontella stenogyra* (A.ADAMS)
 ヒメベッコウ *Discoconulus sinapidium* (REINHARDT)
 ヒメベッコウ属類似種 *Discoconulus* ? sp. ※1
 ヒメコハクの1種 *Hawaiiia* sp. ※2

(海産種)

- ツボミ *Patelloida (Asteracmea) pygmaea lampanicola* (HABE)
 クチキレモドキの1種 *Odo stomia* sp. ※3
 ムラクモキジビキガイ *Japanacteon nipponensis* (YOKOYAMA)

※1：黒住(1994)は、本種がヒメベッコウより螺層が平巻、白色半透明であることから区別している。

※2：従来ヒメコハクと同定されてきた種である。黒住(1994)は、北米からの移入種である同種と、遺跡から出土する日本在来種とは別種になる可能性を指摘している。

※3：螺層はたかく、殻口内の軸唇上端に歯状突起(褶)をもつ。

第24表 微小貝類種名一覧

キサゴ採集の過程で、生息環境を同じくする微小貝類が混獲される可能性が高いとの指摘があるが、イボキサゴが主体をなす千葉県松戸市木戸前Ⅱ遺跡1号土坑内貝層でも海産微小貝類の検出が僅かであり（加納1996）、大山台遺跡でも同様の傾向が確認された。

以上の事実は、特に潮間帯下部から潮下帯（浅瀬）での貝類採集では、微小貝類が混獲される可能性が低かった事を示し、縄文期の貝層からしばしば検出報告のある海草・海藻葉上に着棲する微小貝種が、貝層主体貝種の採集時の混獲ではなく、縄文人による海草・海藻類採集と関連している可能性が強いことの傍証になる。したがって、大山台遺跡の貝層のように、海草・海藻葉上に生息する微小貝類が検出されない場合、海草・海藻類の採集など、貝類採集以外の海浜における生業活動が行なわれていなかったことを示していると考えられる。すなわち小規模な遺構内貝層においても、貝層形成の背後にある海浜での漁撈活動の組み合わせが、遺跡・遺構毎に微妙に異なっていた、と推測する事が可能である。（加納）

5. 考 察 大山台遺跡の漁撈活動を中心として

大山台遺跡から検出された貝類遺体は、縄文・弥生期を通じて、いずれの貝層もイボキサゴが主体となる点で共通しており、特に縄文期の2号土坑内貝層と弥生期の79号竪穴内貝層については、ほぼイボキサゴのみによって構成されるという特徴を持つ。一方、イボキサゴを除いた貝種組成の点からは、大きく2つのタイプに分類することができる。ひとつはマガキを主体として、これにいくつかの貝種が含まれるもので、縄文期の7号・8号竪穴内貝層がこれに該当する。もうひとつはハマグリ・シオフキ・アサリの3種にほぼ限定され、その他の貝種がほとんど含まれないもので、弥生期の63号竪穴内貝層がこれに該当する。

これら2つのタイプでは、サンプル中に含まれる貝類以外の内容物にも違いが認められた。まず、マガキが多く含まれる7号・8号竪穴内貝層からは、貝殻表面等に固着する甲殻類のフジツボ類が多数検出されるという点である。フジツボ類の出土については、マガキの出土量との相関性がすでに指摘されているが（忍澤1999）、今回の分析では、マガキの殻に付着した状態のフジツボ類も多く認められたことから、この関連性が再確認されたと言えよう。また、4ミリ以下のフルイ上に残留する程度の小礫や、ハマグリを主体とする二枚貝の稚貝が大量に検出された。

一方、マガキを多く含む貝層では、ウミナナ類が多数出土しているが、マガキの左殻を観察すると、ウミナナ類が付着しているものや、付着していた痕跡を留めている資料が確認され、カキ同士が付着する例も多く認められた。

これらの点を総合すると、フジツボ類とウミナナ類の出土数は、いずれもマガキ採集活動との強い関連性を指摘することができる。内湾奥の泥質環境下に形成されるカキ礁では、カキ礁及びカキ礁周辺の泥中に二枚貝類が棲息し、カキ礁表面には、同じく潮間帯上部に棲息するウミナナ類や、本来岩礁性である各種貝類やフジツボ等の表生成物が群棲するなど、独特の環境が作り出される（松島1984）とされており、貝層に含まれていたフジツボ類やウミナナ類は、沿岸潮間帯域でのマガキの採集に伴う混獲の可能性が高い。おそらく大山台遺跡縄文人によって、干潟のカキ礁からマガキの大きな塊が採取され、その際に、カキ殻表面に固着していたフジツボ類をはじめ、カキ礁中ないしカキ礁周辺環境下に共生していたウミナナ類や微小なハマグリ稚貝、さらに同様の環境下に堆積していた

砂礫も、カキ殻の間に紛れて混獲され、それらが脱落することなく、そのまま遺跡まで運び込まれたものと考えられる。

以上の推測を裏付けるように、ハマグリ・シオフキ・アサリが多く含まれ、マガキが含まれない2号・63号・79号竪穴内貝層では、フジツボ類や小礫の検出は僅かで、微小な稚貝については全く検出されていない。このような事例は、マガキを多く含む貝層が確認された千葉県松戸市の東平賀貝塚（縄文中期）においても認められており、やはりカキ礁に共生する微小貝類（ウミニナ類の幼貝を含む）の検出頻度が高いという傾向が報告されている（加納1998, 1999）。貝層中に含まれる貝類組成や内容物を細かく検討することによって、採集対象や採集場所の違いを明らかにするばかりでなく、採集方法を想定する上でも有益な情報を提供すると言えるだろう。

一方、大山台遺跡からは土器片錘が出土しており、これを漁網の錘とするならば、縄文期に貝類採集以外の漁撈活動も行なわれていたことを考えなければならないが、上述のように貝層から魚類骨は全く検出されていない。使用されたフルイのメッシュ寸法を考えれば、サンプリングエラーの可能性は低いと考えられることから、大山台遺跡に貝層を残した縄文人の魚類捕獲活動が低調であったことを示しているのかもしれない。あるいは、魚類と貝類ではそれぞれ異なる採集・消費プロセスを経て、別々の廃棄場所に食糧残渣部分が投棄されていた可能性も考慮する必要があるだろう。

大山台遺跡から検出された貝層の分析を通して、漁撈活動について若干の考察を試みた。分析の結果、縄文時代中期末葉の貝層は、イボキサゴを除くとマガキの占める割合が高く、貝層に含まれる内容物の特徴から、これらのマガキがカキ礁からまとめて採集されたことが考えられた。一方、弥生時代後期の貝層は、縄文期同様にイボキサゴを主体とするが、その他の貝種はハマグリ・シオフキ・アサリにほぼ限定され、採集時における種の選択性が伺われた。また、ハマグリ・シオフキ・アサリの比率がほぼ等しい点は、ハマグリが他種に卓越する縄文期とは異なる特徴と言える。今回検出された貝層はいずれも小規模であり、比較的短期間に形成されたものと考えられる。（加納・鶴岡）

文 献

- 忍澤成規 1999「貝層出土の動物遺存体」『根田祇園原貝塚』市原市教育委員会 638～641頁
- 加納哲哉 1996「微小貝類遺存体」『木戸前Ⅱ遺跡』松戸市遺跡調査会 34～48頁
- 加納哲哉 1998「貝塚から出土する微小貝類の基礎的研究 ―縄文時代における海洋植物利用検討のために―」『松戸市立博物館紀要』第5号 松戸市立博物館 49～81頁
- 加納哲哉 1999「縄文時代における海洋植物利用の研究 ―海草アマモの利用を探る―」『松戸市立博物館紀要』第6号 松戸市立博物館 3～45頁
- 金子浩昌 1989「東千草山遺跡の住居内貝層から検出された動物遺体」『千草山遺跡・東千草山遺跡』（財）市原市文化財センター 336～345頁
- 黒住耐二 1994「柱状サンプルから得られた微小貝類遺存体」『上高津貝塚A地点』土浦市教育委員会 294頁
- 肥後俊一・後藤芳央 1993『日本及び周辺地域産軟体動物総目録』エル貝類出版局
- 松島義章 1984「日本列島における後氷期の浅海性貝類群集 ―とくに環境変遷にともなうその時間・空間の変遷―」『神奈川県立博物館研究報告』自然科学15号 神奈川県立博物館 37～109頁

第2節 山田橋大山台遺跡7号土坑出土のウマ (*Equus ferus*)

径約4.7m深さ約2.5mの7号土坑底面より1.2m上方の埋土中に、一個体分のウマの上下顎臼歯が解剖学的な位置を保った状態で検出された(図版41・87)。出土骨の観察所見を第25表に、臼歯の計測値を第26表にそれぞれ示した。埋土中には弥生期から10世紀代の遺物が共伴しており、これらの獣骨の所属時期はおおよそ8世紀中葉とされている。

上下顎臼歯には歯槽部分は残存せず、歯の損傷も激しいため歯冠高と歯根長は測れず、全長及び歯冠長と幅、歯列長を咬合面で計測した。()内の数値は特に損傷が著しい資料のもので、参考までに記載した。上下顎歯ともに咬耗はほとんど進んでいないため、(西中川1991)を参考にするとほぼ5歳馬と考えられる。性別は不明、特に大型のウマとは言えない。

上顎臼歯列は、第二前臼歯が土坑の周縁に第三後臼歯が土坑の中央に、歯根部が下に向いた状態でほぼ東西に並んで検出された。下顎臼歯列も歯列を崩さず出土し、やはり周縁に第三前臼歯が中央に第三後臼歯が並び、歯根部が下を向いた状態で南北方向に沿って出土している。つまり吻部を北東壁に向けて土坑内に収められていたものが、頭蓋が下顎骨から外れ、方向は変わらずに上下逆さまに転がった状態で出土したものと考えられる。この頭蓋の向きからは、土坑内に体部も収められていた可能性を否定できないが、ウマの出土レベルでの土坑の直径は2mに満たないため、体部のスペースを想定し難い。そのため頭部のみが土坑内に収められた可能性が高いと言える。

この7号土坑の底面には炭化材が広がり、その直上には40cmの厚さで硬化面も確認されているため、主に下総に分布する「井戸状遺構」と呼称される土坑の類と考えられている。ただし炭化材面とは直接接していないので資料自体は被熱していない。宮内によれば、「井戸状遺構」とは直径が4m前後、深さが約3mのすり鉢状の形態を保ち、井戸として機能した点については疑問が残るものの、形状としては「井戸状」を呈した土坑を指す。これらの遺構には硬化面が存在する例もあり、一度に埋め立てられた訳ではなく、数度にわたり遺物を投棄した可能性が示されている。また、焼土や炭化物を含む埋土中からは、須恵器や土師器、墨書土器などと共にウシやウマ、イヌ等の獣骨が検出する例が多いことも指摘されている(宮内 1996)。

古墳時代以降、ウシやウマを犠牲獣として何らかの祭祀に利用していたことが知られており、井戸に関わる祭祀にウシが用いられた例も確認されている(松井 1999)。前に挙げた出土状況とも似通うことから、本遺構も同様の「井戸状遺構」と考えられるものの、性格は未だ明らかでなく、今回の事例を直ちに祭祀と結びつけることは控えたい。(上奈穂美)

文 献

宮内勝巳 1996「井戸状遺構について」『史館』28 pp.106-116

西中川駿・松元光春 1991「V. 遺跡出土骨同定のための基礎的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』pp.164-188 平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書

松井章 1999「第10章 家畜その2—ウマ・ウシ」『考古学と自然科学—②考古学と動物学』pp.169-208

No.	遺物番号	点数	重量(g)	部位	左右	歯式 / 萌出・咬耗										備考	
						I1	I2	I3	C	P1	P2	P3	P4	M1	M2		M3
1	8AB	1	14.9	下顎臼歯	左							微	微	微	微	微	損傷が激しい・歯槽残存していない・9ABと同一個体？・8AN-8BS東向きに歯が植立・歯列は解剖学的位置・向きは9ABとほぼ同一方向
2	9AB	1	41.5	上顎臼歯	左							微	微	微	微	微	損傷が激しい・歯槽残存していない・8ABと同一個体？9AE-9BW北向きに歯が植立・歯列は解剖学的位置・向きは8ABとほぼ同一方向
3	9AB	1	46.2	上顎臼歯	右							微	微	微	微	微	損傷が激しい・歯槽残存していない・8ABと同一個体？9AE-9BW北向きに歯が植立・歯列は解剖学的位置・向きは8ABとほぼ同一方向

第25表 出土獣骨一覧

No.	遺物番号	重量(g)	歯種	左右	計測値(mm)					
					全長	歯冠長	歯冠幅	歯列長		
								P2-P4	P3-P4	M1-M3
1	8AB	2.8	P3	左	(53.9)	(21.7)	-		(37.6)	
1	8AB	4.4	P4	左	61.2	(19.1)	-			
1	8AB	2.8	M1	左	(52.9)	(19.6)	-			
1	8AB	2.7	M2	左	(56.8)	(19.4)	-	(94.8)		(65.1)
1	8AB	2.2	M3	左	59.1	-	-			
2	9AB	3.4	P2	左	-	-	-			
2	9AB	11.9	P3	左	60.1	26.9	(23.0)			
2	9AB	12.5	P4	左	64.7	27.6	25.6			
2	9AB	7.1	M1	左	(56.5)	24.6	(20.1)			
2	9AB	4.2	M2	左	(46.4)	(21.4)	(19.5)			(80.1)
2	9AB	2.4	M3	左	-	-	-			
3	9AB	6.1	P2	右	(48.2)	-	-			
3	9AB	9.2	P3	右	(55.1)	26.6	(21.8)	(96.8)		
3	9AB	9.1	P4	右	(60.3)	27.7	(18.8)			
3	9AB	8.4	M1	右	(52.8)	22.8	(23.5)			
3	9AB	8.9	M2	右	60.9	25.5	19.8			
3	9AB	4.5	M3	右	-	-	-			(83.6)

第26表 下顎臼歯計測値

第3節 山田橋大山台遺跡における土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

南関東地方千葉県域の火山灰土中には、富士、箱根、天城、浅間、榛名など関東地方とその周辺に分布する火山のほか、九州地方の始良カルデラや鬼界カルデラなど遠方の火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、起源が不明なテフラ層や形成年代の不明な土層が認められた市原市山田橋大山台遺跡においても、2度にわたって、地質調査、テフラ検出分析、テフラ組成分析、さらに屈折率測定などのテフラ分析を行って、指標テフラの降灰層準を求め、土層の層位や形成年代に関する資料を収集することを試みた。

第1回目の調査分析の対象となった地点は、O10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）、J10区トレンチ（6層）、J10区5号溝（道路）断面の3地点である。さらに市内の新生荻原野遺跡A区I14区トレンチおよび神奈川県伊勢原市北金目において採取された試料についても、比較のために分析を行った。また第2回目は、O7区下層調査地点およびK12区北壁で調査分析が行われた。

2. 第1回テフラ分析

(1) 土層層序

1) O10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）

この地点では、下位より若干色調が暗い褐色土（層厚17cm）、暗褐色土（層厚12cm）、黒色土（層厚32cm）、暗褐色土（層厚6cm）、葉理の発達した黄色細粒火山灰層（層厚8cm）、黄色土（層厚12cm）、暗褐色土（層厚7cm）、暗褐色土（層厚14cm）、黒褐色土（層厚29cm）、暗褐色土（層厚25cm）、色調がとくに暗い暗褐色土（層厚42cm）、暗褐色土（層厚22cm）、色調がとくに暗い暗褐色土（層厚30cm）、細粒の褐色スコリア混じり暗褐色土（層厚21cm、IIb層）が認められた（第175図）。

2) J10区トレンチ（6層）

この地点では、黄白色細粒火山灰層のブロック混じり褐色土（層厚4cm、試料1）が認められた。

3) J10区5号溝（道路）断面

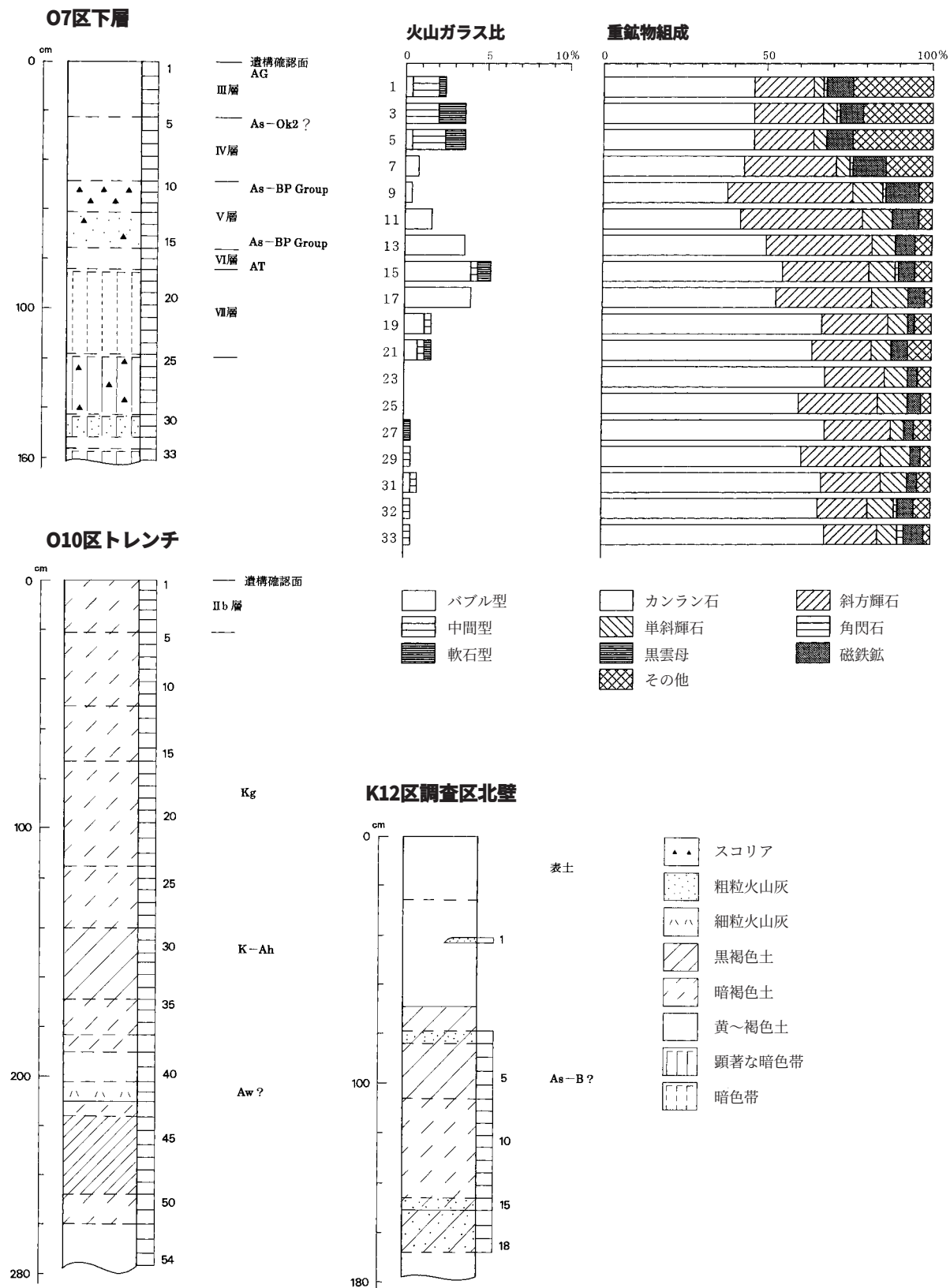
ここでは、道路状遺構を覆う粗粒のスコリア質暗灰色火山灰層（層厚1cm）が認められた。

(2) テフラ検出分析

1) 分析試料と分析方法

O10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）において、基本的に5cmおきに採取された試料28点、J10区トレンチ（6層）およびJ10区5号溝（道路）断面で認められたテフラ2点の合計30点の試料についてテフラ検出分析を行い、肉眼で検出されなかったテフラの層位とその特徴の定性的な把握を試みた。テフラ検出分析の手順は、次の通りである。

- ・ 試料を秤量（5～10g）。



第175図 土層柱状図、07区テフラ組成ダイヤグラム

地点	試料	スコリア・軽石			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
010区	2	++	暗灰>赤褐>灰	1.0	—	—	—
	4	+	暗灰	0.7	+	pm	透明
	6	+	暗灰	0.8	+	pm	透明
	8	—	—	—	+	bw	透明
	10	—	—	—	+	bw	透明
	12	+	暗灰	0.7	++	pm>bw	透明、褐
	14	—	—	—	++	pm>bw	透明、褐
	16	—	—	—	+	pm	透明
	18	—	—	—	+	pm	透明
	20	—	—	—	+	pm	透明
	22	—	—	—	+	pm	透明
	24	—	—	—	+	bw	透明
	26	—	—	—	+	pm	透明
	28	—	—	—	+	pm	透明
	30	—	—	—	+	bw	淡褐
	32	++	白	1.2	++	pm>bw	透明
	34	++	白	1.4	++	pm>bw	透明
	36	++	白	1.3	++	pm	透明
	38	++	白	1.4	+++	pm	透明
	40	+++	白	1.3	++++	pm	透明
	41	++	白	1.6	+++	pm	透明
	42	+	白	1.4	++	pm	透明
	44	+	白	1.4	++	pm	透明
	46	—	—	—	+	pm	透明
	48	—	—	—	+	bw	透明
	50	—	—	—	+	pm	透明
	52	—	—	—	++	pm	透明
J10区	1	—	—	—	+	pm	透明
J10区5号溝	1	++++	黒灰>暗灰>赤褐	1.8	—	—	—
K12区	2	++	暗灰>灰>褐	0.9	—	—	—
	3	+++	灰>暗灰>赤褐	1.2	—	—	—
	5	++	暗灰	1.1	+	淡褐	0.4
	7	++	暗灰>灰	1.2	—	—	—
	9	++	暗灰>灰>褐	1.2	—	—	—
	11	++	暗灰>赤褐>灰	0.9	—	—	—
	13	++	暗灰>灰>褐	1.4	—	—	—
	15	+++	暗灰>灰>赤褐	1.6	—	—	—
	17	++	灰>暗灰>赤褐	1.4	—	—	—

++++:とくに多い、+++ :多い、++ :中程度、+ :少ない、— :認められない。最大径の単位は、mm。パブル型、pm:軽石型。

第27表 テフラ検出分析結果

地点	試料	火山ガラス			重鉱物	屈折率
		量	形態	色調		
O10区	18	+	pm	透明	(opx, ho, cpx, bi)	g1(n):1.495-1.503 opx(γ):1.707-1.709 ho(n2):1.673-1.687
O10区	41	+++	pm	白	(bi, opx, cpx, ho)	g1(n):1.495-1.498
J10区	1	+	pm	透明	(ho, opx, bi)	g1(n):1.497±
萩原野遺跡A区		++	pm	透明	(bi, opx, ho)	g1(n):1.496-1.498
伊勢原市北金目		++	pm	白	(opx, cpx)	g1(n):1.501-1.505

opx:斜方輝石、cpx:単斜輝石、ho:角閃石、bi:黒雲母。重鉱物の()は量の少ないことを示す。

地点	試料	火山ガラス(n)	斜方輝石(γ)	角閃石(n2)
O7区下層	1	1.493-1.497	—	—
	5	—	1.705-1.708	—
	11	—	1.700-1.709	—
	15	1.500±	1.700-1.709	—
	17	1.500±	—	—
K12区北壁	1	—	—	1.674-1.677
	5	—	1.708-1.711	—

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法(新井1972、1993)による。

第28表 屈折率測定結果

火山ガラス比

試料	bw	md	pm	その他	合計
1	1	4	1	244	250
3	0	5	4	241	250
5	1	5	3	241	250
7	2	0	0	248	250
9	1	0	0	249	250
11	4	0	0	246	250
13	9	0	0	241	250
15	10	1	2	237	250
17	10	0	0	240	250
19	3	1	0	246	250
21	2	1	1	246	250
23	0	0	0	250	250
25	0	0	0	250	250
27	0	0	1	249	250
29	0	1	0	249	250
31	1	1	0	248	250
32	0	1	0	249	250
33	0	1	0	249	250

数字は粒子数 bw:パブル型、md:中間型、pm:軽石型

重鉱物組成

試料	o1	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
1	114	45	8	2	0	20	61	250
3	116	52	9	1	0	18	54	250
5	116	46	9	0	0	21	58	250
7	108	70	11	2	0	26	33	250
9	96	95	22	1	0	25	11	250
11	105	92	22	0	0	19	12	250
13	125	79	17	0	0	14	15	250
15	137	66	19	2	0	13	13	250
17	132	71	28	0	0	13	6	250
19	167	50	15	0	0	6	12	250
21	159	45	14	0	0	13	19	250
23	169	45	18	0	0	8	10	250
25	149	59	22	0	0	10	10	250
27	171	50	11	0	0	7	11	250
29	153	59	23	0	0	8	7	250
31	168	46	20	0	0	7	9	250
32	165	37	21	2	0	13	12	250
33	170	40	15	4	0	14	7	250

数字は粒子数

o1:カンラン石、opx:斜方輝石、cpx:単斜輝石、ho:角閃石、bi:黒雲母、mt:磁鉄鉱

第29表 O7区下層調査地点火山ガラス比、重鉱物組成分析結果

- ・超音波洗浄装置により泥分を除去。
- ・80°Cで恒温乾燥。
- ・実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第27表に示す。O10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）において、とくに特徴的なテフラ粒子が認められた層準は、下位より試料40前後、30、18、12～14、2の5層準である。これらのうち、試料40前後には、スポンジ状に発泡した白色の軽石（最大径1.3mm）が多く含まれている。試料30には、淡褐色で平板状のいわゆるバブル型ガラスが少量認められる。試料18には、スポンジ状に発泡した軽石型ガラスのほかに、少量ながら角閃石が認められた。試料12～14には、軽石型ガラスやバブル型ガラスが比較的多く含まれている。ガラスの色調は、無色透明や褐色である。試料2には、スコリア（最大径1.0mm）が比較的多く含まれている。スコリアの色調は、量の多い順に暗灰色、赤褐色、灰色である。

J10区トレンチ（6層）の試料1には、無色透明の軽石型ガラスや分厚い中間型ガラスが少量含まれている。またJ10区5号溝（道路）断面の試料1には、発泡のあまり良くないスコリアがとくに多く含まれている。スコリアの最大径は1.8mmと粗粒で、色調は量が多い順に黒灰色、暗灰色、赤褐色である。

(3) 屈折率測定

1) 測定試料と測定方法

テフラ層が認められたO10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）、J10区トレンチ（6層）、新生荻原野遺跡A区トレンチ、神奈川県伊勢原市北金目の4地点で採取されたテフラ試料5点について、温度一定型屈折率測定法（新井1972、1993）により屈折率測定を行って、指標テフラとの同定精度を向上させることにした。

2) 測定結果

屈折率の測定結果を第28表に示す。O10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）の試料41には、白色の軽石型ガラス（最大径1.5mm）が多く含まれている。火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.495-1.498である。重鉱物としては、黒雲母、斜方輝石、単斜輝石、角閃石がごく少量含まれている。また試料18には、無色透明の軽石型ガラスが少量含まれている。重鉱物としては、量が少ないものの、斜方輝石、角閃石、単斜輝石、黒雲母が認められる。火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.495-1.503である。また斜方輝石（ γ ）と角閃石（ n_2 ）は、各々1.707-1.709と1.673-1.687である。J10区トレンチ（6層）の試料1には、無色透明の軽石型ガラス（最大径0.3mm）が少量含まれている。火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.497±である。重鉱物としては、角閃石、斜方輝石、黒雲母がごく少量含まれている。

新生荻原野遺跡A区トレンチのテフラ試料には、軽石型や塊状の中間型ガラス（最大径0.6mm）が比較的多く含まれている。火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.496-1.498である。重鉱物としては、黒雲母、斜方輝石、角閃石がごく少量含まれている。また神奈川県伊勢原市北金目の試料には、白色の軽石型ガラス（最大径0.6mm）が比較的多く含まれている。その屈折率（ n ）は、1.501-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石がごく少量含まれている。

(4) 考察—指標テフラとの同定

O10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）において、とくに特徴的なテフラ粒子が認められた層準のうち、試料41が採取された火山灰層については、層理が細かく発達していることから、水流などによる二次堆積層の可能性が高いと考えられる。しかしながら、その純度は高いことから、ほぼテフラの降灰層準を示していると思われる。新生荻原野遺跡A区トレンチのテフラ試料に含まれるテフラについても、火山ガラスの特徴に若干の違いは認められるものの、屈折率などはO10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）の試料41のそれと良く似ている。

これらのテフラに含まれる火山ガラスや重鉱物の組合せなどの特徴は、新島や神津島など伊豆諸島の火山から約1.3～1.4万年前^{a1}に噴出したと推定されている安房ガラス（AG、杉原ほか1978）によく似ている。ただ従来記載されているAGに含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は1.490-1.497であるが（町田・新井1992）、今回の測定ではとくに屈折率が低い火山ガラスは検出されなかった。

また、O10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）の試料30に認められた淡褐色のバブル型ガラスは、同定精度は高くはないもののその特徴から約6,300年前^{a1}に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、町田・新井1978）に由来すると考えられる。さらに、試料18に含まれるテフラ粒子の中には、その特徴から約2,800～2,900年前^{a1}に天城火山から噴出した天城カワゴ平火口に噴出した天城カワゴ平テフラ（Kg、町田ほか1984）に由来するものが含まれていると考えられる。

なお北金目の試料については、伊勢原タフ（Is、上杉ほか1998）と呼ばれるテフラに相当するらしい（近藤敏氏談話）。このテフラは、縄文時代中期に相当する約4,000～4,500年前^{a1}に降灰したと推定され、火山ガラスの屈折率（ n ）は1.498-1.504、重鉱物としては斜方輝石、角閃石、黒雲母、磁鉄鉱などが含まれており、斜方輝石（ γ ）と角閃石（ n_2 ）の屈折率は各々1.705-1.707と1.672-1.679のようである（上杉ほか1998）。今回の分析では、火山ガラスの屈折率はほぼ一致しているものの、屈折率がとくに低い火山ガラスや、屈折率測定に十分な重鉱物は検出されず、同定を裏付けることは難しい。しかしながら、仮に同定されるとして、今回の試料18に含まれるテフラ粒子と比較しても、斜方輝石や角閃石の屈折率の点で、Kgの可能性がやはり高いように思われる。

いずれにしてもAGやIsについては、層位、噴出年代、給源火山などまだ不明な点が多い。今後さらに調査分析を行い、資料を蓄積する必要がある。なお、分析方法としては、屈折率測定だけでなく信頼度の高いエレクトロンプローブX線マイクロアナライザー（EPMA）による火山ガラスの主成分化学組成分析などを合わせて行うと良い。

O10区トレンチ（凹部黒ボク土断面）の試料2に含まれるスコリア粒子は、その岩相から富士火山から縄文時代後期に噴出したスコリアに由来すると考えられる。J10区トレンチ（6層）の試料1には、含まれる火山ガラスの特徴や、重鉱物の組み合わせなどから、838（承和5）年に神津島天上山から噴出した神津島天上山テフラ（Iz-kt、町田・新井1992）、あるいは886（仁和2）年に伊豆新島向山から噴出した伊豆新島向山テフラ（Iz-Nm、町田・新井1992）に由来するテフラが含まれていると考えられる。

J10区5号溝（道路）断面で認められたスコリア粒子については、その岩相から864（貞観6）年に噴出した可能性が考えられる高島平第4テフラ（Tk-4、早田ほか1990）あるいは浅間Bテフラ（As-B、1108年、新井1979）の上位で、富士宝永スコリア（F-Ho、1707年、町田1977）の下位にある高島第4

テフラ（Tk-4、早田ほか1990）のいずれかに由来するようになる。両者の特徴はよく似ていることから、識別のためには今後上下の土層の分析が行われると良い。ただし、発掘調査の成果から、道路遺構の構築が8世紀ころと推定されていることを考慮すると前者の可能性がより大きいのかも知れない。

3. 第2回テフラ分析

(1) 土層層序

1) O7区下層調査地点

台地部の標準的な土層断面を観察することができたO7区下層調査地点では、下位より暗灰色土（層厚5cm以上）、褐色土（層厚5cm）、白色粗粒火山灰混じり暗灰褐色土（層厚9cm）、褐色スコリア混じり暗褐色土（層厚24cm、スコリアの最大径4mm、Ⅶ層下部）、若干色調の暗い褐色土（層厚34cm、Ⅶ層上部）、褐色土（層厚9cm、Ⅵ層）、褐色スコリアおよび黄白色粗粒火山灰混じりで若干色調の暗い褐色土（層厚14cm）、褐色スコリアを多く含む若干色調の暗い褐色土（層厚13cm、以上Ⅴ層）、褐色土（層厚26cm、Ⅳ層）、黄褐色土（層厚22cm、Ⅲ層）の連続が認められる（第175図）。

2) K12区調査区北壁

埋没谷部の土層断面を観察することができたK12区調査区北壁では、下位より若干色調が暗い褐色土（層厚10cm以上、Ⅱb層）、褐色粗粒火山灰に富む黒褐色土（層厚17cm）、褐色粗粒火山灰に富む暗灰色土（層厚5cm）、暗褐色土（層厚40cm）、黒褐色土（層厚22cm）、褐色粗粒火山灰混じり黒褐色土（層厚5cm）、黒褐色土（層厚10cm）の連続が認められた（第175図）。さらにその上位に、下位より褐色土（層厚26cm）、黄色細粒火山灰層（層厚2cm）、褐色土（層厚15cm）、褐色作土（層厚26cm）が認められる。発掘調査では、これらの土層のうち、Ⅱb層の直上の黒褐色土より弥生時代の遺物が検出されている。

(2) テフラ組成分析

1) 分析試料と分析方法

O7区下層調査地点の土層断面において、基本的に厚さ5cmごとに設定採取された試料のうち、5cmおきの17点について、指標テフラの層位を定量的に明らかにするために、火山ガラス比分析と重鉍物組成分析を合わせたテフラ組成分析（早田1999）を行った。分析の手順は次の通りである。

- ・ 試料15gを秤量。
- ・ 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- ・ 80°Cで恒温乾燥。
- ・ 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- ・ 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態別比率を求める（火山ガラス比分析）。
- ・ 偏光顕微鏡下で重鉍物250粒子を観察し、重鉍物組成を求める（重鉍物組成分析）。

2) 分析結果

O7区下層調査地点におけるテフラ組成分析の結果を、ダイヤグラムにして第175図に、火山ガラス比と重鉍物組成の内訳を第29表に示す。火山ガラス比分析では、試料17および試料15に無色透明なバブル型ガラスの出現ピークが認められる。両試料におけるバブル型ガラスの比率は、いずれも

4.0%である。また試料15には、ほかに軽石型ガラス（0.8%）や分厚い中間型ガラス（0.4%）も含まれている。試料5から試料1にかけては、中間型ガラスや軽石型ガラスが多く認められる傾向にある。試料5に含まれる中間型ガラスと軽石型ガラスの比率は、各々2.0%と1.2%である。重鉱物組成では、全体としてカンラン石の比率が高い傾向にあるが、試料11や試料9では、斜方輝石や単斜輝石の占める割合が大きい。

以上のことから、試料17付近に無色透明のバブル型ガラス、試料15付近に軽石型ガラスや中間型ガラス、試料11付近に斜方輝石や単斜輝石、試料5付近に中間型ガラスや軽石型ガラスで各々特徴づけられるテフラの降灰層準のある可能性が考えられる。

(3) テフラ検出分析

1) 分析試料と分析方法

K12区調査区北壁の土層断面において、基本的に厚さ5cmごとに設定採取された試料のうち、5cmおきを中心とした9点について、指標テフラの層位を定性的に求めるためにテフラ検出分析を行った。分析の手順は前述の通りである。

2) 分析結果

K12区調査区北壁におけるテフラ検出分析の結果を第27表に示す。分析の対象となった試料の中では、試料17、試料15、試料9、試料5、試料2に比較的特徴のあるテフラ粒子を認めることができた。試料17には、若干円みを帯びたスコリア（最大径1.4mm）が多く含まれている。スコリアの色調は、量が多い順に暗灰色、灰色、赤褐色である。試料15には、とくに多くのスコリア（最大径1.6mm）が含まれている。スコリアの色調は、量が多い順に暗灰色、灰色、赤褐色である。

試料9には、暗灰色、灰色のスコリアのほかに、光沢をおびた褐色のスコリアが比較的多く含まれている。スコリアの最大径は1.2mmである。試料5には、暗灰色のスコリア（最大径1.1mm）のほかに、淡褐色の軽石（最大径0.4mm）が少量含まれている。試料2には、暗灰色、灰色のスコリアのほかに、光沢をおびた褐色のスコリアが比較的多く含まれている。スコリアの最大径は0.9mmである。

(4) 屈折率測定

1) 測定試料と測定方法

土層の観察とテフラ分析により、テフラの降灰層準の可能性が考えられたO7区下層調査地点の試料17、試料15、試料11、試料5、試料1、さらにK12区調査区北壁の試料5および試料1の合計7点について、指標テフラとの同定精度を向上させるために、屈折率の測定を行った。測定は温度一定型屈折率測定法（新井1972、1993）による。

2) 測定結果

屈折率の測定結果を第28表に示す。O7区下層調査地点の試料17に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.500±である。試料15には、試料17にも含まれる火山ガラス（ n :1.500±）のほかに、屈折率（ γ ）が1.700-1.709の斜方輝石が含まれている。また、試料11に含まれる斜方輝石の屈折率（ γ ）も1.700-1.709である。試料5に含まれる斜方輝石の屈折率（ γ ）は、1.705-1.708である。試料1に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.493-1.497である。

K12区調査区北壁の試料5に含まれる火山ガラスの屈折率（ n ）は、1.708-1.711である。また試料1のテフラ層中には角閃石が含まれており、そのほかに斜方輝石がわずかに認められる。角閃石の屈折

率 (n_2) は1.674-1.677である。

(5) 考察—指標テフラとの同定

O7区下層調査地点の試料17に含まれるテフラについては、火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、約2.4～2.5万年前^{*1}に南九州地方の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井1976・1992、松本ほか1987、村山ほか1993、池田ほか1995)に由来すると考えられる。

試料15には、ATのほかに、斜方輝石の屈折率や層位などから、約1.9～2.4万年前^{*1}に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group、新井1962、早田1996、未公表資料)に由来するテフラが混在している可能性が考えられる。また、試料11に含まれる斜方輝石についても、その屈折率から、As-BP Groupに由来すると思われる。試料5に含まれるテフラについては、層位や斜方輝石の屈折率などから、約1.6～1.7万年前^{*1}に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第2軽石(As-Ok2, 中沢ほか1984、町田・新井1992、早田1996)に由来するのかも知れない。さらに、試料1に含まれる火山ガラスについては、層位や形態や屈折率などから、AGに由来すると考えられる。

K12区調査区北壁の試料5に含まれる軽石や火山ガラスについては、軽石の色調や斜方輝石の屈折率などから、1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井1979)に由来する可能性が考えられる。したがって、試料3や試料2付近に含まれるスコリアについては、中世ころに富士火山より噴出したと考えられている高島平第7テフラ(Tk-7, 早田ほか1990)の可能性が考えられよう。さらに、試料1に含まれるテフラについては、As-Bより上位にあるとすれば、現在のところ知られているテフラの中で同定されるものはない。産状を考慮すると、より下位の土層から混入した可能性が考えられるのかも知れない。このテフラについては、今後さらに検討していく必要が残されている。

4. まとめ

山田橋大山台遺跡において、2度にわたってテフラ分析を行った。地質調査、テフラ検出分析さらに屈折率測定を合わせて行った第1回目の分析では、下位より安房ガラス(AG、約1.3～1.4万年前^{*1})、鬼界アカホヤ火山灰(約6,300年前^{*1})、伊豆カワゴ平テフラ(Kg、約2,800～2,900年前^{*1})、富士火山の縄文時代後期のスコリア、神津島天上山テフラ(Iz-kt、838年)あるいは伊豆新島向山テフラ(Iz-Nm、886年)、高島平第7スコリア(Tk-4、古代終末期～中世?)の少なくとも7層の指標テフラに由来する可能性が考えられるテフラ粒子を検出することができた。

地質調査、テフラ組成分析、テフラ検出分析、屈折率測定を行った第2回目の分析では、いわゆるローム層中において、下位より始良Tn火山灰(AT、約2.4～2.5万年前^{*1})、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group、約1.9～2.4万年前^{*1})の2層、浅間大窪沢第2軽石(As-Ok2、約1.6～1.7万年前^{*1})、安房ガラス(AG)などに同定される可能性があるテフラの降灰層準を検出することができた。また完新世に形成された腐植質土壌中に、少なくとも4層のスコリア質テフラと浅間Bテフラ(As-B、1108年)に同定される可能性の大きいテフラの降灰層準を検出することができた。

従来より南関東地方においては、おもに富士火山に由来するスコリア質テフラにとくに注目される場合が多い傾向にある。今回のように、おもに玄武岩質マグマに由来するスコリア質テフラのほかに、とくに岩石記載学的に特徴のある珪長質のテフラの層位把握を合わせて行うことにより、考古学にお

ける詳細な編年学的研究に多大な進展をもたらす可能性が期待できる。

＊1：放射性炭素（ ^{14}C ）年代。

文 献

- 新井房夫 1962「関東盆地北西部地域の第四紀編年」『群馬大学紀要自然科学編』10 p.1-79
- 新井房夫 1972「斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究」『第四紀研究』11 p.254-269
- 新井房夫 1979「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『考古学ジャーナル』No.157 p.41-52
- 新井房夫 1993「温度一定型屈折率測定法」日本第四紀学会編『第四紀試料分析法—研究対象別分析法』p.138-148
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫 1995「南九州」『始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸』
- 町田 洋 1977『火山灰は語る』蒼樹書房 249p.
- 町田 洋・新井房夫 1976「広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義」『科学』46 p.339-347
- 町田 洋・新井房夫 1978「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰」『第四紀研究』17 p.143-163
- 町田 洋・新井房夫 1992『火山灰アトラス』東京大学出版会 276p
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 1984「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ」渡辺直経編『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』p.865-928
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 1987「始良Tn火山灰（AT）の ^{14}C 年代」『第四紀研究』26 p.79-83
- 村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦 1993「四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討—タンデム加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の ^{14}C 年代」『地質雑』99 p.787-798
- 中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 1984「浅間火山 黒班～前掛期のテフラ層序」『日本第四紀学会講演要旨集』No.14 p.69-70
- 早田 勉 1996「関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて—」『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書』VII p.256-267
- 早田 勉 1999「テフロクロロジー—火山灰で過去の時間と空間をさぐる方法」長友恒人編『考古学のための年代測定学入門』古今書院 p.113-132
- 早田 勉・矢作健二・小田静夫 1990「古墳時代以降に江戸に降灰した火山灰—高島平北遺跡のテフラ層序」『日本第四紀学会講演要旨集』No.20 p.162-163
- 杉原重夫・吉村光敏・細野 衛・森脇 広 1978「房総半島南部の後期更新世テフラ層と海岸段丘について」『第四紀研究』16 p.255-262
- 上杉 陽・小沢 清・長瀬和雄・上本進二・山本幸子 1998「神奈川県伊勢原断層トレンチで検出された縄文中期軽石質火山灰」『日本第四紀学会講演要旨集』No.28 p.78-79
- 山崎晴雄 1978「立川断層とその第四紀後期の運動」『第四紀研究』16 p.231-246

第4節 山田橋大山台遺跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山1987）。

2. 試料

分析試料は、O7区下層調査地点、O11区Ⅱ層、O10区トレンチ、K12区調査区北壁の4地点から採取された計24点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）。
- 2) 試料約1gに対して直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加。
（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）。
- 3) 電気炉灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散。
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

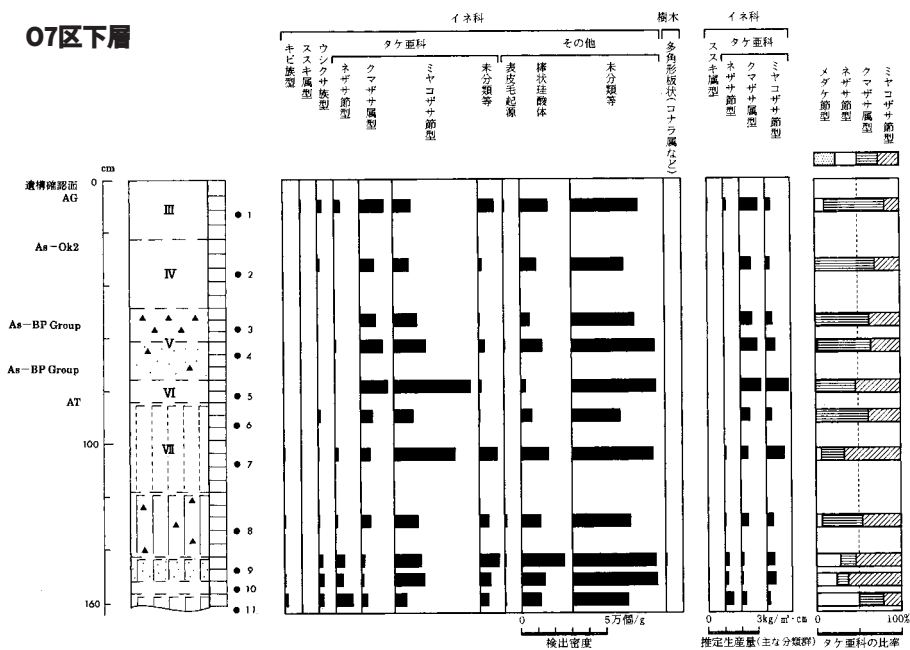
また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： 10^{-5}g ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。ヨシ属（ヨシ）の換算係数は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

4. 分析結果

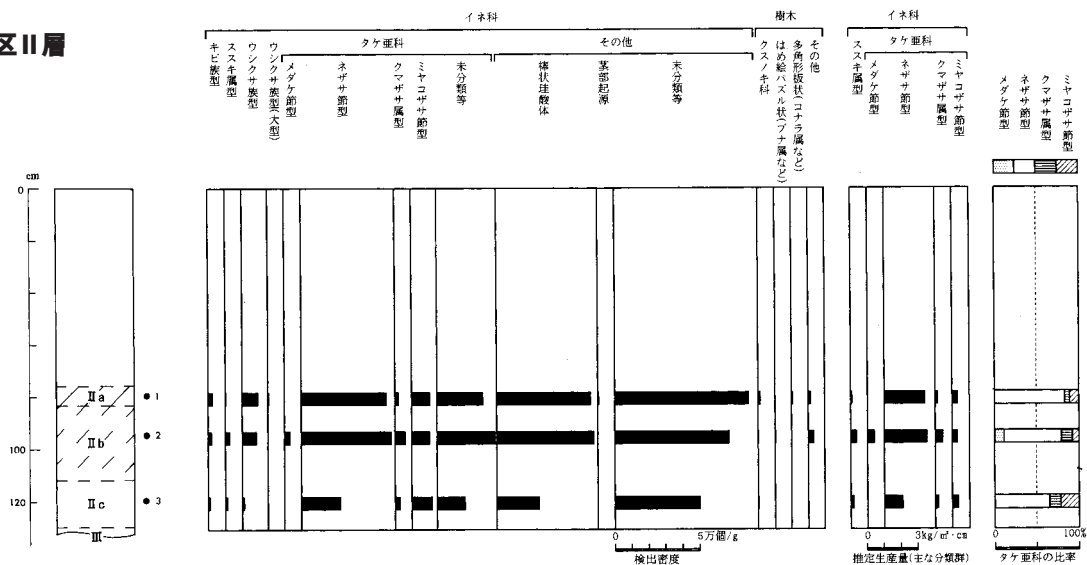
(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量

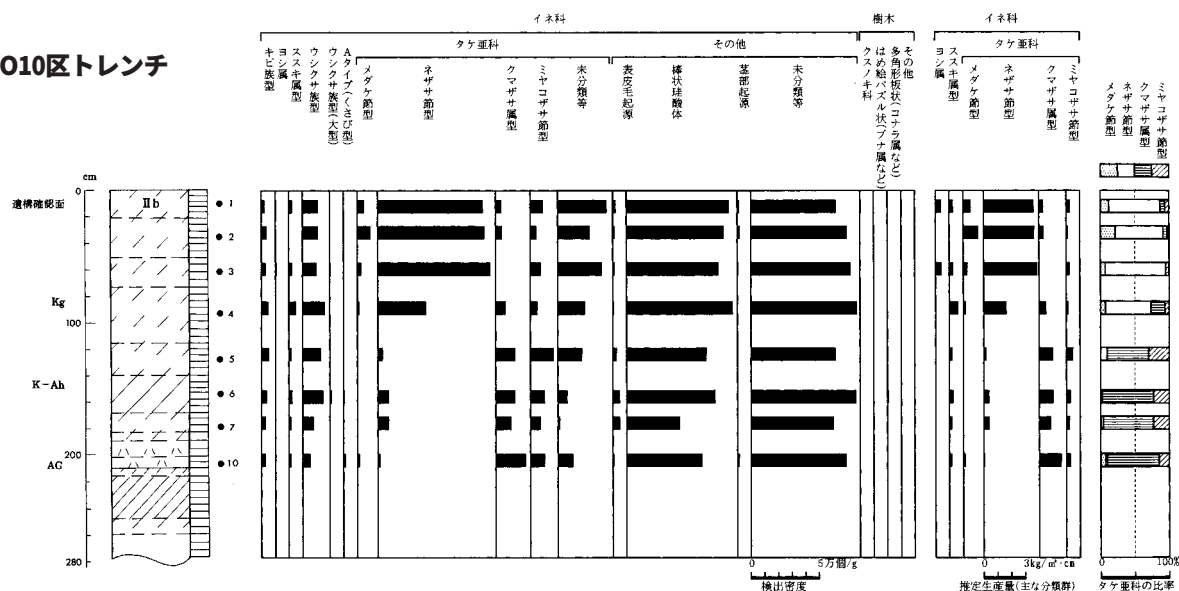
07区下層



011区II層

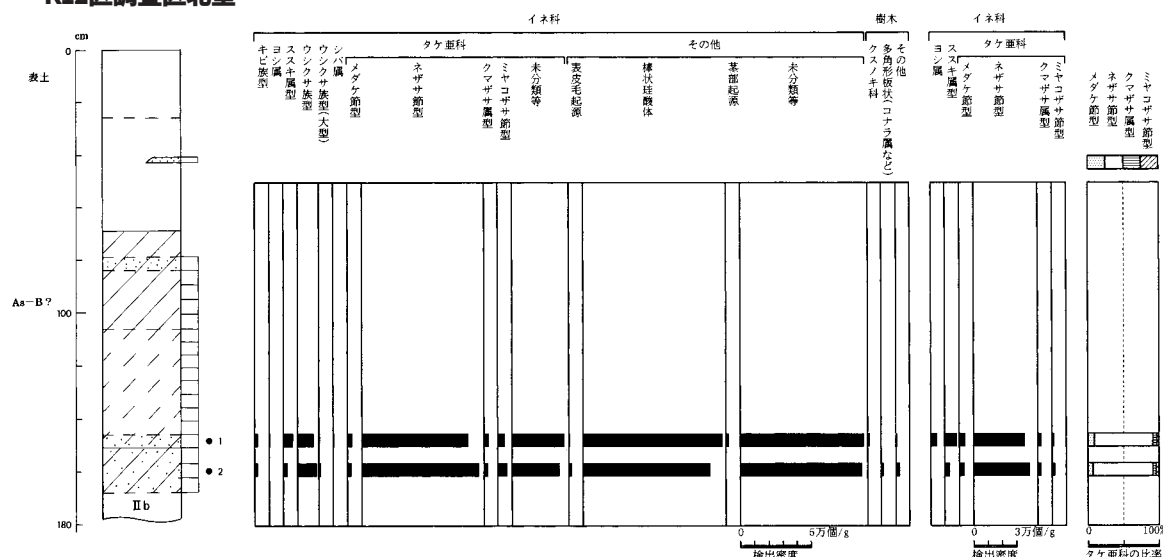


010区トレンチ



第176図 植物珪酸体分析結果 (1)

K12区調査区北壁



第177図 植物珪酸体分析結果 (2)

を行い、その結果を第30表および第176～177図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

キビ族型、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、シバ属、Aタイプ（くさび型）

〔イネ科－タケ亜科〕

メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

クスノキ科、はめ絵パズル状（ブナ科ブナ属など）、多角形板状（ブナ科コナラ属など）、その他

(2) 植物珪酸体の検出状況

1) O7区下層調査地点（第176図）

Ⅲ層（試料1）から暗灰色土（試料11）までの層準について分析を行った。その結果、褐色スコリア混じり暗褐色土（試料8）より下位では、ミヤコザサ節型や棒状珪酸体が比較的多く検出され、キビ族型、ウシクサ族型、ネザサ節型、クマザサ属型なども検出された。Ⅶ層（試料7）からⅥ層（試料5）にかけては、クマザサ属型やミヤコザサ節型が増加しており、ウシクサ族型やネザサ節型はほとんど見られなくなっている。Ⅴ層（試料4）より上位では、ミヤコザサ節型が減少傾向を示し、Ⅲ層（試料1）ではススキ属型が出現している。

おもな分類群の推定生産量によると、全体的にクマザサ属型やミヤコザサ節型が優勢であり、とくにⅣ層より上位ではクマザサ属型の占める割合が増加していることが分かる。また、下位の試料9～11ではネザサ節型の占める割合が高くなっている。

2) O11区Ⅱ層（第176図）

Ⅱa層（試料1）からⅡc層（試料3）までの層準について分析を行った。その結果、ネザサ節型や棒状珪酸体が多量に検出され、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型なども検出された。また、クスノキ科やブナ属などの樹木起源も検出された。樹木は一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にネザサ節型が卓越していることが分かる。

3) O10区トレンチ（第176図）

Ⅱb層（試料1）からAG混層（試料10）までの層準について分析を行った。その結果、AG混層（試料10）からK-Ahの上層（試料5）にかけては、棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族型、クマザサ属型、ミヤコザサ節型も比較的多く検出された。また、キビ族型、ススキ属型、ネザサ節型なども検出された。Kg混層（試料4）より上位ではネザサ節型が大幅に増加しており、Ⅱb層（試料1）ではクスノキ科などの樹木起源も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、試料5より下位ではクマザサ属型が優勢であり、試料4より上位ではネザサ節型が卓越していることが分かる。

4) K12区調査区北壁（第177図）

Ⅱb層の上層（試料1、2）について分析を行った。その結果、ネザサ節型や棒状珪酸体が多量に検出され、キビ族型、ススキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型なども検出された。また、クスノキ科や

検出密度(単位:×100個/g)

坂山密度(単位:×100個/g)	O7区下層調査地点											O11区Ⅱb層			O10区トレンチ										K12区北壁	
分類群/試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	10	1	2		
イネ科																										
キビ族型							7	7		7	21	29	21	14	21	34	27	50	52	34	27	27	20	21		
ヨシ属															7		7						7			
ススキ属型	7											7	28	14	21		20	50	16	21	14	14	66	28		
ウシクサ族型	29	14				15	7	7	22	29	28	95	85	14	112	113	102	163	135	151	82	69	112	135		
ウシクサ族型(大型)												7					7		5	14			7	14		
シバ属																	7									
Aタイプ(くさび型)																				7		14				
タケ亜科																										
メダケ節型													35		49	96	27	14				14	33	28		
ネザサ節型	36			7			21	14	51	43	100	502	529	227	755	765	806	341	31	7	7	14	742	817		
クマザサ属型	146	88	96	136	163	73	57	57	22	14	36	22	64	28	42	45		71	135	137	110	213	33	28		
ミヤコザサ節型	109	95	143	193	453	116	364	143	159	180	71	109	106	121	91	45	75	50	166	103	76	103	46	64		
未分類等	95	20	7	36	14	7	107	57	116	65	50	269	339	163	357	232	321	199	176	69	14	110	368	334		
その他のイネ科																										
表皮毛起源	7			7				14	7		7				21	11	14	7	26	48	48	7	7	21		
棒状珪酸体	167	95	55	129	28	65	164	114	253	137	114	560	579	255	741	703	663	767	575	639	378	543	972	888		
茎部起源												7			14	17	7						14	20		
未分類等	393	306	369	487	496	283	478	342	492	498	327	793	678	504	622	703	731	774	617	770	604	701	873	860		
樹木起源																										
クスノキ科												15	7	7	7									13		
はめ絵バズル状(ブナ属など)													7								7					
多角形板状(コナラ属など)									7			7							5	7				14		
その他												15	35		7								7	28		
植物珪酸体総数	990	618	669	995	1154	558	1206	756	1128	974	754	2436	2513	1347	2866	2765	2808	2484	1938	2007	1366	1842	3328	3284		

おもな分類群の推定生産量(単位:kg/m²・cm)

ヨシ属															0.44		0.43							0.41
ススキ属型	0.09											0.09	0.35	0.18	0.26		0.25	0.62	0.19	0.26	0.17	0.17	0.81	0.35
メダケ節型													0.41		0.57	1.12	0.32	0.16				0.16	0.38	0.33
ネザサ節型	0.17			0.03			0.1	0.07	0.24	0.21	0.48	2.41	2.54	1.09	3.62	3.67	3.87	1.64	0.15	0.03	0.03	0.07	3.56	3.92
クマザサ属型	1.09	0.66	0.72	1.02	1.22	0.54	0.43	0.43	0.16	0.11	0.27	0.16	0.48	0.21	0.31	0.34		0.53	1.01	1.03	0.82	1.6	0.25	0.21
ミヤコザサ節型	0.33	0.29	0.43	0.58	1.36	0.35	1.09	0.43	0.48	0.54	0.21	0.33	0.32	0.36	0.27	0.14	0.23	0.15	0.5	0.31	0.23	0.31	0.14	0.19

タケ亜科の比率(%)

メダケ節型(%)																									
メダケ節型													11		12	21	7	7					7	9	7
ネザサ節型	11			2			6	7	28	24	50	83	68	65	76	70	88	66	9	2	3	3	82	84	
クマザサ属型	68	70	63	62	47	61	26	46	18	13	28	6	13	13	7	6		21	61	75	76	75	6	5	
ミヤコザサ節型	21	30	38	35	53	39	67	46	54	63	22	11	8	22	6	3	5	6	30	23	21	15	3	4	

第30表 山田橋大山台遺跡における植物珪酸体分析結果

コナラ属などの樹木起源も検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ネザサ節型が卓越していることが分かる。

5. 植物珪酸体分析から推定される植生と環境

始良Tn火山灰（AT，約2.4～2.5万年前）の下位層から安房ガラス（AG，約1.3～1.4万年前）混層にかけては、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などのササ類を主体としたイネ科植生が継続されていたと考えられ、とくにAT混のVI層やその下層のVII層ではササ類が多く見られたと推定される。

タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、両者の推定生産量の比率であるネザサ率の変遷は、地球規模の氷期—間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている（杉山・早田1996）。ここでは、クマザサ属が圧倒的に卓越していることから、当時は寒冷な気候条件下で推移したと推定される。

クマザサ属は氷点下5℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻1992）。気候条件の厳しい氷期にクマザサ属などのササ類が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。

なお、AT直下のVII層よりも下位層では、タケ亜科のうちネザサ節の比率がやや高くなっており、その後の時期よりも相対的に温暖な気候であったと推定される。この温暖期は、ATとの層位関係などから、約3万年前頃とされる最終氷期の亜間氷期（酸素同位体ステージ3）に対比されると考えられる。

AGの上層から鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）の上層にかけては、クマザサ属（ミヤコザサ節を含む）などのササ類を主体として、ススキ属やチガヤ属、ネザサ節なども見られるイネ科植生が継続されていたと推定される。クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、ネザサ節やススキ属は日当りの悪い林床では生育が困難である。このことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったと推定される。

伊豆カワゴ平テフラ（Kg，約2,800～2,900年前）混層からIIa層にかけては、ネザサ節を主体として、ススキ属やチガヤ属、メダケ節なども見られる草原的な環境が継続されていたと考えられ、IIb層より上層の時期には遺跡周辺にクスノキ科などの照葉樹林およびコナラ属などの落葉樹林が分布していたと推定される。

文 献

- 杉山真二 1987「遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点」『植生史研究』第2号 p.27—37
杉山真二 1987「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』第31号 p.70—83
杉山真二・早田勉 1996「植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定 —中期更新世以降の氷期—間氷期サイクルの検討—」『日本第四紀学会講演要旨集』26 p.68—69
高槻成紀 1992『北に生きるシカたち —シカ、ササそして雪をめぐる生態学—』どうぶつ社
藤原宏志 1976『プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—』『考古学と自然科学』9 p.15—29

第5節 山田橋大山台遺跡1号木棺土坑墓の赤色顔料X線回折分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 目的と試料

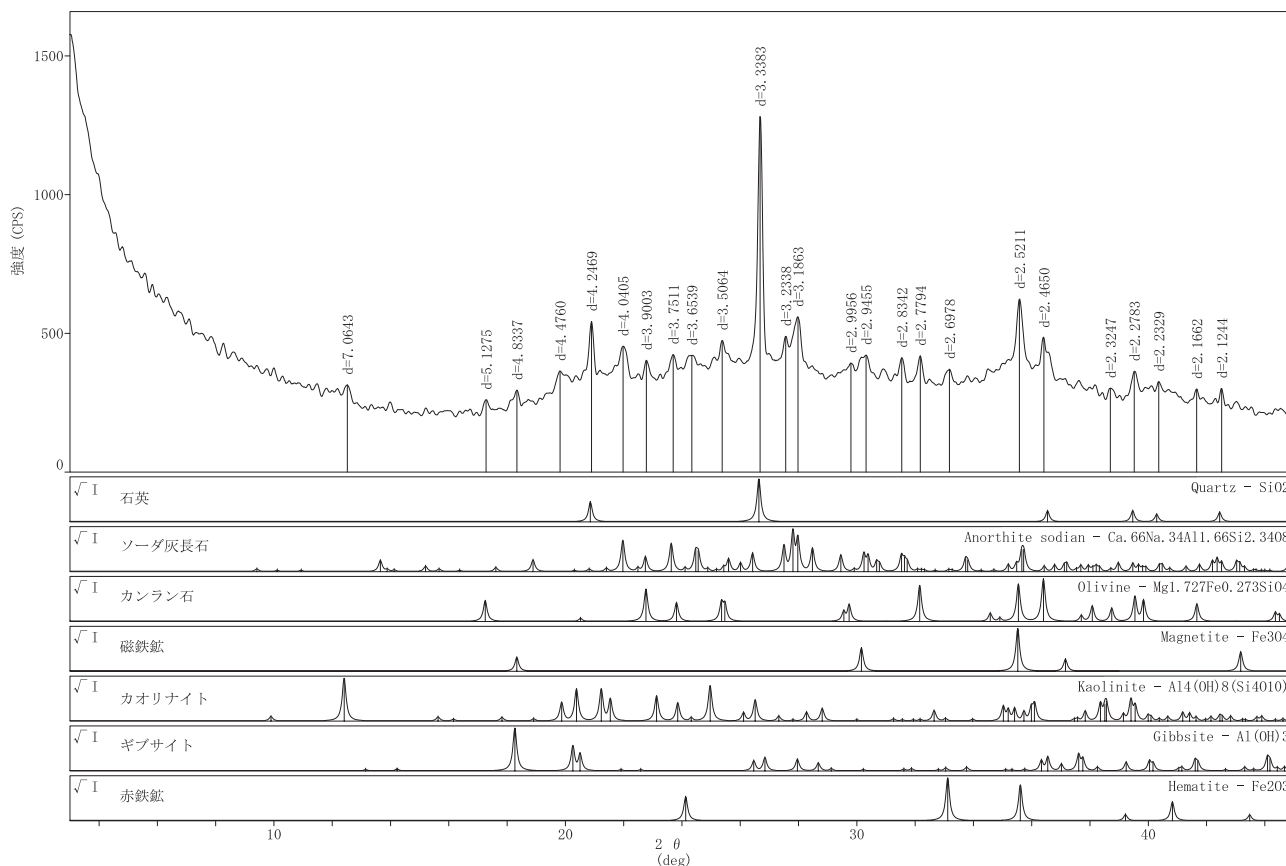
試料は、弥生時代後期の1号木棺土坑墓の頭部位置と推定される棺底に認められた、赤褐色の土塊1点である。その由来などに関する資料を得るため、X線回折を行う。

2. 分析方法

試料は、外観より鉱物質であると考えられることから、X線回折による分析を実施した。処理手順を以下に述べる。

試料を105℃で2時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉碎した。この微粉碎試料はアセトンを用いてスライドガラスに塗布し、X線回折測定試料とした。作成したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施した（足立1980、日本粘土学会1987）。

検出された物質の同定解析は、Materials Data, Inc. のX線回折パターン処理プログラムJ A D E



第178図 1号木棺土坑墓推定頭部位置棺底土壌

を用い、該当する化合物または鉱物を検索した。

装 置：理学電気製MultiFlex	Divergency Slit：1°
Target：Cu（Kα）	Scattering Slit：1°
Monochrometer：Graphite湾曲	Receiving Slit：0.3mm
Voltage：40KV	Scanning Speed：2°/min
Current：40mA	Scanning Mode：連続法
Detector：SC	Sampling Range：0.02°
Calculation Mode：cps	Scanning Range：3～45°

3. 結果

X線回折図を第178図に示した。検出された鉱物は石英（quartz）、ソーダ灰長石（anorthite sodian）、カンラン石（olivine）、磁鉄鉱（magnetite）、カオリナイト（kaolinite）、ギブサイト（gibbsite）、赤鉄鉱（hematite）の7鉱物である。

4. 考察

一般に遺跡などで検出される代表的な赤色顔料には、ベンガラ（赤鉄鉱；hematite [α -Fe₂O₃])のほか、水銀朱（辰砂；cinnabar [HgS])、鉛丹（鉛丹；minium[Pb₃O₄]) などがある。本試料においては赤鉄鉱が検出されていることから、呈色因子として赤鉄鉱が関与していることが指摘される。ただし、本試料中における赤鉄鉱の回折強度は弱く、検出された他の鉱物が本遺跡周辺の台地上に堆積する関東ローム（いわゆる赤土）に一般的に見られる鉱物であることを考えれば、本試料は赤鉄鉱を主成分とする顔料としてのベンガラではなく、周辺の土壌に由来するものである可能性は高い。

文 献

足立吟也 1980「6章 粉末X線回折法」『機器分析のてびき』3 p.64-76 化学同人
日本粘土学会編 1987『粘土ハンドブック 第二版』1289p. 技報堂出版

第6節 山田橋大山台遺跡出土軽石の産地分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 目的と試料

弥生時代後期の竪穴などから出土した軽石の特性を明らかにし、その由来に関する資料を得るため、X線回折を行う。特にこれらの軽石については、本遺跡の立地などからみて明らかに房総半島以外の地域からもたらされたものと考えられることから、その由来を知ることが当時の交易などに関する貴重な材料になり得る可能性がある。

試料は、本遺跡の弥生時代後期とされる36号、49号、71号、75号竪穴から出土した軽石4点と、比較試料として古墳時代前期の下鈴野遺跡08号住居跡から出土した軽石1点と、弥生時代末とされる片又木遺跡の5号住居跡から出土した軽石1点の合計6点である。

6点の軽石は、最小のもので長径5cm程度、最大のもので長径10cmほどあり、どれも円磨・成形されており、発泡は比較的良好である。軽石の表面に斑晶鉱物は、ほとんど認められない。

2. 分析方法

化学組成から軽石の給源となったテフラを推定するなどの場合は、通常は分析精度の高い波長分散型蛍光X線分析装置を用いたガラスビード法によって化学組成を得ることが適切であるが、ここでは試料自体が貴重な遺物であることを考慮して、試料量が微量で測定可能な、標準試料を用いたオーダー分析法により、主成分10元素の相対含有率（wt%）を得ることとした。なお、オーダー分析法による精度向上を図るために、榛名、赤城、浅間起源の軽石についてガラスビード法による化学組成を得た後、化学組成の近い軽石を標準試料として選択し、オーダー分析法におけるライブラリー試料として登録、目的試料の化学組成（相対含有率）の算出に利用した。処理手順を以下に述べる。

a) ガラスビード法

1) 装置

理学電機工業社製RIX1000（F P法のグループ分析プログラム）

2) 試料調製

榛名、赤城、浅間起源の軽石試料を振動ミル（平工製作所製TI100；10ml容タングステンカーバイド容器）で微粉碎した後、以下の条件でガラスビードを作成した。

溶融装置；自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー（3491A1）

溶剤及び希釈率；融剤（ホウ酸リチウム）5.000g:試料0.500g

剥離剤；LiI（溶融中2回投入）

溶融温度；1200℃ 約7分

3) 測定条件

X線管；Cr（50Kv－50mA）

スペクトル；全元素K α

分光結晶；LiF,PET,TAP,Ge

	榛名軽石	赤城軽石	浅間軽石
SiO ₂	58.30	44.47	62.40
TiO ₂	0.54	0.30	0.69
Al ₂ O ₃	16.76	28.51	15.11
Fe ₂ O ₃	7.42	2.49	6.28
MnO	0.16	0.04	0.11
MgO	2.97	0.13	3.45
CaO	7.05	1.51	5.87
Na ₂ O	2.88	1.16	3.13
K ₂ O	0.65	0.58	1.55
P ₂ O ₅	0.10	0.13	0.11
Ig.Loss	3.17	20.68	1.30

第31表 標準試料の軽石の化学組成
(ガラスビードーFP法)

	榛名軽石	赤城軽石	浅間軽石
SiO ₂	60.21	56.06	63.22
TiO ₂	0.56	0.38	0.70
Al ₂ O ₃	17.31	35.94	15.31
Fe ₂ O ₃	7.66	3.14	6.36
MnO	0.17	0.05	0.11
MgO	3.07	0.16	3.50
CaO	7.28	1.90	5.95
Na ₂ O	2.97	1.46	3.17
K ₂ O	0.67	0.73	1.57
P ₂ O ₅	0.10	0.16	0.11
Total	100.00	99.98	100.00

第32表 標準試料の軽石の化学組成
(ガラスビードーFP法、主成分による100%換算)

	大山台 36号堅穴	大山台 49号堅穴	大山台 71号堅穴	大山台 75号堅穴	下鈴野 8号堅穴	片又木 5号堅穴	標準試料		
							榛名軽石	赤城軽石	浅間軽石
SiO ₂	73.30	71.90	72.70	73.30	72.60	73.80	60.30	55.50	63.40
TiO ₂	0.28	0.41	0.33	0.25	0.27	0.25	0.53	0.46	0.70
Al ₂ O ₃	14.30	15.50	15.60	14.60	14.60	14.60	17.00	35.50	15.20
Fe ₂ O ₃	4.07	4.22	3.25	3.84	4.43	3.32	7.21	3.79	6.36
MnO	0.13	0.14	0.08	0.14	0.13	0.13	0.14	0.06	0.10
MgO	0.40	0.71	0.47	0.43	0.52	0.32	3.70	0.42	3.42
CaO	2.07	2.27	1.55	2.20	2.24	2.10	7.20	2.16	5.93
Na ₂ O	4.01	3.45	2.63	3.91	3.86	4.09	3.19	1.29	3.18
K ₂ O	1.32	1.25	3.22	1.29	1.28	1.29	0.64	0.75	1.56
P ₂ O ₅	0.08	0.09	0.07	0.07	0.07	0.05	0.09	0.16	0.10
Total	99.96	99.94	99.90	100.03	100.00	99.95	100.00	100.09	99.95

第33表 軽石試料の化学組成 (オーダー分析法)

検出器；F-PC,SC

計数時間；PeaK40sec,Back20sec

b) オーダー分析法

1) 装置

理学電機工業社製RIX1000 (F P法のオーダー分析プログラム)

2) 試料調製

軽石試料はいずれも貴重な石製品であり、試料採取に伴う変形や破損をできるだけ避けることを優先した。そのため、現状で見られる空隙部や円磨されずに遺存するくぼみ等にドリルで穴を穿ち、試料採取を行った。得られた碎片を105℃で2時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉碎 (200メッシュ以下) した。この微粉碎試料を用いて、ダブルレイヤーペレット法にて以下の条件でプリケット試料を作成した。

加圧装置；電動式試料成型機 (理学電機工業社製9302-D3)

成形リング；塩化ビニル (30mmφ)

バインダー；四ホウ酸リチウム

加圧力；10ton (100kN)

3) 測定条件

X線管；Cr (50Kv—50mA)

分光結晶；LiF,PET,TAP,Ge

検出器；F-PC,SC

Rec No	試料名または産地	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	FeO	MnO	MgO	CaO	Na ₂ O	K ₂ O	P ₂ O ₅	H ₂ O+	H ₂ O-	Ig. loss	Total	備考
1	大山台3 6号堅穴	73.30	0.28	14.30	4.07	0.00	0.13	0.40	2.07	4.01	1.32	0.08				99.96	
2	大山台4 9号堅穴	71.90	0.41	15.50	4.22	0.00	0.14	0.71	2.27	3.45	1.25	0.09				99.94	
3	大山台7 1号堅穴	72.70	0.33	15.60	3.25	0.00	0.08	0.47	1.55	2.63	3.22	0.07				99.90	
4	大山台7 5号堅穴	73.30	0.25	14.60	3.84	0.00	0.14	0.43	2.20	3.91	1.29	0.07				100.03	
5	下鈴野8号堅穴	72.60	0.27	14.60	4.43	0.00	0.13	0.52	2.24	3.86	1.28	0.07				100.00	
6	片又木5号堅穴	73.80	0.25	14.60	3.32	0.00	0.13	0.32	2.10	4.09	1.29	0.05				99.95	
7	榛名軽石	60.30	0.53	17.00	7.21	0.00	0.14	3.70	7.20	3.19	0.64	0.09				100.00	
8	赤城軽石	55.50	0.46	35.50	3.79	0.00	0.06	0.42	2.16	1.29	0.75	0.16				100.09	
9	赤城火山中央火口丘溶岩	70.88	0.03	16.84	0.28	1.69	0.04	0.80	3.71	2.93	2.18	0.13	0.46	0.06		100.03	*1
10	赤城火山中央火口丘溶岩	64.22	0.44	15.95	2.24	3.01	0.10	1.56	5.16	3.72	1.66	0.23	1.12	0.38		99.79	*2
11	浅間軽石	63.40	0.70	15.20	6.36	0.00	0.10	3.42	5.93	3.18	1.56	0.10				99.95	
12	浅間火山黒曜石	72.01	0.41	14.37	0.73	1.81	0.08	0.57	2.56	4.35	2.39	0.07	0.26	0.08		99.69	*3
13	新島本村新島向山	76.05	0.12	12.44	0.84	0.22	0.07	0.17	0.87	4.31	2.88	0.00	1.66	0.11	0.47	100.21	*4
14	新島本村新島	75.90	0.00	15.41	0.36	0.22	0.00	0.21	0.84	4.41	2.88	0.00	0.08	0.00		100.31	*5
15	三宅島神着南方	71.29	0.13	14.38	0.55	1.07	0.03	0.69	1.34	2.70	3.14	0.24	3.36	0.71		99.63	*6
16	神津島天上山頂上	76.60	0.00	13.22	0.27	0.43	0.16	0.19	0.75	4.62	1.61	0.00	1.50	0.11		99.46	*4
17	神津島長浜南部小鼻	75.10	0.00	13.36	0.30	0.74	0.10	0.27	1.43	4.21	1.58	0.00	2.27	0.17		99.53	*4
18	神津島引廻鼻	75.35	0.20	13.49	0.95	0.55	0.08	0.36	1.61	4.28	2.52	0.00	0.61	0.06		100.06	*4
19	神津島北岸カエス	71.64	0.55	14.13	0.34	0.50	0.00	0.08	0.17	0.50	10.77	0.08	0.80	0.23		99.79	*4
20	八丈島大賀郷横間ガ浦	63.51	0.85	14.77	3.37	5.16	0.17	1.62	5.41	3.26	0.47	0.16	0.78	0.39		99.92	*4
21	青ヶ島北海岸	61.73	1.05	14.60	1.75	7.70	0.22	1.82	6.07	3.52	0.47	0.20	0.48	0.22		99.83	*8
22	明神礁	66.58	0.45	14.64	2.38	2.84	0.05	1.08	5.81	4.38	0.98	0.14	1.24	0.11		100.68	*9
23	明神礁	68.84	0.47	14.68	2.16	2.58	0.12	1.29	5.11	3.88	0.63	0.11	0.00	0.00		99.87	*9
24	明神礁	68.23	0.59	14.31	1.75	2.92	0.08	1.51	4.51	3.90	0.75	0.10	0.49	0.18		99.32	*9
25	明神礁	65.39	0.70	14.99	1.98	3.15	0.10	1.47	5.27	3.69	0.63	0.14	0.81	0.67		98.99	*9
26	明神礁	63.57	0.59	15.19	2.40	3.72	0.10	2.62	5.55	3.44	0.77	0.06	0.63	0.37		99.01	*9
27	明神礁	63.30	0.79	16.10	3.13	3.80	0.18	2.77	6.12	2.67	0.51	0.13	0.52	0.00		100.02	*9
28	神津島・恩馳島	75.24	0.31	13.32	0.00	1.88	0.08	0.62	2.31	4.72	1.43	0.09			1.25	101.25	*10
29	神津島・恩馳島	75.84	0.33	13.11	0.00	1.88	0.08	0.49	2.11	4.48	1.60	0.08			0.51	100.51	*10
30	神津島・恩馳島	76.06	0.31	12.89	0.00	1.85	0.08	0.68	2.15	4.38	1.51	0.09			0.54	100.54	*10
31	神津島・恩馳島	75.62	0.32	12.94	0.00	1.85	0.08	0.48	2.14	4.91	1.58	0.08			0.66	100.66	*10
32	神津島・恩馳島	61.59	0.78	17.06	0.00	6.74	0.19	2.40	6.55	3.94	0.57	0.18			0.00	100.00	*10
33	神津島・恩馳島	77.69	0.17	12.21	0.00	1.13	0.07	0.28	1.22	4.52	2.65	0.06			1.74	101.74	*10
34	神津島・恩馳島	77.86	0.10	12.81	0.00	0.80	0.06	0.12	0.84	4.64	2.72	0.05			0.61	100.61	*10
35	神津島・恩馳島	77.29	0.12	12.89	0.00	0.82	0.06	0.15	0.77	4.54	3.31	0.05			0.19	100.19	*10
36	神津島・恩馳島	77.26	0.12	13.04	0.00	0.97	0.07	0.18	1.02	4.56	2.73	0.05			0.51	100.51	*10
37	神津島・恩馳島	77.61	0.11	12.73	0.00	0.93	0.07	0.20	0.97	4.57	2.76	0.05			0.92	100.92	*10
38	神津島・恩馳島	76.05	0.12	12.44	0.84	0.22	0.07	0.17	0.87	4.31	2.88	0.00	1.66	0.11		99.74	*10
39	神津島・恩馳島	77.06	0.12	13.09	0.00	0.89	0.07	0.15	0.91	4.74	2.92	0.05			0.93	100.93	*10
40	神津島・恩馳島	71.64	0.55	14.13	0.34	0.50	0.00	0.08	0.17	0.50	10.77	0.08	0.80	0.23		99.79	*10
41	神津島・恩馳島	75.35	0.20	13.49	0.95	0.55	0.08	0.36	1.61	4.28	2.52	0.00	0.61	0.06		100.06	*10
42	神津島・恩馳島	75.10	0.00	13.36	0.30	0.74	0.10	0.27	1.43	4.21	1.58	0.00	2.27	0.17		99.53	*10
43	神津島・恩馳島	74.93	0.13	13.52	0.76	0.72	0.08	0.32	0.93	4.50	3.39	0.08	0.46	0.33		100.15	*10
44	神津島・恩馳島	76.47	0.06	12.70	0.80	0.29	0.05	0.20	0.79	4.30	3.48	0.02	0.48	0.00		99.64	*10
45	神津島・恩馳島	76.78	0.04	12.61	0.49	0.47	0.07	0.20	0.79	4.25	3.40	0.02	0.60	0.00		99.72	*10
46	神津島・恩馳島	76.74	0.14	13.20	0.18	0.19	0.07	0.14	0.74	4.28	3.62	0.06	0.34	0.00		99.70	*10
47	神津島・恩馳島	76.18	0.18	13.93	0.57	0.57	0.04	0.50	0.40	3.85	3.48	0.05	0.39	0.06		100.20	*10
48	神津島・恩馳島	76.60	0.00	13.22	0.27	0.43	0.16	0.19	0.75	4.62	1.61	0.00	1.50	0.11		99.46	*10
49	神津島・恩馳島	76.80	0.07	12.90	0.02	0.72	0.06	0.33	0.24	4.16	3.18	0.07	0.95	0.00		99.50	*10
50	御蔵島	60.11	0.54	19.11	2.87	2.99	0.17	1.79	7.30	3.52	0.71	0.17	0.33	0.29		99.90	*11
51	御蔵島	62.06	0.62	16.76	3.14	4.19	0.25	1.72	5.63	3.66	0.75	0.14	0.62	0.37		99.91	*11
52	新島	75.24	0.31	13.32	0.00	1.88	0.08	0.62	2.31	4.72	1.43	0.09			1.25	101.25	*12
53	新島	75.84	0.33	13.11	0.00	1.88	0.08	0.49	2.11	4.48	1.60	0.08			0.51	100.51	*12
54	新島	76.06	0.31	12.89	0.00	1.85	0.08	0.68	2.15	4.38	1.51	0.09			0.54	100.54	*12
55	新島	75.62	0.32	12.94	0.00	1.85	0.08	0.48	2.14	4.91	1.58	0.08			0.66	100.66	*12
56	新島	61.59	0.78	17.06	0.00	6.74	0.19	2.40	6.55	3.94	0.57	0.18			0.00	100.00	*12
57	新島	77.69	0.17	12.21	0.00	1.13	0.07	0.28	1.22	4.52	2.65	0.06			1.74	101.74	*12
58	新島	77.86	0.10	12.81	0.00	0.80	0.06	0.12	0.84	4.64	2.72	0.05			0.61	100.61	*12
59	新島	77.29	0.12	12.89	0.00	0.82	0.06	0.15	0.77	4.54	3.31	0.05			0.19	100.19	*12
60	新島	77.26	0.12	13.04	0.00	0.97	0.07	0.18	1.02	4.56	2.73	0.05			0.51	100.51	*12
61	新島	77.61	0.11	12.73	0.00	0.93	0.07	0.20	0.97	4.57	2.76	0.05			0.92	100.92	*12
62	新島	76.05	0.12	12.44	0.84	0.22	0.07	0.17	0.87	4.31	2.88	0.00	1.66	0.11		99.74	*12
63	新島	77.06	0.12	13.09	0.00	0.89	0.07	0.15	0.91	4.74	2.92	0.05			0.93	100.93	*12
64	新島	72.04	0.25	14.87	1.20	1.22	0.09	0.56	2.70	4.78	1.28	0.09	0.19	0.24		99.51	*12
65	新島	76.53	0.26	12.51	1.04	0.83	0.04	0.28	1.68	4.84	1.40	0.07	0.21	0.18		99.87	*12

引用文献

- | | |
|---|---|
| *1 大田良平(1952) 地質調報 151 No.151 p.4 | *8 H.Tsuya(1937) Bull. Earthq. Res. Inst. Vol.15 pt 1 p.286 |
| *2 桂敬(1956) 日化 vol.77 No.8 p.1198 | *9 諏訪彰(1953) 地質雑 vol.1.62 no.689 p.107 |
| *3 H.Tsuya(1933) Bull. Earthq. Res. Inst. Vol.11 pt 3 p.589 | *10 一色直記(1982) 地域地質研究報告「神津島の地質」 地質調査所 |
| *4 H.Tsuya(1929) Bull. Earthq. Res. Inst. Vol.7 pt 2 p.283 | *11 一色直記(1980) 地域地質研究報告「御蔵島・蘭難波島および銭州地域の地質」 地質調査所 |
| *5 可児弘一(1939) 岩鉱 vol.14 No.1 p.22 | *12 一色直記(1987) 地域地質研究報告「新島の地質」 地質調査所 |
| *6 H.Tsuya(1941) Bull. Earthq. Res. Inst. Vol.19 Pt.2 p.268 | |
| *7 桂敬(1956) 日化 vol.77 No.2 p359 | |

第34表 軽石試料および各地の軽石の化学組成（計算値 wt%）

No.	試料名または産地	岩石名	Q	C	kf	ab	an	di wo	di en	di fs	hy en	hy fs	mt	hm	il	tn	ru	ap	ot	Total
1	大山台 3 6 号堅穴	デイサイト	40.12	2.70	7.80	33.93	9.75				1.00			4.07	0.28		0.13	0.19		99.97
2	大山台 4 9 号堅穴	デイサイト	41.38	4.56	7.39	29.19	10.67				1.77			4.22	0.30		0.25	0.21		99.94
3	大山台 7 1 号堅穴	流紋岩	41.25	5.14	19.03	22.25	7.23				1.17			3.25	0.17		0.24	0.16		99.89
4	大山台 7 5 号堅穴	デイサイト	40.46	2.94	7.62	33.09	10.46				1.07			3.84	0.30		0.09	0.16		100.03
5	下鈴野 8 号堅穴	デイサイト	39.87	2.96	7.56	32.66	10.66				1.30			4.43	0.28		0.12	0.16		100.00
6	片又木 5 号堅穴	デイサイト	40.24	2.78	7.62	34.61	10.09				0.80			3.32	0.28		0.10	0.12		99.96
7	榛名軽石	デイサイト	19.68		3.78	26.99	30.18	1.53	1.32		7.90			7.21	0.30	0.91		0.21		100.01
8	赤城軽石	粘土変質物	40.32	29.02	4.43	10.92	9.67				1.05			3.79	0.13		0.39	0.37		100.09
9	赤城火山中央火口丘溶岩	デイサイト	35.40	3.23	12.88	24.79	17.56				1.99	2.90	0.41	0.00	0.06			0.30	0.52	100.04
10	赤城火山中央火口丘溶岩	デイサイト	22.54	0.00	9.81	31.48	21.92	0.91	0.49	0.39	3.40	2.74	3.25	0.00	0.84			0.53	1.50	99.80
11	浅間軽石	デイサイト	22.74	0.00	9.22	26.91	22.59	1.72	1.49		7.03	0.00		6.36	0.21	1.44		0.23		99.94
12	浅間火山黒曜石	デイサイト	30.42	0.14	14.12	36.81	12.24				1.42	2.19	1.06	0.00	0.78	0.00		0.16	0.34	99.68
13	新島本村新島向山	デイサイト	37.84	0.65	17.02	36.47	4.32				0.42		0.59	0.43	0.23				2.24	100.21
14	新島本村新島	デイサイト	37.07	3.51	17.02	37.32	4.17				0.52	0.11	0.52						0.08	100.32
15	三宅島神着南方	流紋岩	39.73	4.68	18.56	22.85	5.08				1.72	1.35	0.80		0.25			0.56	4.07	99.65
16	神津島天上山頂上	デイサイト	41.28	2.51	9.51	39.09	3.72				0.47	0.86	0.39						1.61	99.44
17	神津島長浜南部小鼻	デイサイト	40.51	2.12	9.34	35.62	7.09				0.67	1.30	0.43						2.44	99.52
18	神津島引廻鼻	デイサイト	36.80	0.79	14.89	36.22	7.99				0.90	0.04	1.38		0.38				0.67	100.06
19	神津島北岸カエス	アルカリ長石流紋岩	27.26	1.53	63.65	4.23	0.32				0.20		0.02	0.33	1.04			0.19	1.03	99.80
20	八丈島大賀郷横間ガ浦	デイサイト	26.97		2.78	27.58	24.28	0.63	0.27	0.37	3.77	5.23	4.89		1.61			0.37	1.17	99.92
21	青ヶ島北海岸	デイサイト	20.45		2.78	29.78	22.65	2.57	0.76	1.92	3.77	9.45	2.54		1.99			0.46	0.70	99.82
22	明神礁	デイサイト	24.78		5.79	37.06	17.39	4.39	2.19	2.11	0.50	0.49	3.45		0.85			0.32	1.35	100.67
23	明神礁	デイサイト	31.04		3.72	32.83	20.78	1.61	0.89	0.66	2.33	1.74	3.13		0.89			0.25		99.87
24	明神礁	デイサイト	30.15		4.43	33.00	19.32	1.00	0.53	0.44	3.23	2.65	2.54		1.12			0.23	0.67	99.31
25	明神礁	デイサイト	27.57		3.72	31.22	22.48	1.15	0.60	0.52	3.06	2.66	2.87		1.33			0.32	1.48	98.98
26	明神礁	デイサイト	23.87		4.55	29.11	23.73	1.42	0.84	0.52	5.69	3.54	3.48		1.12			0.14	1.00	99.01
27	明神礁	デイサイト	27.38	0.34	3.01	22.59	29.51				6.90	3.42	4.54		1.50			0.30	0.52	100.01
28	神津島・恩馳島	デイサイト	35.29	0.02	8.45	39.94	10.87				1.54	3.09			0.59			0.21	1.25	101.25
29	神津島・恩馳島	デイサイト	37.24	0.36	9.46	37.91	9.95				1.22	3.06			0.63			0.19	0.51	100.53
30	神津島・恩馳島	デイサイト	38.06	0.36	8.92	37.06	10.08				1.69	3.03			0.59			0.21	0.54	100.54
31	神津島・恩馳島	デイサイト	34.89		9.34	41.55	8.60	0.62	0.18	0.47	1.01	2.55			0.61			0.19	0.66	100.67
32	神津島・恩馳島	安山岩	15.07		3.37	33.34	27.18	1.73	0.61	1.16	5.37	10.28			1.48			0.42		100.01
33	神津島・恩馳島	デイサイト	37.62		15.66	38.25	5.20	0.19	0.05	0.15	0.64	1.78			0.32			0.14	1.74	101.74
34	神津島・恩馳島	デイサイト	37.98	0.83	16.07	39.26	3.84				0.30	1.41			0.19			0.12	0.61	100.61
35	神津島・恩馳島	デイサイト	35.84	0.56	19.56	38.42	3.49				0.37	1.42			0.23			0.12	0.19	100.20
36	神津島・恩馳島	デイサイト	37.20	0.85	16.13	38.59	4.73				0.45	1.71			0.23			0.12	0.51	100.52
37	神津島・恩馳島	デイサイト	37.48	0.58	16.31	38.67	4.49				0.50	1.66			0.21			0.12	0.92	100.94
38	神津島・恩馳島	デイサイト	37.84	0.65	17.02	36.47	4.32				0.42		0.59	0.43	0.23				1.77	99.74
39	神津島・恩馳島	デイサイト	35.57	0.60	17.26	40.11	4.19				0.37	1.57			0.23			0.12	0.93	100.95
40	神津島・恩馳島	アルカリ長石流紋岩	27.26	1.53	63.65	4.23	0.32				0.20		0.02	0.33	1.04			0.19	1.03	99.80
41	神津島・恩馳島	デイサイト	36.80	0.79	14.89	36.22	7.99				0.90	0.04	1.38		0.38				0.67	100.06
42	神津島・恩馳島	デイサイト	40.51	2.12	9.34	35.62	7.09				0.67	1.30	0.43						2.44	99.52
43	神津島・恩馳島	デイサイト	33.25	0.95	20.03	38.08	4.09				0.80	0.63	1.10		0.25			0.19	0.79	100.16
44	神津島・恩馳島	デイサイト	36.21	0.47	20.57	36.39	3.79				0.50		0.92	0.16	0.11			0.05	0.48	99.65
45	神津島・恩馳島	デイサイト	36.87	0.55	20.09	35.96	3.79				0.50	0.52	0.71		0.08			0.05	0.60	99.72
46	神津島・恩馳島	流紋岩	36.32	1.04	21.39	36.22	3.28				0.35	0.10	0.26		0.27			0.14	0.34	99.71
47	神津島・恩馳島	流紋岩	38.85	3.22	20.57	32.58	1.66				1.25	0.35	0.83		0.34			0.12	0.45	100.22
48	神津島・恩馳島	デイサイト	41.28	2.51	9.51	39.09	3.72				0.47	0.86	0.39						1.61	99.44
49	神津島・恩馳島	アルカリ長石流紋岩	39.03	2.35	18.79	35.20	0.73				0.82	1.30	0.03		0.13			0.16	0.95	99.49
50	御蔵島	デイサイト	18.11		4.20	29.78	34.25	0.36	0.22	0.12	4.24	2.42	4.16		1.03			0.39	0.62	99.90
51	御蔵島	デイサイト	21.60	0.03	4.43	30.97	27.02				4.28	4.54	4.55		1.18			0.32	0.99	99.91
52	新島	デイサイト	35.29	0.02	8.45	39.94	10.87				1.54	3.09			0.59			0.21	1.25	101.25
53	新島	デイサイト	37.24	0.36	9.46	37.91	9.95				1.22	3.06			0.63			0.19	0.51	100.53
54	新島	デイサイト	38.06	0.36	8.92	37.06	10.08				1.69	3.03			0.59			0.21	0.54	100.54
55	新島	デイサイト	34.89		9.34	41.55	8.60	0.62	0.18	0.47	1.01	2.55			0.61			0.19	0.66	100.67
56	新島	安山岩	15.07		3.37	33.34	27.18	1.73	0.61	1.16	5.37	10.28			1.48			0.42		100.01
57	新島	デイサイト	37.62		15.66	38.25	5.20	0.19	0.05	0.15	0.64	1.78			0.32			0.14	1.74	101.74
58	新島	デイサイト	37.98	0.83	16.07	39.26	3.84				0.30	1.41			0.19			0.12	0.61	100.61
59	新島	デイサイト	35.84	0.56	19.56	38.42	3.49				0.37	1.42			0.23			0.12	0.19	100.20
60	新島	デイサイト	37.20	0.85	16.13	38.59	4.73				0.45	1.71			0.23			0.12	0.51	100.52
61	新島	デイサイト	37.48	0.58	16.31	38.67	4.49				0.50	1.66			0.21			0.12	0.92	100.94
62	新島	デイサイト	37.84	0.65	17.02	36.47	4.32				0.42		0.59	0.43	0.23				1.77	99.74
63	新島	デイサイト	35.57	0.60	17.26	40.11	4.19				0.37	1.57			0.23			0.12	0.93	100.95
64	新島	デイサイト	32.51	0.93	7.56	40.45	12.81				1.39	1.00	1.74		0.47			0.21	0.43	99.50
65	新島	デイサイト	39.06	0.15	8.27	40.95	7.88				0.70	0.31	1.51		0.49			0.16	0.39	99.87

ノルム鉱物略号

Q : 石英 C : コランダム kf : カリ長石 ab : 曹長石 an : 灰長石 di_wo : 透輝石中の珪灰石 di_en : 透輝石中のエンスタタイト di_fs : 透輝石中のフェロシライト hy_en : ハイパーシンのエンスタタイト
hy_fs : ハイパーシンのフェロシライト mt : 磁鉄鉱 hm : 赤鉄鉱 il : イルメナイト tn : チタナイト ru : ルチル ap : 燐灰石 ot : その他

第35表 軽石試料および各地の軽石の鉱物組成（計算値 wt%）

3. 結果

榛名、赤城、浅間起源の軽石試料におけるガラスビード法による化学組成を第31表に、また参考までにこれらの結果を100%に換算した結果を第32表に掲げた。

一方、遺跡出土の軽石6試料および榛名、赤城、浅間起源の軽石3試料におけるオーダー分析法による化学組成（相対含有率）を第33表に掲げた。なお、本結果における化学組成の算出に当たっては、浅間軽石をライブラリー試料として登録、目的試料の化学組成（相対含有率）の算出に利用した。

4. 考察

軽石は、酸性火山岩（流紋岩・デイサイト）のマグマが固結した多孔質のガラス質抛出物である。ガラス質火山岩はガラスが大部分で、深成岩のように顕微鏡下で造岩鉱物の溶量比を測定するには適さない岩石である。このため、岩石学的な検討を行うには化学分析し、標準鉱物（CIPWノルム鉱物）を計算しなければならない。

関東地方の軽石は、北関東の榛名・赤城・浅間の3火山と伊豆諸島が主な産地となっている。榛名・赤城・浅間火山産の軽石の化学組成についての情報は極めて少ないため、当社保有試料の榛名軽石、赤城軽石および浅間軽石を新たに分析した。しかし、赤城軽石については粘土化し、 Al_2O_3 の富化が著しいために検討対象から除外し、赤城軽石と同質と考えられている赤城中央火口丘溶岩および浅間火山産黒曜岩の化学組成を参考データとした（第34表）。

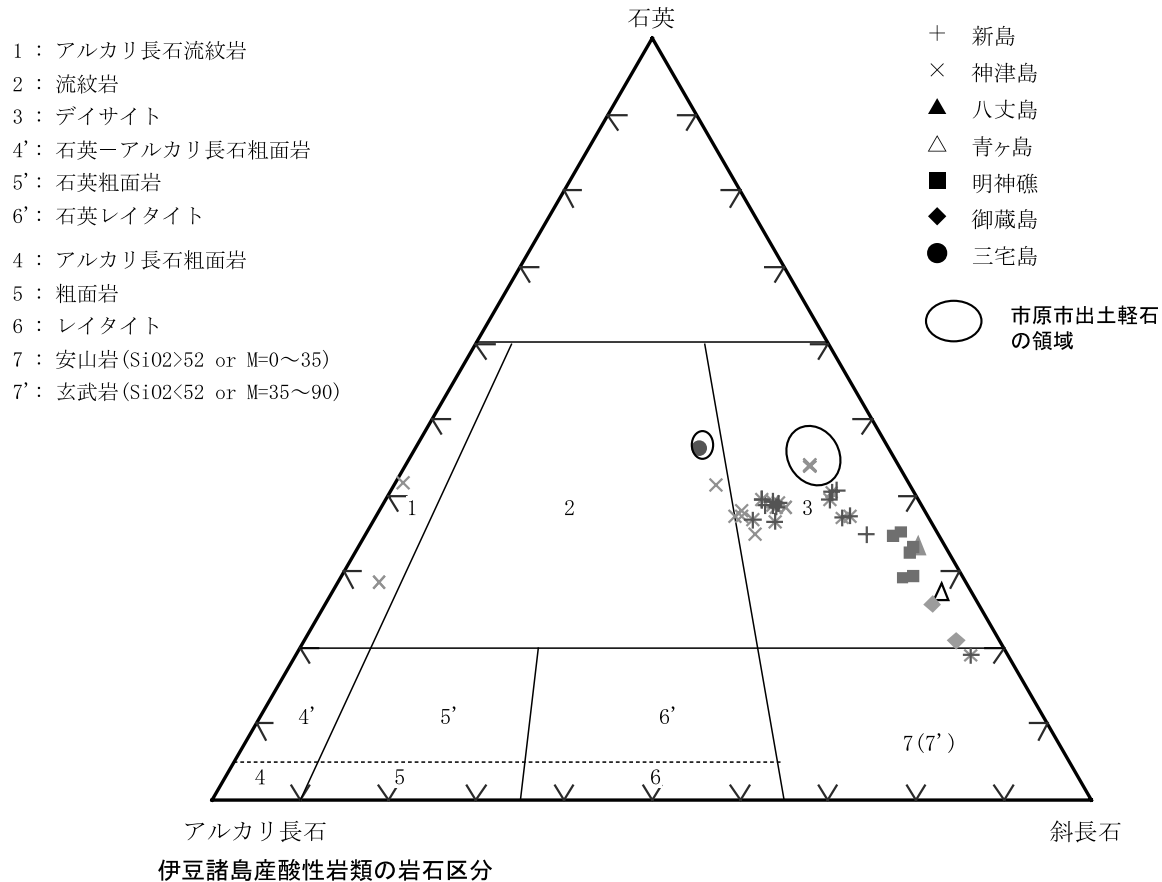
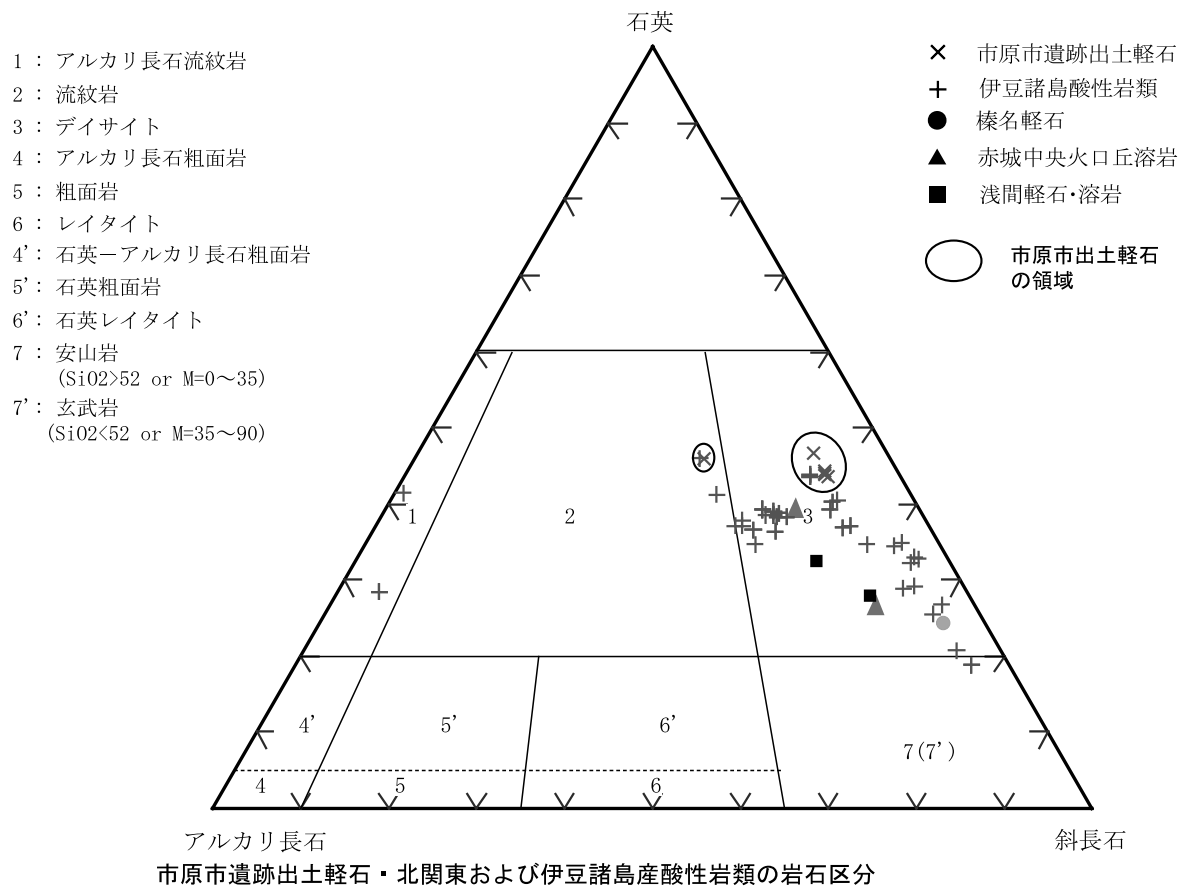
伊豆諸島は大島を北端として八丈島まで南南東に配列し、主に玄武岩・安山岩が活動する火山前線が形成されている。この前線の西側には流紋岩単成火山群があり、新島、式根島、神津島などが形成され、軽石を多量に抛出している。ここでは SiO_2 60%以上の含有量が報告されている、火山岩53個の化学組成を参考データとして用いた（第34表）。

第34表および第35表にそれぞれ各試料の化学組成と分析値から計算されるCIPWノルム鉱物組成を掲げ、IUGS（国際地質連合）による火山岩の分類区分図にプロットして得られる岩石名を付した（第179図）。

第179図では、遺跡出土軽石は、山田橋大山台遺跡71号竪穴出土試料を除く5試料がデイサイトの比較的狭い領域にプロットされ、この5試料は同一火山体からもたらされたことを示唆している。山田橋大山台遺跡71号竪穴出土試料は、流紋岩の領域にプロットされた。

榛名軽石、浅間軽石・溶岩、および赤城火山中央火口丘溶岩はいずれもデイサイトの領域にプロットされるが、各遺跡出土軽石と比較するとノルム石英の含有量が少ない。

これに対し、伊豆諸島の酸性火山岩のノルム鉱物組成は多様性に富んでいる。第179図は島別にノルム鉱物組成を示したものである。御蔵島・青ヶ島・八丈島など玄武岩―安山岩を主体とする火山活動がみられる地域の酸性火山岩は斜長石に富むデイサイトであるのに対し、新島と神津島の酸性火山岩はデイサイト・流紋岩・アルカリ長石流紋岩と幅の広い岩質を有している。ここで三宅島の軽石としている試料は三宅島神着南方に漂着した流紋岩質軽石で、原著者（Tsuya, 1941）は神津島火山または新島火山噴出（?）としている。第179図で明らかなように、この三宅島軽石と山田橋大山台遺跡71号竪穴出土試料はほぼ同一のノルム鉱物組成を有し、同一火山体から抛出されたことは確実と見られる。



第179図 軽石試料および各地酸性岩類の岩石区分

他のデイサイト質の遺跡出土軽石5試料についても、既存データと比較すると新島―神津島系の酸性火山岩系列に属すると判断される。以上のことから、今回分析を行った山田橋大山台遺跡出土の4点の軽石および下鈴野遺跡、片又木遺跡の各遺跡出土軽石2点は、全て伊豆七島に起源し、新島―神津島系の軽石と結論付けられる。

新島あるいは神津島の軽石が、弥生時代後期の市原市域に渡った経緯については、海流などによって東京湾内に漂着したものを拾ったか、新島―神津島から人が持ち込んだかのいずれかになる。前者については、例えば弥生時代後期に新島あるいは神津島で噴火があれば、その可能性は高いといえるが、一色（1982、1987）ではこの時期に両島のいずれかで噴火があったという記載は認められない。ただし、噴火がなくても、海岸に堆積している軽石層が海中に崩落して漂流するということも考えられる。一方、神津島は、黒曜石の主要産地として知られており、縄文時代から南関東各地で神津島産の黒曜石が確認されていることは既知の事実である。したがって、弥生時代後期においても市原市域から神津島へ人が渡るあるいは神津島から市原へ人が渡ることは、想像に難くない。いずれにしても、今後類例の分析例を蓄積するとともに、他の遺物の由来なども検討することで、その由来と歴史的意義を明らかにできるものと期待される。

文 献

- 一色直記 1982「神津島地域の地質」『地域地質研究報告（5万分の1図幅）』75p. 地質調査所
- 一色直記 1987「新島地域の地質」『地域地質研究報告（5万分の1図幅）』5p. 地質調査所
- Tsuya,H. 1941『Bull. Earthq. Res. Inst.』Vol.19 Pt.2 268p.

第7節 山田橋大山台遺跡出土の種実遺体同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. 目的と試料

弥生時代後期の竪穴などから出土した種実の種類を明らかにし、当時の古植生や植物質食料の利用状況に関する資料を得る。

試料は、縄文時代中期とされる8号竪穴、弥生時代後期とされる63号竪穴、79号竪穴、94号竪穴より出土した種実遺体4点7試料である（図版87）。各試料の詳細は、結果とともに第36表に示す。

2. 方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか2000）等との比較から、種類の同定・計数をおこなう。なお、細片を含むため個数推定が困難である種類は、表中に「+」と、数字以上の個数が推定される種類は、「数字+」と表示する。同定後の種実遺体等は種類毎にビンに詰め、乾燥剤を入れ保存する。

3. 結果

結果を第36表に示す。木本1種類、草本3種類の種実遺体が全て炭化した状態で検出される。炭化材は10mm以下の細片を中心に検出される。不明炭化物は、木材組織が認められない、部位・種類不明の炭化物を示す。その他に、土の塊が確認される。以下に、同定された種実遺体の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。

＜木本＞

・オニグルミ

（*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *Sieboldiana* (Maxim.) Kitamura）クルミ科クルミ属
炭化した核の破片が検出された。黒色、完形ならば広卵形で先端部分がやや尖る。径20-30mm程度か。1本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って2つに割れている個体がみられる。核皮は硬く、表面は縦方向に溝状の浅い彫紋が走りごつごつしている。試料は、内部に子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁が残る点を同定根拠とした。

						種類名	オニグルミ	イネ	コムギ	ムギ類	炭化材	不明炭化物	土の塊
						部位	核	胚乳	胚乳	胚乳	炭化	炭化	炭化
試料名						状態	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	炭化	
8号竪穴	縄文加曾利E	貝層サンプル	セ182			種子?	-	-	-	1	-	1	-
63号竪穴	弥生後期	貝ブロック及び火災による炭化物層	セ182	貝と土壌	2ミ 0.1g	炭化種子3個	-	2	-	-	1	-	-
			セ182	貝と土壌	2ミ 15.8g		-	1	-	-	+	+	+
79号竪穴	弥生後期	貝層サンプル	セ182	79号-12	2ミ 0.4g	種子104個	-	47	1	8	6	40+	-
			セ182-352	貝層	4ミ 0.2g	炭化種子30個	-	7	7	6	-	9	-
			セ182	貝層	4ミ	炭化種子1個(+)	-	-	-	-	-	-	1
94号竪穴	弥生後期		セ182	94一括		種子	1	-	-	-	-	-	-

第36表 種実遺体同定結果

<草本>

- ・イネ (*Oryza sativa* L.) イネ科イネ属

炭化した胚乳が検出された。黒色、長楕円形でやや偏平。長さ4～5mm、幅2.5mm、厚さ1.5mm程度。基部の一端に胚が脱落した凹部がある。表面はやや平滑で、両面には2～3本の溝が縦列する。

- ・コムギ (*Triticum aestivum* L.) イネ科コムギ属

炭化した胚乳が検出された。黒色、楕円形で全体的に丸みを帯びている。長さ4.2mm、幅3.2mm程度。腹面には1本のやや太く深い縦溝がある。背面基部には胚の痕跡があり、丸く窪む。表面はやや平滑。

- ・ムギ類

炭化した胚乳が検出された。遺存が悪いため、コムギとオオムギ (*Hordeum vulgare* L.: イネ科オオムギ属) の判別が難しいものをムギ類とした。黒色、腹面は1本のやや太く深い縦溝があり、背面基部には胚の痕跡があり丸く窪む。表面はやや平滑。紡錘状長楕円体で先端部は尖る、オオムギに似る個体がみられるが、長さ4mm、径2.5mm程度と小型であるため、ムギ類にとどめた。

4. 考 察

山田橋大山台遺跡の竪穴からは、オニグルミ、イネ、コムギを含むムギ類などの有用植物が検出された。63号、79号竪穴から検出されたイネや、8号、79号竪穴から検出されたコムギを含むムギ類は、古くから大陸より渡来した栽培植物であることから、当該期の本遺跡周辺で栽培されていたか、持ち込まれ植物質食糧として利用されていたことが推定される。なお、同時期の37号竪穴から出土した土器片の表面には、稲粍の圧痕がみとめられており（送付された実体顕微鏡写真について当社にて判定：図版75参照）、今回の調査結果とも調和的である。また、94号竪穴から検出されたオニグルミは、谷筋などの適湿の地を好んで自生する落葉高木で、堅果が生食・長期保存が可能で収量も多いため、古くから里山で保護されてきた有用植物である。

これらの有用植物が、竪穴から出土した状態を考慮すると、当時の生活残渣が廃棄されたなど、人為的行為により遺構にもたらされたことが推定される。また、全個体とも完全に炭化した状態であることを考慮すると、何らかの理由による火熱を受け、炭化し残存したことが推定される。なお、イネの炭化胚乳の遺存状態は比較的良好である。脱穀した米を蒸したり炊いたりし過ぎて「おこげ」となった場合には、このように明瞭に胚乳の形をとどめることはないと考えられる。おそらく脱穀前の穎に入った生米の状態、何らかの理由により火熱を受け、炭化した穎は脆く壊れやすいので脱落し、胚乳のみが残存したことが考えられる。

文 献

- 石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』328p. 石川茂雄図鑑刊行委員会
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000『日本植物種子図鑑』642p. 東北大学出版会

第4章 弥生時代後期の山田橋遺跡群

第1節 山田橋遺跡群および市原台地周辺地域の後期弥生土器

1. 目的と方針

市原市域を含む東京湾東岸地域の後期弥生土器は、1980年代に、南関東地方の既成編年の抜本的な見直しが問題となる過程にあっても等閑視されてきた。実際には国分寺台遺跡群において大規模な発掘調査が行われていたにもかかわらず、資料的な空白を生じていたのである。しかし、90年代以降の旧君津郡域の資料的な蓄積は、研究史の進捗をみるまもなく、爆発的な拡大をとげた。市原市域についても、ようやく近年、坊作遺跡（小出2002）、釜神遺跡（田中2002）などの報告書が刊行され、大厩遺跡（三森・阪田他1974）、菊間遺跡（斉木・種田・菊池1974）、土宇遺跡（柿沼他1979）、唐崎台遺跡（田中・鈴木1981）以降の空白期を脱しつつある。

村田川流域以南の東京湾東岸地域は、弥生時代後期において、東日本では他に例をみないほどの大規模な遺跡群を形成する。その端緒は、弥生時代中期に遡るが、同様に中核的な遺跡群を形成した東京湾西岸域の神奈川県鶴見川、早瀬川流域の遺跡群が、後期になって離散するのに対して、当該地域ではさらに爆発的な拡大をみせる。弥生時代後期から古墳時代前期前半の遺跡数、竪穴住居跡数は、東京湾東岸地域内においても、他の時代時期を圧倒している（大村1993、集落研究班（當眞）1996）。弥生時代終末期の市原市神門墳丘墓群（田中1977・1984、浅利1989b）や、木更津市高部墳丘墓群（西原2002）の成立にいたる前代の重要性は、竪穴住居跡数の単純な数量的比較においても明らかである。

しかし、基本となる時間軸を欠き、未消化のまま資料が累積していく状況は、さらなる混迷と停滞を招きかねない。市原市では、現在すでに、根田代遺跡、御林跡遺跡の整理作業にも着手しており、基軸となる編年の整備が急務となっている（註1）。

ここでは、おおむね後期、宮ノ台式と鴨居上ノ台式（TB2式）（大村・菊池1984、大村1994）の間を接続する土器型式を問題とする（註2）。これは、山田橋遺跡群、国分寺台遺跡群を含む市原台地、市原市域の遺跡群を解析するための時間軸の設定を主たる目的とするものであり、東京湾岸地域編年の枠組みの設定を意図したものではない（註3）。ただ、市原台地に固有の地域性を結果として反映したものとはなるが、このことを前提とした型式設定でもない。地域性の問題については、過去、脚台部の有無や輪積み装飾など、主に甕形土器を構成する諸要素の出現頻度が問題とされており（大村・菊池1984、土器A研究班（酒巻）1996、小高1995）、これを系統的に整理した松本完の作業がある（松本1993）。しかし、組成比率の変化としてとらえられる構成諸要素の差異は甕形土器のみではなく、各器種各形態素それぞれが独自の変化をみせる（註4）。今回の編年作業は、前提となる諸要素の定性的変化の追求を目的としたものであり、今後に備える仮設的な時間軸としては、市原台地周辺地域以外でも機能し得るものとする。

型式変化の基準について、とくに山田橋遺跡群では遺構の分布が散漫であり、重複関係にもとづく、絶対的な新古を問題とすることはできない。しかし、市原台地周辺地域は、前後型式との関係が明確で、他地域と比較して自律的な変化をとげる。とくに主要器種の連続的な器形変化は、漸移的ではあ

れ、変化の方向性を明示している。器形変化そのものについては、基準化が困難ではあるが、口縁部や文様などに器形変化に即した変化が認められ、これらを基準とすることが可能である。とくに壺形土器は、多要素から構成され、それぞれを形式とする型式組列を個体単位の一体性によって相互検証することが可能である。

今回、細々別6段階の区分を行うが、これは、大別2段階、細別4段階を前提とする。山田橋遺跡群に限らず、当該時期の遺構単位の土器の出土量は相対的に少なく、細々別レベルでの一元化では、大半の時期認定を困難なものとする。そもそも、土器編年においては、絶対的な同時併存遺構の抽出は困難であり、今回の細々別6段階は、遺跡あるいは遺跡群の動態を把握するための暫定値ないしは傾向として考える。

2. 概要および形態分類

構成する器種は乏しいものの、とくに壺形土器の文様を含めた形状変化は多岐におよぶ。徹底した形態分類も必要ではあるが、ここでは、各器種、部位の特徴を概説し、今回必要となる諸要素について分類作業を行う。また、形態素の論理的な相互関係を問題とする。

壺形土器口縁部形態

口縁部の形状は、口唇部外側面に粘土紐を貼付けた、所謂折返し口縁（二重口縁）（A・B類）、口縁端部から上方へ粘土帯を付加する複合口縁（C類）、単口縁（D類）の4類に大別される（第180図）（註5）。

A類 断面形状が三角形を呈し、口縁端部を欠く。口唇部外面ないしは口縁端部に粘土紐を貼付け、垂下する複合部拡張面を加飾部とする。後述するB類が地域的な普遍性をもつものに対して、本類は「久ヶ原式」に特徴的に認められる形式である。A類は、口縁上端角によって3類に分類される。

(A1類) 口縁上端角がおおよそ直角となり、下方へ外傾する複合面をつくる（第183図1～3）。粘土紐は外方ないしは下方へ多重に貼付けられ、複合部（貼付け部）内面は多段となる。

(A2類) 口縁上端角が弱鋭角となり、口縁に対して直下する複合面をもつもの（第183図12・13）。粘土紐の貼付けは基本的に1段であるが、多重になるものも認められる。

(A3類) 粘土紐の貼り合わせが薄く、口縁上端角が鋭角となり、口縁に対して下方へ内傾する複合面をもつものを本類とする（第183図21～23）。山田橋大山台遺跡30号竪穴1（第183図25）の複合部はA3類に類するが、口唇部が面取りされることにより、本類から除外される。

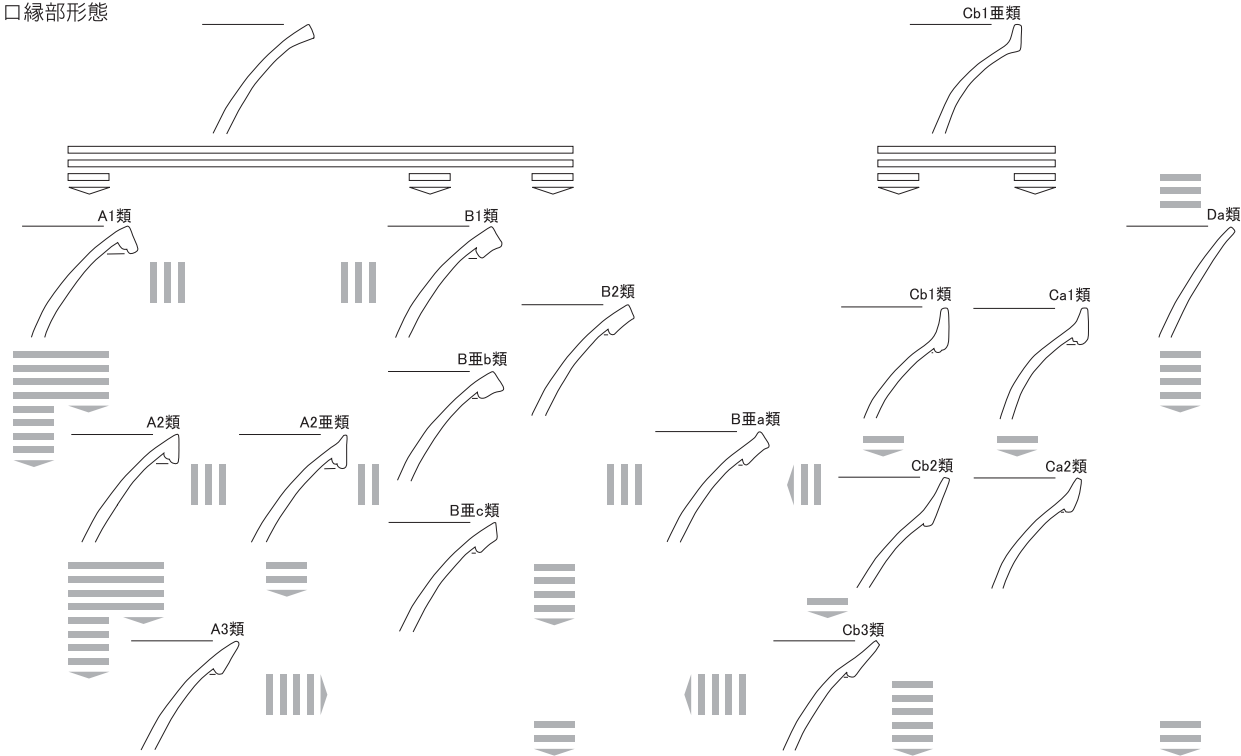
このA類には、複合面が上方へ若干拡張されるものがある。これは、後述するC類と類似するが、複合部の下方への拡張が主たるものは本類に含め、垂類とする。

B類 所謂折返し口縁は、一般には本類をさす。口唇部外面側に粘土紐を貼付け、断面形状が方形ないしは長方形を呈する。口縁端部への縄文施文を基本とするが、複合面へ施文する場合も認められる。相対的ではあるが、粘土貼付け厚によって細別しておく。

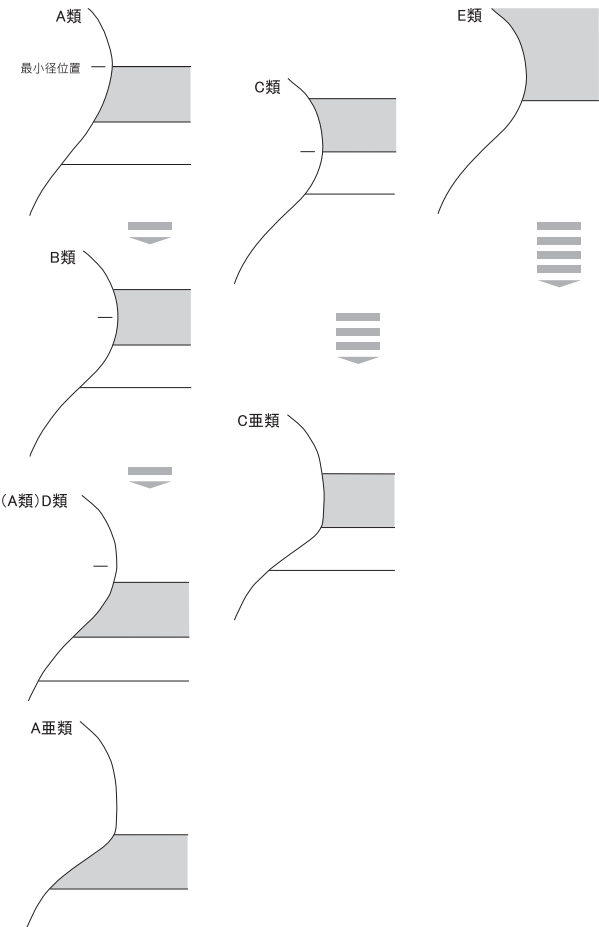
(B1類) 口縁端面、複合面の幅がほぼ等しく、全体の形状が方形にみえるものを本類とする（第183図5・6・14・24）。

(B2類) 複合面に対して口縁端部の幅が薄く、全体の形状が長方形にみえるもの（第183図15・25～27）。

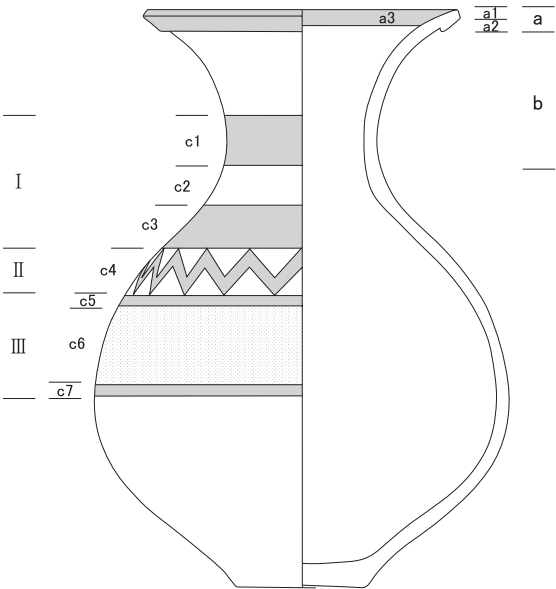
口縁部形態



口頸部文様位置



壺形土器文様帯構成



第180図 形態分類、分類関連図

B類のうち、口縁端面が上方へ若干拡張されるものを垂a類とする。またB類には、口縁端面を下方へ肥厚、拡張させ、断面形状が台形化するものがある。これを垂b類とする（第183図6）。B類の口縁上端角は基本的に直角であるが、口縁端面を斜めに面取りすることによって若干鋭角とし、口縁部から直下する口縁端部をもつものがある。これを垂c類とする（第183図14）。

C類 屈曲して立ち上がる複合部を形成するものをC類とする。

(Ca類) 口縁部から上下方向へ突出する複合部をもち、全体としてT字状を呈するものを本類とする。複合部の拡張は上下同程度で、複合部の幅はCb類に対して相対的に狭い。複合部下端の粘土紐の貼り合わせが多重になるものがあり、A垂類との関連性が認められる。

複合部が直立ないしは下方へ向かって外傾するものをCa1類（第183図8・16）、複合部が内傾するものをCa2類とする（第183図18）。

(Cb類) 複合部は幅広で、複合部の上方への拡張が明確なものを本類とする。

複合部が直立ないしは下方へ外傾するものをCb1類とする（第183図9）。なお、外面屈曲部に粘土紐の付加痕を残さない、所謂受口状口縁についてはCb1垂類とし、本類に含めておく。複合部が外傾するものをCb2類（第183図19・28）、複合部下端の屈曲が弱く、口縁部内面がほぼ直線的に外傾するものをCb3類（第183図29・33）とする。Cb3類には、B類、A3類との分離が明確ではないものも存在する。

D類 単純口縁を本類とする（第183図10・11・30・31）。

(Da類) 口縁部が全体に直線的ないしは外反するものを本類とする。

(Db類) 口縁部が全体に内湾するもの。

これら各類は、排他的で独立した系列を形成するのではなく、相互に関連性をもち推移する（第180図）。口縁上端角がおおむね直角となり、幅広で外傾する拡張端面をもつA1類、B1類、B垂b類、あるいは、口縁から直下する加飾面をもつA2類とB垂c類は、本来同一の装飾意図にもとづくものと考えられる。A2類には、複合面上部を拡張する垂類がみられるが、これは、明らかにC類と関連する。また、B2類には、山田橋大山台遺跡37号竪穴3（第183図26）など、口縁端部に加え複合部への施文例が認められるが、これはA3類、Cb3類と関係し、一体化していく過程を想定させる。加飾部の対応は、系統差をこえて、同時性をしめす可能性が高い。

加飾効果の後退をこの段階の基本的変化とするならば、形式A類に対するA1、A2、A3類、形式B類に対するB1、B2類、形式C類に対するCa1、Ca2類、Cb1、Cb2、Cb3類は、型式変化としてとらえられる。A3類、Ca2類が安房地域で特徴的に認められること、あるいはCb2類が、弥生時代終末期から古墳時代前期の複合口縁の在地的な系譜に列なるように、形式A・B・C類それぞれの型式変化は、実態として、一線的な変化を示すわけではない。しかし、各形式の基本的な型式変化と、加飾部の対応にみられる形式間の関連性は、全体の序列を編成する指標になるものと考ええる。

壺形土器口頸部文様位置（器形分類）

壺形土器の器形変化については、前後型式との関係から、ある程度一線的な変化が想定できるが、各部位に明確な屈曲点が認められないことから、計測値による数量的な比較は困難である。しかし、口頸部文様位置には、器形変化との明らかに連動を認めることができる。以下、頸部最小径位置を基準として、帯縄文の配置を類別する（第180図）。

A類 頸部最小径位置から下部に帯縄文を配置するものを本類とする。A類のうち、最小径位置から胴部側の屈曲角が強くなり、頸部全体の屈曲が明確なものをA垂類とする。

B類 頸部最小径位置を中心として頸部帯縄文を配置するものを本類とする。

C類 頸部最小径位置から上部に帯縄文を配置するものを本類とする。C類のうち、最小径位置から胴部側の屈曲角が強くなり、頸部全体の屈曲が明確なものをC垂類とする。C垂類には、山田橋大山台遺跡89号竪穴（第183図17）、土宇遺跡第8号住居址出土例など、帯縄文下部に段部を形成するものがある。

D類 頸部最小径位置から若干下がった位置に帯縄文を配置するものを本類とする。ただし、この段階では、頸部最小径位置そのものが漸移的で不明瞭であるため、A類との識別はかならずしも明確ではない。

E類 頸部最小径位置から上部、口頸部全体に施文を加えるものを本類とする。ここでの分類は、基本的に器形変化を基準としてものものであり、E類はこれとはなじまないが、一応ここで区分しておく（註6）。

各類は、頸部から胴部にいたる器形変化が緩やかで、口頸部から胴部上半に幅広の加飾面をつくる段階から、頸部の屈曲化が明確となり、胴部の球形化、口縁部高の収縮を指向する過程に対応し変化をとげる。この器形変化を基本とするならば、口頸部文様位置A類→B類→A類・D類→A垂類の変遷が想定される。頸部内外面に明確な屈曲点を形成し、胴部の球形化が完成するのは、古墳時代前期五領式の指標であり、これにいたる器形変化には明確な基準点を設定することができない。ただ、帯縄文位置により、器形変化の過程をある程度判断することができる。とくに、B類、A垂類、C垂類は、段階的な基準となる。

壺形土器帯縄文

施文原体については、分類設定は行わない。東京湾東岸地域における縄文施文原体は、従来の予測以上に多様であり（能城1994、文様研究班（小沢・黒澤・今坂）1996）、千倉町健田遺跡（玉口1978、玉口・小金井1979、林原・東洋大学未来考古学研究会1985）など、明確な地域性を指摘することもできる。ただ、全体としては、単節斜縄文が圧倒的であり、山田橋大山台遺跡の壺形土器各部位の施文原体は、単節縄文（82.2%）：無節縄文（5.7%）：網目状撚糸文（6.3%）：結節文（3.5%）：付加条3種（1.0%）：付加条1種（0.6%）：擬縄文（0.6%）であった。

網目状撚糸文については、過去、関根孝夫により、弥生時代終末段階から古墳時代前期初頭に特徴的に認められることが指摘されている（関根1974）。このことが誤りであるとは考えないが、地域的にみれば、健田遺跡などは終末期以降に限定されるものでもない（能城1994）。山田橋大山台遺跡でも15号竪穴をはじめ、後述する各段階に散見される。ただ、網目状撚糸文とするものには、付加条3種が一定程度混在し、少なくとも市原台地周辺地域では、時期的な傾向が認められる（註7）。

擬縄文については、山田橋大山台遺跡でも櫛刺突による可能性があるものが存在するが、菊川式と直接対比できるものではない。菊川式は、市原市域でも、南富士台遺跡（近藤1987a）、御林跡遺跡（木對2004）や現在整理中の根田代遺跡などで確認されており、類例は増加しつつある。他に、オオバコの花茎等の回転による擬縄文が56号竪穴で確認できる（図版81）。これは、宮ノ台式期に類例が多いが、唐崎台遺跡第8号住居跡など、この段階でも散見することができる。

壺形土器帯縄文区画

壺形土器横帯縄文の区画は、下記のとおり大別しておく。

A類 沈線文によるもの。

B類 結節文によるもの。さらに、S・Zの結節により、BS類、BZ類に細別する。

C類 押捺段区画によるもの。ただし、帯縄文上下の区画は、段部のみで完結していないため、第181図、第37表の集計対象にはしていない。

D類 無区画。

このうち、結節文については鮫島和大、加藤修司らの研究がある（鮫島1994、加藤1997）。これは、おもに別原体（自縄）結節文、端末結節文の2系列に関わるものであるが、本遺跡では端末結節文を確実に認めることはできなかった。山田橋大山台遺跡における区画結節文のBS類、BZ類の比率は、BS類が89.8%、また、BS類のうちSRが全体の73.2%を占める。旧君津郡域の集計とは異なる比率をみせる（文様研究班（小沢・黒澤・今坂）1996）。

壺形土器文様構成

東京湾岸地域における壺形土器の文様構成は、帯縄文2帯を基本とし、その下部に山形縄文帯を構成する。ただし、所謂幾何学文を含め、全体の文様構成は多様であり、総括的な分類を行うことはできない。ここではまず、第180図によって、横位方向に分割される施文各部位を区分し、主たる文様構成について概観しておく。

各部位に対する施文は、相互に独立したものではなく、相対的な関係を認めることができる。例えば、口縁部内面（a3区）に対する施文は、相模湾沿岸地域などと比較して省略される場合が多い。東京湾岸地域では、帯縄文2帯を基本とし、頸部の屈曲は緩やかで、口頸部から胴部上半にいたる幅広の加飾面をつくる。これにともない、口縁部は直立する傾向が認められる。本来、何が規定的であったのかを判断することはできないが、全体の相対的な関係のなかでは、口縁部内面への加飾意図は軽視されている。口縁部形態において、一定の地域的な普遍性をもつB類に対し、当該地域でより加飾的なA類が生成することも、口縁部外面に対する装飾重視に起因する可能性が高い。

帯縄文下部Ⅱ区（c4）区を構成する（連続）山形縄文帯は、宮ノ台式の結紐文の連結を出自とし、宮ノ台式のうちに成立する。ここでは、地文となる縄文の施文方法によって分類しておく。

1類 充填羽状縄文によるもの（註8）。

2類 充填単斜縄文によるもの。

3類 横方向の連続回転羽状縄文に、山形の沈線区画文を加え、枠外を磨り消すもの。

1類は、基本的に沈線区画の横帯縄文に接続するのに対して、2類は、山田橋大山台遺跡31号竪穴8、46号竪穴1、49号竪穴1（第186図102）、60号竪穴18、97号竪穴5、東千草山遺跡第7号住居跡（第190図1）（註9）などがあり、このうち、46・97号竪穴、東千草山遺跡第7号住居跡例の帯縄文は結節区画である。また、山田橋大山台遺跡36・49号竪穴は、個体としては沈線区画の帯縄文に接続するが、竪穴単位では、結節区画の帯縄文が伴出する。3類については、山田橋大山台遺跡15号竪穴5、52号竪穴27、釜神遺跡釜神遺跡133号住居跡、武士遺跡005方形周溝墓（第186図106）などがあり、基本的に結節区画の横帯縄文に対応する。市原台地では、結節区画の帯縄文と山形縄文帯の組み合わせ例自体が少ないが、袖ヶ浦市下向山遺跡（黒澤1994）では、結節区画が主体化するなかで、3類が明ら

かに優位化する（註10）。

1類、2類、3類は、基本的に型式変化としてとらえられるが、草刈遺跡A区71号址（第186図107）の充填羽状縄文など、その変化はかならずしも一線的ではない。ただし、器形変化との連動を考慮するならば、連続する山形の振幅・波長が広いものから収縮していく過程が想定され、1～3類も、これに対応する省略的变化としてとらえることができる。

山形文縄文帯に関連し、山形文を上下に連繋した菱形縄文帯がある。これも、大厩遺跡Y-73号址例にみられるように、宮ノ台式期に生成する可能性がある。山田橋遺跡群では、山田橋大山台遺跡94号竪穴1、東千草山遺跡第4号住居跡（第189図1）より出土している。また、山田橋大山台遺跡37号竪穴6（第186図108）は、Ⅲ区文様帯を構成する。草刈遺跡A区9号跡、雪解沢遺跡D-8号住居跡（金丸1988）、釜神遺跡209号住居跡各出土例では、Ⅰ区間帯（c2区）に山形縄文帯を配置する。これも、宮ノ台式の文様構成を引き継ぐものであろう（註11）。

所謂複合山形縄文帯、幾何学文は、東京湾岸地域に特徴的な装飾壺であり、笹森紀己子、犬木努の研究を参考にすることができる（笹森1984、犬木1992）。その構成は、帯縄文（Ⅰ区）、山形縄文帯（Ⅱ区）を残したまま、これを圧縮し、その下部にⅢ区文様帯を追加することによって成立する。Ⅲ-c5区の追加は、根田代遺跡など、沈線区画の帯縄文との組み合わせのなかで認めることができる。また、幾何学文の端緒としては、個別文様について時期的に先行する、安房地域の関与が問題となる。ただ、その成立には型式的な「飛躍」が認められ、現状資料のなかでその成立過程を段階的に説明することはできない。

幾何学文は、重菱形文（重四角文）、重山形文の2系列に大別することができる。重菱形文系列のなかでは、山田橋大山台遺跡37号竪穴6（第186図108）が原型としての特徴をもつようにみえる。文脇遺跡207号住居跡例（第186図109）は、連続山形文を半単位ずらし、前後に重ねている。これに対して、南祇園原遺跡203号住居跡（第186図110）、神奈川県横浜市横浜市道高速2号線No.6遺跡2号方形周溝墓例（第186図111）は、菱形文が分割され、単位文様化している。重山形文については、神奈川県横浜市二ッ池遺跡第23号住居址例（第186図112）が、単位文化したV字形の多重化を表現する。一方、東金市道庭遺跡住居址No.1例（第186図114）などは、山形文様から離れ、斜行縄文帯の連鎖が強調されている。基本的には、連繋文から、その一部を抽出した単位文様化、さらにその分断化が一連の過程として認められる。

ただ、これら個体単位での比較検討は容易であるが、その祖型を含め、はたして、どの程度段階的、時期的指標を与うるかは疑問が残る。また、これら土器群のⅠ区帯縄文は基本的に結節区画であるが、一方で（連続）山形縄文帯に前述した施文の省略化が認められるなかで、幾何学文のみを取り出して論理的な型式変化を問題とすることの妥当性は判断できない。弥生時代終末期段階に比定されるものには、笹森が指摘する、「充填縄文」から「磨消縄文」、あるいは、基本の構成原理であったⅠ区帯縄文2帯、Ⅱ区山形縄文帯の解体をみることができる（註12）。しかし、「磨消縄文」による東千草山遺跡第7号住居跡（第186図113、第190図2）、あるいは山田橋大山台遺跡53号竪穴1例は、伴出土器からみ限り、山田橋大山台遺跡37号竪穴例と明確な段階差は指摘できない。Ⅲ区文様帯を拡張する木更津市庚申塚第1号墳（梶山・荒木・鈴木他1977）、木更津市マミヤク遺跡81号住居跡（小沢1989）、木更津市俵ヶ谷遺跡120号住居址（小林1991）各例なども、地域的に限定される可能性は高いものの、

終末期段階以前に遡ることが確実である。その成立と展開は、限定された時間差のなかで推移したものと考えられる。

なお、終末期段階に比定される片又木遺跡35号住居跡（小橋2000）にみられる、横帯縄文への「磨消縄文」の採用は、幾何学文の変遷と推移する可能性もある。ただし、横帯縄文上に沈線文を加える例は、山田橋大山台遺跡46号竪穴2、56号竪穴2などがあり、また、沈線山形文を帯縄文の区画文とし、区画外を磨り消す例は、山田橋大山台遺跡70号竪穴3、草刈遺跡（市セ調査）22号住居址（第183図35）などで認められ、一定の系譜的關係をみせる。

文様構成としては、他に、大厩遺跡Y-14号跡例などの沈線充填の鋸歯文、山田橋大山台遺跡94号竪穴14などの刺突充填の鋸歯文、縦位区画文などがある（註13）。とくに、鋸歯文についてはその系譜が問題となるが、ここでは触れない。

広口壺形土器

壺形土器の帯縄文区画にあわせて分類しておく。ただし、無区画の帯縄文をもつ例は限られているため、D類は別基準とした。

A類 沈線文によるものを本類とする。

B類 結節文によるもの。

C類 押捺段区画によるもの。

D類 無文。

広口壺形土器は、区画文とは別に、頸部に帯縄文をもつものと（第185図67～70）、口縁部から胴上半部までを縄文施文部するもの（第185図71～73）の2系列に再編することもできる。口縁部については、壺形土器口縁部形態のA・B類が主体となり、その変化も基本点においては対応する。ただし、壺形土器に対して絶対量が少なく、個々の検討は行わない。なお、胴部下半の段部は（第185図68・69・74）、各類に対応し、下鈴野遺跡号住居跡03号住居跡（大村1987）など、五領式に列なる。

甕形土器

粘土紐積上げ痕にもとづく輪積み装飾など、定形的な分類を採用しておく。

A類 粘土紐積上げ痕により、口頸部が多段化するもの。所謂輪積み装飾甕を本類とする。

(Aa類) 段部下端に押捺痕をもつもの（第184図45・46）。

(Ab類) 段部下端の押捺痕がないもの（第184図38・42～44・55・56）。

B類 胴部中位に粘土紐積上げ痕を1段残すものを本類とする。

(Ba類) 段部下端に押捺痕をもつもの（第184図52～54・60・61）。

(Bb類) 段部下端の押捺痕がないもの（第184図41・49～51・58・59）。

C類 粘土紐積上げ痕を残さないものを本類とする。

B・C類の細別として、口縁段部について分類しておく。口縁部外面の折返し口縁状の段部は、その設定位置によってはB類との識別が困難なものもあるが、胴部中位の段部と共存するものもみられるため、細別分類とする。ここでは、口縁部外面に段部をもつものを重1類（第184図39・40・47・48・57）、内面にもつものを重2類、内外面に形成するものを重3類としておく。また、段下端に押捺痕をもつものをa類、ないものをb類とする。

甕形土器を構成する各形態素のうち、段部断面の形状については、肉厚で連続的な指頭痕を残すも

のが古く、ヘラナデ、ケズリを加え、平坦化したものが新しいと考えられている。このことを否定する必要はないが、基準としては曖昧にならざるを得ず、現実的な変化は一線的ではない（註14）。

口縁端部は、交互押捺による波状がこの段階の特徴となる。宮ノ台式の表裏押捺による波状口縁に列なるが、その手法は明らかに異なる（註15）。この段階の製作手法は、まず口縁外側端部に浅い切り込みを入れ、上端部へ棒状工具による押捺を加えることが一般的である。外側端凹部には、切り込みによる稜線を残すものが多く、爪痕と考えられるものもある（図版79・80）。上部からの押捺の程度によっては、外側端凹部が不明瞭になる。個体単位では、上端部を残し平縁となるものなど、差異を指摘することは可能であるが、現状では時期的な指標を認めることはできない（註16）。

段部押捺原体については、単軸絡条体、結節文など縄文原体とする観察結果が認められるが、基本的には布目圧痕と考える。押捺部中央に刺突痕を残すものもあり、おそらくは、棒状工具等に布を巻き付けたものを原体とする（図版81・82）。これは、壺形土器など、各器種に共通する。布目圧痕をとまう押捺は、少なくとも当該地域では宮ノ台式期に認められ、終末期段階におよぶ。

前述したように、Aa類、Ab類、Ba類、Bb類は、系統的に並列し、その出現頻度には地域差が認められる。台付甕形土器についても、過去指摘されているように、明確な地域性があり、当該地域では、古墳時代前期においても平底を継承する。山田橋大山台遺跡の台付甕形土器は、底部による集計で約10%程度の比率にとどまる。ただ、東京湾西岸地域における脚台部の出現は、当該地域においては、支脚形土器（炉器台）の成立と関連する。山田橋大山台遺跡と坊作遺跡の比較では、後期段階における甕形土器の容量自体の変化は明確ではないが、球形化を指向することによる器高比の低減が、支脚形土器出現の契機となる。

支脚形土器は、山田橋大山台遺跡112号堅穴などにみられるが、器形は、釜神遺跡36・47号住居跡などX字形を呈するもの、釜神遺跡173号住居跡などハ字形を呈するものがあり、器受部、脚端部は、折返し口縁状になるものが目立つ。終末期以降主体化する受口状のものも、文脇遺跡など、後期段階に認められる。

椀・高杯形土器

椀形土器と高杯形土器杯部は基本的に一体であり、識別は困難である（註17）。ここでは、壺形土器の帯縄文区画にあわせて分類しておく。ただし、無区画の帯縄文をもつ例は限られているため、D類は別基準とした。

A類 沈線文によるものを本類とする（第185図79・85・83・84・92・93）。

B類 結節文によるもの（第185図94）。

C類 押捺段区画によるもの。無文のものも含む（第185図86・80～82・88～91）。

D類 無段、無文のもの（第185図95・96）。

このうち、A・B類の細別として、口縁部が有段となるものを亜類として分類しておく（第185図78・79・85）。

これら各類の出現頻度にも、東京湾岸地域内の地域性が認められる。当該地域では、B類の頻度が低く、とくに、高杯形土器にはほとんど採用されていない。なお、脚部に三角形の透かし孔をもつ例が釜神遺跡、小田部向原遺跡（大村1991a）などで散見されるが、これらは、在地化した有段押捺で縄文施文の脚裾部をもつ。また、有段の杯部をもつ高杯形土器は、市原台地周辺地域では、終末期

段階の天王台遺跡（木對1988）などで認められるにすぎない。

3. 型式設定

宮ノ台式と鴨居上ノ台式（TB2式）の間を2型式（仮Ⅰ・Ⅱ式）に大別するが、これは、壺形土器、広口壺形土器、椀形土器、高杯形土器各形式を横断する「様式」的变化としての、帯縄文沈線区画（A類）（Ⅰ式）と結節区画（B類）（Ⅱ式）に対応する。これは、古色蒼然たる基準ではあるが、現状においてもその先後を積極的に否定する資料は存在せず、また、これ以上明快な基準もない。しかし、沈線文と結節文自体は、ともに前段の宮ノ台式を構成し、あくまでも独立した施文手法として存在する。論理的にも両者を型式変化として直接関連付けることは困難であり、他の諸要素のなかで、その置換過程が検証されなければならない。単純に言えば、その変換段階を長期にわたるものと見積もるか、あるいは限定された短期と考えるかによって、編年的な細別は大きく影響される。

第181図、堅穴単位組成は、山田橋遺跡群と坊作遺跡の出土土器を堅穴単位で集計し、壺形土器帯縄文沈線区画を出土した堅穴と、結節区画を出土した堅穴ごとに集計したものである（註18）。

また、第181図、個体単位組成および伴出他器種組成は、各基準に対する個体単位の組成と、他器種については、その個体が出土した堅穴住居跡の伴出土器を対象とした（註19）。遺跡は、山田橋遺跡群と坊作遺跡の他に、市原市域の釜神遺跡、武士遺跡（田村・加納・高柳他1996）、唐崎台遺跡、草刈遺跡A・B区（小久貫1983、高田1986）、土宇遺跡、および袖ヶ浦市域の文脇遺跡（山本1992）、金井崎遺跡（光江1984・1991）、下向山遺跡（黒澤1994）を対象とした。第182図の集計も同様である。

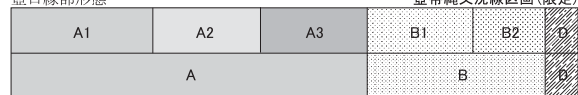
帯縄文区画を基準とした集計をみると、帯縄文区画については、広口壺形土器、椀・高杯形土器と一体的な変化が想定できる。また、壺形土器口縁部形態細別分類、壺形土器口頸部文様位置等各分類基準についても、比較的明確な組成変化を認めることが可能である（註20）。

第182図は、伴出した壺形土器帯縄文区画を基準とした甕形土器の器形変化を集計としたものであるが、これについても、おおむね傾向をみることができる。すでに周知されているように、深鉢形器形から口頸部の収縮にともなう胴部の球形化、輪積み装飾段部を基準とする口頸部高の拡大などが指摘できる。ただ、甕形土器口径胴径比を基準とした場合の各分類の組成比率は、壺形土器帯縄文区画に比べると他要素の変化は鮮明ではない（第181図下）。壺形土器帯縄文区画を基準とし、甕形土器口縁部径と胴部径のどちらに最大径があるかをみると、沈線区画では32（71.1%）：13（28.9%）、結節区画では46（40.4%）：68（56.9%）であり、傾向を伺うことは可能であるが、帯縄文区画の変化と一体としてみるには、確率的な編年基準としての有効性はかならずしも高くない。口径胴径の逆転が、結節区画変化後にずれこむことも考えられる。いずれにせよ、器形変化そのものを基準化するためには、多変量に対する解析手法が必要になる。

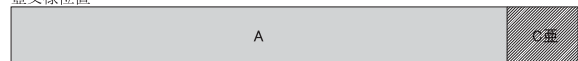
壺形土器帯縄文の沈線区画と結節区画が、明確な時期的傾向をもつことは明らかであるが、その変換過程については問題を残す。過去指摘されているように、結節文の採用は、宮ノ台式後半に認められ、終末段階の菊間遺跡第54号住居址では、帯縄文に対する別原体（自縄）結節文による区画が認められる。しかし、例えばⅠ式期に限定される坊作遺跡では、堅穴住居跡出土土器すべてを確認したが、結節区画、結節文は皆無であった。少なくとも市原台地周辺地域では、結節文、結節区画の断絶は明らかであり、この段階の強固な規格性を認める必要がある。山田橋遺跡群に坊作遺跡を加えた堅穴単

竪穴単位組成 (山田橋遺跡群・坊作遺跡)

壺口縁部形態



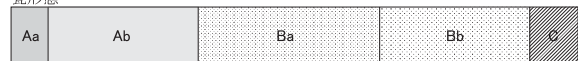
壺文様位置



広口壺帯縄文区画



甕形態



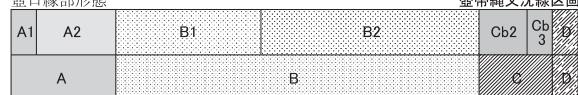
碗・高杯口縁部帯縄文区画



0 100%

壺形土器個体単位組成および伴出他器種組成

壺口縁部形態



壺文様位置



壺帯縄文



壺山形縄文帯縄文



広口壺帯縄文区画



甕形態



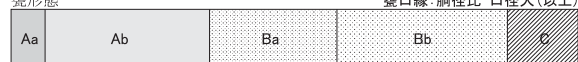
碗・高杯口縁部帯縄文区画



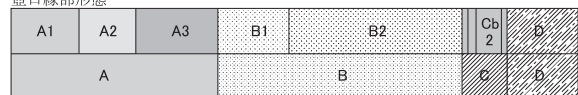
0 100%

甕形土器個体単位組成および伴出他器種組成

甕形態



壺口縁部形態



壺文様位置

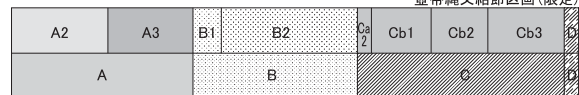


壺帯縄文区画



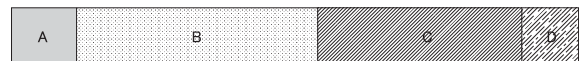
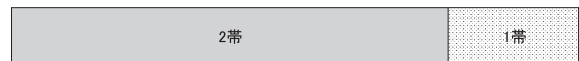
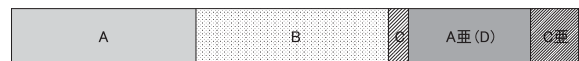
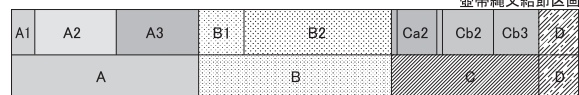
0 100%

壺帯縄文結節区画(限定)



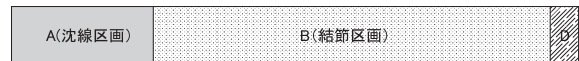
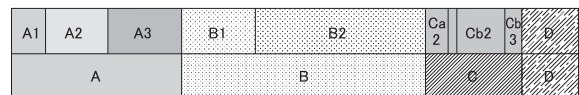
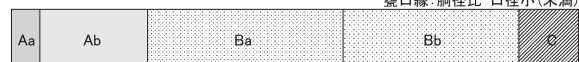
0 100%

壺帯縄文結節区画



0 100%

甕口縁: 胴径比 口径小(未満)



0 100%

第181図 形態素組成比率

竪穴単位組成（山田橋遺跡群・坊作遺跡）

壺帯縄文沈線区画(限定)																
壺口縁部形態																
A1	A2	A3	(亜)	B1	B2	(亜a)	Ca1	Ca2	Cb1	Cb2	Cb3	D				
4	3	3	0	3	2	0	0	0	0	0	0	0	1			
25.0%	18.8%	18.8%		18.8%	12.5%		0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	6.3%			
62.6%			31.3%				0.0%						6.3%			
壺文様位置							広口壺帯縄文区画									
A	B	C	A亜	C亜	D	A								B	C	D
7	0	0	0	1	0	1								0	1	0
87.5%	0.0%	0.0%	0.0%	12.5%	0.0%	50.0%								0.0%	50.0%	0.0%
甕形態							甕・高杯口縁部帯縄文区画									
Aa	Ab	Ba	Bb	C	(亜1)	(亜2)	A	B	Ca	Cb	D	(亜)				
3	12	15	12	4	0	2	9	0	11	1	0	5				
6.5%	26.1%	32.6%	26.1%	8.7%			42.9%	0.0%	52.4%	4.8%	0.0%					
32.6%			58.7%			8.7%										

壺形土器個体単位組成および伴出他器種組成

壺帯縄文沈線区画												
壺口縁部形態												
A1	A2	A3	B1	B2	Ca1	Ca2	Cb1	Cb2	Cb3	D		
1	3	0	6	9	0	2	0	1	0	1		
4.3%	13.0%	0.0%	26.1%	39.1%	0.0%	8.7%	0.0%	4.3%	0.0%	4.3%		
17.4%			65.2%			13.0%					4.3%	
壺文様位置					壺帯縄文							
A	B	C	A亜+D	C亜	2帯 1帯							
37	10	2	5	0	15 5							
68.5%	18.5%	3.7%	9.3%	0.0%	75.0% 25.0%							
壺山形縄文帯縄文					広口壺帯縄文区画							
羽状	単斜	連続	A B C D									
12	6	0	4 11 1 4									
66.7%	33.3%	0.0%	20.0% 55.0% 5.0% 20.0%									
甕形態												
Aa	Ab	Ba	Bb	C	亜1	亜2						
11	39	43	45	9	2	3						
7.5%	26.5%	29.3%	30.6%	6.1%								
甕・高杯帯縄文区画												
A	B	Ca	Cb	D	亜							
43	6	19	5	13	5							
50.0%	7.0%	22.1%	5.8%	15.1%								

甕形土器個体単位組成および伴出他器種組成

甕口径: 胴径比口径大													
甕形態													
Aa	Ab	Ba	Bb	C	亜1	亜2							
12	55	44	58	24	11	8							
6.2%	28.5%	22.8%	30.1%	12.4%									
壺口縁部形態													
A1	A2	A3	B1	B2	Ca1	Ca2	Cb1	Cb2	Cb3	D			
16	14	19	17	41	0	1	3	6	1	17			
11.9%	10.4%	14.1%	12.6%	30.4%	0.0%	0.7%	2.2%	4.4%	0.7%	12.6%			
36.3%				43.0%		8.1%					12.6%		
壺文様位置													
A	B	C	A亜+D	C亜		壺帯縄文区画							
						A	B	D					
56	27	2	5	6		98	82	3					
58.3%	28.1%	2.1%	5.2%	6.3%		53.6%	44.8%	1.6%					

壺帯縄文結節区画(限定)														
壺口縁部形態														
A1	A2	A3	(亜)	B1	B2	(亜a)	Ca1	Ca2	Cb1	Cb2	Cb3	D		
0	7	6	3	2	10	1	0	1	4	4	6	1		
0.0%	17.1%	14.6%		4.9%	24.4%		0.0%	2.4%	9.8%	9.8%	14.6%	2.4%		
31.7%				29.3%				36.6%						2.4%
壺文様位置							広口壺帯縄文区画							
A	B	C	A亜	C亜	D		A	B	C	D				
7	3	0	3	1	2		0	0	7	12.5%				
43.8%	18.8%	0.0%	18.8%	6.3%	12.5%		0.0%	0.0%	87.5%	12.5%				
甕形態							甕・高杯口縁部帯縄文区画							
Aa	Ab	Ba	Bb	C	(亜1)	(亜2)	A	B	Ca	Cb	D	(亜)		
1	3	22	16	4	1	0	2	4	23	5	7	0		
2.2%	6.5%	47.8%	34.8%	8.7%			4.9%	9.8%	56.1%	12.2%	17.1%			
8.7%		82.6%		8.7%										

壺帯縄文結節区画											
壺口縁部形態											
A1	A2	A3	B1	B2	Ca1	Ca2	Cb1	Cb2	Cb3	D	
3	11	11	6	20	1	4	1	8	6	5	
3.9%	14.5%	14.5%	7.9%	26.3%	1.3%	5.3%	1.3%	10.5%	7.9%	6.6%	
32.9%			34.2%			26.3%					6.6%
壺文様位置					壺帯縄文						
A	B	C	A亜+D	C亜	2帯 1帯						
38	40	4	25	10	44 13						
32.5%	34.2%	3.4%	21.4%	8.5%	77.2% 22.8%						
壺山形縄文帯縄文					広口壺帯縄文区画						
羽状	単斜	連続			A	B	C	D			
2	9	8			7	26	22	6			
10.5%	47.4%	42.1%			11.5%	42.6%	36.1%	9.8%			
甕形態											
Aa	Ab	Ba	Bb	C	亜1	亜2					
8	33	117	61	26	3	1					
3.3%	13.5%	47.8%	24.9%	10.6%							
甕・高杯帯縄文区画											
A	B	Ca	Cb	D	亜						
14	17	46	18	37	5						
10.6%	12.9%	34.8%	13.6%	28.0%							

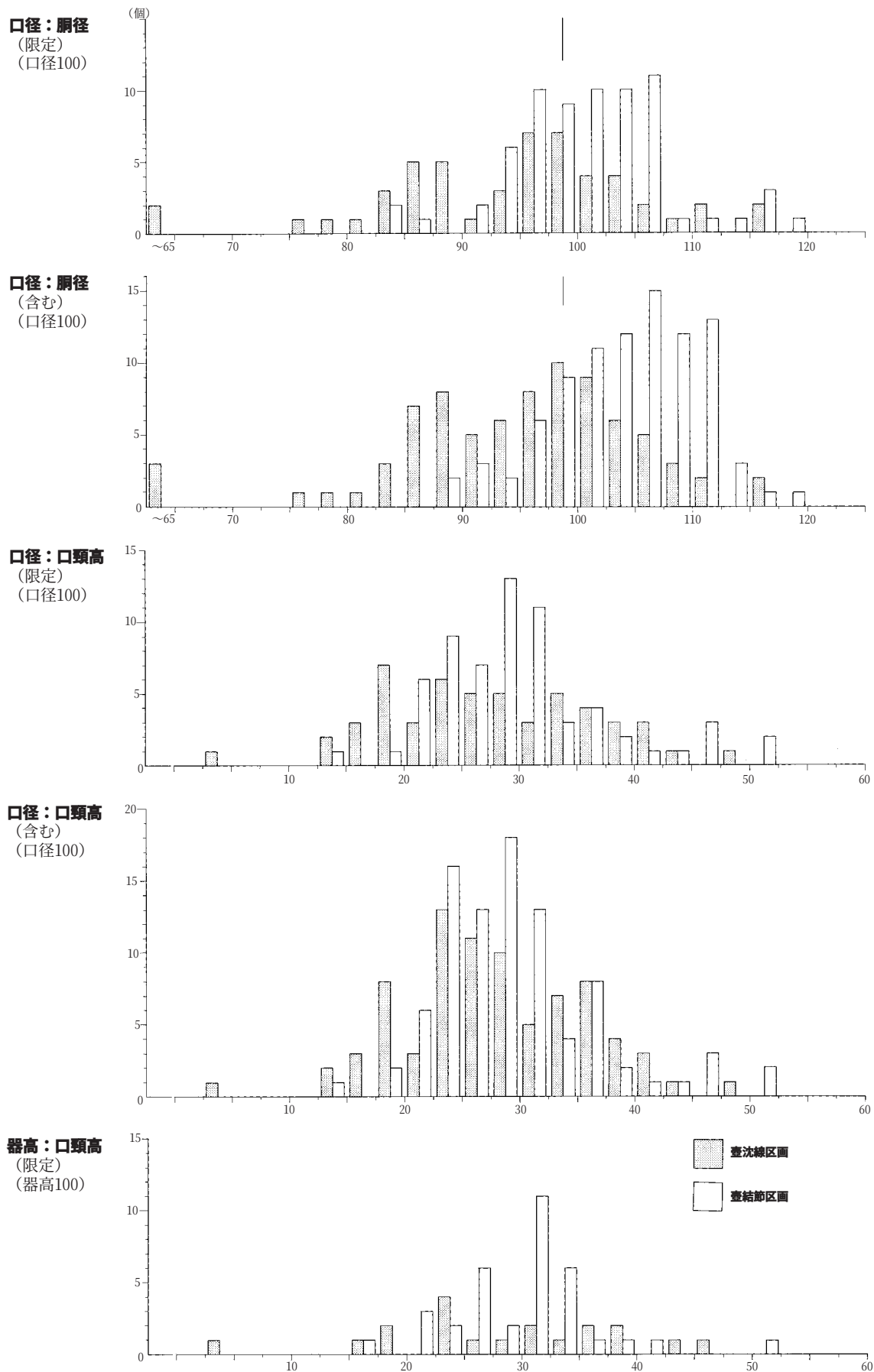
第37表 形態素組成比

位の集計では、壺形土器帯縄文を出土する竪穴のうち、区画が沈線区画のみであった竪穴は全体の26.8%、共伴する竪穴は27.8%、結節区画のみは45.4%であった。当然遺存遺物のみの集計ではないが、これをいかに判断するかは難しい。周辺地域では、沈線区画の遺存について地域差をもつことも指摘されており（車崎・松本1996）、安房地域の消長は明らかに異なる。また、山形縄文帯、幾何学文様など沈線区画自体が消滅するわけでもない（註21）。しかし、ここでは、帯縄文区画の変換は、おおむね短期のうちに完了したと考えておきたい。

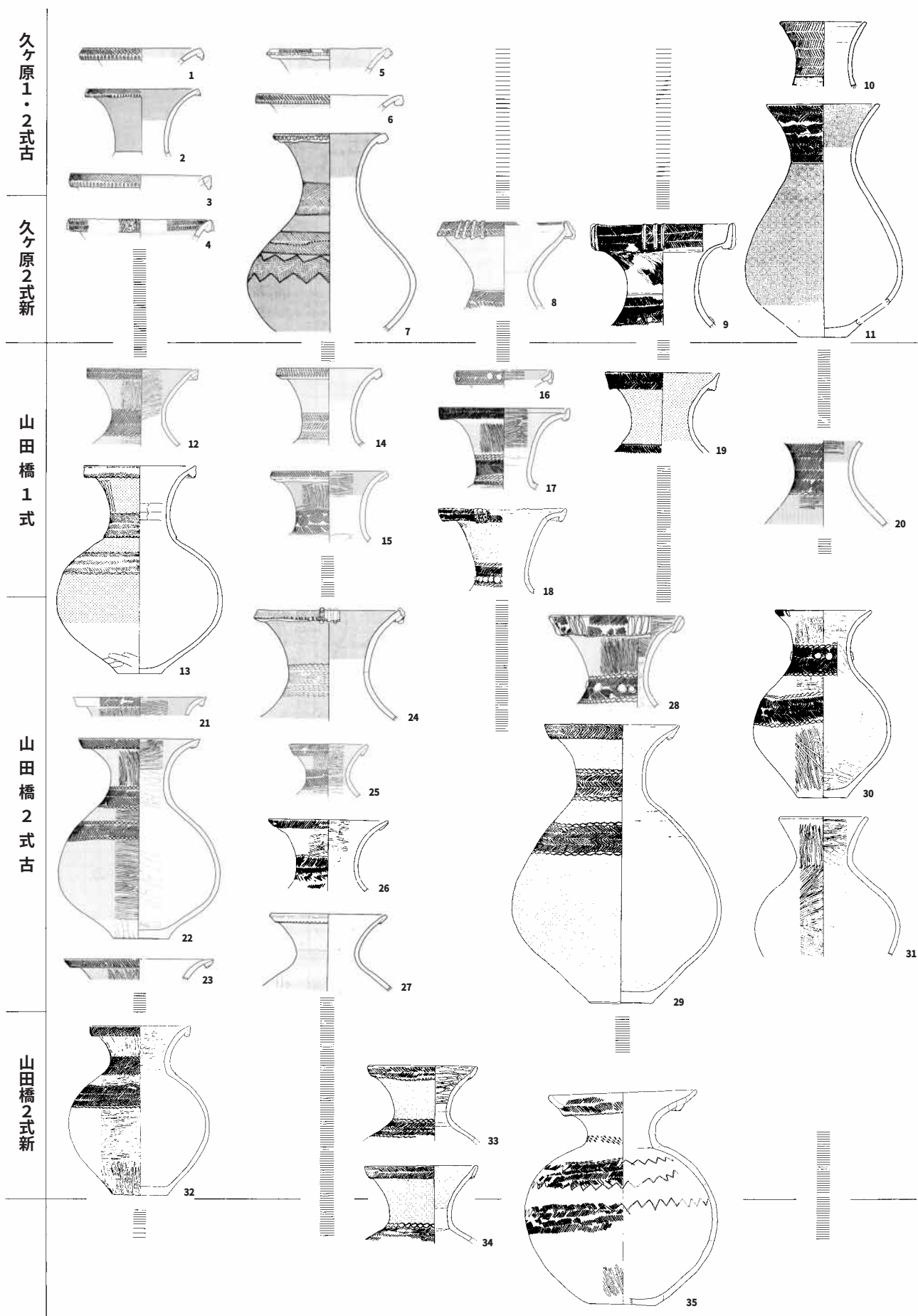
区画の変更自体は、器形変化等を規定するものではない。しかし、沈線区画から結節区画への変化にともない、口縁部形態など壺形土器個体内、あるいは竪穴住居伴出土器諸要素の組み合わせには明確な変化が認められる。以下、この集計結果を大枠としてとらえ、これを純化していくことにより、細別段階を編成する。

I1式（菊間段階）

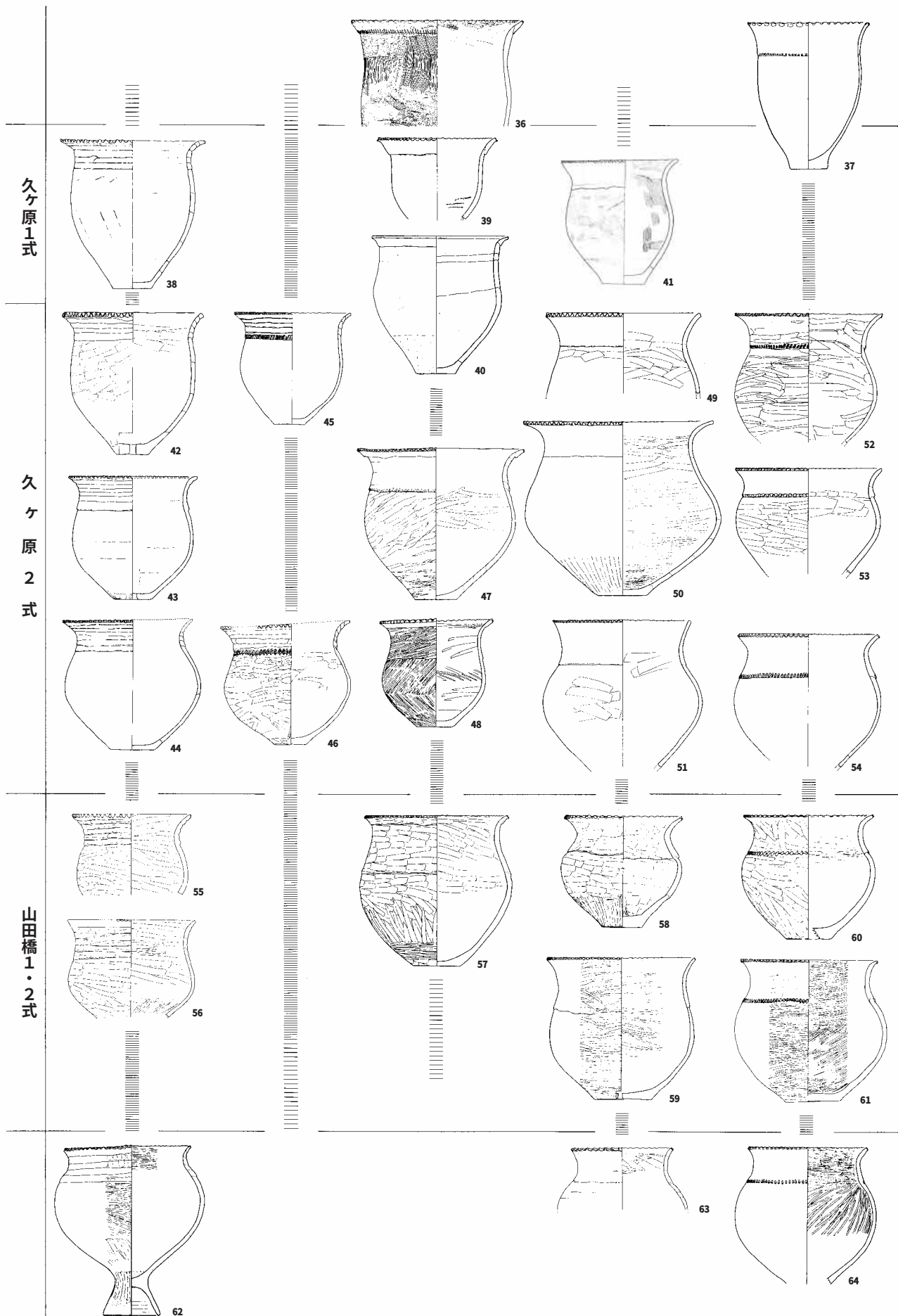
まず、接続する宮ノ台式との関係を明示しておく必要がある。宮ノ台式との比較では、壺形土器の帯縄文2帯、沈線区画（A類）、山形縄文帯、折返し口縁（A・B類）、甕形土器の粘土紐積上げ痕によ



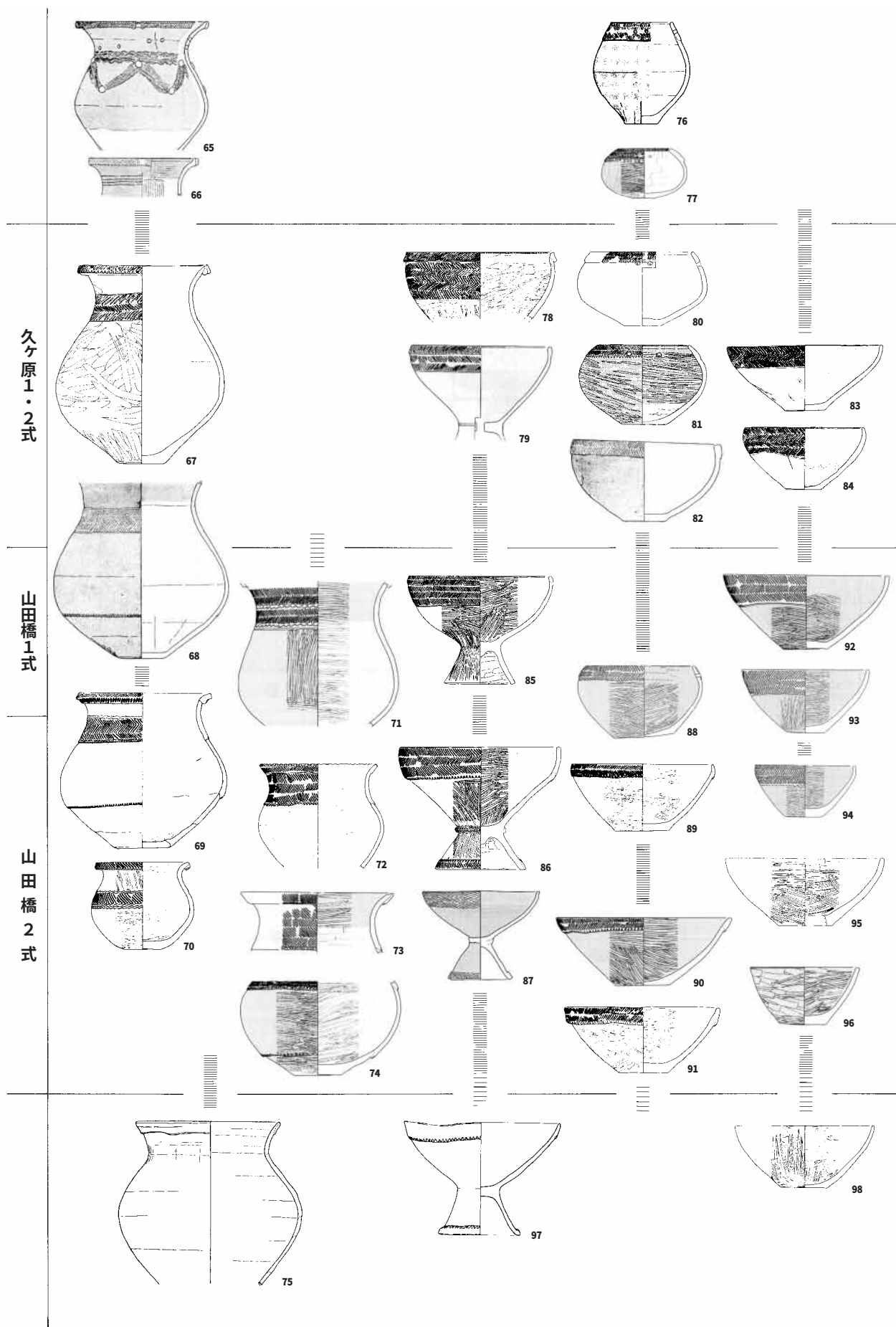
第182図 甕形土器頻度分布図



第183図 土器略編年図（市原台地周辺）(1)

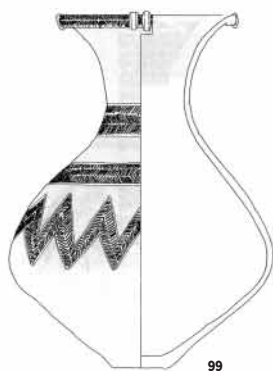


第184図 土器略編年図（市原台地周辺）（2）

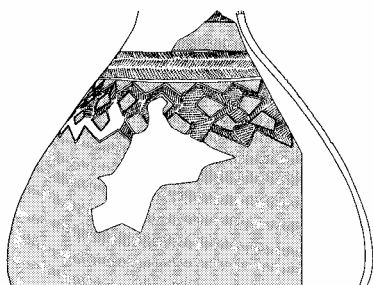


第185図 土器略編年図（市原台地周辺）（3）

久ヶ原1・2式古

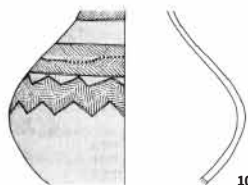


99



100

久ヶ原2式新

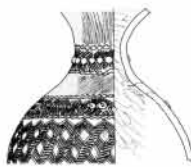


101

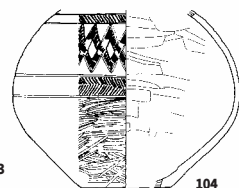
山田橋1式



102

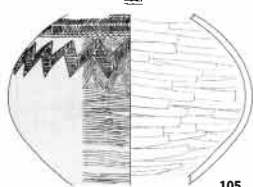


103

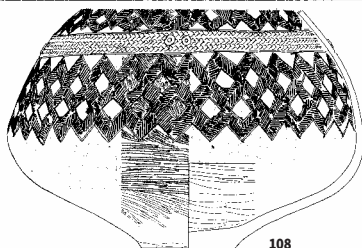


104

山田橋2式



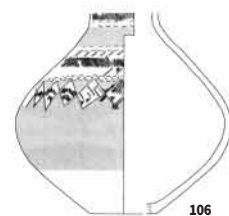
105



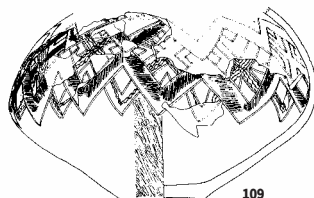
108



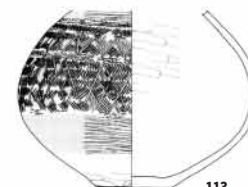
112



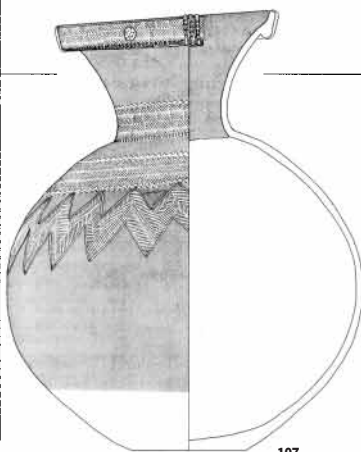
106



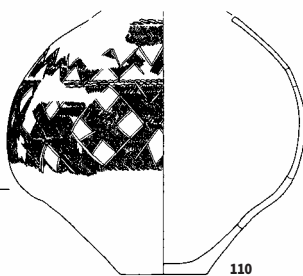
109



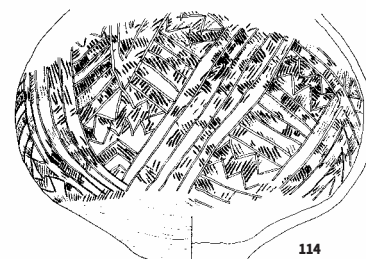
113



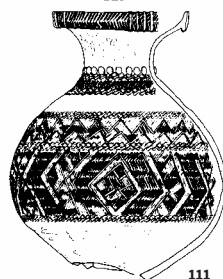
107



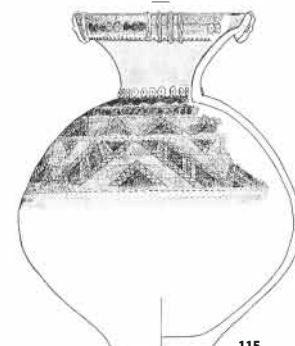
110



114



111



115

第186図 土器略編年図（裝飾壺）

る輪積み装飾（A類）、段部（B・C垂1類）、ナデ整形、交互押捺波状口縁、口縁部有段ないしは帯縄文沈線区画（B・C類）の椀形土器を視点とすることができる。宮ノ台式終末段階の様相については、各地域明確になりつつあるが、市原台地周辺地域では、菊間遺跡、大厩遺跡を代表とすることができる。これら諸要素のうち、壺形土器の帯縄文2帯、沈線区画、山形縄文帯、甕形土器Ba・Bb・C垂1類は、甕形土器口唇部の表裏指頭押捺波状、交互押捺と伴出する。これに対して、壺形土器口縁部形態A・B類、甕形土器A類の成立は段階として遅れ、甕形土器口唇部交互押捺への変換と一致する可能性が高い（註22）。その成立段階は、椎津茶ノ木遺跡123号遺構にみることができる（第188図）（木對1992）。甕形土器はC垂1類を主体とし、A類を含む。口唇部は、表裏押捺波状、交互押捺が伴出している。壺形土器は、口縁部形態A類、帯縄文沈線区画、充填羽状の山形縄文帯とともに、結節文帯が認められる（註23）。全体としては過渡的な内容を持ち、上記諸要素の出現過程をみることができる。ここではその一体的な成立をもって、宮ノ台式とⅠ式を区分しておきたい（註24）。

市原台地では菊間遺跡第10・18・28号住居址（第187図）、大厩遺跡Y-55号址、南向原遺跡3号住居址（田中1976）、千草山遺跡第131号住居跡（田中1989）、山田橋大山台遺跡48号竪穴等を標式資料としてⅠ1式（菊間段階）を設定しておく。甕形土器は、長胴の深鉢形を呈し、各形式がみられるものの、C垂1類が特徴的に認められる。壺形土器については、現状で不明な点が多い。口縁部形態Da類口頸部文様E類、菊間遺跡第18号住居址の受口状口縁など宮ノ台式に列なるものを確実に含む。千草山遺跡第131号住居跡、君津市本名輪遺跡7号住居址（平野1986）では、Ⅰ2式と共通する内容も認められるが、いずれも破片資料であり、現状では、宮ノ台式との関係を別にすると、この段階固有の特徴は抽出しにくい（註25）。椀形土器は、A・C類が認められ、半球形ないしは無頸壺状など、口縁部径が収縮したものが中心となる。

Ⅰ2式（坊作段階）

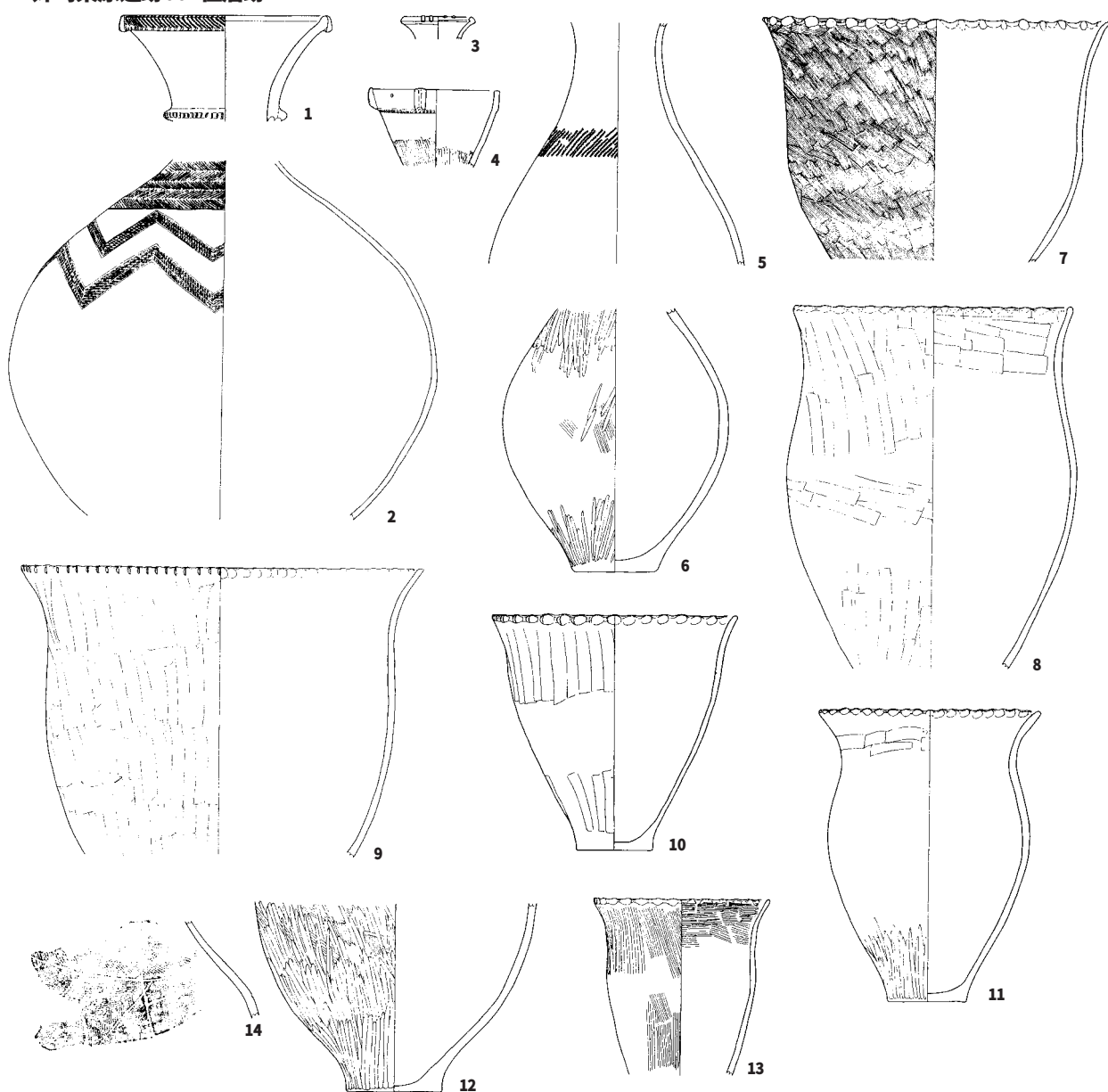
坊作遺跡を標式とする段階である。古・新段階に細別され、古段階は、坊作遺跡206・221・232号住居跡、唐崎台遺跡第10-A号住居址、東官台遺跡002住居跡（高橋1994a）、小田部新地遺跡14号遺構（山口1984）、新段階は、坊作遺跡230号住居跡、釜神遺跡158・159A号住居跡、御林跡遺跡120号遺構（木對2004）、草刈遺跡A区9・11号跡などを代表とする。

壺形土器は、口頸部文様E類をのぞくと、沈線区画の帯縄文2帯と山形縄文帯による画一的な構成をもつ。口縁部形態は、各類から構成されるが、とくにA1・B1類が特徴的に認められる。A1類は、粘土紐を多段に貼付け、複合部施文面の下部への拡張が明確である。C類は、御林跡遺跡120号遺構例（第183図9）（木對2004）のCb1類など、新段階に散見することができるものの、Ⅰ式においては主たる構成要素とならない。

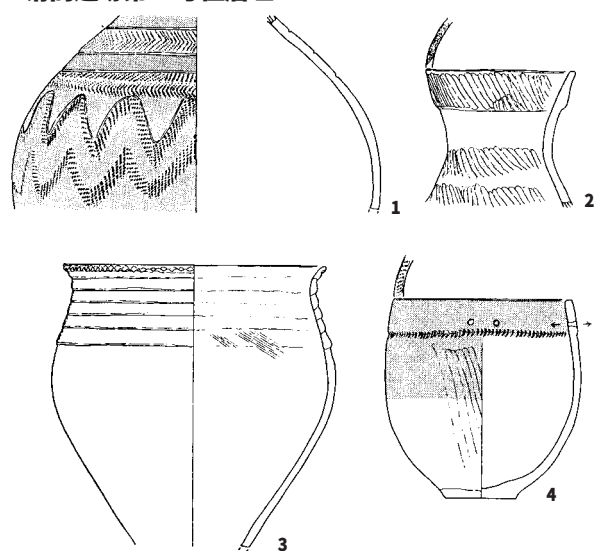
頸胴部文様帯は、前述したように器形変化に連動するが、この段階は、長頸でなで肩の胴上半部を最大限利用し幅広の加飾面を構成する。とくに古段階は、口頸部文様位置A類を基本とし、振幅が大きい山形縄文帯を描く。新段階になると、草刈遺跡A区11号跡例（第186図101）など、頸部の屈曲、胴部の球形化を指向する器形変化にともない、山形縄文帯の振幅も限定されてくる。なお、新段階には、山形縄文帯下部に文様帯構成Ⅲ区c5区の帯縄文を追加する例が散見される。

甕形土器は、Ⅰ1式の深鉢形に対して、急速に短胴化をとげ、新段階には、口縁部径、器高をほぼ一致させるようになる。支脚形土器の出現も、Ⅰ2式新段階に遡る可能性がある。市原台地周辺地域

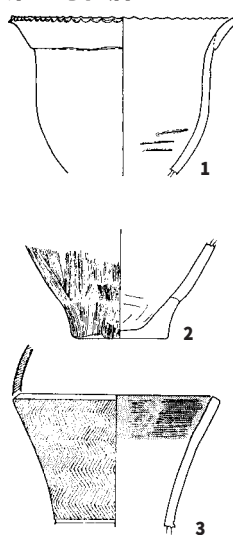
姉崎東原遺跡007住居跡



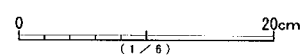
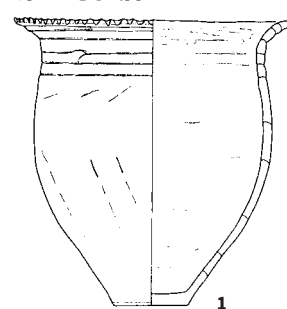
菊間遺跡第18号住居址



第10号住居址

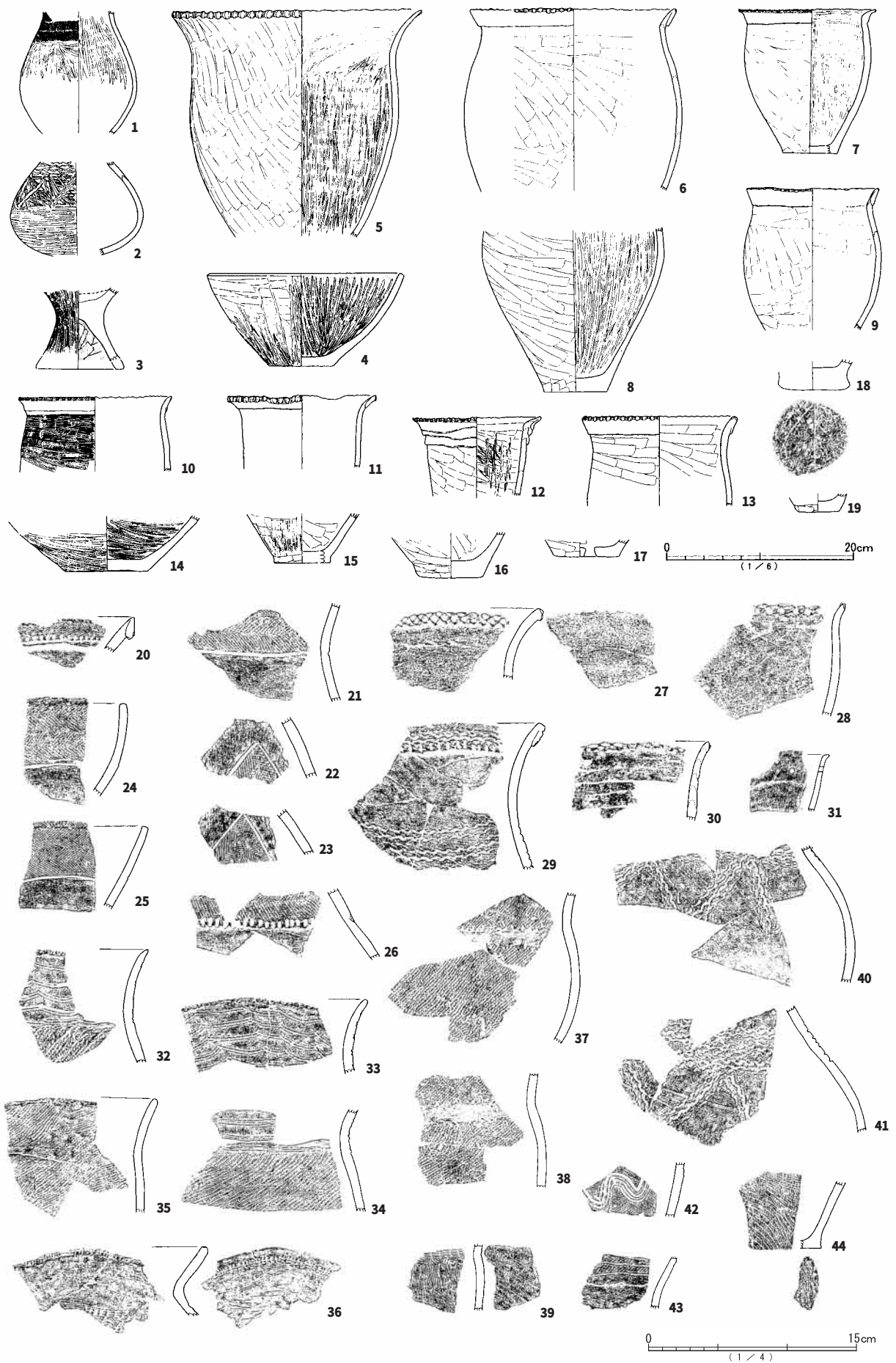


第28号住居址



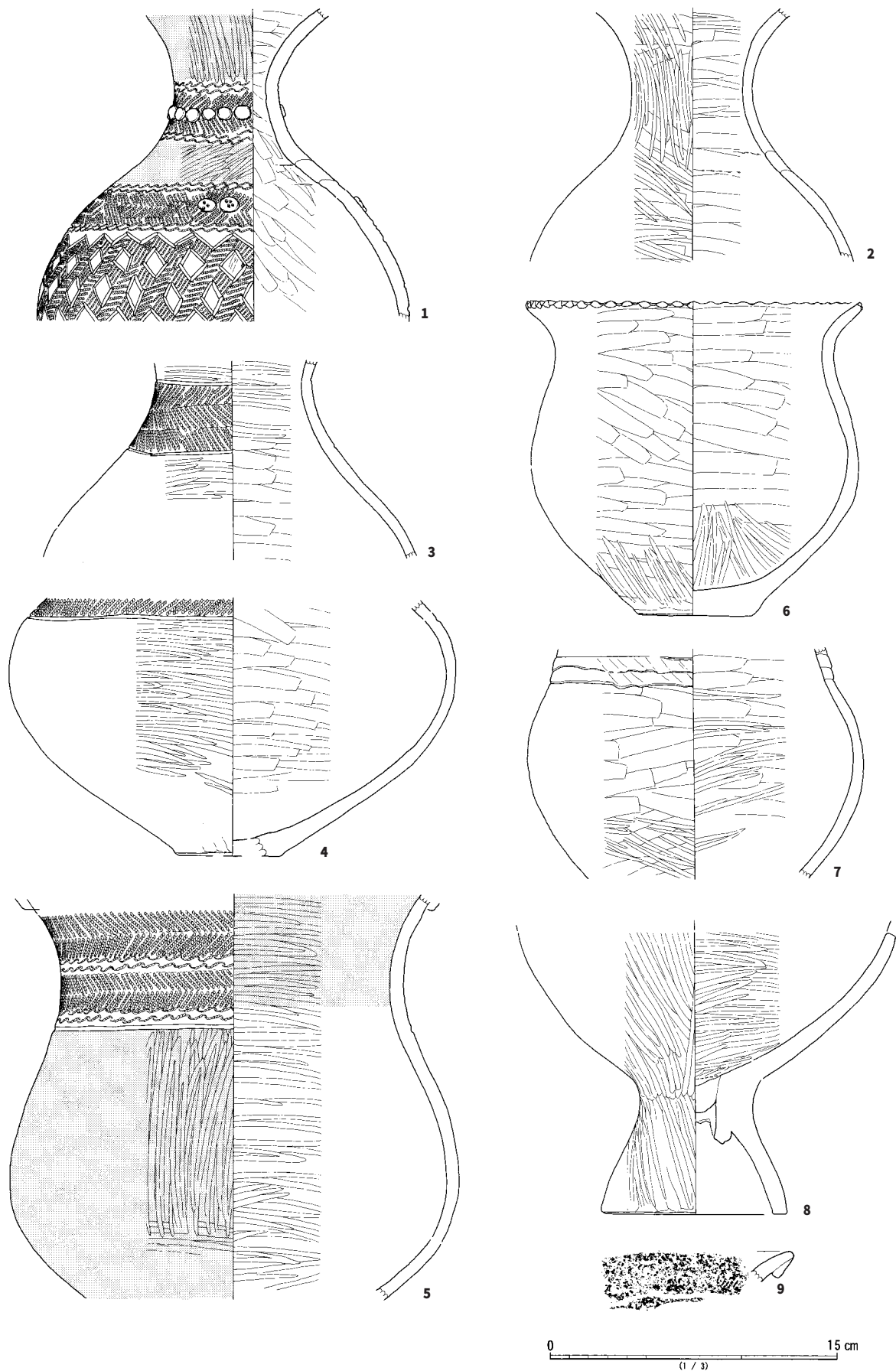
第187図 市原市姉崎東原遺跡、菊間遺跡出土土器

123号遺構（竪穴住居跡）



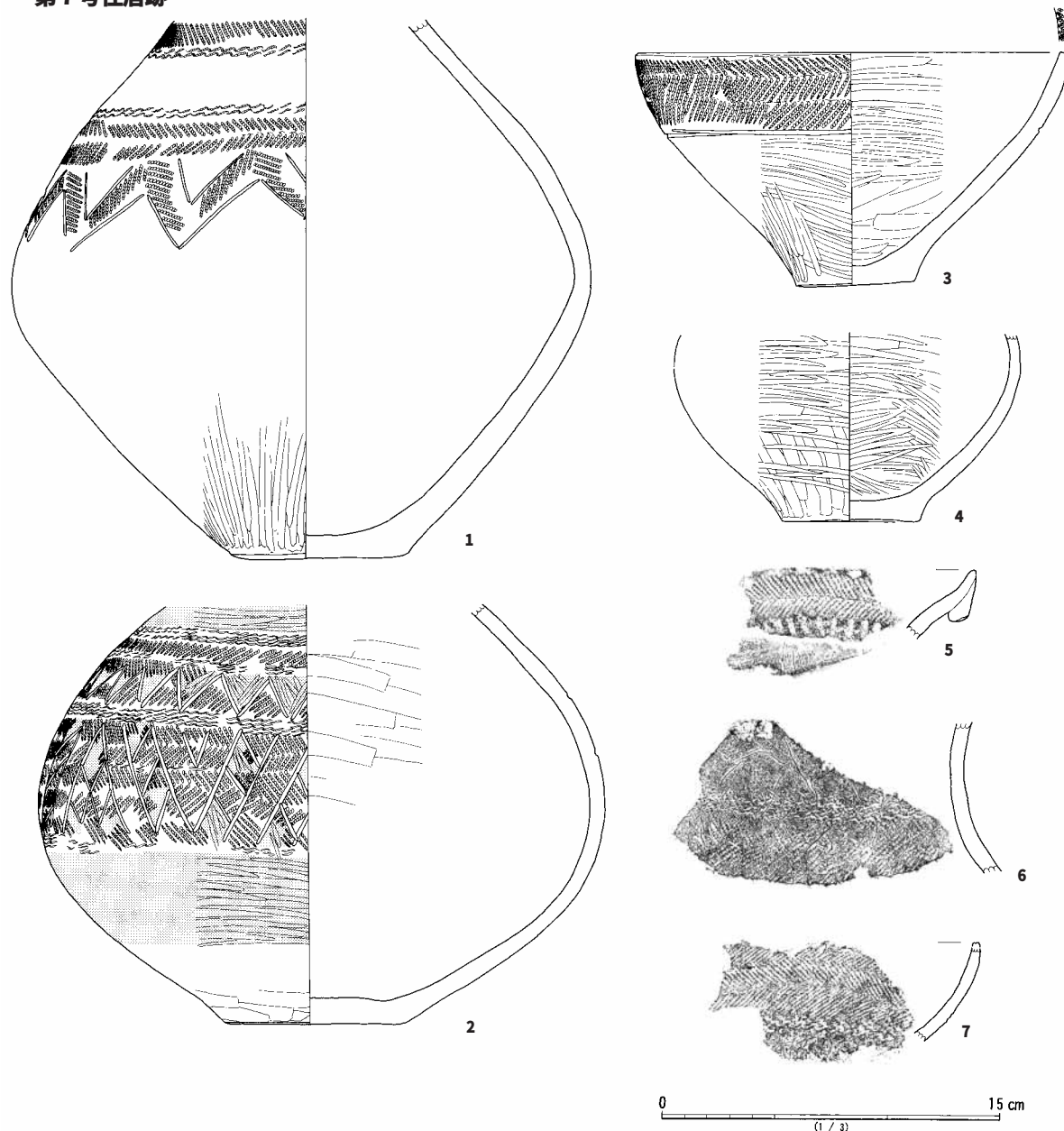
第188図 市原市椎津茶ノ木遺跡出土土器

第4号住居跡



第189図 市原市（山田橋遺跡群）東千草山遺跡出土土器（1）

第7号住居跡



第190図 市原市（山田橋遺跡群）東千草山遺跡出土土器（2）

では、Ab・Ba・Bb類が同比率でほぼ全体を占めるが、東京湾岸地域における地域的な組成比率の変化は、少なくともⅠ2式古段階には生成する。富津市打越遺跡（酒巻1992）では、Ab類が明らかに主体化する。垂1類については、Bb類のなかで系譜を保つ。

広口壺はA類、椀・高杯形土器はA・C類から構成される。とくに高杯形土器は、A垂類が特徴的に認められ（第185図78・79）、幅広の口縁端部をもつ。椀形土器は、各段階をとおして無文例の増加とともに、器形的には体部が外傾化していく傾向が認められるが、坊作遺跡192号住居跡では、半球状のもの皿状のものが伴出し、分化が認められる。

Ⅱ1式（山田橋段階）

山田橋遺跡群を標式とする。とくに、山田橋大山台遺跡36・49・52号竪穴、東千草山遺跡第4号住

居跡と、土宇遺跡第8号住居址、今富新山遺跡061号（石倉・新田・高梨1999）などを基準資料として明示しておく。袖ヶ浦市域では、文協遺跡215号住居跡（第192図）が標式的内容をもつ。Ⅱ式は結節区画の成立を様式的な特徴とするが、この段階は沈線区画との変換過渡期にあたる。

壺形土器口縁部形態は、A2類、B2類を主体とするが、とくに、A2類がこの段階の指標的な特徴となる。C類も、Ca1・2、Cb1・2類が確実にこの段階を構成し、土宇遺跡第8・110号住居址にみられる、A類複合面の上部へ拡張例（亜類）も、C類に連動するものと理解される。C類は、受口状口縁との関係から、Ⅰ式からの連続的な系譜を否定することとはできないが、実態としては、この段階における周辺地域の影響を評価する必要がある（註26）。とくに、袖ヶ浦市域では、文協遺跡、下向山遺跡など、この段階以降C類が主体化していく。なお、この段階のB2類に、複合部への施文例が散見される。ただし、これが一般化していくのはⅡ2式段階である。

この段階の壺形土器は、頸部の屈曲が進むことによって口頸部文様位置はB類が特徴的に認められ、山田橋大山台遺跡49号竪穴、東千草山遺跡第4号住居跡など、頸部が極端に収縮した細頸の壺形土器がみられる。また、山田橋大山台遺跡89号竪穴、土宇遺跡第8号住居址など、頸部屈曲点、帯縄文下部に段部を形成するものもⅡ1式に初現する（口頸部文様位置C亜類）。これは、広口壺形土器C類が主体化していくことと連動する可能性が高い。山形縄文帯は、単斜縄文を主体とするが、帯縄文区画の変更にともない、とくに市原台地周辺域では、山形縄文帯は客体化していく。山田橋大山台遺跡52号竪穴など、この段階に横連続施文による「磨消縄文」が出現する可能性もある。

甕形土器は、口縁部径、胴部径、器高をほぼ一致させてくる。Ⅰ2式と比較して口縁部の屈曲は弱くなり、段部下端を基準とする口頸部高が拡大する。市原台地周辺地域では、A類の組成比率は明らかに減少し、Ba・Bb類が主体化する。口縁部有段の亜類は、各段階に散見されるものの、この段階には客体化している。支脚形土器は、確実に認められる。

椀・高杯形土器の帯縄文区画も、A類からB類に移行する。ただ、当該地域では、全体のなかでC類の比率が拡大する。高杯形土器自体の組成比率は漸次減少していく可能性がある。

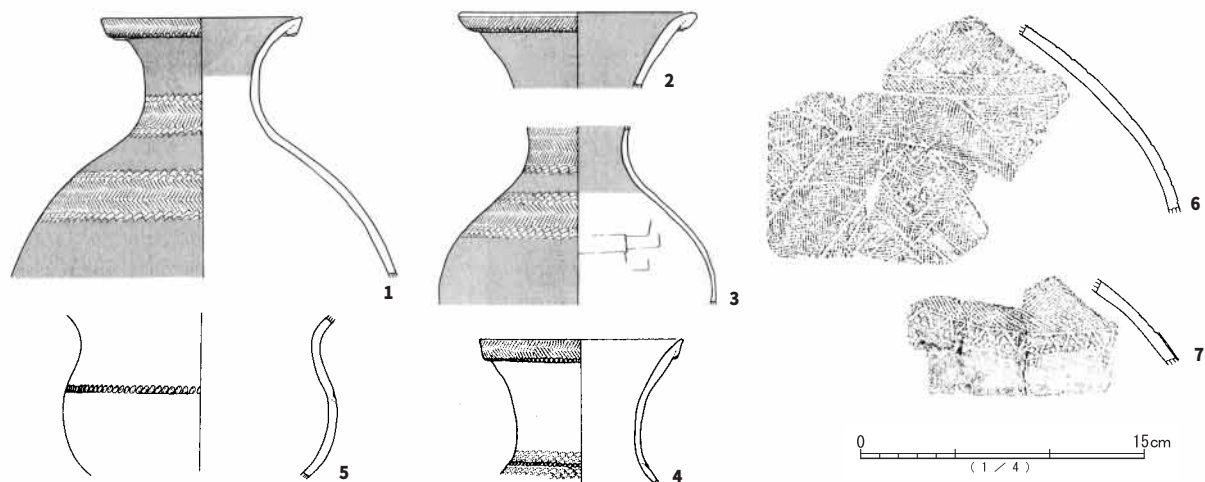
Ⅱ2式（山田橋段階）

山田橋遺跡群を標式とする。古・新段階に細別される。古段階は、山田橋大山台遺跡37・96・116号竪穴、唐崎台遺跡第42-B号住居址、草刈遺跡B区229A号址（第191図）、六孫王原遺跡83号住居跡A（半田1997b）、袖ヶ浦市域では文協遺跡200号住居跡（第192図）、新段階は、山田橋表通遺跡46号遺構（第191図）（蜂屋・小橋1999）、唐崎台遺跡第41号住居址（第191図）（註27）を基準資料として明示しておく。

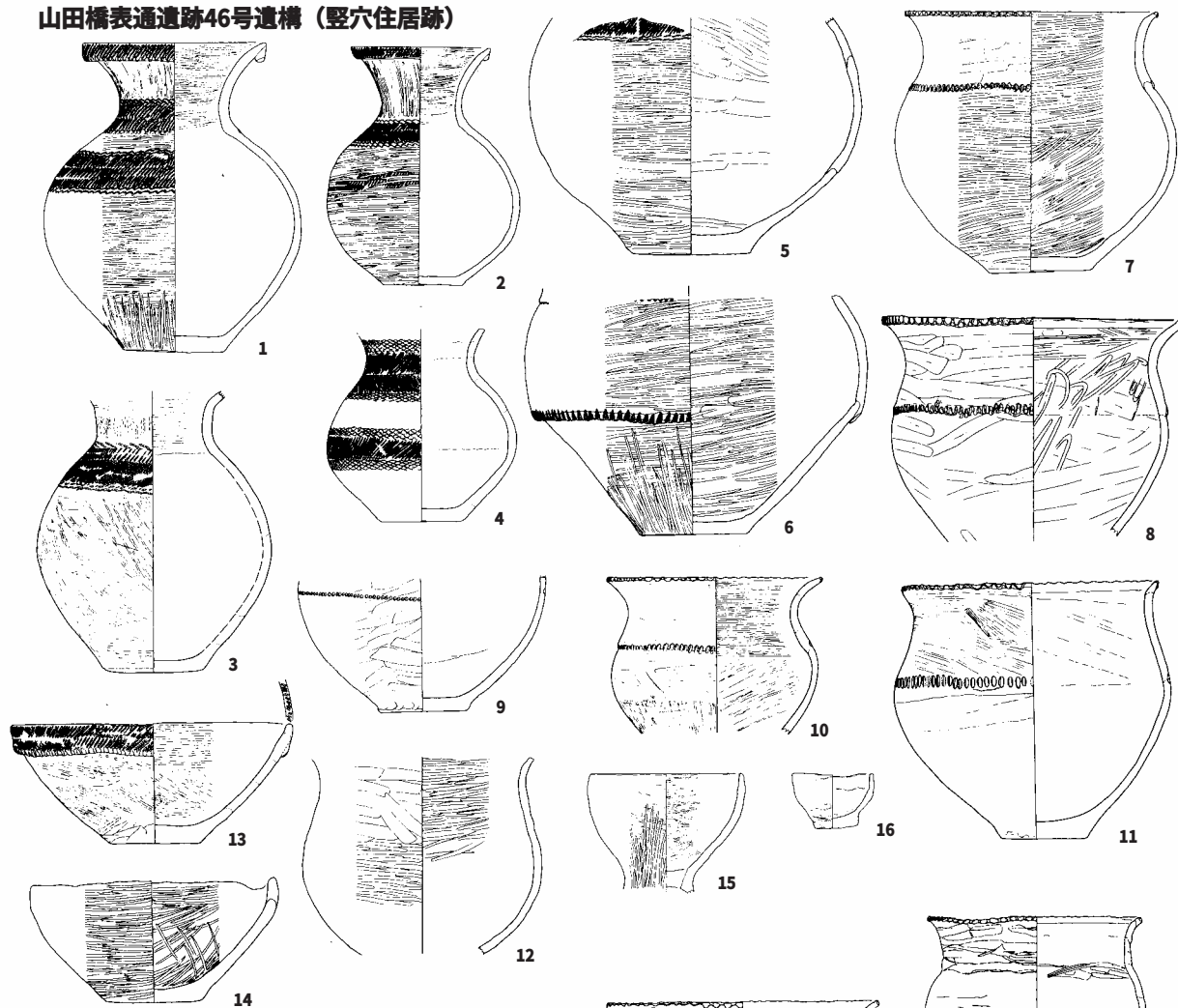
壺形土器帯縄文区画は、結節区画にほぼ限定される。帯縄文は、各段階をとおして2帯を基本とするが、山田橋表通遺跡46号遺構にみられるように、新段階には1帯化への傾向が認められる。壺形土器口縁部形態は、とくに市原台地周辺域では、A3類がこの段階の指標的な特徴となる。C類は、Ca2・Cb2・3類が主体となるが、Ca類は新段階には認めにくい。B2類は、複合部への施文例が増加し、A3類、B2類、Cb3類の区分は不明確化していく。一体化する過程は、次段階のTB2式（鴨居上ノ台式）に明確となる。口頸部文様位置はA（A亜類）・D類へ移行し、とくに新段階は、胴部の球形化とともに、口縁部高の縮小が認められる。

Ⅲ区幾何学文様系土器については、前述したように、比較的初現的構成と考える山田橋大山台遺跡37

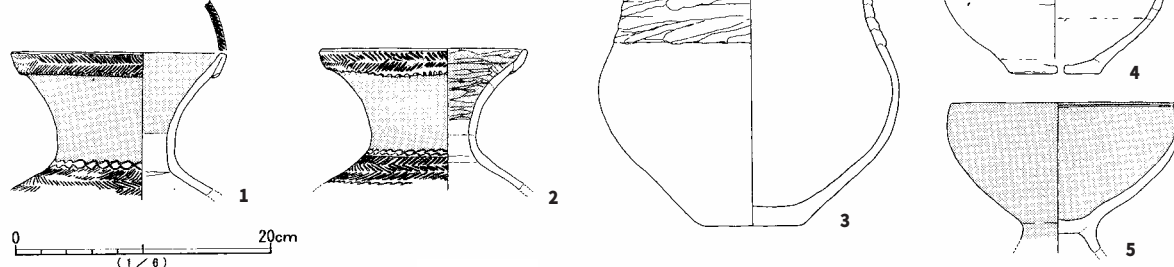
草刈遺跡B区229A号址（竪穴住居跡）



山田橋表通遺跡46号遺構（竪穴住居跡）

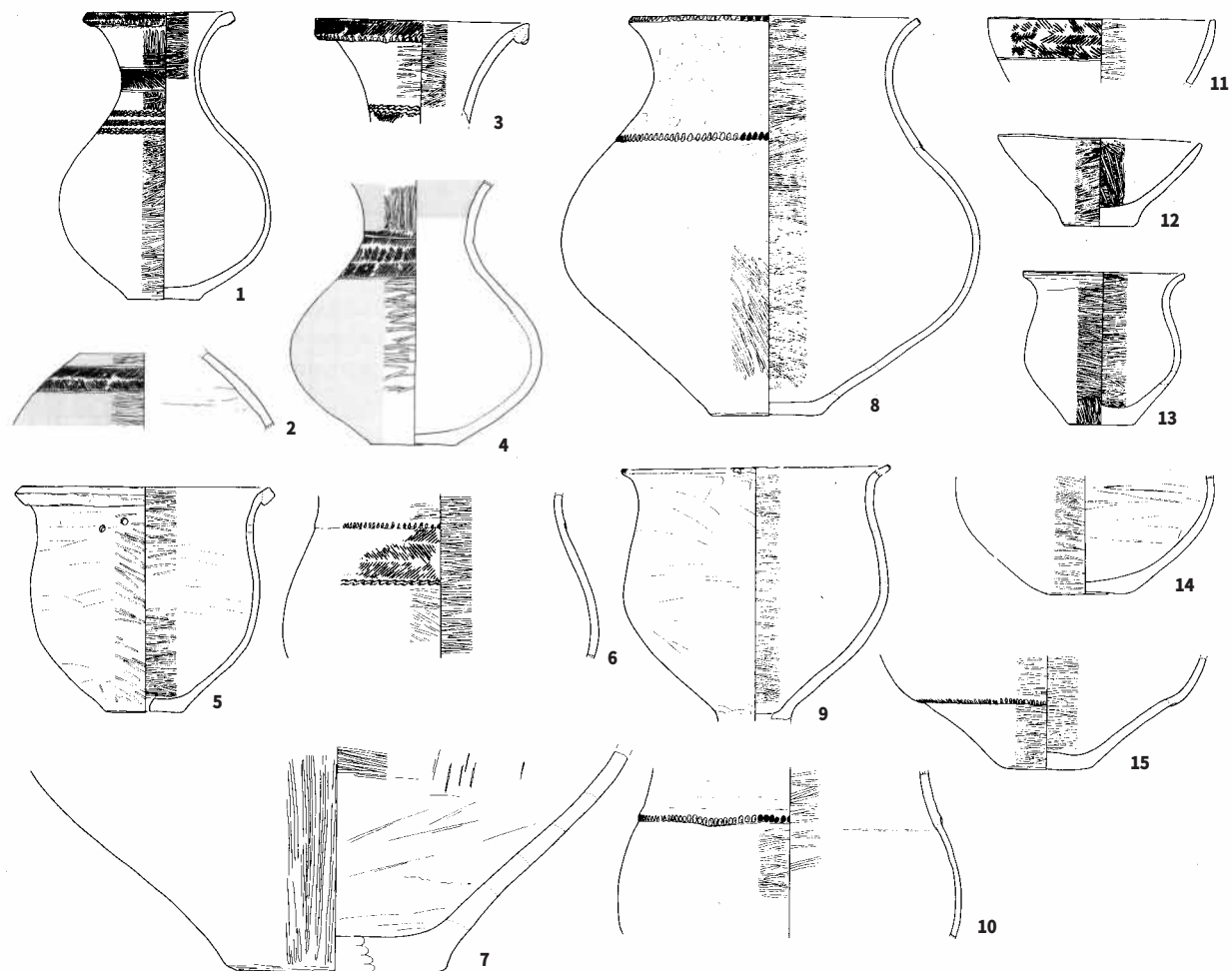


唐崎台遺跡第41号住居址

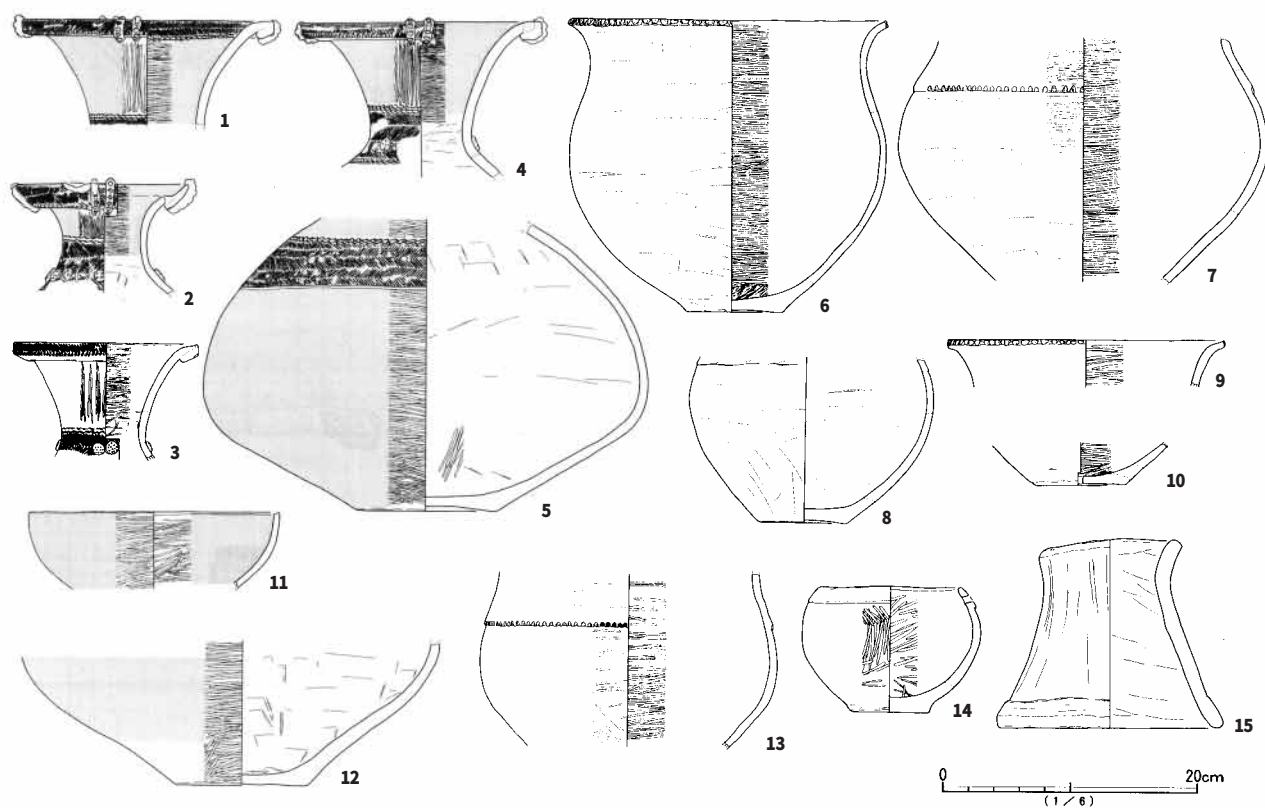


第191図 市原市草刈遺跡、山田橋遺跡群山田橋表通遺跡、唐崎台遺跡出土土器

215号住居跡



200号住居跡



第192図 袖ヶ浦市文協遺跡出土土器

号竪穴、文脇遺跡207号住居跡例ともこの段階を遡らない。幾何学文様自体は、Ⅱ1式に出現する可能性が高いものの、Ⅲ区文様帯の形成は、Ⅱ2式およびそれ以降にほぼ限定される。

甕形土器は、最大径が口縁部から胴部径に移行する。新段階の山田橋表通遺跡46号遺構には、口頸部径が収縮し、これに対応して口縁部高を縮小させる例もみられるが、明確な器形変化は、次段階への移行過程に認められる。

広口壺形土器、椀形土器は、無文のものが増加する傾向が認められる。

4. 型式編年の大枠 久ヶ原式・山田橋式

前述したように、今回の作業は、山田橋遺跡群、国分寺台遺跡群を含む市原台地、市原市域の遺跡群を解析するための時間軸の設定を主たる目的としたものである。対象とした、市原台地に固有の地域性を結果として反映したものではあるが、作業としては、地域性の追求を主眼としたものではなく、東京湾沿岸地域において、基軸を構成する諸要素の定性的な変化の追求を意図している。当然、定性的な変化の過程においても、地域性が発現する可能性は否定しないが、東京湾沿岸地域における地域性は、母胎となる諸要素ごとの、地理的傾斜にもとづく定量的な変化としてとらえられるものと思われる。これは、とくにⅡ式期に顕著となる。

ここでは、Ⅰ式の固有名称として「久ヶ原式」を冠し、久ヶ原1式（菊間段階）、久ヶ原2式（坊作段階）古段階・新段階に編成しておきたい。この段階は、久ヶ原式の成立にかかわる比田井克仁の論考などを参照するならば（比田井2003）、東京湾岸地域内で比較的安定した内容が復原され、Ⅰ式に一定の地域的な有効性を認めうるものと考ええる。久ヶ原式について、ここで改めて学史的な検討は行わないが、Ⅰ式には、Ⅰ1式に異論を残すものの、久ヶ原式の最小公約数的な内容を見るのが可能である。

Ⅱ式は、とくに地域性が問題となる段階であるが、具体的な検証をおこなってはいないこともあり、ここでは、「山田橋式」を仮設的に使用し、山田橋1式、山田橋2式古段階・新段階に編成しておく。ただし、これは小型式の分立を構想としているわけではない（註28）。特定の遺跡名が、特定地域を印象付けるものであるとするならば、すでに古典化した「久ヶ原式」を一括してもちいることが適当であると考ええる。しかし、型式名の拡大解釈は、過去かならずしも受け入れられていないことから、ここでは、久ヶ原式を限定的に使用しておくこととしたい（註29）。いずれにせよ、その編年的な適用には、東京湾岸地域内における空間的構造に対する理解の提示が必要となる（註30）。

註

- (1) 当該地域における、1990年代以降の編年研究としては、陣内康光（1991）、加藤修司（1992）、諸墨知義（1993）、大村直（1993）、松本完（1993）、田中清美（1993）、土器B研究班（小沢・諸墨）（1996）、酒巻忠史（1996）、安藤広道（1996）、甲斐忠彦（2000）などがある。とくに、時間軸として最も基礎となるべき土器編年研究が、近年、膨大な資料を障害とし停滞しているなかで、財団法人君津郡市文化財センター（1996）の研究成果は、調査研究機関の今後の役割を考える上でも重要である。
- (2) ここでは、時期区分の境界は問題としない。ただ、「後期」は、「東郷式」、「穂積式」を学史的な根拠とする広域編年網に対する基準であり、地域における型式変化とはそもそも異なる段階の区分である。また、近々当該地域の中・後期の境界に修正が加えられる可能性もあり、今回対象とする型式区分の呼称としては不適当である。

- (3) 房総半島太平洋沿岸地域も、おそらく一体となる地域と推定されるが、現状の資料的制約、遺跡の密度等から、東京湾岸地域を主要対象地域とする。
- (4) 東京湾岸地域内の地域性の構造は、同時期の相模、南武蔵とは明らかに異なる構造をもつ。これは、「ニッ池式」(黒沢2003)といった小地域型式の分立として把握されるべきものではなく、地域性を構成する諸要素の多くは、形式ごとの段階的な定量的変化として理解される。地域性の検証は、本書の性格を逸脱するものであり、ここではあまり立ち入らないが、東京湾岸地域の型式設定は、空間的構造に対する理解を明示する必要があると考える。
- (5) 壺形土器口縁部各類のうち、B類は、東部東海から関東にいたる広域のなかで、ほぼ同時期に出現することが想定されている。B類は、菊間遺跡第18号住居址(第187図)例など、宮ノ台式における受口状口縁内面屈曲の鈍化したもの、あるいは口縁部下段部に類縁性をみることができが、これらは宮ノ台式終末段階に限定されるものではない。直接的な系譜は、姉崎東原遺跡007住居跡(第187図1)(高橋1990)、あるいは、静岡市瀬名遺跡SR51301(中山・中鉢1994)など、各地域の中期末前後に認めることができる口縁端部の拡張肥厚を端緒とする。A類のうちA1類の垂下口縁については、類似形状を伊勢湾沿岸地域などにみることができが、直接的な関係は認めにくい。
- (6) 口縁部文様位置E類は、菊間遺跡第10号住居址(第187図3)、大厩遺跡Y-60号址(第183図10)、釜神遺跡114号住居跡(第183図11)など、沈線区画との組み合わせ例が多い。系譜的には、祇園原貝塚12号住居(忍澤1999)など終末期段階におよぶが、結節区画は、山田橋大山台遺跡51号堅穴(第183図20)、草刈遺跡(市セ調査)20号住居跡(高橋1985)などで散見できるにすぎない。しかし、市原台地以南の地域では、段押捺区画、結節区画によるものも多く、その出現頻度には地域差が認められる(文様研究班(小沢・黒澤・今坂)1996)。なお、E類は、口縁部形態D類との組み合わせを主体とするが、唐崎台遺跡第55号住居址例など、口縁部に折返し口縁状の押捺段部をもつものがあり、A・B類にも対応する。口縁部文様位置E類における口縁部形態D類は、Da類からDb類へ推移する傾向が認められる。
- (7) 本遺跡例は、軸縄の痕跡が明瞭ではなく不確定であるが、坊作遺跡では、帯縄文の地文として一定量認められる。東京湾岸地域全体としての広がり確認できないが、時期的な特徴を示す可能性がある。ただし、坊作遺跡の網目状捺糸文ないし付加条3種は、単軸絡条体第5類Aを基本とし、付加条は1段の縄による比較的太いものも認められるが、細い0段の条が多い。他時期例との識別は難しい。
- なお、山田橋大山台遺跡14・20・30号堅穴にみられる、網目状捺糸文、結節文を地文とする幾何学文様帯は、房総半島南部地域の影響によるものと推定される。これは、Ⅱ1～Ⅱ2式古段階に伴出する。
- (8) 「充填」は、施文順序からいうと、かならずしも適当な用語ではない。
- (9) 東千草山遺跡第4・7号住居址出土土器は(第189・190図)、今回再実測を行った。
- (10) 単斜縄文による充填は、東官台遺跡002住居跡(高橋1994a)、唐崎台遺跡第45-A号住居址例など、後述するⅠ式期にもみることができ。この段階には、菊間遺跡第18号住居址など、多帯になるものがある。とくに、振幅が広く、縄文帯が狭いもの、帯縄文から一定間隔をおいて配置されるものには、Ⅰ式においても古く位置付けられるものがある。時期的な傾向をより細かくみるならば、1・2類(Ⅰ1・Ⅰ2式古)から、1類(Ⅰ2式新)、2類(Ⅱ1式)、3類(Ⅱ2式)へ移行する可能性がある。
- (11) 健田遺跡、鴨川市根方上ノ芝条里跡F地点SD1(野中・杉山他2000)などにみられるⅠ区間帯(c2区)の重菱形文(重四角文)、重山形文については、後述する幾何学文の成立に関連するものと推定される。しかし、そのかわりの仕方は問題を残す。
- 太平洋沿岸各地域の状況は判然としないが、現状で房総半島南部地域は、東京湾沿岸地域の漸移的な地域性とは異なる、比較的独自の地域性をもつ。しかし、これをもって東京湾沿岸地域の地域性の性格を代表させることはできない。
- (12) 弥生時代終末期段階から古墳時代前期に比定されるものには、神奈川県横浜市横浜道高速2号線No.6遺跡2号方形周溝墓(第186図111)、大厩遺跡5号墳(第186図115)の他に、富津市東天王台遺跡住居址No.5(山下1984)、佐倉市高岡大山遺跡322号住居址(宮内・大沢・阿部他1993)、木更津市東谷遺跡第11号墳(西原・桐山2002)、木更津市林遺跡(能城1994)、草刈六之台遺跡113号住居(白井・田島他1994)各出土例などがある。
- (13) 縦区画文も、房総半島南部地域を起源とする可能性が考えられる。
- (14) 坊作遺跡は、後述するようにⅠ式期の集落であるが、ここでの輪積み装飾の甕形土器の大半は、段部

に横方向のヘラナデを加えており、頂部は平坦化している。

なお、坊作遺跡の甕形土器の特徴としては、ミガキを加える例が少ないように思われる。

- (15) 山田橋大山台遺跡39号竪穴1の口唇部は、単位は細かいものの表裏指頭押捺による。胴部整形も擦痕状のハケで、宮ノ台式の特徴を残す。
- (16) 坊作遺跡の甕形土器の口唇部には、山田橋大山台遺跡40号竪穴3、49号竪穴7・8（図版80）などと類似する、上端部を残し平縁となるものが比較的多数認められる。これには、上下凹部がともに切り込みによると推定されるものがある。
- (17) 椀形土器と高杯形土器の比率自体は、椀形土器が圧倒的に多い。終末期段階になってその組成比率は逆転する。
- (18) 「限定」は、それぞれの区画のみを出土した竪穴を対象としたことを示す。第182図の「含む」は、両者が共伴する竪穴をも対象とし、この場合、沈線・結節区画それぞれに加算している。
- ただ、竪穴住居単位の出土量は、各遺跡とも総じて少なく、遺存土器、床面出土土器に限定することができない。したがって、この集計には、半規格品としての土器そのもののもつ「誤差」とともに、廃棄時期差による「誤差」を含む。
- なお、山田橋遺跡群と坊作遺跡については、分類可能な報告資料すべてを対象としているが、他の遺跡は、拓本断面図を除外している。
- (19) 一軒の竪穴住居跡で複数の個体を対象とした場合、他器種の集計は重複することとなるが、今回はこれを除外していない。
- (20) なお、壺形土器口縁部形態大別A・B・C類の組成比は、竪穴単位集成と、個体単位集成では明らかに異なる数値を示しているが、これは、母数そのものが限られていることと、個体単位集成では、袖ヶ浦地域の遺跡を含んでいることによるものと考えられる。広口壺形土器についても、異なる結果を示している。
- (21) 房総半島南部地域での、沈線区画、結節文の消長は、問題を残している。
- (22) A類の垂下口縁の初現期の例としては、向原台遺跡82号住居跡例をあげることができる（高橋2002）。伴出土器は少ないが、つまみ出しによる貼付け浮文をもち、複合部施文部への赤彩が認められるなど、後期段階とは異なる内容をもつ。
- (23) 椎津茶ノ木遺跡123号遺構には、さらに、多系的な内容が認められる。32～35・37・38・44は、佐野原1式であり、口縁部に2本を単位とする振幅の浅い連弧文を描くもの、頸部に幅の狭い無文帯をもつ縄文施文の土器がある。また、38・39・43は、中部高地系であり、等間隔止めの簾状文、波状文が認められる。これらは、久ヶ原式成立期を広域編年に位置付けることを可能にするものである。詳細は、改めて問題としたい。
- (24) 松本完によるⅠ期に対応する（松本1993）。この場合、黒沢浩による宮ノ台式B7期（菊間4期、大厩4期）（黒沢1997・1998）の大半は、宮ノ台式から分離されることとなる。
- (25) A1類にみられるような装飾性の強化は、Ⅰ2式古段階に顕著となる可能性がある。なお、山田橋大山台遺跡では、39・48号竪穴がこの段階に比定される可能性があるが判断が難しい。
- (26) 地域的にみても、市原台地に比して、袖ヶ浦台地の文脇遺跡、下向山遺跡での組成比率が明らかに高い。
- (27) 唐崎台遺跡第41号住居址例は、前稿でTB2式に比定したが（大村1994）、ここではⅡ2式新段階に変更しておく。
- (28) 型式は、時間的な分類単位であるとともに、地域的な分類単位でもある。資料の一定程度の蓄積を前提とするならば、空間的な細別化は、時間的な分類基準としての精度を高めることにつながる。しかしこのことが、空間的な構造理解の妨げになる場合もある。
- (29) 型式（様式）の呼称については、固有名詞を冠する必要があるとする立場にもとづく。とくに1980年代以降、土器編年においても、時期区分や実年代を冠した段階設定が行われてきたが、現状では、時期区分や実年代自体が見直されることによって、使用しがたいものとなっている。
- (30) 東京湾岸地域の地域性の問題、周辺地域との併行関係については別稿で詳述する（『史館』第33号（2004年刊行予定））。
- (31) 編年表（第183図～第186図） 1坊作遺跡232号住居跡（小出2002）、2坊作遺跡221号住居跡、3坊作遺跡218号住居跡、4坊作遺跡212号住居跡、5坊作遺跡215号住居跡、6坊作遺跡232号住居跡、7草刈遺跡A

区9号跡（小久貫1983）、8郡本遺跡4号遺構（木對1987）、9御林跡遺跡120号遺構（木對2004）、10大厩遺跡Y-60号址（三森・阪田1974）、11釜神遺跡114号住居跡（田中2002）、12山田橋大山台遺跡36号竪穴、13土宇遺跡第8号住居址（柿沼他1979）、14今富新山遺跡061号（石倉・新田・高梨1999）、15山田橋大山台遺跡85号竪穴、16山田橋大山台遺跡10号竪穴、17山田橋大山台遺跡89号竪穴、18山田橋表通遺跡第027号跡（蜂屋・小橋1999）、19土宇遺跡第8号住居址、20山田橋大山台遺跡51号竪穴、21山田橋大山台遺跡110号竪穴、22山田橋大山台遺跡97号竪穴、23山田橋大山台遺跡42号竪穴、24草刈遺跡B区440号跡、25山田橋大山台遺跡30号竪穴、26山田橋大山台遺跡37号竪穴、27草刈遺跡B区436号跡（高田1986）、28山田橋大山台遺跡116号竪穴、29唐崎台遺跡第42-B号住居址（田中・鈴木1981）、30山田橋大山台遺跡37号竪穴、31山田橋大山台遺跡114号竪穴、32山田橋表通遺跡第046号跡、33唐崎台遺跡第41号住居址、34唐崎台遺跡第41号住居址、35草刈遺跡（市セ調査）22号住居址（高橋1985）、36祇園原貝塚21号住居（忍澤1999）、37大厩遺跡Y-31号址、38菊間遺跡第28号住居址（斉木・種田・菊池1974）、39菊間遺跡第10号住居址、40南向原遺跡2号住居址（田中1976）、41菊間遺跡第25号住居址、42坊作遺跡232号住居跡、43大厩遺跡Y-20号址、44坊作遺跡204号住居跡、45坊作遺跡221号住居跡、46唐崎台遺跡第9号住居址、47小田部新地遺跡14号遺構（山口1984）、48福増山ノ神遺跡6号住居跡（浅利1989a）、49坊作遺跡215号住居跡、50坊作遺跡204号住居跡、51坊作遺跡230号住居跡、52唐崎台遺跡第10-A号住居址、53坊作遺跡204号住居跡、54坊作遺跡230号住居跡、55山田橋大山台遺跡49号竪穴、56山田橋大山台遺跡12号竪穴、57山田橋大山台遺跡31号竪穴、58山田橋大山台遺跡51号竪穴、59山田橋大山台遺跡37号竪穴、60山田橋大山台遺跡46号竪穴、61山田橋表通遺跡第46号跡、62草刈遺跡（市セ調査）22号住居址、63唐崎台遺跡第24号住居址、64下鈴野遺跡34号住居跡（大村1987）、65大厩遺跡Y-47号址、66菊間遺跡第2号周溝、67唐崎台遺跡第1号住居址、68大厩遺跡Y-20号址、69土宇遺跡第17号住居址、70山田橋大山台遺跡93号竪穴、71東千草山遺跡第4号住居跡、72山田橋大山台遺跡63号竪穴、73山田橋大山台遺跡116号竪穴、74山田橋大山台遺跡116号竪穴、75大厩遺跡Y-4号址、76大厩遺跡Y-31号址、77祇園原貝塚Grid、78小田部新地遺跡14号遺構、79坊作遺跡230号住居跡、80釜神遺跡169号住居跡、81福増山ノ神遺跡6号住居跡、82大厩遺跡Y-20号址、83小田部新地遺跡14号遺構、84小田部新地遺跡14号遺構、85山田橋大山台遺跡49号竪穴、86山田橋大山台遺跡31号竪穴、87草刈六之台遺跡3号周溝内・旧表土、88山田橋大山台遺跡63号竪穴、89山田橋大山台遺跡93号竪穴、90山田橋大山台遺跡115号竪穴、91山田橋表通遺跡第046号跡、92山田橋大山台遺跡52号竪穴、93山田橋大山台遺跡51号竪穴、94山田橋大山台遺跡44号竪穴、95山田橋大山台遺跡93号竪穴、96山田橋大山台遺跡114号竪穴、97南祇園原遺跡201号住居跡、98祇園原貝塚34号住居、99富津市打越遺跡18号住（酒巻1992）、100雪解沢遺跡Y-1号跡（金丸1984）、101草刈遺跡A区11号跡、102山田橋大山台遺跡49号竪穴、103東千草山遺跡第4号住居跡、104木更津市大山台遺跡SF005（當眞2002）、105山田橋大山台遺跡97号竪穴、106武士遺跡005方形周溝墓（田村・加納・高柳他1996）、107草刈遺跡A区71号跡、108山田橋大山台遺跡37号竪穴、109文脇遺跡207号住居址（山本1992）、110南祇園原遺跡203号住居跡（高橋・櫻井2002）、111神奈川県横浜市横浜市道高速2号線No.6遺跡2号方形周溝墓（岡田・松本・水沢1984）、112神奈川県横浜市二ッ池遺跡第23号住居址（黒沢2003）、113東千草山遺跡第7号住居跡、114東金市道庭遺跡住居址No.1（有沢・石本・小高1983）、115大厩遺跡5号墳

第2節 山田橋遺跡群と周辺集落の動態

1. 市原台地周辺の遺跡群

山田橋遺跡群の形成過程を問題とする前に、市原台地周辺地域の弥生時代集落を概観しておく（第193・194図）。なお、ここでの時期区分（後期）は、前節に従い下記のとおりとする。

1期	久ヶ原1式	（Ⅰ1式）
2期古段階	久ヶ原2式古段階	（Ⅰ2式古段階）
2期新段階	久ヶ原2式新段階	（Ⅰ2式新段階）
3期	山田橋1式	（Ⅱ1式）
4期古段階	山田橋2式古段階	（Ⅱ2式古段階）
4期新段階	山田橋2式新段階	（Ⅱ2式新段階）

房総半島の初期農耕集落の成立は、方形周溝墓を指標とするならば、君津市常代遺跡SZ-134（伊藤・甲斐1996）が池上・中里式段階以前、中期前半に遡る可能性があり、この段階は、武士遺跡などの再葬墓と時期的な接点をもつ。また、袖ヶ浦市向神納里遺跡の方形周溝墓群（稲葉1995）の形成も池上・中里式段階に遡る（石川2000）。現状では、神奈川県小田原市中里遺跡（戸田2000）に比較し得る集落居住域の検出例はないが、東京湾東岸地域においても、本格的な農耕集落の形成が宮ノ台式期以前に遡ることは確実であろう。

市原台地では、白船城跡下層遺跡、菊間遺跡、台遺跡など、現状では宮ノ台式の前半期に、東京湾岸平野部に直接面する台地縁辺部へ集落が進出する。これらの遺跡には、北島式・御新田式の影響が色濃く認められる。初期農耕集落の集落立地の基点が、比較的広い沖積地に面していることは、豊富な可耕地から有利な開墾地点を選択できることによると考えられ、事実、菊間遺跡に近接する市原条里制遺跡（新田1998）では、広範囲におよぶ弥生時代中期の水田跡が検出されている。東京湾岸平野、ないしは養老川、村田川の下流域に直面する台地上は、個々の集落の継続性はともかくとしても、その後にはいたる頻繁な土地利用の痕跡が認められ、「伝統地域」を形成する。また、養老川右岸の山田大宮遺跡、村田川左岸の潤井戸西山遺跡（草刈尾梨遺跡）、中横峰遺跡、鎌之助遺跡など、低位段丘面での検出例が増加しつつあるが、この段階の低地部への占地は、近年南関東地方他地域においても認められる（石川2000）。市原市域では、いまだ低地部での調査事例が乏しいものの、今後遺跡分布が書き換えられる可能性もある。初期農耕集落の占地が台地内の谷部ではなく、沖積平野を指向することは明らかである。

環濠集落については、台遺跡の開削が宮ノ台式前半期に遡る可能性があり、常代遺跡、向神納里遺跡の母村が未確認ではあるものの、袖ヶ浦市西原遺跡（伊藤1999、中能1998）とともに、東京湾東岸地域における現状での最古期の事例と考えられる。市原市域の環濠集落は、台遺跡、草刈遺跡、大厩遺跡、根田代遺跡、南総中学遺跡（倉田・相京1978）で囲繞形態がある程度判明しており、他に、菊間遺跡、菊間深道遺跡、菊間手永遺跡、潤井戸西山遺跡（草刈尾梨遺跡）、大厩浅間様古墳下層、向原台遺跡（註1）、祇園原貝塚上層、南岩崎遺跡（田中2002）でV字溝が検出され、環濠の可能性が考えられる。これらを含めると、現状で13遺跡を数える。環濠規模は、大厩遺跡がやや小規模ではあるが、根田代遺跡、南総中学遺跡などおおむね長径約200m、全体規模が20,000m²程度を測り、南関

東地方の環濠集落としては一般的な規模をもつ（安藤2003）。

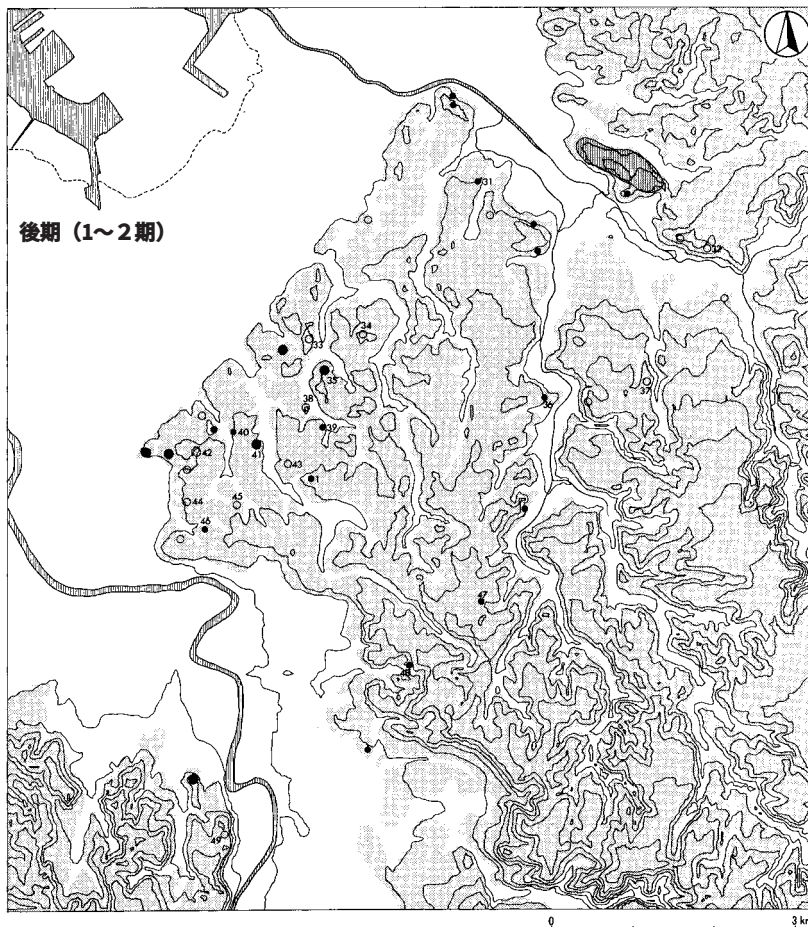
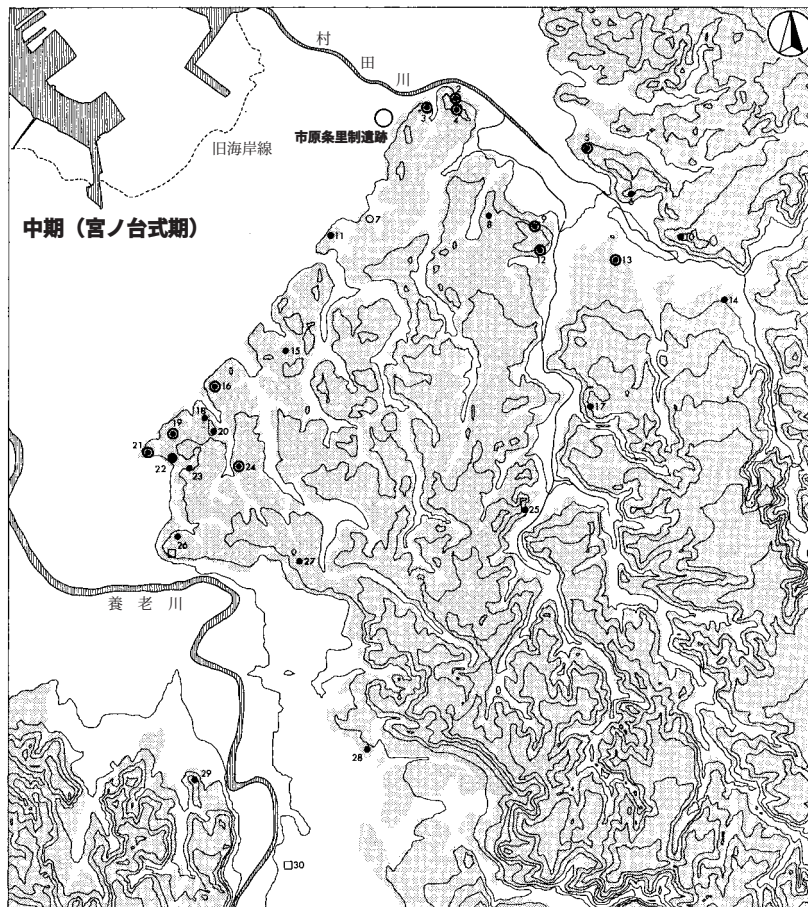
ただ、これらすべてが長期継続的な拠点集落ではない。菊間遺跡、大厩遺跡は、環濠維持期自体明確ではないものの、開村期以降ほぼ後期初頭まで集落が経営される。しかし、台遺跡、根田代遺跡は、時期差をもち継起的に開削されている。複数条の環濠からなり、環濠間の重複が認められる草刈遺跡、あるいは近接する菊間遺跡と菊間深道遺跡、菊間手永遺跡も、集落の再編をとまなう可能性がある。袖ヶ浦市根形台遺跡群（安藤1997、安藤・稲葉2001、能城・稲葉他2002）では、同一台地上に、後期にいたるまで複数の環濠が検出されているが、これらのすべてが各時期共存していた可能性は低い。折本西原遺跡（石井・倉沢1980、岡田1988）を中核とし、一定領域を母体とした環濠集落群が分立する神奈川県横浜市鶴見川水系とは異なる状況も認められる（安藤1991）。なお、宮ノ台式前半期を中心とする養老川左岸の釜神遺跡は、独立丘陵状の地形地に占地し、斜面部まで発掘調査が行われたが、環濠は検出されていない。また、数軒の竪穴住居跡からなる派生的な小集落は、加茂遺跡A地点、加茂遺跡D地点、御林跡遺跡などで確認できるが、時期的な傾向は、現状で明らかにすることができない。

東京湾東岸地域の後期環濠集落は、草刈遺跡F区・J区の条濠をのぞけば、現状で袖ヶ浦市美生遺跡群第4地点（浜崎1993）を北限とし、市原台地の環濠集落は宮ノ台式期のうちに終焉する。しかし、鶴見川、早淵川水系の遺跡群が環濠集落群解体後離散するのに対して、村田川流域以南の東京湾東岸地域では爆発的な集落の増加が認められる。

環濠の機能停止時期を特定できる遺跡は限られるが、根田代遺跡では、宮ノ台式B6期（黒沢）から後期1期に土器の多量投棄が認められ、おそらく宮ノ台式B6期には機能を失っていた可能性が高い。根田代遺跡は、おおむね2～3期まで集落規模を維持しているものの、国分寺台遺跡群での中核的集落は、環濠停止期以降、御林跡遺跡へ移行するようにみえる。他に、断片的な調査事例での判断ではあるが、郡本遺跡が1～2期に集落規模を拡大し中核化する。同時に、1期以降、小支谷谷奥への集落の進出が顕著となる。1～2期古段階に開村する集落は、山倉水系では山田橋遺跡群をはじめ、坊作遺跡、南向原遺跡があり、新田川水系では、唐崎台遺跡、千草山遺跡など、他に、福増山ノ神遺跡、東官台遺跡などが指摘できる。釜神遺跡もこの時期再開村する。このうち、坊作遺跡、唐崎台遺跡、釜神遺跡は、開村と同時に一定規模の集落を形成するが、南向原遺跡、千草山遺跡、東官台遺跡などは、ほぼ一時期で廃絶する。坊作遺跡も、1～2期のうちに廃絶する。御林跡遺跡については、その消長を現状で明確にとらえることはできないが、郡本遺跡、釜神遺跡、唐崎台遺跡は、3期になって規模を縮小する。

3～4期になると、武士遺跡にみられるように、さらに谷奥への進出が進む。一方、向原台遺跡など、東京湾岸台地縁辺部への再占地も認められる。台遺跡については、全容が明らかではないものの、B地点ではやはり3期に再度集落が設置されている。点滅的な小規模短期の集落形成も、この時期稲荷台遺跡などで確認できる。1期に開村した集落の中では、山田橋遺跡群が集落を拡大する。また、時期的な詳細は不明であるが、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡462軒を検出している天神台遺跡（浅利1994）も、後期のある段階において中核化したものと推定される。

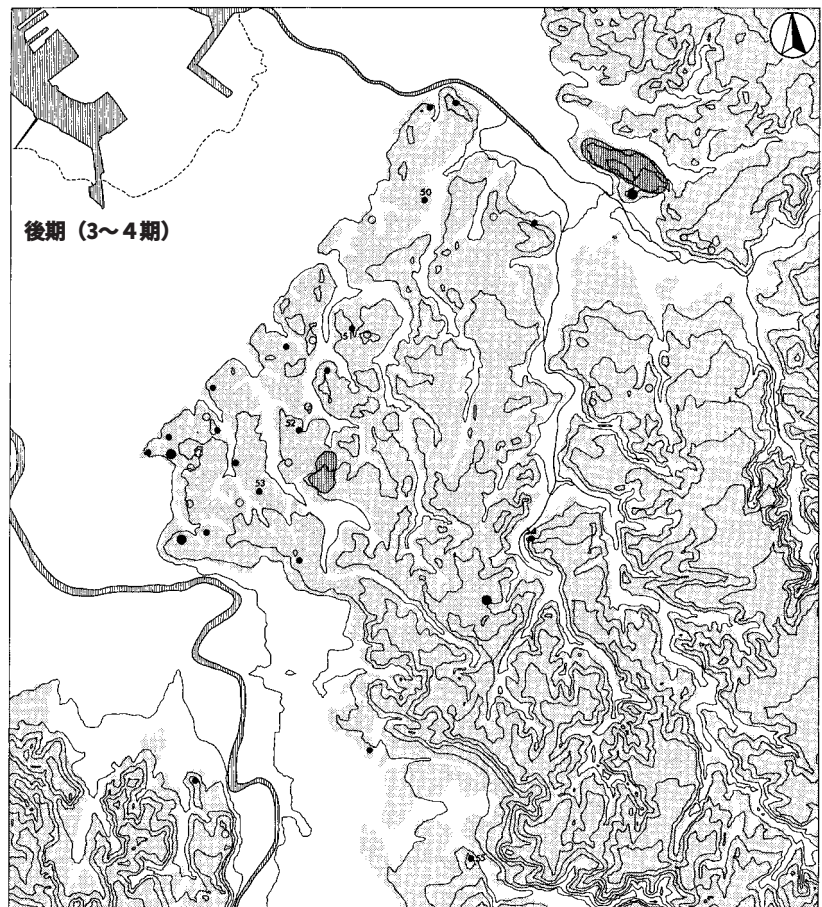
終末期になると、神門墳丘墓およびその系譜下の円丘墓が出現する。神崎川流域の小田部墳丘墓をのぞくと、諏訪台1（A1）号墳（須田・田中1975）、辺田1号墳、可能性としては諏訪台10（A9）号墳、山田橋大塚台1号墳が、国分寺台周辺に展開する。このうち、辺田1号墳はTE1b式期（大村1994）



No.	遺跡名	文献
1	山田橋遺跡群	田中1989、蜂屋・小橋1999、半田1997a、牧野2001b
2	菊間遺跡	斉木・種田・菊池1974、斎木・深沢1978
3	菊間手永遺跡	近藤1987b
4	菊間深道遺跡	高橋1994b
5	草刈遺跡	小久貫1983、高橋1985、高田1986、小林1990、豊田1991、島立1992、深澤1993
6	草刈六之台遺跡	白井・田島他1994
7	若宮遺跡C地区	市毛・滝山1967
8	大厩鍛冶屋前台遺跡	浅利1993
9	大厩浅間様古墳下層	浅利1997
10	川焼台遺跡	財団法人千葉県文化財センター1985・1986・1987
11	白船城跡	石田1987、櫻井・黒沢1997
12	大厩遺跡	三森・阪田他1974
13	潤井戸西山遺跡(草刈尾梨遺跡)	鈴木1986、半田1992
14	潤井戸中横峰・鎌之助遺跡	小川2000、田所2000a・2001、鶴岡2001
15	郡本遺跡群	木對1987、田中1995、小川1998、鶴岡1999
16	向原台遺跡	高橋2002b、田中2000
17	中潤ヶ広遺跡	財団法人千葉県文化財センター1995~2000
18	加茂遺跡A・B地点	滝口1976、谷島1977
19	台遺跡	半田1977・1977・2003、谷島1979、田中1980
20	加茂遺跡D地点	小橋2002
21	根田代遺跡	浅利1981
22	御林跡遺跡	谷島1979、木對2004
23	長平台遺跡	半田・白井1982
24	祇園原貝塚上層	近藤1995、忍澤1999
25	小田部新地遺跡	山口1984
26	天神台遺跡	平野・対馬・谷島・菊池1975、浅利1985、浅利1994
27	西広貝塚上層	市毛・米田・西田・鷹野1977、高橋1988
28	叶台遺跡	大村1992a
29	釜神遺跡	田中2002
30	山田大宮遺跡	米田1986
31	大厩細野遺跡	田中1994
32	鶴牧遺跡	財団法人千葉県文化財センター1976
33	郡本遺跡群(古甲遺跡)	田所1998・2000b
34	能満城跡	
35	唐崎台遺跡	田中1981
36	東官台遺跡	高橋1994a
37	下鈴野遺跡2	財団法人千葉県文化財センター1995・1996
38	郡本大宮遺跡	浅利1991
39	千草山遺跡	田中1989
40	南向原遺跡	田中1976
41	坊作遺跡	小出2002
42	加茂遺跡C地点	対馬・谷島・浅利・柿沼1976
43	宮前遺跡	対馬・谷島・浅利1977
44	中台遺跡	田中2000
45	南中台遺跡	浅利1981、比田井1987
46	蛇谷遺跡	市毛・須田・新田1977
47	武士遺跡	半田1976、田村・加納・高柳他1996
48	福増山ノ神遺跡	浅利1989a

第193図 市原台地周辺の遺跡群 (1)

No.	遺跡名	文献
49	安須別府台遺跡	小出1995
50	雲ノ境遺跡	大村1991a
51	能満遺跡群二階台地点	牧野2001a
52	稲荷台遺跡	鶴岡2000a、浅利2002
53	南祇園原遺跡	高橋2002a
54	小田部向原遺跡	大村1991a
55	北旭台遺跡	木對1990
56	大厩弁天台遺跡	大村1989
57	天王台遺跡	木對1988
58	潤井戸天王台古墳群下層	鶴岡2000b
59	能満分区遺跡群	半田1994・1998
60	下鈴野遺跡	大村1987
61	能満下小貝塚遺跡	木對1994
62	祭り野遺跡	田中1982
63	山倉古墳群下層	小橋2004
64	勝間上座頭橋遺跡	田中1996
65	山田橋大塚台古墳(1号墳)	半田1997a
66	小田部墳丘墓(古墳)	杉山・安藤・沼沢・田中1972、大村1991a
67	神門3号墓(墳)	浅利1989b
68	神門4号墓(墳)	田中1977
69	神門5号墓(墳)	田中1984
70	辺田1号墳	木對2004
71	諏訪台10号墳(A9号墳)	深澤・白井1981、田中2000



- ◎ 環濠集落
- 集落
- (詳細不明)
- 方形周溝墓群
- 円丘墓

第194図 市原台地周辺の遺跡群 (2)

比定され、確実に古墳時代前期に降る。ただし、その副葬品の構成は、弥生時代終末期に類するものであり、前方後円墳体制の枠外に遺存した円丘墓とみられる。

この段階の集落は、神門墳丘墓群の母村と推定され、上総国分僧寺下層に展開する中台遺跡をはじめ、天神台遺跡、蛇谷遺跡、南中台遺跡などが拠点的な集落群を形成する。ただし、円丘墓群が点在するように、拠点的な集落群内部にも消長をもつ可能性があり、蛇谷遺跡は、前期初頭（TE1a式期）に中心をもつ。この周辺地域では、他に後期にみられるような大規模な集落の展開はみられないものの、前代の集落の多くは継続し、新たな開村を散見することもできる。

2. 山田橋遺跡群の集落形成過程

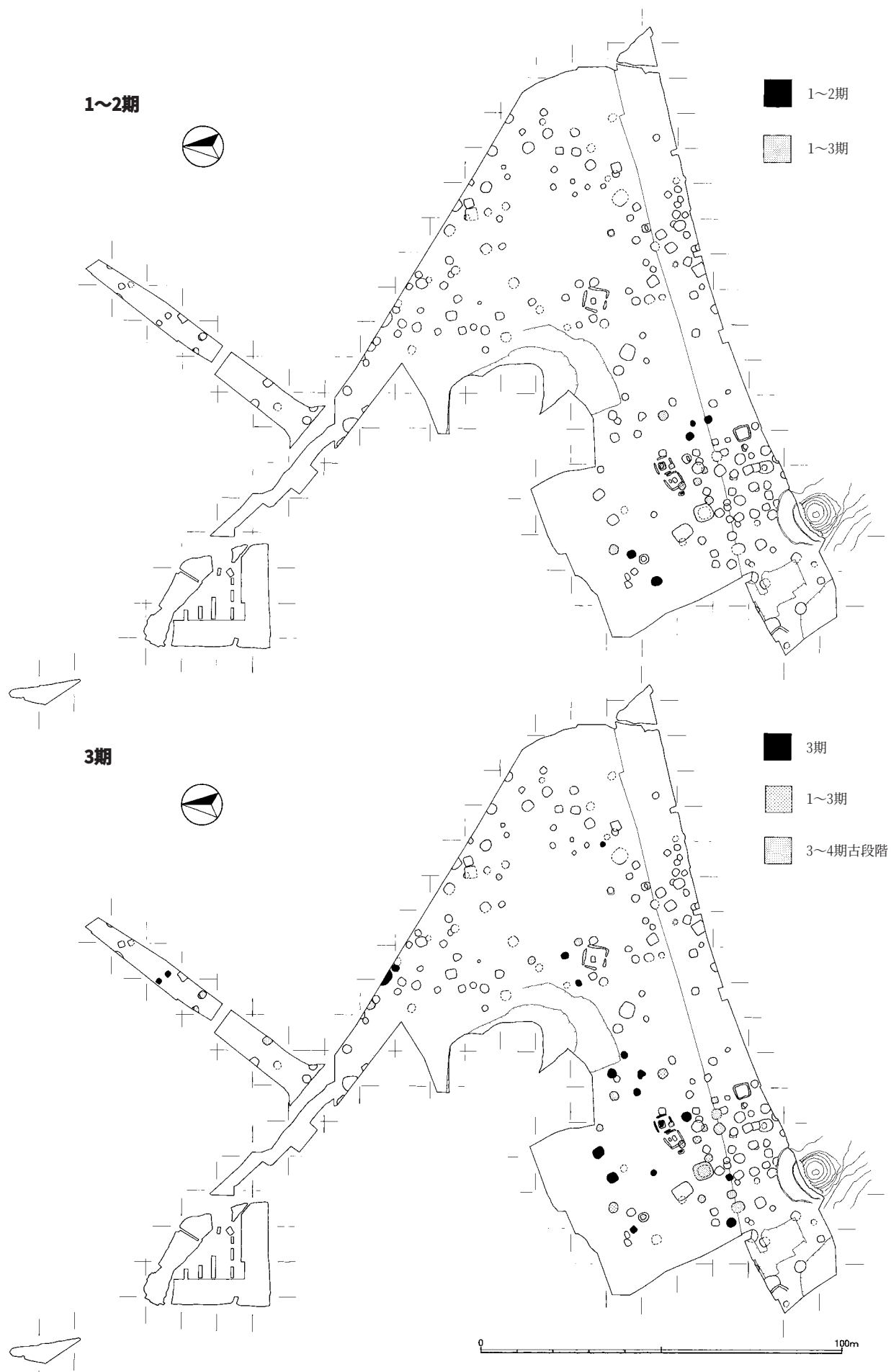
山田橋遺跡群は、第1章第3節で記したように、総面積およそ160,000m²を測り、このうち、59,175m²について発掘調査を終了している。弥生時代後期の集落範囲は、遺跡総面積のうち、すくなくとも100,000m²以上におよぶものと推定され、現状の調査範囲は、南北方向とも谷部に接した地域におよんでいない。とくに山倉支谷側は、現状調査範囲内でも遺構密度が高くなる傾向が認められ、調査区が集落全体の中でいかなる部分にあたるかは明らかではない。しかし今回、山田橋大塚台遺跡の未整理地区をのぞいても約50,000m²に対する整理作業が完了したことになる。弥生時代集落の構造を明らかにする上でも、山田橋遺跡群の形成過程を調査成果として提示しておく必要がある。

山田橋遺跡群で現状までに検出された弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡は232軒である。このうち、山田橋大塚台遺跡66軒をのぞく166軒について、今回までに整理作業を完了している。ただ、当該時期、地域の一般的な傾向として遺存土器が少なく、細別レベルでの時期認定は容易ではない。第195～197図は、1～2期5軒、1～3期8軒、3期18軒、3～4期古段階20軒、4期古段階34軒、4期11軒、4期新段階1軒、古墳時代前期11軒を表示したものであるが、時期認定に幅をもたせても、58軒が脱落している（註2）。そもそも、土器編年が確率的な傾向にすぎない以上、土器編年によって同時併存遺構を抽出することは困難であり、また特定の条件下でしか検出することのできない平地建物の存在など、具体的な集落景観そのものを問題とすることはできない。ただ、第195～197図においても、山田橋遺跡群の変遷過程とその特徴を問題とすることは可能である。

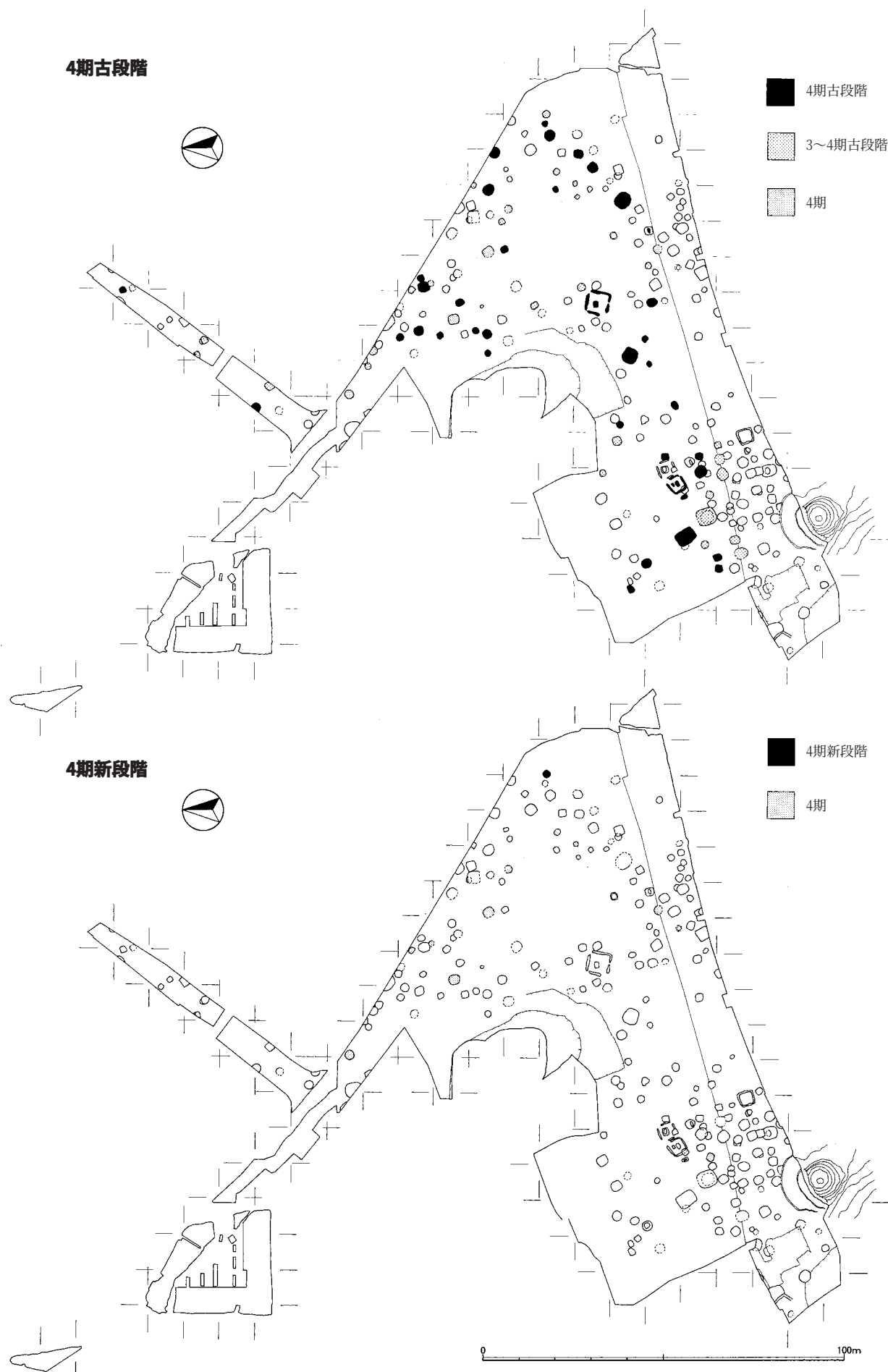
山田橋遺跡群は、前述したように、環濠機能停止後の分岐拡散な中で成立した集落のひとつであり、山田橋大山台遺跡39・48号竪穴など、1期に遡る可能性のある竪穴住居を含む。1～2期の竪穴住居跡は、調査区の南西部に限定される傾向があり、山田橋大塚台遺跡側に向かって遺構密度が高くなることから、山倉谷側の台地縁辺部を中心とした占地が想定される。成立段階の集落規模を問題とすることはできないが、3期の竪穴住居跡の分布は、1～2期の竪穴住居跡群を中心に北側、東側へ拡張されており、台地縁辺部を基点とし、漸次居住域の範囲を拡大していく過程が想定される。

3期は、調査区北の新田川水系側にも竪穴住居跡群の展開が認められ、調査区中央の小支谷をはさみ一時期分立していた可能性も考えられる。そして4期になると、調査区ほぼ全域に拡散し、集落は一体化する。集落の中心は漸次調査区東側に移動する傾向があり、出土土器からは時期が判然としないうちの大形住居跡も、全体の移動にあわせ、24・25号→64号竪穴→78号竪穴の変遷が想定される。

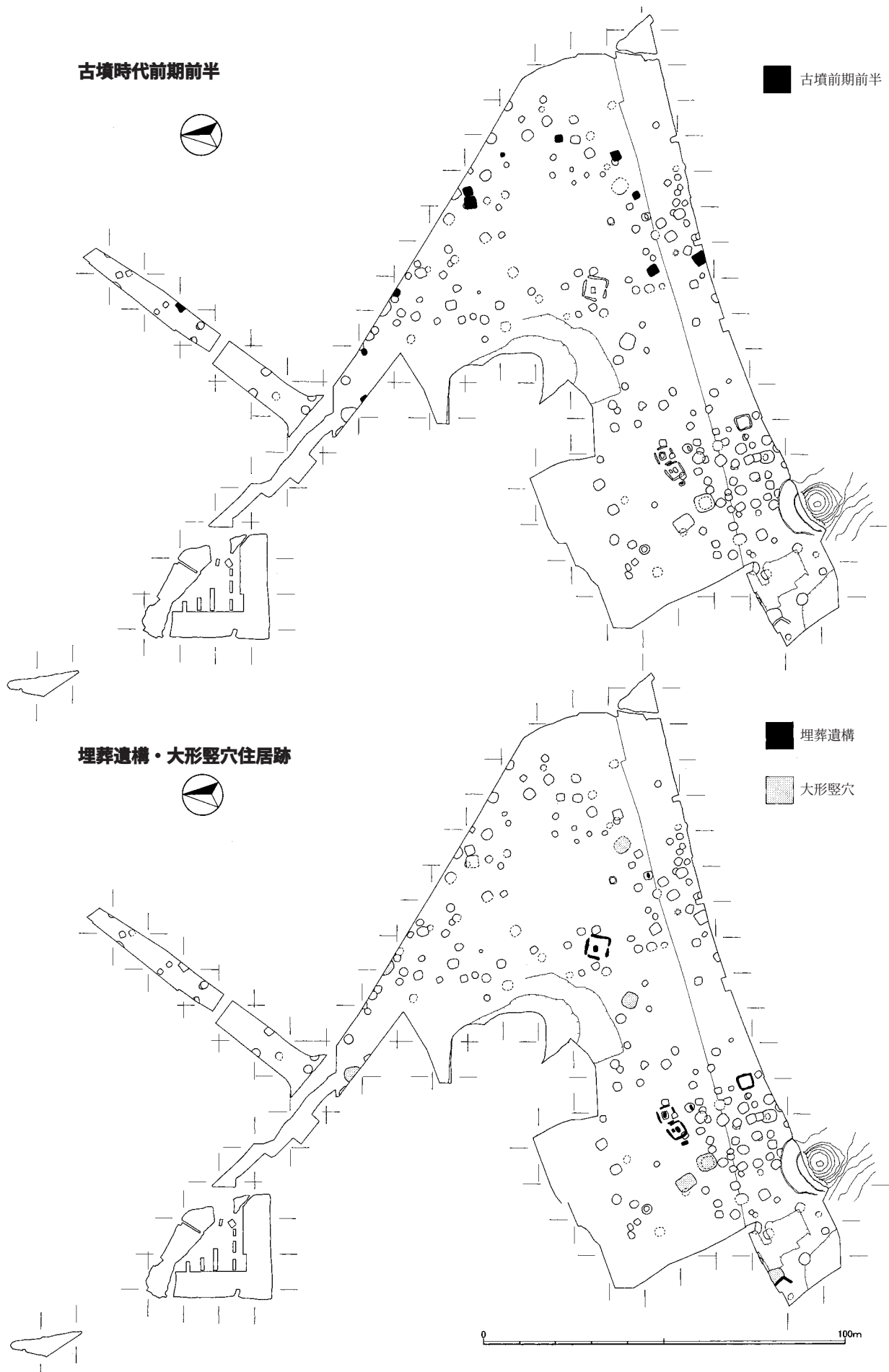
この4期古段階を盛期とし、4期新段階には集落規模を縮小させる。現状では、次期の終末期段階と推定される竪穴住居跡は検出されていない。ただ、古墳時代前期初頭（TE1a式期）の竪穴住居跡が



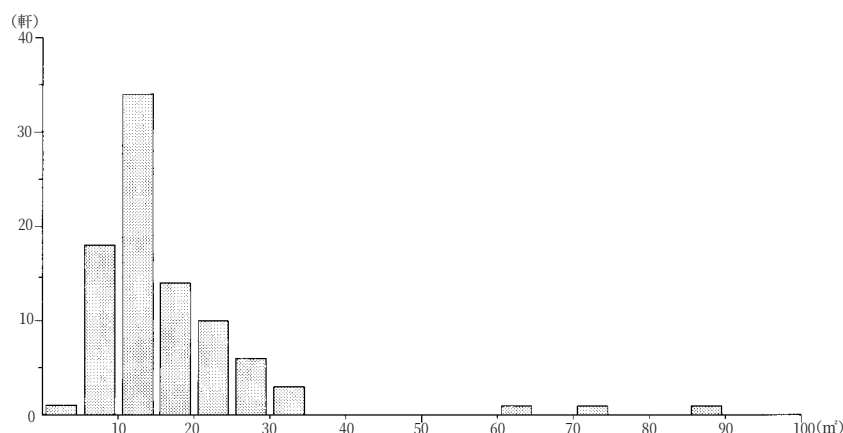
第195図 山田橋遺跡群遺構分布図(1)



第196図 山田橋遺跡群遺構分布図 (2)



第197図 山田橋遺跡群遺構分布図 (3)



第198図 山田橋大山台遺跡弥生時代後期竪穴規模頻度分布図

各期全体の変遷に応じた配置をみせることから、終末期段階についても、未整理区域あるいは現状調査区外に展開する可能性がある。なお、山田橋大塚台古墳（1号墳）は、終末期ないしは前期初頭の円丘系墓の可能性がある。この段階は、集落の衰退期にあたり、少なくとも周辺地区には

竪穴住居は存在しない。しかし、このことが、山田橋大塚台古墳（1号墳）の当該期での造墓を証明する可能性もあり、現状での判断は難しい。

山田橋遺跡群の散村的な集落景観と、基点となる中心点を欠き、居住域の拡大を志向するようにもみえる変遷過程は、環濠集落への集住とまさに対極をなす。結果として形成された集落規模は、折本西原遺跡や西日本の環濠集落にも匹敵するが、調査面積59,175m²に対する竪穴住居跡220軒は、散漫な拡張としてとらえることが適当であろう。

竪穴住居個々についても、個別化が認められ、竪穴規模は、宮ノ台式と比較して小形のものが占める割合が明らかに増加する。山田橋大山台遺跡の弥生時代後期竪穴107軒のうち、計測可能な竪穴住居89軒の中で、床面積20m²以下は67軒75.3%に達し、支柱穴を欠く竪穴も56軒を数える（第198図）。甕形土器容量にも対応した変化が認められ、竪穴住居居住構成員自体の減は明らかである（大村1988）。同位置での建て替えも、確実には78号竪穴のみである。また、谷部の115号竪穴を例示できるように、竪穴の埋没過程にも破棄の場としての長期的な利用が認められず、このことは、竪穴住居の累積が一定の居住域を前提としていないことをしめしている。集落を構成する基礎単位にも紐帯の弛緩、個別化をみることができるのである。

竪穴住居の一般的傾向としての小形化に対して、特徴的な規模をもつ大形住居跡が検出されている。その規模は、25号竪穴が床面積88.4m²、24号竪穴が81.25m²を測り、一般の竪穴住居に対して圧倒的規模を誇る。大形住居は、弥生時代集落に特徴的に認められるが、山田橋遺跡群では220軒に対して長軸長が8mをこえる竪穴は7軒のみであった。隣接する千草山遺跡は、2軒の竪穴住居から構成される短期小規模の集落であるが、うち1軒の竪穴は長軸長が10.15mを測る。少なくともこの段階は、あくまでも集落を代表し、集落の分節単位とはならない。出土遺物は、24号竪穴より土製紡錘車、土製勾玉、25号竪穴より鉄鏃、土製勾玉が出土しているものの、かならずしも卓越した内容を証明してはいない。しかし、24・25号竪穴と1・2号方形周溝墓、1・2号木棺土坑墓、64号竪穴と3号方形周溝墓、78号竪穴住居と3号木棺土坑墓には配置上の対応が認められることから、大形住居を首長居宅と考えることは適当であろう。ただ、78号竪穴は建て替えにより大形化しており、また24号竪穴もその可能性があることから、当初から象徴的に建てられたものではない（久世2001）。

3. 山田橋遺跡群の方形周溝墓

山田橋大山台遺跡では、3基の方形周溝墓、3基の単独木棺土坑墓が検出された。山田橋大塚台遺跡の2基の方形周溝墓も、詳細は明らかではないが、当該期の方形周溝墓である可能性が考えられる。このうち、1・2号方形周溝墓、1・2号木棺土坑墓は、配置に規則性が認められ、連続的に造墓されたものと推定されるが、全体としてみれば集落内に特定された墓域を形成しているわけではない。これらの方形周溝墓、単独木棺土坑墓は、前述したように、大形竪穴住居跡と配置状の対応関係が認められ、首長（層）墓とすることが適当であろう。ただこれは、方形周溝墓一般の性格を説明するものではない。

前述したように、当該地域の方形周溝墓の成立は、池上・中里式段階以前に遡る。中期の方形周溝墓は、乳幼児以外の未成人をも方台部中央に埋葬し、群として集団墓を形成する。その造墓行為には明確な秩序、規制が認められ、個々の方形周溝墓は相互に溝を接しながら列状に配列される。向神納里遺跡では、南北方向700mにわたり141基の方形周溝墓が帯状に配列されており、天神台（諏訪台）遺跡でも、各列の方向は一定しないものの、規則的な配列をみることができる。方形周溝墓は、おそらく集団墓を形成する一般的な墓制として成立した可能性が高い（註3）。しかし、後期初頭前後期になると、小田部新地遺跡など、四隅開口形式からの平面形態の変化にともない、列構成から離れ単独化する傾向が認められる。おおむね形態変化以降は、比較的大規模な集落においても10基をこえる検出例は限られ、袖ヶ浦市文協遺跡（山本1992）では、後期から終末期の竪穴住居跡約360軒に対してわずか7基の方形周溝墓が竪穴住居群と混在する。国分寺台地区については、中期の方形周溝墓140基に対して、後期約30基とする集計が示されているが（田中2000）、竪穴住居跡数を勘案するならば、その差異は明らかであり、この段階に被葬者の選択が進行したと推定される。木棺（墓坑）規模をみても、後期以降、未成人中心埋葬は想定できない（大村1991・2004）。

基数の減少とともに配置の規則性も失われる。山田橋大山台遺跡では、2号方形周溝墓、2・3号木棺土坑墓で、造墓にともない、直前に破棄された竪穴住居跡を利用したことが確認されており（註4）、一時期をみれば居住域、墓域は分離されていたものと考えられる。しかし、墓域設定あるいは居住域についても継続的な占地は認められず、このことが、竪穴住居群との混在、単独化、不規則な配列の要因となるものと推定される。

単独木棺土坑墓は、本遺跡の他に、小田部新地遺跡、六孫王原遺跡、御林跡遺跡、能満上小貝塚、唐崎台遺跡をはじめ、東京湾東岸地域では普遍的に認められ、草刈遺跡、君津市大井戸八木遺跡など、方形周溝墓群からはなれ、木棺土坑墓群を形成する遺跡も認められる。初現時期は、時期認定が困難なものが多く不明確ではあるが、宮ノ台式終末段階には、方形周溝墓群に混在する例が認められる。方形周溝墓の溝中埋葬も、現状では3期に比定される木更津市高砂遺跡が上限となるが、単独木棺土坑墓の成立時期まで遡る可能性が考えられる（註5）。単独木棺土坑墓は、検出数が方形周溝墓を凌駕するものではなく、その副葬品からみても、被差別的な埋葬ではない。

その性格については、副葬品が参考になる。列島規模で弥生時代の副葬品の性別比をみると（本間2002）、刀剣類、鏃などは、石器、青銅祭器、鉄器にかかわらず、圧倒的に男性に帰属するが多い。これに対して、腕輪類は、西日本に分布する貝輪のうちゴホウラ製に男性装着例がある他は、基本的に女性に帰属する。千葉県でも検出例が多い円環形銅・鉄釧については、埋葬人骨の性別が判明

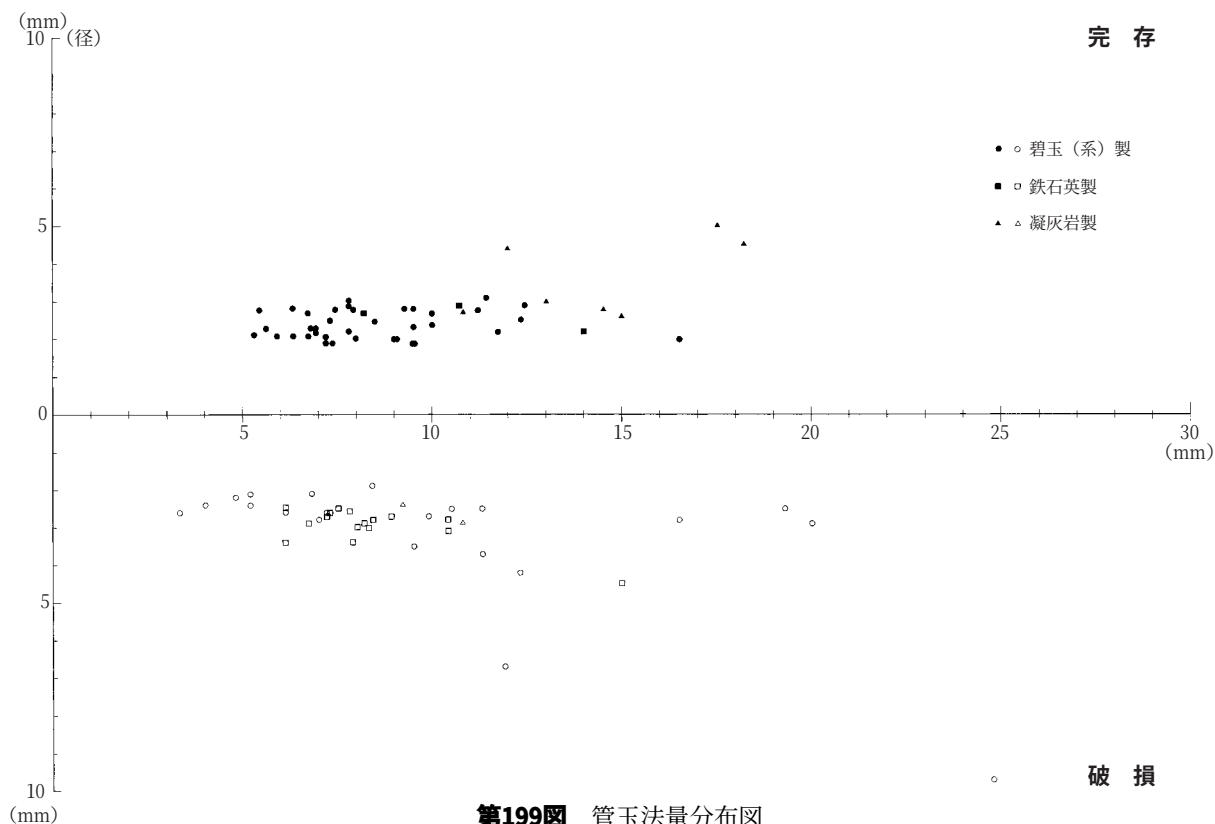
市町村名	遺跡名	遺構No.	時期備考	勾玉	滑石	翡翠	蛇紋岩	水晶	瑪瑙	琥珀	管玉	碧玉系	凝灰岩質 頁岩	鉄石英	蛇紋岩
方形周溝墓方台部埋葬															
袖ヶ浦市	向神納里遺跡第3地点	SE029	(中期後半)								2	2			
袖ヶ浦市	向神納里遺跡第3地点	SE030	(中期後半)								14	13		1	
袖ヶ浦市	向神納里遺跡第3地点	SE038	(中期後半)								1	1			
袖ヶ浦市	向神納里遺跡第3地点	SE039第1埋葬施設	(中期後半)								1	1			
袖ヶ浦市	向神納里遺跡第3地点	SE045	宮ノ台式前半												
袖ヶ浦市	向神納里遺跡第3地点	SE048	宮ノ台式後半								1	1			
袖ヶ浦市	向神納里遺跡第3地点	SE052第1埋葬施設	(中期後半)								7	7			
君津市	常代遺跡	SZ-16	(中期末～後期初頭)								2	1		1	
君津市	畑沢遺跡2次	SE02	(後期前葉)								1	1			
君津市	畑沢遺跡2次	SE05	(後期前葉)								4	4			
袖ヶ浦市	荒久(1)遺跡	008方形周溝墓	後期(2期)												
袖ヶ浦市	清水井遺跡	1号方形周溝墓	後期(2期)												
袖ヶ浦市	清水井遺跡	2号方形周溝墓	後期(2期)												
市原市	御林跡遺跡	7号方形周溝墓	(後期前半)												
市原市	御林跡遺跡	199号遺構	後期前半								1	1			
市原市	御林跡遺跡	206号遺構	後期前半								1	1			
市原市	御林跡遺跡	189号遺構	後期前半	1	1										
袖ヶ浦市	美生遺跡群第4地点	1号方形周溝墓	後期(2期)												
袖ヶ浦市	美生遺跡群第4地点	2号方形周溝墓第1主体部	後期(3期)												
木更津市	大山台古墳群	SF005第1埋葬施設	後期(3期)												
木更津市	大山台古墳群	SF005第2埋葬施設	後期(3期)												
木更津市	庚申塚A遺跡	SF012	(後期前半)								9				
木更津市	庚申塚A遺跡	SF015第1埋葬施設	後期(3期)												
木更津市	庚申塚B遺跡	016号跡第2埋葬施設	(後期前半)												
木更津市	庚申塚B遺跡	078号跡第2主体部	(後期前半)												
市原市	山田橋大山台遺跡	1号方形周溝墓1号主体部	後期(4期古段階)								2	2			
市原市	山田橋大山台遺跡	2号方形周溝墓	後期(3期)												
市原市	山田橋大山台遺跡	3号方形周溝墓	後期(4期古段階)												
袖ヶ浦市	根形台遺跡群	SZ047(SK2169)	(後期前半)								1	1			
市原市	毛尻遺跡	1号方形周溝墓	後期(4期古段階)	1		1									
市原市	長平台遺跡	2号方形周溝墓	(後期)												
木更津市	庚申塚A遺跡	SF001	後期(4期)								19	5	6	8	
木更津市	庚申塚A遺跡	SF002	後期(4期)	3			3								
木更津市	宮脇遺跡	第3号方形周溝墓	後期(4期)												
袖ヶ浦市	文脇遺跡(郡市調査)	7号方形周溝墓	後期(4期)												
袖ヶ浦市	愛宕4号墳	4号墳	終末期												
沼南町	石揚遺跡	2号方形周溝墓	終末期												
沼南町	石揚遺跡	3号方形周溝墓拡張	終末期								2		1	1	
沼南町	石揚遺跡	4号方形周溝墓第2号主体部	終末期												
木更津市	大山台古墳群	SF013	終末期	1		1									
木更津市	大山台古墳群	SF014	(終末期)												
木更津市	大山台古墳群	第9号墳	終末期	1		1									
木更津市	庚申塚A遺跡	SF009	終末期								1				
木更津市	高部古墳群	49号墳	終末期												
市原市	長平台遺跡	288号墳	終末期												
八千代市	ヲサル山遺跡	MB001 遺構	終末期	1		1									
袖ヶ浦市	二又堀古墳群	8号墳	前期初頭												
木更津市	大山台古墳群	第8号墳	前期	1			1				1	1			
袖ヶ浦市	椿古墳群	SX-3	前期前半								2		1	1	
君津市	常代遺跡	1号円形周溝墓	(前期)								7	4		3	
方形周溝墓溝中埋葬															
木更津市	高砂遺跡	SZ022周溝内埋葬施設	後期(3期)												
木更津市	大山台古墳群	SF005周溝内	後期(3期)												
市原市	長平台遺跡	2号方形周溝墓南溝土坑	(後期)												
八千代市	ヲサル山遺跡	MB002遺構周溝内埋葬施設	終末期								1		1		
袖ヶ浦市	神田1号墳	周溝内土坑1	前期前半	2	2						7				
市原市	草刈遺跡H区	397号跡周溝内埋葬施設	前期前半												
佐倉市	飯合作遺跡	周溝内埋葬	前期前半								5		5		
単独木棺土坑墓															
市原市	小田部新地遺跡	28号遺構	(中期末～後期初頭)								9	7		2	
君津市	畑沢遺跡2次	SK08	(後期前葉)								1	1			
市原市	六孫王原遺跡	50号土壇墓	(中末～後初)	7	7						9	4		5	
市原市	六孫王原遺跡	54号土壇墓	(中末～後初)								2	2			
市原市	御林跡遺跡	185号遺構	後期前半												
市原市	草刈遺跡H区	211号遺構	(後期)												
市原市	草刈遺跡I区	385号土坑墓	(後期前半)								○				
袖ヶ浦市	清水井遺跡	21号土坑	後期(2期)												
袖ヶ浦市	根形台遺跡群	SK1451	(後期前半)	4		1			1	2	27	27			
袖ヶ浦市	根形台遺跡群	SK1724	(後期)												
市原市	能満上小貝塚遺跡	159号土坑	後期(2～3期)												
市原市	山田橋大山台遺跡	1号木棺土坑墓	後期(4期古段階)								3	3			
君津市	大井戸八木遺跡	001号土坑	(終末期)	○		○						○		○	
君津市	大井戸八木遺跡	002号土坑	(終末期)								○			○	
袖ヶ浦市	文脇遺跡(県調査)	14号土坑	(終末期)												
市原市	棒ヶ谷遺跡	第1号土坑	(終末期～前期)												
市原市	六孫王原遺跡	24号土壇墓	(終末期～前期)												

第38表 方形周溝墓等副葬品構成

遺構No.	他(不明)	蛇紋岩玉	琥珀玉	霽玉	ガラス玉	鉄剣槍	銅鐸	鉄剣	銅剣	鉄農工具	銅鉄鏃	その他
SE029												(稲葉1995)。
SE030												
SE038												
SE039第1埋葬施設												
SE045		1										
SE048												
SE052第1埋葬施設												
SZ-16												(伊藤・甲斐1996)。
SE02												(佐伯1989)。
SE05												
008方形周溝墓					92				5			銅剣右腕装着か。(小林・高梨1999)。
1号方形周溝墓					40							(大崎1993)。
2号方形周溝墓					33							
7号方形周溝墓					70					1		鉄斧は墓坑壁から出土。(谷島1979)。
199号遺構					14				5			銅剣右腕装着か。(木對2004)。
206号遺構					35				5			銅剣右腕装着か。
189号遺構					20							
1号方形周溝墓					28							(佐伯1989)。
2号方形周溝墓第1主体部					24							
SF005第1埋葬施設					6							(當眞2002)。
SF005第2埋葬施設					6							
SF012					3							棺底部赤色顔料。(當眞2001)。
SF015第1埋葬施設					21				(2)			銅剣2破片。
016号跡第2埋葬施設					27							
078号跡第2主体部					24							(荻島1992)。
1号方形周溝墓1号主体部					23			△				鉄片は鉄剣の可能性。
2号方形周溝墓					41							
3号方形周溝墓					9							棺底面に赤色顔料。
SZ047(SK2169)					36							(能城・稲葉・松本他2002)。
1号方形周溝墓												(武部・田口1983)。
2号方形周溝墓					15				1			(半田・白井1982)。
SF001					45							旧庚申塚第1号墳。(椋山・荒木・鈴木1977)。
SF002					138							旧庚申塚第2号墳。
第3号方形周溝墓					40						1	鉄鏃1(無茎三角形形式)。(小沢1988)。
7号方形周溝墓					1				1			ただし、副葬品は重複する住居内。(山本1992)。
4号墳			3		47	1						(能城1991)。
2号方形周溝墓						1						(太田・安井1991)。
3号方形周溝墓拡張					32							棺底面に赤色顔料。
4号方形周溝墓第2号主体部					11	1						
SF013					41							旧2002号方形周溝墓。(豊巻1990)。
SF014					8							旧2003号方形周溝墓。
第9号墳					16							(當眞2002)。
SF009					4							(當眞2001)。
49号墳						1				1		ヤリガンナ1、砥石1、軟質砂岩塊1。(西原2002)。
288号墳					15	1						
MB001遺構					44			(5)				鉄剣螺旋5巻以上。(阪田・藤岡1986)。
8号墳					3					1		鉄鎌1。(稲葉1993)。
第8号墳			1		18							(椋山・荒木・鈴木1977)。
SX-3					17	2						銅鏃2。(小久貫・高梨2001)。
1号円形周溝墓				1								(伊藤・甲斐1996)。
SZ022周溝内埋葬施設									6			左腕装着か。(小高1999)。
SF005周溝内					9							(當眞2002)。
2号方形周溝墓南溝土坑					13							(半田・白井1982)。
MB002遺構周溝内埋葬施設												(阪田1986)。
周溝内土坑1	7											(當眞1995)。
397号跡周溝内埋葬施設							○					赤色顔料入壺。(白井・福田1989)。
周溝内埋葬				1	1							水晶製算盤玉1。(沼沢・深沢・森1978)。
28号遺構												(山口1984)。
SK08										1		刀子1。棺底部赤色顔料。(佐伯1989)。
50号土壇墓												(半田1997b)。
54号土壇墓												
185号遺構					22							(木對2004)。
211号遺構					25	1						鹿角装柄付短剣。(白井・福田1989)。
385号土坑墓					○			(3)				鉄剣螺旋?3巻以上。(豊田1991)。
21号土坑					4							(大崎1993)。
SK1451												(能城・稲葉・松本他2002)。
SK1724					9							(安藤・稲葉他2001)。
159号土坑					23							土器棺合葬か。(忍澤1995)。
1号木棺土坑墓					8							棺底面赤色顔料。
001号土坑			○	○			1		○			(君津文化財セ1991)。
002号土坑								(6)				鉄剣螺旋6巻以上。
14号土坑			1	1	17		1					他に鉄片4、土製品1、布状有機物。(加藤・大谷1995)。
第1号土坑					13							(田中1989)。
24号土壇墓						1				1	1	鉄鏃1、刀子1。(半田1997)。

している例が確認できない。しかし、鉄剣と銅・鉄釧が複数例出土している群馬県渋川市有馬遺跡では、両者が共伴しないことから、性差をしめす可能性が指摘されている（田口2002）。剣と釧の共伴例は、長野県長野市篠ノ井遺跡群聖川堤防地点SDZ7-SK10（青木他1992）などで確認できるが、千葉県では現状で認められない。ただ、銅・鉄釧は、高砂遺跡、草刈遺跡H・I区、長平台遺跡、大井戸八木遺跡などで方形周溝墓周溝内や単独土坑（木棺）墓からの出土しており、第38表以外でも、菊間遺跡群（註6）、草刈遺跡H区で他2基の単独土坑墓から銅釧が出土している。方台部埋葬施設から出土している荒久（1）遺跡、御林跡遺跡2基は、いずれも四隅開口形の平面形態をとり、方形周溝墓は群を構成している。山田橋大山台遺跡1号方形周溝墓1号主体部の出土鉄片が鉄釧の可能性はあるが、これらをのぞくと、銅・鉄釧は、方形周溝墓周溝内や単独土坑（木棺）墓といった副次的な埋葬施設からの出土が目立つ（山岸2000）。神奈川県平塚市真田・北金目遺跡群、埼玉県川越市霞ヶ関遺跡でも、周溝内より銅釧が出土している。弥生時代後期以降、被葬者層が限定されていく中で、年齢差とともに性差による選択が進行している可能性も考慮する必要がある（註7）。大井戸八木遺跡で銅釧と共伴する小銅鐸も、草刈遺跡、文脇遺跡で周溝内、単独木棺土坑墓から出土している。選択的な埋葬原理を経済的な優位性のみで説明するのではなく、年齢階梯、血縁、性差、被葬者の集団内での地位、役割をも視野に入れる必要がある。

方形周溝墓等の副葬品は、後期以降ガラス玉を主体とし種別数量とも増加する傾向をみせるが（第38表）、これらには、特定権力との結びつきが認められない。方形周溝墓自体の平面形態などは一貫して東海地方の影響下にあり、小銅鐸についても三遠式銅鐸の系譜を認めることができる。また、相模湾岸地域では、東海地方からの集団移住が確認されており、当該地域でも菊川式を散見することができる。これに対して、管玉の生産は、ほぼ北陸あるいは佐渡島周辺に限定され（大賀2001・2002）、



第199図 管玉法量分布図

翡翠製勾玉、滑石製勾玉などとともに、中部高地あるいは北関東を經由した可能性が高い（註8）。鉄剣の分布もこれに対応する（会下2002）。ガラス玉についても、北部九州をのぞき列島内で圧倒的な出土量を誇る近畿北部を媒介としたことが想定され、同様の経路が考えられる（註9）。前述した帯状円環形鉄・銅釦は、長野県を中心とした分布が現状で認められ、銅釦についてはその周辺地域に再加工品がみられることから、長野県北信部での生産が想定されている（臼居2000）（註10）。

前節で述べたように、房総半島の弥生時代後期の土器型式は、きわめて閉鎖的な内容をみせ、内部には段階的な地域色をみせる。土器型式における地域性の発現形態は、情報の伝達をもたらす移住や流通の範囲、形態に起因する。当該地域の状況は、遠隔地との直接的な交通を欠く、限定された日常的交通の累積にもとづくものと推定され、玉類や鉄器などの移入は、隣接する集落間を通じた段階的な交渉によってもたらされたものと考えられる。この段階の副葬品を、日常的な流通域をこえた、首長層間の直接的な交渉によるものとするには、方形周溝墓全体の多系列性を説明することができないのである。銅釦（銅環）、管玉に破損品が多いこと、また、鉄器については、北部近畿で高比率を占めるヤリガンナなど、途中で脱落した要素があることもこのことを裏付ける（第199図）（註11）。

おそらく、弥生時代後期の方形周溝墓の被葬者は、選ばれた「代表者」としての首長にすぎないのであろう。首長権力の顕在化は、終末期における、遠距離間交通の拡大にもとづく外的な契機を受け急速に進展する。

4. 集落群形成の基本原則 小結

ここで記した集落の動態は、あくまでも、現状で知り得る調査成果によるものであり、未整理、整理途上の遺跡については誤った情報を提示している可能性もある。また、限られた調査範囲での成果が、集落全体を反映しているとも限らない。しかし、一見無秩序にみえる集落の形成過程は、おそらく実態の一端をとらえているものと考えられる。

市原台地では、弥生時代中期から古墳時代前中期にいたる長期継続的な集落は、叶台遺跡、御林跡遺跡に可能性を残すものの、基本的には認められない。一方で増殖し、また一方で縮小廃絶する状況は、当該時期、地域の基本的な動態と考えられる。環濠の機能停止期以降、各遺跡の離合集散過程に、地域全体にわたる時期的連動を認めることは困難であり、すくなくとも特定権力による一元的な地域支配や、なんらかの特定の契機に起因とするものではない。宮ノ台式期の環濠集落群は、相対的にみれば緊密な集団原理にもとづくものと思われるが、後期の方形周溝墓が確実に「首長墓」に変容していくように、後期社会を「無秩序」とみることもできない。しかし、集落規模の散漫な拡大にみられる、この段階の首長を基点とした求心力は、おそらく、首長個人の力量に依存したものであり、かつ強制力をともなう絶対的なものとは考えられない。集落間の力学的な関係は、世代ごとに更新され、それにともない集落、あるいは集落群が再編されたものと推定される。

集落構成の散在化と同時に、竪穴住居の同位置での建て替えが減少し、住居規模分布も小形化を指向する。竪穴住居構成員の増は、おそらく竪穴の拡張ではなく分居されることが一般化したのであろう。方形周溝墓群の配列の規則性も失われる。具体的な集団紐帯を問題とすることはできないが、集団各レベルの構成は、明らかに弛緩し個別化している。しかし、住居規模の大形化は、縄文時代後期後半に明確化し、また、環濠集落を形成する地域においても、弥生時代後期には住居規模の小形化が

認められることから、竪穴住居単位の集団紐帯と、環濠集落への集住化は直接関係しない。ただ、後期の環濠集落である木更津市東谷遺跡（西原1997）、庚申塚A・B遺跡（箕島1992、當眞2001）の方形周溝墓群は、全周ないしは一隅開口形式を主体としながらも、中期同様に環濠に接し列状の配列をみせる。環濠の形成にみられる地域社会の緊張関係が、集団の構成原理におよぼした影響は否定できない。

過去の集計によれば、市原市域の竪穴住居跡軒数は、中期に対し後期は約3倍に増加する（大村1993）。おそらく、現状ではその比率はさらに拡大している。当然絶対的な年代幅など単純な比較はできないが、同時に留意しなければならないのは、同位置での建て替え率、住居規模の差異である。谷奥への積極的な進出は、人口圧も要因として認めなければならないが、後期段階に、前述した竪穴住居跡軒数の比にみられるほどの極端な地域的な集住があったかどうかは疑問が残る（註12）。新たな環濠の開削がみられないように、少なくとも市原台地には、東京湾西岸地域などからの積極的な移住は想定できない。

一見無秩序にみえる後期段階の集落群の形成は、外的な緊張関係を欠く、ある意味安定した地域社会を前提としたものと推定されるのである。その状況は、相模湾沿岸、荒川流域の遺跡群と対極にあり、今後、相互地域の比較検証により、南関東地方における弥生社会の構造は明確化されるものと思われる。

古墳時代前期中葉から後半期そして中期になると、国分寺台遺跡群は、御林跡遺跡等一部の遺跡をのぞき集落が終焉する。この時期には、村田川流域左岸に親皇塚古墳（斉木・種田・菊池1974）、大厩浅間様古墳（浅利1997）、大厩二子塚古墳（千葉県教育庁生涯学習部文化課1995）が、また、袖ヶ浦台地には今富塚山古墳（永沼1992）、姉崎天神山古墳（千葉県教育庁生涯学習部文化課1994）、釈迦山古墳（小久貫1996）などの前期古墳が展開する。これに対して、神門墳丘墓系列の円丘墓は、前期になって前方後円墳体制外で在地化する。現状では、とくに袖ヶ浦台地姉崎地域の調査事例が乏しいが、近年、首長墳群の形成と連動し、山新遺跡（近藤2003）、鎌之助遺跡など、近隣の砂堆上や低位段丘面で、前期後半から中期前半の集落が検出されている。開発主体、加功主体としての首長権力の役割は、とくに古墳時代になって明確化し、集落形成についても首長層の積極関与が想定される（大村2003）（註13）。

市原台地の集落形成は、沖積低地を志向し、環濠集落群を形成する宮ノ台式を第1段階、台地上広範囲に展開する後期段階を第2の画期とするならば、前期中葉以降に第3の画期をみることができる。

註

- (1) 向原台遺跡については、環濠集落との指摘がみられるが（浅利1981、田中2000）、残された記録類からは特定できていない（高橋2002）。
- (2) 時期認定は、あくまでも出土土器を基本とするが、竪穴間の土器の接合関係などを考慮した。実際に土器の接合関係が認められた竪穴は30・37号竪穴のみであるが、竪穴間で同一個体の可能性があるもの、あるいは形状などが酷似する土器が検出された例としては、14・19号竪穴、35・36号竪穴、40・48・49号竪穴、51・59号竪穴、56・57号竪穴、58・84号竪穴、94・96号竪穴、100・111号竪穴、109・110号竪穴、115・116号竪穴をあげることができる。これらの出土土器は、小破片で出土状況も把握されていない場合が多く、竪穴の同時存在を直接証明するものとはならない。しかし、竪穴破棄後の埋没時期までを含めた経過の中での関係を想定することは可能であろう。

- (3) 弥生時代中期の未成人中心埋葬は、大阪府山賀遺跡、大阪府鬼虎川遺跡、静岡市瀬名遺跡などで埋葬人骨から直接確認することが可能であり、県内でも常代遺跡SZ-75で未成人の歯骨が検出されている。近畿地方の方形周溝墓も、前期から中期前葉は未成人を含む単独葬が基本であり（大庭1999）、研究当初推定されていたような成層化社会の墓制とは考えにくい。
- (4) 特定の竪穴住居を意識していたのか、また、造墓を目的として竪穴住居が破棄されたのかは明らかではない。29号竪穴は、竪穴の堆積土がほとんど認められないが、掘り直された可能性もあり、判断は難しい。
- (5) 溝中埋葬は、終末期段階以降に限定されるものとした（大村1991b・1996）。現状でもその時期的な傾向は変わらないが、ここでは、単独木棺土坑墓の成立時期まで遡る可能性を想定しておきたい。山田橋大山台遺跡でも、3号方形周溝墓P3に埋葬施設の可能性が認められる。
- (6) 2003年、財団法人市原市文化財センター調査。
- (7) 東日本では、少なくともこの段階には、男性、父方の血縁の優位性が認められる可能性が高い（大村1992b・2004）。ただ、草刈遺跡では周溝内から男性の成人人骨が検出されているように（小林1990）、性差そのものが区分原理であったとするのではなく、厳密には、性差を反映する婚姻後居住方式、集団内での地位、役割による区分と考えるべきかもしれない。
- (8) 当該地域の弥生時代中期以降の勾玉は、現状報告例では椎津茶ノ木遺跡123号遺構（竪穴住居）出土の琥珀製が初現例となる（木對1992）。滑石製の六孫王原遺跡50号土壙墓（半田1997b）例もほぼ同時期と推定されるが、とくに後期一般では滑石製勾玉が目立ち、山田橋大山台遺跡でも63号竪穴より出土している。唐崎台遺跡第11号土壙例もこの段階の所産と考えられる（田中・鈴木1981）。
- (9) 山田橋大山台遺跡出土のガラス玉は、遺構ごとに細部の形状、法量分布が異なる。これも入手時期、経路にかかわる可能性が考えられる。ただし、大半を中国南部産とするならば、どの段階で生じたものかの判断はできない。
- (10) 千葉県を含む南関東では、銅釧に対して小形の「銅環」の出土例が圧倒的に多い（中村2001）。市原市内でも現状で27例を数えることができる。これらは、山田橋大山台遺跡18号竪穴にみられるように、埋葬施設ではなく、竪穴住居跡からの出土が多い。山田橋大塚台遺跡でも1点竪穴住居跡から出土している。銅環は、一般的に「指輪」と考えられているが、外径約4cmを測る釜神遺跡70号住居跡例など中間的なものもあり、本来的には、あくまでも銅釧の再生品としてとらえられる。
- なお、螺旋状鉄釧は、その製作技術から国産が不可能であるとする指摘もある（村上2002）。
- (11) 第199図は、山田橋大山台遺跡1号方形周溝墓・1号木棺土坑墓、小田部新地遺跡28号遺構、六孫王原遺跡50・54号土壙墓、御林跡遺跡199・206号遺構、袖ヶ浦市向神納里遺跡第3地点SE029・030・035・038・039・048・052、袖ヶ浦市根形台遺跡群XIV地点2地区SZ047、袖ヶ浦市神田1号墳、木更津市庚申塚A遺跡SF001、木更津市俵ヶ谷4号墳（小沢1988）、木更津市大山台8号墳、君津市常代遺跡SZ-161号円形周溝墓、袖ヶ浦市椿古墳群SX-3、君津市畑沢遺跡2次SE02・05・SK08、八千代市ヲサル山遺跡MB002遺構、沼南町石揚遺跡3号方形周溝墓、佐倉市飯合作遺跡D08各出土例を対象とした。時期的には、宮ノ台式から古墳時代前期までを含んでいる。破損品の判断は、破断面に対する再研磨の状況によっては困難なものもあると推定され、破損品の占める比率はより高い可能性がある。
- なお、六孫王原遺跡の管玉は、報告で滑石製として報告されているが碧玉製の誤りである。他の石材については各報告の記載に従ったが、「碧玉」には緑色凝灰岩が含まれている可能性がある。
- (12) 山田橋遺跡群など、市原台地周辺の後期集落の形成過程は、台地上において、居住域の拡大を志向するようにもみえる。詳細は不明であるが、約30 ha遺跡範囲をもつ草刈遺跡についても、単純に集住化にもとづく集落の肥大としてのみとらえられるかどうかは検討を必要とする。これは、一側面として陸稲を含む畠作の展開による可能性も考慮しておく必要がある。ただ、集団原理にもとづく部分と、生産基盤にもとづく側面を、二者択一的にとらえることはできない。なお、山田橋大山台遺跡79号竪穴では、ムギ類の炭化種子が検出されているが、畠作は即ち脱稲作ではない。
- (13) 首長による地域経営の実態については、若狭徹の研究が参考になる（若狭2002）。

文 献

- 青木和明他 1992『篠ノ井遺跡群(4)』長野市の埋蔵文化財第46集 長野市教育委員会
- 浅利幸一 1981「根田遺跡の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 浅利幸一 1985「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和57・58年度』
- 浅利幸一 1989a『福増山ノ神遺跡発掘調査報告書』財団法人市原市文化財センター調査報告書第33集
- 浅利幸一 1989b「神門三号墳」『市原市文化財センター年報 昭和62年度』
- 浅利幸一 1991『市原市郡本大宮遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第41集
- 浅利幸一 1993「大厩鍛冶屋前古遺跡」『平成4年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 浅利幸一 1994「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和63年度』
- 浅利幸一 1997『市原市大厩浅間様古墳』財団法人市原市文化財センター調査報告書第42集
- 浅利幸一 2002『市原市稲荷台遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告IX 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 有沢要・石本俊則・小高春雄 1983『道庭遺跡』道庭遺跡調査会
- 安藤広道 1991「弥生時代集落群の動態 横浜市鶴見川・早渕川流域の弥生時代中期集落遺跡群を対象に」『調査研究集録』第8冊 横浜市埋蔵文化財センター
- 安藤広道 1996「南関東地方(中期後半・後期)」『Y A Y! (やいっ!)』弥生土器を語る会20回到達記念論文集 弥生土器を語る会
- 安藤広道 2003「弥生時代集落群の地域単位とその構造」『考古学研究』第50巻第1号 考古学研究会
- 安藤道由 1997『根形台遺跡群XVI地点』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第136集
- 安藤道由・稲葉理恵他 2001『平成12年度千葉県袖ヶ浦市市内遺跡発掘調査報告書II 根形台遺跡群I』袖ヶ浦市教育委員会
- 石井寛・倉沢和子 1980『折本西原遺跡』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 石川日出志 2000「南関東の弥生社会展開図式・再考」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』株式会社東京堂出版
- 石倉亮治・新田浩二・高梨友子 1999『東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書4 市原市今富新山遺跡・古市場(2)遺跡、千葉市古市場(1)遺跡』千葉県文化財センター調査報告第356集
- 石田広美 1987『白船城跡 第1次』財団法人市原市文化財センター調査報告書第15集
- 市毛勲・須田勉・新田栄治 1977『蛇谷遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告IV 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 市毛勲・滝山昌彦 1967『市原市周辺地域の調査』市原市文化財調査報告書第3冊 市原市教育委員会
- 市毛勲・米田耕之助・西田道世・鷹野光行 1977『西広貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告III 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 伊藤伸久・甲斐博幸他 1996『常代遺跡群』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第112集
- 伊藤伸久 1999『平成11年度千葉県袖ヶ浦市市内遺跡発掘調査報告書II 西原遺跡II』袖ヶ浦市教育委員会
- 稲葉昭智 1993『大竹遺跡群II 二又堀遺跡・大竹古墳群』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第83集
- 稲葉昭智 1995『大竹遺跡群IV 向神納里遺跡・上南原遺跡・狐谷遺跡・大竹古墳群』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第103集
- 犬木努 1992「宮ノ台式土器基礎考 施文帯の検討を中心として」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第11号
- 白居直之 2000「再生される銅釧 帯状円環型銅釧に関する一視点」『長野県埋蔵文化財センター紀要』8
- 会下和宏 2002「東日本の弥生墳墓副葬品に関する覚書 中期後半以降の中部～関東地域を中心に」『博古研究』第23号 博古研究会
- 大賀克彦 2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第4号 日本考古学会
- 大賀克彦 2002「弥生・古墳時代の玉」『考古学資料大観9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨角器』小学館
- 大崎紀子 1993『清水井遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第92集

- 大沢孝 1983「下総地方における北関東系土器と称される後期弥生式土器について」『史館』第14号 史館同人
- 太田文雄・安井健一 1994『石揚遺跡』千葉県文化財センター調査報告第255集
- 大庭重信 1999「方形周溝墓制からみた畿内弥生時代中期の階層構造」『国家形成期の考古学』大阪大学考古学研究室10周年記念論集
- 大村直・菊池健一 1984「久ヶ原式と弥生町式 南関東地方における弥生時代後期の諸様相（予報）」『史館』第16号 史館同人
- 大村直 1987『下鈴野遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第16集
- 大村直 1988「竪穴住居に住む人々」『考古学研究』第34巻第4号 考古学研究会
- 大村直 1989『市原市大厩弁天台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第34集
- 大村直 1991a『市原市姉崎宮山遺跡・小田部向原遺跡・雲ノ境遺跡 不特定遺跡発掘調査報告（1）』財団法人市原市文化財センター調査報告書第40集
- 大村直 1991b「方形周溝墓における未成人中心埋葬について 家族墓・家長墓説批判」『史館』第23号 史館同人
- 大村直 1992a『市原市叶台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第44集
- 大村直 1992b「古代東国社会の基盤」『新版古代の日本第8巻 関東』角川書店
- 大村直 1993「ムラの廃絶・断絶・継続」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅱ
- 大村直 1994「戸張一番割遺跡の甕形」『史館』第25号 史館同人
- 大村直 1996「ムラと方形周溝墓」『関東の方形周溝墓』同成社
- 大村直 2002「弥生・古墳時代のムラ研究について」『ムラ研究の方法 遺跡・遺物から何を読みとるか』帝京大学山梨文化財研究所研究集会論文集4
- 大村直 2004「方形周溝墓」『千葉県の歴史第2巻 資料編 考古4 遺跡・遺構・遺物』千葉県
- 滝口宏 1986「加茂遺跡A地点の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 岡田威夫・松本完・水沢裕子 1984『横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査報告書 No.6遺跡ⅠⅣ』横浜市道高速2号線埋蔵文化財発掘調査団
- 岡田威夫 1988『折本西原遺跡Ⅰ』折本西原遺跡調査団
- 小川浩一 1998「郡本遺跡（4次）」『平成9年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 小川浩一 2000「潤井戸中横峰遺跡（2次）」『市原市文化財センター年報 平成8年度』
- 小久貫隆史 1983『千原台ニュータウンⅡ 草刈遺跡A区（第1次調査）・鶴牧古墳群・人形塚』財団法人千葉県文化財センター
- 小久貫隆史 1996『市原市釈迦山古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
- 小久貫隆史・高梨友子 2001『東関東自動車道（千葉・富津線）埋蔵文化財調査報告書8 袖ヶ浦市椿古墳群』千葉県文化財センター調査報告書第410集
- 小沢洋 1988『宮脇遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第32集
- 小沢洋 1989『マミヤク遺跡 小浜遺跡群Ⅱ』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第44集
- 忍澤成視 1992『市原市山田橋亥の海道貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書第48集
- 忍澤成視 1995『市原市能満上小貝塚』財団法人市原市文化財センター調査報告書第55集
- 忍澤成視 1999『祇園原貝塚』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅴ 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 小高春雄 1995「千葉県における弥生時代後期土器の地域性について」『千葉県文化財センター研究紀要』16
- 小高幸男 1998『美生遺跡群Ⅳ 第2地点』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第142集
- 小高幸男 1999『高砂遺跡Ⅱ』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第154集
- 甲斐忠彦 2000「千葉県における弥生時代後期の土器編年 上総地域」『東日本弥生時代後期の土器編年〔第2分冊〕』第9回東日本埋蔵文化財研究会
- 柿沼修平他 1979『土宇』日本文化財研究所文化財調査報告6
- 加藤修司 1992「千葉県における後期以降の弥生土器の編年観」『奈和』第30号 奈和同人

- 加藤修司 1997「結節文の構造についての一考察 房総地域の後期弥生土器から」『奈和』第35号 奈和同人
- 加藤正信・大谷弘幸 1995『袖ヶ浦市文協遺跡』千葉県文化財センター調査報告書第266集
- 金丸誠 1984『市原市雪解沢遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 菊池義次 1954「南関東彌生式土器編年への一私見」『安房勝山田子台遺跡』早稲田大学考古学研究室
- 木對和紀 1987『市原市郡本遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第14集
- 木對和紀 1988『中潤ヶ広遺跡・天王台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第27集
- 木對和紀 1990『市原市北旭台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第39集
- 木對和紀 1992『市原市椎津茶ノ木遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第49集
- 木對和紀 1994「能満下小貝塚遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和63年度』
- 木對和紀 2004『市原市辺田古墳群・御林跡遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告XII 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 久世辰男 2001『集落遺構からみた南関東の弥生社会』六一書房
- 倉田芳郎・相京建史 1978『千葉・南総中学遺跡』市原市教育委員会
- 黒澤聡 1994『下向山遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第94集
- 黒沢浩 1997「房総宮ノ台式土器考 房総における宮ノ台式土器の枠組み」『史館』第29号 史館同人
- 黒沢浩 1998「続・房総宮ノ台式土器考 房総最古の宮ノ台式土器」『史館』第30号 史館同人
- 黒沢浩 2003「神奈川県ニッ池遺跡出土弥生土器の再検討 「ニッ池式土器」の提唱」『明治大学博物館研究報告』第8号
- 車崎正彦・松本完 1996『下戸塚遺跡の調査 第2部 弥生時代から古墳時代前期』早稲田大学
- 小出紳夫 1995「安須別府台遺跡」『市原市文化財センター年報 平成3年度』
- 小出紳夫・忍澤成規 1997「菊間手永遺跡」『平成8年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 小出紳夫 2002『坊作遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告VI 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 小金井靖 1985「南関東における弥生時代後期土器の一視点 安房地方出土の壺形土器文様構成の検討から」『南総考古』I 房総南部考古学研究グループ
- 小玉秀成 1998「常総地域における弥生土器編年の大枠」『霞ヶ浦沿岸の弥生文化土器からみた弥生社会』第21回特別展 霞ヶ浦町郷土資料館
- 小橋健司 2000『市原市片又木遺跡II』財団法人市原市文化財センター調査報告書第70集
- 小橋健司 2002『市原市加茂遺跡D地点』財団法人市原市文化財センター調査報告書第82集
- 小橋健司 2004『市原市山倉古墳群』上総国分寺台遺跡調査報告XI 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 小林清隆 1990『市原市草刈貝塚 千葉急行線内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』千葉県文化財センター調査報告第171集
- 小林清隆・高梨友子 1999『一般国道410号線埋蔵文化財調査報告書 袖ヶ浦市荒久(1)遺跡・三箇遺跡』千葉県文化財センター調査報告書第349集
- 小林行雄・杉原荘介 1968『弥生式土器集成(本編)2』弥生式土器文化総合研究特別委員会
- 小林理恵 1991『俵ヶ谷遺跡 小浜遺跡群IV』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第54集
- 近藤敏 1987a『南富士台遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第22集
- 近藤敏 1987b『菊間手永遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第23集
- 近藤敏 1995「根田祇園原貝塚(第5次調査)」『市原市文化財センター年報 平成3年度』
- 近藤敏 1998「山田橋大山台遺跡」『市原市文化財センター年報 平成7年度』
- 近藤敏 2000a「山田橋大山台遺跡」『市原市文化財センター年報 平成8年度』
- 近藤敏 2000b「山田橋大山台遺跡」『市原市文化財センター年報 平成9年度』
- 近藤敏 2003「山新遺跡」『第18回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 平成15年度』
- 斉木勝・種田齊吾・菊池真太郎 1974『市原市菊間遺跡』財団法人千葉県都市公社
- 斎木勝・深沢克友 1978「東京湾東岸における弥生中期遺跡の集落構成と出土土器」『研究紀要3 考古学か

- ら見た房総文化3 弥生時代』財団法人千葉県文化財センター
財団法人君津都市文化財センター 1991「大井戸八木遺跡（KT031）」『君津都市文化財センター年報』No.9
平成2年度
- 財団法人千葉県文化財センター 1985「川焼台遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.10
財団法人千葉県文化財センター 1986「川焼台遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.11
財団法人千葉県文化財センター 1987「川焼台遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.12
財団法人千葉県文化財センター 1995「中潤ヶ広遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.20
財団法人千葉県文化財センター 1996「中潤ヶ広遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.21
財団法人千葉県文化財センター 1998「中潤ヶ広遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.22
財団法人千葉県文化財センター 1999a「中潤ヶ広遺跡」『千葉県文化財センター年報』No.23
財団法人千葉県文化財センター 1999b「中潤ヶ広遺跡（2）」『千葉県文化財センター年報』No.24
財団法人千葉県文化財センター 2000「中潤ヶ広遺跡（2）」『千葉県文化財センター年報』No.25
- 阪田正一・藤岡孝司 1986『八千代市ヲサル山遺跡 萱田地区埋蔵文化財調査報告Ⅲ』財団法人千葉県文化財センター
- 酒巻忠史 1992『打越遺跡・神明山遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第64集
酒巻忠史 1996「富津市打越遺跡の再検討 出土土器の編年試案」『君津都市文化財センター研究紀要』Ⅶ
櫻井敦史・黒沢浩 1997『白船城跡Ⅱ』財団法人市原市文化財センター調査報告書第35集
笹森紀己子 1984「久ヶ原式から弥生町式へ 壺形土器の文様を中心に」『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
- 鯨島和大 1994「南関東弥生後期における縄文施文の二つの系統」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』第12号
- 三森俊彦・阪田正一他 1974『市原市大厩遺跡』財団法人千葉県開発公社
島立桂 1992「市原市草刈遺跡J区（千原台地区）」『千葉県文化財センター年報』No.17
集落研究班（當眞嗣史） 1996「弥生時代後期から古墳時代前期の集落研究」『君津都市文化財センター研究紀要』Ⅶ
- 白井久美子・田島新他 1994『千原台ニュータウンⅥ 草刈六之台遺跡』千葉県文化財センター調査報告第241集
- 陣内康光 1991「千葉縣市原市周辺の後期弥生土器 土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動から見た東日本の後期弥生土器第Ⅰ分冊 発表要旨・追加資料篇』東海埋蔵文化財研究会
- 杉山晋作・安藤鴻基・沼沢豊・田中新史 1972『古墳時代研究Ⅰ 千葉縣市原市小田部古墳の調査』古墳時代研究会
- 梶山林継・荒木誠・鈴木容子 1977『請西 千葉県請西遺跡調査報告書』木更津市請西遺跡調査会
鈴木英啓 1986『潤井戸西山遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第9集
須田勉・田中新史 1975『諏訪台古墳群発掘調査概要』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
関根孝夫 1974「網目様捺糸文のある後期弥生土器について」『MUSEUMちば』第5号 千葉県博物館協会
- 高田博 1986『千原台ニュータウンⅢ 草刈遺跡（B区）』財団法人千葉県文化財センター
高橋康男 1985『草刈遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第6集
高橋康男 1988「西広貝塚」『市原市文化財センター年報 昭和61年度』
高橋康男 1994a「東官台遺跡」『平成5年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
高橋康男 1994b「菊間深道遺跡」『平成5年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
高橋康男 2002『市原市向原台遺跡・東向原遺跡』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅶ 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 高橋康男・櫻井敦史 2002『市原市南祇園原遺跡・持塚5号墳・上神台塚群』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅷ 財団法人市原市文化財センター・市原市教育委員会
- 田口一郎 2002「金属器・玉類副葬の北関東弥生墳墓」『月刊考古学ジャーナル』No.491 ニュー・サイエンス社

武部喜充・田口成利 1983『毛尻遺跡発掘調査報告書』市原市毛尻遺跡調査会
 田所真 1998「郡本遺跡群（古甲遺跡第4次）」『市原市文化財センター年報 平成7年度』
 田所真 2000「山田橋玄の海道遺跡」『市原市文化財センター年報 平成8年度』
 田所真 2000a「潤井戸鎌之助遺跡」『市原市文化財センター年報 平成9年度』
 田所真 2000b「郡本遺跡群（古甲遺跡第5次）」『市原市文化財センター年報 平成8年度』
 田所真 2001「潤井戸鎌之助遺跡」『市原市文化財センター年報 平成10年度』
 田村隆・加納実・高柳圭一他 1996『市原市武士遺跡Ⅰ』千葉県文化財センター調査報告第289集
 田中新史 1976「南向原遺跡」『南向原 古墳・方形周溝墓・住居址の調査』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅱ
 上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
 田中新史 1977「市原市神門四号墳の出現とその系譜」『古代』第63号 早稲田大学考古学会
 田中新史 1980「古墳の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
 田中新史 1984「出現期古墳の理解と展望」『古代』第77号 早稲田大学考古学会
 田中新史 2000『上総市原台の光芒 市原古墳群調査と上総国分寺台遺跡調査団』市原古墳群刊行会
 田中清美・鈴木英啓 1981『唐崎台遺跡 千葉県市原市能満唐崎台における弥生時代後期の集落址の発掘』
 唐崎台遺跡発掘調査団・市原市教育委員会
 田中清美 1982『千葉県市原市潤井戸地区祭り野遺跡・山王後古墳』祭り野遺跡・山王後古墳発掘調査団
 田中清美 1989『千草山遺跡・東千草山遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第29集
 田中清美 1993「唐崎台遺跡の竪穴住居跡等の編年試案」『市原市文化財センター研究紀要』Ⅱ
 田中清美 1994「大厩細野遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和63年度』
 田中清美 1995『市原市郡本遺跡（第2次）』財団法人市原市文化財センター調査報告書第56集
 田中清美 1996「勝間上座頭橋遺跡」『市原市文化財センター年報 平成4年度』
 田中清美 2002『釜神遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第76集
 田中大介 2002「南岩崎遺跡」『第17回市原市文化財センター遺跡発表会要旨 平成13年度』
 玉口時雄 1978『健田遺跡 第2次発掘調査報告』朝夷地区教育委員会
 玉口時雄・小金井靖 1979『健田遺跡 第3次調査報告書』朝夷地区教育委員会
 千葉県教育庁生涯学習部文化課 1994『千葉県重要古墳群測量調査報告書 市原市姉崎古墳群』千葉県教育委員会
 千葉県教育庁生涯学習部文化課 1995『千葉県重要古墳群測量調査報告書 市原市菊間古墳群』千葉県教育委員会
 対馬郁夫・谷島一馬・浅利幸一・柿沼広 1976「加茂遺跡C地点の調査」『上総国分寺台発掘調査概要Ⅲ』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
 鶴岡英一 1999『市原市郡本遺跡（第4次）』財団法人市原市文化財センター調査報告書第61集
 鶴岡英一 2000a「稲荷台遺跡」『平成11年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
 鶴岡英一 2000b「潤井戸天王台古墳群」『市原市文化財センター年報 平成9年度』
 鶴岡英一 2001「潤井戸鎌之助遺跡（第2次）」『市原市文化財センター年報 平成10年度』
 當眞嗣史 2001『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅶ 庚申塚A遺跡・庚申塚B遺跡』木更津市教育委員会
 當眞嗣史 2002『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅷ 大山台遺跡（古墳群ならびに方形周溝墓群）』木更津市教育委員会
 當眞紀子 1995『神田遺跡・神田古墳群』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第101集
 土器A研究班（酒巻忠史） 1996「甕形土器の様相から見た君津地方の小地域性」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅶ
 土器B研究班（小沢洋・諸墨知義） 1996「君津地方における弥生後期～古墳前期土器の土器編年」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅶ
 戸田哲也 2000「中里遺跡の調査」『中里遺跡講演会 東日本弥生時代の幕開けを解明する』平成12年度小田原市遺跡調査発表会要旨 小田原市教育委員会
 豊田秀治 1991「市原市草刈遺跡Ⅰ区（千原台地区）」『千葉県文化財センター年報』No.16
 永沼律朗 1992『市原市今富塚山古墳確認調査報告書』千葉県文化財センター調査報告書第221集

- 中能隆 1998『上泉遺跡群上ノ山遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第148集
- 中村勉 2001「銅環とよばれる青銅器について 東日本出土の青銅器に関する一つの考察」『貝塚』No.56
物質文化研究会
- 中山正典・中鉢賢治 1994『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ） 本文編・図版編』静岡県埋蔵文化財調査研究所研究
報告第47集
- 西原崇浩 1997「木更津市中尾遺跡群東谷遺跡の弥生時代の環濠集落」『君津都市文化財センター第4回遺跡
発表会資料』
- 西原崇浩 2002『高部古墳群Ⅰ 前期古墳の調査』千束台遺跡群発掘調査報告書Ⅵ 木更津市教育委員会
- 西原崇浩・桐山久美子 2002『中尾遺跡群Ⅱ 東谷古墳群・東谷塚群・東谷十三塚』財団法人君津都市文化
財センター発掘調査報告書第175集
- 新田浩三 1998「市原条里制遺跡」『平成9年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』千葉県文化財法人連絡
協議会
- 沼沢豊・深沢克友・森尚登 1978『佐倉市飯合作遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 能城秀喜 1994『林遺跡Ⅱ』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第86集
- 能城秀喜 1996『寒沢遺跡・寒沢古墳群・愛宕古墳群・上用瀬遺跡』財団法人君津都市文化財センター発掘
調査報告書第116集
- 能城秀喜・稲葉理恵他 2002『根形台遺跡群Ⅱ』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第176集
- 野中徹・杉山春信他 2000『千葉県鴨川市東条地区遺跡群発掘調査報告書』鴨川市遺跡調査会埋蔵文化財調
査報告第6集 鴨川市遺跡調査会・鴨川市教育委員会
- 蜂屋孝之・小橋健司 1999『市原市山田橋表通遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第28集
- 浜崎雅仁 1993『美生遺跡群Ⅱ 第4・5・9地点』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第93集
- 林原利明・東洋大学未来考古学研究会 1985「安房郡千倉町健田遺跡・葉師前遺跡の調査」『南総考古』Ⅰ
房総南部考古学研究グループ
- 半田堅三 1976『武士遺跡』武士遺跡発掘調査団
- 半田堅三 1977「台遺跡A地点の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員
会
- 半田堅三・白井久美子 1982「長平台遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』上総国分寺台遺跡調査
団・市原市教育委員会
- 半田堅三 1985「能満分区遺跡群」『市原市文化財センター年報 平成3年度』
- 半田堅三 1994「能満分区遺跡群」『市原市文化財センター年報 平成2年度』
- 半田堅三 1997a「山田橋大塚台遺跡」『市原市文化財センター年報 平成5年度』
- 半田堅三 1997b「姉崎六孫王原遺跡」財団法人市原市文化財センター調査報告書第58集
- 半田堅三 2003『市原市台遺跡B地点』上総国分寺台遺跡調査報告Ⅹ 財団法人市原市文化財センター・市
原市教育委員会
- 比田井克仁 2003「久ヶ原式土器成立考」『法政考古学』第29号 法政考古学会
- 平野元三郎・対馬郁夫・谷島一馬・菊池義次 1975『天神台遺跡発掘調査概報』上総国分寺台遺跡発掘調査
団・市原市教育委員会
- 深澤克友・白井久美子 1981「諏訪台古墳群の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・
市原市教育委員会
- 深澤克友 1993「草刈（くさかり）遺跡」『シンポジウム2 東日本における古墳出現過程の再検討 日本考
古学協会1993年度新潟大会』日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 牧野光隆 2000「永吉花ノ台遺跡」『市原市文化財センター年報 平成8年度』
- 牧野光隆 2001a「能満遺跡群二階台地点」『平成12年度市原市内遺跡発掘調査報告』市原市教育委員会
- 牧野光隆 2001b「山田橋大塚台遺跡（2次）」『市原市文化財センター年報 平成10年度』
- 松本完 1993「南関東地方における後期弥生土器の編年と地域性」『翔古論聚 久保哲三先生追悼論文集』
久保哲三先生追悼論文集刊行会
- 光江章 1984『金井崎遺跡発掘調査報告書』財団法人君津都市文化財センター発掘調査報告書第7集

- 光江章 1991『金井崎遺跡発掘調査報告書 君津郡市文化財センター研究紀要別冊』
- 簗島正広 1992『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅳ 庚申塚A遺跡・庚申塚B遺跡・山伏作古墳群第22号墳』木更津市教育委員会
- 宮内勝己・大沢孝・阿部寿彦他 1993『高岡遺跡群Ⅱ』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第71集
- 村上恭通 2002『鉄器の普及と生産・流通』『季刊考古学』第80号 雄山閣出版株式会社
- 諸墨知義 1993「小櫃川流域における後期弥生土器について マミヤク遺跡を中心として」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅵ
- 文様研究班（小沢洋・黒澤聡・今坂公一） 1996「君津地方における弥生後期土器の文様構成」『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅶ
- 谷島一馬 1977「加茂遺跡B地点の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 谷島一馬 1979「御林跡遺跡の調査」『上総国分寺台調査概報』上総国分寺台遺跡調査団・市原市教育委員会
- 山岸良二（編） 1996『関東の方形周溝墓』同成社
- 山岸良二 2000「再検討・千葉県内の「方形周溝墓」第9回」『東邦考古』第24号 東邦大学付属東邦高等学校
- 山口直樹 1984『小田部新地遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第4集
- 山下亮介 1984『天王台遺跡』墨田区教育委員会
- 山本哲也 1992『文協遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第69集
- 米田耕之助 1986『山田大宮遺跡』財団法人市原市文化財センター調査報告書第8冊
- 若狭徹 2002「古墳時代の地域経営 上毛野クルマ地域の3～5世紀」『考古学研究』第49巻第2号 考古学研究会

写真図版





稲荷台遺跡

千草山遺跡

山田橋大山台遺跡

現山倉ダム貯水池



山田橋大山台遺跡遠景(南方から)



山田橋大山台遺跡遠景(北方から)



山田橋大山台遺跡遠景(東方から)



山田橋大山台遺跡空中垂直写真(各年度合成)



山田橋遺跡群全景(山田橋表通遺跡調査時、1985年度撮影)



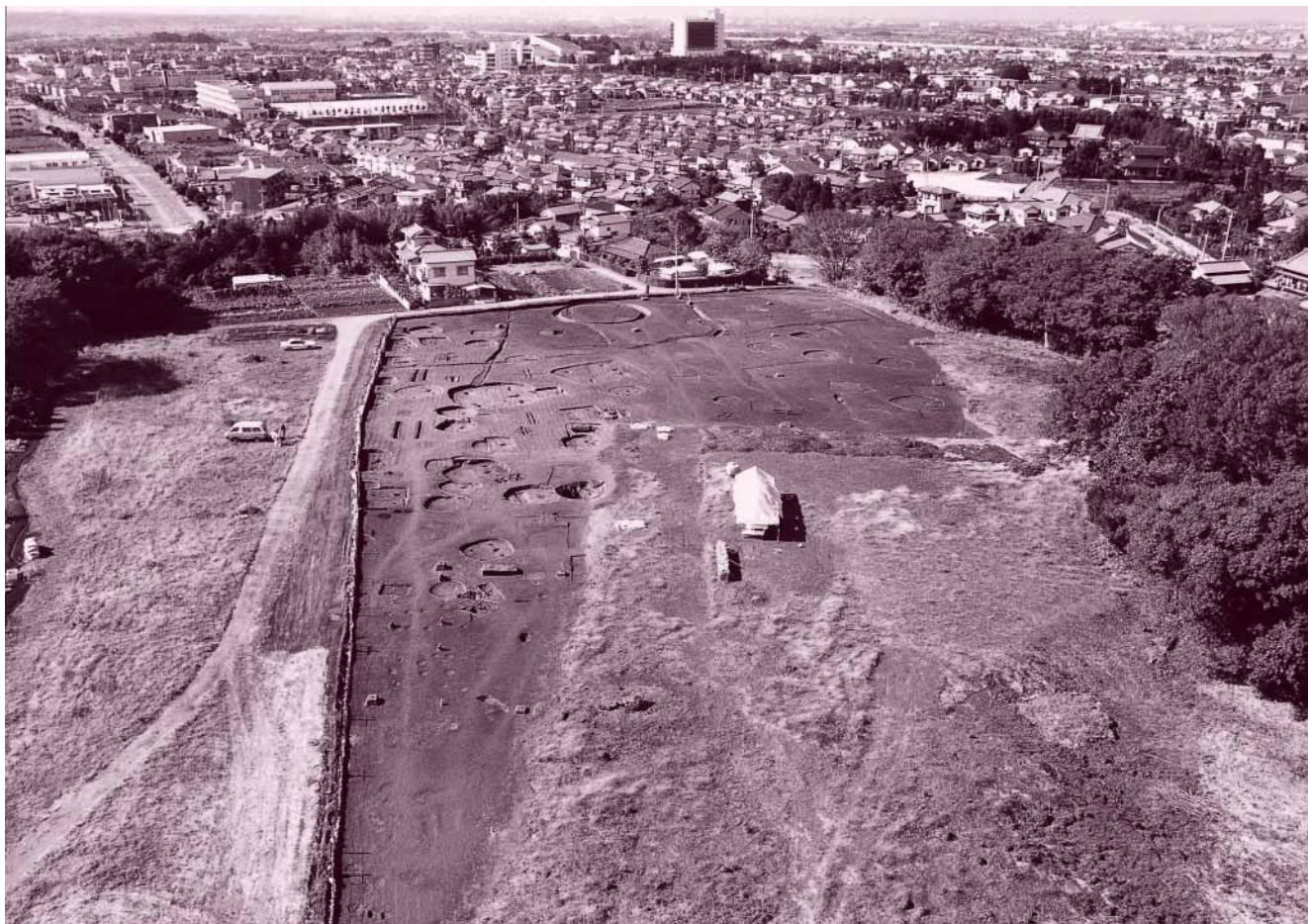
山田橋表通遺跡全景(1985年撮影)



山田橋大山台遺跡平成7年度調査区



山田橋大山台遺跡平成9年度調査区



山田橋大山台遺跡平成7年度調査区(東方から)



山田橋大山台遺跡平成7年度調査区(北方から)



調査前状況(東方から谷部方面)



調査前状況(西方から)



確認調査状況



確認調査状況



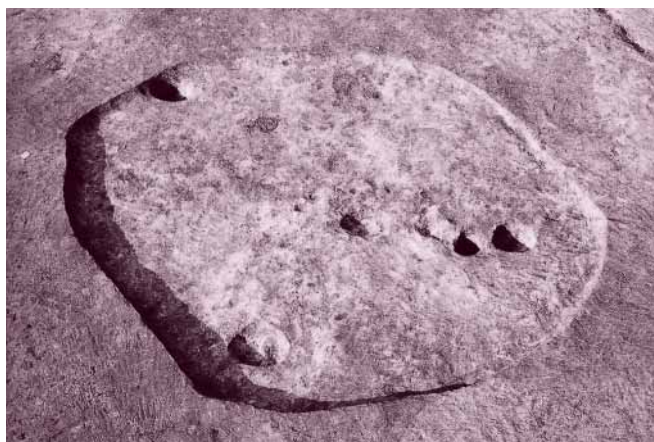
1号竪穴



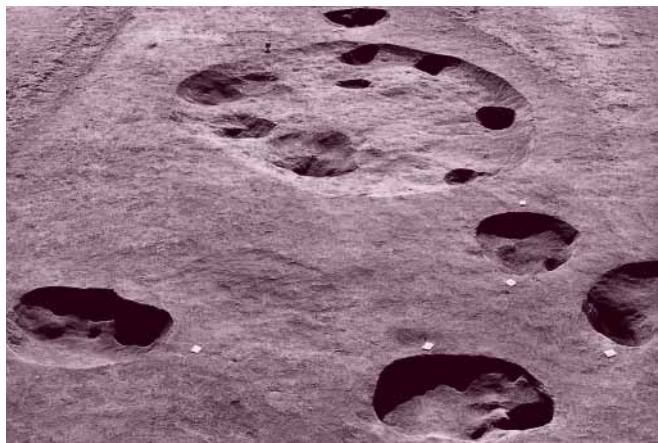
2号竪穴



3号竪穴



4号竪穴



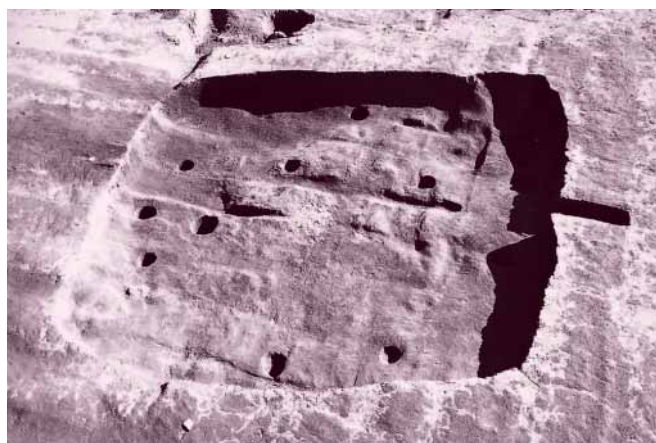
5号竖穴



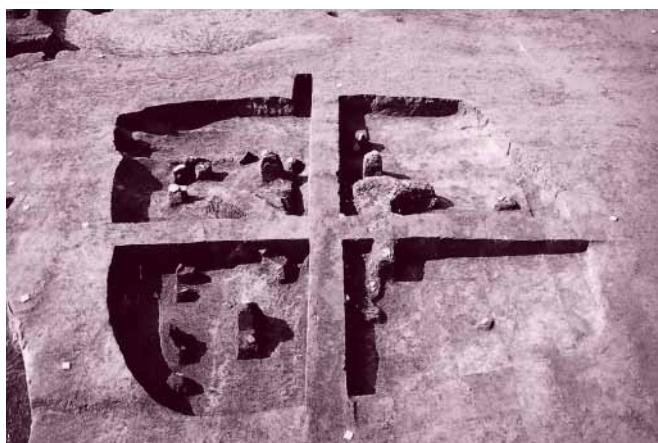
6号竖穴



7号竖穴



7号竖穴



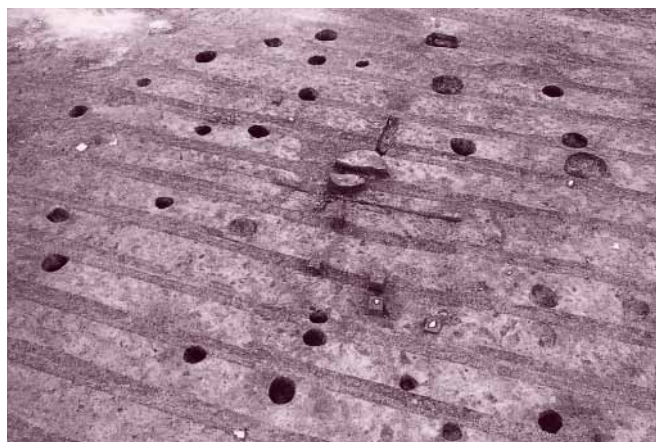
7号竖穴貝層検出状況



7号竖穴貝層検出状況



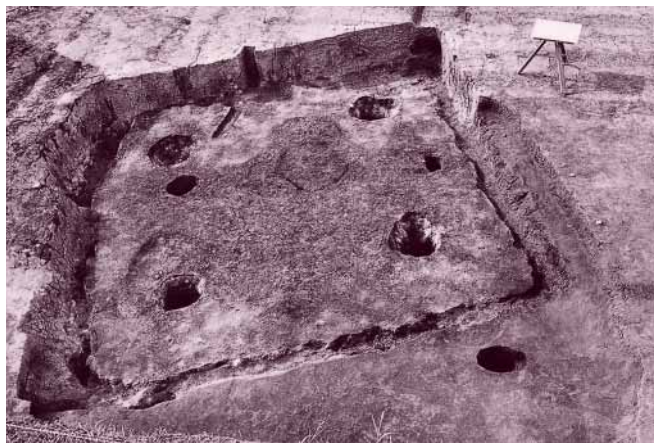
8号竖穴



9号竖穴



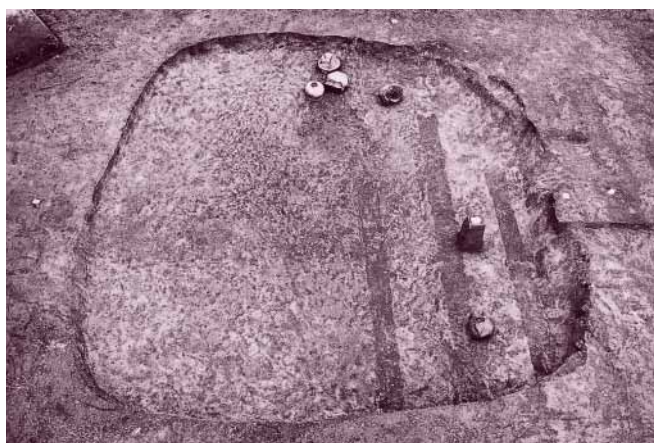
10号竖穴



11・121号竖穴



12号竖穴



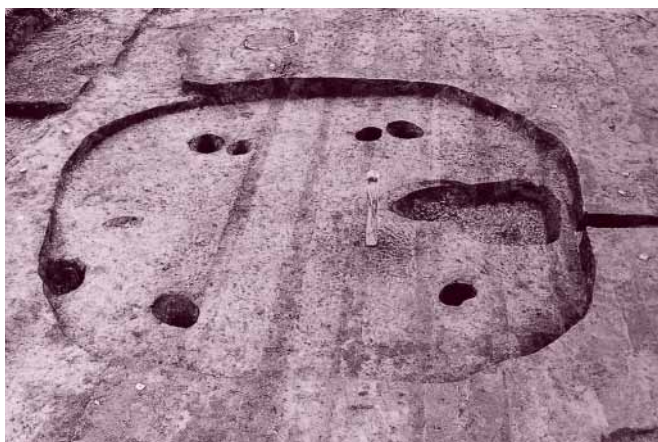
12号竖穴



12号竖穴炉周边遺物出土状況



13号竖穴



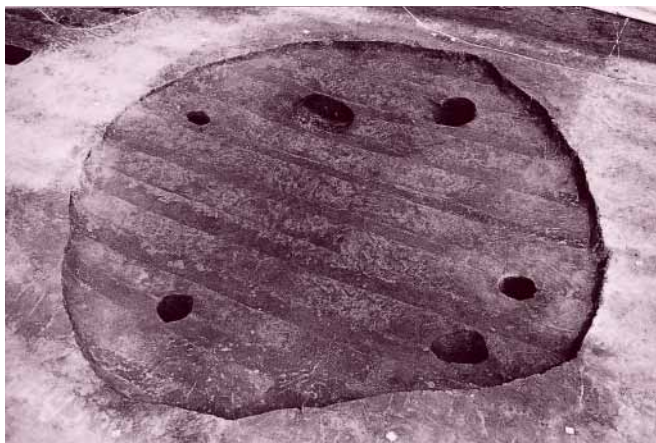
14号竖穴



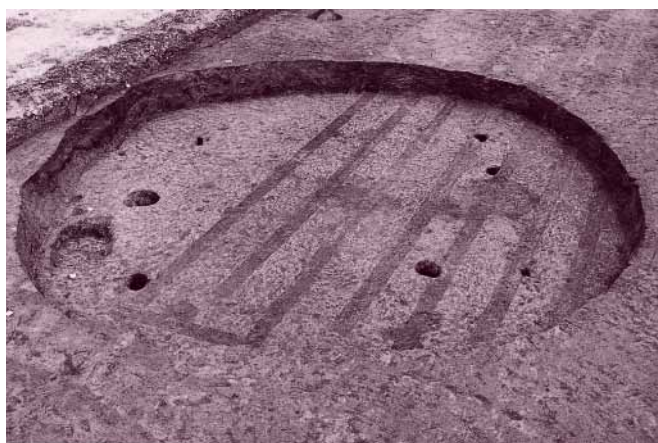
15号竖穴



16・17号竖穴



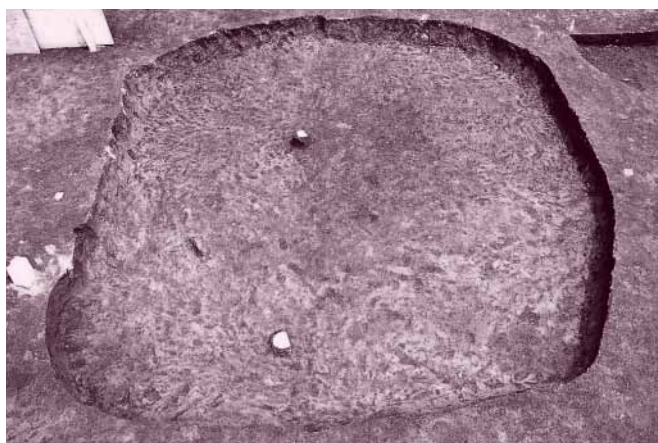
18号竖穴



19号竖穴



20号竖穴



21号竖穴



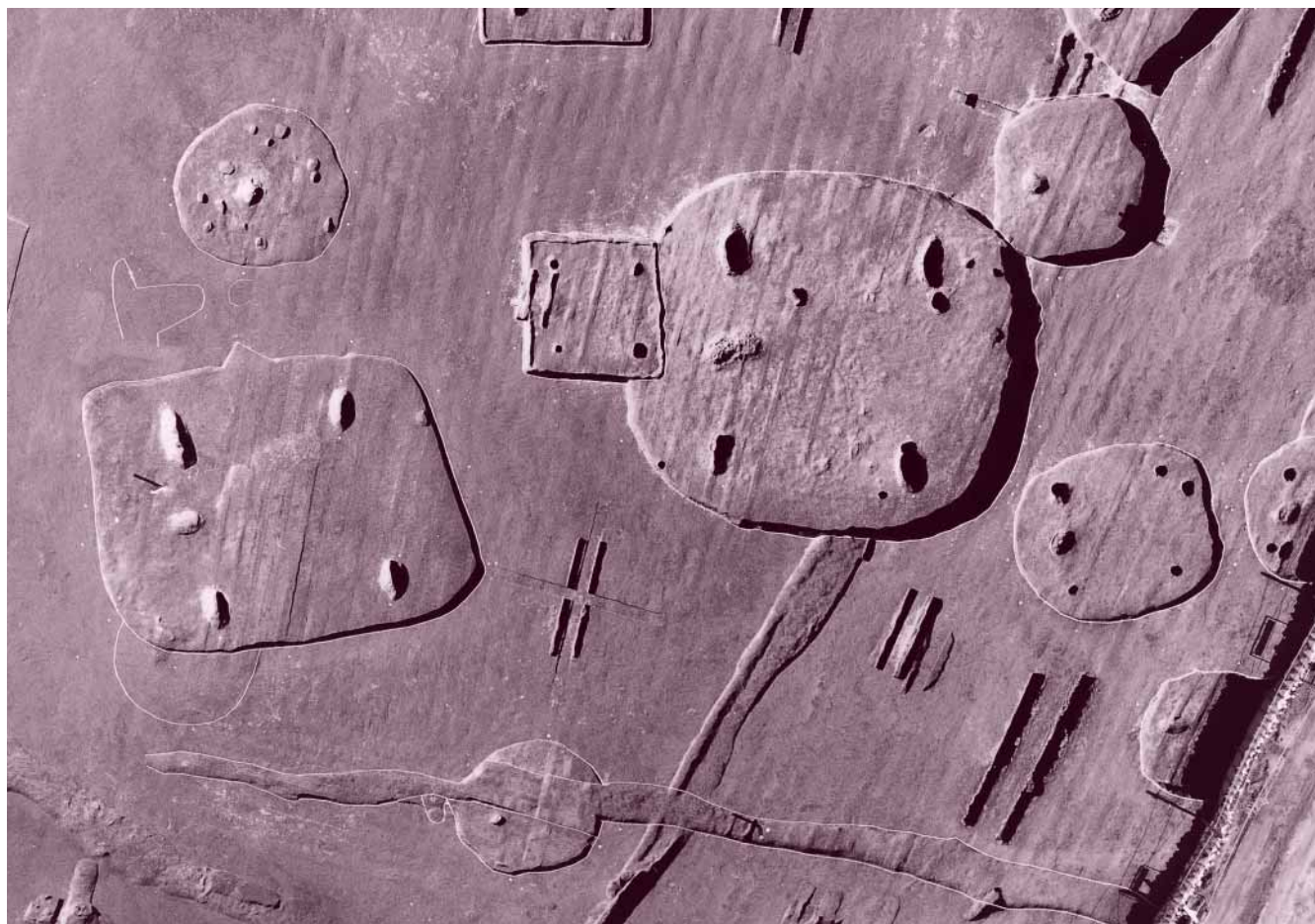
22号竖穴



23・24号竖穴



25号竖穴周边全景



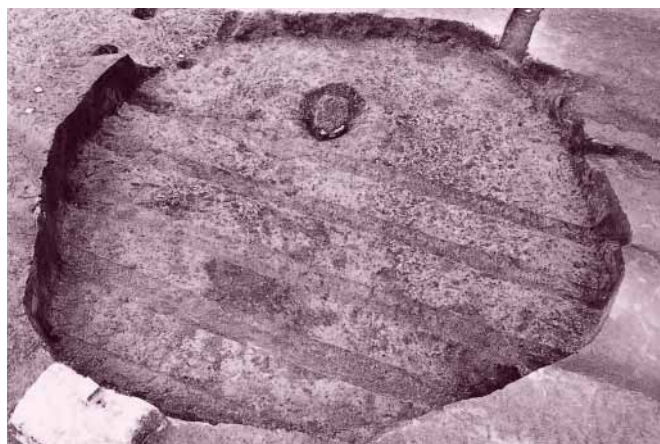
24・25号竖穴周边垂直写真



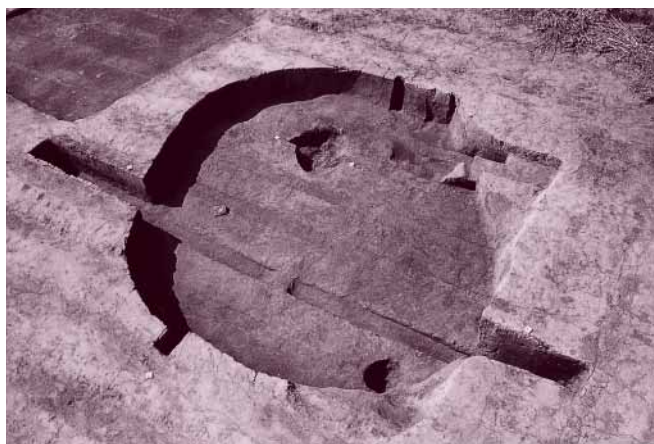
25号竖穴



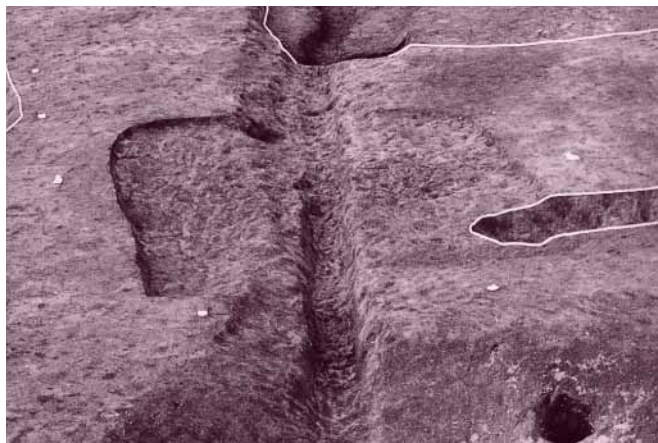
25号竖穴



26号竖穴



27号竖穴



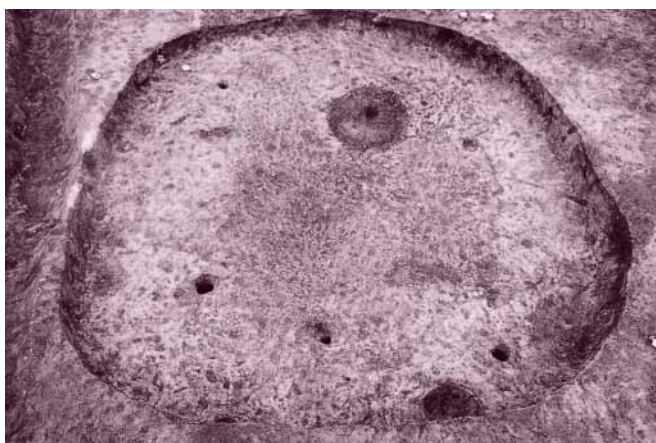
28号竖穴



29号竖穴、2号方形周溝墓主体部調査状況



30号竖穴



31号竖穴



31号竖穴



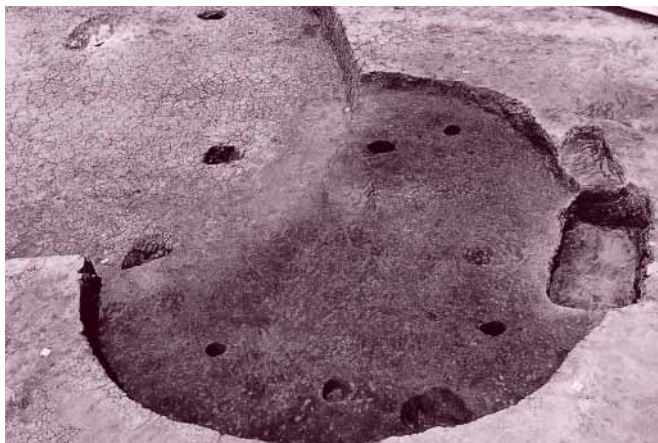
32号竖穴



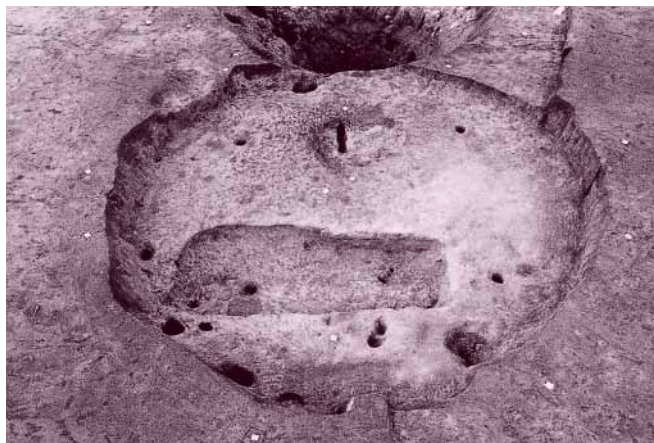
33号竖穴



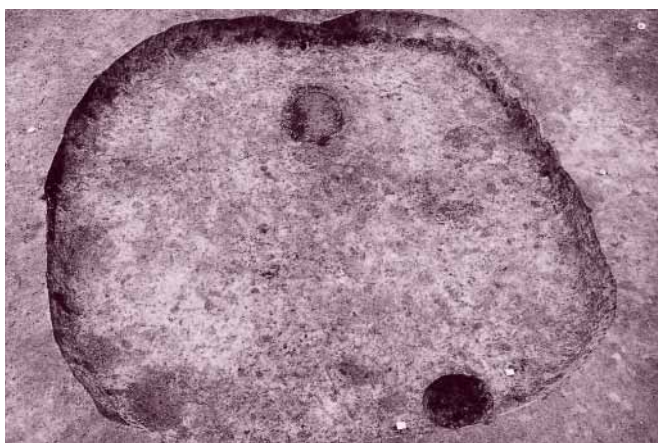
34号竖穴



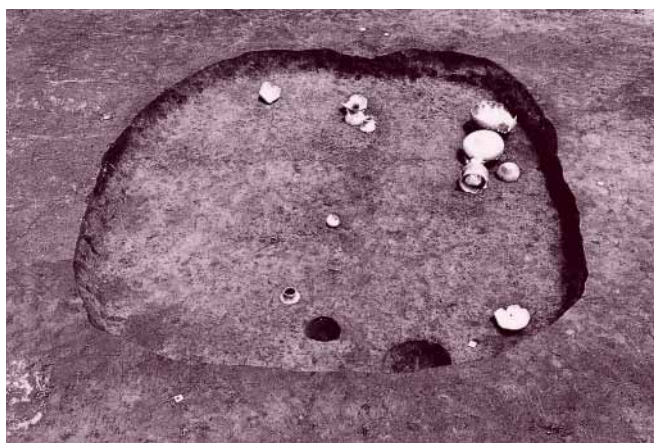
35号竖穴



36号竖穴、2号木棺土坑墓



37号竖穴



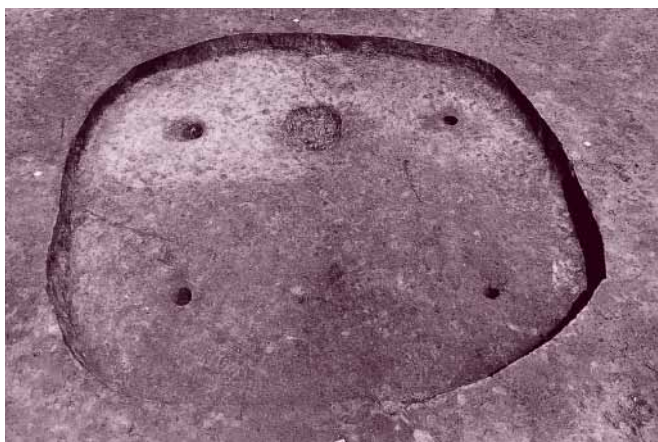
37号竖穴



37号竖穴



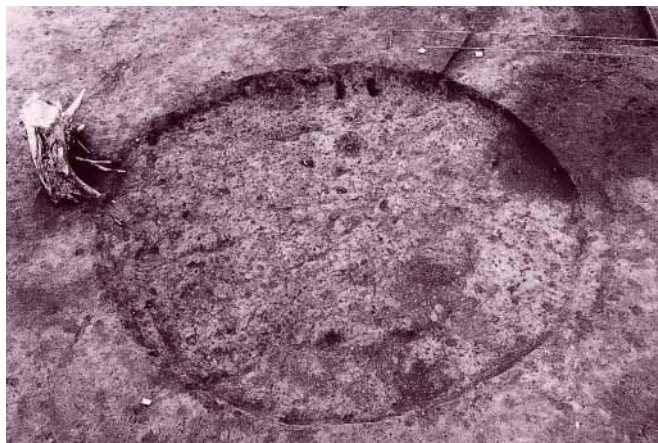
37号竖穴



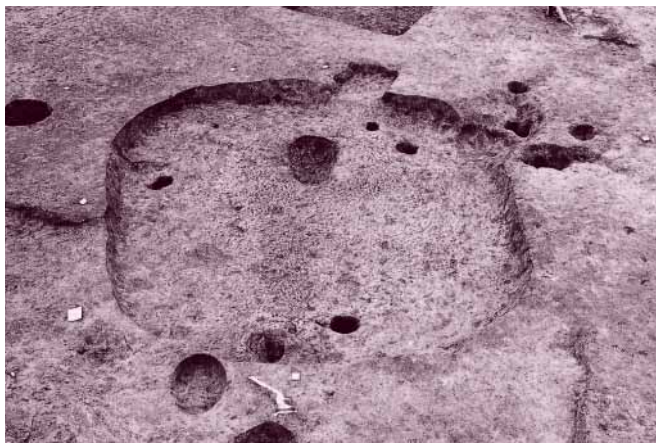
38号竖穴



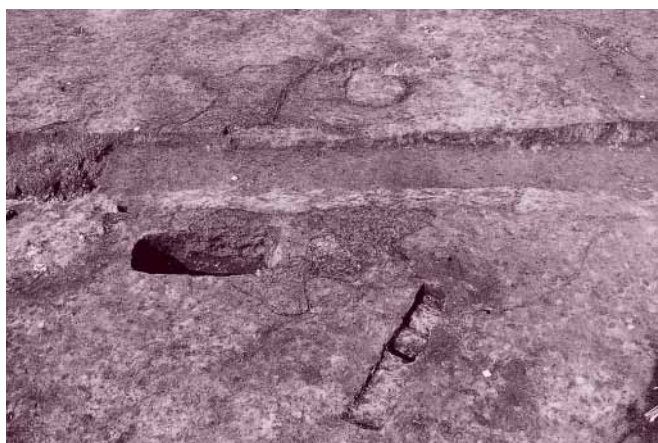
39号竖穴



39号竖穴



40号竖穴



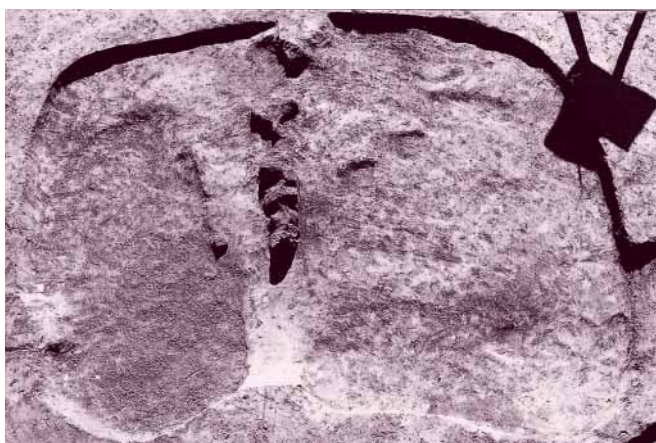
41号竖穴



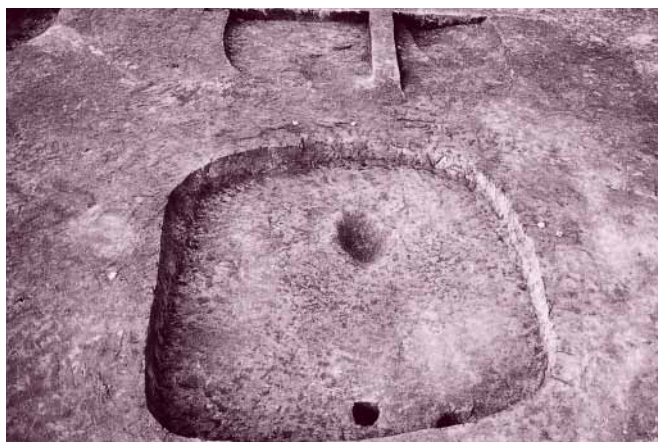
42号竖穴



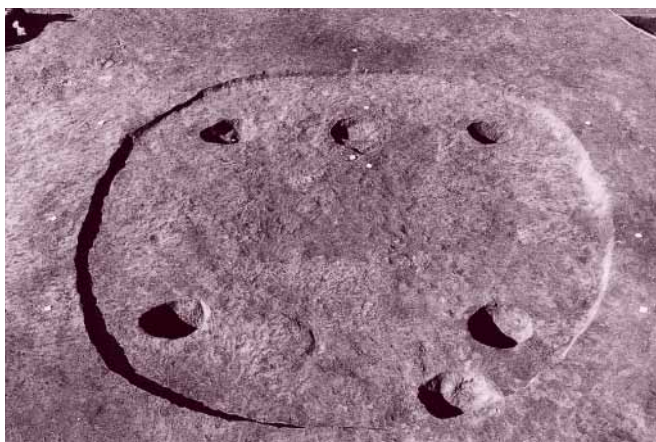
42号竖穴



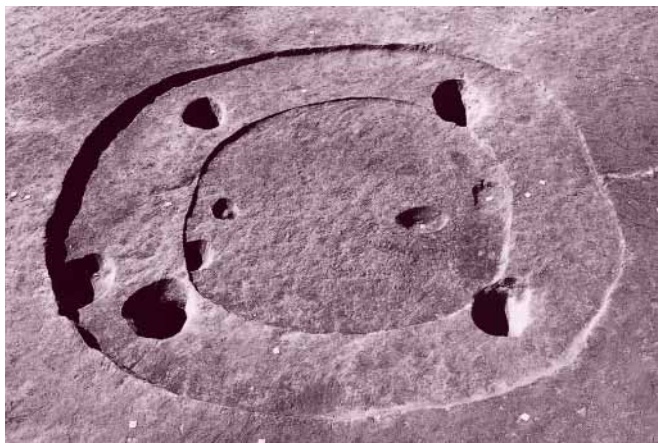
43号竖穴



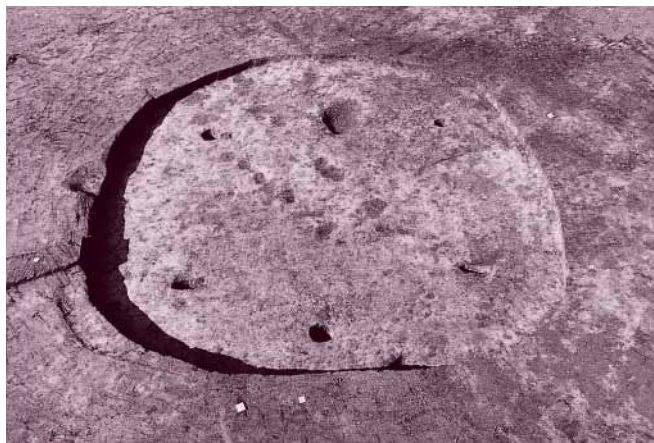
44号竖穴



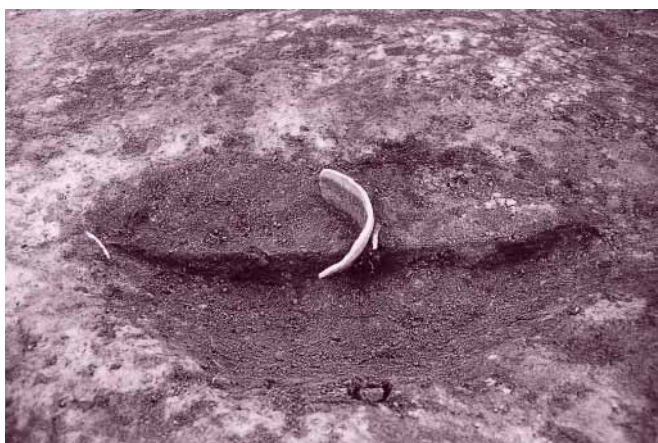
45号竖穴



45・46号竖穴



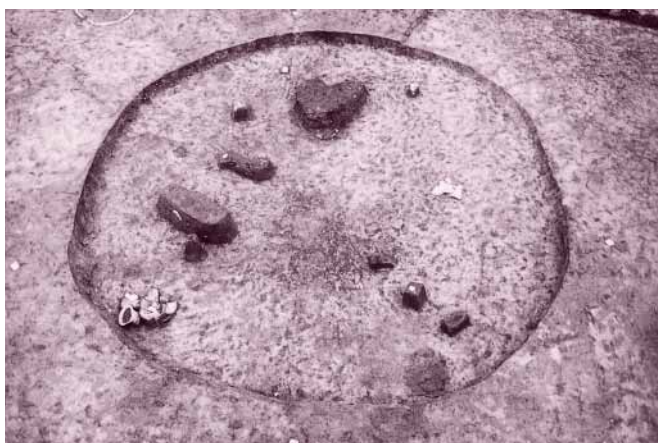
47号竖穴



47号竖穴 炉



48号竖穴



48号竖穴



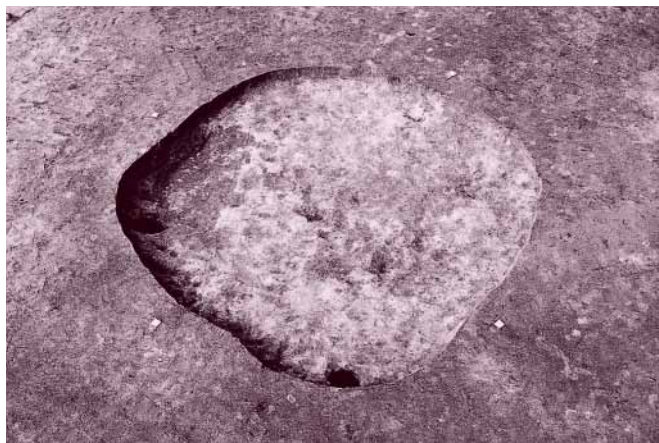
48号竖穴



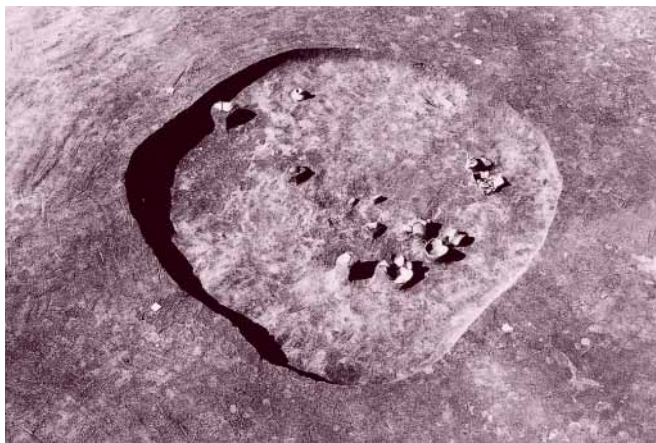
49号竖穴



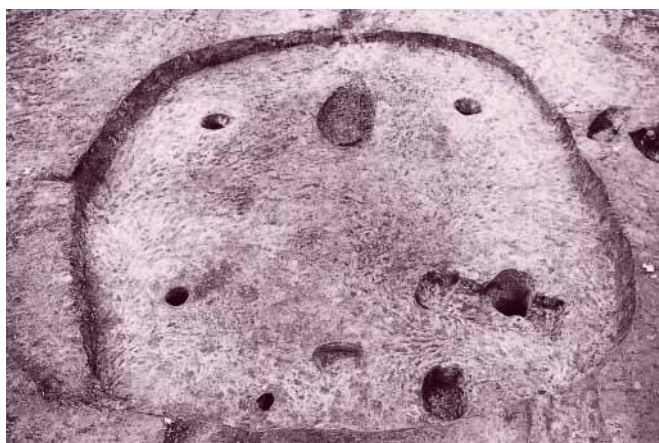
50号竖穴



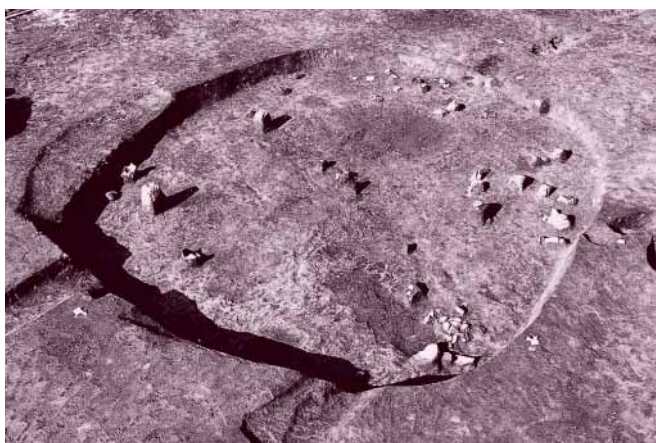
51号竖穴



51号竖穴



52号竖穴



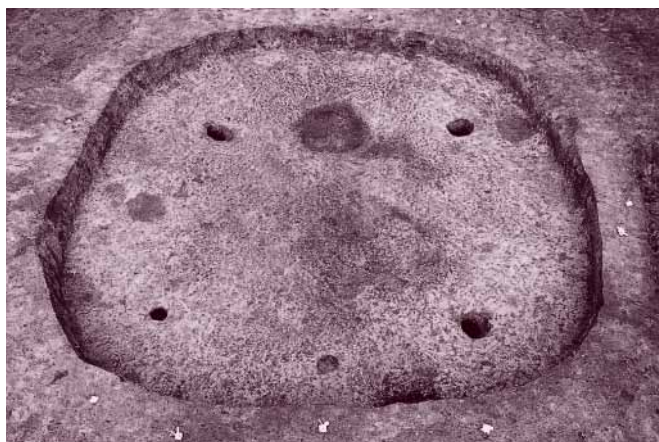
52号竖穴



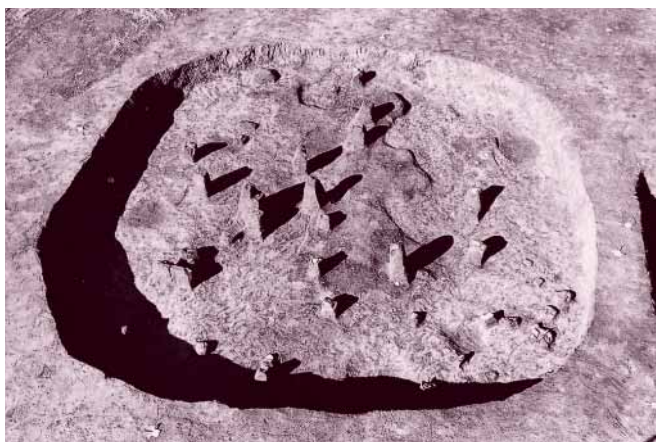
53号竖穴



53号竖穴



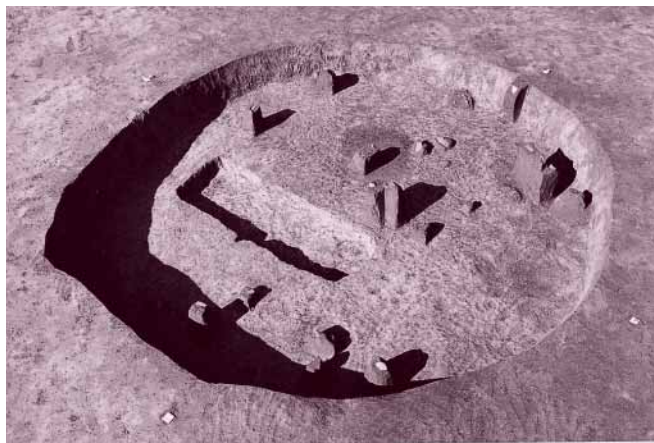
54号竖穴



54号竖穴



55号竖穴



55号竖穴



56号竖穴



56号竖穴



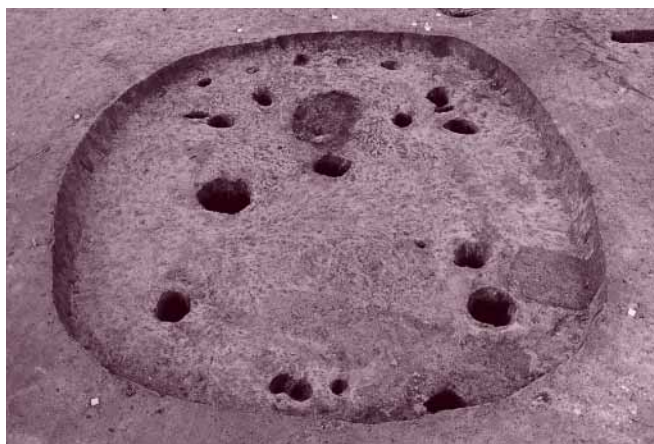
57号竖穴



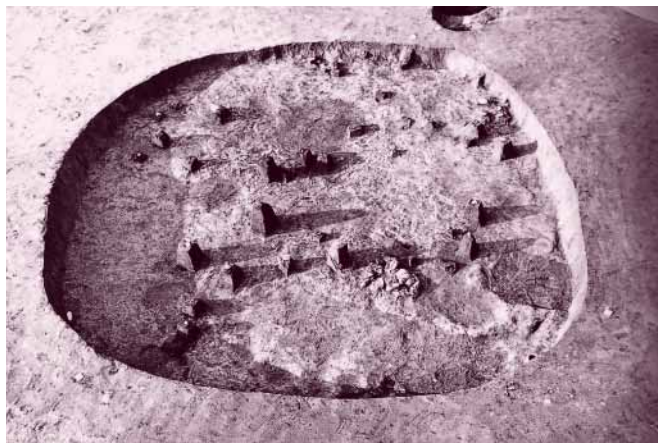
58号竖穴



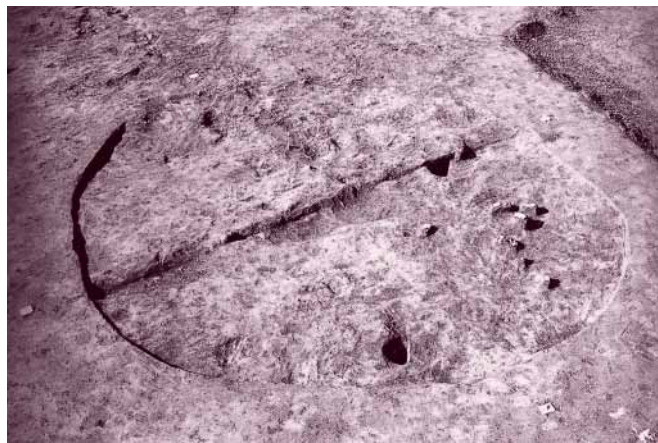
59号竖穴



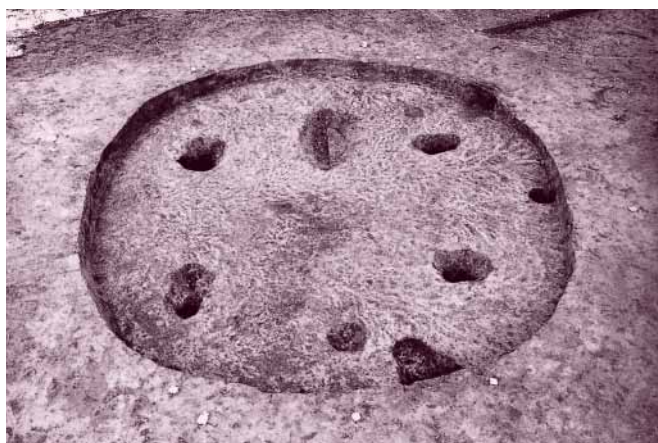
60号竖穴



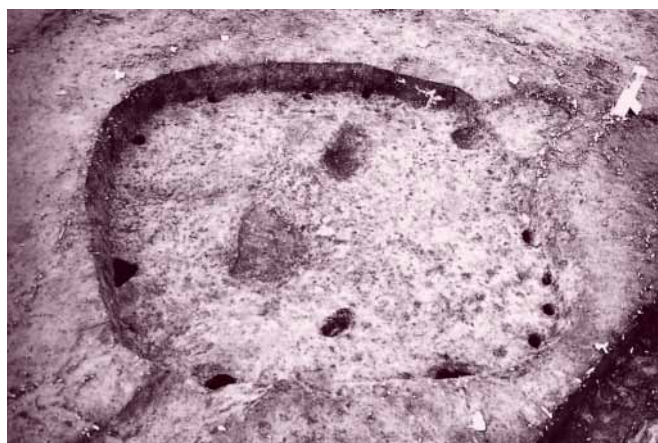
60号竖穴



61号竖穴



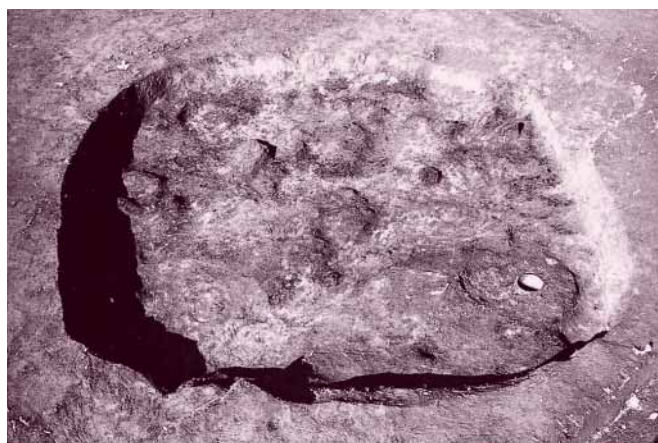
62号竖穴



63号竖穴



63号竖穴



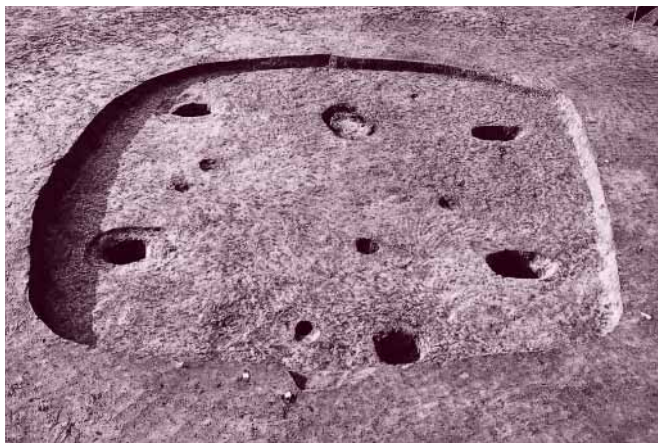
63号竖穴



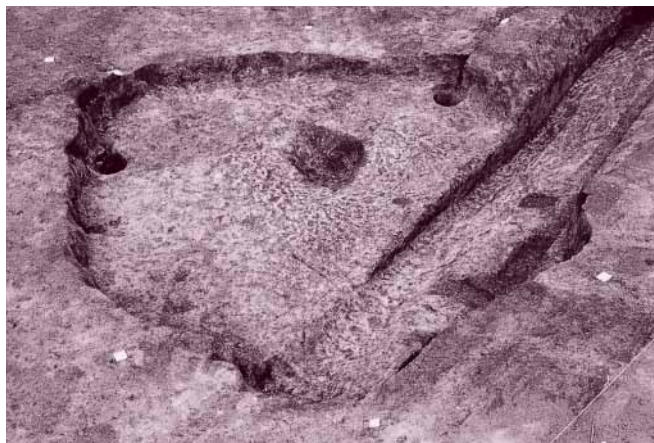
63号竖穴



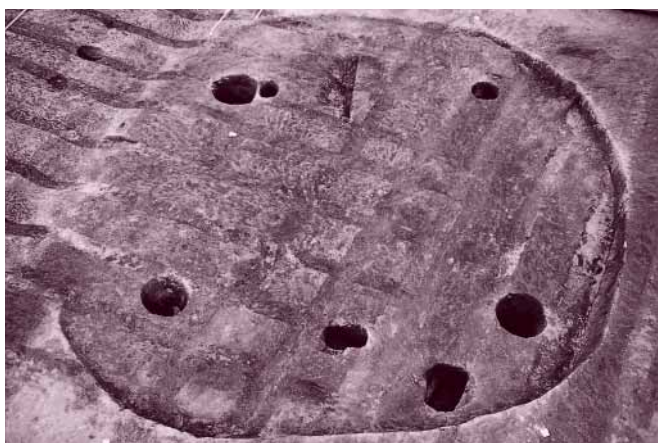
63号竖穴



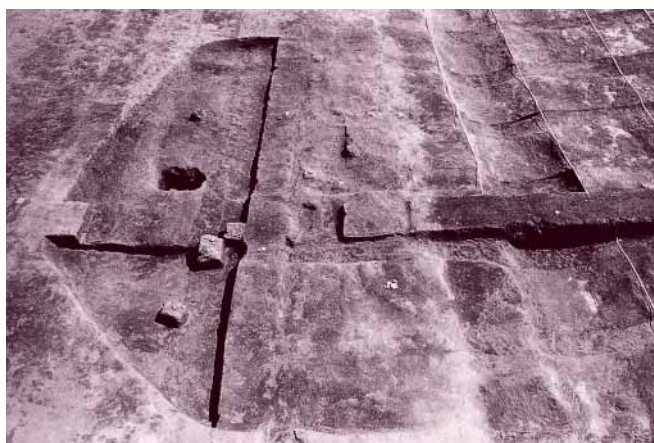
64号竖穴



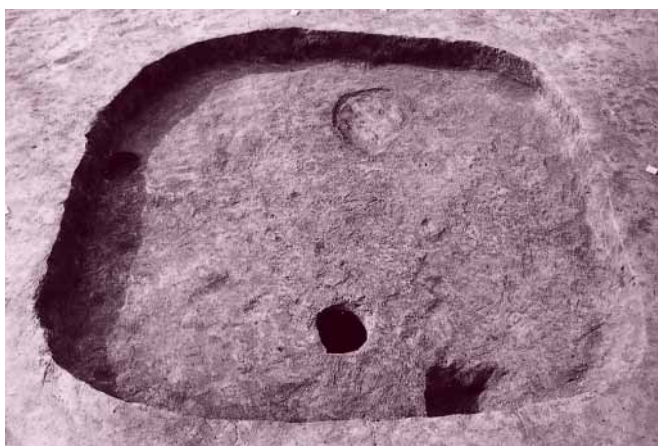
65号竖穴



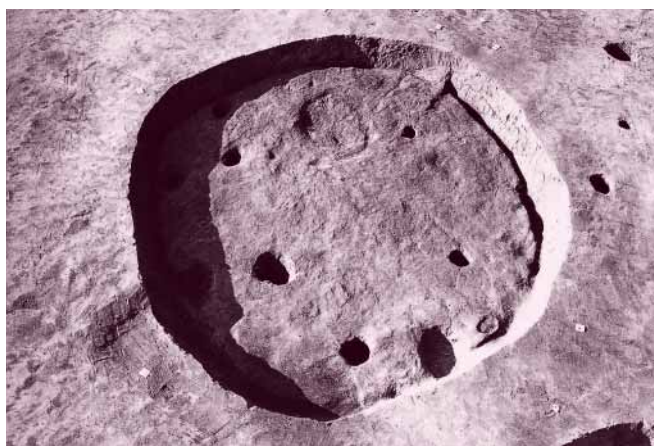
66号竖穴



67号竖穴



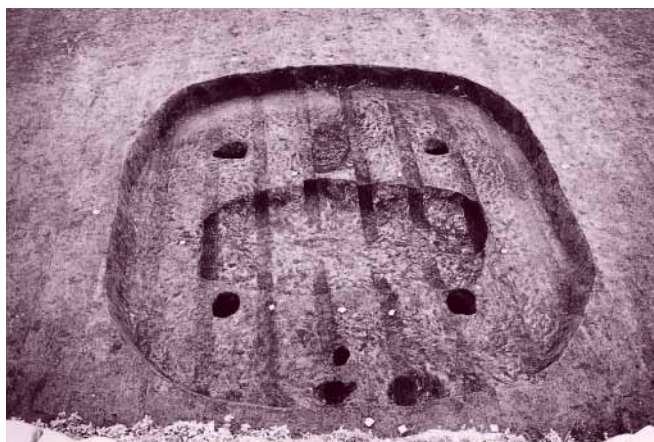
68号竖穴



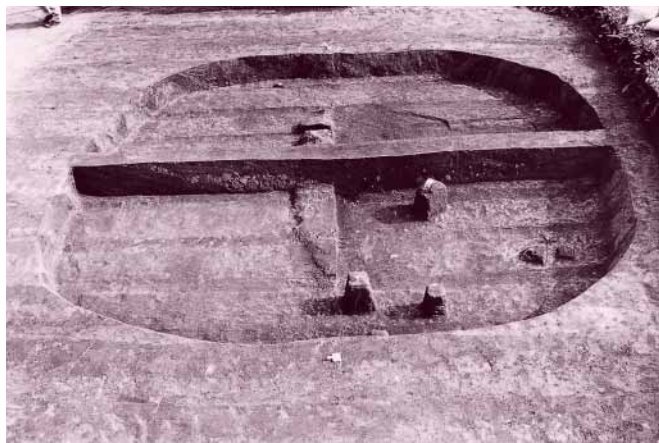
69号竖穴



70号竖穴



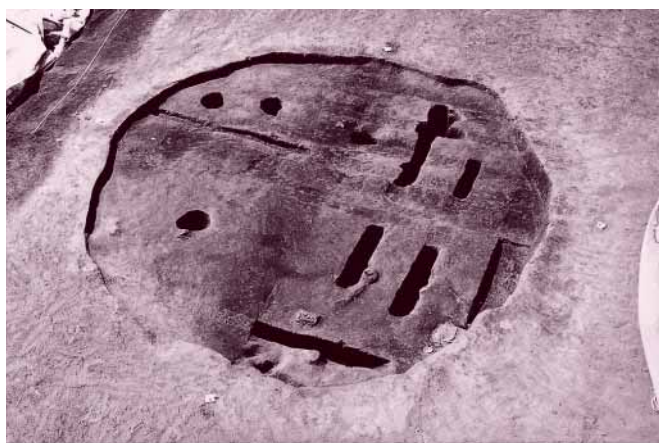
71号竖穴、3号木棺土坑墓



71号竖穴、3号木棺土坑墓検出状況



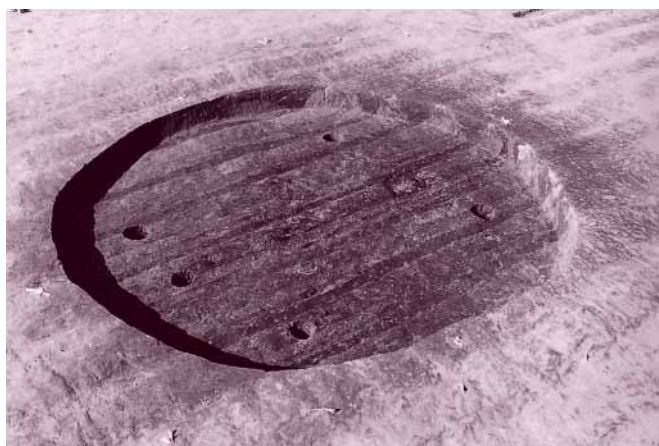
71号竖穴



72号竖穴



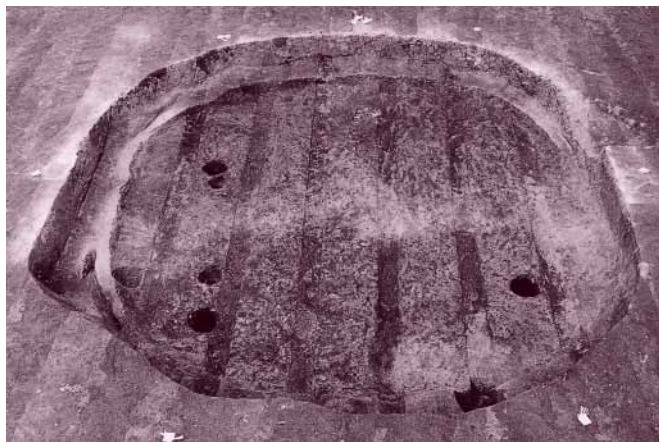
73号竖穴



74号竖穴



75号竖穴



76号竖穴



77号竖穴



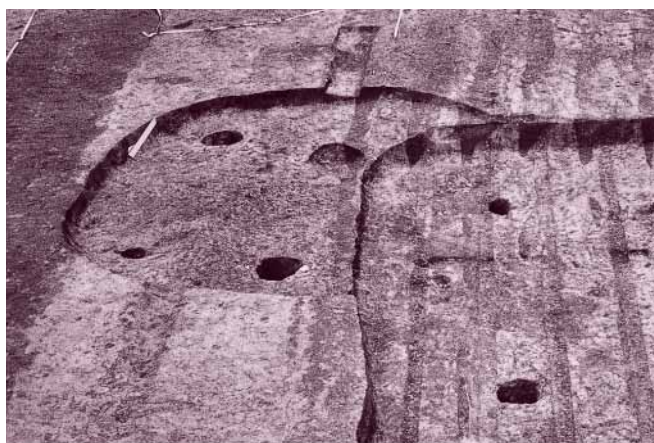
77号竖穴



78号竖穴



79号竖穴



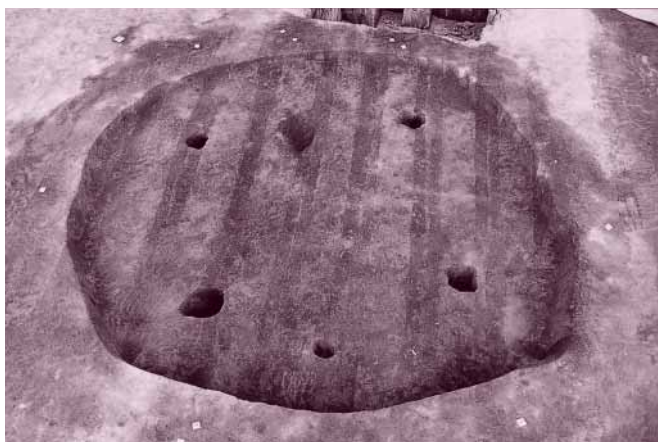
80号竖穴



81号竖穴



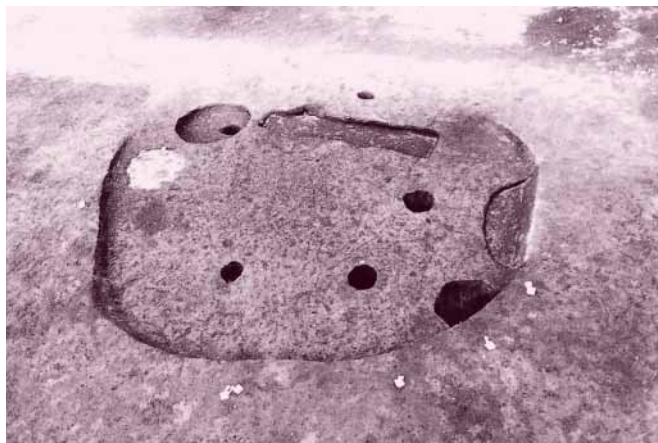
82号竖穴



83号竖穴



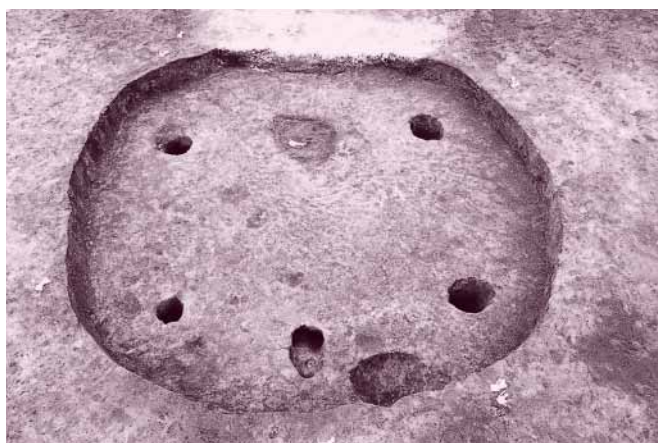
84号竖穴



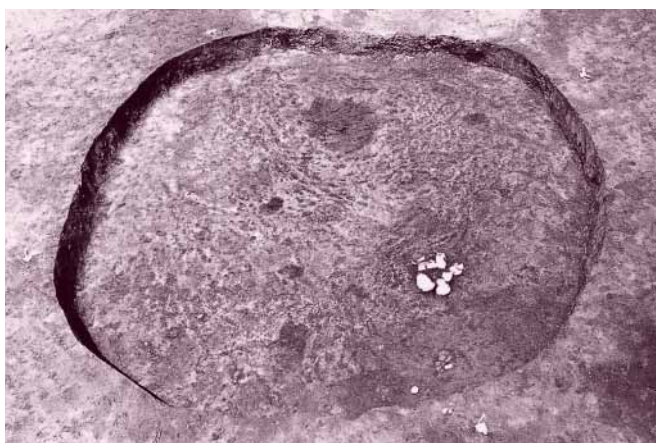
86号竖穴



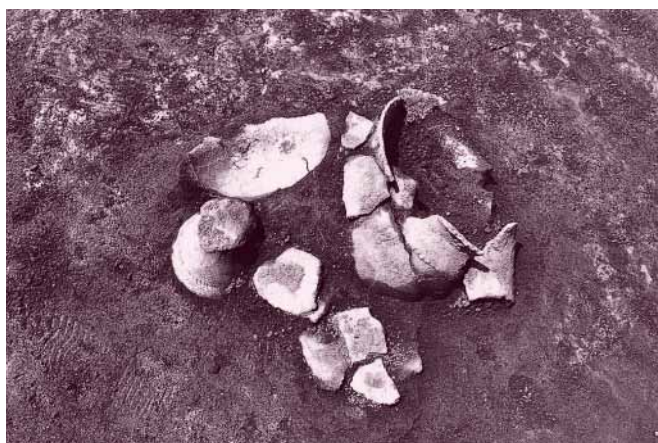
86号竖穴



87号竖穴



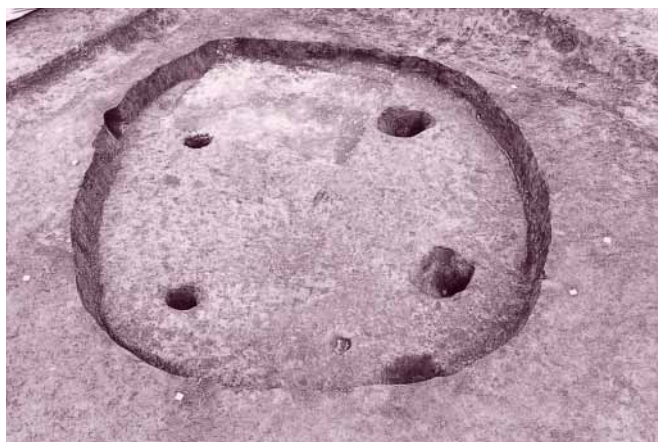
87号竖穴



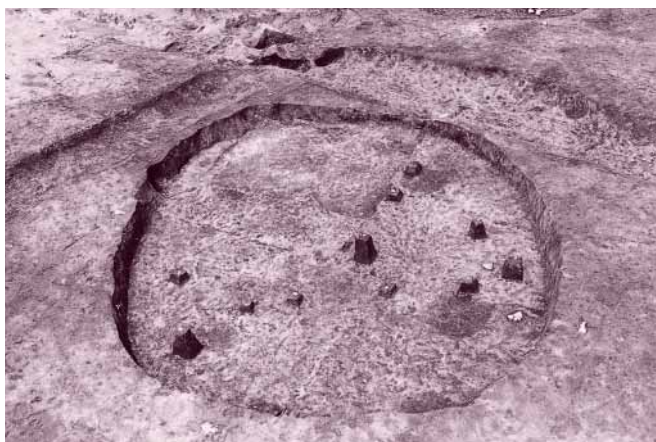
87号竖穴



87号竖穴 炉



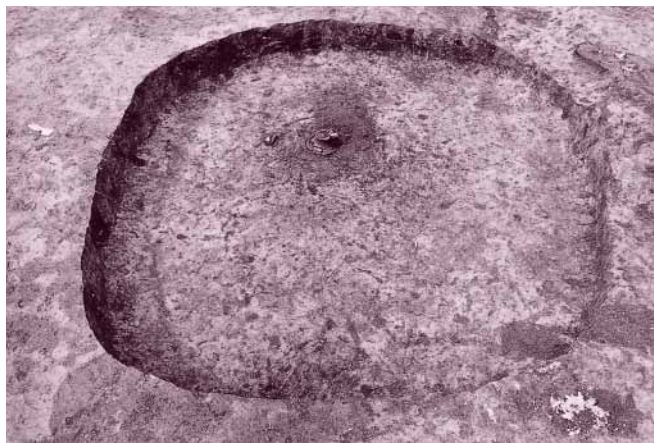
88号竖穴



88号竖穴



89号竖穴



89号竖穴



89号竖穴 炉



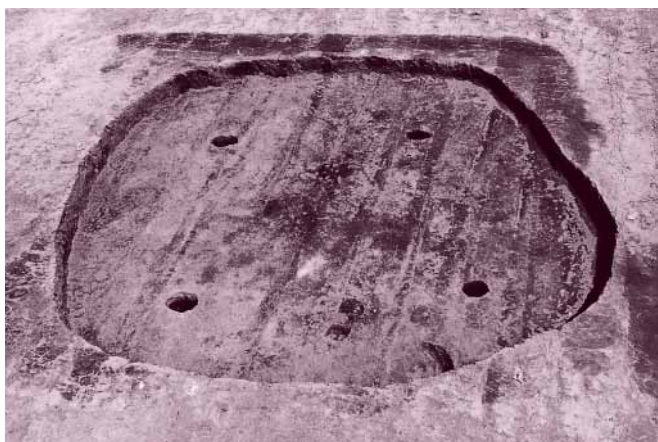
90号竖穴



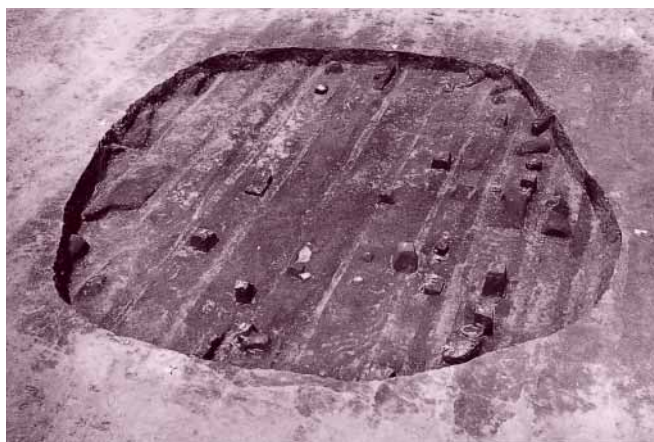
91号竖穴



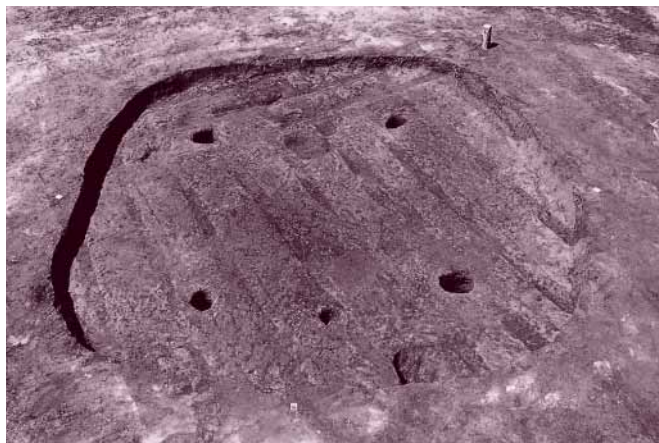
92号竖穴



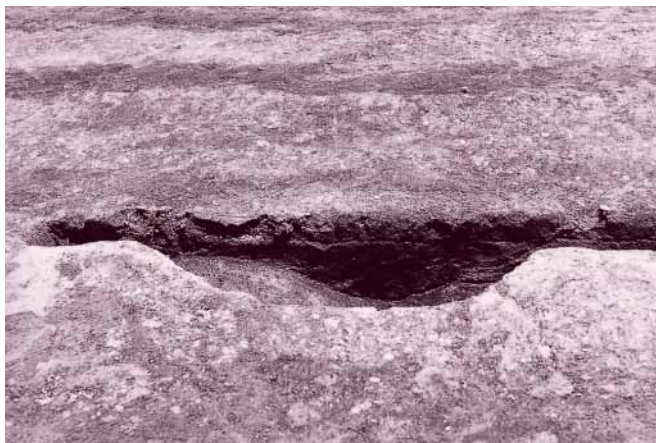
93号竖穴



93号竖穴



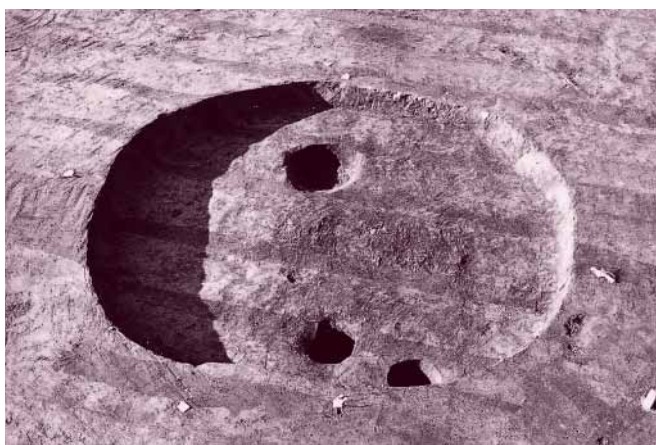
94号竖穴



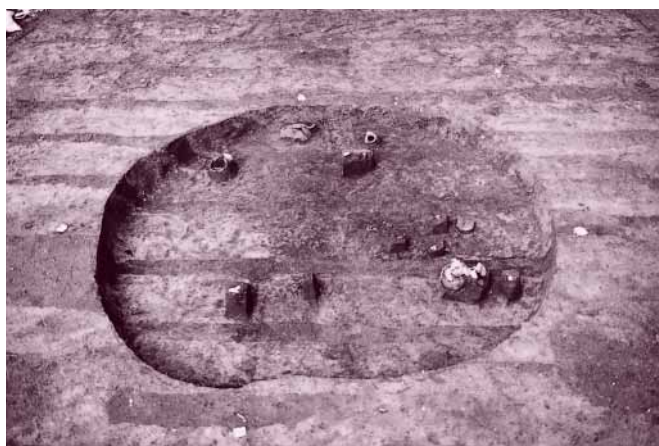
95号竖穴 炉



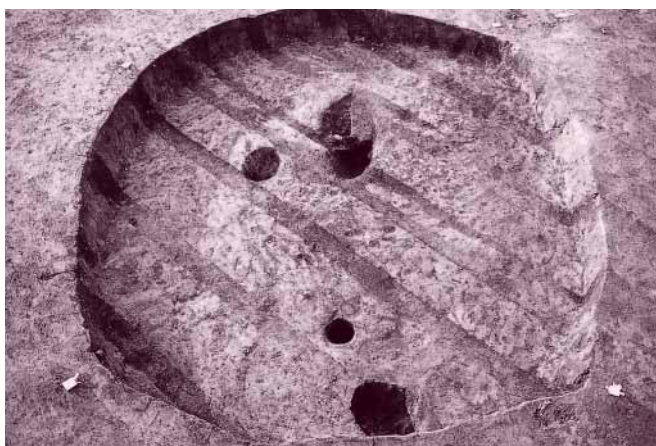
96号竖穴



97号竖穴



97号竖穴



98号竖穴



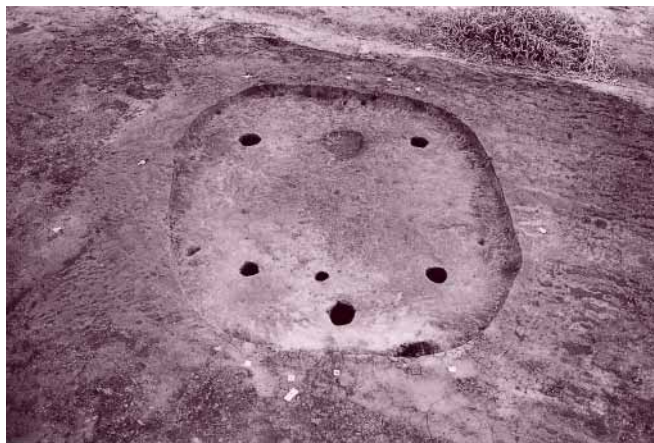
98号竖穴



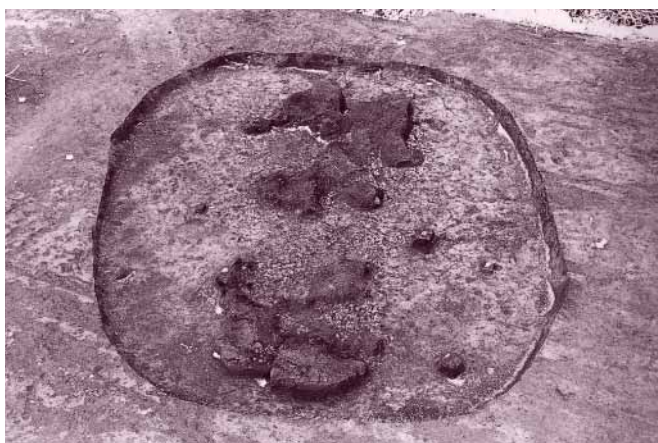
99号竖穴



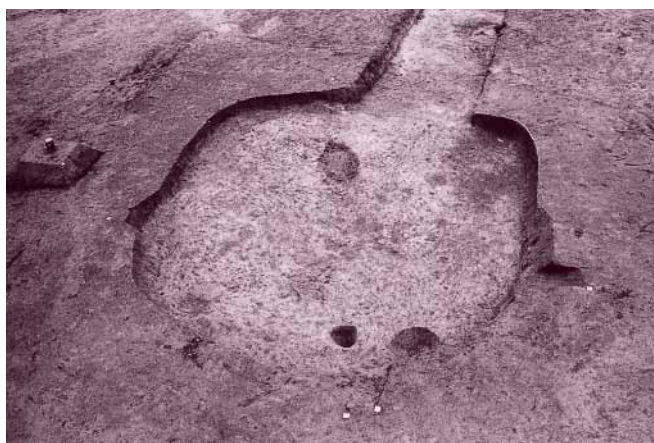
100号竖穴



102号竖穴



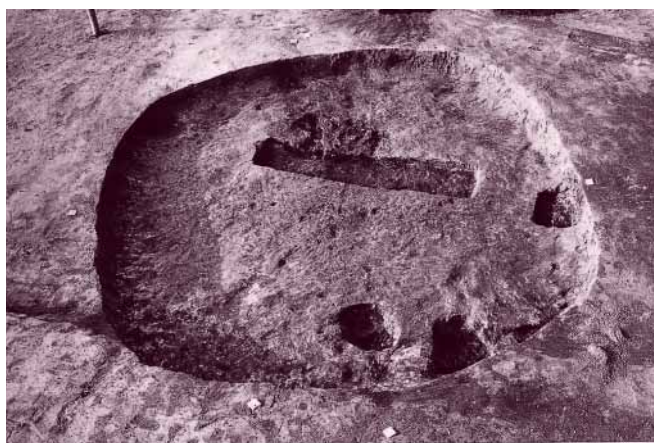
102号竖穴



103号竖穴



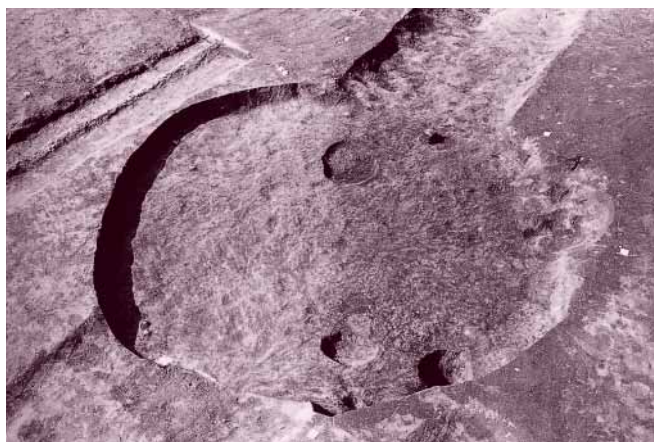
104号竖穴



105号竖穴



105号竖穴



106号竖穴



107号竪穴



107号竪穴



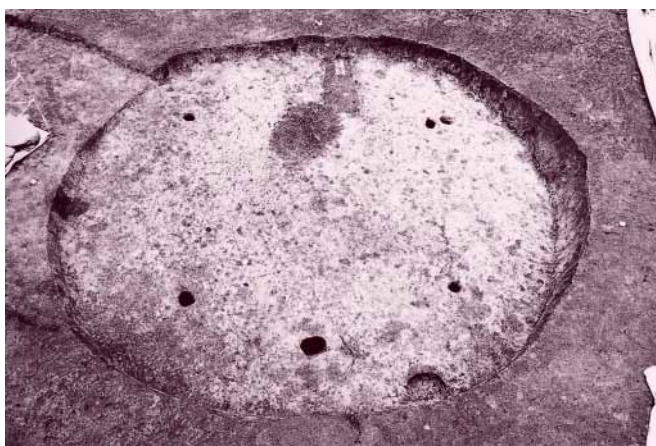
108号竪穴



108号竪穴(山田橋表通遺跡042号跡)



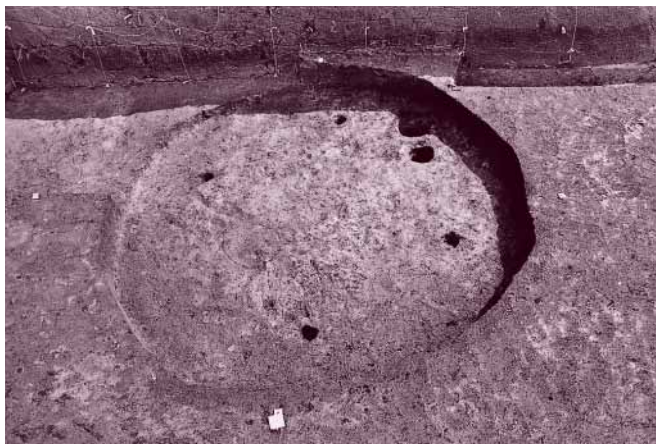
109号竪穴



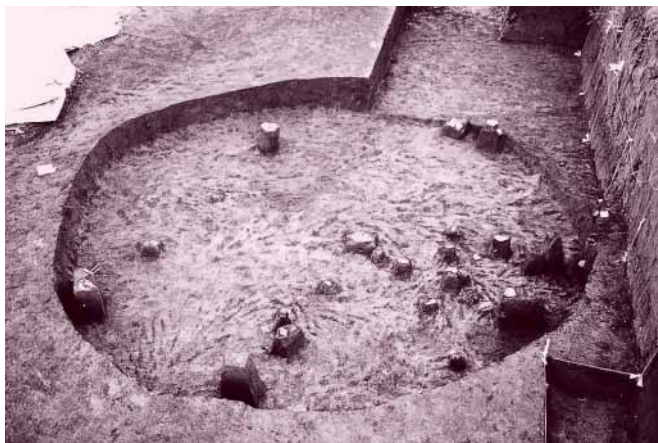
110号竪穴



110号竪穴



111号竪穴



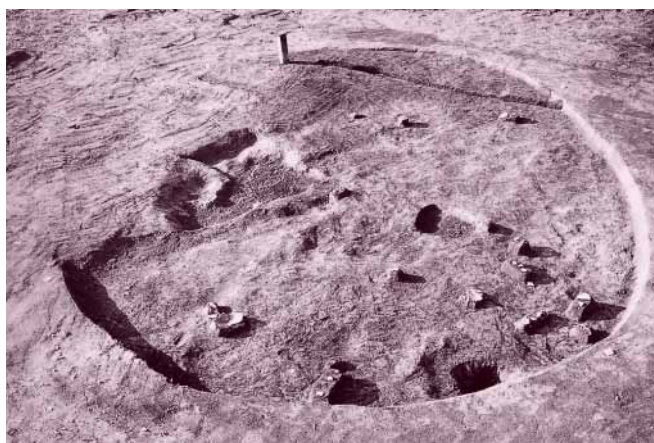
111号竪穴



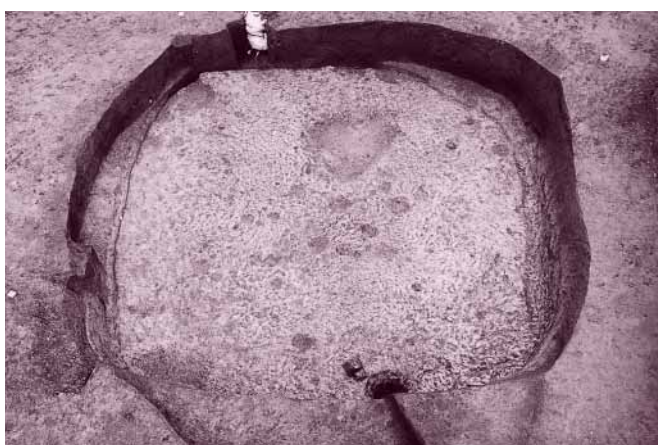
111号竪穴



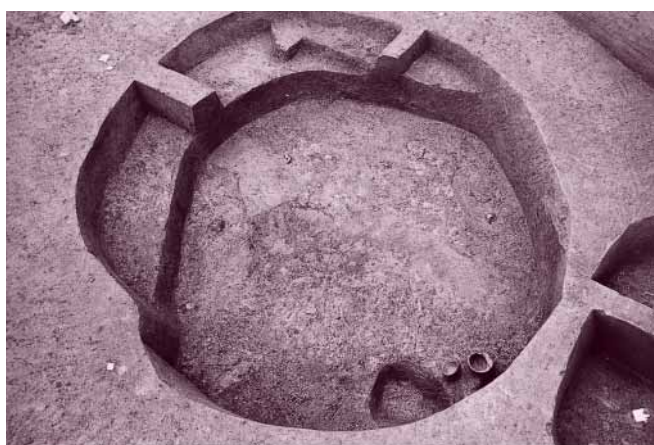
112号竪穴



112号竪穴



113号竪穴



114号竪穴



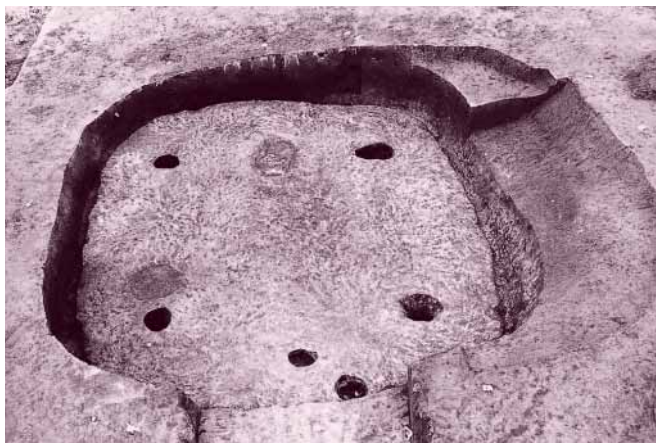
114号竪穴、調査区北堆積土層



114号竪穴



115号竖穴



115号竖穴



116号竖穴



116号竖穴



116号竖穴 炉



117号竖穴



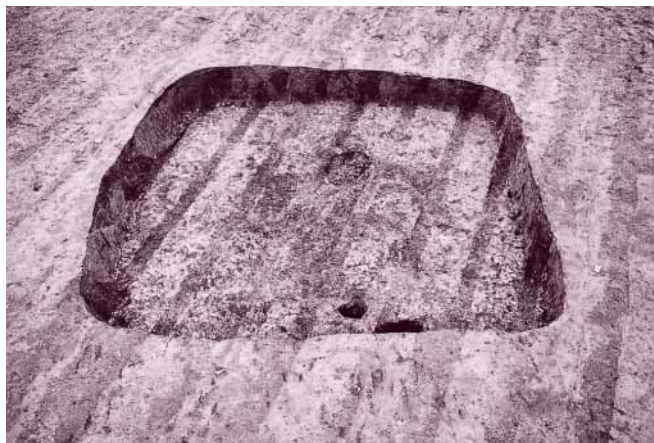
117号竖穴



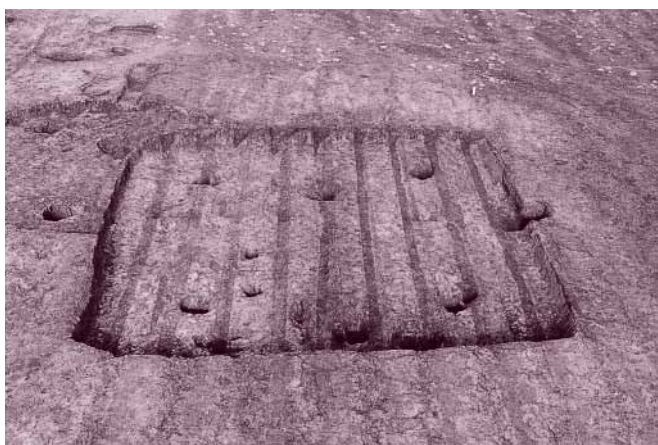
117号竖穴 炉



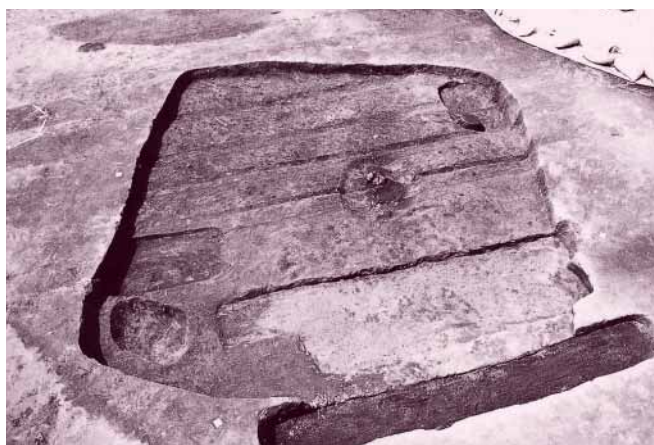
117号竖穴 掘形



118号竖穴



119号竖穴



120号竖穴



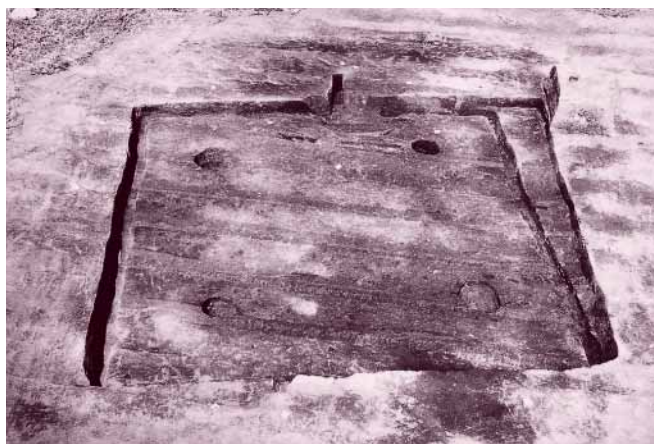
121号竖穴



122号竖穴



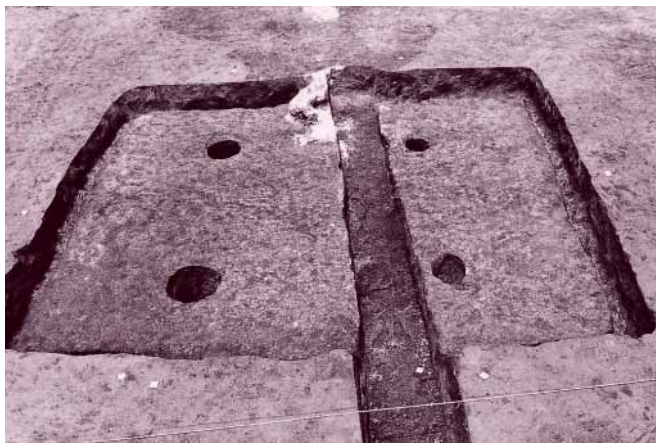
122号竖穴



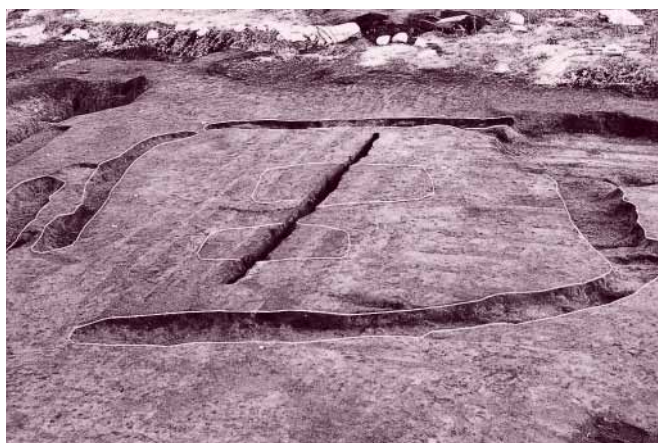
123号竖穴



124号竖穴



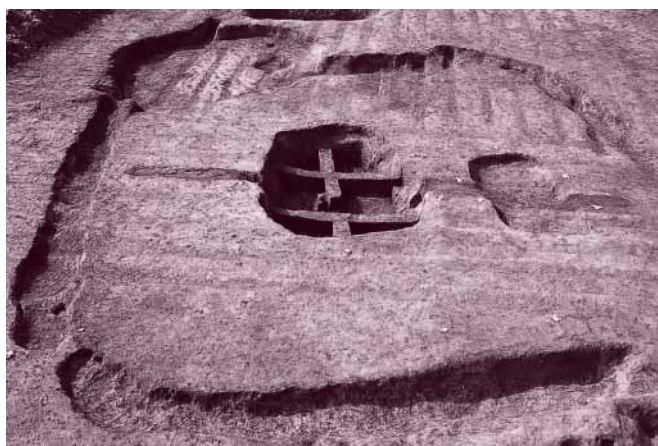
125号竖穴



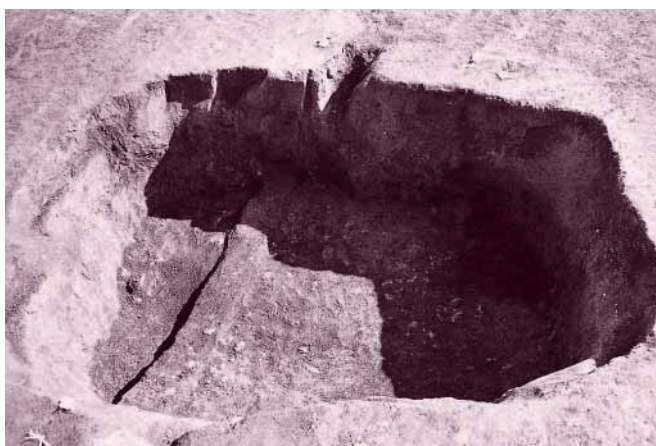
1号方形周溝墓



1号方形周溝墓



1号方形周溝墓



1号方形周溝墓1号主体部



1号方形周溝墓周溝内遺物出土状況



1・2号方形周溝墓(手前2号)



2号方形周溝墓



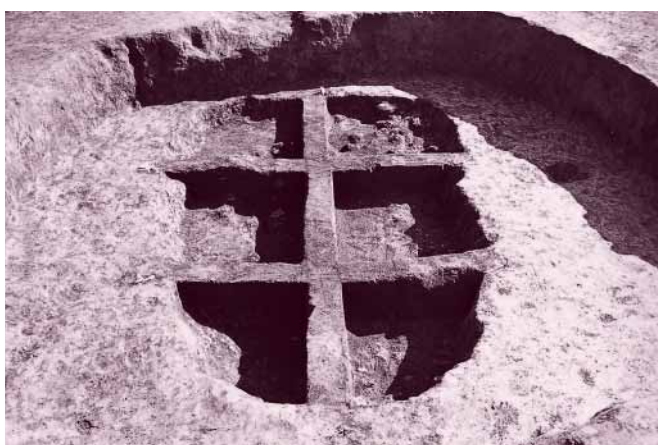
2号方形周溝墓



2号方形周溝墓主体部、28号竖穴調査状況



2号方形周溝墓主体部、28号竖穴調査状況



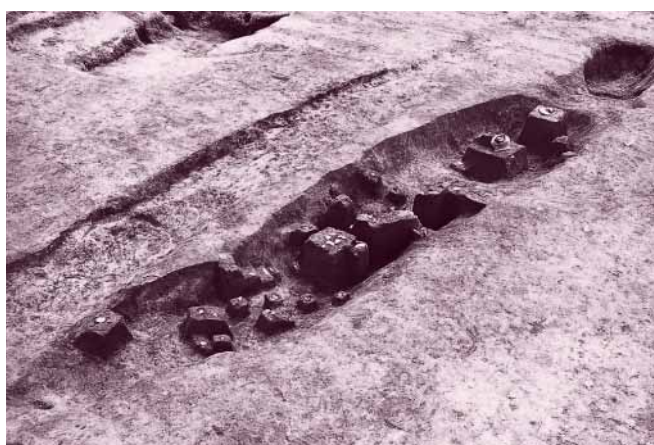
2号方形周溝墓主体部、28号竖穴調査状況



2号方形周溝墓主体部木棺痕跡部



3号方形周溝墓



3号方形周溝墓周溝内遺物出土状況



3号方形周溝墓周溝内遺物出土狀況



3号方形周溝墓周溝内遺物出土狀況



3号方形周溝墓主体部



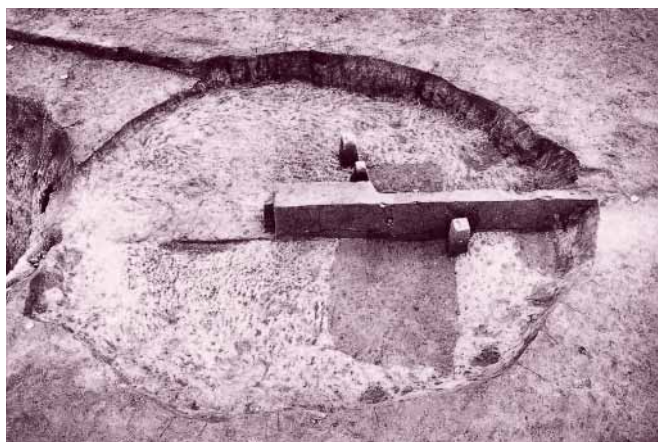
1号木棺土坑墓木棺痕跡部検出状況



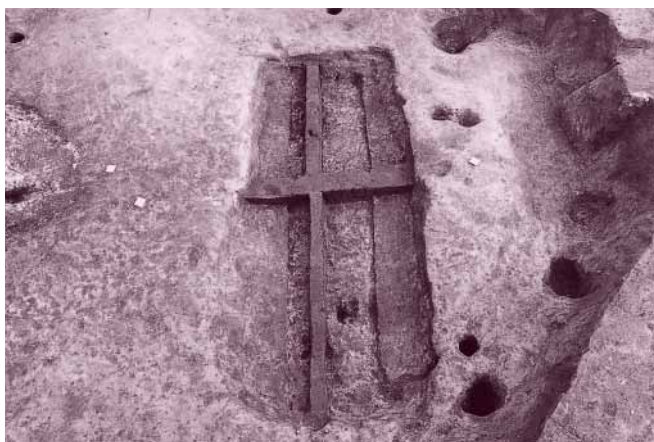
1号木棺土坑墓



2号木棺土坑墓



2号木棺土坑墓検出状況、36号竖穴



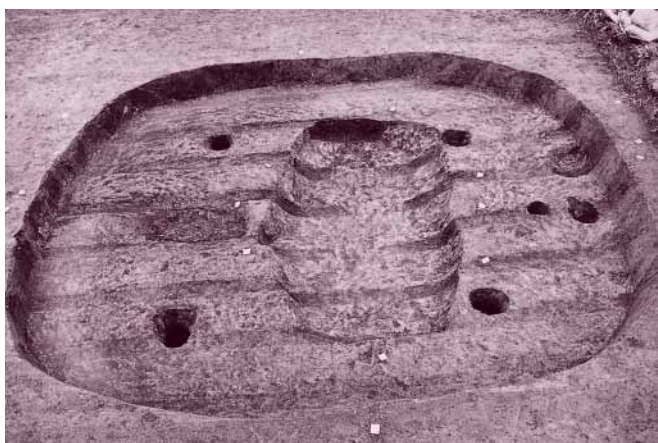
2号木棺土坑墓



3号木棺土坑墓



3号木棺土坑墓木棺痕跡部検出状況、71号竪穴



3号木棺土坑墓、71号竪穴



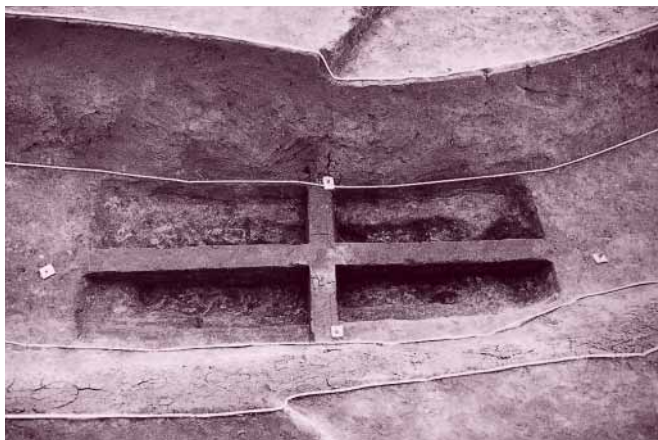
3号木棺土坑墓、71号竪穴



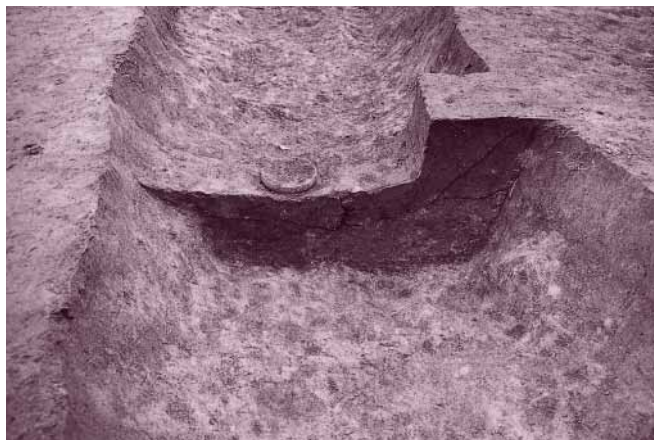
山田橋大塚台2号墳



山田橋大塚台2号墳



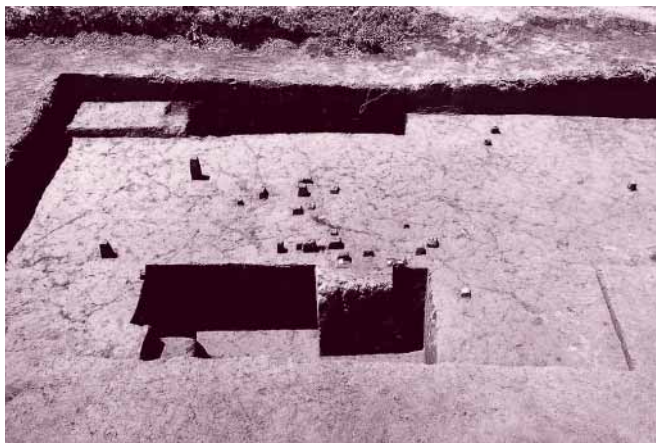
山田橋大塚台2号墳周溝内埋葬施設



山田橋大塚台2号墳周溝内遺物出土状況



第1地点(旧石器時代遺物集中)



第2地点(旧石器時代遺物集中)



第2地点(旧石器時代遺物集中)



第3地点(旧石器時代遺物集中)



第4地点(旧石器時代遺物集中)



第5地点(旧石器時代遺物集中)



第6地点(旧石器時代遺物集中)



第10地点(旧石器時代遺物集中)



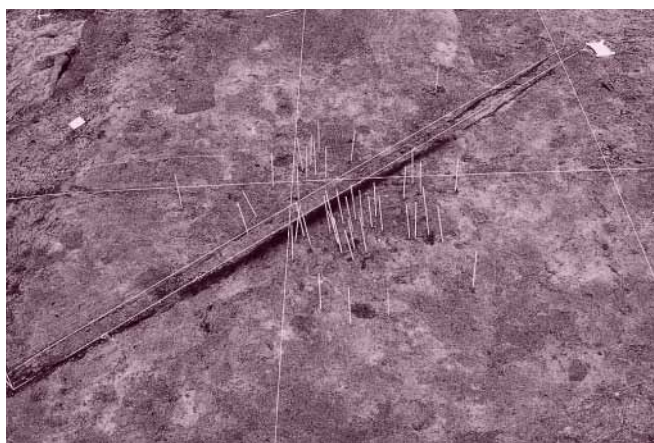
第12地点(旧石器時代遺物集中)



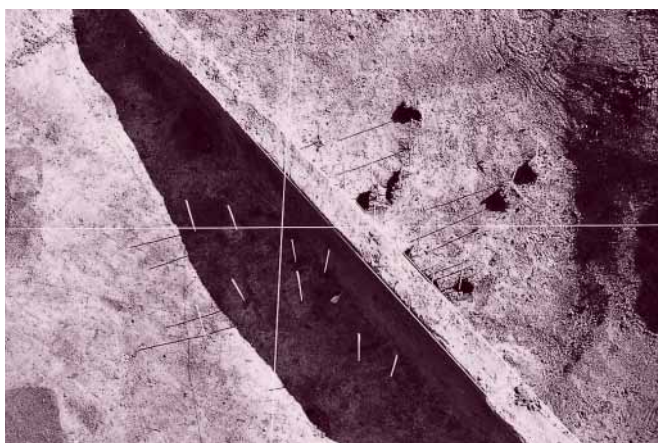
第13地点(旧石器時代遺物集中)



1号土坑



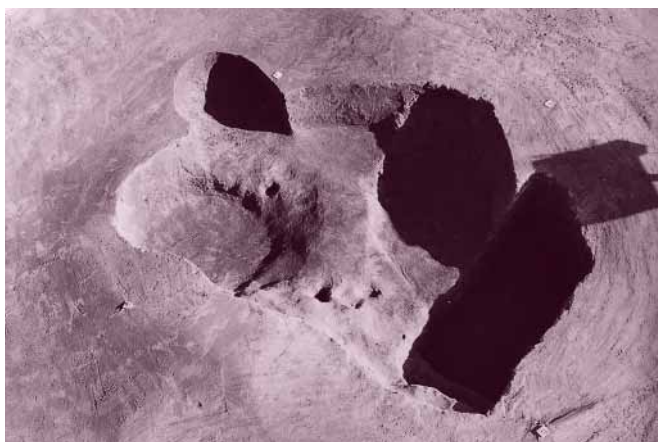
1号土坑剥片・碎片出土状況



1号土坑剥片・碎片出土状況



1号炉穴



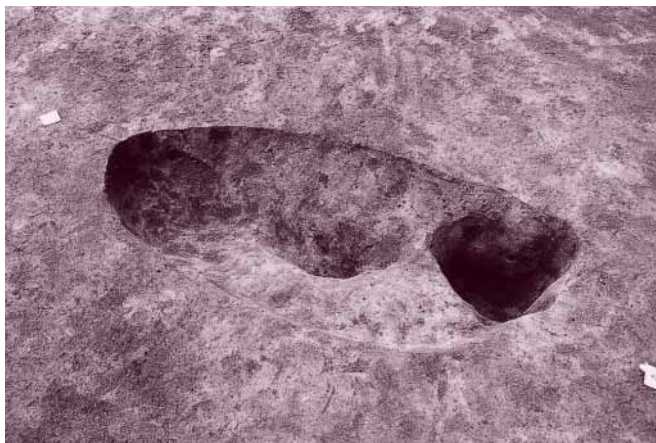
2号炉穴



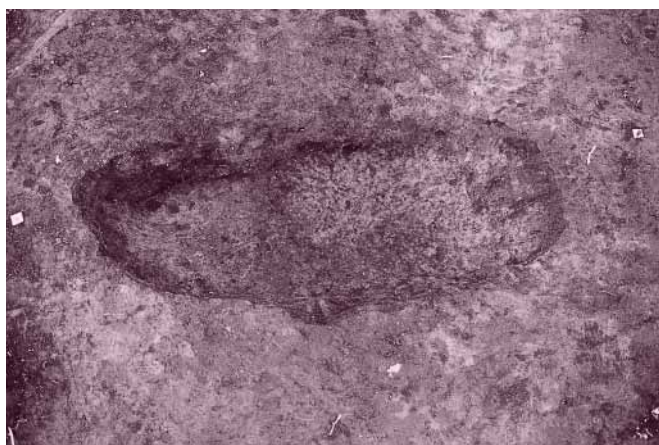
3号炉穴



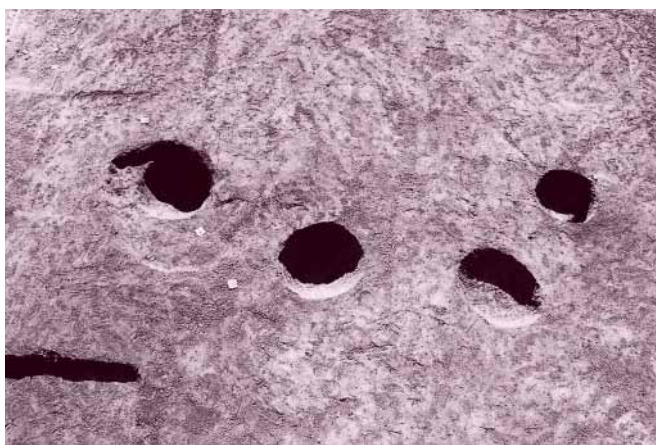
4号炉穴



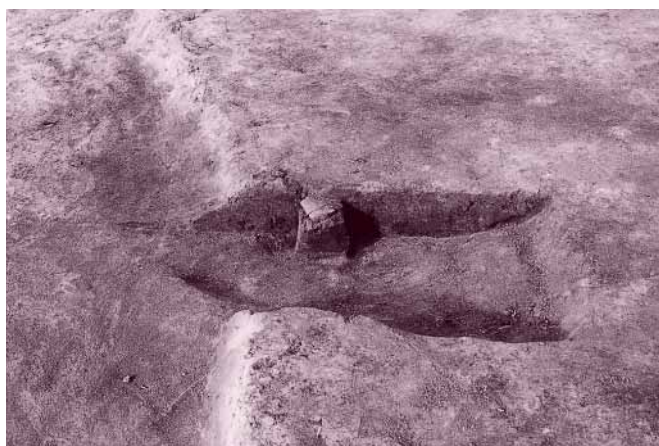
5号炉穴



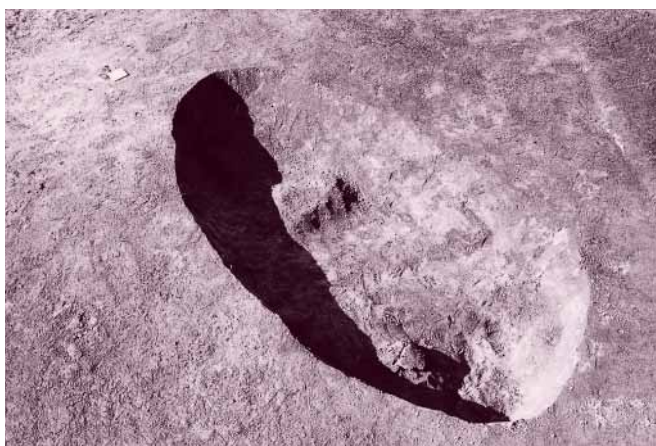
6号炉穴



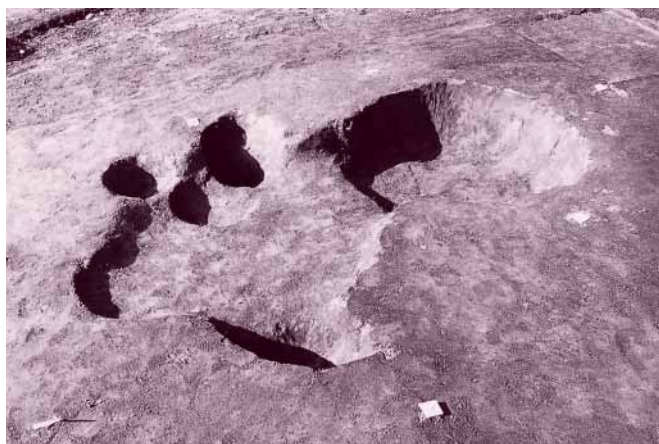
7号炉穴



8号炉穴



9号炉穴



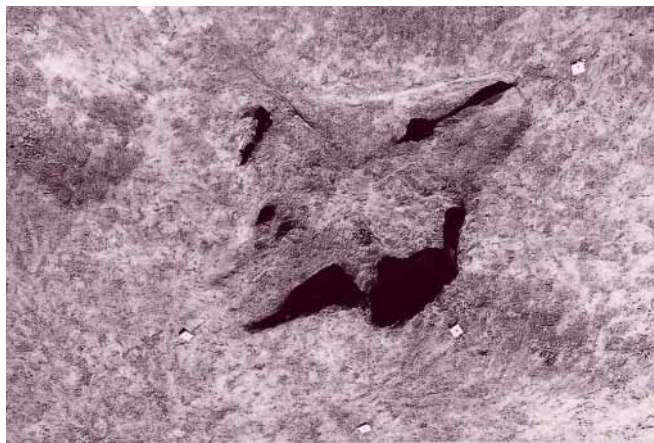
10号炉穴



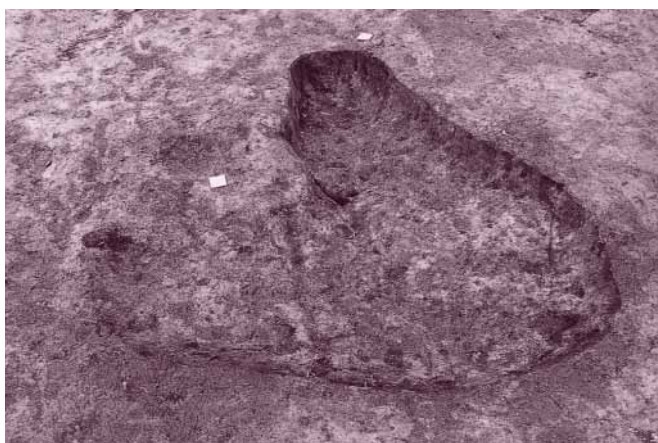
11号炉穴



12号炉穴



13号炉穴



14号炉穴



15号炉穴



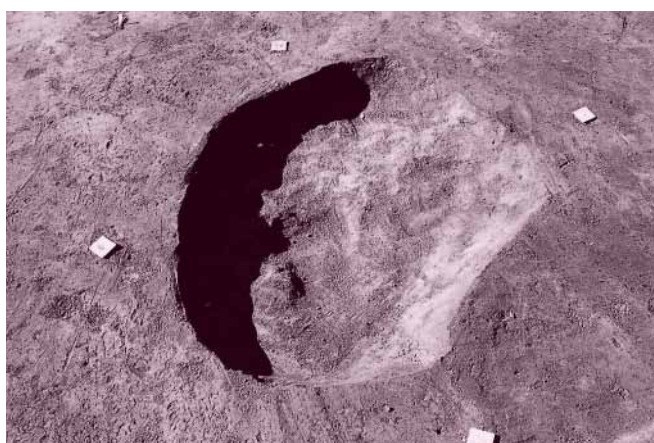
16号炉穴



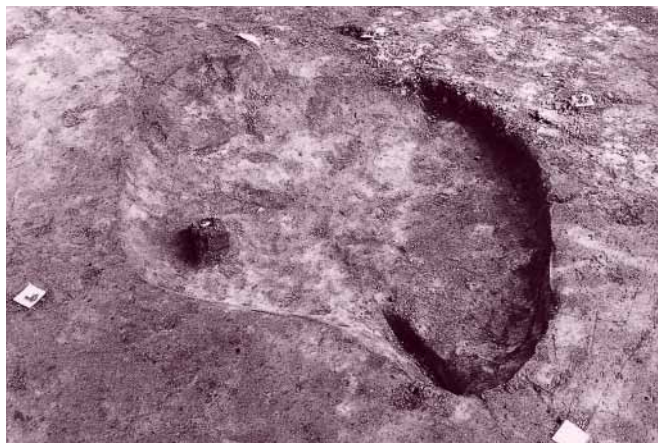
17号炉穴



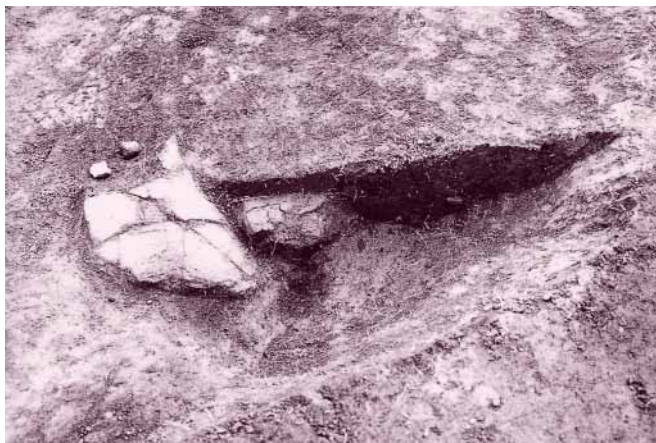
18号炉穴



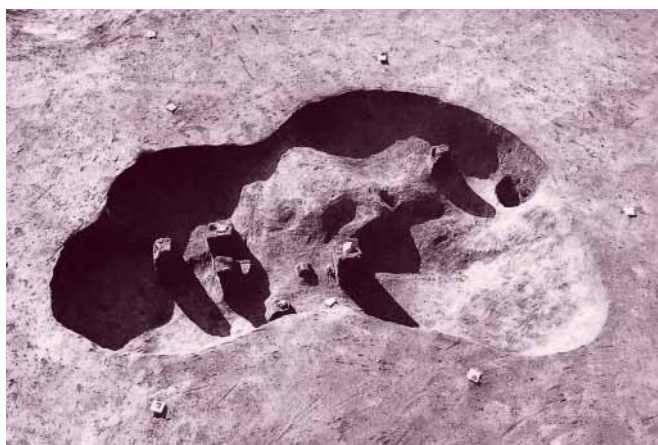
19号炉穴



20号炉穴



21号炉穴



22号炉穴



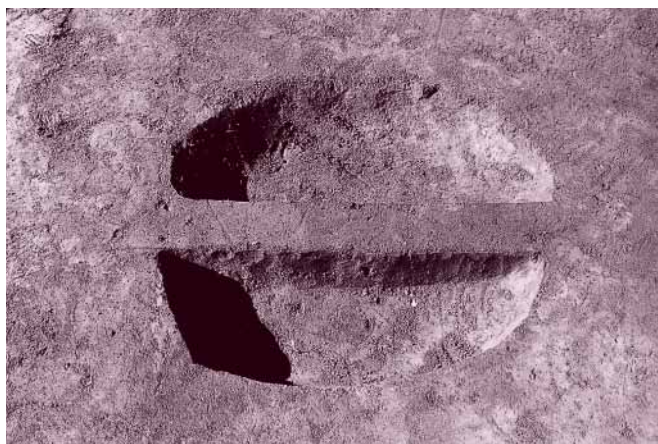
24号炉穴



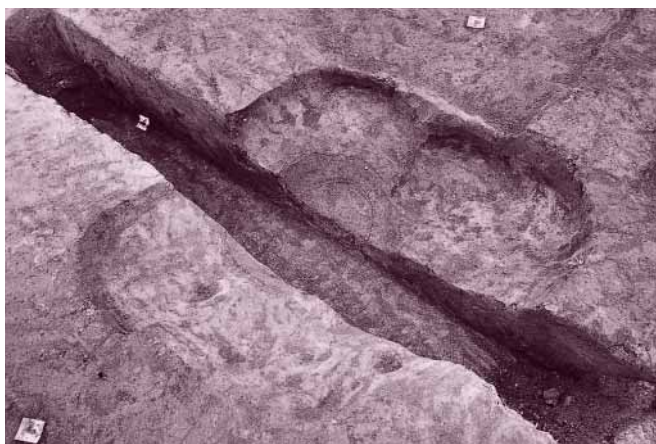
25号炉穴



26号炉穴



27号炉穴



28号炉穴



29号炉穴



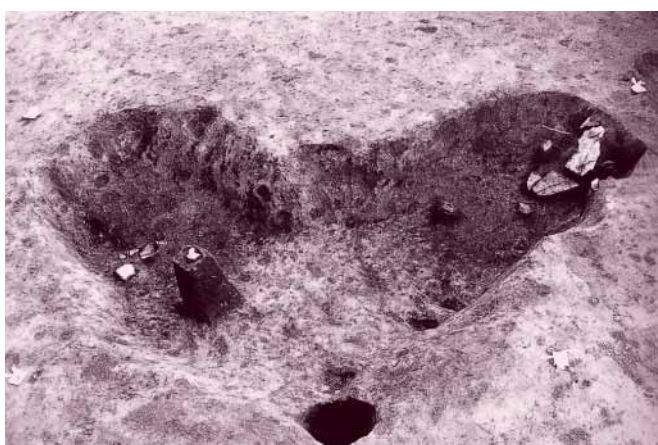
29号炉穴



30号炉穴



31号炉穴



31号炉穴



32号炉穴



1号陷穴



2号陷穴



3号陥穴



4号陥穴



2号土坑



2号土坑貝ブロック出土状況



3号土坑



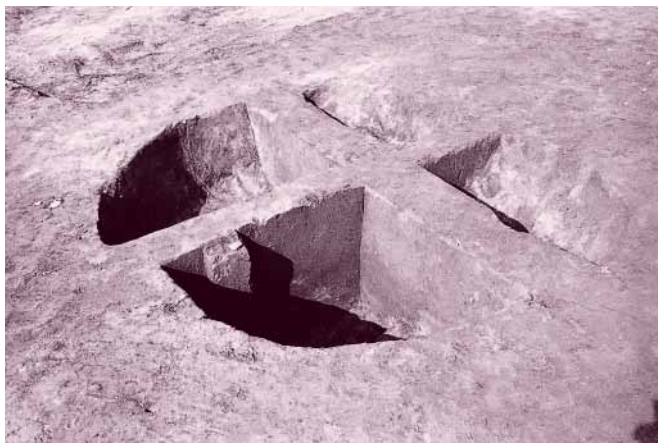
4号土坑



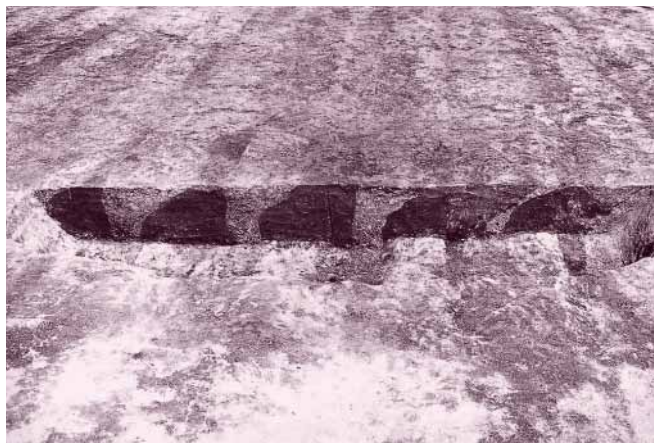
4号土坑



4号土坑



5号土坑



6号土坑



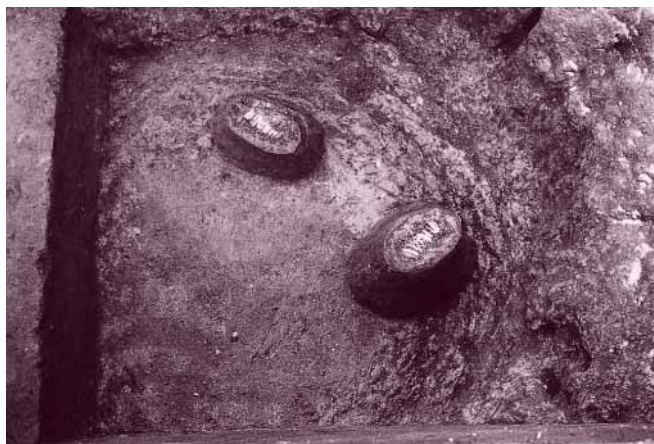
7号土坑



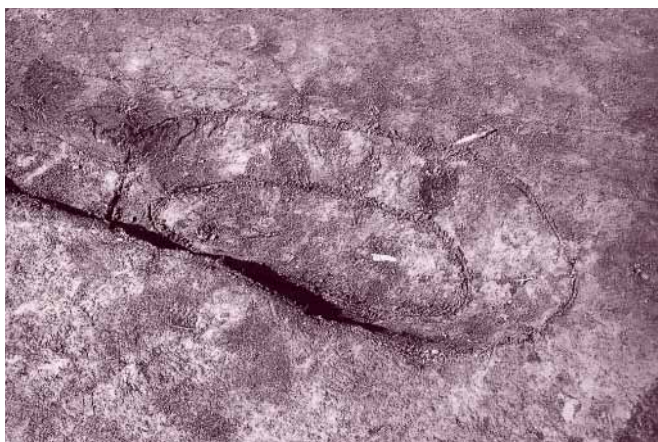
7号土坑



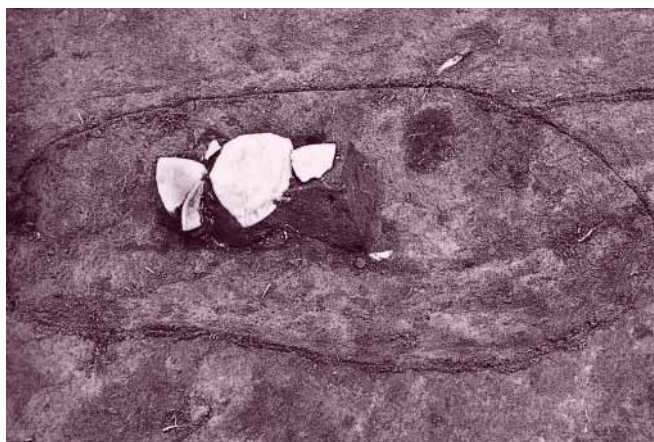
7号土坑馬齒骨出土狀況



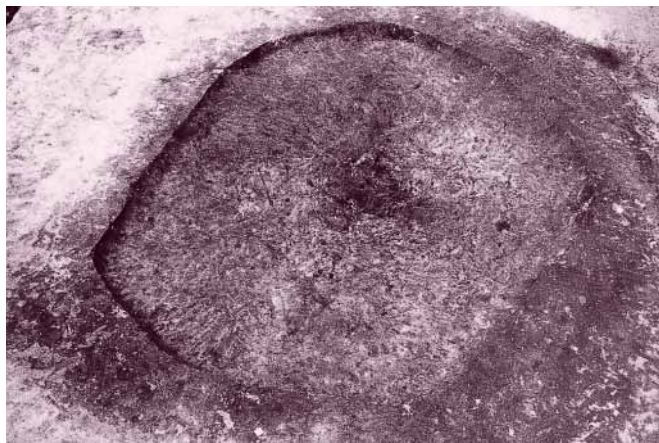
7号土坑馬齒骨出土狀況



8号土坑



8号土坑



10号土坑



11号土坑



11号土坑



11号土坑



1号溝全景(南方から)



1・2・3号溝全景(東方から)



1号溝(北方から)



1号溝(北方から)



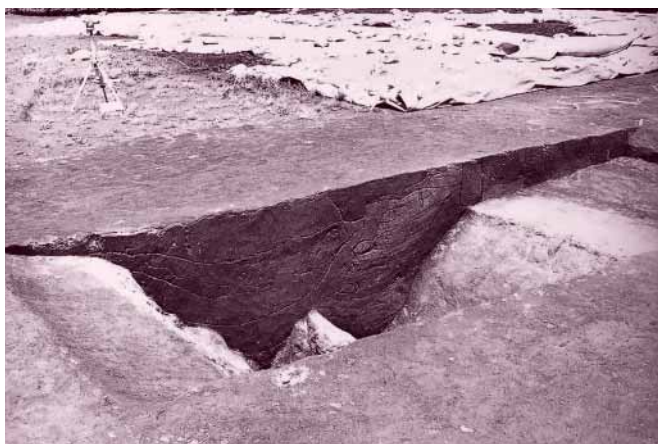
1号溝(南方から)



1号溝



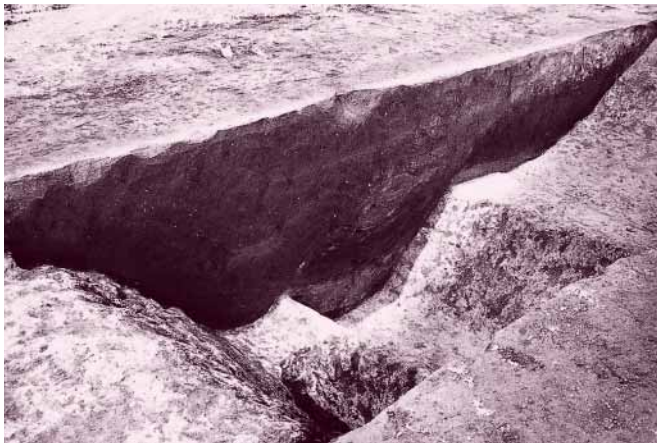
1号溝



1号溝



1号溝



1号沟



1号沟



1号沟



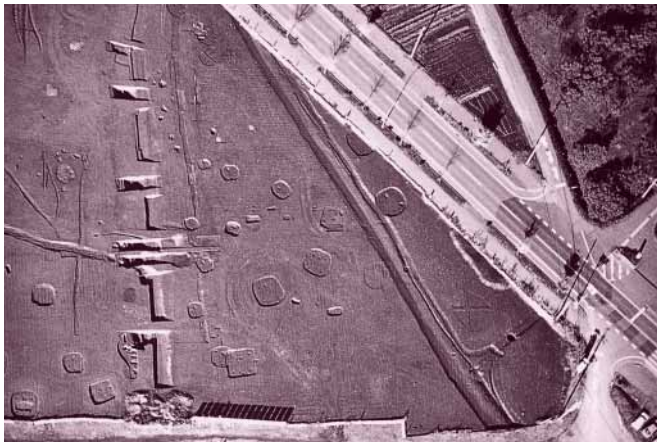
1D号沟堆積狀況



1D号沟堆積狀況



1号沟烧骨出土狀況



1·2·3号沟全景



1·2·3号沟全景



2号溝



2・3号溝



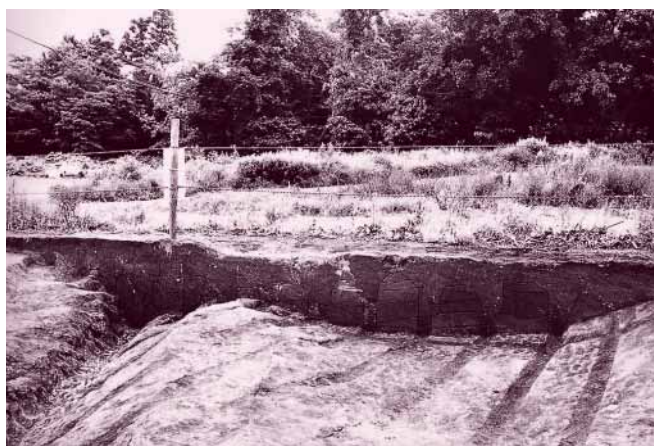
2・3号溝



3号溝



2号溝(西端部)



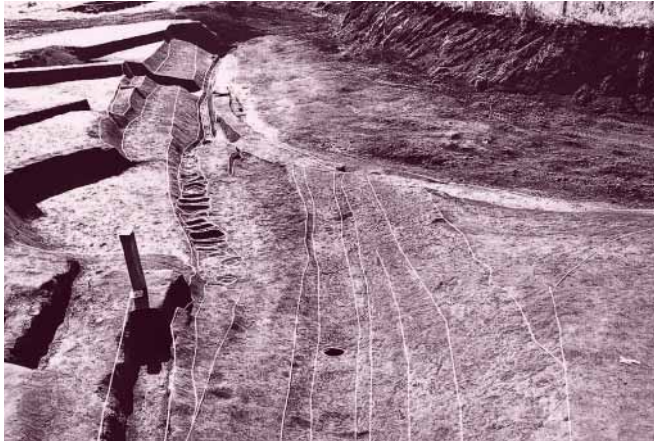
2号溝(東端部)



4C号溝(調査区北端部)



4C号溝(調査区北端部)



4C号溝(調査区北端部、北方から)



4C号溝(調査区北端部、南方から)



4号溝(谷部)



4号溝(谷部)



4号溝(谷部)



4号溝(谷部)



4号溝(斜面部)



4号溝(斜面部)



4号溝 (斜面部)



4C号溝(南台地部)



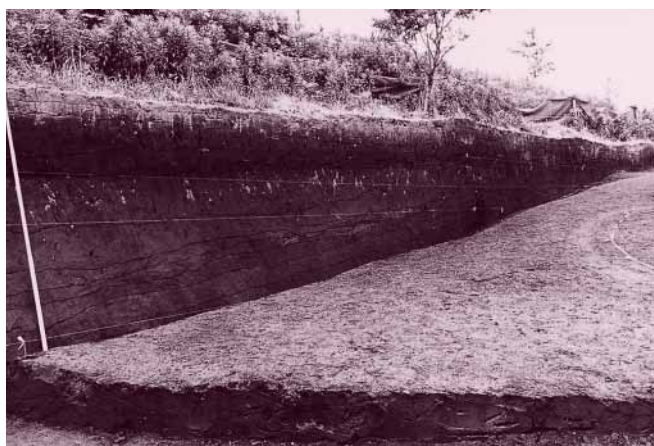
4C号溝(南台地部)



4C号溝(南台地部)



4C号溝(南台地部)



K12区調査区北壁土層堆積状況



O10区トレンチ



O10区トレンチ



31号炉穴-1



12号竪穴-1



7号竪穴-1



12号竪穴-2



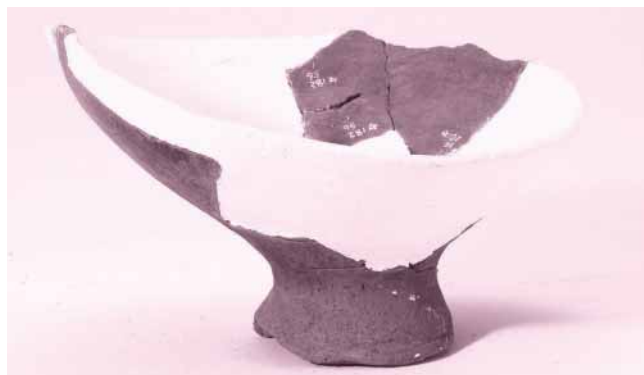
7号竪穴-2



12号竪穴-6



12号竪穴-3



13号竪穴-1



18号竖穴-3



31号竖穴-1



20号竖穴-2



33号竖穴-1



22号竖穴-1



24号竖穴-1



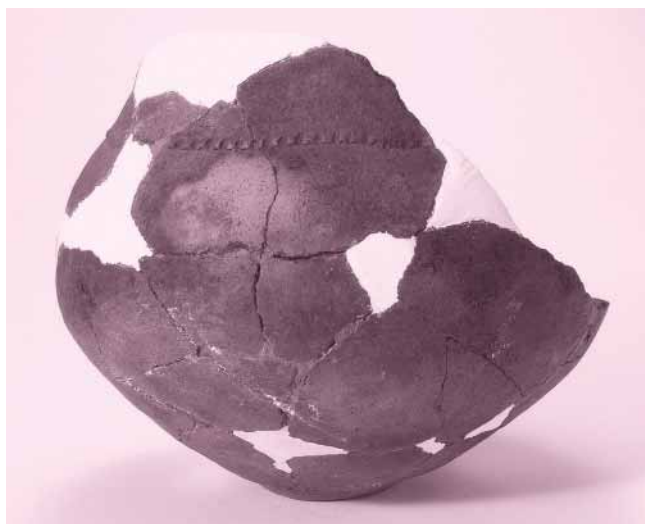
34号竖穴-1



30号竖穴-1



31号竖穴-3



30号竖穴-2



36号竖穴-1



36号竖穴-2



37号竖穴-1



36号竖穴-3



37号竖穴-6



37号竖穴-3



37号竖穴-7



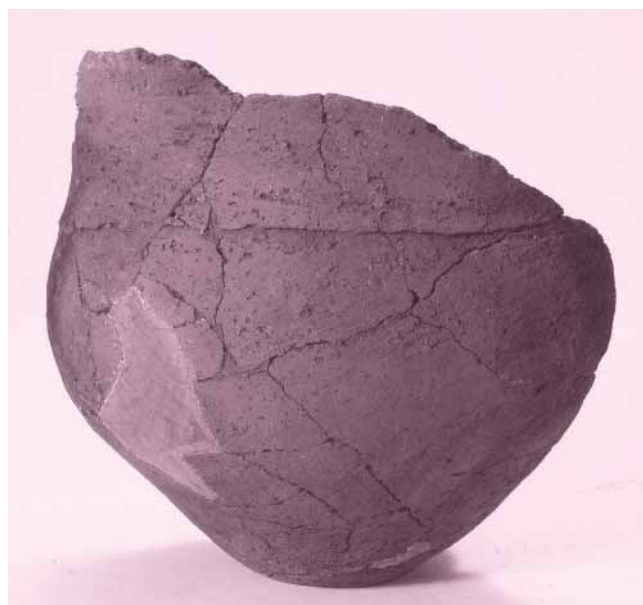
37号竖穴-4



37号竖穴-9



37号竖穴-10



37号竖穴-11



38号竖穴-1



45号竖穴-1



38号竖穴-1



42号竖穴-4



42号竖穴-1



46号竖穴-1



44号竖穴-3



46号竖穴-5



46号竖穴-2



46号竖穴-17



46号竖穴-3



48号竖穴-3



49号竖穴-3



48号竖穴-1



49号竖穴-7



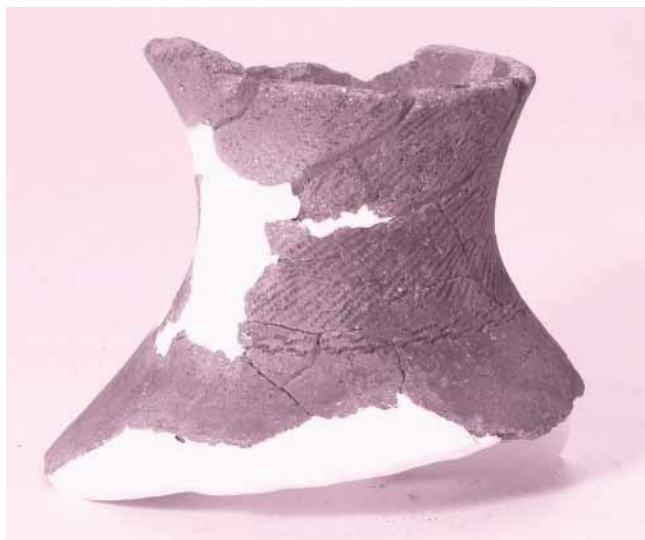
49号竖穴-9



51号竖穴-1



51号竖穴-2



51号竖穴-4



51号竖穴-3



51号竖穴-7



51号竖穴-6



52号竖穴-7



52号竖穴-1



52号竖穴-3



52号竖穴-2



52号竖穴-11



52号竖穴-17



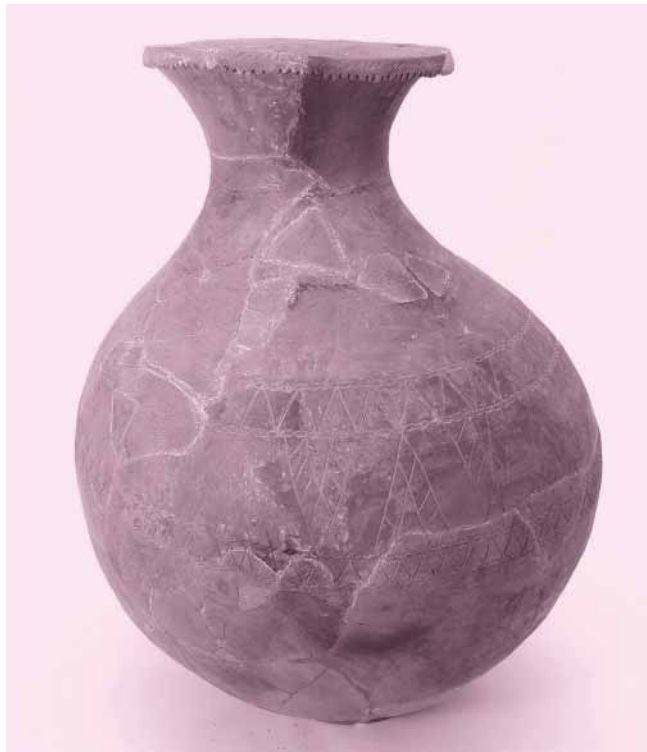
52号竖穴-20



52号竖穴-19



52号竖穴-22



53号竖穴-1



53号竖穴-14



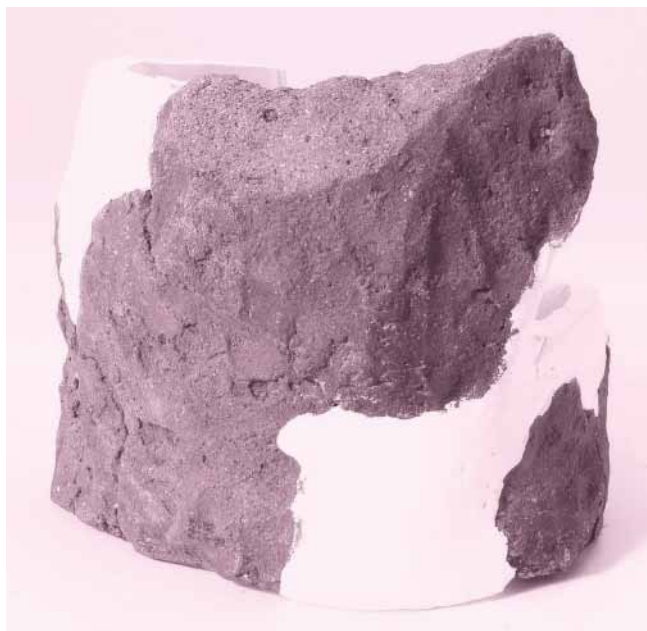
53号竖穴-16



53号竖穴-12



54号竖穴-1



53号竖穴-18



54号竖穴-15



54号竖穴-12



56号竖穴-3



59号竖穴-1



55号竖穴-1



59号竖穴-5



56号竖穴-1



60号竖穴-2



60号竖穴-1



63号竖穴-1



60号竖穴-3



63号竖穴-2



60号竖穴-24



63号竖穴-9



60号竖穴-25



63号竖穴-10



63号竖穴-7



63号竖穴-4



63号竖穴-8



63号竖穴-6



63号竖穴-11



63号竖穴-8



65号竖穴-1



71号竖穴-1



80号竖穴-1



84号竖穴-1



77号竖穴-1



84号竖穴-2



83号竖穴-1



86号竖穴-2



87号竖穴-1



93号竖穴-4



87号竖穴-4



93号竖穴-6



89号竖穴-1



97号竖穴-2



93号竖穴-3



97号竖穴-3



97号竖穴-1



97号竖穴-7



97号竖穴-5



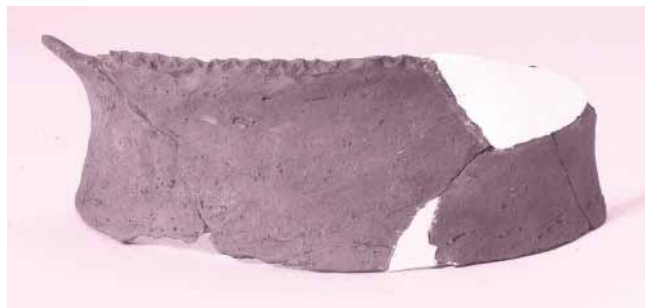
105号竖穴-1



97号竖穴-6



111号竖穴-10



111号竖穴-7



112号竖穴-3



114号竖穴-2



114号竖穴-1



115号竖穴-1



115号竖穴-3



114号竖穴-3



116号竖穴-1



116号竖穴-2



117号竖穴-2



116号竖穴-5



120号竖穴-1



117号竖穴-1



120号竖穴-2



120号竖穴-3



120号竖穴-4



3号方形周溝墓-1



3号方形周溝墓-3



3号方形周溝墓-1



3号方形周溝墓-7



4号土坑-1



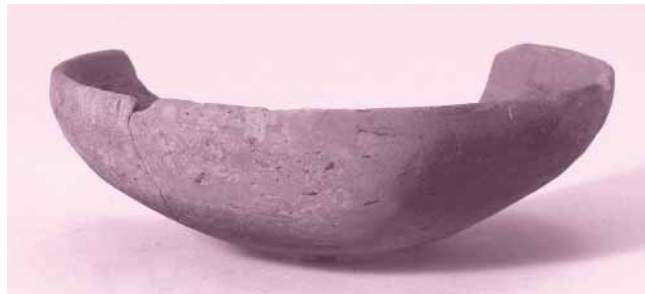
4号土坑-2



4号土坑-3



4号土坑-4



122号竖穴-1



山田橋大塚台2号墳-1



123号竖穴-2



121号竖穴-1



8号土坑-1



121号竖穴-8



2号溝-2



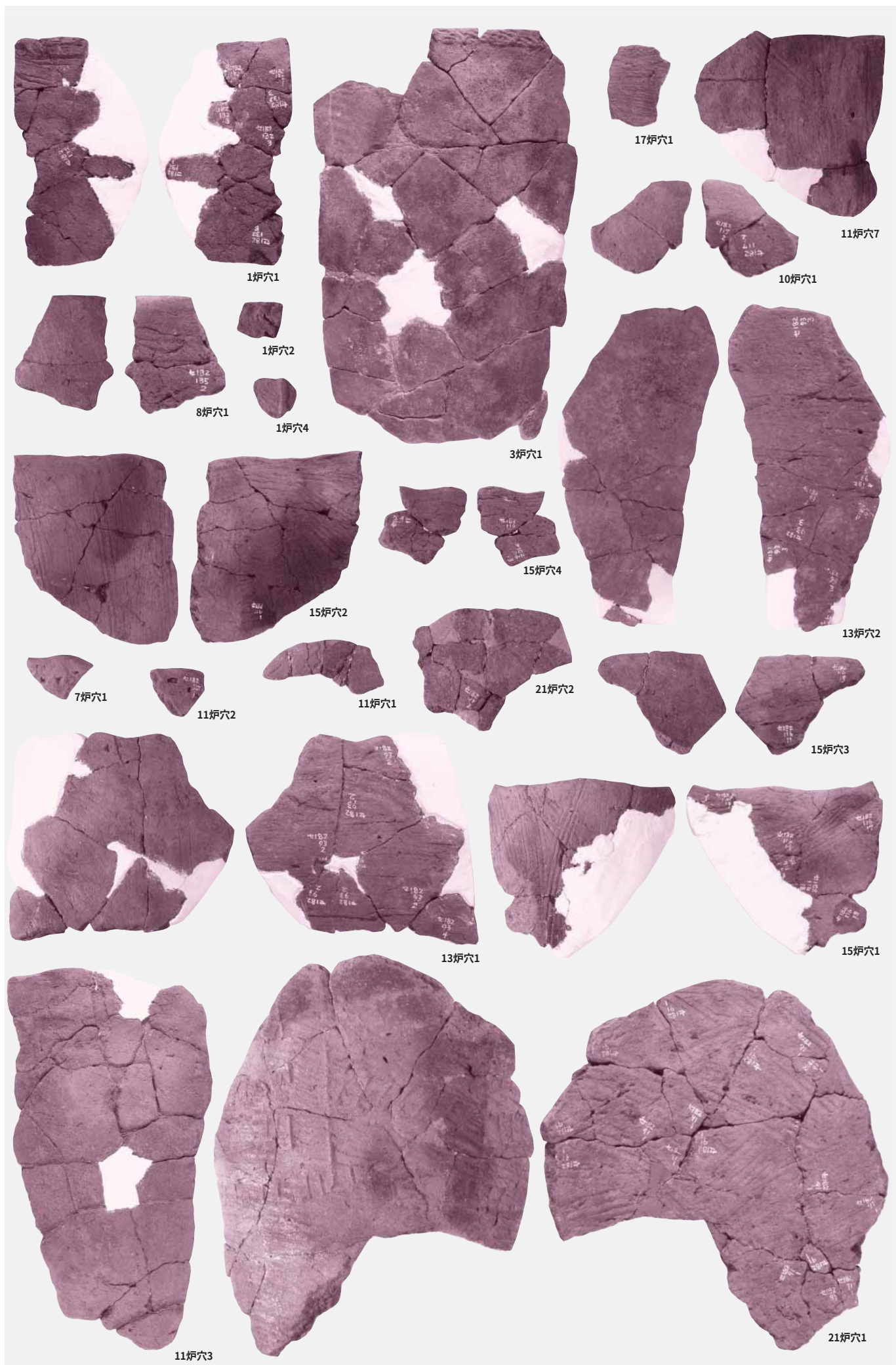
125号竖穴-3



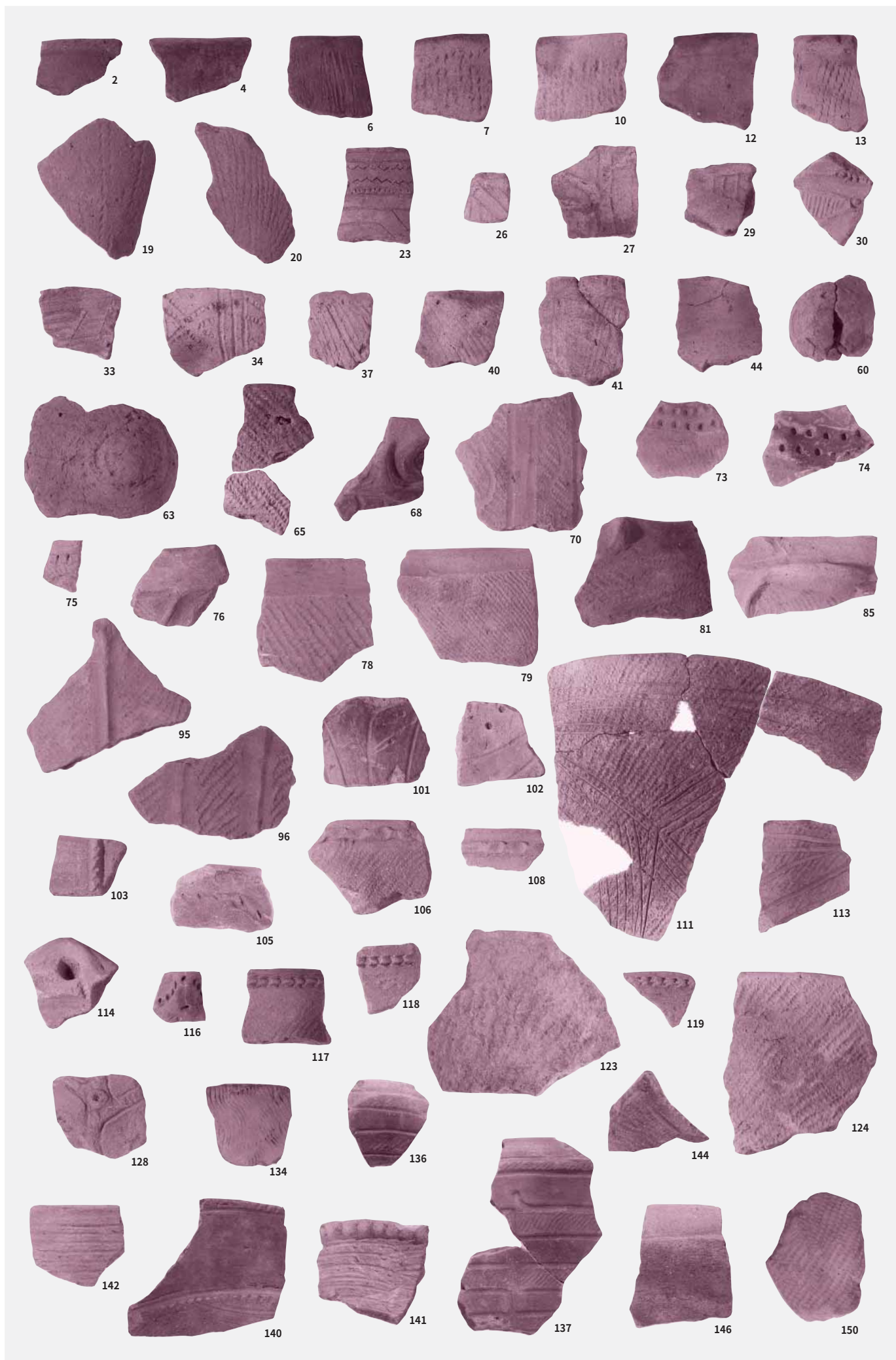
11号土坑-1

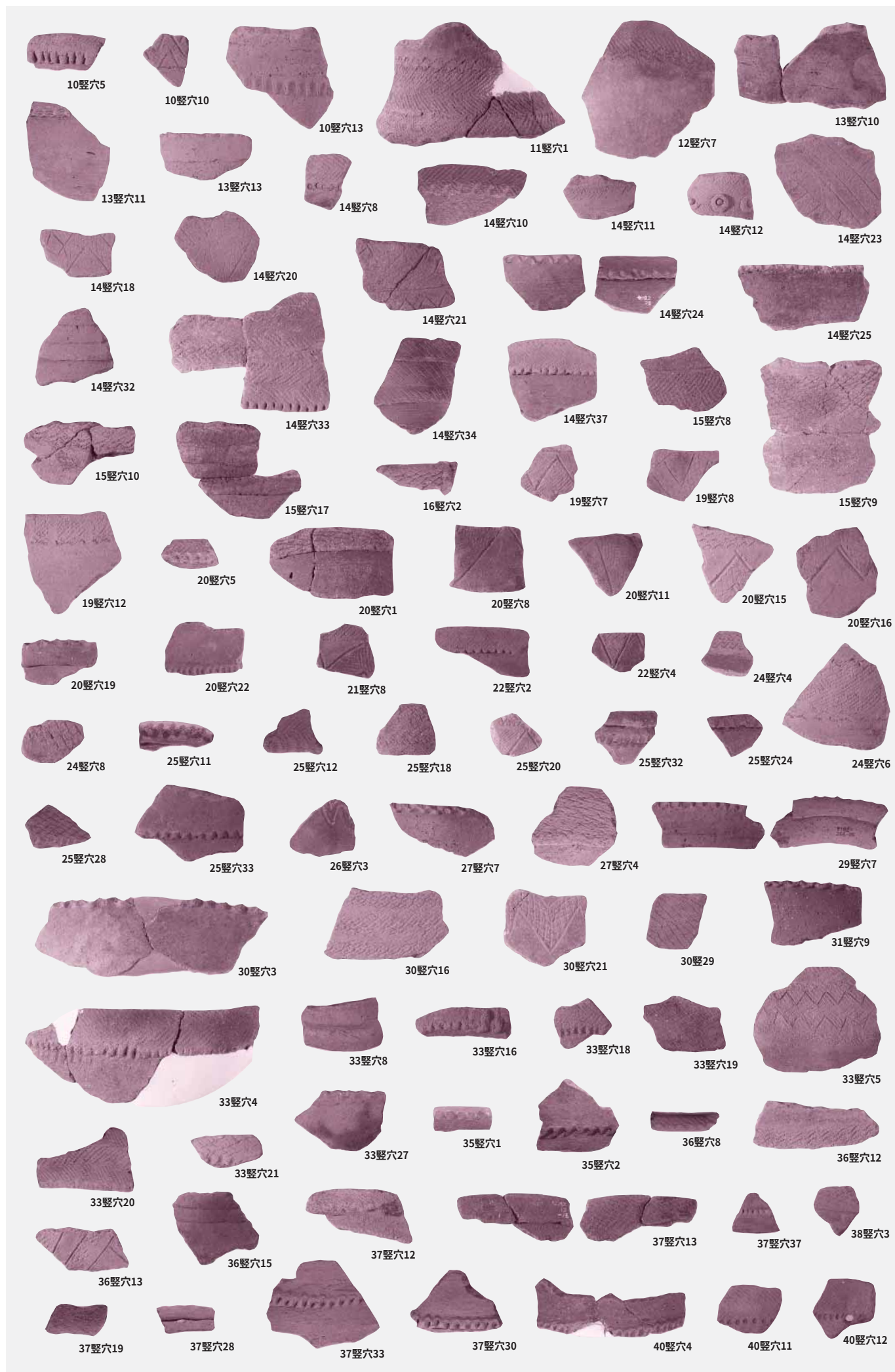


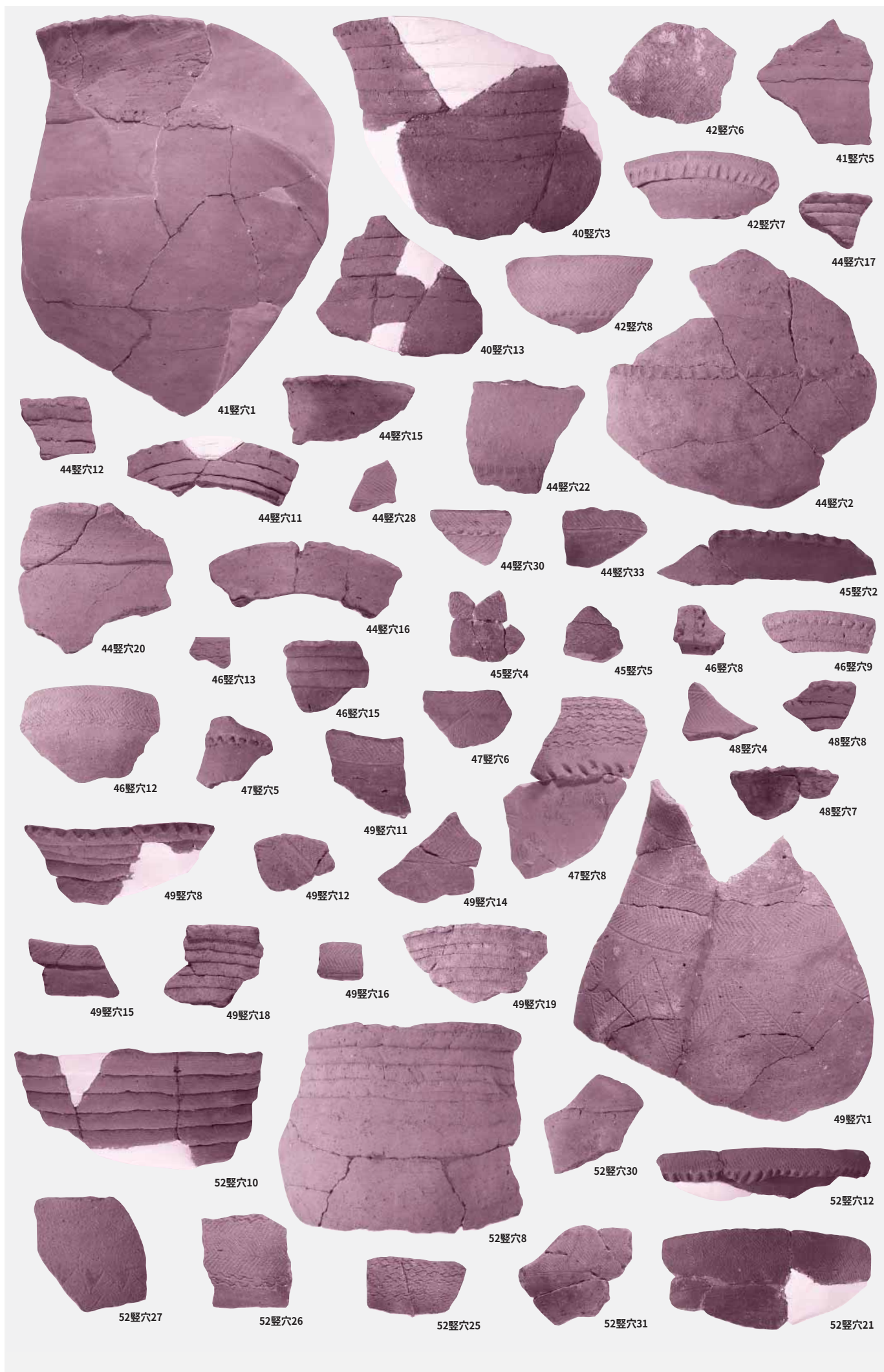
11号土坑-1

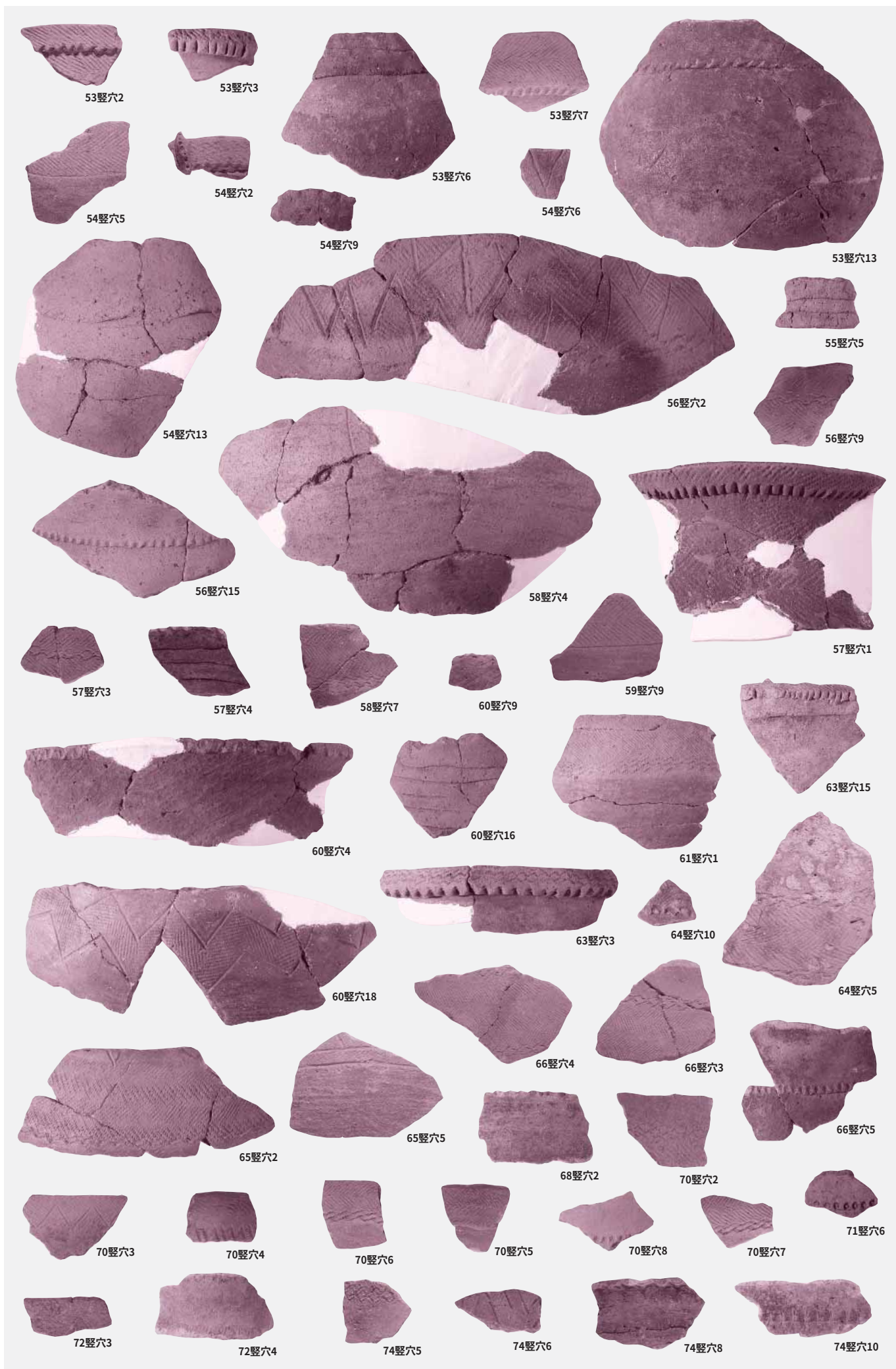


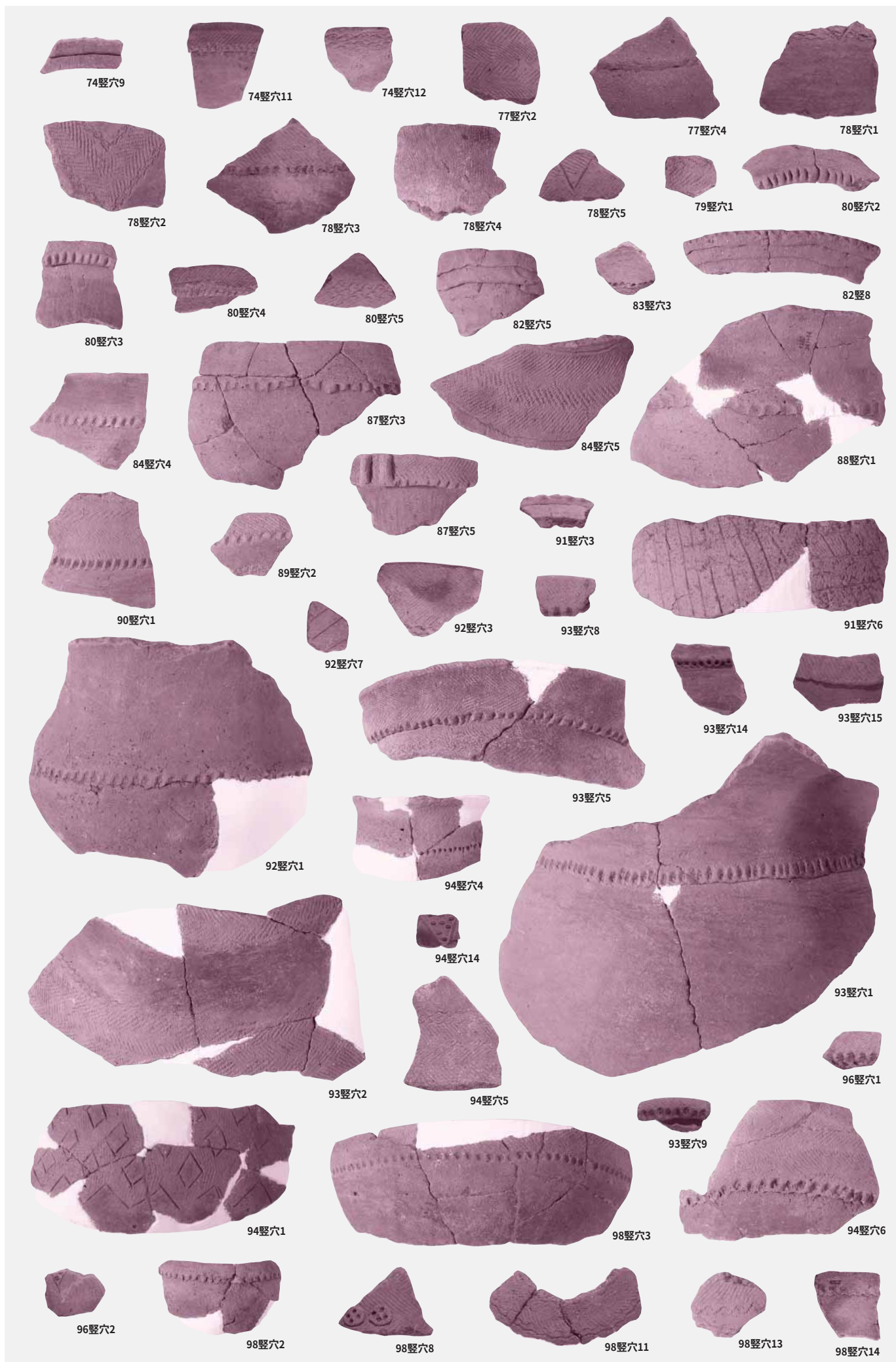




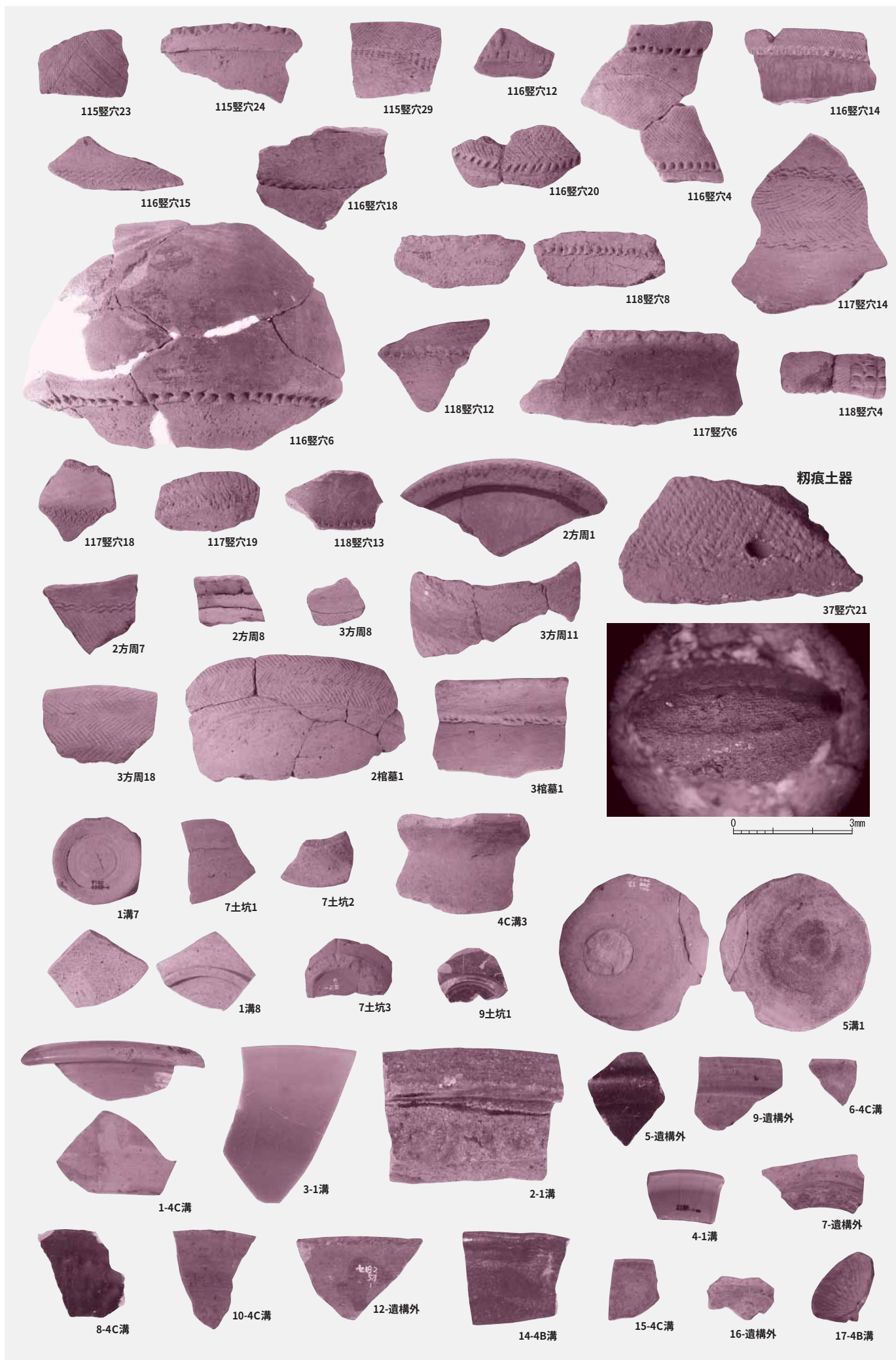


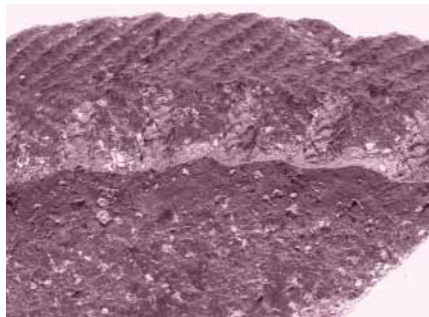




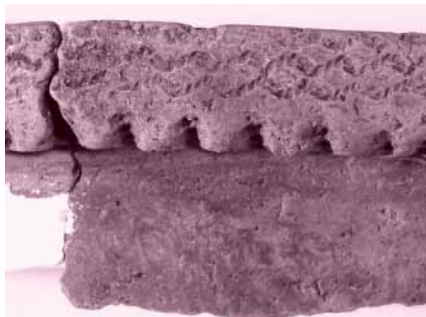








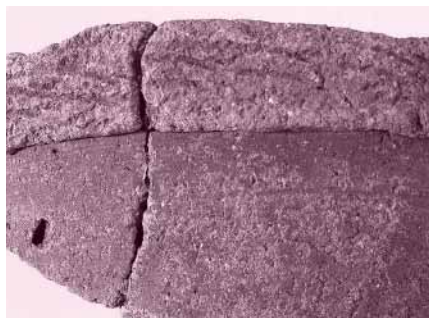
14号竖穴-10



63号竖穴-3



113号竖穴-6



20号竖穴-1



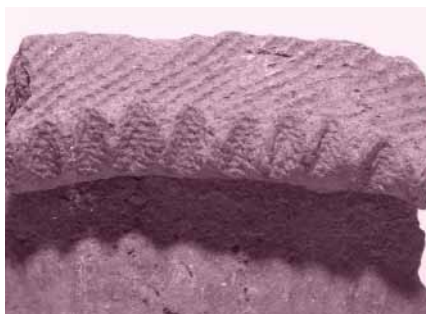
80号竖穴-2



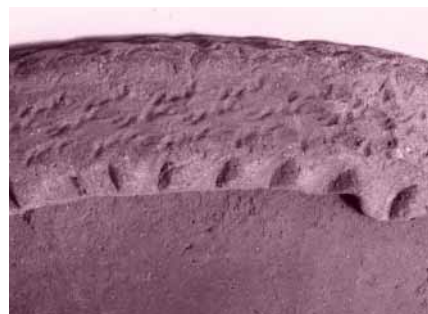
116号竖穴-1



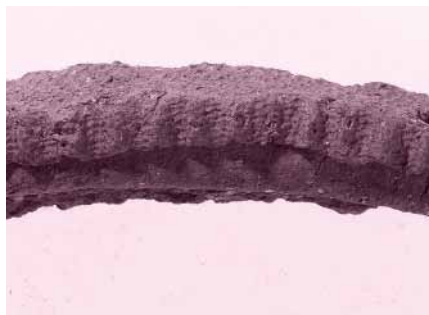
36号竖穴-2



80号竖穴-3



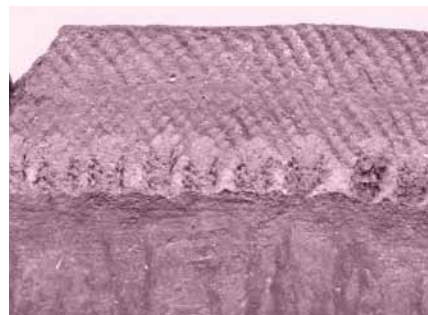
116号竖穴-2



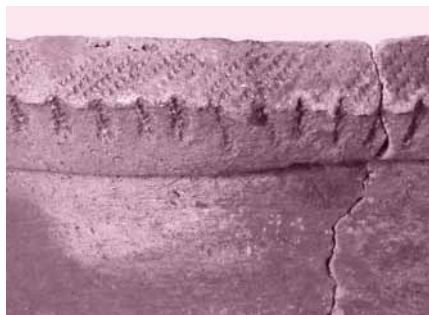
37号竖穴-2



89号竖穴-1



116号竖穴-14



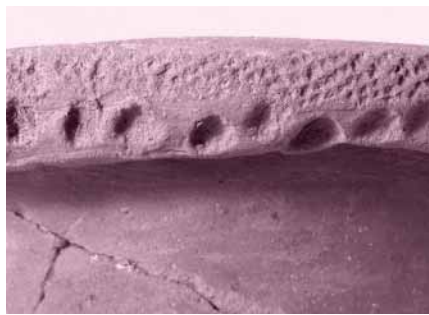
48号竖穴-1



93号竖穴-5



2号方形周溝墓-1



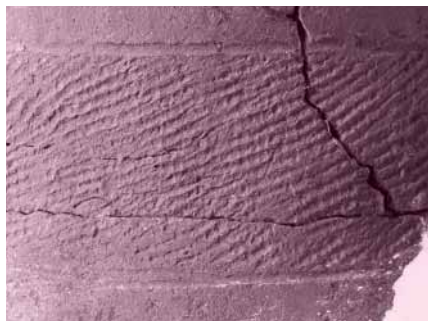
56号竖穴-1



106号竖穴-1



44号竖穴-25



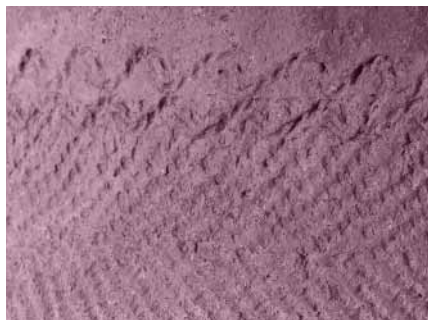
52号豎穴-11



49号豎穴-3



93号豎穴-6



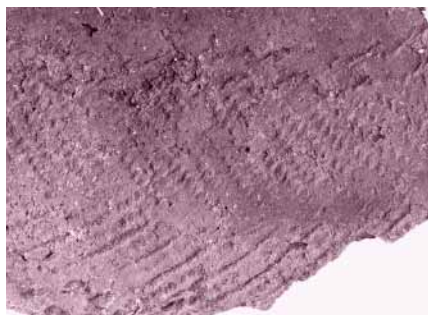
11号豎穴-1



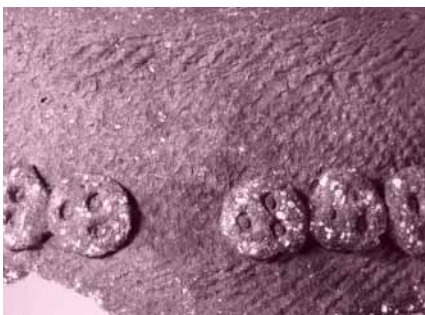
54号豎穴-1



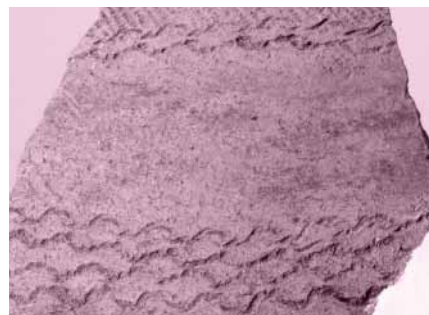
114号豎穴-11



31号豎穴-5



65号豎穴-1



115号豎穴-1



36号豎穴-1



65号豎穴-2



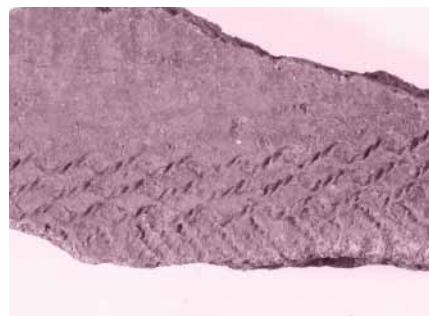
116号豎穴-1



36号豎穴-12



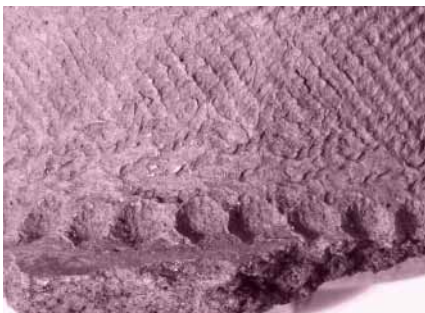
89号豎穴-1



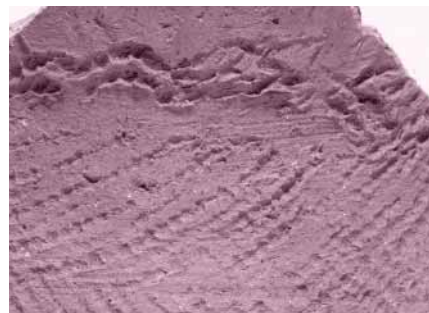
116号豎穴-15



37号豎穴-1



89号豎穴-1



117号豎穴-14



30号竖穴-21



49号竖穴-1



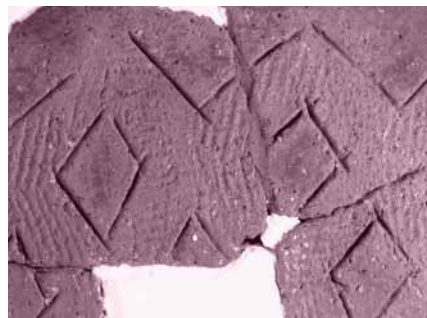
91号竖穴-6



33号竖穴-5



52号竖穴-27



94号竖穴-1



36号竖穴-13



53号竖穴-1



107号竖穴-11



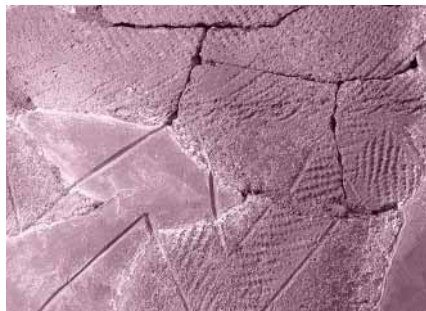
37号竖穴-6



60号竖穴-18



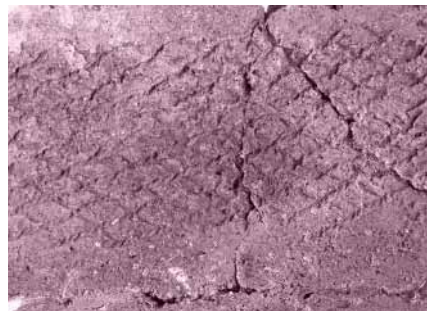
114号竖穴-12



46号竖穴-1



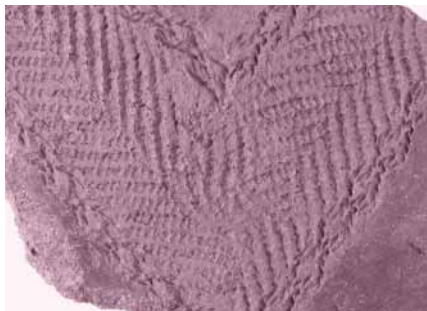
70号竖穴-3



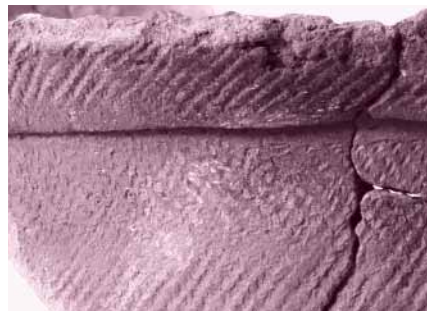
15号竖穴-9



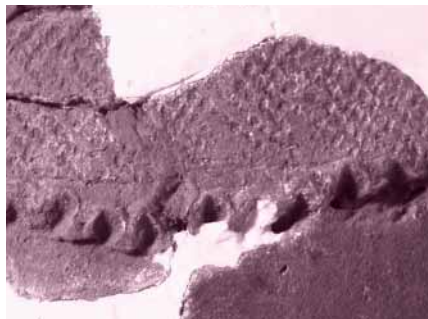
46号竖穴-2



78号竖穴-2



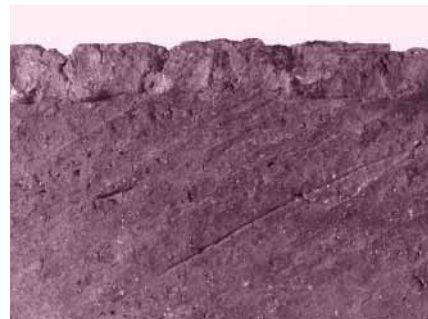
63号竖穴-4



63号竪穴-4



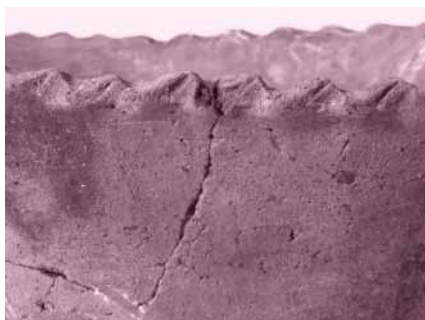
46号竪穴-3



60号竪穴-4



90号竪穴-1



48号竪穴-3



63号竪穴-8



31号竪穴-1



51号竪穴-1



87号竪穴-1



38号竪穴-1



51号竪穴-2



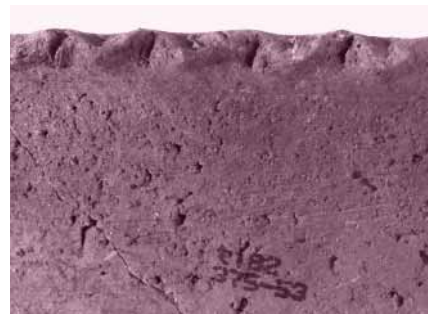
87号竪穴-2



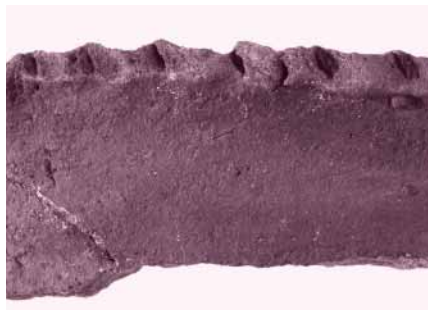
39号竪穴-1



51号竪穴-3



107号竪穴-1



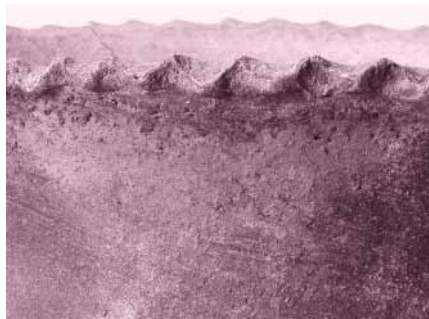
45号竪穴-2



60号竪穴-3



114号竪穴-3



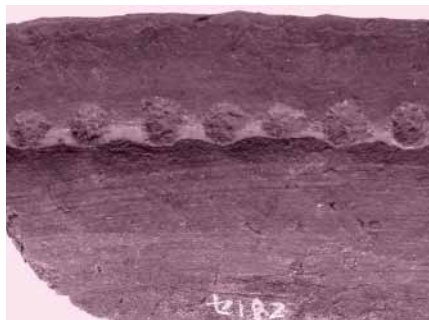
3号方形周溝墓-1



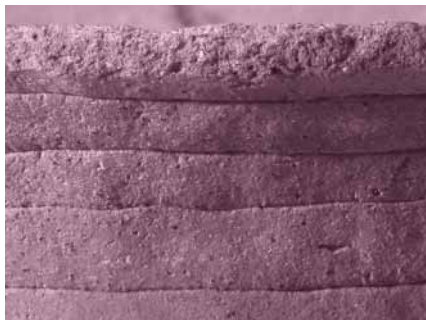
49号竖穴-19



63号竖穴-6



19号竖穴-10



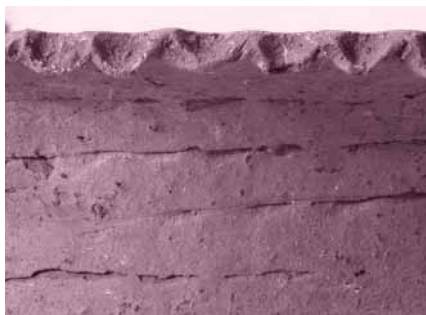
52号竖穴-1



63号竖穴-7



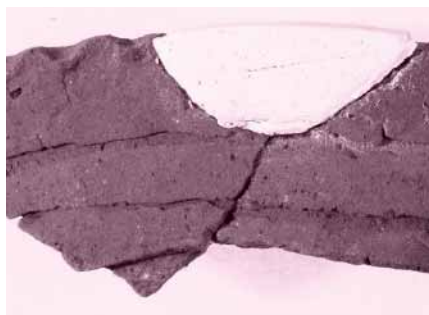
115号竖穴-24



52号竖穴-7



12号竖穴-3



44号竖穴-11



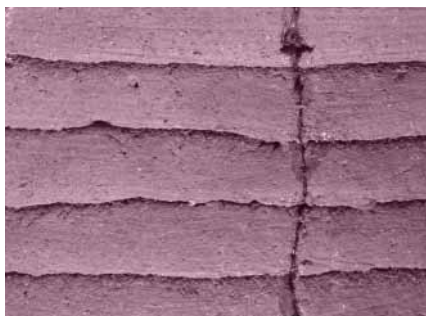
52号竖穴-8



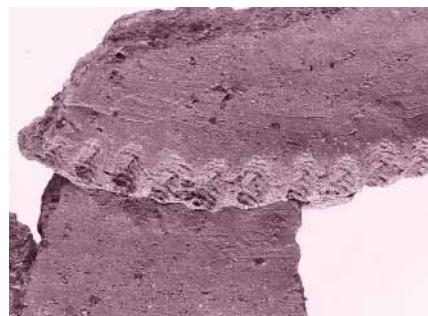
18号竖穴-1



49号竖穴-7



52号竖穴-10



18号竖穴-1



49号竖穴-8



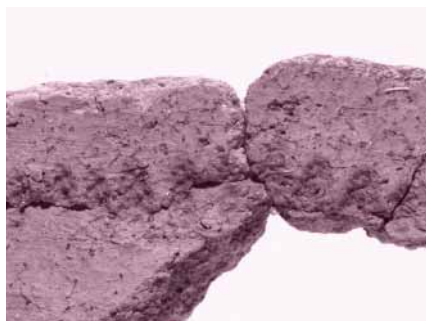
60号竖穴-16



21号竖穴-1



44号竖穴-2



58号竖穴-10



114号竖穴-3



44号竖穴-18



74号竖穴-10



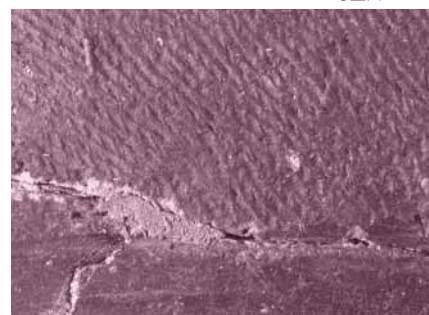
52号竖穴-19



44号竖穴-22



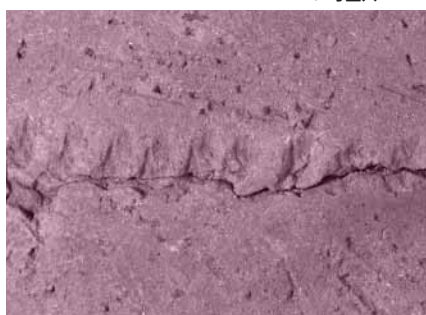
87号竖穴-1



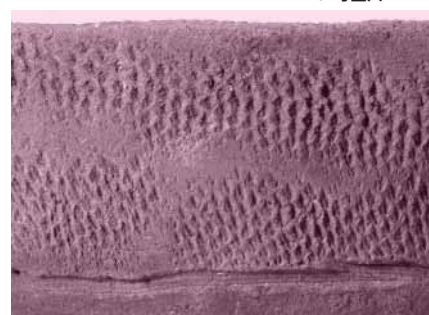
52号竖穴-21



52号竖穴-3



92号竖穴-1



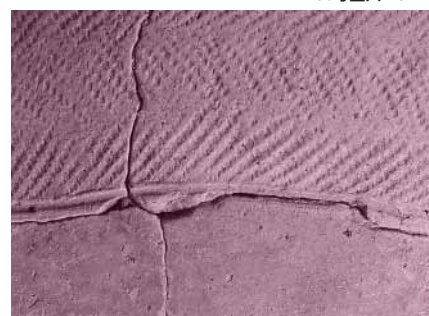
56号竖穴-3



52号竖穴-4



93号竖穴-1



3号方形周溝墓-7



54号竖穴-12



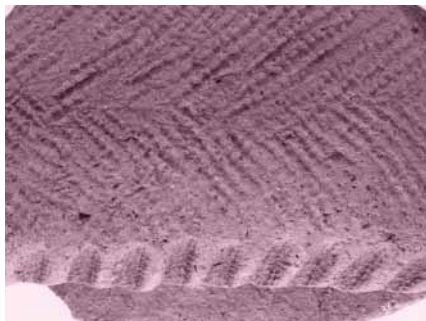
105号竖穴-2



2号木棺土坑墓-1



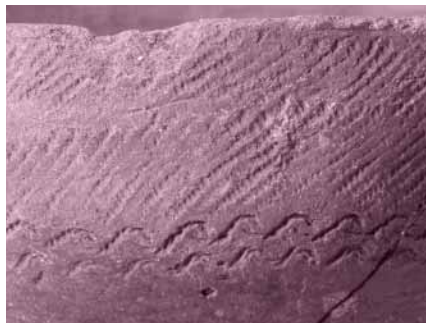
12号竖穴-7



53号竖穴-7



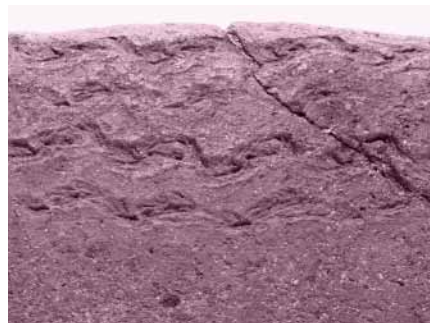
51号竖穴-7



44号竖穴-3



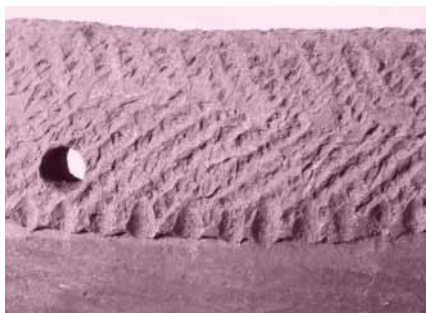
63号竖穴-9



105号竖穴-5



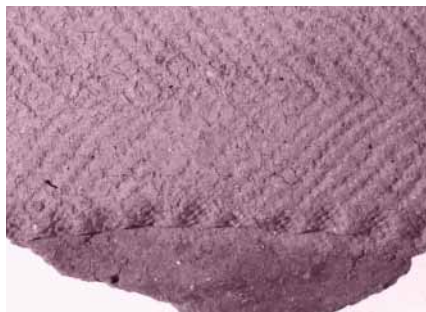
61号竖穴-1



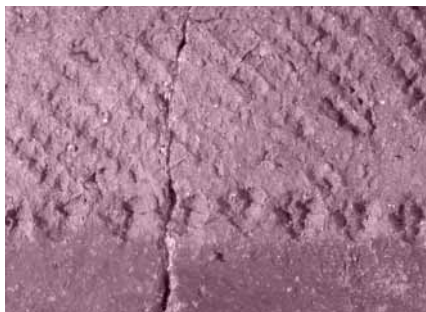
63号竖穴-10



83号竖穴-1



42号竖穴-8



91号竖穴-2



111号竖穴-10



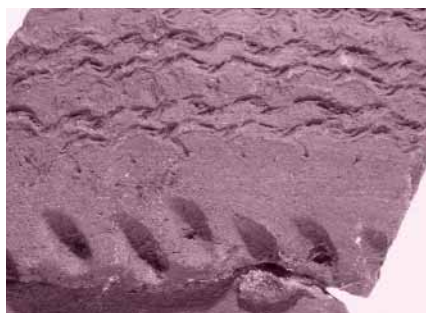
45号竖穴-1



94号竖穴-6



31号竖穴-3



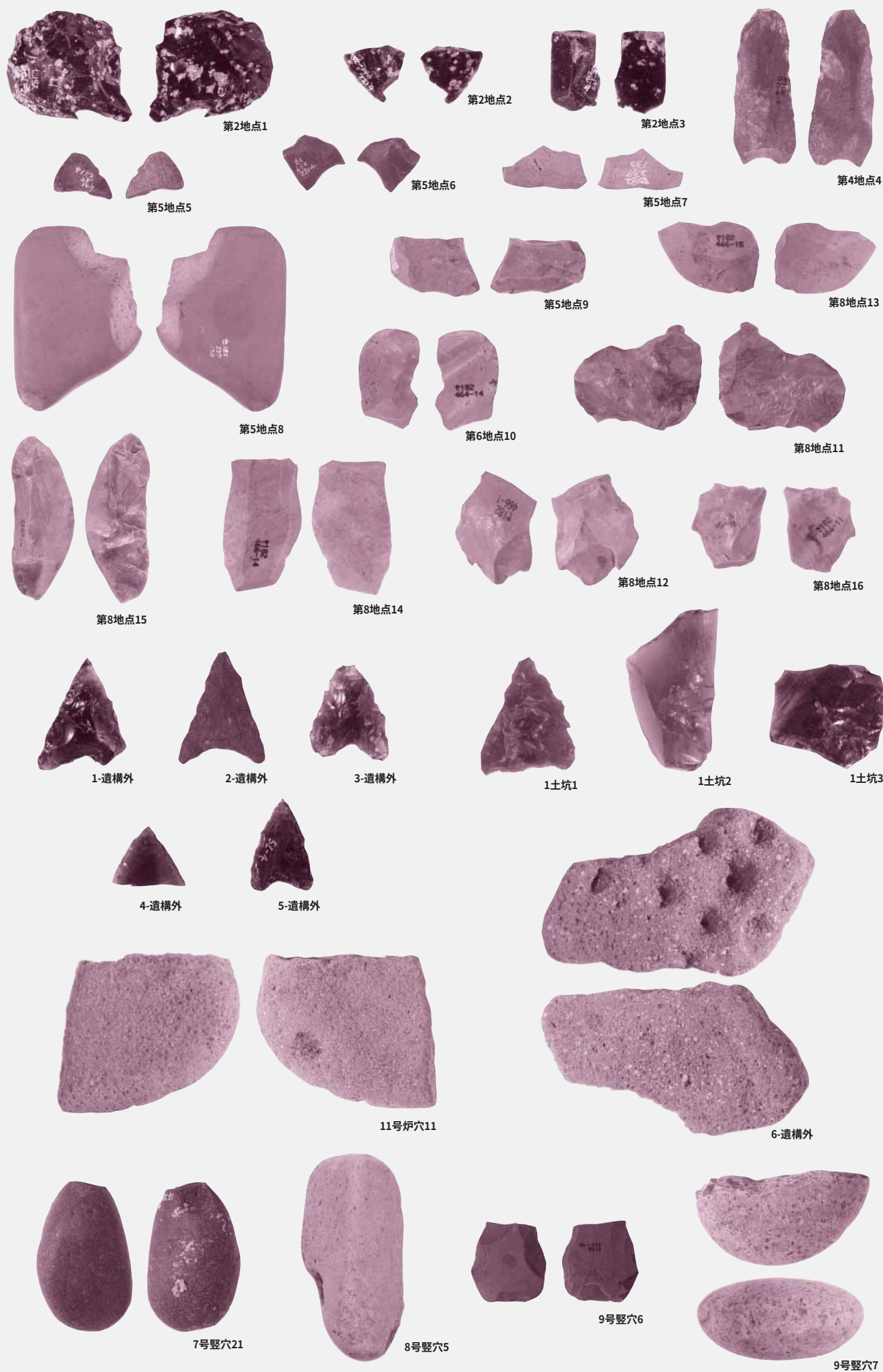
47号竖穴-8

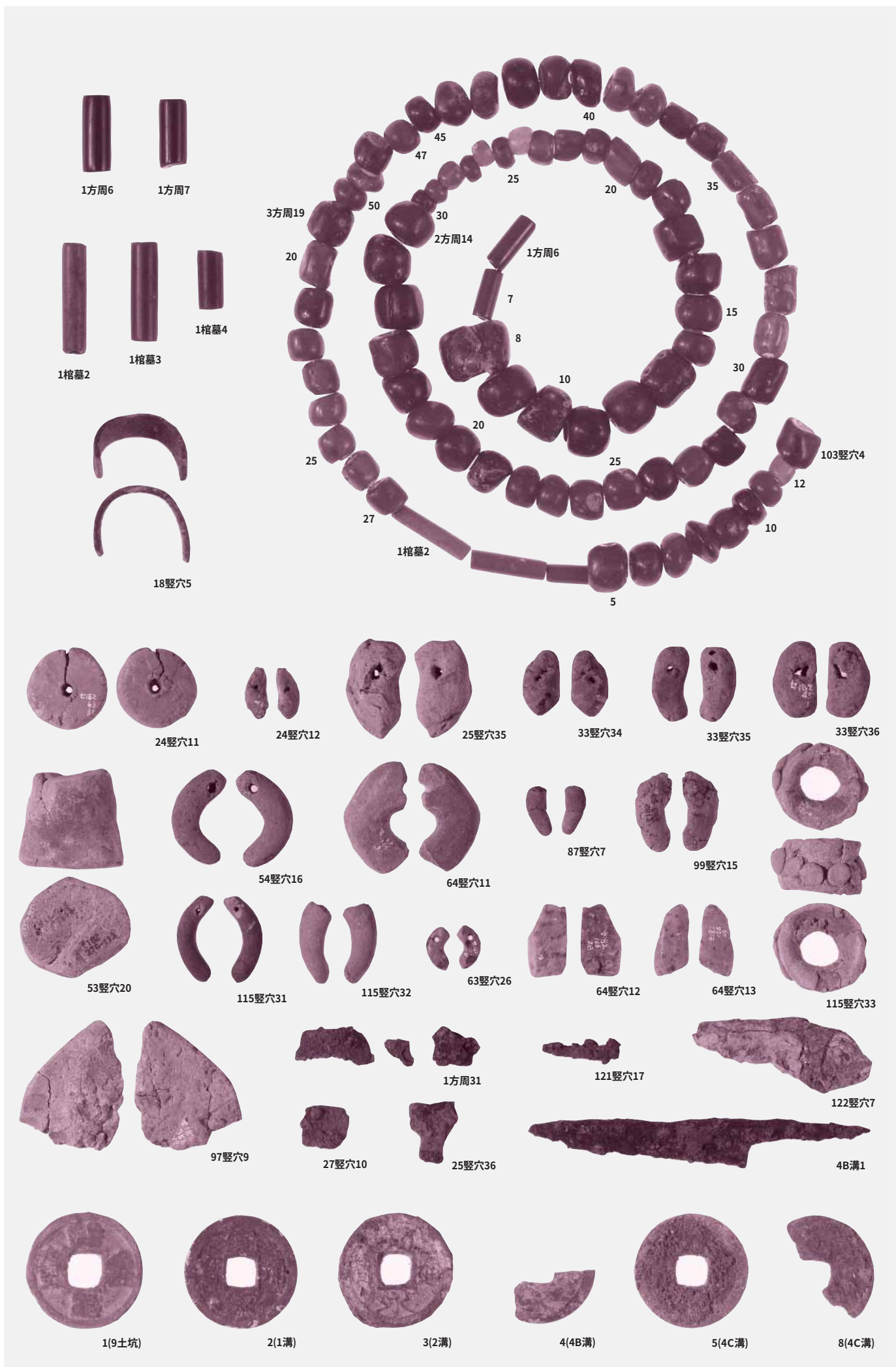


115号竖穴-29



87号竖穴-4







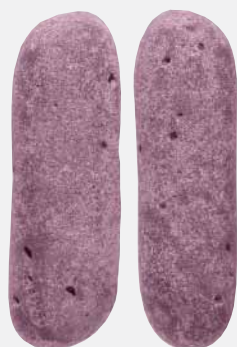
125竪穴7



125竪穴8



123竪穴8



13竪穴16



31竪穴10



121竪穴18



122竪穴6



54竪穴17



70竪穴10



103竪穴3



48竪穴9



94竪穴15



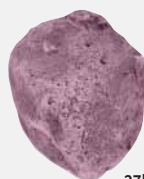
110竪穴17



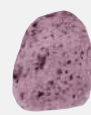
46竪穴18



54竪穴18



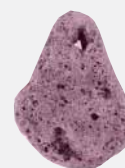
27竪穴9



33竪穴33



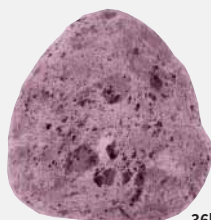
40竪穴14



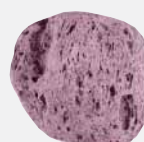
49竪穴21



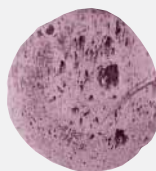
75竪穴1



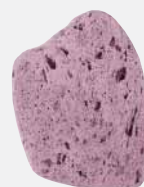
36竪穴21



46竪穴19



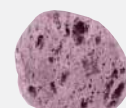
58竪穴11



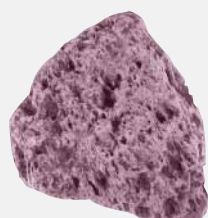
59竪穴13



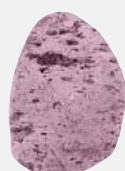
83竪穴4



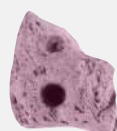
105竪穴11



71竪穴



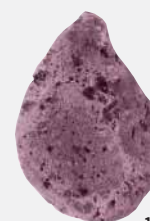
110竪穴18



115竪穴34



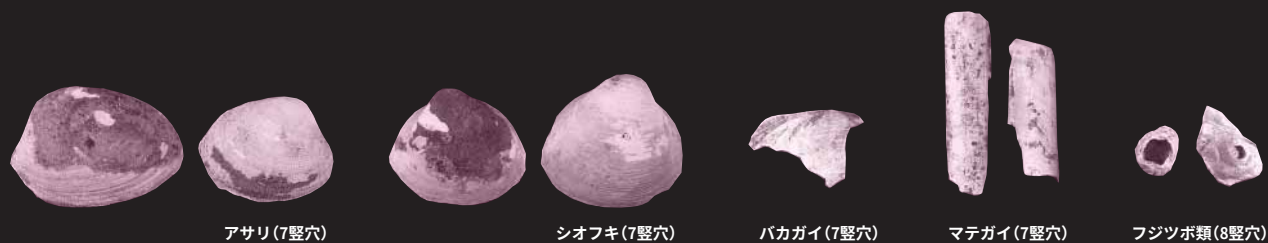
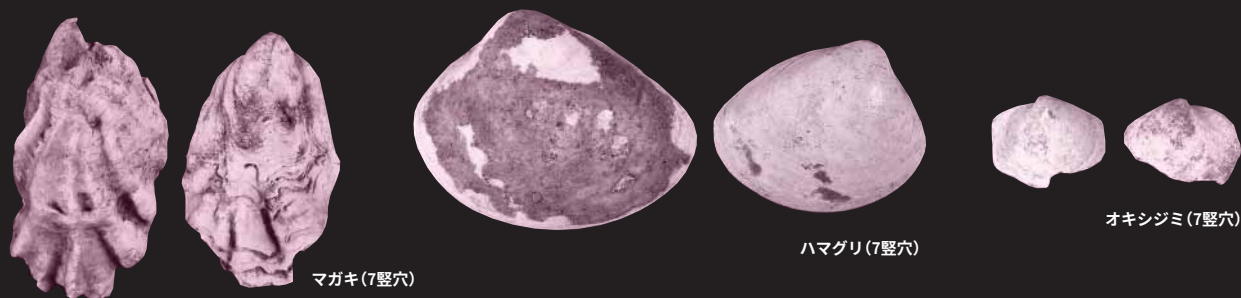
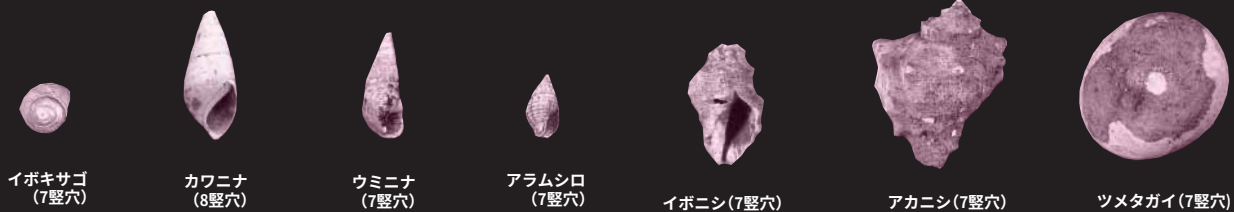
115竪穴35



115竪穴36



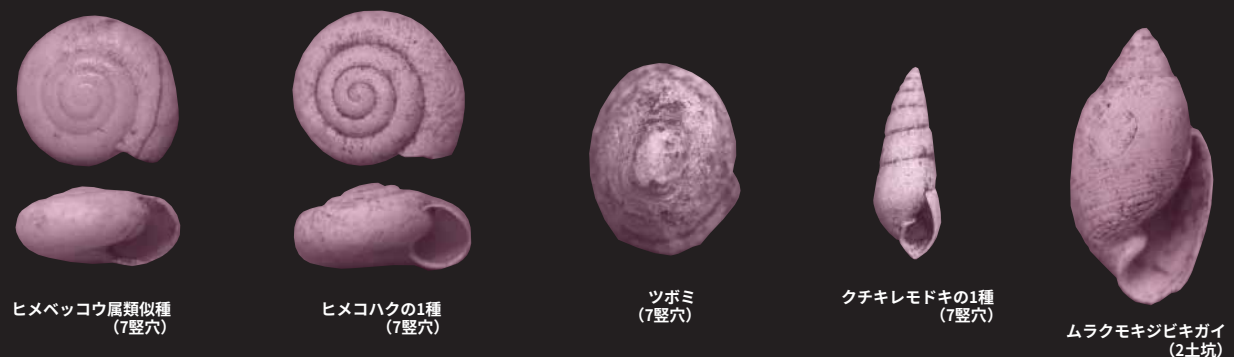
125竪穴6



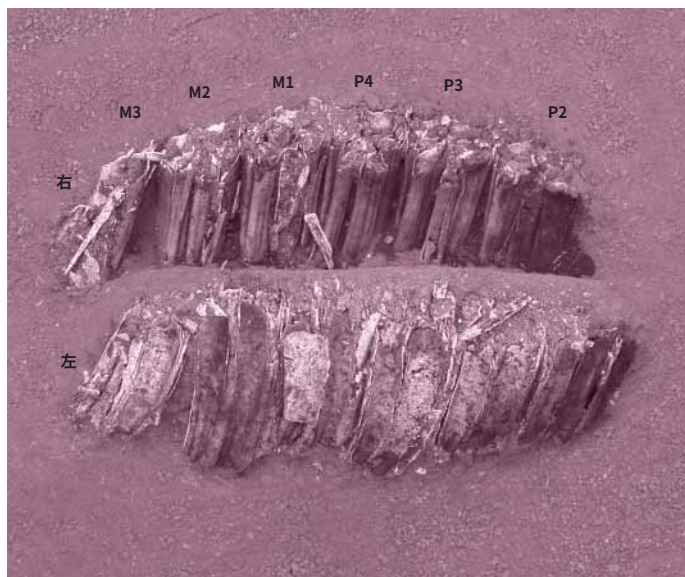
0 10cm



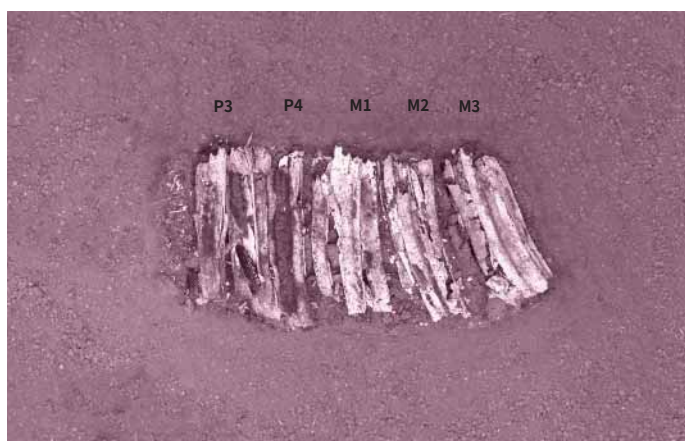
0 5mm



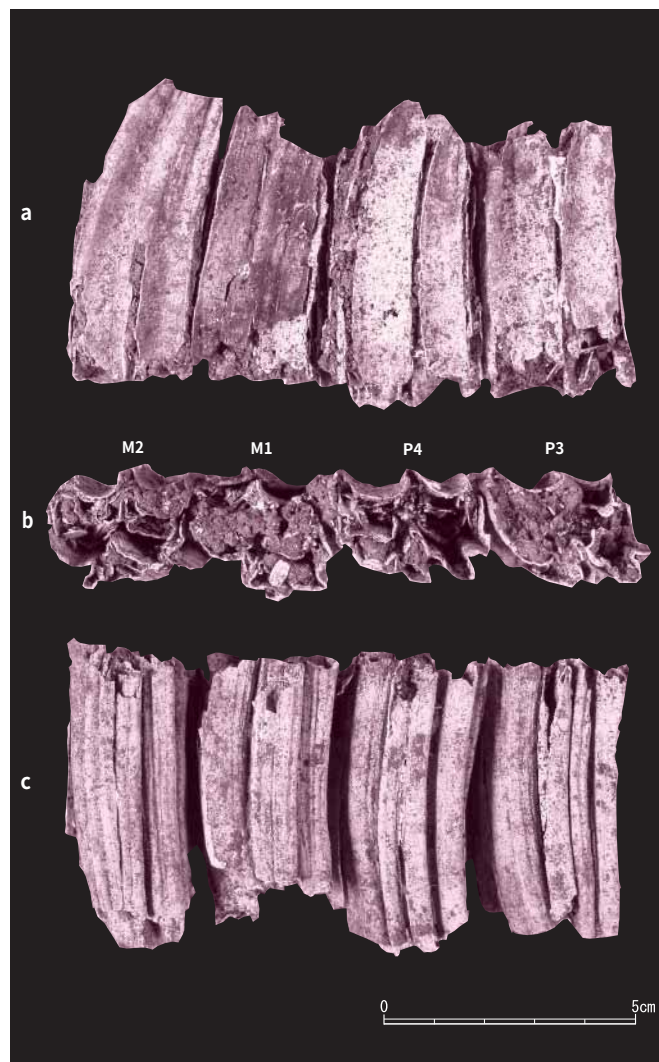
0 1cm



7号土坑 ウマ出土状況 上顎臼歯列 (咬合面上)



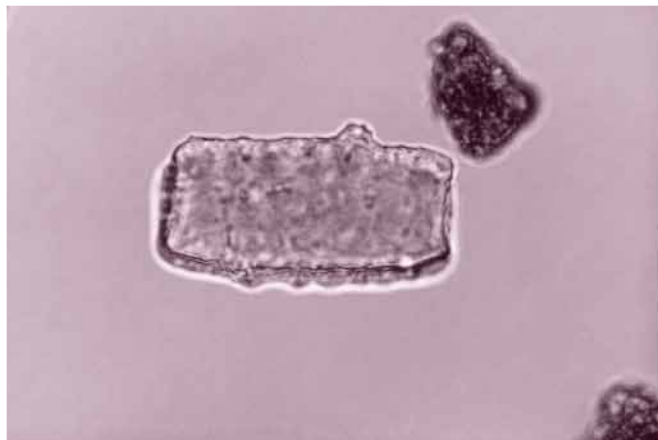
7号土坑 ウマ出土状況 左下顎臼歯列 (咬合面上)



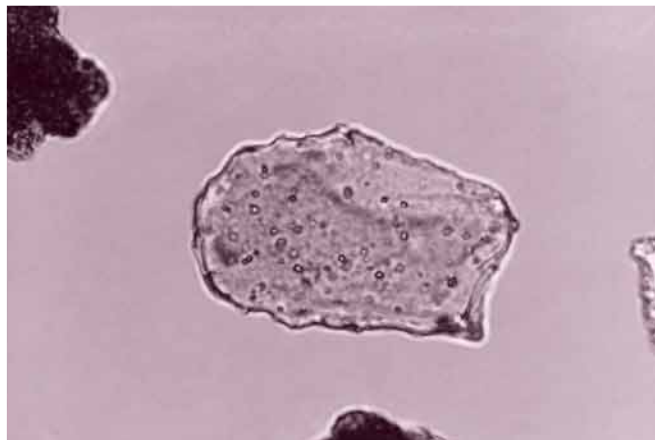
7号土坑 ウマ右上顎臼歯
a. 頬側面 b. 咬合面 c. 舌側面



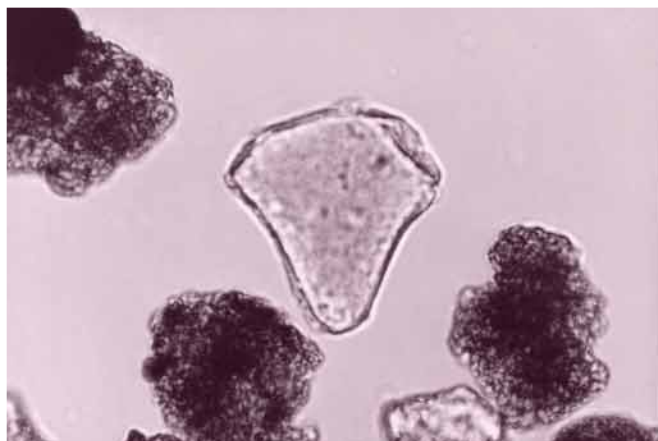
1 オニグルミ 核(94号竪穴：弥生後期)
2 イネ 胚乳(79号竪穴：弥生後期 貝層サンプル)
3 コムギ 胚乳(79号竪穴：弥生後期 貝層サンプル)
4 コムギ 胚乳(79号竪穴：弥生後期 貝層サンプル)
5 ムギ類 胚乳(79号竪穴：弥生後期 貝層サンプル)



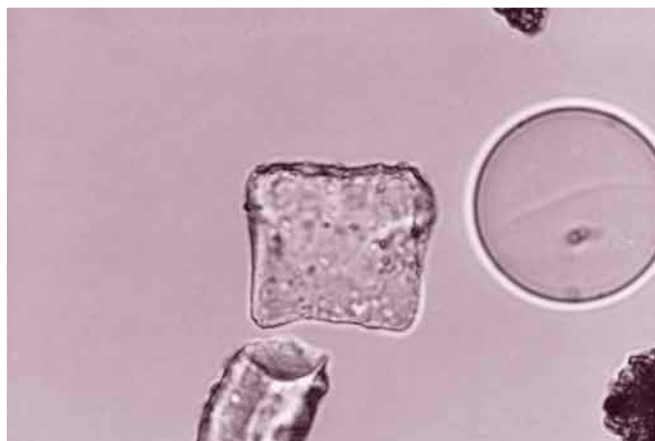
キビ族型 (K12区)



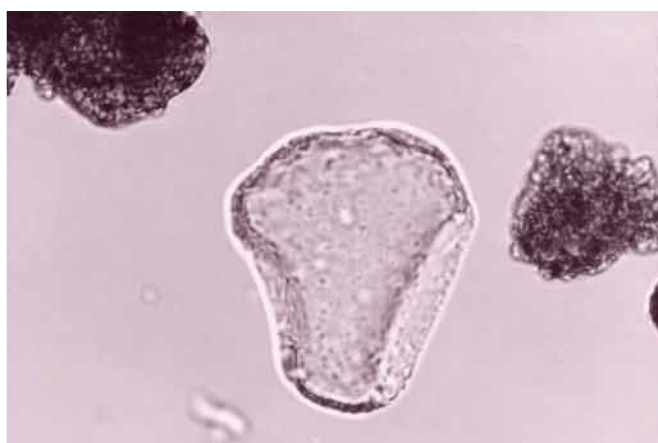
ヨシ属 (O10区)



ススキ属型 (O10区)



ウシクサ族型 (O10区)



ウシクサ族型 (O10区)



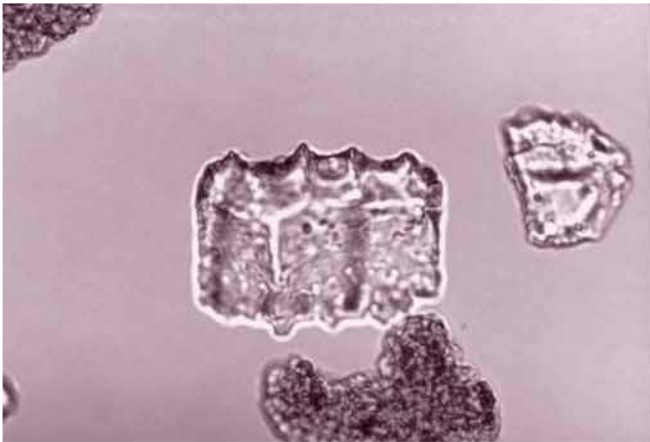
シバ属 (K12区)



イネ科A (くさび型) (O10区)



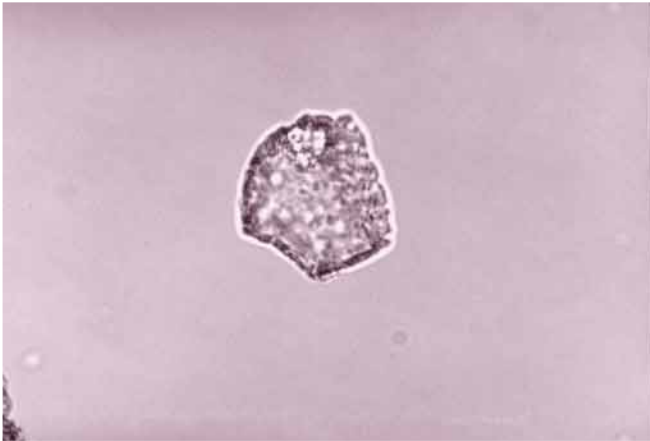
メダケ節型 (O11区)



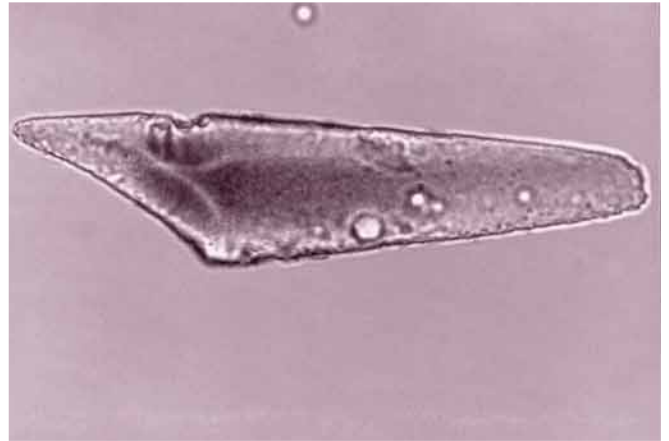
ネザサ節型 (O7区)



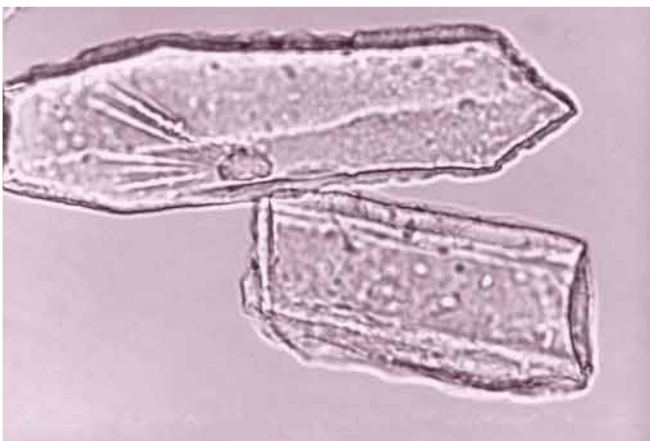
クマザサ属型 (O7区)



ミヤコザサ節型 (O10区)



表皮毛起源 (O10区)



イネ科の茎部起源 (O10区)



クスノキ科 (K12区)



多角形板状 (コナラ属など) (O10区)

0 100 μ m

報 告 書 抄 録

ふりがな	いちほらしやまだばしおおやまでいせき							
書名	市原市山田橋大山台遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第88集							
編著者名	大村直・西野雅人・鶴岡英一・加納哲哉・上奈穂美 他							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地 TEL 0436(41)7300							
発行年月日	2004年(平成16年)3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
やまだばしせいせきぐん 山田橋遺跡群 やまだばしおおやまでいせき 山田橋大山台遺跡	ちばけんいちほらしやまだ 千葉県市原市山田 ばしあざおおやまで ばんち 橋字大山台340番地 1ほか	12219	255	35° 29′ 55″	140° 7′ 37″	確認調査 19940401 ～0815 本調査 19950401 ～ 19980331	確認対象 面積 33,200 本調査(上 層) 28,650 本調査(下 層)496	防災セン ター建設 のため
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
山田橋遺跡群 山田橋大山台遺跡	包蔵地 集落跡 古墳	旧石器時代 縄文時代早期・中期 弥生時代後期 古墳時代前期・中期 古墳時代終末期 奈良・平安時代 中近世	遺物集中地点13地点 炉穴32基 陥穴4基 竪穴住居跡9軒等 竪穴住居跡107軒 方形周溝墓3基 木棺土坑墓3基等 竪穴住居跡4軒 円墳1基等 竪穴住居跡5軒 溝(道跡)等	縄文土器、弥生土器、 土師器、須恵器、陶磁 器、石器、鉄器、ガラス 玉、勾玉、管玉、銅環、 土製品、石製品、古銭		弥生時代後期の集落 跡を広範囲に調査。 墓域を含む集落の変 遷過程が明らかとな る。 奈良平安時代に開削 時期が遡る可能性の ある道路跡。 緯度経度は、新測地 系。		

財団法人 市原市文化財センター調査報告書第88集

市原市山田橋大山台遺跡

平成16年3月15日 発行

編 集 財団法人市原市文化財センター

発 行 市 原 市
財団法人市原市文化財センター
市原市能満1489番地
TEL 0436(41)7300

印 刷 株式会社 ぎょうせい